

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

種子島の盆踊調査報告書

写真図版 1 横山盆踊



写真 1 横山盆踊チョウと竹竿 (令和元年 7 月 14 日、横山神社)



写真 2 横山盆踊 (令和元年 7 月 14 日、横山神社)

写真図版2 西之本国寺盆踊



写真1 平野集落「つんたん拍子」(平成28年8月16日、本国寺)



写真2 小田・前之原集落「きのぎの」(令和元年8月16日、本国寺)

写真図版3 西之本国寺盆踊



写真1 砂坂・官造牧集落「たけなが」(平成17年8月16日、本国寺)



写真2 野尻・木原集落「たけなが」(平成28年8月16日、本国寺)

写真図版4 横山盆踊



写真1 横山神社



写真2 横山神社での神事(令和4年7月10日)



写真3 横山盆踊①
(令和元年7月14日、横山神社)



写真4 横山盆踊の歌い手
(平成30年7月15日、横山神社)



写真5 横山盆踊②
(令和元年7月14日、横山神社)



写真6 横山盆踊③
(令和元年7月14日、横山神社)



写真7 横山盆踊④
(令和元年7月14日、横山神社)



写真8 比志島国隆と千代の墓

写真図版 5 西之本国寺盆踊



写真1 田代集落「つんたん拍子」
(平成29年8月16日、本国寺)



写真2 本村・崎原集落「つんたん拍子」
(平成30年8月16日、本国寺)



写真3 下西目集落の盆踊 (昭和46年撮影、本国寺)



写真4 楽拍子による先導、平野集落「つんたん拍子」
(平成28年8月16日、本国寺)



写真5 太鼓と太鼓持ち、野尻・木原集落「きのぎの」
(平成28年8月16日、本国寺)



写真6 入れ鼓、田代「つんたん拍子」
(平成29年8月16日、本国寺)



写真7 楽拍子、本村・崎原集落「つんたん拍子」
(平成30年8月16日、本国寺)



写真8 楽拍子の先導で退場、平野集落「つんたん拍子」
(平成28年8月16日、本国寺)

写真図版6 西之本国寺盆踊



写真1 本番の朝のシクミ 「つんたん拍子」本村・崎原集落(平成30年8月16日、崎原公民館)



写真2 野尻・木原集落「たけなが」(平成28年8月16日、本国寺)



写真3 砂坂・官造牧集落「たけなが」(平成17年8月16日、本国寺)



写真4 砂坂・官造牧集落「たけなが」(平成21年8月16日)



写真5 楽拍子、野尻・木原集落「たけなが」(平成25年8月16日、本国寺)



写真6 雨天のため本国寺本堂で披露 「つんたん拍子」本村・崎原集落(平成26年8月16日)



写真7 小田・前之原集落「きのぎの」と下野敏見氏(令和元年8月16日、本国寺)



写真8 本番の後のクズシ 「きのぎの」小田・前之原集落(令和元年8月16日、小田公民館)

写真図版7 種子島の盆踊の道具



写真1 横山盆踊「芭蕉布製の踊り手の衣装」
(令和元年)



写真2 西之本国寺盆踊「たけなが」の衣装(踊り手)
砂坂・官造牧集落(平成21年)



写真3 コウロン 西之本国寺盆踊「つんたん拍子」
(本村・崎原集落、令和4年)



写真5 カムキの表面 西之本国寺盆踊「たけなが」
(砂坂・官造牧集落、平成21年)



写真4 本番前のコウロン 西之本国寺盆踊「つん
たん拍子」(本村・崎原集落、平成30年)

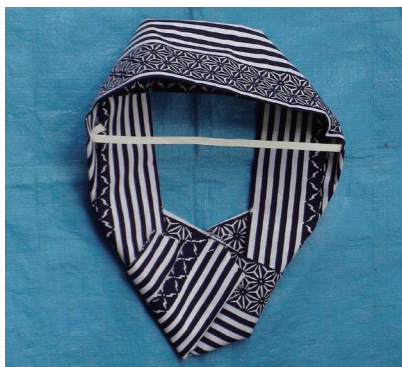


写真6 カムキの裏面 西之本国寺盆踊「たけなが」
(砂坂・官造牧集落、平成21年)



写真7 笛 西之本国寺盆踊「つんたん拍子」
(平野集落、令和3年)

写真図版8 種子島の盆行事



写真1 西之本国寺の水棚① (平成30年8月16日)



写真2 西之本国寺の水棚② (平成21年8月16日)



写真3 西之本国寺の水棚③ (平成30年8月16日)



写真4 西之本国寺の住職と下野敏見氏 (令和元年8月16日)



写真5 西之本国寺盆踊の前に行われる施餓鬼供養 (平成30年8月16日)

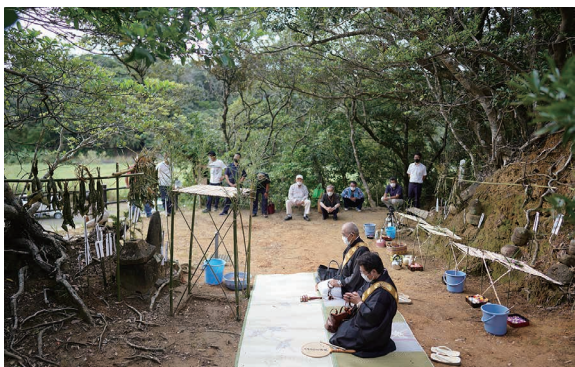


写真6 広田の石塔祭① (令和3年8月15日)



写真7 広田の石塔祭② (平成23年8月15日)

写真図版9 関連する踊り



写真1 島間本妙寺の盆踊「小二才踊」
(田尾集落、令和4年8月7日、本妙寺)



写真2 島間本妙寺の盆踊「大二才踊」
(田尾集落、令和4年8月7日、本妙寺)



写真3 屋久島の如竹踊 (令和元年6月27日)



写真4 南種子町上野の盆踊 (昭和58年8月18日)



写真5 西之表市川迎の盆踊



写真6 中種子町竹屋野集落「神楽」①
(令和元年11月10日)



写真7 中種子町竹屋野集落「神楽」②
(令和元年11月10日)



写真8 南種子町平野集落の大踊「国土安穩」
(平成20年10月24日、御岬神社)

写真図版 10 横山盆踊、その他



写真1 横山盆踊① (昭和 59 年撮影)



写真2 横山盆踊②
(令和元年 7 月 14 日、横山神社)



写真3 阿久根千代女の墓



写真4 阿久根千代女の碑



写真5 紙芝居横山盆の舞語り～千代女と国隆を
見守る横山の人々～の披露
(平成 30 年 7 月 15 日、横山神社)



写真6 横山盆踊の聞き書き調査
(令和 4 年 7 月 10 日)



写真7 第 65 回全国民俗芸能大会
(野尻・木原集落「たけなが」出演)



写真8 第 65 回全国民俗芸能大会への出場 西之本
国寺盆踊「たけなが」野尻・木原集落
(平成 28 年 11 月 26 日)

序

種子島は、国の重要無形民俗文化財「種子島宝満神社の御田植祭」をはじめとする豊かな歴史遺産に恵まれ、国内唯一の実用ロケットの発射基地を有する、歴史と科学の島として知られています。

特に、「種子島の盆踊」は、平成三十年に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された、種子島の民俗芸能を代表する重要な無形の文化遺産として著名です。この文化財の伝承は、西之表市の横山盆踊保存会と南種子町の西之地区自治公民館が行ってきました。

私たちは、この貴重な文化財の調査・記録作成を行い、後世にこの文化財を継承するため、令和元年度より国の補助を受け、西之表市・南種子町が共同し調査事業を開始いたしました。調査にあたっては、各保存会・公民館の皆様及び地元関係者の皆様、調査委員会の先生方、ご指導を賜りました文化庁並びに鹿児島県教育委員会の皆様にご多大なご指導、ご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。これまでの皆様のご尽力により、素晴らしい調査報告書ができましたことを大変うれしく思っております。

最後に、本調査報告書を通じて、多くの方々に種子島の豊かな民俗芸能を知っていただき、ぜひ、種子島に足を運んでいただければ幸いです。

令和五年三月

鹿児島県南種子町長 小園 裕康

例言

一 本書は、平成三十年三月八日に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された（以下、国選択）「種子島の盆踊」についての記録保存調査報告書である。

二 調査事業は、「種子島の盆踊調査事業」と称し、南種子町が文化庁・鹿児島県の補助を受けて、西之表市と共同で、令和元年～四年度に実施した。

三 調査は、南種子町・西之表市が「種子島の盆踊調査委員会（松原武実会長）」を組織し、文化庁文化財第一課芸能部門、鹿児島県文化財課の指導助言のもと実施した。

四 事業の事務局は、南種子町教育委員会社会教育課文化係が担当した。

五 本書の執筆は、調査委員会において構成並びに執筆者を決め行った。執筆者名は、目次及び文末に記した。

六 本書に掲載した写真、図、表は、それぞれの執筆者が作成・撮影したものである。

七 本調査の実施並びに、本書の作成にあたっては、文化庁文化財第一課芸能部門よりご指導及びご助言をいただいた。また、各芸能の保存会の皆様のご協力を得て行うことができた。

なお、それ以外にも多くのみなさまにご協力をいただきましたことを記して御礼申し上げます。

八 調査の際に収集した資料は、南種子町教育委員会社会教育課が保管・管理している。

九 本書の編集は、調査委員会の指導のもと、石堂和博（南種子町教育委員会社会教育課文化係学芸員）が行った。

目次

巻頭図版写真	1	
序	小園裕康	11
例言		12
第一章 「種子島の盆踊」 民俗調査事業		
第一節 文化財指定の状況	石堂和博	14
第二節 調査事業の概要	石堂和博	15
第二章 調査地域の概要	松原武実	17
第三章 種子島の盆踊		
第一節 西之本国寺盆踊		28
一 西之本国寺盆踊の概要	松原武実	28
二 西之地区の盆行事	牧島知子	34
三 西之本国寺盆踊の音楽	松原武実	39
四 西之本国寺盆踊の道具	牧島知子	60
五 西之本国寺盆踊の踊り方	荒木真歩	65
第二節 横山盆踊		
一 横山盆踊の概要	松原武実	82
二 横山地区の盆行事	牧島知子	91
三 横山盆踊の音楽	松原武実	92
四 横山盆踊の道具	牧島知子	99
五 横山盆踊の踊り方	荒木真歩	103
第三節 種子島その他の盆踊		
一 種子島その他の盆踊	松原武実	111
二 種子島その他の盆行事	牧島知子	127
第四章 関連する芸能		
第一節 種子島の願成就祭と願成就踊	松原武実	129
第二節 周辺地域の関連芸能	松原武実	144
第五章 考察		
第一節 種子島盆踊の成立と展開	松原武実	156
第二節 歌謡からみた種子島盆踊の特色	和田 修	164
特論 昭和期を主とする種子島盆踊りと島内外の盆踊りについて ―比較民俗学の視座より―	下野敏見	212
まとめに代えて	松原武実	257

第一章 「種子島の盆踊」 民俗調査事業

第一節 文化財指定の状況

種子島の盆踊は、平成三十年三月八日に、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択（以下、国選択）された。保護団体は、西之地区自治公民館と横山盆踊保存会である。西之地区自治公民館が伝承する「西之本国寺盆踊」は、昭和四十七年三月三十日に南種子町指定無形民俗文化財となっている。また、横山盆踊保存会が伝承する「横山盆踊」は、昭和四十三年三月二十九日に鹿児島県指定無形民俗文化財となっている。

本調査事業は、国選択文化財の記録調査事業として、令和元年度から令和四年度まで実施した。

芸能の概要を、「月刊文化財」六五四号（二五）二六頁から引用する。

○国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
「種子島の盆踊」

所在地 鹿児島県西之表市、熊毛郡南種子町

保護団体 横山盆踊保存会、西之地区自治公民館

公開期日 毎年七月第二日曜日（横山の盆踊）

毎年八月十六日（西之本国寺盆踊）

種子島の盆踊は、鹿児島県西之表市の横山と南種子町の西之に伝承される。踊り手と太鼓や鉦の囃し手からなる踊りで、踊りの場へ練りこむ出端、踊り、退場の引端の三部構成をとる。踊り手は輪となり歌に合わせてゆったりと踊り、同時に囃し手は輪の中央で楽器を打ち鳴らしつつ踊る。カンモクやカムキと呼ぶ被り物で顔を隠したり、花笠を着けたりする。

種子島は、鹿児島県の大隅半島から南に四〇キロメートルに位置し、北から西之表市、中種子町、南種子町の一市二町で構成される。かつて盆踊は島内全域に分布し、昭和五十年代には十数か所で踊られていたことが報告されている

が、現在では、西之表市横山の「横山の盆踊」と南種子町西之の「西野本国寺盆踊」が踊られるのみとなっている。

南種子町西之では、毎年八月十六日、本国寺の境内で盆踊を踊る。本国寺での精霊送りの法要の後に踊ることから、地元では「精霊送りの踊り」とも呼んでいる。西之は中央部の台地を境に東方と西方に分かれており、大正期までは東方と西方が一年交代で盆踊を踊った。現在でも東方と西方が一年交代で踊るが、東方の六地区を田代、本村・崎原、平野、上瀬田・野大野の四組に、西方の七地区を下西目、前之原・小田、木原・野尻、砂坂・官造牧の四組に分け、東方が当番の年は東方から二組が踊るといふ仕組みになっているため、各地区は四年に一度、踊りを担当することになる。踊りは組ごとに披露されており、踊りの当日は、シクミと称して組ごとに地元で一通り踊り、午後三時頃より本国寺で踊る。地元に戻ってクズシと称してもう一度踊ることもある。

西之本国寺盆踊は男性による踊りで、踊り手と楽拍子と呼ばれる囃し手からなる。楽拍子には、大太鼓（太鼓打ち、太鼓持ち）、中太鼓（イレコ）、小太鼓、鉦の諸役があるが、地区によって太鼓の組合せに若干の相違をみる。踊りの全体は、場へ練り込む出端、踊り、退場の引端の三部構成をとり、出端と引端では、楽拍子の演奏と踊り手の一人が務める笛に合わせ、楽拍子を先頭に踊りの一行が列をなし入退場する。踊りでは、踊り手が一重の輪を作り、楽拍子は輪の中央部に陣取り、太鼓や鉦を打ち鳴らしつつ跳ねるような所作などで踊り、踊り手は歌を歌いながら、手踊りや扇を手にした踊りを展開する。

伝承演目は、「たけなが」「きのぎの」「つんたん拍子」の三つであり、東方の各地区が「つんたん拍子」、西方の各地区が「きのぎの」と「たけなが」を伝承している。三演目はいずれも七曲で構成され、一曲目を「デハ」、七曲目を「あと歌」などという。二曲目から六曲目までは二度ずつ繰り返す。一曲が終わるごとに踊り手、楽拍子ともにしゃがみ、「ヒーヨー」の掛け声がかかる。と立ち上がり、踊り手のうち歌い出しを務める音頭取りの歌に続けて、踊り手が皆で歌いながら踊る。曲によって時計回り、反時計回りと変わる。踊り手は、浴衣に草履、顔にはカンモクやカムキという被り物を着け、楽拍子はツンボリ笠と呼ぶ花笠や麦わら帽子などを被る。

西之表市横山での盆踊は、七月第二日曜日の夜、横山神社の境内で行われる。盆踊の内容はおおむね西之本国寺盆踊と共通しているが、色紙のシデ状の飾り

を付けた五メートルほどの竹竿を持つチヨウが踊りの一行に加わったり、踊り手による輪が二重であったり、歌い手が踊り手とは別にいて、踊りの輪の外で歌ったりと、異なる点もある。チヨウが持つ竹竿は七夕竿と地元でいわれている。チヨウは出端、引端で行列の先頭に立つとともに、踊りの時は輪の中心に立ち、一曲の終わりごとに、輪の中を駆け巡ったりする。また、横山では、地元の悲恋物語を題材にした口説でも踊る。

第二節 調査事業の概要

一 調査事業の概要

南種子町教育委員会・西之表市教育委員会は、平成三十年三月八日に「種子島の盆踊」が国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択され、その早急な記録調査が必要であると判断し、国の民俗文化財調査事業により、「種子島の盆踊民俗文化財調査事業」として記録作成事業を令和元年度から令和三年度にかけて実施する計画を立てた。

調査は、調査委員会を組織し行うこととし、また、文化庁・鹿児島県文化財課の指導・協力を受けた。なお、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、令和二年度以降、調査が充分に行えない状況となったため、調査年度を一年延長し、令和四年度までの計画に変更し実施した。

二 調査組織

調査委員会は、民俗芸能・民俗等の学識経験者で組織した。調査は、まず基礎調査をおこなった後、それぞれの専門的見地から個別調査を行い、その成果の共有や調査の方向性を定めるために、定期的に会議（調査委員会）を開催し、各種調整を図り実施した。調査の組織は次のとおりである。委嘱期間は、令和元年五月十三日から令和五年三月三十一日までである。なお、下野敏見委員は、令和二年度に御担当の調査報告を入稿され、任期中の令和四年三月十日に逝去されている。

種子島の盆踊民俗文化財調査委員会委員（肩書は委嘱時のもの）

松原 武実（委員長） 鹿児島国際大学名誉教授

和田 修（副委員長） 早稲田大学准教授

下野 敏見 元鹿児島大学教授・鹿児島民具学会元会長

牧島 知子 鹿児島県文化財保護審議委員

種子島の盆踊民俗文化財調査員

荒木 真歩 神戸大学大学院生

調査指導

吉田 純子

住吉 啓三

眞邊 彩

文化庁文化財部文化第一課主任文化財調査官

鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）指定文

化財係文化財主事

県文化財課指定文化財係文化財主事

調査実施機関

南種子町教育委員会（調査事務局）

教育長

遠藤 修（令和元年十二月まで）

菊永 俊郎（令和元年十二月～）

社会教育課長

松山 砂夫（令和元・二年度）

園田 一浩（令和三年度）

濱田 伸一（令和四年度）

文化係長

才川 いずみ（令和元年度）

文化係学芸員

石堂 和博（令和二～四年度）

文化係学芸員

石堂 和博

小脇 有希乃

西之表市教育委員会（調査事務局）

教育長

大平 和男（令和三年九月まで）

社会教育課長

佐藤 秀正（令和三年十月～）

社会教育課長

中里 千秋（令和元～三年度）

社会教育課長

古市 善哉（令和四年度）

社会教育課参事 沖田 純一郎
文化財係長 鮫島 斉
文化財係 吉元 伸一(令和元～二年度)
梶原 将貴(令和三～四年度)

三 調査経過

調査の経過について、日誌抄にまとめた。

令和元年度

六月二十七～二十八日 屋久島町如竹踊調査(松原・牧島・石堂)

七月十三日 第一回調査委員会(下野・松原・和田・牧島・吉田・住吉・松山)

七月十三～十五日 横山の盆踊調査(松原・和田・下野・牧島・石堂・鮫島・吉元)

八月八日～九日 西之本国寺盆踊基礎調査(松原・石堂)

八月十五～十九日 西之本国寺盆踊・盆行事調査(松原・和田・牧島・石堂・小脇)

九月三～五日 種子島の盆踊基礎調査(松原・和田・石堂)

十月五～六日 種子島の盆踊基礎調査及び第二回調査委員会(松原・和田・牧島・吉田・住吉・松山・石堂・小脇)

十一月九～十日 種子島の盆踊基礎調査(和田)

二月二十五～二十八日 横山の盆踊文献調査(和田・吉元)

令和二年度

七月十三～十五日 横山の盆踊(コロナ禍のため中止、調査未実施)

八月十～十一日 下野委員による指導(石堂)※下野委員ご自宅にて

八月十六～十九日 西野本国寺盆踊(コロナ禍のため中止、調査未実施)

十一月十九～二十一日 種子島の盆踊基礎調査(松原・牧島・住吉・石堂)

十一月二十日 第三回調査委員会(松原・牧島・和田・吉田・住吉・松山・石堂・小脇)※和田委員・吉田調査官はリモートで

の参加

三月十二～二十一日 種子島の盆踊基礎調査(松原・牧島・荒木)
三月二十一～二十二日 下野委員による指導・協議及び原稿入稿(石堂)

令和三年度

七月十三～十五日 横山の盆踊(コロナ禍のため中止、調査未実施)

八月十六～十九日 西野本国寺盆踊(コロナ禍のため中止、調査未実施)

九月四～七日 硫黄島八朔太鼓踊調査(コロナ禍のため中止、調査未実施)

十一月四～七日 種子島の盆踊調査(松原・牧島・荒木・石堂)

十一月十四～十七日 種子島の盆踊調査(荒木)

十一月十二～十五日 種子島の盆踊調査(松原・石堂)

三月十九～二十二日 種子島の盆踊調査(荒木)

三月二十一～二十三日 種子島の盆踊調査及び原稿一部入稿(松原)

令和四年度

七月九～十一日 横山の盆踊聞き書き調査及び第四回調査委員会(松原・和田・牧島・吉田・眞邊・濱田・石堂)

九月七～九日 横山盆踊調査(荒木)

十一月十四～十六日 種子島の盆踊調査(松原・牧島・荒木・石堂)

(石堂)

引用文献

・文化庁文化財部二〇一八「新選択の文化財」『月刊文化財』三月号(六五四号)



写真1 調査委員会(西之表市)



写真2 リモートでの調査委員会



写真3 聞き書き調査(下西目集落)

第二章 調査地域の概要

種子島は南北に細長く平坦である。熊毛支庁（註1）の統計によると北端から南端まで五十八キロ、幅十二キロで、中央の最狭部分は六キロほどである。三角錐の単一の山も、大きな川も峻険な谷を刻む山地もなく、空港近くの二八メートルほどの丘を最高地点とする。海岸線もおよそなめらかで、中央部西岸には八キロにもわたる長く白い砂丘が続き、各地の海岸は砂鉄を含んでいる。天然の良港は東西ともに北と南の一部に限られる。海上や飛行機から見るとなだらかな丘に見えるが、いったん上陸するとかなりの起伏に富んでいる。現在はカーブの少ない二車線の国道五十八号が貫通し、地方道も舗装が行き届いているとはいえ、かつては首邑西之表へ通ずる陸路は曲折し、砂利道は雨天の際はぬかるみ、遠隔地からはかなりの難儀を強いられた。藩政時代の交通手段は小舟による海路（丸木船は戦後も作られたという）か、陸路はもっぱら馬であった。

三つの郡（こおり） 種子島の行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の一市二町から成る。明治二十二年の町村制施行によって、それまでの上之郡（かみのこおり）・中之郡（なかのこおり）・下之郡（しものこおり）の区分が北種子村・中種子村・南種子村となった。

三つの郡（こおり）には江戸時代以来次のような村があった。元禄二年の『懐中島記』（註2）という小冊子に全島十八ヶ村が北から順に記されている。これを上述の三つの郡にわけて示すと次のようになる。

藩政時代の村

上之郡（かみのこおり） 七ヶ村

西之表村・国上村・安納村・現和村・安城村・古田村・住吉村

中之郡（なかのこおり） 五ヶ村

納官村・増田村・野間村・油久村・坂井村

下之郡（しものこおり） 六ヶ村

島間村・平山村・上里村・荃永村・中之村・西之村

右のうち下之郡中之村は『種子島家譜』の天保五年の記事（註3）に「中之村を上下二つに割り、上中之村に十人、下中之村に二十七人を属せしむ」とある。種子島の郷土史研究ではしばしば「全十八ヶ村」という言い方をし、ここでもするが、正確には天保年間までのことで、その後は明治初期まで十九村である。

西之表（にしのおもて）という言い方は、もとは種子島家の居館と島庁の所在する赤尾木（あかおぎ）およびその周辺をさす村名だった。現在は近代的な港湾の拡充とともに市街地化が著しく、前述熊毛支庁をはじめ国や県の出先機関の集中する種子島の首邑となっている。種子島各地の人々が普通「西之表」という場合は、明治二十二年発足の北種子村（のちの西之表市）ではなく、旧西之表村の中でも中心市街をさす。

大正十三年の町村移行の時に北種子村は「西之表」という呼称を引き継いで西之表町と名称変更し、昭和三十三年に西之表市となった。中種子村は昭和十五年、南種子村は昭和三十一年にそれぞれ町制へ移行した。

十八ヶ村体制がいつ頃定まったのかよくわからないが、江戸時代以前からであることは確実である。明治初期の地租改正は各地に土地所有をめぐるトラブルを引き起こした。その結果、国上村から伊関村、納官村から牧川村、油久村から田島村が分村した。中之村（現南種子町の中央部）は前述のようにすでに天保五年に上中之村と下中之村に分かれている。前者は上中（かみなか）、後者は下中（しものなか）と通称される。こうして明治二十二年の町村制施行直前には全島二十二村を数え、町村制施行後はそれらがひとつを除いて大字となつて番地が付された。ひとつというのは上里（かみざと）村で、小村だったために大字荃永に編入された。

現在の一市二町のもととなった三つの郡は、前記『懐中島記』には十八ヶ村が並ぶだけで、上之郡・中之郡・下之郡の文字は見えない。『南種子町郷土誌』はこれらを「行政の単位ではなく便宜上の呼称」だったとする（註4）。

文化十五年の『種子島家年中行事』（註5）には正月年頭の挨拶として、全村の庄屋が御館に出仕したことが出ている。四日に「上之郡（西之表村を除く六ヶ村）の庄屋、七日に「中之郡・下之郡（合わせて十一ヶ村）の庄屋」とはつきり分けて書かれている。このことからただでは三分は行政上の区分だったとはいえず、単なる慣習として生きていただけであろうが、江戸時代の初期あ

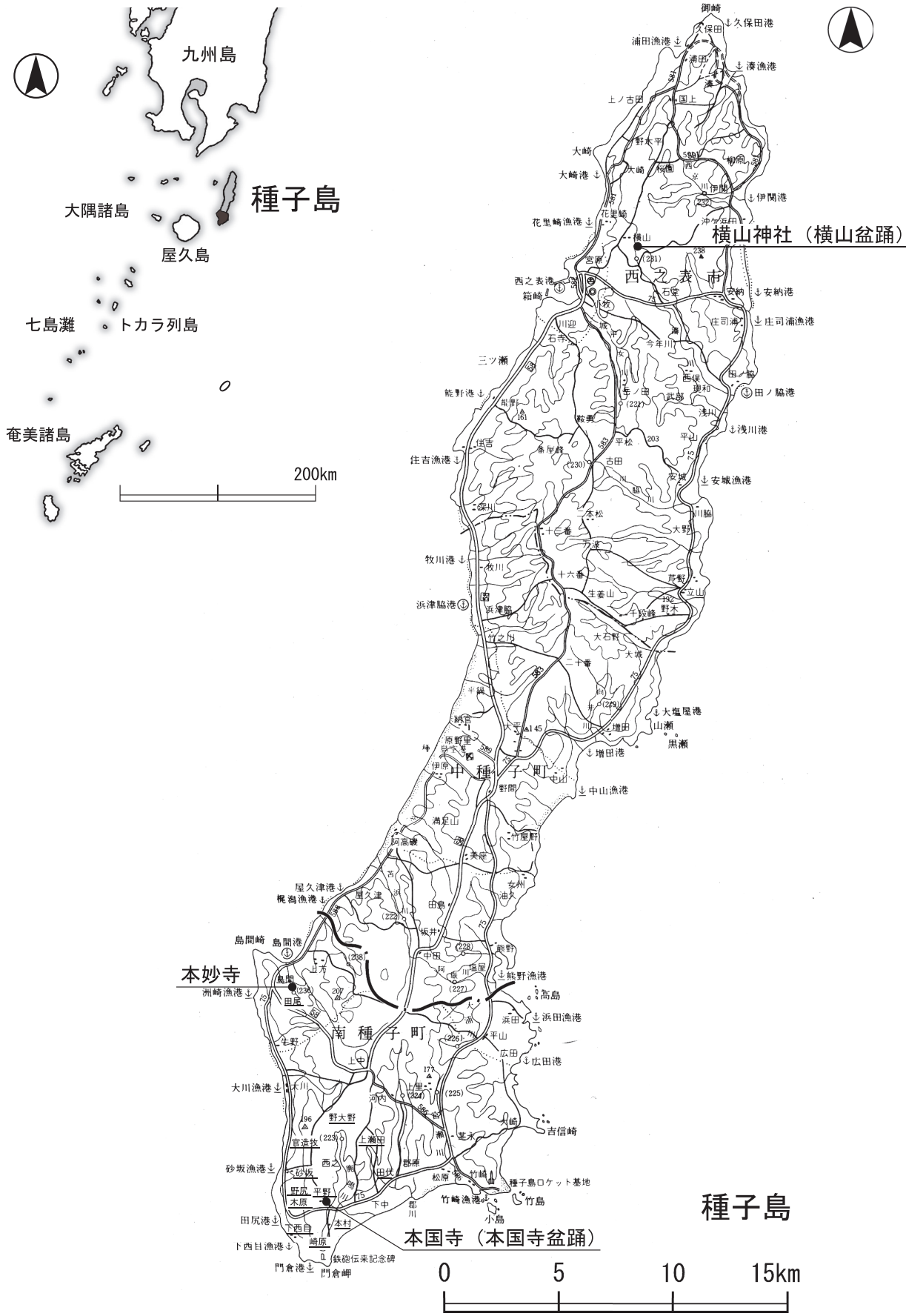


図1 種子島の位置と種子島の盆踊の伝承地域

るいはそれ以前には、三区分には何らかの行政的な意味があったと見ていいだろう。

表1 (種子島人口)

和暦	西暦	人口	和暦	西暦	人口
寛文7	1667	6,500	昭和10	1935	40,660
元禄9	1696	8,609	昭和15	1940	41,552
元禄12	1699	9,608	昭和22	1947	55,645
宝永4	1707	10,249	昭和25	1950	59,566
享保15	1730	12,676	昭和30	1955	63,354
元文3	1737	13,729	昭和35	1960	64,532
天明7	1787	16,431	昭和40	1965	60,130
文化元	1804	14,209	昭和45	1970	50,920
文化13	1816	14,240	昭和50	1975	46,359
慶応4	1868	18,000	昭和55	1980	44,154
明治15	1882	20,177	昭和60	1985	42,007
明治30	1897	24,226	平成2	1990	39,176
明治42	1909	30,692	平成7	1995	37,271
明治45	1912	32,655	平成12	2000	35,695
大正4	1915	37,111	平成17	2005	34,143
大正9	1920	36,983	平成22	2010	31,865
大正14	1925	38,179	平成27	2015	29,847
昭和5	1930	39,471	令和2	2020	27,692

明治30年までは黒正巖による。

戦時中には黒正巖(こくしゅういわお)という経済史研究者が、江戸時代の人口推移一覧を『経済史研究』(註7)という冊子に掲載している。巻頭の黒正巖の「種子島の土地と人口」にて寛文七年から昭和十三年までの人口数が載っている。(註8)

『中種子町郷土誌』も『南種子町郷土誌』も、これらの書物を検証しつつ江戸時代の人口を把握しようと努めている。本稿では明治三十年までは前記黒正巖の出した数字を使用し、それ以後は『西之表市百年史』『中種子町郷土誌』『南種子町郷土誌』および行政の統計資料を参照して表1を作成した。

寛文七年から慶応四年(明治元年)までの二百年の間におよそ三倍に増え、明治以後は、昭和三十五年の六万四千余(寛文七年のおよそ十倍)をピークとして減少に転じ、令和二年はピークの半分以下にまで減っている。ピークから令和二年まで六十年が経過している。ほぼ同じ年数をピークから遡った明治三十年は二万四千余。つまり現在は明治中期と似たような人口になっているわけである。とはいえ現在は市街地域への集住が進み、農村部は空き家が目立つ。総人口こそは同程度でも、集落に子供や青年があふれ、道路は狭く、野や山も開発が進んでいなくなった明治三十年頃とは風景は一変しているはずだ。

人口減少はこれからも進むだろう。祭礼やそこに奉納されてきた歌や踊はどうなるのだろうか、という心配がこれを書きながらも頭を離れない。

人口 種子島全体(一市二町の総計)の国勢調査による令和二年の人口は表1に出ている通りである。令和四年二月末の一市二町それぞれの人口を示す。

西之表市 一万四千六百九十人
 中種子町 七千六百十五人
 南種子町 五千四百十三人

江戸時代の人口を知るための基本資料として『種子島家譜』があるが、年ごとに同じ基準で統計されているわけではないので、具体的な人口を知るのには簡単ではない。明治三十三年には『南島偉功伝』(註6)の中で、当時一般人が見ることのできなかつた『種子島家譜』を参照して数字が出されている。

古代 和銅三年の平城遷都の前夜、多櫛嶋(たねのとう)が設置された。『鹿児島県の歴史』によると「多櫛嶋の嶋とは国と同等の行政単位である」という(註9)。つまり多櫛嶋という国ができた。この場合は屋久島を含む。具体的に何年であったかは諸説があるようだ。『国史大辞典』(註10)は大宝二年前後とし、中村明蔵『神になった隼人』(註11)も大宝二年に多櫛嶋と唱吏国(薩摩国)が成立し、和銅六年には大隅国もできたとする。前掲『鹿児島県の歴史』も戸籍作成の指示が下された大宝二年としつつ、「多櫛嶋の正式な成立」は「公印が与えられた和銅七年頃」とする。嶋庁はどこに置かれたのだろうか。

原口虎雄著『鹿児島県の歴史』(註12)は「多櫛国には学生二十人、医生十六人がいた」とする。彼らが執務する庁舎があり、徴税の組織があり、島内何ヶ所かを結ぶネットワークが作られ、倉庫なども置かれ、陸であれ海岸であれ通行手段も整備されたはずだ。しかし遺構も何も発見されておらず、伝承もない。

嶋庁の所在地をめぐる議論はいくつか出ているが、嶋庁の存在は完全に忘却の
かなたとなっている。

多嶋嶋は財政的には困窮ながら、天長元年に大隅国に併合されるまで百年
以上にわたってひとつの国（屋久島を含む）として存続した。それは遣唐使船
の中継基地設営と、もうひとつは中村明蔵著『隼人と律令国家』（註13）によ
ると辺境防備のためとする。そうだとすればなにがしかの軍備もあつたはず
で、島外からも兵士は派遣されたであろうが、現地勢力をも嶋府軍として編
成したのではないか。

嶋庁による統治を補完するために、小なりといえども早くから寺院も設置さ
れたはずだが、実態はわかっていない。種子島最古の寺院は慈遠寺（じおんじ）
とされ、その創建は大同四年とする口碑を『西之表市百年史』は誌している。
『三國名勝図会』（註14）も「大同四年律宗として開基」とする。多嶋嶋がま
なく廃止されようという時期である。それまで寺院はなかつたのだろうか。

慈遠寺は今八坂神社となっている。旧西之表港の古い岸壁はもと北の洲
之崎から続く磯浜の小さな入江で、境内地はその前から背後の丘に沿って、今
は人家が建て込んで南方向に広がっていた。『懐中島記』に免地二反八畝
二十四歩とあり、島内最大の本源寺の二倍の広さであった。これは元禄期の
データだから、創建当時（平安初期）にはもつと広がつたであろう。

慈遠寺が嶋分寺（国分寺）だつたという説は、『種子島家年中行事』などを
翻刻刊行した郷土史家河内和夫が唱えているというが（註15）、嶋庁を補完す
る役割を担つていたことは確かだろう。『西之表市百年史』は律宗で興福寺系
とするも、それも確たる史料があるわけではない。律宗であるなら唐招提寺系
であるはずだし、興福寺系なら法相宗であろう。東大寺大仏造営の勸進を命じ
られた行基は法相宗から出た人で、僧尼令を無視して土木事業や貧民救済活動
をおこない一派をなした。慈遠寺創建の頃にはすでに行基は故人だが、その伝
統は法相宗の興福寺や薬師寺の僧たちには継承されていただろう。仏教布教の
ほかに種子島開発のために彼らが必要とされ、だから慈遠寺が作られたのでは
ないか。

慈遠寺創建にあつては当然ながら、僧侶をはじめいろいろな技術や知識を
持った人々が来島したはずだし、地元民をも雇つただろう。島内に支所（末寺）
も造つたであろうし、新しい職員を養成する必要も出てくる。正式の僧の資格

を得るためには戒壇院のあつた太宰府の観世音寺（律宗）にて受戒する必要が
あつた。高重義好は受戒のために種子島からはるばる太宰府まで出かけたとす
る（註16）。たぶんこのことが慈遠寺が律宗と見なされた背景であろうし、そ
の後（おそらく鎌倉時代中期）、慈遠寺は実際に西大寺派律宗の末寺となつて
いる。律宗といつても南都六宗の律宗と同じではないことを考慮しなければな
らない。

ちなみに『南種子町郷土誌』は、上里村の善林寺は大同二年創建との言い伝
えがあることを紹介している（註17）。慈遠寺より二年早い。種子島随一の穀
倉地帯（当時の程度水田が広がっていたかはよくわからないが、山裾のあち
こちの小さな扇状地にて稲作をしていたのではないか）である荃永村と中之村
（中之村には条里制が敷かれたとする説もある）のどちらにも近い上里村（ど
ちらをも見下ろす位置にある）には、嶋庁関連の何らかの役所と寺院も置かれ
たのではないか。屋久島にもつとも近い島間には、上妻城の脇に創建年不明の
古い大光寺があつた。多嶋嶋は屋久島も管轄したのだから、何らかの連絡網は
敷かれていただろう。島間に嶋庁関連施設が何もなかつたとするほうが無理が
ある。何しろ島間という地名がそのことを物語っている。各地の開発や民撫の
ためには、西之表村赤尾木の慈遠寺だけでは嶋庁の仕事は補完できず、各地に
末寺が作られただろうことは想像していいだろう。

前述したように天長元年、種子島は大隅国に編入された。『鹿児島歴史』（註
18）によるとその時に郡郷も再編され、種子島は熊毛郡、屋久島は護謨郡とし
てそれぞれひとつの郡となつた。そして熊毛郡には熊毛・幸毛・阿牧三郷が置
かれた。読みは熊毛（くまげ）のみはわかるが、ほかは不明。この三郷がのち
の上之郡・中之郡・下之郡の前身と考えたいところだが、確証はない。

三つの郷や、その中に点在する集落の間の闘争を伝える伝承がある。『増田
の民俗誌』（註19）に増田の郡原で聞き取られた話が載っている。野間中山（な
かやま）と増田郡原（こおりぼろ）の境に千草原（ちぐさばら）という場所が
ある。増田という人が野間ドンと、古房（ふるぼう）と郡原をめぐつて奪いあ
いをした。それまで古房と郡原は野間に入っていた。そこで増田という人が、
古房・郡原は増田に「とらんばいけん」と言つて、いくさを始めた。弓矢も射
らずに真似事みたいないくさをした。みんながヤーレ叫（おろ）うだり、石を
投げたりしおる時に、増田という人が野間ドンのうしろから行つて首を切つ

た。そこで増田が勝つて、古房や郡原は増田の土地になった。そのいくさで血が出たから血草原という。

下野敏見氏も似たような話を『種子島民俗』十三号（註20）に載せている。野間と増田が中山の帰属をめぐって争った。石合戦をしたという小高い所が千草原にあるという。野間が勝つて、中山は野間に取られたというのである。

まことにのんびりしたいくさだが、「みんながヤーレ叫んだり」というのは、悪口雑言を浴びせる悪態祭りを思わずにはいられない。奄美ではいくさにあたっては、ムラの神女がしきりと呪詞をあびせかけ、粟粥を準備したという話を奄美調査の折に聞いたことがある。そういう時代が種子島にもあったことを想起させる。

また前掲『増田の民俗誌』には「古房に城之鼻（じょうのはな）という所がある。増田と野間がいくさをしていた頃、ここは増田の城だった。その時、城之鼻の人々は鎌で草を刈っていた。野間の兵士は鎌を見て怖くなった。というのも、野間にはまだ鎌がなかったからである。野間の兵士たちは逃げだし、それに気付いた増田の兵士は彼らを追った。今の千草原あたりで野間方に追いついた。増田が勝つてたくさん血が流れた」という話が載っている。種子島の砂には鉄分が含まれ、これを利用して製鉄技術があったことが知られているが、そのルーツは未解明である。右の話は鉄が一般的な農機具として利用される以前の姿をかいま見せてくれる。

『種子島民俗』十三号にはまた、西之表市西之表の城（じょう）に高野入道を祀った神社があることが報告されている。実際今も城公民館の庭に小祠が立っている。同書には「西之表は熊毛、中種子は野間、南種子は高野という人が支配していた」とする伝承も下野敏見氏によって採集されている。高野はコウヤと読んだらしい。

多嶺嶋設置にあたっては、こうした古来の在地勢力を活かす形で郡や郷の設定がなされたのではないか、ということ想像せずにはおられないのである。多嶺嶋が廃止されたあとも嶋司に代わる責任者はいたはずだが、彼らはどのようにして統治を継続したのだろうか。

西之表市現和の庄司浦は島津荘時代に、種子島からの貢納物を積み出す港だったことは名前から想像がつくが、多嶺嶋時代にもすでに使われたと見ていいだろう。

中世 十一世紀半ば、平季基によって都城に島津荘が設置されると、百年ほどの間に広大な荘園に成長し、『鹿児島県の歴史』（註21）によると、種子島も全島が島津一円荘となった。一円荘というのは不輸不入の領地のことである。全島が国家の土地だったのが、荘園領主の土地になったわけである。いきなりそうなったのではなく、段階があったはずで、その段階の中で旧嶋司や役人だった人物やその関係者が徐々に武力をもった在地勢力化した。あるいは在地勢力が荘官に取り立てられていったと想定していいだろう。

そのあたりの研究はまったく進んでいない。『西之表市百年史』は近代を取り扱うのみで通史としての叙述がなく、『中種子町郷土誌』と『南種子町郷土誌』には若干の記載があるのみで、叙述は平安初期から、『種子島家譜』に種子島家当主の事績がいくらか記される南北朝へと飛ぶ。平安時代から鎌倉時代後期まですっぱりと空白になっている。これをいくらかでも埋める努力が、今後の一市二町の郷土史誌編纂事業には求められている。

『種子島家譜』冒頭の「信基」の記事に「父は行盛（平清盛の孫、その子信基（幼児）は源平騒乱の難を逃れて北条時政の養子となり、肥後守時信（のちに信基）と号し、時政の執奏をもって種子島他を賜った」と縷々述べたあと、「時に種子島の地頭は大浦口氏（鎌倉に存して事を聴く）、代官上妻氏（在島）なり。時信（信基）思う所あり。大浦口氏の藤原及び紋幕（亀甲の内揚羽向い蝶）を請いて家伝となす」とある。そして記事の最後に「種子島に三郡吏あり。高野入道（上郡）、野間入道（中郡）、熊毛入道（下郡）と称す。分かつて上中下三郡を治む」とある。

清盛の孫行盛は実在したとしても壇ノ浦で没したはずだが、行盛が来たという伝承は県内何ヶ所かにあり、奄美大島の龍郷町戸口には行盛神社がある。種子島家の祖信基が清盛の末孫という話は信ずるに十分でない。徳永和喜氏の『種子島の史跡』（註22）は「一説に、鎌倉幕府成立以前の島司は大江澄遐（すみとう）という人物だった」とする説も掲げている。

『種子島家譜』には右のあと当主四代目までは在鎌倉とあり、事績も空白である。五代目時基（十四世紀中頃）から記事が出る。つまりそれまでは在鎌倉の御家人大浦口氏が地頭を勤め、代官上妻氏が在島して政務をとっていた。五代目時基が肥後氏を名乗って地頭を引き継いで下島したあとも、代官上妻氏はそのまま肥後氏（種子島家）の被官となったというのは、大枠としておそらく

事実と認めていいのだろうか。

すでに種子島は律令体制から島津一円荘となつて久しく、その荘園体制も在地領主による封建的土地所有関係へと変化しつつあった。肥後氏（種子島氏）は在地勢力との主従関係を有利に構築するために、清盛の末孫を祖とする伝承を作りあげたのだろう。

肥後氏（種子島氏）が支配するに至ったいきさつはわからないが、大浦口氏から藤原姓と家紋を引き継いだという記事は、武力による奪取ではないことを意味するのであろう。引き継いだ家紋の意匠は「亀甲の中に向かい揚羽蝶」だという。このデザインは珍しいのではないか。種子島家の家紋を北条執権と同じミツウロコと思つている者には意外でもある。

六代時充の時、時充は一度決めた継嗣を暗殺し、実子に相続させたことで中種子町野間の中山が叛き、時充はこれを征討するという事件が起きている。つまり中山という一集落が領主に対して武力をもって反抗する力をもっていたということである。反抗の理由は右のことだけでなく、他の理由も重なっていたと思われるが、先に述べた千草原の名前のいわれは、この時の戦闘によるとする伝承もある。かなりの衝撃的な事件だったのであろう。

この時充も『種子島家譜』によると南北朝の武家方（足利幕府方）として日向や九州北部にまで遠征している。七代頼時は島津氏久の菊池武光との戦いに従軍して日ノ岡（山鹿市と菊池市の両市街地を結ぶぼぼ中間）にて、貞治五年戦死している。この頃から種子島氏は島津氏の与党となり、志布志方面との縁を強めながら種子島支配を確立していったようである。彼らが島津氏に従つて南九州はおろか九州各地にまで転戦したということは、地元種子島にそれを支える財政的基盤があり、収税するシステムが十分に機能していたことを物語っている。

頼時戦死のおよそ百年後の文正応仁年間、日典は法華宗を広めようと奔走したが果たせなかった。日典のあとを追つて尼崎本興寺から来島した日良上人に十一代時氏が帰依することによって、種子島全島は律宗から法華宗へと転換した。屋久島と口永長部島も種子島家の統治下にあつたので、三島ことごとく法華宗に染まった。この転換は郷土史家たちによって宗教改革と評価されるが、確かにそういう面はあつたに違いないものの、さらに検証される必要がある。そのことによつて種子島理解が深化されるであろう。

以来、明治初期の廃仏まで四百年間にわたり、法華宗はこの地域の民俗文化の土壌となつた。天文十二年種子島にもたらされた鉄砲が、直ちに遠く近畿方面へもたらされたのは、法華宗寺院のネットワークを通じてであるというのはよく言われていることである。

戦国末期より屋久島の管轄権は島津家に移り、種子島家は秀吉政権下にて知覧に移封されたこともあつたが、短期間で種子島へ戻される。幕藩体制後は島津藩家老として当主はおもに鹿児島城下の種子島屋敷に居住した。隣に琉球館が配されたのは、古くからの種子島と琉球との交流の因縁が考慮されたのだろうか。島津家の参勤交代にも勤侍し、そのことが長く財政圧迫の原因にもなつた。

江戸時代の寺院 前述した元禄二年編集の『懐中島記』には村ごとの寺院（全二十七ヶ寺）とその寺領高が記載されている。表2に示した。米の量は現在石（こく）と表記するが、ここでは「四角い入れ物」という意味の「斛」の字を使っている。

上の三寺は赤尾寺三ヶ寺と呼ばれる特別大きな寺院である。妙久寺と妙法寺は本源寺と慈遠寺の末寺で、それぞれの近くにあつた。要するにこれらは種子島家直属の寺である。赤尾木は西之表村に含まれ、いわば城下地域である。『南種子町郷土誌』によると、この周辺の七ヶ町に家臣約三百人が居住していたという。

表2の全二十七ヶ寺は種子島家から支給を受けている寺のすべてである。まづ赤尾木三ヶ寺について少し説明すると、本源寺（ほんげんじ）は、文正応仁年間に種子島家十一代時氏が法華宗改宗とともに菩提寺として、御館の近くに建てた最大の寺院である。京都本能寺と摂州本興寺の両寺を本寺とする。本能寺は信長が討たれたあの本能寺である（本能寺はその後場所を変えている）。慈遠寺は前述したように海岸に近い、今の八坂神社の位置に大同四年に興福寺系律宗寺院として創建されたと伝えられる。長享二年に法華宗に改宗し、種子島家の祈願寺となつた。大会寺（だいえじ）も律宗寺院として、『懐中島記』は南北朝期の応安年中に建てられたとするが、平山武章は「種子島宗教史考」（註23）の中で応永二十六年に九代時長が建立したとする。本源寺創建に続いて法華宗となつた。

表2 『懷中島記』(元禄2年)記載の寺院と斛高

		本末寺	創建年	備考	
1	赤尾木	本源寺(100斛)	文明元年(1469)		
2		慈遠寺(80斛)	伝大同4年(809)		
3		大会寺(50斛)		伝応安年中(1368-1375)	
4		妙久寺(10斛)	本源寺末	永正年中か(1504-1521)	
5		妙法寺(10斛)	慈遠寺末	応永年中か(1394-1428)	
6	西之表村	満徳寺(2斛)	慈遠寺末	不詳	
7		妙泉寺(2斛)	本源寺末	不詳	
8	国上村	本法寺(2斛)	本源寺末	不詳	
9	安納村	本蓮寺(2斛)*	大会寺末	不詳	
10	現和村	隆興寺(2斛)	大会寺末	不詳	
11		大正寺(2斛)	大会寺末	不詳	大聖寺とも
12	安城村	妙泰寺(2斛)	本源寺末	不詳	
13	古田村	蓮勝寺(2斛)	本源寺末	不詳	
14	住吉村	本成寺(2斛)	本源寺末	不詳	本城寺とも
15	納官村	妙昌寺(2斛)	慈遠寺末	不詳	
16	増田村	清浄寺(2斛)	本源寺末	不詳	
17	野間村	日輪寺(10斛)	本源寺末	貞和2年(1346)	
18	油久村	本隆寺(2斛)	慈遠寺末	不詳	
19	坂井村	浄光寺(2斛)	本源寺末	文明年中(1469-1487)	もと律宗正法寺
20	島間村	本妙寺(10斛)	本源寺末	不詳	もと律宗大光寺
21	平山村	善福寺(2斛)*	本源寺末	不詳	
22	上里村	善林寺(2斛)	慈遠寺末	伝大同2年(807)**	
23	荃永村	遠妙寺(3斛)	慈遠寺末	不詳	
24	中之村	本善寺(3斛)	本源寺末	不詳	もと律宗極楽寺
25	西之村	本国寺(3斛)	本源寺末	不詳	
26		金剛寺(1斛)	本国寺末	不詳	
27		龍泉寺(1斛)	本国寺末	不詳	

*の斛高は『御家年中行事属類雑記』で補足。**『西之表市百年史』p404。

以下、十八ヶ村に必ずひとつの寺は存在する。表中の寺院の寺領高を見ると、だいたい二斛か三だが、野間村日輪寺と島間村本妙寺は十斛となっている。前者は中之郡の、後者は下之郡の拠点として重要地点であったろうことがうかがえる。

西之表村の城下赤尾木付近は中西、それより北は上西(かみにし)、南は下西(しもにし)と通称されたが、本稿でとりあげる横山盆踊は上西の横山集落を中心とする数集落連合で伝承されてきたものである。

種子島の法華宗の祖日典を祀る日典寺は下西の川迎集落にあるが、これが表に載っていないのは、江戸時代は寺ではなく小さな廟所だったからだと思われる。天保七年編纂の『御家年中行事属類雑記』(註24)には一斛五斗余が支給されていることが記されている。

以上は種子島家公認の寺院である。このほかに右諸寺の末寺と称する寺や僧坊、末寺といえるのかさえあやふやな民間の草庵がたくさんあったと思われる。名護『鹿児島藩の廃仏毀釈』(註25)に、西之表在住の郷土史家の高重義好が「若い頃、島間の古老から南種子だけで三百施設があったと聞いた。これだと全島では千ばかりの寺院関連施設があったと想像していいか」と話したことが載っている。千はオーバーだとしても相当数の極小の寺が島内各地にあったということである。およそ人家の集まるところには寺があった。庶民の祈禱や埋葬や諸行事に携わった聖(ひじり)とでも呼ばれるべき人々だったのである。歴史の表面には出てこず、記録されることもほとんどないが、本書のテーマである盆踊の原型のようなものを集落の中で担っていた可能性の見え隠れする重要な存在であることを忘れてはならない。新発意(しんぼち)もその一人で、横山盆踊に出るチョウはシンボチの名残であろう。

聖(ひじり)について一言すると、中種子町増田の郡原神社はヒジリ神社とも呼ばれている。この地に移住してきた一族が海上安全祈願のために奉祀する神だったというが、現在は郡原集落で祀っている。これがヒジリ神社と呼ばれるということ、もともとの祭祀者の姿を伝えるのかもしれない、興味あるところである。また中種子町坂井、南種子町平山にもヒジリデンという場所がある。

『郷土ひらやま 民話と歴史』という小冊子(註26)に、平山のヒジリデンというところに住む三兄弟がトラブルの末に死ぬ話が出ている。その血がヒジリデンを赤く染めた。その田を作った人は崇りで死ぬと言われた。ヒジリ田は

現在は大浦の先の田んぼ（字大開）で、その田んぼの中に六坪ほどの森がある。これが事件のあった屋敷のあたりだという。昔はひじり田に田植えをする時は森の神に餅や酒をあげてからしたという。住民が軽々にヒジリ田の面積を蚕食してはならないとする強い戒めであろう。また荃永の上里集落の上里神社には聖祭（ひじりまつり）というのがあることが下野敏見氏『タネガシマ風物誌』に紹介されている。

石をなげれば当たるほどの多くの寺（ないしは寺のようなもの）があったという現象がいつ頃から生じたのかは種子島の民俗文化を考える上で重要だが、文明元年の皆法華以前の律宗時代から進んでいたと見るべきであろう。生活も生産もすべてが、祈祷や呪術や占いなしには済まなかつた時代である。律宗とはいっても、実は西大寺派真言律宗と呼ばれるもので、密教的要素を大きく含んでいた。近代にまで伝わった仏教的民俗行事の震源は法華宗以前に遡って考えなければならぬことである。

栄尊・忍性によって真言律宗が全国に流布するのは鎌倉時代中期からだから、右の種子島の律宗は遅くてもその頃からは真言律宗化していたと見ていい。肥後氏が種子島に地盤を築き、種子島の本格的経営を始めた時、港湾整備なども得意としていた真言律宗に積極的に近づいたことは十分考えられる。

それはともかく、村々がこのような叢中の多くの宗教者を養うことは、公認の寺院への村人の帰属意識の希薄化の原因ともなり、虫害や天候不順に左右されがちの村人の租税納入意識にも影響を及ぼす。人々は公の貢納は渋つても地元の祭祀には布施する。江戸時代を通じて種子島家は何度も財政難に見舞われている。

『種子島家譜』文化五年八月の記事はそのことを如実に示している。「種子島二十八ヶ寺は往昔、薩府寺社奉行に聞し、正に由緒旧跡ある所の寺院なり。しかるにこのほか、或いは未だその宗主を知らず、將に廢墜に至らんとするの寺院許多にして、其の修理を謀らんが為に、世を欺き民を誣（し）ふ。何となれば則ち寺の多きを以てなり。故に今議してこれを措（さしお）かんことを訴ふ。許を得たり」とある。要するにインチキまがいの宗教者がたくさんいて人々からカネを取っている。寺と名の付くものが多すぎる。よってそれらを撤去廃止するというわけである。

二十八ヶ寺は前述表の二十七ヶ寺より一寺多いが、天保七年の『御家年中行

事属類雜記』に納官村坂元の寺が寺領支給対象として出ているので、これを加えた数である。

続いて『種子島家譜』文化七年九月の記事は「島中寺院多きの故をもって、民、財を費やすこと少なからず、故にこれを官に請いて、寺二十六字をこわす」とあって、具体的な坊名を書いている。その中には本源寺と慈遠寺の支坊も含まれているから、公認の寺院も多くの坊を抱えていたのである。増えることはあつても減ることはなかつたのである。正規の寺院もそれらの末端の坊からの上納を当てにしていたのではないか。こうした状況を抱えながら幕末の廃仏思潮、そして廃仏の実行を迎えることになる。『種子島家譜』の記事を追ってみよう。

慶応二年八月二十八日「官、命じて島中の寺院、僧徒等の数及び其の年齢を検し、禄して以て上らしむ」。官というのは鹿児島城下の藩庁からの通達であろう。

同年十二月「この年、官、口数を検すること例の如し。而して宗門手札を頒つことを廢す」。人口調査があり、寺院が宗門手札を発行することを廢止したということ、寺院と人々を切り離す藩庁の政策の開始である。そして「諸村の寺院を毀つ。現和の台運院坊、中之坊、大聖寺」とあり、全島で二十四宇の名前をあげてこれらを破壊したことを記している。これは藩庁からの通達に従つたというより、種子島家の判断だつたようだ。五十年以上も前の文化年間、すでに寺が多すぎると種子島家は思っていた記事があることは前述した。種子島家は恒常的に財政難でありつつ、小寺院は多かつたのである。

明治元年七月、「この月、官、令を下して神祭神葬の礼を用いしむ。蓋し將に仏教を排せんとするなり。其の祭葬の儀の如きは則ち別所あり」という通達がある、いよいよ藩庁から下された。仏教を廢止して葬式も神式（神道）でおこなえ、という内容である。その場合のやり方は別紙に示すとあるが、『種子島家譜』には収録されていない。庶民にとつてみれば、そうはいわれても、これまで仏式でやってきた葬儀を急に神式（神道）でやれるわけがない。やり方がわからない。現場はたいへん困つたであろう。しかも神道は清浄であることを旨とする。死の穢れをもつとも忌避する。多くの僧が神職に転職したであろうが、穢れと葬祭をどう折り合いをつけなければいいのか途方にくれたであろう。講習会のようなものも開かれたかもしれないが（あるいは指導者が来島したかもしれ

ないが)、不便な当時、全島から受講者があつたとは思えない。神式で葬儀をするために新たに霧島教会が勧請されたと、島間の霧島神社創立に関わる口碑が伝えている。

明治元年十一月「妙泉寺を毀つ。乃ち其の旧材を以て軍局を内城に造る」。お寺の鐘や金属を使つて武器製作に充てた。妙泉寺は西之表村川迎にあつて、『西之表市百年史』によれば日典廟を守つてきた由緒ある二十七ヶ寺のひとつである。

明治二年七月「官、令を下して、盂蘭盆会を廃し、始めて神の礼を以て祖先を祭らしむ」。盆を廃止し、神祭で祖霊を祭れとの命である。そして同じ年「是より先、官、仏教を排斥す。是に至りて本島所在の梵刹釈寺、悉く廢毀に従う」とある。全面的に仏教が禁止され、お寺の施設がすべて壊された。

『鹿児島市史』(註28)に明治九年九月五日付けの鹿児島県参事から各区戸長(今でいう村長)に宛てた「各宗旨については、自今各自の信仰にまかせる」との通達が掲載されている。やつと信教は自由になったわけだが、この七年の間の寺院破却と盆行事廃止は盆踊に決定的な影響を与えずにおかなかつた。種子島では赤尾木三ヶ寺のうち本源寺だけは明治十二年に再建されるが、あと二ヶ寺は廃寺のまま、その他はいくつが再興されるに留まつた。多くの檀徒は戻らず、奨励された神道(神社)に留まるか、流入してきた諸宗派に宗旨替えした。

とはいえ、寺院の再建はなくても形を変えて盆踊を復活したところや、また再建された寺院の檀徒には戻らない(神道のまま)にせよ、集落の盆踊に参加する人も少なくなかつた。檀徒を離れたのは信教上の問題というより、経済的負担を回避するためという人も多かつたという。本書のテーマである盆踊も願成就踊も決定的に負の影響を受けた。現在に残る祭礼と奉納踊はすべてこれを潜り抜けたものと見なければならぬ。

近世以後の神社 現在は大字(江戸時代は十八ヶ村、幕末は十九ヶ村)と、ほとんどの集落に鎮守神としての神社があるが、それらは廃仏によつて寺や坊が撤去された場所に建てられている。つまり神社としては新しいわけだが、もともとそこにはたいがい古い謂われがある。

たとえば南種子町平山の平山神社(豊受神社)は大字平山(かつての平山村)のほぼ中央部(中之町)の小山の上にあるが、明治初年までそこには善福寺が

あつた。善福寺は『懐中島記』に「草創年代不詳、初め寺地は広田にあつた」と書かれている。広田在住の語り部(伝承者)によると、石塔山に接する、広田遺跡ミュージアムへと通ずる二車線道路のあたりをテラガウトといい、付近の耕地をジユズガソノ(数珠ヶ園か)という。つまり寺があつたらしいのである。石塔山には集落の石塔とともに坊主の墓とされる数基の墓石が立っている。そのかたわらに寺があつてしかるべきで、これが『懐中島記』のいう「初め寺地は広田にあつた」とする寺院(律宗)なのではないだろうか。

法華宗改宗を機に本源寺末寺として平山神社(中之町)の位置に移したのではないか。中之町(なかのちよう)は平山四集落のほぼ中間にある。廃仏によつて善福寺は壊され、跡に平山神社が建てられた。善福寺はその後広田集落背後の小丘上に再建された。この小丘上はイバと呼ばれたというから、寺院跡とは別のそれなりの謂われがあり、ある程度の平地になつており、そのために善福寺移転先として利用されたのであろう。

つまり善福寺の前身の寺が広田の石塔山近くにあり、中之町へ移動し、そしてまた広田(集落背後の小丘上のイバ)へ戻つてきた。しかし参詣するのにやや不便だつたために現在地(広田集落の西側の丘)に昭和四十七年に移動した。一方、中之町の平山神社の位置には、善福寺が建てられる前(広田から移動してくるまで)は何があつたのだろうか。何も謂われない所に移動させたとは思えない。種子島が皆法華になつて以後の長い年月、善福寺が移動してきたその場所はなぜ寺地として選ばれたのだろうか。平山村の中心としての何かがあつたのではないか。

中種子町納官坂元の浄光寺坂元坊(現存)は『懐中島記』(元禄二年)には載っていないが、天保七年『御家年中行事属類雑記』に「山○寺」(○は判読できない文字)とある。高五斛を受けているから、通常二斛か三斛であることと比べるとかなりの高である。隣(というより同じ敷地)に坂元神社があり、神体は背後の谷川の昼なお暗い小川沿いの積石である。不敬の行為があると強い祟りがあるという。おそらくそれを慰撫する必要があつて隣に寺が建てられたのである。

このことから類推するに、平山神社の場所は小山の上の森になつていて、小山全体は田んぼの中の浮島のようなものである。奄美の拝所を訪ねた経験があれば誰でも気づくことだが、まさに神山(カミヤマ)の形をしている。古くから聖域として何らかの拝所があつたのではないか。十五世紀後半、全島が皆法華に

なったのをきつかけに善福寺を広田から移転して平山村の信仰の中心とした。そして明治の廃仏によって再び神社となった、と考えていいのではないか。

ちなみに南種子町下中真所八幡神社から見える森山は見事な小三角錐であり、平山武章は「種子島に於ける条里制遺構について」(註29)の中で、「これは自然の山ではない」とし、このあたりに条里制が敷かれたとする。葦永宝満神社のお田の森も小浮島である。

種子島の多くの社地や寺地の由来は、多くの場合由来伝承を失っているが、そういう視点で再点検してみる必要がある。

種子島の現在の神社を大別すると、同族(一族)の小祠、集落の小祠、大字(旧村)の神社のおよそ三つに分かれよう。エビス神社や塩釜神社・牧神社は職能的な面を持つてはいるが、集落または同族の祖先神(鎮守神)との区別は必ずしも明確ではない。たとえばエビス神社は漁民の信仰だが、漁民はもとをたどれば同族だったであろう。牧神社(牧の神様)は牧関係者の神で牛馬を祭神とする場合もあるが、マキは集落の原形を意味するとする研究もあり(註30)、原初的な集落(一族)の祖霊だった可能性もある。中世以前のマキの実態はまったく不明で、研究も進んでいない。そもそもこれらは拝所ではあっても、神社とは呼ばれなかったはず(神社以前)である。

同族の小祠は今でも中種子町の野間竹屋野や納官原之里に見られる。ほとんど神社と同じ形だが、もとは拝所である。これらはいずれ集落の鎮守神になる可能性がある。増田では実際にそうなっているケースがある。

大字(旧村)を越えた広域の神社としてはひとつは中種子町坂井の熊野神社がある。十代当主幡時が享徳元年に紀州の熊野権現を勧請したもので、種子島全域が信仰圏となった。その場所はもともと権現山といい、何らかの拝所となっていたようだ。もうひとつは西之表市上西の伊勢神社である。種子島家が寛永年間に日南の鶴戸神宮を勧請したものという。現在は種子島全域の神社のセンターのような役割をはたしている。

江戸時代は盆踊も願成就踊も、寺へも神社へも奉納されたと思っただけだが、村々の小神社は記録にはほとんど出てこない。それぞれの村に拝所があり、場合によっては傍らに寺坊が建てられたであろう。

前述もしたが、最後に霧島神社について述べておこう。霧島神社は正式には霧島教会といい、中種子町の野間中山、油久美座、坂井熊野の、坂井中田、南

種子町島間上方の六ヶ所ある。『種子島家譜』に明治元年七月「官、令を下して神祭、葬祭の礼を用いしむ。蓋し將に仏教を排せんとするものなり」という記事がある。「葬式は神祭でしなさい」との通達である。とはいってもそれまでは葬儀は僧がやっていたわけだし、新しい神職は僧が袈裟を脱いで衣装を着替えただけだから、神葬祭の方法がわからない。地元は困ったであろう。そこで葬式の神社として上に述べた六ヶ所の霧島教会を招致したのである。

島間上方では、本妙寺を撤去して上方神社(島間神社)を建て、その横に霧島神社を建てた。そして現在の上方神社の神主は今も、霧島神社が葬式のために勧請されたことを伝えている。中種子町野間の竹屋野の霧島神社も同じように明治に、海岸付近にあった石をもってきて御神体にしたというが、葬祭のために建てたという伝承は消え、すっかり集落の鎮守神化している。(松原)

註

- 1 鹿児島県熊毛郡に属する種子島・馬毛島・屋久島・口永良部島を管轄する鹿児島県庁の支庁。西之表市街地に所在。
- 2 元禄二年『懐中島記』(種子島家役人のための島内行政便覧のようなもの)。
- 3 『種子島家譜』天保五年十月二十九日と十二月十日。
- 4 『南種子町郷土誌』昭和六十二年、五三三頁。
- 5 『種子島家年中行事』は文化十五年、種子島家臣羽生道潔によって誌された。
- 6 西之表村出身の大阪朝日新聞の記者を勤めた西村時彦(天囚という号で知られる)の著書。明治三十三年刊行。
- 7 この冊子は日本経済史研究所が出した機関誌第二十九巻第一号(昭和十八年一月発行)である。日本経済史研究所というのは、大正末年に京都帝国大学にて始まった日本経済史の研究会が次第に周辺大学の専門家による研究会へと発展したもので、昭和四年に「経済史研究会」が発足し、会報『経済史研究』の刊行が始まった。中心メンバーであった黒正巖(一八九五―一九四九)は、これをさらに発展させて昭和八年に日本経済史研究所を設立した。戦時中も活動を続けるが、昭和二十年一月、敗色濃厚な戦時体制の中で閉鎖となった。昭和三十四年に大阪経済大学日本経済史研究所として再開、現在に至っている。黒正巖は昭和十七年二月、文部省主催の成人講座の講師として西之表町に招かれて来島した。前年の十二月八日には真珠湾攻撃があり、日本がまもなく劣勢になるとは国民の誰もが想像して

- いない時期である。この時、黒正に同行して経済史研究の専門家数名も訪れ、種子屋久の調査をおこなった。その報告(六つの論考やレポート)が右の『経済史研究』に掲載されている。いずれもきわめて優れた論考・報告で、当時の種子島の様子や人々の息づかいまでが活写されている。
- 8 ただこれについては昭和二十八年、当時鹿児島大学教授増村宏の「徳川時代の種子島の人口」(『ちくら』六号所収)によって批判的検討がなされているが、ここでは触れない。『ちくら』は西之表在住の郷土研究者たちによる研究会報で昭和二十七年の第一号から昭和三十一年の十二号までが出された
- 9 『鹿児島県の歴史』原口泉他五名による執筆。平成十一年、山川出版社。四十四頁。この書は原口虎雄執筆の同名書(昭和四十八年、山川出版社)の改訂版である。
- 10 『国史大辞典』平成三年、吉川弘文館。
- 11 中村明蔵『神になった隼人』平成十二年、南日本新聞社。
- 12 原口虎雄『鹿児島県の歴史』昭和四十八年、山川出版社。三十二頁。
- 13 中村明蔵『隼人と律令国家』平成五年、名著出版。
- 14 『三国名勝図会』は天保十四年頃成立の島津藩の地誌。
- 15 平山武章「種子島に於ける条里制遺構について」(『種子島民俗』十三号所収、昭和三十六年)に「慈遠寺の多穰国分寺説をとる人に河内和夫がいる」とある。
- 16 高重義好の「種子島僧と筑紫観世音寺」(『南島民俗』四号所収、昭和四十三年)は受戒のために種子島からはるばる太宰府まで出かけたとする。
- 17 『南種子町郷土誌』(昭和六十二年)は、上里村の善林寺は大同二年創建との言い伝えがあることを紹介している(一〇三三頁)。
- 18 『鹿児島県の歴史』(註9に同じ)。六頁の古代郡郷図。
- 19 『中種子町民俗文化財調査報告書増田の民俗誌』昭和五十九年、一七四頁。
- 20 『種子島民俗』十三号、昭和三十六年。
- 21 『鹿児島県の歴史』(註9に同じ)。一一二頁。
- 22 徳永和喜『種子島の史跡』昭和五十八年、和田書店。一六頁。
- 23 平山武章「種子島宗教史考」大隅史談会『大隅』十七号所収、昭和四十九年。
- 24 『御家中行事属類雑記』は天保七年に羽生道潔が編纂。
- 25 名越護『鹿児島藩の廃仏毀釈』平成二十三年、南方新社。七二頁。
- 26 『郷土ひらやま 民話と歴史』は平山中学校郷土史研究クラブ発行、昭和四十七年。七頁。
- 27 下野敏見『タネガシマ風物誌』昭和四十四年、未来社。二二七頁。
- 28 『鹿児島市史Ⅰ』昭和四十四年。六四三頁。
- 29 平山武章「種子島に於ける条里制遺構について」『種子島民俗』十三号所収、昭和三十六年。
- 30 大山彦一『南西諸島の家族制度の研究』昭和三十五年、関書院。

第三章 種子島の盆踊

種子島では現在、南種子町西之（にし）の本国寺と西之表市横山の横山神社（満徳寺跡）の二ヶ所にて盆踊がおこなわれている。西之は大字で、毎年その中の二グループが前後して踊っている（実際は一グループになることもあるが、詳細は以下で述べる）。横山はひとつの集落で、毎年横山神社にて踊っている。以下、現行の二つの地区の盆踊について述べる。西之と横山以外の地区の断絶した盆踊については本章第三節（種子島のその他の盆踊）にて概観する。

第一節 西之本国寺盆踊

一 西之本国寺盆踊の概要

ユカタに覆面をした踊子たち十数名が一列になり、大太鼓・小太鼓・カネ・笛それぞれ一名のガク（楽）が脇に付いて入場する。ガクのうち笛以外は花笠を被り、笛は踊子と同じユカタに覆面で、入場し終わると踊子に加わる。ガクを中にして踊子は外側を左廻り（または右廻り）に囲む。ゆっくりしたテンポの哀調を帯びた歌を歌いつつ踊りが始まる。これがどの集落にもほぼ共通するスタイルである。

西之の本国寺では毎年八月十六日の午後三時頃より、右記のような盆踊が奉納される。奉納の組はこのあと述べるように今のところ八組あり、毎年交替で二組ずつ奉納することになっている。盆行事については別項にて説明されるが、十六日は盆行事の最後の施餓鬼法要の日である。

本国寺本堂の入口に向かって左手縁側にはマキ（細長い葉で巻いた団子）と足の付いたナスを載せた膳、料理の膳、吸物椀の三つが並んで置かれている。すぐ脇の外には施餓鬼棚が設けられている。参列の人々はこれにお参りしてから本堂に入る。本堂正面入口の石階段の上にも下にも履物がズラリ。堂内は新盆を迎える檀家の家族・親族でほぼいっぱいになっている。五〜六十人はいらるだろう。あちこちに置かれた扇風機が懸命に首を振っている。午後二時から住職の唱題（南無妙法蓮華經）を合図に精霊送りの法要が営まれる。四十分ほど

で終わり、外へ吐き出された人々は本堂前の境内を囲んで空間をあける。カラフルな日傘の花が咲き、周囲の樹木の下に日差しを避けて人々が寄り合う。携帯チェアを持参の人もいる。ザワザワとした談笑が始まる。セミの声がかまびすしい。少し合間があつて、寺総代の挨拶があり、今年の盆踊奉納地区が紹介される。本堂に向かって左脇から踊子が入場して輪を描き、盆踊が始まる。

法要参列の檀家の方々に加えて、盆踊を見るために訪れた方もいるので、百人ほどが周囲を取り囲む。本堂内にも何人も人が座つて庭を見ている。夏のもっとも暑い時期だが、太陽が雲に陰ると涼しい風が吹き抜ける。ウチワや扇が盛んに揺れ動く。見学の参列者に聞くと、精霊が寺に集まり、踊子といっしょに精霊も踊つてあの世に帰るのだという。

（一）南種子町西之

西之というのは藩政時代の西之村のことで、明治二十二年の南種子村（昭和三十一年より町制）成立とともに大字西之になった。島の最南端門倉岬を含む南西部に位置するので、西というより南または南西というべきだが、中之村の西にあるところから西之村と呼ばれたのであろう。南種子町の役場所在地の上中（かみなか）から南端の門倉岬までを貫く脊梁の台地の周辺に、現在は十四の集落が散在している。これらはしかし大字西之の区域（旧西之村域）とまったく同じというわけではなく、西野小学校区に相当する。ちなみに地区名は「西之」、小学校名は「西野」と表記する。

元禄二年の『懐中島記』をもとに作成された区域図が『南種子町郷土誌』に掲載されている（註1）。これを見ると、中央台地から西側は北から島間（しまま）村、中之（なかの）村、西之村の三村に分かれている。

中之村は北端は坂井村と接し、南東の海岸まで細長く延び、しかも枝を伸ばすように西側海岸にも広がり、島間村と西之村の間を分けている。この間の西海岸に沿って三集落（牛野・大川・立石）がある。文化元年の『神社仏閣其外旧跡等札帳』（註2）によると、北の牛野は島間村、中ほどの大川は中之村、南の立石は西之村に属していたことを確認することができる。三集落どうしは近いのだが、海岸に沿った道路がなかったためお互いの通行は簡単ではなかった。そのため別々の村に所属していたというわけである。

『種子島家譜』の天保五年十月と十二月の記事に、中之村を上と下に分けたこ

とが出ている。現在の役場のある中央台地周辺と西海岸までが中之上（なかのかみ）、南海岸に近い平地部分が中之下（なかのしも）となった。その後それぞれは略して上中（かみなか）・下中（しもなか）と呼ばれる。しかし結局明治の地租改正によってさきほどの三集落の土地には江戸時代の区分通り、牛野が島間何番、大川が上中（かみなか）何番、立石が西之何番、という番地が付けられた。

明治六年頃から村ごとに小学校の前身が設置されるようになった。『南種子町郷土誌』によると、西之村にはまず西野小学校が中央台地の東の裾の本村（ほんむら）に設置され、西之村全域を校区としたが、東に偏っていたために明治十四年に台地上の平野に移転した。

西之村に属していた立石からは本村は遠く、小学校が平野に移転しても一里以上ある。牛野も島間小学校まで山越えをして一里以上、大川からも上中にできた中平（ちゅうへい）小学校までやはり一里以上ある。明治二十年、大川にこの三集落を校区とする大川簡易小学校が設置され、三地区を西海（せいかい）校区と呼ぶことになった。以後、旧村域をまたぐ形の西海校区がひとつのままとまりとして成立し、諸行事はこれを単位としておこなわれるようになった。とはいえ、たとえば牛野の方々はもと属していた旧島間村の御崎八幡神社の祭礼にはお参りをするなどの伝統もわずかながら残ってはいる。

かくて立石集落は大字西之（旧西之村）に属するものの、西之の盆踊を担当する組にはカウントされていない。明治以前は西之本国寺まで遠路を駆けつけて盆踊に参加する人もいたはずだが、そうしたことを伝える人はいない。

（一）西之本国寺

西之の台地上のほぼ中央、西野小学校の道路を隔てた北側に本国寺がある。西隣に平野神社（平野集落の神社）が接している。『南種子町郷土誌』に「本国寺の前身は本村にあった本因寺で、本国寺という寺号は昭和二十七年に認可を受けて名乗った」とある（註3）。

本因寺は古い寺である。元禄二年の『懐中島記』（註4）には「本源寺末寺、開基不詳、寺領三斛」とある。島内には種子島家が寺領を給した二十七ヶ寺があり、すべて西之表の赤尾木三ヶ寺（本源寺・慈遠寺・大会寺）のいずれかの末寺となっていた。

本因寺があった本村（ほんむら）は南東海岸に沿って開けた水田地帯の西側山裾の集落である。本村という名前からしてかつての西之村の中心で、江戸時代には仮屋（役所）が置かれていた。今はただ静寂の中に、ひっそりと少なくなった人家が点在する。聞こえるのは遠く波の音と風のそよぎのみ…。

『懐中島記』には全島各村の寺院の寺領高（斛）も載っている（第二章の表2を参照）。寺領を給されているのは種子島家（いわば種子島政府）から認められた寺であることの証拠でもある。斛（こく）は石と同じ意味である。西之村には前述の本因寺（三斛）のほかには本因寺末寺として金剛寺（一斛）・龍泉寺（一斛）も載っている。島内全体では寺領二斛というのが普通なので、本因寺の三斛はそれよりも重んじられていたことを示す。

本因寺がもつた場所については前掲文化元年の『神社仏閣其外旧跡等紀帳』（註5）に「本村の仮屋より丑之方老町御座候、草創年間不詳候」とある。一町は約百メートルだから仮屋の北北東のすぐ近くである。明治の廃仏によって撤去され、跡に本村神社が建てられて現在に至っている。

廃絶のあと平野のどこかに仮住まいのような形で復活していたのかもしれないが、そのあたりを聞くことはできない。平野にて、平野神社に続く小山を整地して現本国寺が建てられたのは戦前の早い段階だったようだ。昭和十年に平野に生まれた盆踊伝承者は次のような話をしてくれた。

戦時中、西野小学校五年生の時に鹿児島に疎開した際、疎開先で死人があった。その時、いっしょに疎開していた本国寺の息子（小学生）が臨時にお経を読んだという。「門前の小僧、経を読む」ということが実際にあったのである。

ただしこの頃は京都本能寺や尼崎本興寺と本末関係を結んでいなかったと思われる。すべてを失った廃仏の余波がまだ及んでいたのかもしれない。略式の寺だったということだろう。前掲『南種子町郷土誌』の「昭和二十七年より寺号の認可をうけて…」という記述は、この時に住職が僧侶の資格を得、正式に法華宗本門流に属することを認められたということであろう。

本国寺は山号を天龍山という。現在の住職は故前任職夫人の河野妙秀さんが勤めている。前任職の没後に得度してから、令和三年時点で二十三年になるという。境内入口脇の両隅にアコウの大木が枝葉を広げて陰を作っている。西側の塀際には古い石塔や墓石らしきものが並んでいるが、もはやいわれを伝える人はいない。現在の檀家は約三百戸、西之以外にも広がっている。彼岸や盆の

時期は住職は檀家を訪れて棚経をあげて廻るのに忙しいという。

ちなみに本村にあった本因寺の塔頭は『南種子町郷土誌』によれば、明治初期「共勸学舎」として利用され、これが西野小学校の前身になったという。文字通り寺子屋風だったのである。西野小学校は明治十一年に正式の小学校となり、明治十四年、平野の現在地に移転する。くしくも寺もまた、その隣に再興された。

『懐中島記』にある本国寺末寺の二つの寺のうち、金剛寺は田代の田代神社の位置にあった。田代神社の大蘇鉄は「金剛寺の蘇鉄」と呼ばれていたと『南種子町郷土誌』は記している。

龍泉寺は中西目の小田にあったと、同じく『南種子町郷土誌』は推定している。小田自治公民館の庭は、小さい集落（二十戸ほど、多い時でも三十戸ほど）にしては広く、どこことなく風格がある。庭の奥に建っている小田神社は、もとは寺だったことを地元の方々は覚えていてる。

明治になるまでは、これらの三つの寺それぞれで盆踊がおこなわれたと想像していいだろう。檀徒はお寺所在地の集落を越えて広がっていた。田代の金剛寺の檀徒の範囲は下田代も含んでいただろうし、小田の龍泉寺は前之原や下西目にも檀徒を持っていたであろうから、周辺地区から踊子が参加してそれぞれの寺で踊り、それ以外の集落は自分たちの地区の拝所で踊り、本村の本因寺にも行って踊ったのではないかと想像される。本因寺では、各集落ごとに次々とグループが訪れて盆踊で賑わったと推察して大きな間違いはないであろう。あるいはそれぞれが踊ったあと、全員でひとつの踊を踊ったかもしれない。

現在、本国寺での盆踊は西之全体の集落が連携して毎年欠かすことがない。この強い伝統は、そのように考えて納得がいくものである。

(三) 盆踊奉納の仕組み

盆踊は本国寺の檀家の総代会（数名で構成）が依頼する形で実施される。六月頃の総代会で依頼を決定し、依頼文書（キリガミという）が西之地区公民館長に出される（令和二年と令和三年はコロナ感染予防のために本国寺からキリガミは出さなかった）。とはいえ盆踊は西之地区の行事として折り込み済みなので、だいたい前年の十二月の西之地区運営審議会には議題として出され、三月の地区総会で決定するという形をとっている。話し合いの内容は、キリガミ

が来るのを前提として輪番を確認すること、踊子が少ない集落をどうケアするか、踊ができないことが三月時点でわかっている場合代替をどうするか、太鼓や鉦に欠員が生じないかどうか、などの確認である。新人が多い場合は早くから稽古を始める必要がある。担当になった集落の集落長は踊が終わるまで気をもむことになる。もうひとつ考慮しなければならないのは、秋の門倉岬神社願成就祭へ奉納する大踊（太鼓踊）の当番と重ならないようにすることである。明治以後にできた新しい集落は伝統的な盆踊を持たないので、ヤートセーなどを奉納する。それ以外の集落は伝統的な盆踊を奉納するのが建前である。当番にあたった集落はそれなりの覚悟をもって引き受ける。現在は原則として毎年二組の盆踊が西野校区十四の集落の輪番によって奉納される。次に示すように十四の集落を東西に分け、それぞれをさらに四つの組に分ける（全体で八組）。北から南へ並べる。

東 A 野大野（のおおの）・上瀬田（うえせだ）（以下、野大野と表記）

B 田代・下田代（しもたしろ）（以下、田代と表記）

C 平野

D 本村・崎原（さきはら）（以下、本村と表記）

西 E 砂坂・官造牧（かんぞうまき）（以下、砂坂と表記）

F 野尻・木原（合わせて上西目と表記）

G 小田・前之原（合わせて中西目と表記）

H 下西目

Aの野大野と上瀬田は藩政時代からごくわずかの人家があったようだが、集落としての規模に至らないまま明治を迎え、島外からの入植者によって集落になった。『南種子町郷土誌』によると、野大野への入植時期は不明（明治以降）だが、上瀬田は明治二十七・二十八年に奄美群島からの入植集落である（この時、島間の小平山や上中の焼野にも分散入植した）。伝統的な盆踊を伝承してないので、合同して他集落からヤートセーなどを習って奉納している。

Eの官造牧は官三牧と書かれる場合もある。種子島家の役人だった人物の所有する土地（マキ）だったので、それが土地名になった。もと砂坂の一部で、人家はほとんどなかったところだが、ここも明治以降におもに砂坂の人が移り

住んで集落になった。もともと砂坂の一部なので、盆踊は砂坂に加わっている。以上の八組が毎年東西で交替し、それぞれ二組ずつ踊る。たとえば今年東のA・Bが踊るとすると、翌年は西のE・Fが踊り、翌々年は東のC・D、その次は西のG・H、という具合である。東西それぞれの中での組み合わせには一応ローテーションはあるが、その通りにはいかない場合もあり、組み合わせることもある。このローテーションが順調にまわると四年に一回巡ってくることになる。

東と西は同時には出ないことになっているが、平成二十八年と平成二十九年は同時に出た。平成二十八年は東の平野と田代の出演予定だったが、西の上西目が東京での第六十五回全国民俗芸能大会（於国立オリンピック記念青少年総合センター）に出演することが決まり、地元でのリハーサルの意味をこめて、田代に替わって出たのである。というわけで翌平成二十九年は西の当番だったが、前年からの繰り越しの東の田代と、西からは砂坂が出た（この時、砂坂は盆踊ではなくヤートセーを踊った）。そして平成三十年は東の当番だったので、本村と野大野（野大野はもともと盆踊を持っていないのでヤートセーを踊った）が出た。

令和元年は西の当番で中西目と下西目が出る予定だったが、下西目は踊子の人数が揃わず欠場し、中西目だけの奉納となった。令和二年と令和三年は新型コロナウイルス感染予防のために盆踊は中止された。ただし本國寺での盆の法要は縮小しておこなわれた。

盆踊は現在では男子だけの踊である。昔は十五歳になると二七組に入り、集落経営の重要な担い手となったが、昭和三十年代後半から青年の流出が始まり、昭和四十年頃には青年団は成立しなくなった。どの集落でも踊を含め集落行事に参加するのは七十歳までである。七十歳を越えても指導に当たったり応援をしたりする人はいるが、義務からははずれる。

奉納地区は当日は午前中に地元にて（稽古をした場所にて）略装で一度踊る。リハーサルのようなものだが、これをシクミと呼び、必ず踊ることになっている。午後本國寺で踊ったあとは地元に戻って、今度はニワクズシといって、略装で再度踊る。これも必ずしなければならない。そしてそのあとは反省会と称する打ち上げである。これは直会に相当するだろう。つまり奉納当日は、シクミ・奉納（本番）・ニワクズシの三回踊ることになる。

寺以外に、たとえば新盆の家を踊って廻るといふようなことは現在はなく、過去にもあったという伝承もないが、明治以前のことを覚えている人とてもなく、家廻りがなかったとはいえない。明治初めに甚大な廃仏の波に襲われている。盆踊はしばらく中止され、復活したあとのやり方も大きく変化を受けたと見なければならぬ。

先述したように平成二十九年の砂坂は人口減少のために、伝統的な盆踊を伝承するにもかかわらず、それを踊ることができずにヤートセーを踊った。これについては盆踊開始に先立って、関係者からの説明と謝罪があった。

ヤートセーというのは囃子詞からとった名称で、太鼓とカネ各一人ずつ（二人ずつの場合も、二人と一人の場合もあり）に先導されて一列で登場し、輪になつて踊る手踊である。踊も歌もどの集落もすぐに踊ることができず。種子島全域に分布している。踊子は女子が中心でカラフルな晴着を着る（男が加わることもよくある）。曲は伊勢音頭風の旋律に合わせ、「おくめ口説」とか「おつや口説」という口説歌である。これらは秋の門倉岬神社の大祭（願成就祭と通称される）にて踊られるレパートリーである。今後は人口減少による踊手不足がいずれの組にも訪れるだろう。

盆踊の場合、直近で集落内に不幸があったとしても、秋祭り（願成就祭）とは違って集落として直ちに中止（欠場）とはならない。近親者が盆踊に参加するかどうかは本人の意志による。何人もの近親者が踊に参加しないという意志表示をした場合は、踊子の人数に影響が出る。特に太鼓やカネの担当者だった場合は、組としてどうするかを話し合つて不参加を決めることもある。すると一組のみの奉納となる。高齢化と人口減少の進む現在、どの集落にも踊子不足による出場辞退の可能性はある。

東西が毎年交替し、かつ二組ずつ出演するという仕組みは、盆踊が必ず一組は奉納されるように工夫された仕組みといえる。地元の方々の記憶によると以前はほとんど毎年二組が出たという。しかし二十年ほど前からしばしば一組のみの出演の年があった。これは盆踊が奉納されないことがないようにという工夫が生きているということでもある。しかし今後は二組ともに出演できない（盆踊奉納がない）という事態がおきる可能性をはらんでいる。あるいは伝統の盆踊ではなく、二組ともにヤートセーなどの代替を踊ることもあり得る。

盆踊を絶やさないうために新しい仕組みを考える時に来ているという実感は、

地元の方々にはすでに生まれている。たとえば前述のように今は東西をそれぞれ四組ずつに分けているが、これを二組に分けるとか、東西をそれぞれ一組にして必ず毎年交替で踊るとか、あるいは東西合わせてワンチームとして毎年踊るとか、などである。その場合、問題となるのは地区によって盆踊が少し違うことである。もともと同じ踊だったのが、長い伝承のうちに違いが生じているのである。これをどう調整するかが今後の知恵の出どころでもある。

(四) 盆踊奉納の経緯

いつ頃から右のような仕組みになったのかを示す資料はないのだが、村田熙の報告「南種子西野村小田の盆踊」（註6）によると、大正末期までは現在のよう集落がはつきりと形成されているわけではなく（自治公民館として未組織状態）、おおよそばに東西に分かれて、十五歳から三十五歳ぐらいまでの青年たちが一年交替で踊っていたようだ。

昭和になった頃から各集落が集落としてのまとまりの自覚が生じ始めたようだ。戸数・人口ともに増えたことや、行政からの働きかけもあって公民館としての機能も備えるようになって、集落ごとに踊ることができるようになった。そこで輪番を決めることになったようだが、輪番の間隔が開きすぎると踊を忘れてしまう。特に歌は稽古を必要とする。紆余曲折しながら右のような仕組みに定まっていたようである。

大正末期以前のことはまったくわからない。明治の廃仏によって江戸期とは奉納の状況は一変したと思われる。(二)でも触れたように何しろ西之に三つあった寺は全廃され、のちに本因寺のみは本国寺として再興されるが、あとの二つは廃されたままである。戦時中の数年間は中断し、戦後復活されるも、昭和三十年代に途絶えた時期があるようだが、青年が中心になって復活して以後は現在まで中断なく続いている。以下、集落ごとにわかっている範囲で伝承や奉納の経緯を記す。集落ごとの世帯数（戸と表示する）と人口は令和三年現在の役場資料による。

東地区に属する台地上の野大野と上瀬田は入植集落で、合同してワンチームとしてヤートセーを奉納している。今は野大野は三十五戸・五十五人とわりと大きな集落となっている。上瀬田は十二戸・十七人。

平野は西之の中でもっとも大きく、六十二戸・百三十人。本国寺の地元集落

である。盆踊は「たけなが」と「つんたん拍子」があったが、現在は「つんたん拍子」を踊っている。集落の氏神平野神社はなぜそこに建っているのかは不明。隣に本国寺を建てたいきさつも不明だが、神社のあたりが共有地になっているので、寺を建てやすかったのかもしれない。寺地は今も寺の所有、社地は集落の所有である。江戸時代にも平野内に小寺があったかもしれないが、場所は平野神社の位置ではなかったようだ。つまり平野神社は寺跡にできたわけではなく、以前から今の場所に神社または拝所があった。御神体は本殿小祠の中にある石三個で、鏡と札を添えている。札というのは正月二日のチヨウギトウにて寺からもらうお祓いの札。シャニンという神社の係が一人いて（毎年交代で決めるが、最近と同じ人がしている）、毎月シュエートリをして社殿内に供える。シュエートリは以前は（十数年前までは）一日と十五日にするものだったが、現在は一日のみ。シュエートリというのはハマヒサカキで渚の小石三個を拾って細長く包み込み、四ヶ所を紐でしばって持ち帰ること。これを二本作り、交差させて神殿に飾る。早朝に誰にも会わない時間帯に海岸（だいたい西目海岸だが、決まっていない）に行き、七つの波が返すのにつけて丸い小石を拾うものという。途中で人と会っても言葉をお互いに交わしてはいけない。正月は当然ながら元旦早朝に取る。門倉岬神社大祭（願成就祭）の時は当日の早朝に取る。盆踊の時はシュエートリはない。

田代は東海岸の田園から鹿鳴川（しかなぎがわ）を少し遡った小盆地にある。下田代（しもたしろ）は今も田代に合同。四十四戸・七十一人。本因寺末の金剛寺があった。寺領一斛をもらっていた。そのあとに田代神社ができた。今の社殿は拝殿で、その向こうの丘の上にある小石祠が本殿である。入口の山手にある地藏石像は集落のどれかが寄贈したもの。境内入口の鳥居の両柱の両脇には大きな石塔があるが、謂われを語る人はいない。社殿入口の鳥居のシメナワを結んだところに、秋になるとサツマイモを束にして掛ける。現在は「つんたん拍子」を踊っている。

本村は江戸時代の西之の中心集落で、前述したように仮屋が置かれ、集落としてはかつては大きかった。現在は過疎化が著しく、人家は台地の裾や田園の中に点在する。二十七戸・四十四人。本因寺は集落背後の小丘の上にあった。その跡は本村神社になっている。盆踊で使用する太鼓をコウロン（意味は不明）、小太鼓をイレコという。願成就祭に奉納の大踊の大太鼓はコウロンより

少し大きい。コウロンが壊れた時は山羊の皮で補修したことがある。胴はタブをくりぬいた。現在は崎原といっしょに「つんたん拍子」を踊っている。

崎原は門倉岬神社にもっとも近い集落で、本村から門倉神社方向に坂を登った台地上にある。昔は四十戸ぐらいあったが、今は十七戸・二十八人。明治の中頃に本村から分離してできた集落。崎原内にはエビス神社がある。石塔はない。祖先の墓は本村の前の浜にあって、集落役員が年に一度はお参りするが、今は地元に納骨堂を作っている。盆踊は本村と一緒に「つんたん拍子」を踊る。本村・崎原の稽古は庭の広い崎原公民館でしている。

西地区の砂坂は西海岸に面する西之地区内のもっとも北、立石の近くにある。塩屋としてできた集落である。現在四十三戸・七十三人。盆踊は上西目と同じ「たけなが」を伝承している。寺は現在の集落民の記憶にないが、小堂のような坊があったかもしれない。事前に公民館で練習する。本国寺奉納当日は、踊り子はそれぞれ本国寺に集合する。つまり集落でシクミをしないわけだが、これはもとは上西目と合同で踊っていたからである。家々を踊ってまわることも伝承していない。本国寺での奉納がすむと、公民館にてニワクズシはする。そのあと反省会（宴会）。現在は踊子が足りないので奉納ができない状態。砂坂は上西目（野尻・木原）といっしょに踊っていたわけだから上西目と同じ踊りのはずだが、現在は少し違っている。上西目はテンポが少し早く、砂坂はその分遅いことになる。

盆踊をいっしょに踊る官造牧（官三牧とも）は現在は七戸・十一人。前述したように江戸期のマキを管理する人が住んでいただけで、集落を形成せず、昭和四十年頃に砂坂の人が移住して集落となった。

上西目（かみにしめ）というのは隣り合った野尻（北）と木原（南）を一緒にした呼び方。別々の集落だが盆踊や願成就祭での大踊は合同でチームを作る。役場から見て西海岸を西目といい、その中でいちばん上（北）にあるので上西目と呼ばれる。地元では上西目という言い方はしない。野尻は二十七戸・五十四人。木原はそれより少し小さく、十九戸・三十二人。木原には寺（寺名は不明）があったという。その最後の住職は浜田彦左衛門という人で、幕末までのことらしい。寺跡は集落に寄贈され、そこに木原神社が建ち、のちに今の場所に移動し、その境内に木原公民館ができています。木原の盆踊はもと「きのぎの」だったが、野尻と合同で踊るようになってから野尻の「たけなが」を踊っ

ている。

中西目は隣接する小田と前之原を合わせていう。小田には明治になるまで本因寺末の龍泉寺があり、撤去されて小田神社になった。前之原には寺跡も神社もない。小田と前之原は村田熙報告（註7）では昭和四十七年当時、合わせて四十戸・百四十人ほど。現在は小田は三十戸・五十八人、前之原は十九戸・三十五人。小田のほうが集落としては大きく、また前之原には門徒も少なく、盆踊は復活当初しばらくは小田だけで踊っていたという。現在は小田からも参加している。「きのぎの」を踊っている。

下西目は単独の集落。戦後しばらくは九十七戸ほどもあり、五地区に分かれたかなり大きな集落だった。いつ頃から下西目と呼ばれるようになったのかは不明。過疎化が激しく、現在は本戸だけで三十四戸・七十人。令和元年は奉納当番だったが、踊を組み立てることができなかった。豊受神社は明治初期に西之表の伊勢神社を勧請したもの。境内の隅に石塔があるが、いわれを語る人はいない。何らかの小堂があり、その跡に伊勢神社が勧請されたと思われるが、それを伝える村人はいない。盆踊には「きのぎの」と「たけなが」があったが、現在は「きのぎの」を踊っている。（松原）

註

- 1 『南種子町郷土誌』昭和六十二年。五五一頁。
- 2 西之表市立図書館が昭和六十年に『郷土資料集七 種子島方角紀帳 神社仏閣其外旧跡等紀帳』として翻刻刊行している。
- 3 『南種子町郷土誌』昭和六十二年。一〇六六頁。
- 4 『懐中島記』（元禄二年）は鹿児島大学の増村宏によって「種子島民俗」十四号（昭和三十七年）に翻刻され、ここでは「本国寺」となっている。底本は西之表市立図書館が昭和五十七年に写真版として刊行した『郷土資料集五 懐中島記全』と同一だと思われるが、この中では本因寺の「因」は「國」の略字とも取れるような書き方になっている。増村は「國（国）」と読み、昭和六十二年の『南種子郷土誌』は「因」と読んで「本因寺」とした。本稿では本因寺と表記する。
- 5 註4に同じ。
- 6 村田熙「南種子西野村小田の盆踊り」は『鹿児島県文化財調査報告書十九』（昭和四十七年）に所収。
- 7 註6に同じ。

二 西之地区の盆行事

(一) 本国寺での盆行事と盆踊

寺の縁側（入口左側）に「ミズダナ（水棚）」を作っている。ミズダナは木枠で作っており、屋根と三方の壁はソテツの葉で囲い、一段の棚を作り供え物をしてある。（写真1-1-1ミズダナ、1-1-2ミズダナの供え物）



写真1-1 本国寺のミズダナ



写真1-2 ミズダナの供え物

盆の法要は八月七日が精霊迎えて夜七時三十分から門徒が寺に集まり十二日までは毎晩行う。初盆の門徒は提灯や供え物を持って訪れる。七日から十二日まで精霊迎えを夜七時三十分から初盆の家族が寺に来て毎晩経を唱える。十二日七時三十分からは満座法要を行う。満座法要の十二日にお札（塔婆）をもらい、仏様を家に連れて帰り、十六日に精霊送りで寺に返しに来る。

本国寺での盆の法要（精霊を送る法要）は十六日、十四時からの法要に初盆の家族が次々と寺に袱紗などの布に包んだお札（塔婆）を持ってくる。初盆でなくても法要に来てよい。十四時から師匠（住職）の木魚により法要が始まり題目が唱えられる。この法要は施餓鬼供養も含まれる（写真2初盆の法要）。十五時過ぎから寺の境内で盆踊が始まる。この盆踊を精霊も一緒に楽しみ帰っていくと伝わっている（写真3本国寺での盆踊）。

古くは平野には「石塔踊」という本国寺の石塔の前で奉納する踊が、八月十五日の供養踊として昭和の初めごろまで踊られていた。

南種子町では十三日から十五日（十六日）にかけて、盆に供える料理が古くは次のように一日七回から八回供えることが一般的に行なわれており、その



写真2 初盆の法要



写真3 本国寺での盆踊

時々の供える呼称が決まっていた。まず、アサンカアレ（朝食前）、アサメシ（朝食）、ヒイナカアレ（十一時頃）、チュウハン（昼食・十四時頃）、ヨオウナカアレ（十六時頃）、ヨオウメシ（夕食）、ヨオウナガアレ（夜十時から十一時頃）と一日中供え物をしていたが、最近はこのように一日七回から八回供える家は少なくなっている。

(二) 「たけなが」を踊っている集落の盆行事

1 砂坂

八月十三日から十六日が盆の期間である。墓掃除は盆の一週間くらい前に済ませる。盆棚は今では作らない。

十一日か十二日にマキを作って、自分の家の墓や親戚の墓に供えて持ち帰る。十三日は先祖を迎える日であるからその前にマキは供えた。十二日は餅を搗く。これは、お供え用と自分たちが食べる分で一升から二升搗く。盆花はシキミ・ドラセナ・ユズリハ・モロバ（ウラジロ）を仏壇にある花瓶と墓に供える。

精霊は十三日の朝、家に帰って来る。昔は十三日に精霊棚を作り、縁側に供

え物を置いた。朝と晩に白ごはん・煮しめ・お茶・焼酎と、半紙の上に白い餅を二段重ねにして、その上にミカンをのせて供える。餅以外は朝・晩と料理を替えて供える。

十四日から十五日は十三日と同じような物を供える。

十五日は「礼言い」といつて嫁の実家に米・焼酎を持って行く。これは盆と正月の二回行う。嫁の実家に行くのは「礼言い」で、実家では「礼受け」という。

十六日は石塔があるので、そこに参ってから自分の家の墓に行く。墓石の窪みの所に米と水を入れ焼酎も供える。墓参りの順序としては石塔↓墓↓本国寺での盆踊となる。

石塔のある所を「カンロ」という。ここに精霊が帰って来る。寺役と集落の人々が前日か前の日曜日に石塔の周りを掃除する。石塔には十六日に各自マキ・焼酎・米・水を供える。マキは持ち帰る。石塔に文字はない。師匠が経を唱えることもない。精霊が石塔に集まって帰るといわれている。最近では十六日のお参りは石塔からする人と墓からする人がいる。

2 上西目の木原

盆は十三日から十六日までで、墓掃除は十日から十三日の間にする。先祖のことを「精霊どん」という。十三日に精霊棚を作る。精霊は寺から帰るのが遅くなるので精霊棚に泊まって夜明けに墓に行く。十四日朝早く墓に迎えに行く。精霊は十三日寺に一応集まる。初盆の精霊は寺で供養してもらって早く帰ってこられるが、ほかの精霊は寺での供養が遅くなるので精霊棚に泊まる。そして、十四日朝早く墓に行き、自宅から墓に迎えに行くので精霊は帰って来る。家の位牌のところと精霊棚に疲れているということでお粥を供える。

精霊棚には、先祖の霊と一緒にいてくる身寄りのない精霊が家の中に入っ

てこないように十三日の夕方、縁側の外に作り供え物もする。

精霊棚は笹のついたニガタケ四本で枠を作り、そこに二段の棚を作り三方向をソテツの葉で囲み壁を作る。上段には線香・ローソク・食べ物（そば、下段にはシヨウハギ・シキミとミズノコ（シキミ・ハギ・バシヨウの幹を刻んだもの）をバシヨウの幹で作った容器に入れ、焼酎・水と一緒に供える。棚のそばには水を入れた容器と柄杓を置き、来客や家の者が外から来た時には家に入る

前にミズノコに掛ける（写真4 民家のミズダナ）。



写真4 民家のミズダナ（精霊棚）

精霊はあの世から寺に集まっているので十三日の晩に寺で説教がある。夕方、寺でお札をもらって帰り位牌のそばに置き、十四日墓に持って行く。十五日夕方か十六日墓から札を持って寺に行く。精霊棚は十六日の朝、壊して家の裏山に捨てる。

十四日の朝は米・水の代わりにミズノコ（写真5 ミズノコ）を墓に持っていき焼酎をかける。家で経「南無妙法蓮華経」を百八回唱えて朝ご飯を食べる。百八回唱える回数は数珠玉や指を折り数える。朝ご飯は、仏さまが長旅をしてきているので、お腹を壊してはいけないということでお粥を出す。昼は家族と同じもので肉・魚は使わない。三時にスイカなどの果物。夕方はお題目を唱えて、家族と同じものを供える。

十五日は朝食を供え題目を唱える。マキやダンゴ（写真6—1 マキとマキ



写真5 ミズノコ・シヨウハギ・シキミ

の葉、6―2ダンゴ)を作り、カライモを煮て供える。ダンゴは艦の代わりになる長いダンゴ二本と丸く真ん中が少しくぼんだダンゴ二つ、真ん中が少し盛り上がったダンゴ二つを皿にのせ、家の中の精霊と外の精霊棚に供える。このダンゴは食料として持ち帰ってもらう。マキはマキの葉で包みミチシバで結び留める。舟の代わりになるユリの根(写真7―1ユリの根)とダンチクの葉で作った笹舟(写真7―2笹舟とダンチクの葉)を、精霊が食料などを持って乗っていくために供える。ユリの根は精霊棚と家の中の仏さまに供える。墓にはユリの根はもっていかない。

十時にブト(トコロテン)を供える。以前は海から海藻を取ってきて作っていたが今は買う。三時ごろカライモの煮たものとダンゴを供え、ミズノコをバシヨウの幹で作った器にのせ家の中の膳と外の精霊棚に供える。夕方、マキとミズノコを重箱に入れて墓に持っていき供える。墓に供えたマキは自分たちで食べる。

十六日の朝、松の若芽枝(松の花という)を取ってきて墓に持って行き花筒に挿し、線香・焼酎を供える。午後二時ごろ寺にお参りに行き盆踊りを見る。四年に一回盆踊の当番が回ってくるので盆踊りを踊る。この盆踊りは寺に集まっている精霊も一緒に楽しみ踊って帰る。と伝えられている。墓の前での飲食はない。

初盆の家は盆の一週間前から毎晩寺に行ってお経を唱えてもらう。十三日に寺からお札をもらって帰る。お札は家の位牌のそばに置き、十四日墓参りの時墓に持って行く。初盆の経をあげに寺から師匠が来られるので、親戚・知人・隣近所の人たちも訪れ、一緒に経を唱える。親戚などからもらった提灯は家に吊るし、墓にはもっていかない。十四日は初盆の家の人は精霊が付いているので、付いている精霊を洗い流さないため風呂に入らない。

十五日、マキを供えたら風呂に入って良いので、午後三時過ぎ風呂に入り、精霊を洗い離し精霊を墓に連れていく。精霊は寺に帰る。この日、精霊は帰っているの、墓に行った後、位牌などは元に戻す。

十六日午後から初盆の家族(身内)と寺の役員・集落の役員だけが寺の中で、初盆でもらった札を持って行き、初盆経をあげてもらい初盆の供養をする。昨夜の内に寺に集まっている精霊を送る。精霊は寺から墓へ帰る。その後、境内で盆踊が始まる。



写真7-1 ユリの根(舟)

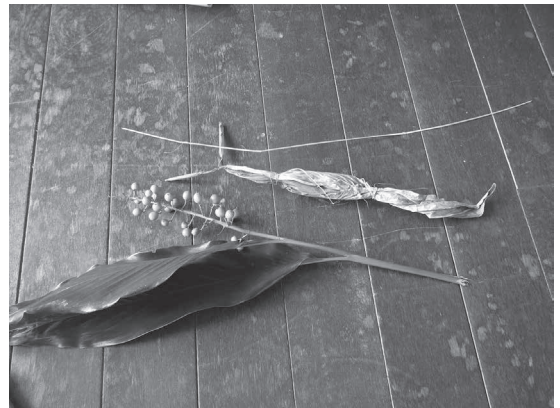


写真6-1 マキとマキの葉、ミチシバ



写真7-2 笹舟とダンチクの葉



写真6-2 ダンゴ(舟とカイ)

(三)「きのぎの」を踊っている集落の盆行事

1 中西目(小田・前之原)

小田集落にある八幡神社境内の左側の一段高い所には、昔「隆泉寺」という寺があった。

十三日は墓掃除をして仏壇から床の間に位牌・盆用の線香立て・ローソク立て・花立てを床の前に台を設えてその上にのせる。位牌は昔は全て移していたが、今は二つだけ移す。供え物は位牌を下した所と元の仏壇のところ(位牌のあった所)・外の精霊棚の所の三ヶ所に供える。精霊棚のことをミズダナ(水棚)という。ミズダナは縁側の外に竹四本を組んで二段の棚をつけ、前を開け三方をソテツの葉で囲む。棚の下にはソーハギ・シキミと水を入れたバケツと柄杓を置く。棚の上にはバシヨウの葉を敷き、その上にバシヨウの幹を小さく刻んだものを重箱に入れて供える。ミズダナには無縁の精霊が家の中に入っていないように室内の供え物と同じものを供える。来客は家に入る前に、棚の下に置いてあるソーハギとシキミをちぎって重箱の中に入れ水をかけて拌む。無縁仏のことは「ウエンムエンのシヨウリヨウ(有縁無縁の精霊)」という。精霊への供え物は十三日の夕方から膳組して供える。

十四日早朝に、お粥・お茶を供えるところもある。朝は膳組みのご飯・ソーメン・煮物・生豆腐(刺身代わり)など四品を供える。ナカール(十時頃)は自分の家にあるカライモなどを供える。昼は午前中に、搗いた白餅を供える。昔はササゲ餅を搗いて供えた。三時頃サトウキビ・落花生など自分の家でとれたものを供える。晩御飯は特には供えない。

十五日、朝は自分たちが食べるものと同じものを供え、ナカールは家にあるものを供える。昼はダゴ(鼻つまみダゴ・棒状のダゴ一つづつを御膳の上のせる)を供える。このダゴは後でマキを供える時さげる。三時ごろ(精霊が帰る時)、マキを三ヶ所(位牌の所・仏壇の所・外の精霊棚の所)に供える。このマキは杖の代わりになる。また、墓に持って行き供える。墓にはマキとアラネ(米を焼酎で洗ったもの)を茶碗や皿に入れて持って行き、マキは墓石の頭に乗せ、アラネは墓石のくぼみのところに供え上から水をかける。

十六日、朝はユリの根を三ヶ所(マキを供えるところと同じところ)に一枚(二片)ずつ供える。このユリの根は舟になるといふ。墓にもユリの根を持って行く。墓から帰ったら精進上げをする。これは、臭いものを食べる。例えば

魚を焼いて食べるなど。話者の所では朝食の時に魚を食べてから墓に行く。精進上げはユリの根を供えることで済んでいるという。

午後から本国寺に盆踊に行く。寺で、初盆の送りをしてから盆踊は始まる。初盆の事をハツボンまたはニイジヨウロウという。ニイジヨウロウ迎えは七日から十二日寺に行く。七日の初日に提灯と香典を持ち、経をあげてもらいに行き、十二日に寺から札をもらう。この間、毎日寺に経をあげてもらいに行くが、都合の良い日だけ行ってもよい。十四日に師匠がニイジヨウロウの家を説経に来る。昔は七夕(七日)が過ぎて亡くなったときは、埋葬するときにすり鉢をお棺の上に被せて埋葬した。

2 下西目

十三日、墓掃除には行くが精霊を迎えには行かない。精霊は十三日の夜中に帰ってくるので精霊棚を作り、その側の雨戸を少し開けておく。最近では精霊棚を作らないので、縁側にバシヨウの葉を敷きその上にバシヨウの幹を細かく刻んで皿に乗せたものを置く。盆花(シキミ・ソーハギ)も供え時々水をかける。バシヨウの幹を刻んだものを墓に撒く。米とシキミも持っていき供える。盆の供え物は二十日までする。

仏壇の前下に位牌を真ん中に置いて花(シキミ・ソーハギ)を供え、一日五回の(朝・十時・昼・三時・夜)供え物をする。位牌の前や周りにはお菓子・果物などの供え物をする。昔は位牌の数だけ一日五回の料理の膳を供えていた。今は一つ膳を供える。マキは仏壇(位牌のところ)と墓に供える。

十三日は墓に行かない。十四日・十五日のいずれかに墓参りする。ツノマキやマキを作り、仏壇にいったん供えそれを墓に持っていき供える。供えたマキは墓で食べるか食べながら帰る。舟(ユリの根、笹舟)を作って供える。精霊は舟に乗って帰るといわれている。

盆の精霊送りは長男の家(実家)で十五日で盆は終わる。初盆に寺で法要してもらったときは、心づくし(餅・野菜・米・マキなど)を持って行く。七夕(七日)の夜から十二日夕方まで経をあげてもらい、十三日の朝、墓参りをして寺で札をもらい十六日に寺に戻す。これは、その家の長男が主として行方。親戚などからももらった提灯は家に飾るだけで墓にはもっていかない。

盆踊のシクミは公民館で行い、初盆の人は本国寺で初盆の供養をする。初盆でないところは「きのぎの」を踊り公民館に戻り庭崩しをして直会をする。

(四)「つんたん拍子」を踊っている集落の盆行事

1 平野

お盆は十三日から十五日。精霊棚は縁側の外に竹四本を組み、三方向をソテツの葉で囲み壁を作る。

十三日、墓の掃除をする。仏壇から位牌をカミンザに移す。夕方、墓に行く。「じい・ばあ」が帰って来ると言った。自分の家の墓石の所を全部回って「〇〇ばあ、行くど、家に行くど、行くか」と声をかけながら線香・焼酎を供えて「行こうか」とさらに声掛けして連れて帰る。

供え物は煮物、新米のご飯、豆(金時豆)、スザ(酢の物)、お茶、焼酎などで線香とローソクはできるだけ絶やさないようにする。

十四日客が来る。朝・昼・晩の三食、ご飯・味噌汁・ソーメンなどを供える。十五日精霊が帰るので夕方、早めに供え物をする。煮物、ダンゴ(白く丸い平べったいダンゴと棒状のダンゴ)、マキ(二・三本束ねる)。墓に行くとき「戻らんばあ・なあ」ともう、いかなばあ」と声掛けをする。今もこのように声掛けをする。ダンゴを持って墓参りする。墓へ行くとき家長は線香・ローソクを持ち、祖母か母が膳を持ち線香を供えながら墓を回る。膳には焼酎・米・丸い団子・棒状のダンゴをのせてある。

十六日精霊は本国寺で盆踊りを見て本国寺から皆で帰る。

帰るときは自宅から各自の墓へ帰り、さらに本国寺に帰り盆踊りを見てあの世へ帰る。

初盆を迎えるところは初日、経を唱えてあの世から本国寺に来て各自の墓へ十三日に帰り自宅へ帰る。寺へ提灯を持って行く。寺から十二日にお札をもらう。この札は十三日墓に迎えに行くとき持っていく墓に供え、自宅に供えて十六日に墓に連れて行くとき持っていく供え、後日墓で焼く。

初盆経をあげに寺から師匠が来る。また、門徒のところには盆経をあげに寺からくる。

親戚などからもらった提灯は仏壇を遷したところに吊り下げる。墓にはもっていない。もらった提灯は三つくらい残し次の年にも飾る。その他の提灯は

全て処分する。

帰るときは自宅から墓へ帰り本国寺へ行き、盆踊りを見てあの世へ帰る。

2 田代

お盆は十三日から十五日。

十三日、神棚から位牌を下におろす。床の前に三段の棚を組む。一段目に膳二つと魚二匹一对を腹合わせにして皿にのせ供える。魚はお盆であるから青魚(アジ・サバなど)を供える。二段目には位牌と花(榊・菊など)、米、塩、大豆。三段目は写真、果物、野菜(根物・葉物・実の物を基本として)を供える。

精霊の迎えには主人が一人で行く。夕方、夕食として刺身・おかず・ご飯・味噌汁・煮しめなど五品目、自分たちと同じものでコンニャク・豆腐・豆を中心に供える。

十四日、朝・昼・晩と五品目になるように家族と同じようなものを供える。

十五日朝・昼は家族と同じようなものを供える。午後五時頃を目途に墓に送る。自分たちの墓には焼酎と焼酎で洗った米を供える。柄杓で墓石と花に水をつける。親戚の墓には送りの線香を持って墓参りする。送りは位牌の前で「もう、行こう」と心の中で言い、家族も同様に「今から送るから」ということでお参りして墓に送っていく。

精霊の迎えには主人が一人で行く。送りは位牌の前で「もう、行こう」と心の中で言い、家族も同様に「今から送るから」ということでお参りして墓に送っていく。

3 崎原

七夕(七日)から寺の師匠さんは経を唱え始める。十三日から十五日がお盆である。

十二日までに墓掃除をする。十三日に迎えて十五日送るまでは掃き掃除をするなど言われている。昔は盆には帰るところのない人の場所(精霊棚・ミズダナ)を外に作っていた。師匠さんもこれがあるところは玄関から上がらず縁側から上がっていた。盆の花はシキミ・ソーハギで、仏壇・墓・帰るところのない人のところ(精霊棚・ミズダナ)に飾る。

十三日夜遅く家にたどり着く。午前中、神棚の位牌を全部床の間にパシヨウ

の葉を敷いてのせる。縁側の内側にも提灯一つ、線香・ローソク・果物・お菓子・白ごはん・お茶などをお盆にのせて置く。これは帰る家のない人のためである。夕方、自分たちの食事前に（七時頃）仏さん（位牌）のところに白ごはん・お茶を二膳、縁側に一膳供え、お題目を唱える。提灯に火を灯す。墓には行かない。

十四日、朝はご飯・味噌汁・煮物・和え物・刺身代わりの生豆腐を薄く切って供える。ナカール（十時のおやつ）は季節の物（スイカ・トウモロコシ・ツノマキ・トコロテンなど）。昼はソーメン・トコロテン。ナカール（三時ごろ）は同じようなものを重ならないように供える。これは、皆があので何と何を食べたという話をするところから、このようにいわれている。夜、餅を搗いて皿に一・二個のせて床の間の位牌のところへ二セット、縁側に一セット供える。自分たちも餅は後で食べる。夜、ご飯を供えた後で自分たちの夕食前に題目「南無妙法蓮華経」を唱える。

十五日朝ご飯は味噌汁・煮物など。十四日と違うものを供える。夏のチンチクタケノコを煮るものを使う。ナカール（十時頃）はお菓子。昼はカライモを煮て供える。ナカール（三時頃）は午前中にマキを作るのでマキを、また、この時、舟の形（楕円形にして中に少し窪みをつける）、櫛に見立てた細長い棒状のダンゴを各一つずつ一緒に床の間に二セット、縁側に一セット供える。五時頃、マキを持って「墓参りに行くか」と精霊さんに声掛けして墓に行く。この時、米・焼酎・線香・ローソクを持って行き、送り火として線香・ローソクは多めに焚く。親戚も来て送る。家に帰り題目を唱えて食事をする。（牧島）

三 西之本国寺盆踊の音楽

(一) はじめに

本節の一「西之本国寺盆踊の概要」で述べたように、西之の伝統的な盆踊は近年は、東は平野・田代（下田代を含む）・本村（崎原を含む）の三地区、西は砂坂・上西目（野尻・木原）・中西目（小田・前之原）・下西目の四地区、合計七地区で伝承されてきた。東三地区は「つんたん拍子」、西四地区のうち砂坂と上西目は「たけなが」、中西目と下西目は「きのぎの」と呼ばれる。二つの集落が合同でワンチームとなる場合もあるので、集落ではなく地区と表記する。

いずれの地区も七曲からなる組踊である。短いものは一分足らず、長いものでは十分以上の曲を歌いながら踊る。踊子の人数は年によっても違いがあるが、だいたい十数人である。曲調・踊・ガク（楽器）・歌詞・衣装（踊り子は覆面とユカタ、ガクは花笠）など細部に違いはあるが、全体としてはほぼ同じで、西之はひとつの様式の中にある。

音楽の要素としてはリズム（拍節）・フシまわし（旋律）・音階・音域・ガク（楽器）などさまざまな面があるが、ここではいくつかの曲を採譜し、それをもとに歌詞との関係や旋律構成などを中心に見ることにする。いくつか書いたのは、すべてを採譜することができなかったからだ。

西之の場合、踊子全員が踊りつつ歌うが、曲によって歌唱の不安定な部分（歌唱が不揃いや曖昧、あるいは弱音で歌うために旋律が聞こえてこないなど）があるのは、どの地区の郷土芸能でもしばしばおきることである。一度の上演に際しては稽古、シクミ、本番、クズシと何度もくり返すのだが、曖昧な部分は依然として曖昧なままである。つまり踊子たちは、曖昧な部分を補正できないまま（確信をもてないまま）歌っているという状態にある。

ガク（太鼓・カネ）のリズムと歌唱は本来は一体のもので、奏打と歌唱はお互いに聞き合いながら演じるわけだが、どこで合わせるかが不明瞭の場合がある。特に歌い始めは音を引き延ばして歌う。歌唱とガクは阿吽の呼吸でタイミングを合わせるわけだが、しばしばズレが生じる。曲本来のズレなのか、伝承の曖昧さによるのか、判断がつかない場合がある。六十歳代以上の伝承者によると、自分たちが四十年ほど前に初めて参加したときよりも、テンポは明らかに速めになっているという。

以下に掲げる採譜は、多かれ少なかれそういう曖昧さを補いつつなされたものである。歌われた通りの採譜ではなく、どのように歌う（叩く）つもりだったかを類推しながら採譜するわけだが、類推できない場合もしばしばある。かくして歌唱とリズム（奏打）の関係にはほとんど踏み込むことができなかった。実際に歌われるキーで採譜することを原則としたが、調号が多すぎる場合は、読みやすくするために調号の少ない調に移調して示した。当然のことだが、日本の民謡や郷土芸能の歌唱を五線譜を用いて採譜することには無理がある。五線譜は十二の音しか示すことができず、微妙な音程は無視せざるを得ない。特に洋楽にては長調と短調の違いは、ある音が半音違う（フラット記号を付け

るか付けないか) ことよって生ずるのだが、その部分がどちらとも聞こえる場合がある。というよりそれが日本の民俗音楽の特徴でもある。洋楽のモノサシでは測れない。したがって採譜をピアノで弾いたり楽譜通り歌ったりしても、もとの姿を再現できるわけではない。採譜はあくまで音楽構造を分析するための手段であって、これをもって歌唱の記録や保存とすることはできない。口頭伝承を基本とする芸能は、耳で聞いて声でマネをして覚えるのである。

音階や音構造を説明するにあたって、律旋法とか呂旋法という伝統的な分類や、テトラコルド理論に基づく音階説明の方法もあるが、なるべく専門的な表現を避け、わかりやすくすることを心がけた。本稿がさらなる精密な音楽構造の解明への初めの足がかりとなれば幸いである。

東地区の「つんたん拍子」、西地区の「たけなが」、同じ西地区の「きのぎの」の順に見ていく。その前に、採譜するにあたって採用した基本方針を掲げておく。

(一) 採譜にあたって

民謡や民俗芸能の五線譜による正確な採譜は不可能だが、音楽の骨格ないしはアウトラインを見る上では一定の有効性はある。ここでは音楽のフシまわしのおおよそを把握することを目的として採譜した。歌唱不安定による採譜の難しい曲は除いた。採譜にあたって方針とした事項を箇条書きにて示す。

①旋律線のおおよそを見ることを目的として採譜した。手書きのまま掲載する。これらの採譜をもって音楽のさまざまな要素の分析に供するものではない。歌唱の不揃いや曖昧な部分は想像して補った。採譜の対象とした録音のサンプルは記録状態のよい近年の録画から、歌唱の安定しているものを選んだ。

②歌詞のうち格助詞「は」「わ」と表記した。

③原則として歌唱のままのキー(調)で採譜したが、調号は四つまでとし、それ以上の場合にはわかりにくくなるので、音域の近い、調号の少ないキーに移調して示した。その場合は出発音を冒頭に記す。

④すべて四分の二拍子で採譜した(拍子記号は記載せず)。つまり一小節に四分音符が二つ入る。およそのテンポはBPM(一分間の四分音符の数)で示した。普通のマーチがだいたい百から百五ぐらいである。八十はかなり遅いと感ずる。

⑤ガク(地区によって編成は少し異なるが)どうしの掛け合いはおおむね単純なので採譜からはずした。太鼓による基本的な打拍は各拍の上に×で示した。採譜する場合、これが助けになった。

⑥歌詞または旋律のフレーズの切れ目にてガクが連打される場合は「×××…」で示した。

⑦歌い始めの前に、ガクの阿吽の呼吸による「アーヒーヨー」などのかけ声と奏打がしばらくなされるが、その部分は採譜対象としない。曲の途中でも、微妙なインターバルの中でガクによる掛け声が出るが、これも楽譜には正確には示していない。

⑧歌い始めは多くの場合、一音を長く引き延ばして歌われ、拍が不明確となるので、採譜はしにくい。その点を考慮して読むべきである。

⑨三連符はしばしば出てくるが、煩雑を避けるために音符の上に3の数字は入れていない。一拍または半拍の中に音符が三つある場合は三連符である。

⑩旋律フレーズの最後に母音とともに奏打が強調される場合がある。音符の上に>を付した。

(三) つんたん拍子

東三地区(平野・田代・本村)の盆踊はともに「つんたん拍子」と呼ばれる。ガクによる奏打がそのように聞こえることからきた呼称との地元の解釈がある。いずれも小太鼓二とカネ一で、かつて大太鼓があったかどうかは伝わらないが、上西目で大太鼓が使われているところから、大太鼓があった可能性はあり、その場合の大太鼓と小太鼓の掛け合いのリズムを「つんたん」と表現したのかもしれない。

いずれも入場してからガクを中にして輪を作るが、並びかたは若干違う。入退場に笛が付き、踊の時は笛は吹かない(笛担当者は踊り子の一人となる)。本村の笛は今録音テープを流している。本村以外は小中学校で使われるリコーダーで代用している。本来の笛は横笛だったか縦笛だったかもはっきりしない。自分たちでかつて手作りした縦笛も残ってはいるが、実際にはほとんど使用されない。

まず曲目構成を地区別に示しておく。採譜の対象とした録画の収録年と入退場の形も示す。

平野 サンプルは平成二十八年の盆踊実況録画を用いた。本國寺本堂の右外脇に整列。進行方向（境内）に向かって左からカネ・小太鼓・小太鼓・笛が横に並び、笛の後ろに踊子が続く。笛を吹きつつ、ガクの奏打のみで入場し、左まわり（逆時計）に円弧を描く。踊子は十五人（笛を含む）。ガクは横隊のまま、最左のカネを扇の要とする形で動く。入場時は踊らず歩くだけ。笛が本國寺正面に来たところで停止、外輪を整える。笛担当は笛を後ろ腰に差し、退場時まで笛は吹かない。全員がその位置で本堂に向かって一礼。ガク三人は本堂に対して縦列になっている。一礼後、ガクはまわれ左をして横隊となり、踊子は輪の内側に向きなおる。そして①が始まる。ガク三人は輪の中で時計と逆方向にゆっくりまわる。

②より輪の中の小太鼓一・カネ一と小太鼓一は対面する形になる。いったんしゃがみ、立ち上がるところから開始。お互いに入れ替わったり、飛び跳ねたり、しゃがんだり、交互に打ったりなどするが、位置はほとんど変わらず、常に輪の中央付近にいる。曲ごとにガクはしゃがみ込み、奏打しつつ掛け声とともに立ち上がり、これを合図として次の踊が始まる。

⑦でガクは再び①と同じ横隊となる（輪の中を移動して笛担当の踊子の横に付き、笛担当は笛を右手に持つ）。⑦が終わると入場と同じ形になって前進して退場する。曲によって一回踊る場合と二回踊る場合がある。二回目を「かえし」という。以上は基本的に田代も本村も同じだが、本村は右まわり。各曲の間にはインターバルがある。以下に示す演奏時間は歌唱が始まる前のかけ声やガクの前奏は含めず、歌唱時間のみを示す。二回踊る場合でも一回目の時間である。手に何も持たない手踊と、手に開いた扇を持つ扇踊が交代に踊られる。最後は扇を閉じて手に持つ。

①さても見事な*	手踊1回	1分55秒
②これのお寺*	手踊2回	2分22秒
③阿波の徳島	扇踊2回	4分00秒
④二九の十八	手踊2回	1分50秒
⑤墨と硯*	扇踊2回	2分20秒
⑥美濃とおおみの*	手踊2回	1分46秒
⑦かごで妻もち*	閉扇踊1回	0分24秒

田代 サンプルは平成二十九年の盆踊実況録画。ガク三人（笛は踊子としてカウント）、踊子十二人。進行方向に向かって左からカネ・小太鼓・小太鼓・笛が横隊で入場。笛の後ろに踊子が続く。左まわり（逆時計）に入場し終わると、その位置で本堂に向く。笛は後ろ腰に差し。以上は平野と同じで、そのあと平野とほぼ同じだが、ここでは②以下必ず二回踊るわけではない。

①さても見事な*	手踊1回	1分28秒
②これのお寺*	手踊2回	1分20秒
③墨と硯*	扇踊1回	1分19秒
④美濃とおおみの*	手踊2回	1分47秒
⑤うたせかねたる	扇踊1回	3分18秒
⑥春は花見に	手踊1回	1分52秒
⑦かごで妻もち*	閉扇踊1回	0分28秒

本村 本村と崎原の合同チームで踊る。サンプルは平成三十年の盆踊実況録画。ガク三人、踊子十二人。進行方向に向かって右からカネ・小太鼓・小太鼓・踊子先頭の四人横隊。踊子先頭の後ろに踊子十一名が続く。笛は録音テープを再生。入場すると、右まわり（時計まわり）に円を描く。平野・田代と逆まわりである。入場し終わるとガク三人は、境内入り口近くで本堂に向かって横隊となる。一礼してガクの掛け声にて踊開始。

①おやつ参り*	手踊1回	2分25秒
②これのお寺*	手踊2回	1分30秒
③墨と硯*	扇踊2回	2分30秒
④美濃のおおみの*	手踊2回	1分52秒
⑤われからぬらす	扇踊2回	3分11秒
⑥春は花見に	手踊2回	2分0秒
⑦かごで妻もち*	閉扇踊1回	0分31秒

以上の各地区七曲のうち、題名に*印を付けた五曲は三地区共通を意味する。本村の①「おやつ参り」は、平野①と田代①の「さても見事な」と同じである。二地区共通としては平野③「阿波の徳島」と田代⑤「うたせかねたる」で、歌詞は違うものの、旋律は基本的に同じである。同じ物語を歌った歌詞の

別の部分である可能性もあるが、同じ旋律にて何種類かの歌詞が歌われたことを思わせる。田代⑥と本村⑥は「春は花見に」で共通。平野だけの曲目は④「二九の十八」、本村だけの曲目は⑤「われからぬらす」である。田代だけの曲はない。三地区ともに冒頭①はデハ（入場）、最後の⑦は退場曲とされるもの、それらを歌い踊りながら入退場するわけではなく、入退場は笛付きの奏楽だけでなされている。以下各曲について、採譜をもとに歌詞と旋律の全体構成を中心に、平野の歌唱から見ていく。

1 さても見事な

楽譜1は平野①「さても見事な」である。田代も同じ旋律で同じ歌詞だが、次掲の本村は旋律は基本的に同じであるものの歌詞（タイトルは「おやつ参り」）が違っている。三地区ともに入場して最初に踊られる。左掲のように七七七七で旋律の一節をなし、これが四回くり返される。各節最後に「アリアセイ、コリヤセイ」のハヤシがはいり、節の区切りを明瞭にしている。もの悲しげなしみじみした旋律がゆっくりとした歩調に合わせて歌われる。七七調連続の口説の形で歌われた長い物語があり、その一部が切り取られたのであろうか。

各節の終りの音は第三節までは変口音だが、最終節（第四節）の最後はハ音になっている。これが曲の最終音である。田代は前述のように平野と歌詞・旋律ともにほとんど同じで、田代では第三節までが歌われ、終わりの音も前二節と同じで、まだ続きがあるという感じである。第四節があつたのだが省略されているのであろう。

平野の「さても見事な」（楽譜1）

- (一) さても見事な、おつずの馬よ、
下わしんじく、からしまのふとん、アリアセイコリヤセイ
- (二) ふとんばじよして、こしよしゆをのせて、
様わのぼるか、わしや今くだる、アリアセイコリヤセイ
- (三) 文をやらねど、ことづけしよえど、
筆にこと欠く、硯すみやもたん、アリアセイコリヤセイ
- (四) 行けば山の中、四五軒目の茶屋に、

寄りてたもれよ、必ずたのむ

2 おやつ参り

楽譜2は本村の「おやつ参り」である。平野・田代と基本的には同じ旋律だが、洋楽でいう長調と短調の間で揺れ動いている。楽譜2では口音と変口音が入れ混じっていることがそれを示す。口音は長調風の明るい感じがし、変口音は短調風の寂しい感じがする。その微妙な陰影の揺れが実は郷土芸能の歌謡の素晴らしさでもある。歌詞の背景は前掲と同じ物語と思われる。左記の五節が歌われる。

本村の「おやつ参り」（楽譜2）

- (一) おやつ参りの、道づればなし、
聞けばこの頃、えのもとえんに、
- (二) うどんあの子が、嫁入りすると、
うが誠か、ふびんなことよ、
- (三) 手箱針箱、ぬるえのうごき、
とうちやしちやごちや、ごちらいければ、
- (四) かがみ立てまで、かいととのえて、
ひらやしゅうとの、ふとんやよぎや、
- (五) かやや枕や、しめてくりよして、となりきんじん、
ジロベエがおてうちがいのお手枕、じつそうじゃえ

楽譜2には第一節と第五節を示す。第一節から第五節まで同じ旋律の繰り返しで、旋律も前述した平野・田代と基本的に同じだが、第五節は旋律線が大きく変化し、詞形も異なり、最後に「じつそうじゃえ」という句も加わっている。前述したように、ある物語を歌い込んだ長大な七七調連続の口説歌があつた。平野はその中の数節を選びとり、最終節の最後の音を本来の終止音で終わらせた。田代では同じものを伝承していたが、最後の節（四）を失った形である。本村は平野とは別の歌詞を伝承し、最終節（五）の後半にて、曲全体の結びにふさわしい終り方も伝承した。「じつそうじゃえ」はおそらく、島外の近世的な歌謡（盆踊とは限らず）に、曲の終わりを意味する語句として付加され

ているものがあるであろう。つまり最後の節にあたって歌詞も旋律も最後にふさわしい内容を持ち、本村はそれを伝承していると思われることができる。

3 これのお寺

三地区ともに二曲目は「これのお寺」が歌われる。内容は庭ほめ(寺ほめ)である。秋の願成就祭に奉納される大踊(太鼓踊)でも「この寺」とか「この庭」という曲(西之の場合「国土安穩」)が初めに踊られるが、それと同質である。西之表市横山盆踊でも出場して最初に「めでためだの御殿屋敷…」で始まる屋敷ほめが歌われる。盆踊が寺社や領主の屋敷をまわって踊られたことを物語っているが、西の四地区はいずれもこれを欠いている。西では各所をまわって踊るといふ習慣がはるか以前に、おそらく明治初期の廃仏によって消えたのであろう。ではなぜ東に残っているだろうか。西之の本村には藩政時代は西之村の役所(仮屋)や、西之村全域を統括する本因寺があり、廃仏後の盆踊復活の時、本因寺に近い東地区(平野・田代・本村)では本因寺跡への奉納が回復した。そのことによつて、この曲が残つたのではないか。

楽譜3は平野の歌唱だが、田代と本村も歌詞・旋律ともにほぼ同様である。次の歌詞が歌われている。歌形は七七と七五が混在している。旋律形をabc dで示す。

平野の「これのお寺」(楽譜3)

- (一) これのお寺に 参りてみれば おもしろや a
(二) さても見事な お寺のおずし b
(三) 四方(しほう)に見えし いず見れば c
(四) 心わ波の 田子の浦 c
(五) 立つ波の ごよわながけれ よわよけれ d

しっとりしたゆるやかな(一)の旋律aに対し、(二)は対照的にシラビツクの旋律b、そして(三)と(四)は同じ旋律cをくり返す。(五)で詞形は変化、旋律dもそれまでにはない跳躍が出るなどして、終結部であることが明確である。

旋律は中域のト音を中心として、これより五度上の二音と四度下の二音との

間というオクターブ内で動いている。最終音はト音。これは謡曲の歌い方の影響が強いことを意味すると考えてよい。ただしあまり謡曲風に聞こえないのは、中心のト音のすぐ上の音にフラットが付いて変イとなり、ト音との間が半音になっていること、下の二音のすぐ上の音にフラットがついて変ホになり、二音との間が半音になっているためである。江戸時代の都市部で発達した都節音階の影響を受けてできた旋律である。

4 阿波の徳島

この曲は平野だけで歌われる(楽譜4)。有名な「巡礼お鶴」の話で、江戸後半期、人形浄瑠璃に仕組まれ、歌舞伎でも上演されて大ヒットした。その物語が七七または七五を連ねて次のように歌われる。「アーヒーヤー」はガクがかかるハヤシである。これ以外のごく短い「ソレ」などの旋律フレーズの合間にかかる掛け声は省略した。四分ほどを要するが、これが繰り返されるので全体では八分以上もかかる、西之全体の盆踊の中でも長大な曲のひとつである。田代の「うたせかねたる」も同系の旋律である。

平野の「阿波の徳島」(楽譜4)

- (一) 阿波の徳島十郎兵衛娘 アーヒーヤー a'
(二) 親に会うちゆうて巡礼姿 アーヒーヤー a
(三) 父によ母よと尋ね行くアーヒーヤー a
(四) 日に行きくれて野に寝たり 人の軒端で夜を明かす B
(五) どの宿でも泊めてはくれぬ アーヒーヤー a
(六) 幾夜幾日尋ねても 親のおりさきや知れもせず B
(七) さてや悲しや嘆き沈むアーヒーヤー a
(八) 母のお弓にちよつと会いてさて我が子やなつかしや B
(九) だいつ抱かれつ親子のなげきアーヒーヤー a
(十) これほど親に慕う子を b'
(十一) 母といわずに別れの悲しさよアーヒーヤー a

冒頭「阿波の徳島…」の旋律はこただけで出る、つまり歌い始めにふさわしい効果をねらって引き延ばされた旋律で、(二)を本来の形(a)とみてaと

した。歌詞の七七または七五を一節として旋律aが繰り返される間に、七五七五を一節とする旋律Bが挿入される。a（小文字）が七七（または七五）であるのに対し、Bは七五七五なので大文字とした。

全体を見るとaとB（b）の交代で構成されていることがはっきりわかる。aのあとには必ずハヤシ「アーヒーヤー」がかけられている。

Bは変化をつけるために対置された感じである。Bは四回出現するが、四回目の冒頭はそれまでのBの冒頭と同じ旋律なので、これがBであることがわかる。しかしBの半分なのでbとした。歌詞はまだまだ続いていたと思われる。

旋律の中心はホ音である。基本的にはこれを中心に、四度下の口音と五度上の口音とのオクターブの中で動いている。aの前半はホ音の近辺から下方への動き、後半は上の口音への上行が特徴である。これを組み合わせたらaが旋律全体の中心フレーズである。長調風に聞こえる。

5 二九の十八

この曲も平野だけの曲である（楽譜5）。七五を一節として五節でできている。歌詞と旋律形をともに示す。「ニク」「シロク」「ゴロク」などのククが言葉遊び風に使われている。前掲「阿波の徳島」のような長大な口説歌の途中に離縁の話があり、それにちなむ歌詞が旋律を違えて挿入されたかのような感じがある。

平野の「二九の十八」（楽譜5）

- (一) 二九の十八で 呼ばれきてアーヒーヤー a'
- (二) 四六二十四で 子ができて b
- (三) 五六三十で いでさるとアーヒーヤー a
- (四) ぜひにいでなら いねもしょうが b
- (五) もとの十八 してもどせ アーヒーヤー a

冒頭は高い音域の長い音符でゆっくりと歌い出されるが、この原型は（三）を歌うaである。したがって冒頭をa'とした。bもaと似たような高域から低域への下降音型を中心とする。全体はaとbが交代で二回歌われ、最後にaが歌われているが、このあとさらにbが続き、さらにaとbが何度も繰り返され

たのではないか。aの最後にハヤシ「アーヒーヤー」が必ず付いている。

6 墨と硯わ

三地区ともに歌われ、旋律はほとんど変わらない。平野は四曲目、田代と本村では三曲目に歌われる。楽譜6に田代の歌唱を掲げる。歌詞は浄瑠璃の「曾根崎心中」を口説歌として歌い込んだものである。七五の連続で、最初の七五七五がそれぞれ四つの旋律形(abc)で歌われ、これがひとつの節となつて三回くり返されている。

田代の「墨と硯わ」（楽譜6）

- (一) 墨と硯わ a''
- (二) ふたおもい アーヒーヤー b
- (三) 我わこの世に c
- (四) 捨てられとう アーヒーヤー d
- (五) せめてわ胸の a
- (六) 苦しさを アーヒーヤー b
- (七) 徳兵衛が身の c'
- (八) 悲しさよ アーヒーヤー d'
- (九) お初おさきの a'
- (十) 二人連れ アーヒーヤー b
- (十一) わたしが原の c''
- (十二) 道のしも アーヒーヤー d''

冒頭（一）のゆっくりした旋律は（五）aの変形と見ていいが、変形の度合いが大きいのでa'とした。（九）は（五）aを少し変化させただけなのでa'とした。bは三回ともまったく変わらない。aとbが旋律の中心フレーズである。cとdは三回ともに変形する。音域は非常に高く、かなり技巧の凝らされた、長調風の旋律である。

7 美濃とおみの

これも三地区で歌われる。平野では六曲目、田代と本村は四曲目に歌われる。

楽譜7に平野の歌唱を示す。語句の意味は取りにくく、内容は美濃と近江にかけた恋物語のようだが、原話はよくわからない。詞はもと七七調か七五調の連続だったと思われるが、かなり崩れている。大きな旋律フレーズの繰り返しは見つけることができないが、小さな旋律句は何度も出る。それを示すために、語句のまとまりを分断してしまおうが、次のように分けてみた。

平野の「美濃とおみの」(楽譜7)

- (一) 美濃とおみの x
- (二) 寝物語のおわき アーヒーヤー a
- (三) ももよ寝ばなし恋 b
- (四) ばなし c
- (五) やほまくつまろに身わ b
- (六) むれかかろ c'
- (七) ちろじろをふる y
- (八) ほそ雪 c''
- (九) 月にもゆこえ a'
- (十) 闇にもゆこえ a''
- (十一) 闇にほつほつ b'
- (十二) 九十やくよいのやく b
- (十三) 物語り c'''
- (十四) おせいともまいとも a'''
- (十五) よおい物語り アーヒーヤー c''''

冒頭(一)「美濃とおみの」と、中ほど(七)の「ちろじろをふる」の旋律は似たような形がほかに出てこない。それぞれxとyとした。aは四回、bも四回、cは五回、小さく変形されつつ出てくる。冒頭のゆっくりした歌い出し(一) xのあと、a b c b c' c''というb cがくり返される形、そのあとy c'を挟んで後半はa' a'' b' b'' c'''というaとbがそれぞれ二回ずつ連続する形、そして最後はa'' c'' c'''で締めくくられる。cにはフレーズやフレーズの前半のまとまりを終わらせる働きがあるようだ。旋律全体は(一)～(六)の前半、(七)～(十三)の後半、そして最後を締めくくる(十四)～(十五)の三つ

に分けられるようだ。

別の見方をすると、a b cの三つを比べた時、全体ではaとbが中心であることは明瞭だが、bはほとんど変化せず同一性が強い。旋律の中心フレーズは出現するたびに小さく変化するaと、ほとんど変化しないbの組み合わせといえよう。もともとがかなり技巧的な旋律である上に、伝承の中での変化が積み重ねられた結果であろうか。音調は明確な短調系である。

8 うたせかねたる

田代の五曲目でのみ歌われる。楽譜8に採譜したが「すきまの風もおし」の「すきま」のあたりの音程と言葉がよく聞き取れず、想像してこのように採譜した。平野の「阿波の徳島」と同系の旋律である。同じ曲に違う歌詞を歌い込んだとも考えられるが、同じ物語から取られた別の歌詞かもしれない。詞形は七五が二回続いたあと不定になりつつもかろうじて七五調が続く。意味は取りにくく、語句に脱落があるかもしれない。傍線部はまったく同じ旋律フレーズであることを示す。

田代の「うたせかねたる」(楽譜8)

- (一) うたせかねたる なお姫よ アーヒーヤー a'
- (二) その露草 振り分けて アーヒーヤー a
- (三) 大阪山に たずねわけいり たまいしが B
- (四) いにしえわ にしきのひとね アーヒーヤー a
- (五) あやのきんこそでかなきん 身にまとい a
- (六) しょうじにたいまい 戸にすいしよアーヒーヤー a
- (七) すきまの風もおしが 今は木の葉の つづりさす B
- (八) お虫のね ねをくらべ アーヒーヤー a
- (九) 鳴きあかさこそ どおりなりアーヒーヤー a

旋律冒頭はほとんど変口の音を引き延ばすだけで拍節はよくわからない。(二)の旋律aを歌い出しにふさわしく引き延ばしたものと判断しa'とした。aのあとに(五)を除いてハヤシが入るのが原則のようだ。全体としてはaを反復するのが基本で、中にBをはさんでいる。長調風旋律である。

9 われからぬらす

本村の五曲目のみで歌われる(楽譜9)。七五の連続を基本とする歌詞が歌われる。始めに七五七五が歌われたあと、(一)(二)(三)の三節がほぼ同じ旋律で歌われる。つまり歌詞が三番あると見なしている。

本村の「われからぬらす」(楽譜9)

われからぬらす たもとから アーヒーヤー

ぬらせぬらしやれ ぬれかかる アーヒーヤー

(一) こいしき人わ 松島の

おしえて申すわ はばかりぞ

はばかりわ お許しよアーヒーヤー

(二) みよおさまりて ゆうらんの

おりをえたるわ 身のほまれ

(三) さらばめでたき 君がよむ

まつに祝いて 鶴がさきの

千代こめたる たけのうら アーヒーヤー

冒頭の「われからぬらす」はゆっくりと保続された中心音変口の連続で歌われ、「たもとから」は高域から低域への下行形。「アーヒーヤー」のあと「ぬらせ」の「ぬ」でいきなり最高音へ音(最高音はそのあとに出る高い変イだが、経過的な出現なのでこの「ぬ」を最高音と見なす)に跳躍し、中心音の変口より上で動く。以下(一)(二)(三)ともにだいたい中心音より上で動き、次第に下行しては高域へ跳躍、そしてゆっくりと下行するという音形の繰り返しでできている。節内にて旋律フレーズの繰り返しは特に見当たらない。平野の「阿波の徳島」とよく似たフレーズがしばしば見られるので、もとは同じ曲節だった可能性はある。

10 春は花見に

田代と本村にてどちらでも六曲目に歌われる。楽譜10は本村の歌唱。歌詞は以下に掲げる。詞形も曲形も定めにくい。歌詞もわかりにくいのが、意味らしき

区切りをメドに一応七つに分けた。明確な旋律の繰り返しがなく、これまでのようなa b cは付しにくい。ただ類似のフレーズはあるので、傍線を引いて示した。(六)の頭の「いえむこむ」は「家の向こう」というような意味だろうか。この旋律は冒頭の引き延ばされた「春わア」の旋律をつづめたものと見てよいだろう。(七)は(五)の繰り返しのような感じがある。洋楽風というと長調の旋律である。

本村の「春は花見に」(楽譜10)

(一) 春わア花見に アーヒーヤー

(二) いれるいれまじよどこえ

(三) さかりの花アじゃえ アーヒーヤー

(四) しぎよくもじょうろうわ

(五) こずまにかのこをつけてや しおらしや アーヒーヤー

(六) いえむこむこのべにはなつむじよろうがさて

(七) しめてつゆるめつ しおらしや アーヒーヤー

11 かごで妻もち

三地区ともに最後の曲(七曲目)として歌われる。楽譜11は平野の歌唱で、他の二地区も歌詞・旋律ともに大差はない。平野はわずか二十四秒、田代は二十八秒、本村は三十一秒。いずれも拍節は明快で、シラビックに(一語ごとに)テンポよく歌われる。洋楽風といえば短調系である。三地区の歌詞を掲げておこう。「かご」は枕崎の鹿籠と、トリカゴとを掛けている。田代の(二)の「かせだ」は鹿籠(枕崎)の北隣である。短い歌ながら、旋律は三地区とも同様だが、歌詞が微妙に異なっている。平野と田代の(一)「妻を持つな」の「な」は否定ではなく、「持つナア」という詠嘆、田代(二)の「育つな」も「育つナア」という詠嘆であろう。いずれの地区も退場の歌とするが、これを歌いながら退場するわけではなく、これを歌い終わってから奏楽のみにて退場する。

平野

(一) かごで妻もつな ヨイヨイ

(二) かごでかわねどもつな ヨイヨイ

(三) 小鳥やかわねど かご恋し イヤー
田代

(一) かごで妻もつな ヨイヨイサー

(二) かせだで育つな

(三) 小鳥やかわねど かご恋し

本村

(一) かごで妻もち

(二) 小鳥や

(三) 小鳥かわねど かご恋し

楽譜11(平野の歌唱)では(一)の後半の旋律は(二)でも踏襲されている。
(三)で少し変化し、その後半でオクターブ跳躍下降する部分は効果的である。
短いながらもよくできた旋律である。短調系である。

(四) たけなが

西地区のうちの砂坂と上西目(野尻・木原)に伝承される盆踊は「たけなが」と呼ばれる。この二地区はもともと一緒に踊っていたので、レパトリイは下掲の七曲を共有する。全体を「たけなが」というのは四曲目の「よよのたけなが」による。上西目は平成二十八年の東京での第六十五回全国民俗芸能大会(於国立オリンピック記念青少年総合センター)に出演するなど、継承意欲は盛んだが、砂坂は近年は盆踊を奉納できない状況になっている。上西目の野尻と木原は隣接する集落で、現在は野尻十三戸(以前は三十戸ほど)、木原八戸(以前は二十戸ほど)。公民館もそれぞれ別にあるが、運動会や岬神社祭礼などの大きな行事は上西目として一緒にしている。

上西目

①かねとりて	行進1回	0分52秒
②むつまじや	手踊2回	2分56秒
③あきのたの	扇踊2回	1分23秒
④よよのたけなが	手踊2回	3分50秒
⑤ちばやふる	扇踊2回	1分31秒

⑥したには 手踊2回 3分40秒
⑦南さがりの 閉扇踊1回 0分46秒

右記のうち⑦のみは中西目・下西目と共通する。採譜対象としてもっとも歌唱の安定した、上西目の東京公演に向けた野尻部落宮農研修センター(通称野尻公民館)庭での平成二十八年九月二十四日の練習映像をサンプルとし、①③④⑤の4曲を採譜した。

この年の上西目の本国寺盆踊では、進行方向に向かって右から踊子先頭・笛・大太鼓・小太鼓の四人が横隊し、笛の後ろにカネ、踊子先頭の後ろに踊子一同が続いて入場(踊子は笛を含め全部で十八人)。ここでの特徴は大太鼓を持つ役が大太鼓を前に持つて後ろ向きに進み、打ち手は両手にバチを持ち、終始少し前傾で打つことである。大太鼓は大踊で使うものより小ぶり、小太鼓はイレコといい大踊でも使用する。衣装は東とほぼ同じ。

場内にはいると横隊のままのガクを中にして、左まわりに踊子が輪を作る。ガクが本堂正面の位置に来たところでストップ。笛担当は笛を後ろ腰にさして、踊子の輪の中に加わる。奏楽に促されて最初の踊①が始まる。以下曲が終わるとガクは輪の中でしゃがみ込み、奏打のあと掛け声に促されて次の踊が始まり、ガクも立ち上がる。最後の⑦が終わると、踊子は扇を腰にさし、奏楽のみにて退場する。

特徴的なことは①と⑦を除く各曲の最初に、音頭取りのソロによる冒頭句の短い詠唱があること。たとえば④は全員の合唱にて保続音を交えたゆっくりした調子で「よーよーおーのー」と歌い出されるが、その直前に音頭取りの独唱にて「よよのたけながわアア」と歯切れよくシラビックに歌われる。これから始まる曲が何であるかを全員に知らしめるとともに、キーの高さをも指示しているであろう。そして全員の合唱が始まる。これは東地区ではなかったことで、中西目・下西目でもなされない。上西目と砂坂だけのやり方である。また前述したように大太鼓を持ち手が腰前に持ち、これを打ち手が両手のバチで打つという形も上西目と砂坂のみである。以上の二つの特徴は西之表市横山の盆踊とも共通している。

1 かねとりて

楽譜12は上西目の最初の曲「かねとりて」である。地元ではこれをデハとするが、入場はガクの奏楽のみで、入場し終わって輪を描き、中にガクがはいり、笛のみが輪に移動する。そして奏楽に合わせて第一曲として以下の歌詞を歌いつつ左まわりに円上をゆっくり行進する。旋律形を考慮して歌詞を示すと左のようになる。全体としてひとつの音の上で語（シラブル）が繰り返される部分が目立つ。(一)「かねとりて」は口音の反復で歌い出され、旋律になつていない。(二)と(三)と(五)はほとんど同じ旋律で、それぞれ最後の母音が強調されている。旋律全体はaとそのわずかな変形で構成されている。

上西目の「かねとりて」(楽譜12)

- (一) かねとりて
 (二) うれしうれなわ むさしのの オオオ a
 (三) しんますやまの わがおもいぐさ アアア a
 (四) しげれ
 (五) しげれしげれよ おさまるみよこそ a'
 (六) めでたけれエエエ

旋律線は前述したようにシラビック(一語一音)に歌われ、歌というより語る感じである。高い口音と低いホ音の五度の間に、ホ音と嬰へ音の二つの音があるだけ。最後に嬰ト音が出るが、これは嬰へ音を強調するために瞬間的に(経過的に)出たものなので、音階構成音と見なさない。明らかに謡曲風の歌唱といえる。(二)と(三)のそれぞれ最後の音はホ音だが、全体の最後の音は嬰へ音である。この曲は横山盆踊の一曲目「たねとりて」と歌詞も旋律も基本的に同じである。

2 あきのたの

楽譜13は上西目の三曲目。歌詞は左記のように歌われている。冒頭は音頭取りによるソロで「あきのたのオオオオ」と一語ずつ明瞭に奏打とともに歌われるが、採譜では省略した。最後の母音が「オオオオ」と強調されたあと、太鼓打ちの「ヒーヨー」に促されて全員で(一)を合唱しつつ踊が始まる。(一)が始まってしばらくはガクはしゃがんだまま、しばらくして腰をあげて反動を

つけて奏打する。(二)の途中でガクは立ちあがる。踊の輪は右まわりでゆっくり動き、中のガクはわずかに左まわりに動く。歌詞は七五連続を基本とする。似たような小さな旋律が出るので傍線によって示した。それを見ると(二)(五)(六)(七)は同系の旋律であることがわかる。(三)(四)は旋律形としては挿入句である。最後の句は意味をとることができない。

上西目の「あきのたの」(楽譜13)

(ソロ) あきのたのオオオオ

ヒーヨー

- (全員) (一) あきのたの
 (二) かりほのいろを みるからにイイイ A
 ヒーヨー
 (三) いちぶにこめが なたたわら
 (四) さてもさても さてもめでたい ごよなれど
 (五) とうから鶴が むつつれてエエ A'
 (六) またむつつれて 十二つれ
 (七) そがのつれいと こさすウウウ A''' A" A'

(一)の最初はオクターブの上行跳躍で開始され、そのまま同音(嬰ハ)連続で歌われる。(二)の後半「みるからに」も同音(嬰ハ)連続である。(一)(二)を通じて嬰へ音と嬰ハ音の完全五度の二つの音が強く印象づけられる。(三)以後旋律が動き出すが、(四)は短い音符によるシラビックな歌唱。

オクターブ跳躍上行という特徴のある出だしと、同音反復による歌唱、そしてAを四回繰り返す中に(三)(四)が別の旋律で歌われるという形である。中間の嬰ハ音と上の口音を中心として旋律が形成されている。謡曲風な骨格を持つといつてよい。

3 よよのたけなが

楽譜14は上西目の四曲目「よよのたけなが」である。テンポの変化をとまなう長大でダイナミックな、この地区の盆踊を総称する「たけなが」のフラッグピースである。最初に音頭取りによって冒頭句「よよの」が歌われ、少しインター

ヒーヨー

- (三) かぐらをとりて さんさつすどこえ
- (四) まんざいの国わ 命をたもつ
- (五) あいおれいのまつかぜエエ

同名の「ちはやぶる」は西之表市川迎の盆踊でも歌われたことが下野敏見『種子島民俗芸能集』に載っている。また中種子町野間竹屋野では集落内の霧島神社の秋祭り(願成就祭)にこの曲が現在も奉納され、その隣の女洲(おなす)にも竹屋野から伝習されている。下野敏見によると、野間神社の願成就祭りで大踊を奉納する時、最初に竹屋野や畠田(竹屋野)の人たちがこれを踊ったという。

(五) きのぎの

中西目と下西目は「きのぎの」と通称される次のような七曲を共通して傳承する。全体をそう呼ぶのは四曲目「きのぎのに」からきているので、重要曲なのだが、採譜による分析はできなかった。本国寺奉納は中西目と下西目がペアで順番がまわってくるが、下西目は十数年以上前から踊ることができず、中西目単独の奉納が続いている。

進行方向に向かって右から踊子先頭・笛・小太鼓・小太鼓の四人が横隊し、踊子先頭の後ろに踊子が続いて入場し、左まわりで輪を作るが、半周ほどしたところで、踊子の列の後半は逆方向にまわって輪を作る。このほうが早く輪を作ることができる。輪ができて進行がストップすると笛は踊子の先頭と最後尾との間にはいり、輪の中は小太鼓二人だけになる。カネはない。ただ現地の方々の話によると、先頭にて横隊するのは笛と二人の小太鼓で、踊子は笛の後ろに付くのが本来だという。

砂坂・上西目では各曲の始めに、音頭取りのソロにて最初の短い語句が歌われるが、ここではそれはない。①⑦を除いて二回ずつ踊られる。上西目・砂坂との共通曲目は⑦のみである。

中西目

①今年やよい年

手踊1回

1分30秒

- ② 我と思えよ 手踊2回 2分5秒
- ③ 今年の年は 扇踊2回 1分37秒
- ④ きのぎのに 手踊2階 5分24秒
- ⑤ ひがしや町山 扇踊2回 1分37秒
- ⑥ 今年やめでたし(まんぞうし) 手踊2回 1分26秒
- ⑦ 南さがりの 閉扇踊1回 0分35秒
- ⑥ 「今年やめでたし」は「まんぞうし」とも呼ばれる。中西の令和元年の本国寺上演を分析のサンプルとしたが、採譜ができたのは①と⑦のみである。冒頭①「今年やよい年」は平野・田代の冒頭曲「さても見事な」および本村の冒頭曲「おやつ参り」と同系旋律である。前掲の上西目より全体的にテンポはゆるやかである。

1 今年やよい年

楽譜16は中西目の採譜である。ガクの奏打で入場し、輪を作って最初に踊られる短い曲である。左掲の三節が同じ旋律で歌われる。一節は七七七七からなる。節の前にガクによるハヤシ「アリアーセイ コリヤーセイ」がかけられる。内容は豊作祝。曲調は洋楽風にいえば短調系が主だが、時折長調系になる。

中西目の「今年やよい年」(楽譜16)

- アリアーセイ コリヤーセイ
- (一) 今年やよい年 穂に穂がさいて
わせにや八石 なかてにやくこく
アリアーセイ コリヤーセイ
- (二) ましておくてにや やれ十二石
ますわしるがね とかきわこがね
アリアーセイ コリヤーセイ
- (三) ますのとかきをしゃらりとおいで
とのおくらどのみでひてはかるも

前述したように、平野・田代・本村の第一曲目と同系の旋律である。平野(楽

譜1)では低い音域からの上昇が始まるが、ここでは高い音域から開始され、最高音(ハ音)に達したところからは平野と同じ旋律になっている。「わせにゃ八石 なかてにゃくこく」は平野の「下わしんじく からしまのふとん」とまったく同じ旋律である。この例は詞形が同じであれば、ひとつの旋律に地区によっていろいろな歌詞を載せることがあったことを意味する。

2 きぎのぎの

四曲目に歌われる西之の全盆踊の中でもっとも長大な曲である。音高が高く、旋律線も複雑で、繰り返し楽句がなく、難曲である。一回で五分二十四秒、二度くり返すので全体では十一分近くかかる。盆踊全体の通称「きぎのぎの」となった曲だが、採譜はできなかつた。しかし重要曲なのでここで触れておく。歌詞は次の七節からなると思われるが、節の繰り返しは見当たらず、通作になっている。

中西目の「きぎのぎの」

- (一) きぎのぎのに秋のむつごと 今はしゃらしやらに
- (二) もしや別れの袖の文 なじまぬ昔 なあじやもの
- (三) 幾夜重ね情けのおせよう 裏にこがるる身は恋ほども
- (四) せめてひと夜はしてもみようかしな
- (五) たとえ会わずと 文さえみれば
- (六) 文は見せぬわしじやもの 花は折りたしこずえは高し
- (七) 心づくしの心づくしの見るつらさ 通う嵐の夜もすがら

3 南さがりの

中西目で最後に歌われるのが楽譜17の「南さがりの」である。祝賀風内容が歌われ、七五を一節として五節が続く。同じ旋律形に傍線を引いた。

中西目の「南さがりの」(楽譜17)

- (一) 南さがりの堀川に
- (二) くらさきほりてほろろうつ
- (三) ほろわつたずに鶴の子わ

- (四) ぜにかねまいてあいをまつ
- (五) まことにこれがめでたしや

楽譜17をみると、完全にシラビツクの旋律で、すなわち一語に一音を当てはめ、♩110という行進曲に近いテンポで歌われる。五つの節には同じフレーズはひとつもないが、似たような旋律がくり返されている印象を与えるのは、(一)の出だし「みなみさがり」の旋律は「堀川」で反復され、(二)の冒頭「しらすぎ」でくり返され、(四)の始め「ぜにかね」でも再出、(五)では途中の「これ」で出るからである。小さなフレーズをくり返しつつ、変化もさせ、場所も変えながら、これが旋律のエキスポであることを聞く者に印象づけている。謡曲風旋律で長調系(律音階)でできている。

(六) 楽器(ガク)

西之盆踊で使用される楽器は大太鼓・中太鼓・小太鼓・カネ・笛(縦笛)の五種類だが、これらは部外者による呼び方である。全部をどこでも一斉に使うわけではなく、地区ごとに少しずつ違いがあるので一覧にしておこう。笛はすべて縦笛で、(リ)はリコーダー、(録)は録音を使用していることを示す。写真1(平野)、写真2(田代)、写真3(本村)、写真4(上西目)、写真5(中西目)を参照。

ガクの編成

平野	小太鼓二・カネ一・笛	*小太鼓二は同じ大きさ
田代	中太鼓二・小太鼓一・カネ一・笛(リ)	
本村	中太鼓一・小太鼓一・カネ一・笛(録)	
砂坂	大太鼓一・小太鼓一・カネ一・笛(リ)	*大太鼓は持ち手と打ち手のペア
上西目	大太鼓一・小太鼓一・カネ一・笛	*大太鼓は持ち手と打ち手のペア
中西目	小太鼓二・笛(リ)	*小太鼓二は同じ大きさ
下西目	小太鼓二・笛(リ)	*小太鼓二は同じ大きさ

太鼓

太鼓はすべて締太鼓で、大きさに大中小がある。どこでも大太鼓も中太鼓もタイコといい、小太鼓はイレコという。中太鼓と小太鼓の大きさはそれほど変わらない。本村では中太鼓と小太鼓を使用するが、本村の伝承者浜田敏幸さん（昭和四年生）によると、中太鼓をコウロンと呼んだという。意味はわからない。一度壊れたことがあり、自分たちで木（タブだったか）を削りぬき、山羊の皮を張りなおして修復したことがあるという。他地区も以前は自分たちで作ったというが、現在は楽器店から調達している。全地区の中で砂坂と上西目の大太鼓がもっとも大きい。大踊（太鼓踊）で使用するのは少し小さい（大踊で使用するのは同じ大きさではない）。左手に持つこともできるものの、砂坂・上西目では打ち手とは別に持ち手がいる。皮面を打ち手に見せて持ち、後ずさりの形で進む。能楽での太鼓（オオツツミ・コツツミではなく）は座ったままで前に据えたそれを叩くわけだが、これを移動しつつ叩くというイメージである。バチは中西目ではダフの木（白くて軽くて丈夫）で作る。

カネ

カネは直径十三センチほどの鉄製小円盤で、どの地区も形状はほとんど同じである。中央に紐を通す小取手をつけ、これに棒状の木片を結びつけ、上向きにして（棒状木片の上に載せる形）左手に持ち、右手で叩く。バチは先が小瘤になった鉄製の棒である。上西目には円盤に縁のついた古いカネがあった。写真6は平野のカネ、写真7は上西目の古いカネ、写真8はその裏側を見たものである。

笛

ガクの中で唯一旋律を奏でる縦笛は全地区で使用される。踊子の一人が担当するが、前述したように入退場で吹奏するのみで、踊が始まると吹奏をやめ、笛を後ろ腰に差して踊子の一人となる。終わると入場時の位置に戻り、奏打とともに吹きながら退場する。前任者から引き継いだものや、上西目では何十年か前に島外で調達した（買った）ものも使っている。

発音原理は尺八やフルートのように歌口に唇をつけて直接息を吹き込むのでは

なく、吹口を唾えて息を送るタイプである。竹筒の端を斜めに切って短い木片を埋め込み、吹口としてわずかな隙間をあける。円筒の歌口から数センチのところ（中に埋まった木片の先端にあたる）に孔をあけて風口（ウインドウェイ）とする。つまりリコーダータイプである。いくつもの地区が実際に教材のリコーダーで代用している。ただ裏にサムホール（親指孔）がないのがリコーダーとの違いである。旋律は五度内で動き、オクターブ上を出すことはないからサムホールは必要である。吹口の隙間の間隔や指孔の数など地区によって多少の違いがある。いずれの地区も本来は横笛だったと思われるが、笛そのものも残っていないし、そういう伝承も残っていない（昔のことはわからない）との答え。

写真9は平野の縦笛で、近年の笛を担当する高田健一郎（昭和三十六年生）さん所有の三本の笛である。上と下は高田氏自身が作ったもの、真ん中が父親が作ったものでこれを常用している。竹は一番上は種子島というキンチク、真ん中と下はニガタケである。真ん中と下の長さはほぼ四十一センチ。指孔はいずれも七つある。次掲本村と同様、吹口の下に風口があり、指孔は反対側（表側）に開けられている。吹口の竹筒と埋木との隙間の加減は音の輪郭を左右する。隙間が狭いほうがしつかりした、よく通る音がでる。もちろん隙間だけでは決まらず、竹質や乾燥具合にもよる。写真10と写真11が高田氏が使用中のもの（父親から）で、写真12はその吹口。写真13は写真9の最下（高田氏自身の制作）の吹口で、写真12より隙間が広く、音の出と安定度は写真12に及ばないという。本村では現在は録音を使用している。かつての笛担当は浜田敏幸（昭和四年生）さんで、笛も所有している（写真14〜16）。戦後になって父親から笛と吹き方を受け継いだ。地元で作ったものである。全長は31センチで、指孔は六つあるが、下の二つは使わない。平野と同じように、吹口のすぐ下に風口があり、指孔は反対側にある。つまり表側から風口（裏側）は見えない。

上西目には地元にて種子島に普通にあるニガタケで作った縦笛があったが、残っておらず、現在はずいぶん前に島外から調達した四十三センチほどの縦笛を使っている（写真17〜20）。本人みずからが調達したのではないために、調達はわからない。筒に節（ふし）がない（ひと節でできている）。歌口として斜めに切り、木を埋めて隙間を作っている（写真20）。吹口のすぐ下に風口があり、その下に七つの指孔がある。風口と指孔が同じ側にある（写真18）。一番下の孔は突き通っているので、裏にも孔がひとつある形になる（写真19）。

七つのうち使用するのは上の四孔のみで、下の三孔はまったく使わない（閉じることがない）。

これが右掲の平野・本村と違うのは、吹口と指孔の位置である。上西目は吹口とすぐ下の風口と指孔が表側に並んでいたが（写真17）、平野・本村では風口とは反対側に指孔がある（写真11と14）。指孔が表に出るので、裏側の風口は見えない。

こうしたリコーダー型の縦笛は伝統的ではなく、本来は横笛か尺八型縦笛だった可能性があるが、確証はない。縦笛は尺八型に比べてリコーダー型は音を簡単に出すことができる。全国の何ヶ所かの芸能でリコーダー型を使用しているし、販売もされている。これが種子島でも取り入れられ、模造されてきたのであろう。

（松原）



写真1 平野(2016年)
左から笛1・小太鼓2・カネ1



写真2 田代(2017年) 左から中太鼓1・小太鼓1・カネ1



写真3 本村(2018年)
左から中太鼓1・小太鼓(後向)・カネ1



写真4 上西目(2016年)
向こうから小太鼓1・大太鼓1・カネ1



写真5 中西目(2019年) 小太鼓2



写真6 平野のカネ(2020年)



写真7 上西目の古いカネ(2022年)

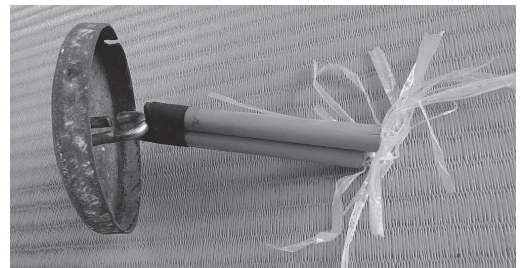


写真8 同左の裏側



写真9 平野の高田氏所有の3本の笛(2016年)
(上と下が自身の制作、中央が父親の製作)



写真10 写真9の中央の笛(これを使用)



写真11 写真9の中央の笛を吹いているところ



写真12 写真9の中央の笛の吹口



写真13 写真9の最下の笛の吹口



写真14 本村の浜田敏幸氏

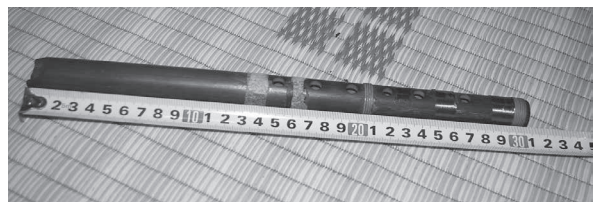


写真15 写真14の浜田敏幸氏所有の笛



写真16 写真15の笛の吹口



写真17 上西目の笛



写真18 上西目の笛。最左孔は風口、連続6孔が指孔、最右は飾孔。



写真20 同上の吹口



写真19 同上。写真18の裏側（左右逆）。吹口は向かって右端、左の孔は飾孔

楽譜1 平野「さても見事な」

♩=75 (原曲は4拍子)

(1) さても見事なとていふは
うまよふしにたわしんじく
-- ぬしまのふとん

楽譜2 本村「おやつ参り」

♩=75

(1) おやつ参りのお参り
きやうこのじよおまの
なアリきんじんじよ
おまらアジワラ

楽譜3 平野「これのお寺」

♩=75 (原曲は4拍子)

(1) こゝろのこゝろ
まじりてエカ
ヒヤ (2) こゝろ
(3) しほ
(4) こゝろ
ア (5) こゝろ

楽譜4 平野「阿波の徳島」(出發音は二)

♩=75 (原曲は4拍子)

(1) ああのとくし
すかめ? ヒヤ (2) おやつ
ア (3) ち
イに
ア (4) ち
リイ
こ
あ
ア (5) ち
ア (6) ち
ア (7) ち
ア (8) ち
ア (9) ち
ア (10) ち

楽譜5 平野「二九の十八」

♩=75 (原曲は4拍子)

(1) にいくら
ア (2) し
ア (3) こ
ア (4) こ
ア (5) こ
ア (6) こ
ア (7) こ
ア (8) こ
ア (9) こ
ア (10) こ

楽譜15 上西目「ちばやふる」(出發音は嬰ト)

♩=75

(1) ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

- ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

- ちばやふる (E-B) (2) ちばやふる - ちばやふる

ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる - ちばやふる

楽譜16 中西目「今年やよい年」

♩=70

(1) こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

(2) こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

こ と は さい と おしほ に ほ ぶ け さ い じ

楽譜17 中西目「南さがりの」

♩=110 (全拍を奏す)

南 さ が り の 南 さ が り の 南 さ が り の

南 さ が り の 南 さ が り の 南 さ が り の

南 さ が り の 南 さ が り の 南 さ が り の

南 さ が り の 南 さ が り の 南 さ が り の

四 西之本国寺盆踊の道具

南種子町西之本国寺に奉納する盆踊ではどの集落もカムキ（カンモク）を被り浴衣を着る。カネ（鉦）・太鼓・イレコ・笛などの演奏で男性だけで踊る。

この踊りは寺の庭で踊られる精霊送りの踊りであるから、静かに・しめやかに踊るのが特徴で、供養の素朴な踊りである。

(一) 野尻・木原集落

① 笠

笠は二種類あり、一つは「つんぼり笠」あるいは「カサ」・「陣笠」と呼ばれるもので、もう一つは花笠と呼ばれる笠がある。太鼓の人一人だけが被る（写真1つんぼり笠ただし砂坂集落）。

ちなみに砂坂集落のつんぼり笠は直径50cm、高さ25cmで、市販されているイグサを編んで作ったものを使っており、笠の表面に四角に切った色紙を全体に貼り付けるものと、紙で作った花をつけることもある。てっぺんにはどちらも紙の花をつける。笠の内側には中に綿を入れた四角な赤い布で座布団風にしたものを取り付け、笠を被ったときに頭に笠があたっても痛くないように工夫してある。笠と頭（顔）を留めるヒモがついてある。野尻・木原集落のものは未調査である。イレコと鉦は丸い花笠を被る。この花笠は個人持ちである。太鼓持ちは麦わら帽子と白い私服を着る。

② カネ（鉦） 二人

カネの寸法は直径10・5cm、高さ2・5cmで、裏側に高さ2cmの持ち手が付いてあり、ここに飾りとして直径0・7cmから0・9cmの細い竹にヒモを通し、約5cmの色紙で作ったフサを付けたものをカネの持ち手に結び付けてある。

カネのブチの金属部分の寸法は全長19・7cm、叩く部分の直径1・2cm、長さ1・5cmの球状になっており、持ち手の所には飾りの色紙房約7cmのものを5cmのヒモで括り留めてある。どちらも金属で長年使われたものである（写真2カネとブチ）。カネもブチも個人用。花笠を被る。

③ 太太鼓

太太鼓は祭りの当日作るため（仕上げる）、最近盆踊りが踊られなかったの未調査。太太鼓の合図（ブチのあげ加減）で歌いだしを決める。師匠が最初



写真1 つんぼり笠（砂坂集落）

の歌いだしを歌う。太鼓は歌に合わせて叩く。

④ 太鼓のブチ

ブチの叩く部分は「クサギ」を使っており、持つ所に和紙のフサを付けてある。クサギで叩く部分を作るときはクサギが柔らかく軽い木材であるから削るときは大きな刃物などは使わず、ビンの欠片などガラスを使っ

⑤ 衣装

太鼓打ちは花笠（菅笠に紙で作った花を飾る）、白いトレパンの上下に上からアカベジヨ（振袖のような赤い衣



写真3 太鼓のブチ（野尻・木原集落）

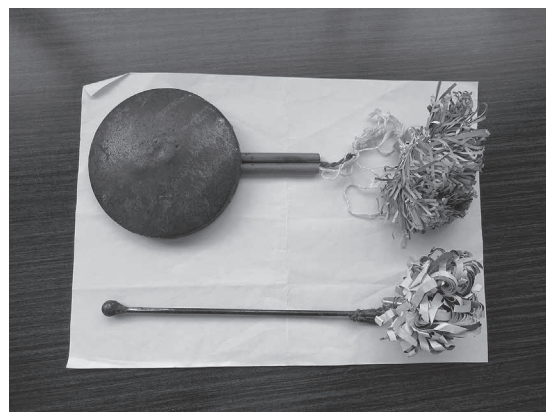


写真2 カネとブチ（野尻・木原集落）

装)を着る。白足袋に藁草履を履く。太鼓持ちは白いトレパンの下衣、上衣はワイシャツ、花笠(菅笠)又は麦わら帽子、白足袋に藁草履を履く。

カネ(鉦)は大踊りの時に被る花笠・浴衣・黒帯・白足袋に藁草履を履く。笛はカンモクを付け浴衣・黒帯、手拭いを腰に挟み白足袋・藁草履を履く。笛が終わったら踊り子として踊る。

踊りの師匠はカンモクを付け、浴衣・黒帯・手拭いを腰に挟み、白足袋に藁草履を履く。

音頭取りはカンモクを付け浴衣・黒帯で手拭いを腰に挟み、白足袋・藁草履を履く。音頭取りは踊りの案内の時、カンモクを脱いで踊りの案内をする。案内が終わったら踊り子として踊る。

踊り子はカンモクを付け、浴衣・黒帯・手拭いを腰に挟み、白足袋に藁草履を履く。カンモクは親子代々古いものを使う人もいる。また、浴衣は各人自分持ちである。親から譲り受けた浴衣を着る人もいる。

⑥イレコ(小太鼓)とイレコのブチ

イレコは胴体に布を巻き、その上に腰ひもを巻いてある。胴体に巻いてある布はイレコの装飾で、腰ひもは盆踊りの時はこの状態で手で持つてブチで叩く。大踊りの時は腰ひもでイレコを腰の前の部分に固定してバチで叩く。盆踊りと大踊りではイレコの持ち方、叩き方が変わる。イレコの胴の部分には以前は自分たちで木をくりぬいて作っていた。イレコの寸法は直径20・5cm、幅17cm。イレコのブチは椿などの堅木が良い。寸法は叩く部分は直径1・2cm、長さ1・5cmの球状で、全体の長さ19cm、持つところに色紙のフサ(長さ8cm)を約7・5cmのヒモで結び付けてある(写真4イレコとイレコのブチ)。

⑦笛

縦笛(小学校で使う縦笛・市販品)を吹きながら太鼓をリードして出る。吹き終わったら踊り子となり踊る。

昔は自分で「カッター(真竹)」の節の多いもの(根元部分)を使い、節を取って作っていた。若い竹はダメで、年数の経っているものを使って作る。

吹き口のところに木の詰め物をしてある。これは、丸い木を竹に詰めて後で切り揃える。寸法は上部3・7×2・3、下部直径2・2cm、長さ42・8cm(写真5笛)。

⑧カンモク

カンモクは毎年(踊る年)、公民館に集まって皆で作る。個人個人の顔に合わせて目だけが見えるように作るのので、決まった型紙はない。その場で各人の顔に合わせて作る(写真6カンモク)。

調査したカンモクで一番古いのは西之にある本国寺が落成した記念に奉納で踊ったときに作ったもので「西之寺落成 平成九年十二月二十三日」の日付が書いてあった。また、東京で踊ったときに作ったカンモクに「平成二十八年 十一月 シズミ」と書いてある。この東京で踊ったときに作ったカンモクには、広い舞台で踊り・歌うので声がよく通るように口元のあたりにスポンジ二個を付けて空間を作っている。

手拭いは市販品で、踊り子の腰に挟む。

(一) 平野

①イレコ(二人)

叩く部分の皮は、昔は「ヤギの皮」と言っていたが、今使っているものは作ってあるものを購入したので何の皮か不明である。

タガは幅0・5cmの三本どり。使っているヒモは太さ0・6cmの木綿布である。イレコは本番では、この上から装飾用の布で巻く。イレコを肩から掛けて練習の時に使うヒモは腰ひもを使っ

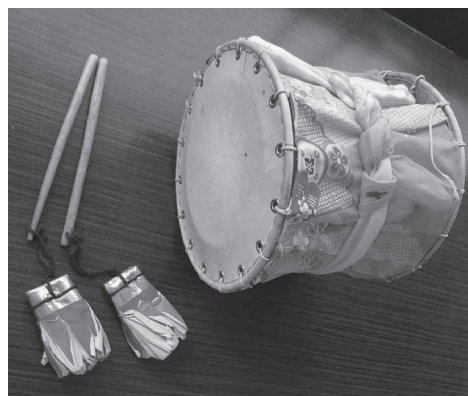


写真4 イレコとイレコのブチ

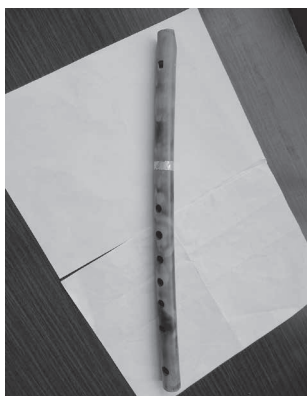


写真5 笛

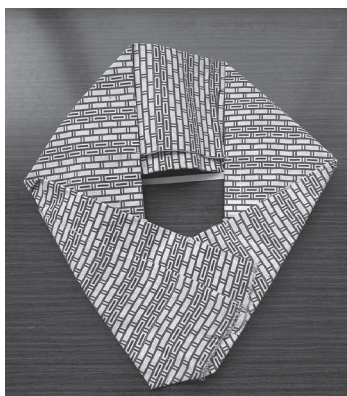


写真6 カンモク

ている(写真1イレコ)。直径21cm 幅18・5cm

②イレコのブチ

二本ある。長さはほぼ一緒に、材は「モッコク」を使ってある。太さ直径1cm、長さ20・5cmで持ち手の方に直径5cm、長さ5cmの房をつけてある。イレコのブチの飾りは金色の色紙を使ってある(写真2イレコのブチ)。

③鉦(一人)と鉦叩き

鉦の材質はLPガスの金属部分を利用して作ってある(写真3鉦と鉦叩き)。鉦の部分は直径12cm、房の全長16・5cm。

④鉦叩き(鉦ブチとも言う)

二本ある。一本は叩く部分の長さ13・7cm、直径0・4cm、房の長さ5cm、房の全長14・5cm、全長28・2cm。もう一本は叩く部分の長さ14cm、直径0・4cm、房の長さ5cm、房の全長19cm、全長33cm。房飾りは銀の色紙。

⑤笛(一人)

二本ある。一本は五十年前以上に作ったもので(写真4笛)、材質は「カッタケ(コサンダケ)」。長さ41・2cm、竹の太さ直径2・4cm、直径1cmの孔が表のほうだけに三つ、下に四つある。裏側には孔はない。歌口(吹く所)は竹の内側に孔に合わせて木(材質は不明)をはめ込んである。一番下の孔はふさがない。笛は各自で持っている。

もう一本は五年位前に作ったもので、長さ40・2cm、竹の太さ直径2・6cm、孔は上のほうに一つ、下の方に六つある。

⑥カンモク(カムキ)

自分持ちで浴衣生地を公民館でまとめて買い各自で作る。厚紙に布を和のりで貼り付けて作る。後頭部はゴム紐を付けて調整できるように作ってある。布は木綿の浴衣地で、自分の顔・頭回りの寸法に合わせて布を折りたたみながら、目と鼻一部があくように寸法を決めて作る。目と鼻が見えるくらいにあきを作って口は覆う(写真5カンモク)。

カンモクはイレコ・鉦以外の全員が被る。

⑦笠

イレコの二人が被る。一人は大将。

笠は数年に一回作り替える。コロナ禍で盆踊りが行われなかったので当日でないと完成品とならないため未調査。

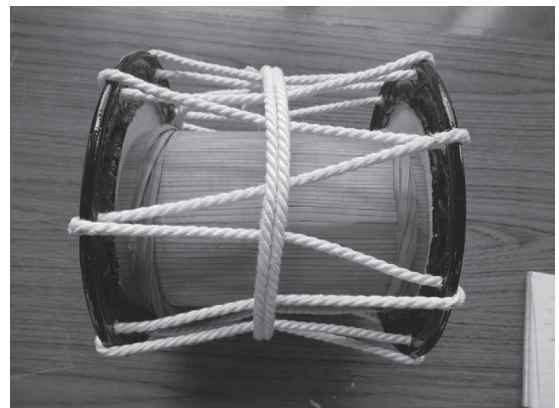


写真1 イレコ

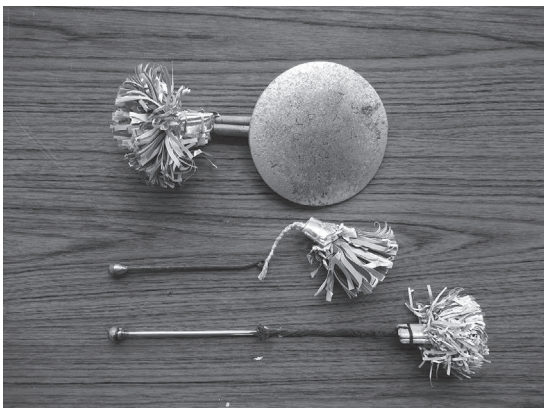


写真3 鉦と鉦叩き

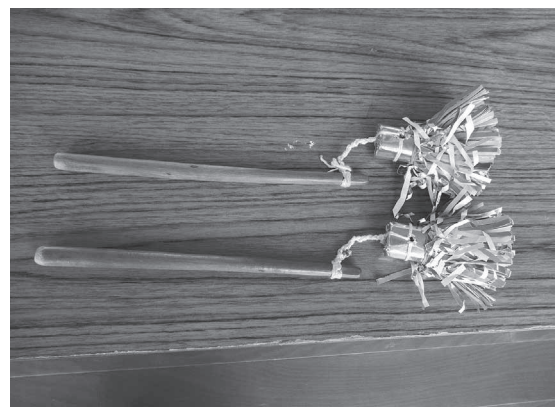


写真2 イレコのブチ

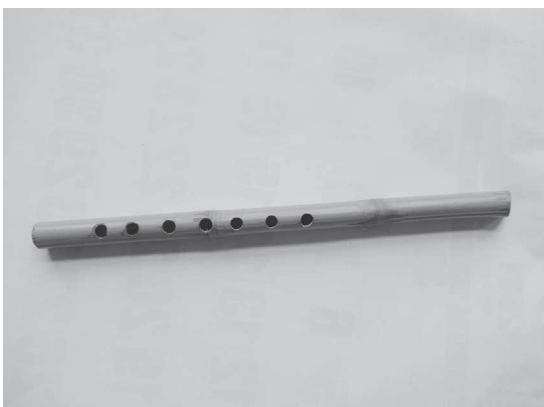


写真4 笛

⑧ 服装

衣装は自分持ちの浴衣・黒帯・藁草履・浴衣の内衣にはステテコを上衣にはU首の肌着(白で市販品を着る)。浴衣の寸法は身丈133cm、袖幅32・5cm、袖丈44cm、前身頃幅24cm、後身頃幅30・5cm、おくみ幅15cm、襟幅6・5cm(写真6浴衣)。黒帯は濃紺で両端に絞り模様がある(写真7黒帯)。幅74cm、長さ290cm。市販品の黒足袋を履く。腰に下げる手ぬぐいは市販品。



写真6 浴衣



写真7 黒帯



写真5 カンモク

笛は踊りの輪を作る間吹いている。歌口には切れ目があり、中に包孔の半分を詰めてある。



写真1 笠を被った鉦 イレコ コウロン

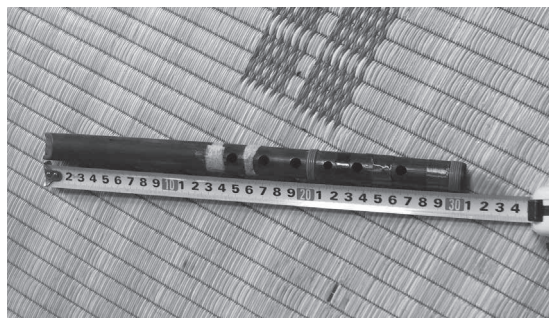


写真2 笛

⑨ センス

笛・踊り子が持つ。市販されているものを使う。長さ25cm。

(三) 本村集落

二〇一八年の盆踊で本村集落が盆踊を奉納した時の笠を被った鉦・イレコ・コウロンの姿が写真1で、これ以降コロナ禍で盆踊は実施されていない。

① 鉦

材料はニガタケ。笛の長さ30・5cm。前(表)に六つ、裏に一つの孔がある。上三つは左手で押さえ、下三つのうち一番上は人差し指で押さえたまま、上から四つ目は小さな孔で右手で押さえたまま。一番下は何もしない(写真2・鉦)。

② コウロンとコウロンのバチ

地元では太鼓のことをコウロンと言う。小太鼓をイレコという。盆踊りに使う楽器はコウロン(太鼓)とイレコ(小太鼓)・鉦・笛。コウロンは盆踊りだけに使う。胴は木の内部をノミで約1cm位の厚さ残るようにくり抜いて作つてある。製作途中の物にノミのあとが残っている。コウロンの寸法は直径29・5cm、幅16cm。胴の部分の直径20cm。左右の叩く部分(皮)と胴をしっかりと留めるのはビニールひもである。

コウロンのバチは叩く部分の直径2・5cm、長さ19cm。フサの長さ20cm。装飾で付いているフサはビニールヒモを細く裂いて作つたもので、持ち手のところについてある(写真3コウロンとコウロンのバチ)。

③ 鉦と鉦叩き(写真4鉦と鉦叩き)

④ カンモク(写真5カンモク)



写真3 コウロンとコウロンのバチ



写真4 鉦と鉦叩き

(四) 小田・前之原

①イレコ(太鼓)とイレコのブチ。担当は二人。

イレコを左手に持ち、右手でブチを振り上げ振り下ろししながらイレコを打つ。踊り子の円(輪)の内側にいて、二人で反時計回りにイレコを打ちながら踊る。

イレコの胴の部分は左右を竹のタガで締めあることから、桶太鼓ではないだろうか。胴の部分に「7 七 贈 戸石嘉四郎」と書いてある。胴の部分には踊るとき赤い模様の布を巻く。胴の部分の直径は約20・5cmと24・5cmの二種類がある。幅17cm。叩く部分(皮)の左右を締めてあるのは木綿の紐である。

イレコの皮はやぎの皮、馬の皮などを使っていた。胴の部分に使う材木は杉



写真5 カンモク

の木であった。

イレコのバチのことをブチという。ブチは二本用意しており一本は予備として使う。

ブチの材質はダラの木で作ってあるものは叩く部分の直径1cm、長さ19cm、マテバシイで作ってあるブチは叩く部分の直径0・8cm、長さ16cmで、30数年使っているバチである。どちらも持つところの色紙で作った飾りフサが付いている(写真1・イレコとイレコのブチ)。ブチは堅木で軽い木材が良かった。桐木も使われた。

②笛

入場・退場の時だけ吹く。

笛の材料は「ススダケ」といって、昔は茅葺屋根であったので、そこに使われていた竹(マダケ)が囲炉裏の煙にいぶされて黒くなっていた、それを磨くとツヤがあり竹も程よく乾燥しており、良い材として使われた。自分で作るか笛を作りなれている人が作った。

③花笠

厚紙(外側は金色・内側は白色)で輪っかを作り、上には新聞紙などを張り、ここに造花を取り付けられるようにワラなどを使い丈夫に作る。輪っかの下の部分には幅3cmから5cm位、長さ35cmから40cm位の赤い柄物の布を輪っか全体に取り付け、前の部分2枚くらいは前方が見やすいように上にあげ、てっぺんの造花を付けてある部分に結びつける(写真2・イレコ2



写真2 イレコ2人と笛



写真1 イレコとイレコのブチ



写真4 浴衣



写真3 カムキ



写真5 黒帯

人と笛)。

④カムキ

踊り子が被る。息がかからないようにと言われている(写真3カムキ)。カムキは各人の顔の幅などに合わせ、目だけが出るように作るの、個人個人で大きさや幅などは異なる。木綿の浴衣地などで作る。幅31cm、長さ38cm。

⑤服装

イレコは頭に花笠、浴衣(写真4浴衣)(寸法は身丈145cm・背幅68cm前身頃幅28cm・袖丈46cm袖幅38cm・襟幅5cm)・黒帯(写真5)黒帯の幅70cm・長さ340cmで両端に絞りが入っている。長いタスキ・黒足袋(市販品)・白い鼻緒の藁草履、腰に手拭い。

踊り子と笛の一人も踊り子になるため顔にカムキ・浴衣(上衣として浴衣の

下に白い長そでとステテコを着る)・腰に手拭い(市販品で各人それぞれ豆絞りや柄物)と扇子(市販品)・黒足袋(市販品)・白い鼻緒の藁草履。踊り子は唄を歌いながら反時計回りに移動する。時々立ち止まり反対側へ数歩踊りながら移動する。

笛とイレコで入場し、輪が出来上がったら笛の人も踊り子となり踊る。

(牧島)

五 西之本国寺盆踊の踊り方 ―担い手の人々の視点から

西之の盆踊りは第三章第一節一でも述べられているように、踊りの種類は大きく分けて①つんたん、②きのぎの、③たけながの三種類がある。今回はこの三種類に分けて、踊り手の指示による踊り方を記述する。ここで留意しなければいけないのは、三種類と言っても、例えば①つんたんは平野・田代・本村・崎原など西之の東側の集落で多く踊られているものであり、各集落によってもつんたんの踊り方や歌い方は少しずつ異なる(西之の踊りの種類の詳細は第三章第一節一を参照されたい)(表1)。野大野・上瀬田のヤートセーについては、この両集落は開拓集落であり、西之地区内の他の集落に比べると比較的新しい集落で三種類の盆踊りを持っていないため、盆踊りの代わりとしてヤートセーが踊られている。砂坂・官造牧集落は本来たけながを持っていたが、現在では踊れなくなっている。ここでは代表的なものとして表で網掛けをした①つんたんは平野、②きのぎのは中西目、③たけながは野尻・木原を取り上げ、踊り方のポイントを記述していく。

八月十六日におこなわれる盆踊りは毎年、二集落が担当し、基本的には担当集落は東西のいずれかに統一している。現在一つの集落が単独で盆踊りを踊れるの

西	東
砂坂・官造牧(△たけなが) ／上西目(野尻・木原)(たけなが)	野大野・上瀬田(ヤートセー) ／木村・崎原(つんたん)
中西目(小田・前之原)(きのぎの) ／下西目(きのぎの)	平野(つんたん)／田代(つんたん)

(表1 西之の各集落の盆踊りの種類表 [網掛けは本稿で扱う踊り])

は、平野と田代のみであり、他の集落は二つの集落が合同でおこなっている。西之地区の東西の分け方は歴史的・地理的な分け方にもとづいているが、現代の社会的側面から見ると、盆踊りは毎年、東西で交互に担当が回ってきて、さらにその中でこの集落が盆踊りを出すのが決まる。たとえば東の担当の年であれば、野大野・上瀬田、本村・崎原、平野、田代の四か所のうち、二つの盆踊りの担当を決める。西も四か所あり東西合わせて八か所あるので、理論上は四年に一度盆踊りの担当がまわってくる。ただしこれは盆踊りに限った制度ではなく、秋（旧暦九月十九日）におこなわれる門倉岬の御崎神社での西之地区の願成就の大踊りも西之地区の公民館行事をベースに考えられており、盆踊りはその一つである。

本稿では紙幅の関係上でほとんど触れることができないが、踊りに関する行事で言えば、西之地区にとつては盆踊りよりも願成就の大踊りの方が大規模で、一年間のスケジュールを考える上で大踊りを中心に考えられている。大踊りも盆踊り同様に西之地区の各集落（もしくは集落合同）が輪番制で大踊りを担当するため、その年に自分の集落から大踊りを出すのかどうかで大きく予定が変わる。よつてその年に東西どちら（どこの集落）が大踊りを出すのかによつて、盆踊りを担当する東西（集落）が逆算するように考えられている。言い換えると、（理論上で言えば）各集落は盆踊り・大踊りともに持つており、集落の人々（特に男性）はどちらにも集落行事として参加していることになる。それは有志による保存会組織ではなく、西之地区全体とそれを構成している東西の各集落の公民館（住民全員が対象）組織が進められているということである。たとえば西側が大踊りを担当することになれば、踊りの練習は夏場に約四十日間おこなわれるため、その代わりに東側が盆踊りの担当と地区の奉仕作業（公民館の清掃、地区が管理している杉山の草払いなど）をおこない、東西で分担して地区の行事等の担当が一年間を通して偏らないようにしている。

五― 平野の盆踊り（つんたん拍手）

平野の盆踊りは高田健一郎氏（昭和三十三年生）によると、保存会といった有志の組織ではなく、平野の公民館をもとにおこなつており、基本的には平野に住む成人男性全員が対象となっている。二〇二二年三月現在では平野の会員は一四六人であり、これは「本戸（ほんこ）」という単位での人数であり、「本

戸」とは世帯主のことである。実際に平野で盆踊りを踊れるのは二十〜三十人ほどであり、他の集落に比べると人数は多い。平野は親子で盆踊りに参加できる人もいる。それは平野集落が西之地区の中では、西之地区公民館、小学校（西野小学校）、駐在所があるなど中心的な位置にあり、比較的大きな集落であることが背景にある。それに関連して、歴史的にも「入り人（いりびと）」（島内の平野集落外または島外の人）が多く出入りしており、ひらけた集落だということ。とはいえ、人口は年々減つており、踊り手の確保の問題から、平成二十三年頃に集落の人々の同意を得て踊り手として小学校の教員や駐在所に赴任した人など、地縁・血縁関係がなく平野に移住してきた人々にも参加を呼びかけている。

参加年齢は十八歳からである。実際には平野には二十代はおらず、三十代は移住者または小学校の先生しかおらず、平野の出身者はいない。引退の年齢は特に設けられていない。ただし盆踊りに限らず、地区全体の会員としては七十歳が定年である（七十歳になると敬老会に入る）。そのため、多くの人が七十歳になると盆踊り（と大踊り）を引退するという。もし七十歳を過ぎて踊りた人がいても、周囲の引退した人と足並みを揃えようと続けて踊ることを遠慮する傾向にあるという。

また踊り手の中で喪にかかった人（おおよそ三親等まで）は四十九日が過ぎれば踊れる。盆踊りという先祖供養の意味もあり、それほど喪に関しては厳しく制限されていない。ただし願成就等に参加する場合は一年間参加できないなど喪の期間が変わる。ただし平野の住む「日高」姓の人はほとんどが親戚であり、平野の人口を一定数占めているため、このうちの誰かが盆踊り当日から四十九日以内に亡くなると、その親戚は全員踊りに参加できないことになる。するとその年の平野の盆踊りは踊る人数が不足し、平野の盆踊りは中止になる可能性もある。実際に過去にそのような事例がすでにある。平野の踊り手の参加条件として宗教は関係ない。

当日までのスケジュール、練習

盆踊りの中の役割は、踊りの師匠、笛、鉦、一番太鼓、二番太鼓である。それ以外の人は全員踊り手である。師匠などを決めるのは、六月末に館長会という会議がひらかれ、そこで話し合いのもと師匠を決める。この会は本国寺から切り紙が届き、西之地区公民館長と各集落の公民館長と西之地区の執行部四人

が集まり、その時に話し合いで師匠を選出する。なお新型コロナウイルス感染症の感染が拡大した後はこの会議で盆踊り開催の有無も決めた。その後には鉦、一番太鼓、二番太鼓の楽（ガク）と呼ばれる楽器を担当する三人を師匠が選ぶ。なお笛も楽器ではあるが笛が奏されるのは盆踊りの中で入場と退場のみであり、基本的には他の踊りの人々と同様に踊るので、楽には入らない。楽は集落によって楽器が若干異なる。楽は誰しもが演奏できるわけではなく難しいので、この三人を決めるのが盆踊りでは重要だという。特に選ぶ際には後継者育成のことも考慮している。楽の三人が決まればその人たちに合わせて盆踊りの練習日程が組まれていく。

師匠は、基本的に盆踊りの熟練者であり、他の踊りの人々に練習や盆踊り当日の踊っている最中に手本を見せる立ち位置である。後述する中西目や上西目の盆踊りの師匠も同じ役割である。それに加えて平野は、特に近年は師匠が踊り手の人数確保のために、小学校の教員や駐在所に出向き、踊りに参加してもらうよう頼みに行き、取りまとめの役割も担っている。今はこれらの役目を師匠だけでなく、公民館長や文化部長も共におこなうようになってきている。昔の師匠はもっと厳格であり、師匠の言うことは絶対に聞かなければいけない雰囲気、練習の段取りも全て師匠が決めたそうである。

練習期間は基本的に約一カ月おこなわれる。その年の参加者の顔ぶれによっても練習日数は変わり、町営の住宅などに引越してきた初心者が多い年は、七月初旬から一日おきに練習したこともある。それ以外の年では七月中旬から最初のうちは毎日練習し、踊り手の習得具合など様子を見て徐々に休みの日を入れていくこともある。練習での指導は、熟練の踊りの人が踊る姿を初心者に見せ、見よう見まねで覚えていき、慣れてくると部分的に足の動かし方などは練習の途中で個人的に指導する。七月中旬頃は稲刈り期にあたるので、その期間は練習が中断する。その年によって中入れ（景気づけの飲み方（飲み会））を入れる場合もある。

盆踊りの前日や当日のスケジュールについては、後述する中西目と上西目の盆踊りの頁を参照されたい。

踊り方

ここでは盆踊の踊り方を終始一貫して逐一の説明はせず、全体的な流れは踏ま

えつつ、各集落の熟練者たちに教示を受けた主に基本的な踊り方のポイント中心に説明する。全体の流れや踊り方は第三章第一節三「西之本国寺盆踊の音楽」と付属の映像を参照されたい。踊り方のポイントとは、映像を一通り見ただけでは分からないような、踊り手自身の身体感覚による要点であり、イメージ的な視点である。そこには現在の青壮年層の踊り手には共有されていなかったり、その時々師匠のみが強く認識しているような踊り方もあったりし、踊り手と言っても一括りにはできないような経験・認識の差があることは留意しなければならぬ。それを踏まえた上で、今回はそれぞれの踊りで現在の師匠クラスの人や経験年数の長い人々が昔の師匠から（時には個人的に）教わってきた踊り方の記録という側面を重視し、また今後の西之全体または平野集落での踊りの継承に何らかの形で役立てられるように記述する。

平野の盆踊りは、現役の踊りの人として一番の熟練者（師匠）である高田健一郎氏と日高芳弘氏（昭和三十七年生）から教示を受けたことや、平成二十四年（二〇一二）の西之本国寺での平野の盆踊り映像を撮影した映像をもとに記述する。特に本稿の記述のもとになっているのは、二〇二二年三月二十二日に南種子町郷土館にて高田健一郎氏、日高芳弘氏から踊り方の教示を受けた内容である。具体的には、両氏には平成二十四年（二〇二二年）に西之本国寺にて踊られた平野の盆踊りの映像を再生して踊りを確認してもらい、そこから両氏と筆者が共に踊りながら踊り方の教示を受けた。本来であれば、実際に西之本国寺での盆踊り奉納に向けた集落内での練習に参加し、平野の踊り手同士の教示のやり取りを観察して記述したほうがより踊り方のポイントは多く得られたかもしれない。委員会としてもその方向で調査を検討していたが、二〇二〇年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大により各集落の盆踊り練習や西之本国寺での盆踊りが中止されたことにより、その調査方法は出来なかった。それゆえ師匠である高田健一郎氏を中心に個人的に教示を乞うこととなった。ただし高田氏曰く、自身が踊り歌を教わった時は、先輩たちの中でも所作が少しずつ異なっている。そのため以下で示す踊り方は、高田氏が個人的に特定の先輩に習った踊り方であり、「これが『正』だ」とは言えないという。なお、所作の記述に関しては、両氏から教示を受けた内容（「こうする」「こうやってする」と指示語を述べながら実際に所作で示されたこと）を文章として分かりやすいように筆者の解釈も含んだ形での記述になっていることは了承

いただきたい。両氏の言葉を実際に記述する場合には鍵括弧を使用し、直接引用する。

つんたんとは曲と曲の間（以下で示す一と二の間など）に楽が奏す拍子が「ツンタタツンタン ツンタンタン」に聞こえるため、つんたん拍子と呼ばれ、平野の盆踊りを象徴する呼称でもある。本稿では扱わないが、同じつんたん拍子を持っている田代集落とは踊り方が似ているという。まずは現在の平野の踊り手たちが参考になっている「盆踊りの唄」と題された紙に書かれた歌詞を掲載する。それには「昭和五十八年八月十日協議による」と記されており、高田健一郎氏曰く、当時に今後の歌詞の継承をめぐって歌詞の決定版を協議して作ったものであるという。ただし実際には完全版とはいかず、現在歌っている文句や発音はこの「盆踊りの唄」と若干異なる箇所がいくつかある。以下の歌詞はそのことに留意しつつ参照されたい。

盆踊りの唄

一、（※一 手踊り）

此れ（※二 コーレ）のを お寺（オオテラー）に参り

てみれば（アー）おもしろや ★

さてもみごとな お寺のおづし

四方（シホウ）に見えし 伊豆見れば

心は波（マーナミ）の 田子（タゴ）の浦アー

立（タア）つ波の御夜（ゴヨ）は永（ナガ）けれ 夜（ヨ）

は良（ヨ）けれ ★

二、（扇踊り）

阿波の徳島 十郎兵衛娘 ■

親にちゆアー巡礼姿 ■ 父よ母よと尋ね行く ■

日に行き暮れて 野に寝たり人の軒場で夜を明かす

何處の宿でも泊めてはくれぬ ■ 幾夜幾月尋ねても

親のおり先（サキヤ）知れもせぬ さてや悲しや泣

き沈む ■

母のお弓に一寸（チヨト）会いて さてや我るやなつかしや

抱きつ抱かれつ親子のなげき ■ ■ これ程親に慕うるを
母といわずに別れの悲しさよ ■

三、（手踊り）

二九十八（ニクノジウハチ）よばれきて ★

四六二四（シロクニジュシ）で子ができて

五六三十（ゴロクサンヂュウ）でいでさると ★

ぜびにいでならいでもしようが

もとの十八（ジウハチ）してもどせ ★

四、（扇子踊り）

墨と硯は二思（フタオオモ）ひ ■ 我（ワアー）れは

此（コー）の世（ヨオー）にすてられて ■

お初（オーハツ）お咲（オーサキイ）の二人（フウタウ

リ）づれ ■ 徳兵衛（トクウベエ）がアー身のあ

じきなよ ■

せめてはむねのしるしさよ ■ 私（ワアーターシー）

が原（ハロ）の道（ミイーチイ）の下（シイモー） ■

五、（手踊り）

美濃と遠近（オーオオミ）のを寝物語（ネモノガタ）りの

オーおわさ ★

百夜（オモヨー）おねばなし 恋ばなし やほくつま

ろに 身（ミ）はぬれかかる

チロヂ口を降る（フウル）ほそ雪 月にも行（ユ）こや闇

にも行（ユ）こやあー

闇にほつほつ 九十（クジユ）やくよいのやく言語り（モ

ノガタリ）

おせえいとままいとも良（ヨオー）い言語り（モノガタ

リ） ★

出端

さても見事なおつずの馬よ
 下はしんじく からしまのふとん ★
 ふとんばじよして こしよ主をのせて
 様は上るか 私は今下る ★
 ふみをやらねど ことづけ しょえど
 ふでにことかく すずりすみやもたん
 行けば山の中 四五軒目の茶屋に
 寄りてたもれよ必ずたのむ

引端

かごで妻持ち 加世田で育ち
 小鳥かわねで かご恋し

※一 括弧内の手踊り、扇子踊りの表記や★・■の記号は筆者が便宜的に加筆した。

※二 括弧内の読み方は実際に紙に書かれている文字をそのまま記載したものである。

これらは紙に記載された通りに記述したが、実際の踊りの流れとしては、引端で踊り手たちが寺に入場し、一から五までを歌い踊り、出端で退場する、という一連の流れになっている。歌は、踊り手が踊りながら全員で歌う。踊り手たちには一番、二番といったそれぞれの踊り歌を固有の曲名や曲の番号で認識しているのではなく、それぞれの踊り歌の最初の歌詞で切り替わることを認識している。練習の際は、例えば『十八』からもう一度入ろうか、「次は『阿波の徳島』から〜」などのような師匠の合図でそれぞれの踊り歌を認識し練習をおこなっている(ただし本稿では以下で便宜上、紙の歌詞に表示されている「一」「二」などの番号を指して説明する)。

現行の歌い方と紙の歌詞が異なる点については、例えば、高田氏によると引端の「かごで妻持ち」は実際に歌う時は「かごで妻持つな」と歌っている。その他にも筆者が確認できた範囲では、出端の「私は今下る」が「私(わたしや)

今下る」になっているなど、細かな部分で異なっていた。また「盆踊りの唄」には囃子が載っていないが、実際には出端では二・四行目の終わりで「アリアセイ コリヤセイ」という囃子がつく(出端の★の部分)。一から五までのそれぞれの踊り歌(出端・引端を除く)は全て二回繰り返されるが、繰り返すときに歌い方や踊り方が変わることはない。高田氏らと確認した映像では、二回目の繰り返しは一回目の歌が終わるとすぐに繰り返していたが、実際には繰り返すまでに間合いがあるという。例えば二などの扇踊りでは一回歌い終わると、一度「扇子を一回置いて、また一回踊る」という。

一は手踊り、二は扇を使った踊り、三は手踊り、四は扇踊り、五は手踊り、引端は扇を閉じた状態で持つて退場、というように基本的には手踊りと扇踊りが交互に踊られる。手踊りほどの曲も基本的にはいくつかの所作の組み合わせで構成されており、踊り方は非常に似ている。特に扇を使った踊りである二と四は同じ踊り方である。

踊り手たちが寺の境内に入場する「出端」の隊列は、踊り手は師匠は先頭で後ろにほかの踊り手が続く。笛は「番外」で、列から外れておおよそ師匠たちと同じ位置で進行する。衆は師匠の横一列に並ぶように、一番太鼓、二番太鼓、鉦が位置し、この四人の横並びを崩さないように円形になるように反時計回りに歩いて入場する(図1)。

その間は笛と太鼓を奏しながら入場し、師匠が寺の正面にくるように位置を調整する。完全に円形になる際に笛の人はその師匠の前に並ぶ。紙の歌詞に書かれている出端の歌と踊り(「さても見事な〜」が始まるのは、円形になり、踊り手全員が一度寺に向き直り一礼してから始まる。出端からその後の踊りも基本的には反時計回りに足運びが進む。

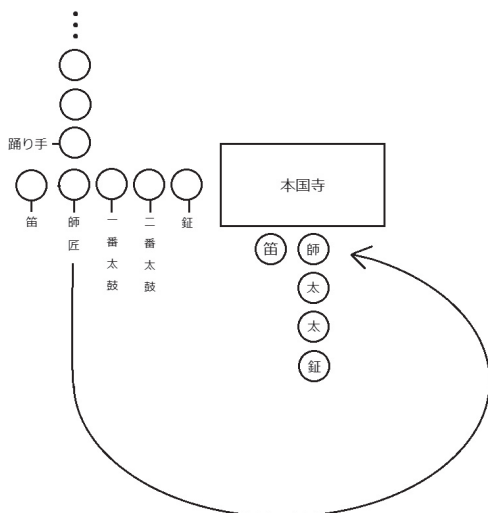


図1 平野盆踊り入場隊形

全体的な踊り方はゆったりと柔らかく踊る。踊り方は大きく足の運び方と手(扇)の動かし方の二つがあるが、足の運び方を覚えると手がついてくるという。体の使い方としてはそれぞれの踊りが常に一定の拍を刻むように、膝を曲げたり片足を前に出して拍を取るような動作があり、膝が曲げられる姿勢を取っている(ただしこれは練習の際に指導されることではなく、無意識的にそうなっているとのこと)。足は必ずすり足で、片足を前に出す際はかかとを地面に着けてつま先を上げて足の裏を見せないように、足を少し浮かせてつま先から着地するように足を運ぶ。

手(扇)を前や横に出すときは直線的で勢いのある動きではなく、「余裕がある感じ」に見せる動きをする。例えば「此れのを」では最初と最後の一節終わり(★の箇所)では、円の内側を向いて両手を前に出す動きがあるが、単に両手を前に出すのではなく、一度両手の手のひらを自分へと内側に向くように胸の位置までもつてくる。そこから右手・左手がそれぞれ横に広げて手のひらを外に向けつつ、下から上に円を描くように手を動かし(この時に指先から円を描くようにしている)、そのまま手のひらを外側に向けて顔の両側で顔の位置まで手を上げ、それから手首を柔らかく使って両手を前に出す(この時に手は指先までピンと伸ばすのではなく、手首を柔らかく使うのに合わせて指先もやや曲げた状態から前に出すにつれて伸ばしていく)。それ以外にも手踊りの所作でよく片手の手のひらを正面に向け上から下へ二度、何かを拭くように動かす所作があるが、これも勢いで下ろすのではなく、ゆっくりと柔らかい所作である。

二と四の曲で使われる扇(踊り手たちは「せんす」とも呼んでいる)の基本的な位置は、扇を広げた時に辺の一番高い部分(王)が「だいたい目の高さ」になるよう維持する。これは扇を立てた時も寝かした所作の時も同じである。扇の持ち方は片方の親骨を軽く持つて手首を使ってひらひらと自由に扇を動かせるようにして使う。扇も手踊り同様に動かすときに直線的な動きではなく、かつ「流れるように」動かす。

例えば二「阿波の徳島」の一節の終わりには円の外を向くように右に回る動作があるが(■の箇所)、その時に扇も同時に目の高さで顔の右側面まで移動させるが、直線的に右側にずらすのではなく、少しだけ左側へ運んでから右側へ「流れるように」もっていき、右肩の上まで扇が来るとひらっと自分の目の

前あたりまで返して「流す」。この時に扇と手の動きだけではなく、足も右にすぐ回転させるのではなく、左足が小さく円を描くように少し地面にするような動作をして右に回転すると、「(円の)外にまわるときにゆっくり(した動きに)見える」。

扇を自分の体の前に出すときも、大きく前後に円を描くように「うしろから出す」。体の前で小さく出すのではなく、腕を下から上に回すときに、まず体の前で八の字を扇で描くように動かし、その流れで体の後ろまで腕を下げてから上へ振りかぶるように前へ大きく回すように動かす。この扇を前に出すときや別の動作で扇の両親骨を両手で持つて弓矢を引くような動作をするときには「足と手が一緒に出る」ことを心がける。

五の手踊りが終わると、退場に向けた「引端」が始まる。一列に退場する前の退場の踊り歌がある。踊り手は閉じた扇の先を持ち、手首を使って扇を小さく上下に動かし、歌いながらそれで拍子をととり、反時計回りにまわる。歌い終わると、師匠を先頭に踊り手たちが一列になって入場した場所と同じところへ一列で戻っていく。師匠と横並びに一番太鼓、二番太鼓、鉦が左に揃う。笛は再び列から外れて、おおよそ師匠の右隣に並び、笛を吹きながらそのまま共に退場する。ただし場所の幅の関係上、説明の通りにきれいに横並びにならなかつたりと、実際には若干異なる並びになることもある(図2)。

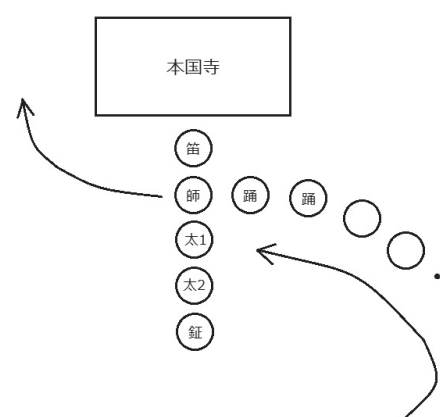


図2 平野盆踊り退場隊形

これまでの継承状況
昭和三十年代生まれの人々が仕事を求めて島を離れる中、平野集落出身の高田氏は南種子町役場に就職し、平野集落の盆踊りや大踊りを踊る人として一番の若手として参加し、この状況が長く続いたという。踊る人々が集まって練

習もしていたが、当時一番若かった高田氏は盆踊りも大踊りも師匠の家を尋ね、一週間ほど個人的に教えてもらったという。その後日高芳弘氏など何人かの同世代が平野集落にUターンで戻ってきた。日高氏は父と共に何度か盆踊りに参加した。

長年、絶対的な師匠をつとめたのは、明治二十年代生まれの中脇氏という古老で、圧倒的に誰よりも歌と踊りが上手だったという。経験年数も長く、師匠として踊りに意見をする事も多くあったが、絶対的な踊り歌の上手さから、それに従わない者はいなかった。中脇氏は特に歌が上手で、裏声を使わないが声が高く、かつ「しびれるよう」で「かすれた感じ」だった。日高芳弘氏は、中脇氏のめでた節を聞いたことがあるが、音程が高く、他の人々が同じ音程に合わせて歌えずついていけなかったという。盆踊りや大踊りにとつていかに歌が重要であるかを考えさせられる話である。それに加え、集落の成人男性たちは、このような絶対的師匠のもと何が何でも、踊りが苦手だったとしても、参加しなければいけない状況だった。

中脇氏が引退してからは、師匠は一〇二度つとめると交替し、絶対的な師匠はいなくなつた。ちょうど高田氏の一回り上の世代が絶対的な師匠が不在であるという。その中で先輩たちが代替わりしていくと、皆が見よう見まねで覚えているので、細かな手の所作などが異なり、それぞれの踊り方を主張し、当時の若手の人々にとつてはどの人の踊り方を見ればよいか戸惑うことも多々あったという。教わる側の人の中にはこれらの状況を強制的で効率的ではないと感じ、高田氏の世代でも踊り手になれる人はいるが、今となつてはそれらの人が全員参加しているわけでもないという。

引退した古老たちが練習時に見に来ることもあるが、その古老同士でも「踊り方が違う」と話し合いになり、教わる側はその日はほとんど教わる事がなく練習が終わることもあった。日高氏が若手の頃はそのような光景がよく見られたそうである。今は過去の踊りの映像が残っているため、それを参照しながら練習することも出来るようになってきているが、このような雰囲気若い人はいないはず、参加しない人も出ている。

そのため高田氏は先輩たちには一人指導者をたててもらつたり、踊り方に関する課題はあるものの、良い指導者がいたから続いてきたのではないかと

語っている。また、盆踊りに限らず、皆があまり気が進まないことでも誰かが「しないといけん」と言うと、意外と団結がうまれたりするなど、平野は『なんとかせんばいけんとなか』という感じですが、ままとまる「集落である」という「入り人」が多い平野集落は、新たに居住する人々との交流の目的も含めて、年に二〜三回は集落内を清掃するクリーン作戦をおこなうなど様々な取り組みが試みられている。

五―二 上西目の盆踊り

上西目の盆踊りは、野尻集落と木原集落でおこなわれる盆踊りの名称の一つであり、この二集落の人々によつて踊られる。上西目の盆踊りには「たけなが」と呼ばれる独自の踊り歌があり、それが特徴的である。上西目も保存会組織はなく、公民館組織としておこなわれる。よつて基本的に野尻・木原集落に住む成人男性は盆踊りの担い手の対象である。ただし以前は「本戸（ほんこ）（世帯主）単位で参加していたので、一家で一人が盆踊りに参加していたが、現在は人数確保のために、本戸は関係なく参加できる人が参加している。野尻集落の小脇静己（こわき しずみ）氏（昭和三十六年生）によると、野尻集落はおおよそ十三戸、木原集落が八戸であり、踊り手の年齢は平均するとおおよそ六十代になるといふ。参加している人のうち、三十代や四十代は一人ずつほどしかおらず、メンバーは公民館組織とはいえ、固定している。

練習と当日のスケジュール

練習は盆踊り当日の一月前からほぼ毎日、上西目の公民館でおこなわれる。短くとも二十日間は練習する。近年の練習では午後七時半頃から一時間おこなう。練習方法は基本的には全ての踊りを一回通して踊って終わるという。練習の日程が具体的に決まるのは、七月上旬に上西目の公民館長の呼びかけで公民館にておこなわれる会議で決まる。この時は野尻・木原の両集落の人々が集まり、踊りの師匠を決める。この踊りの師匠は平野や中西目同様に、踊りの見本となる熟練者が選ばれる。熟練者とはいえ、年功序列で選ばれるわけではない。師匠が決まると、師匠の意見を踏まえて練習日程が組まれていく。練習当日の天候悪化などによる中止の判断も師匠がおこなう。会の中では師匠のほかに、二番・三番・四番師匠、音頭取り、太鼓（大太鼓）、入れ鉦（小太鼓）、

笛の人も決める。太鼓など楽（ガク）の人々は出来る人が限られているので、実質毎回ほぼ同じメンバーが担当している。大太鼓を持つ「太鼓持ち」は踊りが不得意な人が担当する。また担当として決まるわけではないが、前回に師匠をした人が「あとみ（後見）」として師匠を支える立場として存在する。歌の師匠もおり、それは音頭取りとは別であり、他の踊りの人々の見本となるように歌う人のことである。

師匠は指導者ではないため、他の踊る人々を手取り足取り教えることは昔からなく、踊る姿をほかの人たちに見せて立ち振る舞っている。ただし、現時点で一番直近に師匠になった小脇隆則（こわき たかのり）氏（昭和三十九年生）によると、練習の中で、通して歌い踊っている途中で異なっている踊り方や歌い方があると、一旦踊りを止めて、踊り方や歌い方を説明することもあるという。また全体練習が終わった後に、太鼓、音頭取り、一・三番師匠のみが居残り練習をすることもある。今は個人的に過去に撮っていた盆踊りの映像を見ながら練習することもある。

盆踊りの前日（八月十五日）は午後七時頃に「カオミセ」といって、最終確認のような練習であり、この日は踊り手たちは公民館に絶対に全員集合することになっている。普段着で一度通して踊って終わる。当日（八月十六日）は、寺での打ち込みの時間によってその時々で公民館への集合時間はかわるが、必ず寺に行く前に公民館の外で「シクミ」をおこなう。小脇静己氏は昔の先輩たちから「シクミをせんおどりはせんもんじゃ」と言われたという。この時も普段着で一度通して踊る。屋外で踊るので、集落の人々も見に来る。これが終わると寺に移動する。浴衣に着替えるのは寺でおこなう。寺に戻ってくると、再び公民館の外で「クズシ」がおこなわれる。これは「踊りをくずす」ということでこれが踊り終わると盆踊りが完全に終わったことになる。この「クズシ」では途中の曲を抜くなど省略して、普段着で踊る。「クズシ」が終わると踊りの人たちはそのまま酒宴に入る（飲ん方）。

踊り方（しよしゃまー）

ここでは師匠である小脇隆則氏（野尻集落）、二番師匠である小脇静己氏（野尻集落）による教示のもと、踊り方のポイントを説明する。なおここでは盆踊り全体の流れに沿った踊り方の逐一の説明はせず、盆踊り全体の流れは、第三

章第一節三「西之本国寺盆踊の音楽」での説明と、付属の映像を参照されたい。ここでの踊り方のポイントとは、映像を一通り見ただけでは分からないような、踊り手自身の身体感覚による要点であり、イメージ的な視点である。そこには現在の青壮年層の踊り手には共有されていないかたたり、熟練者の間でも若干の異なる踊り方もあり、踊り手と言っても一括りにはできないような経験・認識の差があることは留意しなければならない。それを踏まえた上で、今回は隆則氏と静己氏が親の世代から教わってきた踊り方の記録という側面を重視し、また今後の上西目での踊りの継承に何らかの形で役立てられるように記述する。

本稿で踊り方のポイントを記述するものになるのは、二〇二二年十一月十六日に静己氏と隆則氏に二〇一六年に上西目の盆踊りが本国寺で踊った際の映像（石堂和博氏撮影）を見ながら筆者が両氏に別々に踊り方や歌い方の教示を受けた内容である。また筆者自身は本調査に二〇二二年より参加しているため、実際に本国寺で踊られる盆踊りを見たことがない。それを考慮した上で両氏からの教示を出来る限り丁寧に拾い、記述することを試みた。読まれる際はこの点に留意されたい。なお、所作の記述に関しては、両氏から教示を受けた内容（「こうする」「こうやってする」と指示語を述べながら実際に所作で示されたこと）を文章として分かりやすいように筆者の解釈も含んだ形での記述になっていることは了承いただきたい。両氏の言葉を実際に記述する場合には鍵括弧を使用し、直接引用する。

まずは公民館が保管していた歌詞を記載した紙に沿って、以下に掲載する。なお番号については踊り方の説明で便宜上、筆者が追記した。以下で参照する歌詞については紙に「S60、8、1日 作成 上西目公民館 合同之会」と記載されている。ただし映像で確認する限りでは、現在の歌の文句は以下の歌詞と必ずしも合致するものではないことを了承されたい。

①では

かねとりて（はし？）うれしうれなわ むさしのーお
しんますやまの わがおもい ぐさーあ
しいげれ しいげれ しげれよお おさまるみよこそ
めでたけれえーええ

②むつましや

むつましや またえと しさに
にしだせめの かねてよごとに
かわるるものわ たがよいに
そめして くるかみの
むつれいて とけるよー たのもしや
たのはああきのーの
まねすのすすきよーすすき ★
なびくな きよく ものなやー

③あきのたのー

あきのたのかつほのいろを見るからにいー
いちぶにこわがなつたはら
さでもさでもさでもめでたいごよなれろー
(とおから) むつつれて
またむつつれて ナニつれそがのよ
つれいとー (こ) ころざすー うう

④ようようおのー

よよのたけながわえらもとよい (に?)
しめてよ しまら えのもと よいに
いつのいふれしのまくらとーまくら
えんとえんとおのーよいもとよーいに
なじゆ、おーかさはしあまたのせきよー
しのぶながしの もとよいにー
んなれど よいにふられし かりもよいにー
はだとはたどのよりもどよいに
よいこのよーいこのこのこのこのこののー
こまくらーもちてーいくよかさねしなー
しなーああー がわえのもやよりー

⑤ちばやふるー

ちばやふる ちばやふるー
かみのまえのすづのおとー おお
かぐらをとりてさんざすどこえ
まんざいのくには いのちをたもつ
あいとおれいの おまつかぜえー

⑥したには

したにはもくの こざくらや
かわにはさぎを こうーき
まーで てしえー
わけゆてえいのいとざくらーああ
いくて あまたの なれゆうて
せめてひとよしよ かわぶねに
えいほーよー すすめー しのー ■
くまがえの たけき ころろは
とらのー 千里を通う恋の道い
しのぶに づうはありあけざくら
きみは なさけの うそざくら

⑦※後歌

みなみさがりの ほりかわの
しろさぎおりてホロロうつ
ホロロは うたずに つるの子が
ぜにかねふまえて幸(?)をまう
まことにそれがめでたけれー

※★や■の記号は筆者が加筆した。また、「?」は歌詞カードから正確に読み取れない箇所を示している。

踊り方は上西目では「しよしやまー」と呼ばれる。本稿では便宜上「踊り方」

で統一して表記する。踊りを習得するには踊りだけではなく歌が重要であり、言い換えれば「歌に踊りがついていく」のだという。特に盆踊りは願成就の大踊りに比べると難しく感じるようである。それは大踊りが一定の踊り方が繰り返されるのに対し、盆踊りは繰り返しが少なく、一つの曲の中でも途中から踊り方が変わったり、後ろへ回転したり、足の運びも三歩進んで二歩下がるなどより複雑だという。特に④「たけなが」「ようようの」とも呼ばれる）や⑥「したにわ」は途中からテンポが上がったり、踊り方がついていくのが大変で難しい。

踊り方の全体的なコツは、平野と同様であり、手踊りも扇子をつかう踊りも「やわらかく」おこなうことである。手をぶらぶらさせるような脱力した動かし方をするのではなく、指先や扇の先から動かすようにして、細部にも注意して動かす。その際に単に手や扇の先だけを動かすのではなく、肩から腕、手へと動かすようにする。手を伸ばすような動きも完全にピンと張って伸ばすのではなく、やや肘を曲げている。手も完全に真つすぐ伸ばすのではなく、基本的には器のように指を少し曲げる。逆に大げさな動きは「品（ひん）がない」ので気をつけなければならない。手や扇子を上げる時の位置は基本的に目よりも少し下の位置であり、極端に高かったり低かったりしてはいけない。手や腕だけではなく、体全体を使い、背筋を伸ばすというよりも腰を少し落として膝をゆつくりと拍子に合わせて曲げて踊る。特に片足を前に出して腕をやや後ろに広げたり引いたりする所作はやや反り腰でおこなうのがポイントだという。足の運びは高く上げず、基本的にはすり足である。一歩足を出すときにも少し前に出す程度で踏ん張らないようにする。

時系列で追っていくと、まず寺の正面へと入場する際の隊列は、踊りの人たちは一列になり、師匠を先頭に、音頭取り、あとみが続き、最後に四番師匠、三番師匠、そして最後尾に二番師匠となるように配列する（図1）。また歌は経験の浅い人などうまく歌えない人は列の中で後半にまよって配置し、師匠や音頭取りなど歌える人は前半にまよって配置するようにしているという。歌える人と歌えない人を交互に入れると逆に歌いにくくなるからだという。笛、太鼓、太鼓持ち、入れ鉦の楽の人たちは入場行進する前は師匠の横に内側に並ぶ。たまに笛は師匠が兼任することがあるが、その場合は師匠の立ち位置でおこなう。行進する前に楽の人たちが奏し、ここから①「デハ」（もしくは「デワ」）が始まる。入場の合図の音楽を奏し終わると、踊りの人々と楽の人々が

それぞれ行進し、踊りの人々は円形になる。円形になり、演奏が終わると笛の人は踊り手として踊りの輪の中に入る（図2）。

次に①「デワのうた」がはじまる。これは「踊り始め」、「ミチウタ」、「カネトリ」とも呼ばれる、後述する中西目で言うところの「本踊り」に入る前の「庭づくりをする」ための踊り歌である。入場行進で円形を作った時と同様に反時計回りに進みながら歌い踊る。手踊りである。

②「むつまじや」が始まる。上西目の盆踊りで特徴的なのは、新たな踊り歌が始まる前に踊り手たちは中腰の姿勢で待機し、その間に音頭取りがカンモクを顔から頭にかけてしゃがみ、扇子の手で持つ骨の部分の部分を地面につけ、それを支えにしてお尻を上下に動かしながら歌の最初の文句を歌う。この音頭の取り方は②から⑥までそれぞれの踊り歌が始まる前におこなわれる。それが終わると、踊りの人々全員での踊り歌がはじまる。「むつまじや」からはこれまでと逆回りで時計回りに進んでいく。そうすると、踊り手の並び順があとみを先頭として考えられ、あとみ、音頭取り、師匠、二番師匠、三番師匠、四番師匠の配列順になる（図2）。「むつまじや」に頻出する、手を

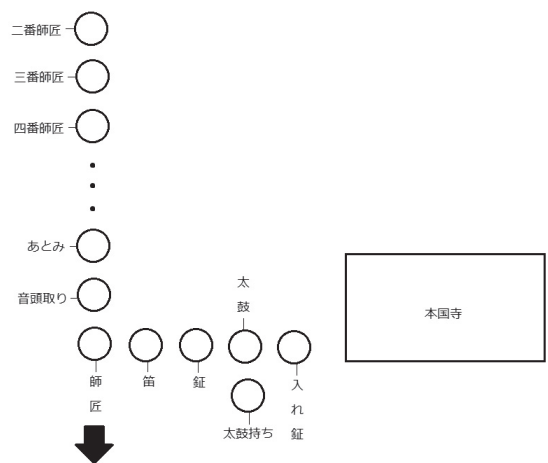


図1 上西目盆踊り入場前隊列

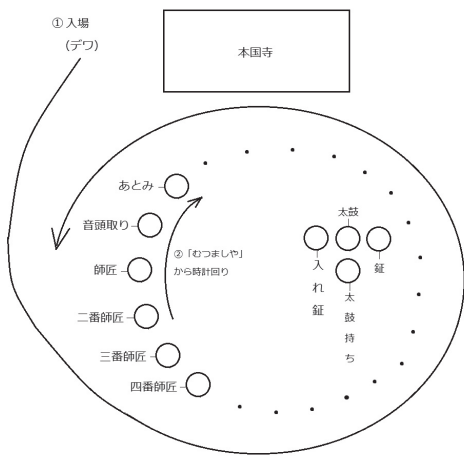


図2 上西目入場、踊り隊形

上下や左右に移動させるような動きがあるが、その場合は手首を使って手のひらを「かえすような」動きである。また全体的に左右に回転する動きが多く、歌のリズムから遅れないようにする。「すすきよー」（歌詞の★の箇所）では、両手を上げて何かを「かぶせるよう」な格好で左右に「流すように」動かすのがポイントである。一通り歌い踊ると、最初から繰り返して「むつまじや」から歌い踊る。この繰り返しのことを「かえし（返し）」と呼ぶ。この「かえし」は②から⑥のそれぞれの踊り歌にある。

次は③「あきのたの」で扇子踊りである。これ以降の踊り歌は手踊りと扇子踊りが交互に続く。扇子の基本的な動かし方は親骨に軽く指を添えるように持ち、手首を使ってひらひらと動かす。特に八の字に回すように扇子を動かす動作で見られるように、「上品に」「ひっくり返さんば」いけない。一節歌い終わる時に、最後の言葉の母音を二回細かく刻むように歌うが、その時の扇子は言葉と連動して少し右下におろす。また扇子の端を両手で持つ所作があるが、両手で持つのは親骨の先（末）であり、右手で持っている方を自分の身体に近づけて低くし、左手で持っている方を体の外へやや高く上げ、斜めになるようにする。この時高く上げている部分が目の高さと同じになるようにする。

④「たけなが」または「ようようの」は手踊りである。上西目の人々は対外的には「たけなが」と呼んでおり、上西目の盆踊りの特徴的な踊り歌であり、「上西目だけが続けてきた」という自負もあるようである。踊り手たちが挙げる「たけなが」の難しさとは他の踊り歌よりも最初からテンポが速めであり、そこから徐々にテンポが上がる「調子のよか」点である。「ゆつくりすぎたら張りがなくなる」ので、歌も太鼓も「どんどんせめていく」ように踊り歌うことが目指されている。しかしその分、踊る人々が歌に踊りがついていくのが他の曲に比べて大変であり、全員が踊りを揃えて踊るのが難しい。「たけなが」では踊りの人々は全体的に手の所作がない箇所ではかかとを少し上げてトンと下ろして拍子を取るような動きが目立つ。冒頭に中西目で言うところの「ふりおとし」のような所作があるが、この時は手がやや内向きになり、手を上げるまでに下から上に持ち上げるように動かし、下にふりおとし。また後半では左右交互に手首をくるっと回転させ手を返すような所作が続くが、この時は目より少し高い位置に手を上げる。

その次は⑤「ちばやぶる（ふる）」と呼ばれる扇子踊りである。所作は③「あ

きのたの」と基本的に同じで扇子の使い方も同様である。

「本踊り」としては最後の⑥「シタニワ」は「たけなが」よりも難しいと言われることもある踊り歌である。この踊り歌も「くまがえの」あたりからテンポが速くなるので歌と踊りが遅れないようにするのが難しいようである（■の箇所）。冒頭から回転する所作が連続するので、それも難しさの一つのようである。またこの踊り歌では両手を後ろに引く所作が他の手踊りよりも頻出するので、ただ腕をぶらぶらと動かすのではなく、肘を引くようにし、またそれと連動してやや反り腰で膝を曲げて足をうまく使って所作をおこなうのがポイントである。

最後は⑦退場の曲である。⑥の「シタニワ」が終わっても踊りの人々しやがまずに立ったまま⑦に入る。これは「本踊り」ではなく、平野や中西目と言うところの「引き端」だが、上西目では「引き端」とは言わず、「かえり」や「もどり」などと便宜的に言われている。この踊り歌自体が「終わりの合図」として認識されている。踊りの人々が閉じた扇子の扇面をもって太鼓の打つ拍子に合わせて扇子を動かし、足を動かす。この踊り歌はこれまでの踊り歌とは異なり、「テンポよく」、「からだがりノリノリ」で踊り歌わなければならない。

これが終わると踊りの人々は一列になって入場してきたところへ戻る。退場の隊列は師匠、一番師匠、三番師匠、四番師匠と続き、最後にあとみ、最後に音頭取りの配列で退場する（図3）。楽の人たちは最初は師匠の内側に横並びになり退場し始めるが、演奏しながら退場するので踊りの人々との退場のスピードよりもゆつくりと退場し、踊りの人と楽が完全に退場し終わるまで演奏する。

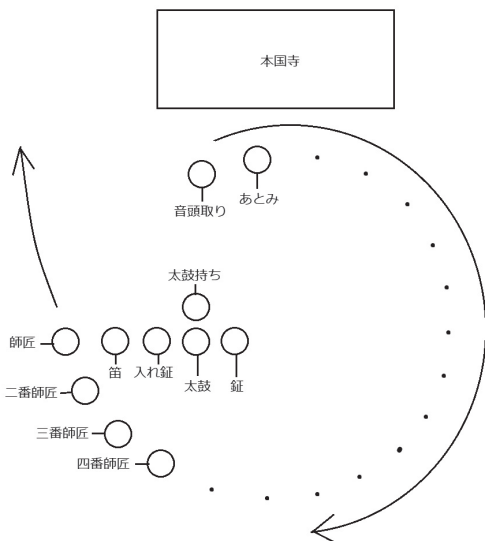


図3 上西目盆踊り退場隊列

これまでの継承状況

直近で二番師匠を務めた小脇静己氏は、野尻集落の出身で父も盆踊りと願成就の大踊りに共に踊っていたという。静己氏は高校卒業後に島外に就職したが、二十歳の野尻に戻ってきた（一九八一年頃か）。戻ってくる時有無を言わさないう雰囲気でも踊りに参加することになったという。その頃は練習を一月間ほば毎日、午後八時ごろから長い時には十一時頃まで練習していた。若い頃は恥ずかしさもあり父に踊り方の教えを乞うことができず、他の先輩たちの踊りを見よう見まねで覚えていったという。先輩たちは手取り足取り教えるのではなく、踊っていない人がいると、踊っている最中にその人の斜め前に来て、何も言わずに文字通り姿を見せて教えたという。歌はなかなか覚えるのが難しく、最初は「うそでもいいから声を出せ」と言われたという。静己氏は皆との練習の時以外も農業をしている時や寝る時も歌を口ずさみ、昼でも夜でもどこに行くのにも歌って覚えようとした。最初に本番に参加したのは願成就でのヤートセーだったという。五十三歳の時に願成就の大踊りの師匠を務めることになり責任感が出てきて、父にもようやく踊り方を聞けるようになった。その後、盆踊りで二番師匠を務めることになり、二〇一六年十一月二十六日に第六十五回全国民俗芸能大会に出演した際は、慣れない舞台上での出演であった上に、二番師匠の立場から所作を間違えないようにしなければいけないと思い、大変緊張したという。

小脇隆則氏は父、清明（きよあき）氏が十三歳ごろから踊りに参加し、若くして音頭取り（盆踊りと願成就の大踊り）を務めていた人であった。清明氏は一時期はたばこの栽培をしており、その選別作業の際に歌の練習のためにテープに吹き込んだ歌を繰り返し流して口ずさみながら作業をしていたという。それを幼少期の隆則氏は耳に舐舐ができるほど歌を近くで聞いていた。音頭取りはその後、小脇春夫氏になり、直近では小脇尚武氏が務めている。一度島を出た隆則氏は三十二歳ごろに野尻に戻って家を建て「本戸」になると、父は踊りからインキョ（引退）した。隆則氏は戻ってきてから二回目の盆踊りで二番目の師匠に選ばれ、練習では盆踊りを復活させた先輩に「近くで覚えろ」と言われて踊りを覚えていった。直近では盆踊の師匠を務めることになったが、全体で練習が始まる前に、個人的に撮ったり教育委員会が所蔵している盆踊りの映像を見直し、「我流で変わってしまう」踊りを直すために「原点にもどる」作

業をおこなうという。自宅で歌を聞いていた隆則氏の長男は小学生のころから歌を覚え、隆則氏の代わりに歌えるほどになっていったという。

しかし全体的な継承を見ると、現在は参加者の平均年齢はおおよそ六十代であり、隆則氏以外に師匠をする人が（盆踊りも大踊りも）いない。音頭取りや笛の人も長年同じ人が務めており、後継者がいない。特に近々の課題としては太鼓をおこなう人がおらず、次に本國寺で上西目として盆踊りをおこなうまでには太鼓をできる人を見つけて練習しなければならぬ。インキョした太鼓の師匠はいるという。太鼓に限らず、楽器は踊るよりも難しく、誰しもができるわけでもない。後継者育成がうまくいかない。昔は特に楽は「本戸」で受け継がれており、楽器ごと父から息子へと引き継がれていた。踊りに関してインキョした古老で教えられる人は隆則氏の父、清明氏（二〇二二年時点で八十五歳）くらいしかいないのではないかとのことである。上西目には「本戸」ではない二十代もおり、現在は「本戸」かどうかに限らず踊りに参加できるが、実際には参加していない人もいるという。隆則氏は新たに参加する人の可能性として、上西目への移住者、そして上西目の両集落の出身で今は島内の別の集落に住んでいる人にも範囲を広げることを考えなければならぬのではないかと。またはもともと同じ「たけなが」を持っていた砂坂・官造牧集落の人との合同も一つの方法であると言いつつ、実際にすでに願成就の大踊りは合同でおこなっている。

五―三 中西目の盆踊り（きのぎの）

中西目とは小田集落と前之原集落の西之校区の一つの名称であり、中西目の盆踊りはこの二集落の人々によっておこなわれている。盆踊りの呼称は「盆踊り」の場合もあれば、「きのぎの」と言う場合もある（本稿では便宜的に「盆踊り」と記す）。盆踊りは公民館組織としておこなわれるので、小田と前之原集落の男性が基本的には踊り手ないし入れ鉦（いれこ、小太鼓）として参加する。中西目の盆踊りについて話を伺った戸石助美（といし すけみ）氏（昭和二十六年生、小田集落出身）と小田良広（おだ よしひろ）氏（昭和二十九年生、小田集落出身）によると、小田は約十人、前之原は約五人おり、小田には参加者として一番若い世代である二十〜三十代の人が約五人いる。

基本的には「本戸（ほんこ）」（世帯主）単位で参加しているが、後継者育成

のために親子二人で参加する場合もある。息子が後継ぎとして居る人は、踊りから「インキョ」（引退）できる。それはだいたい六十五歳くらいになると、多くの人が「インキョ」を考える。一方で後継ぎがない場合には七十歳で「インキョ」できる。喪による盆踊りの不参加については、今は特に喪の期間の捉え方が人によって異なり、四十九日、百箇日、一年など様々である。

練習と当日のスケジュール

本国寺から切り紙が八月初旬に公民館に届けられると、近年ではその後から練習が始まる。練習を始める前に、大町（おおちよう）の会という公民館主体の会議が設けられ、中西目の男性が集まり、踊りの師匠、二人の入れ鉦、笛（笛ふき）、踊りの二番手以降の順番（円形で踊るためその配置）を決める。師匠は経験者（歌と踊りが上手な人）または責任者という立ち位置で、踊りの中では先頭に立ち見本となる。師匠は毎回話し合っつてその都度決め直す。二番手は次期師匠を育成するという観点から選ばれる。入れ鉦と笛もその都度決めるが、これら楽器に関しては皆ができるわけではなく「芸者やなければできない」ので、基本的には奏することができると特定の人が毎回おこなっている。現在、笛はリコーダーを使用しているが、昔は自分たちでニガタケを切つてきて笛を作つたという。なお前日に師匠になつた人は「あとみ（後見）」と呼ばれる。

練習期間はおおよそ一週間程度であり、午後七時半頃から毎晩一時間から二時間程度練習する。日程は師匠の予定に合わせて決めていく。場所は小田集落の公民館で前之原集落の人もそこに集まる。これまでは踊りを引退した「先輩」たちが教えに来ていたが、近年では高齢化も進み練習に来る人はほとんどいない。その要因の一つとして、踊り手がこれまでに寺やイベントなどで踊つた際の盆踊りを個人的に映像で撮つており、それを見ながら練習をおこなっていることが大きいという。とは言え、特に新人は師匠の踊り方を見よう見まねで踊れるよう練習する。基本的に練習は連日おこなわれるが、踊り手の中には農業や畜産業に従事している人もおり、その関係で期間中に一日は踊らない日を設けている。

盆踊りの前日（八月十五日）は道具の確認・準備をする。カンモクや花笠が古くなつていれば、カンモクを新たにつくつたり補修したりする。夜には小田集落にある八幡神社（氏子は中西目）の境内で踊る。服装は略式（私服）で、

踊り自体は当日と同様にすべての踊りを踊る。

当日（八月十六日）は午前八時頃に公民館に集合し、「しくみ」として盆踊りを踊る。これはこれから本国寺で踊りに行く前の準備運動的なことであり、服装は略式である。本国寺での踊る順番（一番目に踊る「一番庭」か二番目に踊る「二番庭」か）はすでに決まつているために、その時間に合わせて本国寺へ出発し、本国寺についてから浴衣に着替える。浴衣は自前のものである。昔は師匠は麻の白色の浴衣を着ていたという。本国寺では「本戸」の人や神道で精霊流しをしに来た人たちが寺に踊りを見に来る。本国寺で踊り終わると、「庭くずし」として再び集落で踊る。この時は略式で、タオルや扇子のみを持って踊る。これで「庭がくずれ」、公民館で踊りの人々で多少の酒宴をおこなう。

踊り方（しよしゃー）

ここでは白元秀男（うすもと ひでお）氏（昭和八年生、小田集落出身）、戸石助美氏、小田良広氏による教示のもと、踊り方のポイントを説明する。なおここでは盆踊り全体の流れに沿つた踊り方の逐一の説明はせず、盆踊り全体の流れは、第三章第一節三「西之本国寺盆踊の音楽」での説明と、付属の映像を参照されたい。ここでの踊り方のポイントとは、映像を一通り見ただけでは分からないような、踊り手自身の身体感覚による要点であり、イメージ的な視点である。そこには現在の青壮年層の踊り手には共有されていなかったり、熟練者の間でも若干の異なる踊り方もあり、踊り手と言つても一括りにはできないような経験・認識の差があることは留意しなければならない。それを踏まえた上で、今回は白元氏が復活当初に当時の師匠から教わつてきた踊り方や、その次の世代の熟練者である戸石氏、小田氏の踊り方の記録という側面を重視し、また今後の中西目での踊りの継承に何らかの形で役立てられるように記述する。

本稿で踊り方のポイントを記述するものになるのは、二〇二二年十一月十五日に戸石氏と小田氏に二〇一五年に中西目の盆踊りが本国寺で踊つた際の映像（石堂和博氏撮影）を見ながら筆者が両氏に踊り方や歌い方の教示を受けた内容と、同日の別の機会に白元氏に同じ映像を見ながら同様に筆者が踊り方や歌い方の教示を受けた内容である。また筆者自身は本調査に二〇二一年より参加しているため、実際に盆踊りを見たことがない。それを考慮した上で三氏から

の教示を出来る限り丁寧に拾い、記述することを試みた。読まれる際はこの点に留意されたい。なお、所作の記述に関しては、三氏から教示を受けた内容（「こうする」「こうやってする」指示語を述べながら実際に所作で示されたこと）を文章として分かりやすいように筆者の解釈も含んだ形での記述になっていることは了承いただきたい。三氏の言葉を実際に記述する場合には鍵括弧を使用し、直接引用する。

まずは戸石氏が保管していた歌詞を記載した紙に沿って、以下に掲載する。なお番号については踊り方の説明で便宜上、筆者が追記した。

「盆踊り」

①今年や良い年 穂に穂が咲いて

早生にや八石中生にや九石

まして晩生にや やれ十二石

枳は白金 とかきは黄金

枳もとかきも しゃらりとにおいて

段のお倉 米を箕ではかる

②我と思うよは

恋の通し染めて会うほどに

たとえ会わねど なじみつつ

忍ぶ忍ぶと 通う道は

待つは つらいやきのどくや

思うよ乍らも あいやたみたや

便りを求めて やる文は

必ず 今度は帰れやれ

③今年の年は み石の年よ

白金をのべて たすきにかけて

黄金のお枳に さんさ お手計る

④杵々に 秋の睦事

今は しゃら しゃらに

もしや 別れの袖の文

なじまぬ昔なあーじやもの

幾夜重ねし 情けのおせよう

裏に焦がるる 身は恋ほども

せめて一夜はしても見ようかなあしな

たとえ会わずと 文さえ見れば

文は見せぬ わしじやもの

花は折りたし 梢は高し

心づくしの 心づくしの 見るつらさ

通う嵐の夜もすがら

⑤東町山 西や女郎町よ

中は 天下の

さんさようお寺町

シナノエー

⑥今年は目出たし

まんぞうしの御繁昌

いよう波に揃うたよ揃うたよ

稲の葉色は山を越えて

いといとしの嬉しそう

殿のお倉米 箕ので計るよ

島田峯 俵くくりてしめのこえ

しめたてたえ

此のお庭にはえ立てたて

⑦南下りの堀り川に

白さぎ ほれてほのの打つ

ほのうは打たずに鶴の子が

銭金まいて 愛を舞う

誠にこれが 目出たしや

踊り歌の前に入場があり、「出端」と言われる。まず入場行進の前に、入場の隊列の状態で笛と太鼓が奏されて、それが入場の合図になる。改めて笛と太鼓が奏するとそれに合わせて踊りの人々が入場する。入場隊形は二列になっており、一列目は先頭に師匠が位置し、師匠の後ろに二番手以降の踊りの人々が続く。師匠の横には内側に笛、入れ鉦二人の計四人が横並びになり、実質は四人が先頭のような形で入場する。円形になった時に笛の人は師匠の前に入る（ことが多いという）。二列目は先頭が「あとみ」でその後ろに何人かの踊りの人が続く。明確に配置の順番が決まっていけない踊りの人々は、経験のある人と浅い人がおおよそ交互になるよう配置されている。一列目は反時計回り、二列目は時計回りと逆方向から入場し円形を作る。よって円形になる際には後見、笛、師匠、二番手、三番手…となり、笛と入れ鉦は円形の内側に入る（図1）。笛とあとみの配置が変わるのは差し支えない。ただし一列目・二列目というのう言い方からも、認識としては入場時に全員が一列に並んでいるが、便宜上二列にしたようである。

円形になると①の「出端」が踊り歌われる。入場自体も「出端」であり、①からはその踊り歌ということである。手踊りである。この間に師匠の横に並んでいた入れ鉦が奏しながら円の中心へと移動する。円は人数が多いほど輪が大きくなり「品（しな）がある」という。

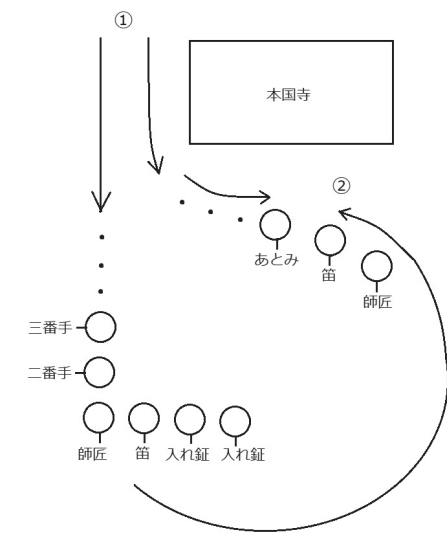


図1 中西目盆踊り入場隊形

「やわらかくおどらんばいけん」とのことである。ただし、柔らかいと言った時のニュアンスは踊る人によってやや異なるようである。例えば、手をピンと真つすぐ、指を開いた状態にするのではなく、器のようにやや丸めた状態を維持する人もいる。扇子を使った踊りの際は扇子を「品よく」使い、扇子を下ろす動作もゆつくりとおこなうことを心掛けている。踊る際に足の運びは平野の盆踊り同様に、足の裏を見せないようにつま先から下ろし、足自体も高く上げずすり足に近い形で足運びをおこなう。歌い方は「なるべく（音程を）高く歌う」ことが望ましい。それは踊りの人々はカンモクを被っていて声を通りにくい状態であることが関係している。

②から「一式の踊り」もしくは「本踊り」になる。②の踊り歌は歌詞の冒頭を取って便宜的に「われを思う」と呼ばれている。二回繰り返し返す。これは手踊りで、中西目の他の踊りであるヤートセイに「しよしゃー（しよしゃ）」（所作）はほとんど同じである。戸石氏や白元氏がポイントとして挙げたしよしゃは、本人たちが個人的に「ふりおとし」と呼んでいるもので、②だけではなく盆踊り（手踊り）全体を通してよく出てくるしよしゃである。これは右手をすぐに右肩の位置にパツと持つてくるのではなく、左脇下からやや斜めに回すように右肩の位置まで右手を持つてきてそこから下へと「ふりおとし」動作である。もう一つは戸石氏が「おっしやり」と呼ぶしよしゃで、これも手踊り全体で出てくる。これは両手を左脇下から正面でやや回すように移動させ、そこから手のひらを上にあげてそれぞれの手を体の両側面に沿わせ、ひざをゆつくり曲げる動作と連動して両手をその状態のまま少し上下に振る動きである。踊り終わりのしよしゃは、右手で軽くこぶしを作りそれを額にあてる。このしよしゃは後の曲でも踊り終わりもしくは一節の終わりが出てくる。

③は「扇子踊り」、「今年の年は」と言われる。扇は基本的な位置は目の高さである。「本踊り」は手踊りと扇踊りが交互におこなわれる。これは平野の盆踊りと同じ流れである。この手踊りは⑤の「扇子踊り」のしよしゃと同じである（歌詞は異なる）。しよしゃの中でくるっと回るのがポイントになり、これが他の踊りとの大きな違いであり特徴であるという。ただし踊りの人々がタイミングを合わせなければ踊りが合っていないのが目立つので、難しいという。

④は中西目の盆踊りの名前にもなっている「本踊り」であり、「きのぎの」と呼ばれている踊りである。歌詞の冒頭が「杵々」であり、ここから盆踊り全

体の名称も「きのぎの」と呼ばれるようになったようである。この「きのぎの」が一番難しい（「わざわざらしい」）踊りだとされている。歌詞も長く、また歌も節回しが長く、引き延ばすような歌い方も難しいと感じる一因だという。さらに後半の「文は見せぬ」から歌や踊り方が変わるのでそれもまた難しく感じさせているようである。冒頭の「きのぎの」の歌詞を歌う時に「手をあげておろし」、「足をトントン」と動かし、「足で踊って次のしよしゃにいくのが「かっこいい」という。この「トントン」の時に「背が伸びて」おこなう。また「しやらしやらに」（実際には「さらりさらり」に近い発音をしている）を歌い踊る時も同様に「かっこよく」踊る。「なじまぬ昔なあーじゃもの」の歌詞の部分では、両手のしよしゃが単に体の前で横に「はらう」ような動作ではなく、体の後ろから両手をもってきて、横に「はらう」。このように手のしよしゃは「注意を入れてせんと」体の前で処理しがちなので、意識して体の後ろ側もしよしゃの空間として使っている。「幾夜重ねし」ではバツ（もしくは山）をつくるようなしよしゃが特徴的である。「裏に焦がるる」の一節は「足踊り」になり、手のしよしゃはない。その次の「身は恋ほども」では額に手を当て、覗くようなしよしゃをする。この時の手の形は拳ではなく、手を軽く曲げる程度である。「たとえ会わずと」の歌詞からの一節は「二回行って一回バツ」し、それから「くるっと回る」のが難しいポイントである。「花は折りたし」では「はな」の言葉に合わせて（足を）バツクする。「見るつらさ」では太鼓のリズムと合わせて膝を曲げながら一歩ずつ進むがその際に両手で両ひざあたりの浴衣をつまむ。この時の歌い方は「歌を引っ張らんと踊りは続くけど歌が終わってしまう」ので、「見るつらさ」を「みいるうううつううらさあよ」というように母音を伸ばして歌う必要があるという。このように「きのぎの」は歌詞さらには単語レベルで個々のしよしゃが当てはめられている。これを二回繰り返す。

⑤は再び扇子踊りで、「東町山（ひがしまつちやま）」と呼ばれている。しよしゃは③の「この年は」とほとんど同じである。これを二回繰り返す。

⑥は手踊りに踊り、「まんぞうし」と呼ばれている。この踊りは繰り返さないう。これも「難しい踊り」とされている。特徴的なしよしゃは「山を越えて」で左右に向けて手を額に当て眺めるようなしよしゃがあり、白元氏によると、「下の方へ手を広げる」しよしゃがあるという（山を越えて」という歌詞を体

現するしよしゃか。「島田峯」では峯を表現するかのようになり、額の上に両手で山の形をつくる。

⑦は引端であり、「帰り」「戻り」「南下（さ）がり」とも言われる。これまでの踊り歌の中では一番テンポが良く、踊る人は閉じた扇を持って拍子をとるように動かして歩き、円状に回る。この踊り歌の中で、入れ鉦が太鼓を打ちながら師匠の横へ移動するなど退場の準備をする。この時は笛の人はまだ踊る人の輪の中に位置している。歌が終わると、笛と太鼓が奏され、一列で入場してきたところと同じ場所へ退場する。この時の先頭は、師匠、笛、入れ鉦（二人）の四人である。基本的に四人は横並びであるが、多少前後することもある（図2）。

全体的に歌詞の一節や単語に合わせてしよしゃが移り変わり、またの「山を越えて」や「島田峯」などその言葉を体現するようなしよしゃをいくつか確認できるのが中西目の踊りの教示の仕方特徴的である。

これまでの継承状況

白元秀男氏によると、中西目の盆踊りは戦前に一度中断しており、戦後約十年後に復活した。もともとは小田集落が法華宗、前之原集落が神道だったため、小田集落の人のみで盆踊りを踊っていたが、戦後に（校区単位ということ）共に踊るようになった。戦前にもともと踊っていた人が再び踊り手となって、中心メンバーとして動いた。当時は集落の人数も多かったために、復活当初は二十代の若者は踊れなかったという。白元氏は二十代から踊り歌の練習には参加していたが、盆踊り当日には人数が多すぎて参加できず、三十歳ごろにようやく盆当日にも参加したり、師匠を任されたりした。当時は青年団が十五歳から

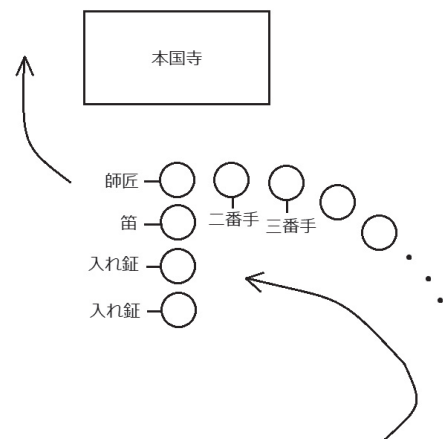


図2 中西目盆踊り退場隊列

二十五歳までで、壮年団が三十五歳以上だったので、青年団から壮年団に移行する段階あたりで盆当日の盆踊りにも参加できたということになる。復活当初はもともと踊れる人ばかりだったので、練習は一週間から十日ほどしか練習しなかった。

しかしその後、戸石氏や小田氏が二十〜三十代で参加したころには一カ月間毎日練習した。その当時はインキョした「先輩たち」も練習を見に来て、「そこはちごう（違う）」などと踊りの指摘をしていた。しかしその「先輩たち」の中で意見が分かれてしばしば争いが起こっていたという。今はそのような「先輩」も少なくなり、むしろ練習に招待したとしてもなかなか来れる人がいない状態である。何よりも過去に撮影した映像が「先輩」として教材になっており、練習の仕方も変わっている。また、盆踊りは「きのぎの」の曲を中心に難しいしよしゃがあり、決して簡単に踊れる踊りではなく、毎年踊り長い年月をかけて踊れるようになる踊りであるが、願成就で踊られる大踊りの方がより難しいと認識されている。

（荒木）

第二節 横山盆踊

一 横山盆踊の概要

横山の盆踊は現在、西之表市上西（かみにし）の横山神社境内にて新暦七月の第二日曜日に踊られている。踊も歌詞も基本は南種子町西之と変わらないが、七夕竿を持ったチヨウという役割が登場すること、中のガク（楽）を取り囲む輪が二重であること、歌詞の中に阿久根千代女なる人物を歌う部分をもつことなどが特徴である。昭和四十二年四月に西之表市の、昭和四十三年に県のそれぞれ無形民俗文化財、平成二十九年には国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財」に指定されている。

村田熙による昭和四十八年の報告「西之表市横山の盆踊」（註1）に「横山はかつて阿久根地頭比志島国隆と阿久根千代女の流謫の地であり、不幸にも寛永五年、両人がこの地で自害したので、その霊を弔って、命日の旧七月七日に盆踊が踊られるようになったと伝えられている」とある。これは今でも横山にて語られている。

横山の盆踊が西之のそれと基本的に共通し、阿久根千代女が歌われるのが盆踊の中のごく一部であること、横山（かつては横山を含む六集落）以外ではこれが歌われた気配がないことなどから、「阿久根千代女」の歌詞は阿久根千代女の死を慰撫するためにこの地で作られ、旋律も既存をモデルとして、すでにおこなわれていた盆踊の中に歌い込まれたものと考えるのが自然である。

デハ（入場）・ヒキハ（退場）も含めて現在は六曲が歌われている中で、阿久根千代女にかかわる歌詞は三曲目だけである。三曲目というのは現在のこと、昔からそうだったかどうかはわからない。しかも千代女が出てくるだけで、比志島国隆のことはまったく触れられていない。千代女についても、出自や彼女を襲った事件についても歌詞には何も歌われていない。しかし人々はその背景にある事情、つまり歌とは別に国隆と千代女の物語りの伝承があり、そのことが了解されている。歌の背景として、それを説明する物語りが前提されているということである。歌と物語りは双生児として誕生するという、日本古代歌謡発生の轍はここでも踏まれていることには注目していいだろう。

横山盆踊が踊られる横山神社（もと満徳寺）、比志島国隆の事件や千代女について書かれた文書類、神社境内に立つ石碑類を検討することによって、伝承

の背景を探ってみたい。

（一）横山神社（旧満徳寺）

第二章「調査地域の概要」で述べたのでくり返さないが、江戸時代の西之表村は現在の西之表市域ではなく、市街地とその周辺をさし、市街地を中西として北を上西（かみにし）、南を下西（しもにし）と三分して呼ぶ。中西という言い方は現在ほとんどなされず、上西と下西は今も使われている。横山は上西にある。

市街地から北東への登り坂を数分も車を走らせると、台地の中の少し窪んだところに出る。湊川がこのあたりを水源として南東へ流れ、現和の海岸へ出る。ちょうどその湊川の始まるあたりの横山を中心として西の台地上に栢之峯（はじのみね）・池之久保があり、窪んだところに横山、湊川に沿って平田・本立（ほんだち）・石堂があり、この六集落は合わせて明治三十七年頃は横山方限と呼ばれ、盆踊も六集落合同で踊られたと前掲村田熙報告にある。現在六十戸ほどで人口は百人程度である。海に面せず、農業と畜産を主としつつ、近年は勤め人が多い。

盆踊は新暦七月の第二日曜日、横山神社境内で踊られるが、ここには明治の廃仏まで満徳寺があった。『西之表市百年史』（註2）によると、大同年間（九世紀初め）創建とされる島内最古の律宗慈遠寺の僧が応永年間（十五世紀初め）に建てたという。元禄二年編集の『懐中島記』には満徳寺は「寺領二斛」とあり、社壇・仏祖一堂・客殿・庫裏を備えており、赤尾木（市街地）の特別大きな三ヶ寺（慈遠寺・大会寺・本源寺）を除いて、島内各地にあった寺の中で標準的な寺領とはいえず、境内地は驚くほど広い。西側の小丘の上に横山神社の本殿（小祠）が立ち、その前面下に拝殿が建っている。周辺にはいくつもの石塔や、盆踊の由来を記す石碑や、故事を誌した案内板などがいくつもあって古色を湛えている。拝殿への階段付近は庭園跡を思わせるたたずまいである。境内の南側半分は大木の林になっており、樹林の中に参道がある。夏は涼しい風が吹き抜け、静寂の中に凜とした雰囲気がある。ほかの寺院にはない風格は古刹慈遠寺の伝統を引くのであるうか。境内北側の一角に横山公民館があり、公民館と樹林の間の空間が盆踊の場所である。

横山神社本殿の横（丘の上）に寛永五年に自害した比志島国隆と阿久根千代

女の墓石がある。実はこれは墓ではなく、天明三年に国隆の末孫が建てた供養塔である。では墓はどこにあるのか。横山神社の東方向の農家の庭先に建てられた細長い自然石が千代女の墓とされ、隣家（長野家）が代々これを守ってきたという。しかし国隆の墓所はわからない。島津藩の国賊として処理されたために墓石は建てられなかったようだ。国隆の塾居の場所も切腹した所も満徳寺と思いたいところだが、それをほつきり示す材料はない。このあと述べる子島本『横山物語』は、切腹の場所を千代女の墓石のある長野家と見ているようだ。国隆は長野家屋敷内の草庵に塾居し、監視のもとに置かれたのだろう。このあと見るように世話は麿府から付き従った使用人がした。訪ねてきた千代女と幾日をとともに暮らしたのだろうか。二人はここで自害し、千代女の墓石は右に述べたように庭に建てられているが、国隆の墓石はようとしてわからない。

満徳寺は明治の廃仏によって撤去され、跡に横山神社が建てられるが、ご神体は国上（くにがみ）の奥神社（祭神は山の神）の分霊だという。なお現在、同じ発音（まんとくじ）の萬徳寺（万徳寺）がことはかなり離れた種子島高校近くにあるが、浄土真宗大谷派の寺で、明治以後に建てられた別寺院である。

（二）比志島国隆遠島事件

比志島国隆事件は事実だが、人物についても事件についても詳細はよくわからない。事件を誌した公的な資料として二点がある。まず『種子島家譜』を見てみよう。鮫島宗美による和訳本（註3）を引用する。

『種子島家譜』

○寛永五年戊辰二月、山田主計有真、最上土佐義辰、黒田友右工門、警護、足軽四人、比志島宮内少輔国隆及び其の家人四人を護送し来る。廿五日、之を横山に放つ。

○十一月、国隆を誅すべきの命あり。同晦日自殺す。（国隆の妾中将なる者あり。殉死を請う。国隆之を聴（ゆる）す。まず中将を殺して後自殺す。国隆五十一、中将年三十五、云々）検使上妻寿木、西村越前時昌、平山内膳友嘉、遠藤内六兵工家成、西村二郎兵工時景、名越段兵工等なり。（平山友嘉、麿府に於て国隆を誅すべきの命を蒙る。即ち検使を請ふ。官命に曰く「麿府より検使来るあらば、即ち却つて之に背くの意あらんこと必せり。故に宜しく忠時の

家臣をして検せしむべし」と。後、国隆に従ふ所の男女麿府に帰る）

右の和訳本には読点のみが付けられているが、意味の区切りで句点に変えた。国隆の罪状については何も書かれていない。「警固、足軽四人」を「警固役の足軽四人」と解釈すると、寛永五年二月、役人三名と警護の足軽四人の計七人によって、比志島国隆を含め五人が護送されてきた。国隆以外の四人は家人「けにん」と読むべきであろう。つまり家族ではなく、使用人（世話係）だったことは最後の「後、国隆に従ふ所の男女麿府に帰る」の表現でわかる。上陸地点は明示されないが、常識的に見て赤尾木港（旧西之表港）だったであろう。実は息子も屋久島に流されたことは、このあと取りあげる『本藩人物誌』でわかる。役人三名と足軽四人の役目は護送だけで、種子島到着のあとは種子島家の役人に引き渡したように見える。

検使を命じられた六名のうち平山友嘉は、麿府の種子島屋敷にて最終的な処置の実行命令を受けたようだ。その他の五名は赤尾木在勤の種子島家の家臣である。検使とは処罰（この場合は切腹）がおこなわれたかどうかを確認する、ないしは実行させる役目であろう。「麿府より検使来るあらば、即ち却つて之に背くの意あらんことを必せり」とはどういう意味だろう。藩から検査官が来るようであれば、種子島家に委任された処置が信用されていないことになるので、十分に使命を果たすように、という強い指示が平山友嘉には下されていたように読める。国家老までつとめた人物を処罰することに躊躇があるかもしれないという心配があったことが見え隠れする。二月に配流されてから十一月まで、種子島家には緊張が張り詰めていたことであろう。

次に『本藩人物誌』（註4）の記載を見てみよう。国賊の部類に比志島国隆が出てくる。中割は括弧で示す。

『本藩人物誌』（一）

比志島宮内少輔国隆（彦四郎） 紀伊守国貞嫡子（天正四年誕生） ○朝鮮御供（泗川軍黒色威） ○「慶長十一年十一月廿五日犬追物射手犬九疋ヲ射ル」 ○元和六年八月父国貞引続高岡地頭寛永四年迄 ○寛永元年 家久公御家老職被仰付候 ○寛永四年国隆罪科ノ条々被仰出御家老職御免ニテ河辺保福寺へ寺領被仰付所領家財没収被仰付同六年種子島へ配流其後切腹被仰付候（国隆子内

記八屋久島へ配流後被召直善八家之二男家二相立候。○没収ノ銀三百五拾貫目ノ内高三拾石買地ニテ国隆父国貞ノ寺へ御付被成候国貞忠節故也国貞後室ノ知行ハ如元被下置候

鹿兒島市花野の西側に藩政時代には日置郡に属する比志島村があった。現在の鹿兒島市皆与志町に当たる。『郡山郷土史』(註5)や『加治木郷土誌』(註6)によると、比志島氏のルーツは加治木にあり、鎌倉時代の初期に旧郡山町(當時は満家院)に満家院(みついえいん)院司として赴任してきた大蔵氏を祖とし、比志島から小山田あたりを支配した。土地名を取って比志島氏を称し、国隆はその末孫である。代々島津家の武将として奮迅、国隆自身も若くして朝鮮の役に出征し、犬追物の名手だったらしく九疋も射るとある。これにカギ括弧がついているのは、この部分が朱で書き込まれていたことを示す。元和六年には父の跡を継いで高岡地頭、寛永元年に家老職に就任している。しかし三年後の寛永四年「罪科の条々」によって免職となり、川辺の保福寺(宝福寺のこと)へ寺入り(監禁)となった。寛永六年(一六二九年)種子島へ配流となった。『種子島家譜』では配流は寛永五年とする。ここでは『種子島家譜』を取り、『本藩人物誌』は同時代史料ではないので誤認があったと見ておく。

国隆は正式には「比志島宮内少輔国隆」だったことがわかる。「宮内少輔(くないしょうゆう)」は官位である。朝廷の宮内省の上から二番目(宮内大輔に次ぐ)の高位であり、身分は従五位下。とにかく島津藩家老という最高クラスの人物が流されてきた。

罪科の内容については記されていない。その子(内記)も連座して屋久島へ流されたが、家を取り潰されたわけではない。息子はその後許されて、善八家の二男家を継いだとあるから、謀反の類ではない。謀反であればその子息も断罪されたはずである。『本藩人物誌』巻十二の「比志島彦太郎義元」の項目に次のようにある(註7)。

『本藩人物誌』(二)

○庶流宮内少輔国隆罪科ニテ家致断絶候得共国隆父紀伊守国貞忠勤ニテ家久公より新恩地五百石範員へ拝領被仰付候テ国貞跡目被仰付候範員跡ハ同名左京相統ニテ候国貞跡ハ比志島善八ニテ候

国隆の生まれた比志島家は庶流だったことがわかる。父国貞は忠勤だったので、嫡流家(比志島範員)へ五百石が増された。その五百石は国貞(庶流)が継ぎ、嫡流家(範員)の跡は左京が継ぎ、国貞(庶流)の跡は善八なる人物が継いだ。その善八の二男家を、国隆の息子(国貞からいえば孫)が屋久島から許されてのち継いだとする。国隆から没収した財(銀三百五十貫目)のうち三十石は国隆が自分で購入したもので、没収後は父国貞の菩提寺へ寄付となった。国貞の未亡人(国隆の母親)の財産もそのままとなった。というわけで、どうやら国隆は収賄の疑いによって断罪されたような書き方である。家老ともなればそうした誘惑も多かろう。父親のそれまでの忠勤によって、家族は安堵され、息ものに許された。

国隆が最初に幽閉されたのは川辺の宝福寺である。鹿兒島市平川から川辺峠を越えた西側の山中にあり、かなり大きな禅宗寺院だった。地元では「山の寺(ヤマノテラ)」と通称され、政治犯的な人物が幽閉された寺である。有名な事件としては、垂水の新城島津家の当主だった島津久章(ひさあき)が、藩主の座への未練が目にあまるために指弾され、まず宝福寺へ預けられ、しばらくして末寺の谷山清泉寺に遷されて討たれた。正保五年のことである。

前掲『種子島家譜』に国隆死亡は五十一歳とあるので、生年は天正五年頃である。朝鮮の役が終結するのが慶長三年、そのあと庄内の乱、関ヶ原、家康との戦後処理交渉、鹿兒島城と城下町の建設という激動の時代である。原口虎雄は「鹿兒島城下のおもな地域は、おおむね葎草の茂る荒地、または砂地であったので、当時としてはたいへんな土木工事であった。筆者の見解では城下町の建設は寛永年間頃までにやっと目鼻がついて、屋敷割をしたのではないか」とする(註8)。そういう時期に国隆はかなり優秀だったのであろう。京大坂や江戸とも往復したであろう。寛永元年に家老に就任したのは手腕を期待されることであろう。従五位下という高位の官位までもらっている。島津藩の国作りの中で、藩主との間にコンセプトを巡っていくらかの乖離をきたしつつ、大きな勢力を築きつつあったのかもしれない。しかし悲劇が襲った。

同じような時期に平田宗増・頼娃主水親智・北郷忠俊など、譜代の重臣が何人も誅されている。これを原口虎雄は「これらはみな前代以来の功臣であったが、新体制転換期のやむをえぬ犠牲者であった」とする(註9)。つまり幕藩

体制下の島津藩を中世的な家臣団編成から近世的なそれへ質的転換をはかるための（ピラミッドの頂点を形成するための）権力闘争のうねりだったと解釈している。国隆もそのうねりに飲み込まれたということだろう。

口碑としてはどう伝えられているのだろうか。昭和六年の『阿久根町郷土誌』（註10）に国隆のことが少し載っている。これには国隆を「寛永元年国老になる。権勢を好み、同を好み、異を惡み、専ら専断をなし、暴戾にして不義多く、民之を怨む者多し」とする伝承を載せるのみで、具体的な罪状については何も書かれていない。藩側の言い分を踏襲しているだけである。

西之表市の鉄砲館に『横山物語』というタイトルの自筆本が二種類所蔵されている。ひとつは昭和三十五年の子島紉の手になるものと、もうひとつは園田実孝という人による平成三年の日付のはいった自筆原稿を綴じたものである。それぞれ子島本、園田本と呼ぶ。両者とも紙面の多くを占めるのは阿久根千代女についての伝承で、国隆については子島本は「国隆身に犯せる罪ありて寛永五年戊辰家禄を没収され流罪と事定まりけり」とするのみである。園田本は次のように説明している。要約して示す。

園田本『横山物語』

悪政とは、国隆は日州関外地、高岡（現宮崎県）の天ヶ城城主となり、島津家の家老職として当地を治めていた。しかし不幸な事件が突如として起きた。時寛永四年、飢肥の住民が島津の山林に入り、般材として杉板を伐り出しているのを都城の者が発見、これを高岡地頭比志島国隆に訴え出たことに始まった。又飢肥の領民が飢肥領と高岡領との堺の牛の峠にて桶の木を伐り、鑿にて板を作る者あり。庄内の人、これ我が方の山と思ひ、この事を高岡地頭国老たる比志島国隆に訴え出た。国隆直すと命じて飢肥人より桶板を取り上げ、又事起りし時は自分に告げよと命じ、以上の事件をして島津藩は悪政と認めた。比志島宮内少輔国隆身に犯せる罪ありて、寛永五年二月、島津藩の家老としての家禄を没収せられ流罪と事定る。

高岡でのトラブルというのはいわゆる「牛の峠事件」である。都城と日南との間の牛の峠は藩政時代初期、島津藩と伊東藩が領有権を主張して紛争となつた地域だが、右に書かれた国隆の処置は処罰されるほどのことだったのだろうか。

か。典拠も明らかでない。ちなみに前述『本藩人物誌』（註11）には、寛永十一年に日州の牛の峠問題が再び難しくなつたとき、島津家から比志島範員（国隆が家老を務めた時代の比志島嫡流家当主）と頼姓長左衛門が交渉を命じられ、無事に解決したと誌されている。家老であった国隆の処置が仮に適当でなかつたとしても、島津家の利益を代弁しての判断であつて、死罪には当たらない。ただ賄賂はもらつたかもしれない。それが断罪の理由にされたのだろうか。

(三) 阿久根千代女

前述したように横山盆踊の歌詞の一節に千代女のことを歌われているわけだが、国隆は出てこない。国隆のことも少しは歌えばいいではないかと思うのだが、盆踊歌「阿久根千代女」の主人公はあくまで千代女一人である。千代女とは何者だろうか（註12）。

前述昭和六年の『阿久根町郷土誌』に「国隆嘗て阿久根に地頭たりし時、その才色を聞き納れて、妾となしたるなり。その氏名詳ならず、世に称して阿久根中将という」「千代と称するのは野人の訛なりという」とある。千代女の伝承が阿久根にもあるということは、国隆と千代女との関係はよく知られていたのであろう。千代女は源氏名の中將の転訛だという。昭和四十九年の『阿久根市誌』でも同様のことが記され、「千代女は阿久根郷のどこの人であつたのか、その資料の片りんどころか言い伝えさえも残っていない」としている。

いつ頃、どこで国隆と出会つたのだろうか。国隆が阿久根地頭を勤めたのはいつだったのだろうか。前掲『本藩人物誌』では、国隆は家老を勤めながら高岡地頭を寛永四年まで兼任していたような書き方である。阿久根地頭はそれ以前のことだろうか。昭和四十九年の『阿久根市誌』の阿久根の江戸初期の地頭一覧にもない。

国隆は突如失脚し、川辺宝福寺入りのおと種子島に配流された。これを追つて千代女はどのようにして種子島に渡つたのだろうか。盆踊の歌詞に「坊のとば勢に舟乗りて、荒し待ちたる心して」とわずかに坊津町久志の尾場瀬から舟に乗つたと思わせる語句がある。前掲の昭和六年『阿久根町郷土誌』は「坊津まで来て、たまたま種子島庄司浦の漁夫今之丞（こんのじょう）なるもの来泊せりあり。仍てその帰舟に便じて種子島に航す」とある。それを書き留めた

伝承が子島本にあるので、検討してみよう。

子島本『横山物語』

西之表市鉄砲館（西之表市教育委員会管轄）に子島札（「ねじま ただし」と読むか）という横山に在住していた人物が書いた『横山物語』という自筆本（四十九頁の和装本）がある。前掲の村田熙の報告はすぐれた報告だが、歌詞などの多くをこれによっている。

序文や書き込みによると、明治三十五年生まれ、戦後昭和二十一年七月、台湾から引き揚げて横山に寄宿、昭和三十二年三月出身地の中目（西之表市街地）に引越した。この間の横山の方々の恩情に報いる気持ちを含めて、盆踊の歌詞を古老から書き留め、昭和三十五年に横山集落に贈呈したものであるらしい。しかし鉄砲館に現存のものは、子島氏自身によって加筆がなされている。達者な毛筆で書かれ、ペン書きによる多くの書き足しの部分もある。

この中に昭和二十三年七月、当時八十二歳の長野仲蔵翁より聞き取った盆踊の歌詞全部、『老嫗物語』（註13）よりの抜粋、『種子島碑文集』（註14）より朝山治右衛門とその娘についての抜き書き、などがなされている。朝山治右衛門というのは宝永二年、横山に流された佐土原藩の家老である。徳永和喜著『種子島の史跡』（註15）によると、藩主継嗣問題に連座しこの地に流された。父の身を案じた娘（名前は不明）が許可を得て随伴し、十二年後の父没のあともこの地にあつて墓を守った。子島氏はこの二人（千代女と朝山治右衛門の娘）の忠孝の操を顕彰することを目的としてこの本を書いたと推察される。

『老嫗物語（うづおうものがたり）』は一般には目に触れにくいものなので、以下に「千代女」に関する部分を転載する。原文はすべてフリガナが付され、句点のみで、読点と改行はまったくない。以下では読みやすいように句読点を付し、改行もした。

『老嫗物語』より「千代女」

千代女と云ふものあり。薩州阿具根の地頭比志島宮内少輔国隆の妾なり、国隆身に犯せる罪ありて寛永五年戊辰二月、家禄を没収せられ、流罪と事定まりけり。其眷属共嘆き悲しむ中にも、千代女は天地に慟哭して玉乃緒も絶えなんばかりなり。

頃は秋の初つた、警固の土に送られて隅州種子島に流さると聞き、幾度かの暇乞を願ひけれども、罪重ければとて許されず。詮方なければ船出の日にまで立出で、島かくれゆく船を見送りながら別を惜しみけるが、真帆に受くる風強く、船は矢を射る如くにて、跡の嘆は白波の岩打つ音のみたり。

千代女は夫に別れてより片山里に移り住み、月を見ては遠く隔てし荒磯の秋風を思ひ遣り、雨を聞ては過し春の夜のを思ひ出で、起ちても居てもあれこれに物思ひの数の添ふばかり、慰むる事とは更になし。

斯く物思ひに身を尽さんより、配所をればやと、或夜潜に家を出で、南を指してりけり。野に伏し山を越え、薪こる翁に路を問ひ、藻拾ふに食を乞ひ、辛うじて大隅国なる佐多岬に着きけり。此処は山岳を背負ふて大海に臨み、は海門が岳と相對し、は日向灘として、前には馬毛島・屋久島・口永良部島など碁石を席に散らす如く、種子島は岬の沖十八里ばかりの所にありて、小さくして長く帯を引くが如し。

千代女小高き丘に登り、海辺遙に見渡して、私の配所は彼の島こそと涙の限り打嘆きて、しばし人心地さへあらざりけるが、磯辺をと打見やれば繋ぎすてたる小舟あり。心の中に思ふやう聞く此の岬より種子島までは海上凡そ十七八里、瀬戸の波いと荒く、船しばしば覆りて魚腹を肥やすもの多しとかや。木の葉にしき丸木船、へき女の力にて、習はぬ櫓を繰りつ大海の中に浮ばんに、波路なくへ船を寄せんは思もよらねど、一心凝つたる女気を神も憫み玉はざらめや。万に一も波に引かれて沖之島へ寄る事あらば、良人のに尋ね行き、もなくてまします顔を、一目なりとも見らむん。よしや海上障ありて、底の藻屑となるとても、別れて物を思ふにませり。去らば此の小舟を借らんものと思ひ定めて、繋ぎたるを解く。解くも早や舟の中に飛び乗りて、習はぬながらも櫓を操り、沖を指して漕出でしを知る者絶えてなかりけり。

良人を思う一念に、心勇み気を張りて、腕の力も自から出で、難なく二町三町漕出けれども、如何せん、忽ちにして腕痺れ五躰すくみて腰さへ痛み、力も氣も尽きければ、櫓を引き上げてどつかとばかり舟の中に転び伏しけり。ありて又も櫓を押し、思ひ立ちたる此の舟を腕痺るればとて、今更元の岸に戻さるべきやは、波の上舟の中にて如何にもならばなりなん、命の限り漕がばやと、力に任せてぞ漕いだりける。漕ぎては休み、休みては又漕ぐほどに、早十反ばかり沖に出しが、此時やうやう日は暮れて秋の夜の月さやかに差異り、海路隈

なく照しけり。今来し方を顧みれば磯辺の蛸の如く、前の方を眺め渡せば漫々たる大海、目を遮ぎる物もなく、心細さ言ふなし。気弱な女ならんには初めより舟を出すまじく、よし纜を解きたりとも、中途より引返へすべきに、恥かしき千代女なれば、力の足らざるをこそ悲め、荒き浪風を厭ふもなく、ひた漕ぎに漕行く。

此の小舟は例の谷山丸木にて長さ二間余、横三尺に過ぎず、松の太木を伐りて腹をにえぐりしものなり。薩摩国谷山の人始めて之れを造りければ其名あり、形長ふしてけれども悪浪怒濤の中を行きて容易に覆へらずとかや。

幾日か物をも食わず、根限りに漕ぎてやうやう島に着きしは、腕しびれ手ががりて息も絶ゆげなりけり。人に問ふて良人のなる横山村と云ふ処に尋ねゆき、互に別後の情を叙して其無事を喜びけん時の心の中、き筆にもものせんは愚なり。

之を伝へ聞くもの、佐多岬より此の島まで海上十八里、二三百石の舟すら風をえらび船出するも、猶風波の難あるに女の身一人、丸木舟に乗りて漕渡りけるこそをろしけれと、舌を巻きて感嘆しけり。

斯くて其年の十一月は国主より国隆に自刃の命あり。千代女今更悪びれず、国隆の前に進み出でて、が命はかねて君にささげ候へば跡に残りて何かせん、いでや冥土の露払ひ許し玉へ、と云ふより早く用意の短刀咽に突立て、三十五才を一期として良人と同じ日にの契をぞ全ふしける。

君が一夜の情の為にがの命を縮むとはる人をや云ふらん。誠に女丈夫とこそ云ふべけれ。里人其の操を感じ、野樂を奏して其の霊を祀りしとなん。

以上の内容は要するに、千代女が佐多岬にたどりつき、小舟で沖に漕ぎ出して種子島に到着するまでの苦心惨憺の情景と心情の描写である。歌詞には坊津から船出したことを思わせる語句があるにもかかわらず、佐多岬から出港したことになつてゐる。種子島は坊津からは見えないが、佐多岬から穏やかな日にはすぐそこに見える。女の手で漕いでも渡れるのではないか。渡ろう、そう思つて漕ぎ出した。事実がどうあれ、あくまで千代女の忠節・貞操（この場合は主人と愛妾の関係であるが）の心情を臨場感をもつて表現しようとしたのである。その忠節と貞節の度合いは、海上の苦難の大きさに比例するかのようである。

事件後、地元の盆踊歌に千代女の亡魂慰撫のための歌が付け加えられると、歌詞内容を超えた物語が徐々に付加され、幕末には右のような話になつていったといふことであろう。海上の苦難を描くことで千代女の忠節・貞操を強調して表現しようとしたことについては、江戸時代後期にあつては儒教的価値観の浸透、明治になつてからは忠君愛国の賞揚という時代的背景があつたと見る視点を忘れてはならないであろう。

(四) 比志島国隆と阿久根千代女の石碑

横山神社内に事件にかかわる石塔(石碑)が三基ある。小丘上の本殿小祠の脇に、やや変形の四角い板状の大きな自然石(A)と、それより小さい四角い柱状(墓石型)の山川石(B)が並んで立っている。拜殿の下には巨大な、上部がやや扇形になつた石碑(C)がある。

Aは地元郷土史家の馬場信一氏のご教示によると、二人の法名を彫つた墓碑で、天明三年に、慰霊のためにこの地を訪れた子孫の比志島彦四郎国統によつて建てられたといふ。墓碑とはいつても国隆の遺骨が埋葬されているかどうかはわからないし、千代女を埋葬したと伝えられる墓石は、これとは別に近くの農家の庭先にあることは前述した。

Bは明治十七年、Cは大正元年に建てられたもので、ともに長大な碑文が彫られているものの、ほとんど読むことができなくなつてゐるが、碑文は『種子島碑文集』第一集(註16)に収録されている。本書は現在はまだ入手できないので、ここに転載する。括弧内は翻刻者によるフリガナである。

B 神社本殿脇の山川石(細い四角柱)の碑文(明治十七年)

阿久根中将は鹿兒島県内阿久根の産にして、比志島宮内少輔国隆、彼の地地頭職なりし時、妾となれり。国隆罪ありて寛永五年戊辰二月此島にさすらへ、上西の表村、横山の邑(さと)に幽居せられしが、中将、後を慕ひ、夜ひとり小舟に棹さして八重の塩路をしのぎ終に此島に至りたり。其辛苦いか計りにや。其後、国の為同年十一月晦日、国隆に死を命ぜらるる折、中将悲しみてみづから刃に伏し、三十五歳にして夕の露と消えにけり。武(たけ)き健男(ますらを)すら命をおしみて汚名を千載に残せし例数ふるに暇あらず。嗚呼、中将のみさおは千尋の蒼海も浅く万丈の高山も低し。誠に女人中の大丈夫といひ

つべし。里人此の由を歌につくり、毎年七月七日踊をなし、靈魂を祭りけり。翁、かねて中将のみさおに感じて、此事を石に記し後の世に伝えまほしく思ひ、此度和歌示し合せ、今月今日碑を建て、寄月懐旧といふを頭に於て大和歌を手向といふ。我輩（わがともがら）の真心を受け給へといふことしかり。

明治十七年 九月十九日

八十二叟 田上青山 謹誌

右文中に「和歌を示し合わせ」とあるところから、何人かが寄り合つて慰霊の歌会をしたと思われるが、その歌は碑文にはない。どこかに稿があるはずだが、探しきれていない。石碑に向かつて右側面に多数の名前が彫られている。この歌会に出席した朋輩であろう。碑文集には省略されているが、郷土史家馬場信一氏作成の盆踊案内パンフレットには三十名の名前が記載されている。その内の一人田上青山は、碑文の作者でもあり、幕末から明治にかけて活躍した種子島の歌人（漢学者）である。次にCの碑文を掲げる。碑には漢字のみで書かれているが、読み下しもなされているので、それを示す。

C 拝殿への階段手前に立つ石碑文の読み下し（大正元年十二月）

烈婦中将は薩摩阿久根の人、氏姓つまびらかならず。世に称して阿久根中将といふ。島津氏の国老比志島宮内少輔、慈眼公につかへ、初めて阿久根の邑宰となり、その才色を聞き、いれて以て妾（しょう）となす。国隆資性豪放、とがめを公に獲たり。寛永五年三月、種子島に謫せられ、横山に幽閉さる。中将変を聞き、悲慕したがひて左右に侍せんと欲す。山海遼絶、ひとり行くこと能はず。一日慨然として嘆じて曰く、禍福相保ち、死生相従ふは妾婦の道なりと。即日結束（旅装）して途にのぼり坊津に至る。たまたま種子島庄司浦の漁夫今之丞（こんのじょう）なる者泊す。その帰舟をやとひて種子島に航す。国隆驚喜し歓洽（かんこう）することもとの如し。ついで公、国隆に死を給ふ。中将悲慟、殉ぜんことを請ふ。国隆中将を手刃し、しかる後みづから屠死す。時に年五十一、中将三十五。実にこの歳の十一月晦日なり。初め国隆、遺言して壙（つかあな）を同じうせしむ。よつて葬ること、その言の如くし、墓上柩樹（はぜ）を植ゑて以て之を表す。今、長野彦市が菜圃の一小荒墩（こうどん）これなり。当時の里人その節烈に感じ、石を満徳寺庭中に建て、毎年七夕、野楽（やがく）を奏してこれを祭る。その後、青山田上翁、門人と謀りて碑を建てて文を

謹し、以て梗概を叙ぶ。予も亦かつて烈女行を作り、児女をして吟唱せしむ。このごろ門人遠藤士毅（家彦）、これを里人某々に告ぐ。某々ら石に勒して以て不朽に垂れんことを請ふ。予その風教に補あるを樂しみ、すなはち辞せずして序を作り、以て士毅に附す。烈女行に曰く（以下漢詩「烈女行」が続く）

大正元年十二月

前田宗成 謹撰

門人 檜原長周 謹書

彫工 川口盛行

Cはこのあと五文字を一行とする五十二行連続の長編漢詩が続く。内容は右記を叙事叙情取り混ぜて歌っている。後半に、国隆の遺言によって二人の遺骨は同じところ、すなわち長野彦市の菜圃の一角に葬られ、当時の村人は満徳寺に石碑を建て、毎年の七夕に踊をした、とある。しかし長野彦市宅前に立つ石は、前述のように千代女の墓といわれている。村人が寺に建てた石碑というのは、天明三年に国隆の子孫が供養碑として建てたものである。どうやらCのこのあたりの記載は実際と違うようだ。

Cを建立したいきさつも後半に書かれている。文を作成した前田宗成（天保二年〜大正二年）は豊山と号し、種子島家の儒学者（漢学者）であった。明治になってからは教育者として活躍した。その人が千代女を讃えた「烈女行」という漢詩を作つて子女に吟唱させた。門人たちがこれを後世にも伝えようと、石碑に刻むことを頼んできたので、事件のあらましを述べて（書いて）稿を託した（渡した）とある。前田宗成（豊山）の没する一年前のことである。

BもCも明治後半から大正にかけて、特に教育の中では忠節や貞操が重んぜられた潮流があつたことを思い出さずにはいられない。盆踊歌に歌われた千代女は、もともと村人たちの施餓鬼供養に通じる鎮魂の対象だったのだが、かくして儒教的道德の模範として大きな石碑にまで刻まれることになったのである。今はそれも風化し、石碑の文字を読む人はもはやいない。

盆行事は明治初めに廃仏とともに禁止され、盆踊も大きな影響を受けた。一方で横山盆踊に歌われる千代女は忠節と貞操の模範と見なされた。地元に残る数少ない事件にもとづく話である。全島にて盆踊が消えていく中、かくして横山盆踊は阿久根千代女を歌っていることよつて奨励されたのである。しかしCが制作される頃より横山盆踊は衰退を始めた。そのきざしがあつたためにC

を制作して賞揚しようということになったともいえよう。

(五) 伝承の経過

前述したように横山の盆踊はかつて種子島全域で踊られ、明治以後は点在し、現在は南種子町西之で踊られている盆踊と基本的に同じである。横山では、寛永五年の比志島国隆に殉じた阿久根千代女が歌い込まれ、明治以後各地の盆踊が衰退する中、忠節と貞操のモデルとして賞揚され、大正中期から断絶したものの戦後復活し、現在まで伝承を継続している、というのが江戸初期以来の大雑把な伝承の過程である。

村田熙の前掲「西之表市横山の盆踊」(註17)に、明治三十一年頃に生まれた伝承者から昭和四十七年に聞いた話が載っている。

「十八才の時初めて踊った。その頃は六部落にてそれぞれ三晩ずつ練習、四晩目は各部落が集まって一緒に練習した。歌が難しいのでまず歌を覚える練習。その後で踊。昔は歌いながら踊るものだった。練習は約七十日。しかし自分達が踊るようになってからまもなく絶え、数十年後の昭和三十九年に復活。しかし歌だけは戦時中も欠かさず、古老が旧七月七日に供養をしたあと歌い続けてきた。盆踊の日以外は歌ってはならない、歌うとバチがあたるといって、今も堅く守られている」

話者が十八歳というのは大正五年頃である。六部落というのは前述の横山方限と呼ばれた六つの集落(杵之峯・池之久保・横山・平田・本立・石堂)のことで、中心の横山から広がってきた集落群である。三晩続けて自分の集落にてそれぞれ集まって練習したあと、四日目に一ヶ所に集まって合同練習をする。これを十数回繰り返して、稽古日数は総計で七十日というから、二ヶ月以上はかかっている。厳格に歌を仕込まれた。歌うことが基本だったことがわかる。現在は歌い手は踊子とは別にいるが、本来は朗々と歌いつつ踊ることが基本だったのである。復活の年は昭和三十九年とあるが、現在の伝承者によると昭和三十八年である。本稿では昭和三十八年として話を進める。

横山では十五〜二十五才が青年、三十九才までが壮年、四十〜五十九才が若隠居、六十才以上は老年という区分があった。若隠居と老年層は師匠格として指導にあたった。青年と壮年が踊子となったようだ。

右の話者は村田報告の中で次のようなことも語っている。「踊子にもともと

制限はなく、昔の六部落合同の時は観客もいっしょに踊ったという古老の話がある。ただしソトワの踊子だけは女が中心。女が足りないで背の小さい男子が女役として踊らされたこともある」という。観客も踊ったというのは、正式奉納を終えてからの踊であろう。ソトワの花笠が美しく風に揺れた。楽しくも華やかな踊の輪が開かれたことだろう。しかし途絶えた。

横山神社境内に石碑まで作って阿久根千代女の貞節を賞揚し、横山盆踊は注目もされ奨励もされたはずだが、途絶えたのは、右の話者が参加するようになってからまもなくの大正中期と思われる。断絶の原因は何であろう。全国どこでも明治以来、各所で民俗芸能が断絶していくのと基本的には同じ現象ではあるが、断絶のプロセスは案外研究対象とされていない。

地方の村々における年齢階梯はだいたいどこでも同様で、下は上に対してほとんど絶対服従のごときききたりがあった。練習は同じことをくり返すだけの文字通り口頭伝承である。踊の中心は青年層である。年配者は青年時代に自分がされたと同じ厳しい指導を先輩にする。横山盆踊が行政や知識人などから注目されればされるほど、横山盆踊を担ってきたという自負を持つ先輩は稽古において厳格になったであろう。

大正中期から後期にかけて全国的に青年団活動が盛んになる時期である。青年集団(いわゆる二七組)は江戸時代から集落経営の中心であったが、明治を過ぎ大正に入ると、封建的な上下関係を克服して青年の自主的・主体的な活動へと転換される必要があった。種子島にて伝統芸能を支える青年たちにも個の自覚が芽生え、一方的な押しつけに反発する気持ちが生まれても不思議はない。郷土芸能が消滅していく過程は、大きく言えば社会の近代化だが、具体的にはどういう事態が集落の中でおきていたのかを検証する必要があるが、研究はほとんどなされていない。

それはさておき、青年たちが盆踊から離れていくと、長老たちは途方にくれたであろう。長く続いた盆踊がなくなることを受け入れがたかった彼らは、歌うことだけは続けた。旧暦七月七日に神社の大きな石碑の前でゴザを敷いて、太鼓を叩きながら歌った。戦時中も続けられ、これが昭和三十八年の復活につながった。

右では盆踊の日程は旧七月七日(旧七夕)とされており、現在の日程はこれを引き継いで新暦七月の第二日曜日になっている。しかし下野敏見は『種子島

民俗芸能集』(註18)の中で、昔は旧暦七月十六日だったと記している。この日程の違いをどう見るかだが、旧七月十六日は廃仏以前のことであろう。横山でも廃仏後いったん盆行事は中止されたはずだが、どれぐらいあとに復活したのだろうか。復活にあたってはあまり盆を強調しないやり方が取られたであろう。それが旧七月七日という日程を選択することになったのではないか。盆からかけ離れているわけではない。七夕は盆の始まりともいわれる。ちょうどいい時期だったのだろう。

下野敏見は前掲書で、横山盆踊は赤尾木の本源寺でも踊ったことを誌している。江戸時代は旧西之表村各地から赤尾木三ヶ寺への盆踊奉納があったのかも知れない。西町・東町の人々が三ヶ寺を踊ってまわったのは前章に見たとおりである。

冒頭に紹介した地元の方々の伝承の中で、旧七月七日(旧七夕)を国隆・千代女の命日とし、『西之表市百年史』(註19)も「毎年命日の七夕の日」として記されている。命日は七月七日ではありえない。ただこの錯誤には理由がある。つまり盆踊が亡魂の慰撫(鎮魂)であるという強い意識が、日程を命日と錯覚させているのである。このことには一瞥の注意を与えておきたい。また盆踊の時以外に歌うとバチが当たるといふ伝承は、盆踊が強く荒魂の慰撫と結びついていたことを物語っている。

復活は昭和三十八年の西之表市市街地の鉄砲祭の第一回の年、まず新暦七月七日に神社で踊り、十月の鉄砲祭に出演した(鉄砲祭は近年は新暦八月二十日前後の日曜日のおこなわれている)。盆踊保存会はこの時にできた。

復活の時の練習は古い公民館(現公民館とは別の場所)にあり、現公民館は昭和四十一年建設)にて横山だけでした。平田に伝承者がいたので、この人に師匠になってもらった。歌はずっと続けていたので問題なかった。笛は伝承者がおらず、引き継ぐことができなかった。かつては笛はデハとヒキハに吹いた。その後、ニガタケで作った横笛を適当に吹いたことはあるらしいが、今はまったく吹かない。笛は古いものはなく、プラスチック製のものが二本公民館にあるものの、これを使っていたかどうかともわからない。

復活した横山盆踊は昭和四十三年に県の無形民俗文化財に指定されてからは、西之表市を代表する芸能として、今述べた鉄砲祭以外にもさまざまなイベ

ントに出演している。昭和四十五年は大阪万博にも出た。横山公民館所蔵の昭和四十年代の写真(写真1と写真2)にはソトワを踊る女子が写っている。小学生も混じっている。この写真で見える男子踊り子の覆面は今とは違い、昔の映画に登場する鞍馬天狗のように顔全体を覆っている。今の覆面は南種子町西之とほとんど同じで、こちらが本来だという。花笠もまた違っている。

復活後、今に至るまでの五十数年の間でも衣装には変化があるが、こういう細部の変化は江戸時代もあったということであろう。踊の大枠の芸態は守りつつ、衣装は時代の変化に合わせて(貧しい時代は質素に、豊かな時代は華麗に)変化してきたといつてよいだろう。だからこそ伝承が続くのである。

近年はこの日、六月灯も同時開催され、夕方樹林の中の参道にはたくさんの提灯が吊され、格別の風情を醸し出している。保存会は盆踊開始直前に阿久根千代女の話を書き居(プロジェクトで簡易スクリーンに映し出す)にするなどをして、地域住民に横山盆踊の意義を理解してもらおう努力をしている。

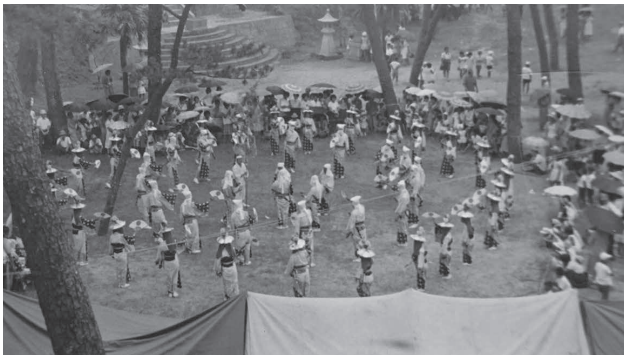


写真1 昭和40年代の若狭公園での横山盆踊(横山公民館所蔵)



写真2 同上 外輪を女子が踊っている(横山公民館所蔵)

盆踊はそのあと、薄暗くなる頃（午後七時半頃）に開始される。雨の場合は公民館の中である。今はソトワを女子が取り囲むこともなく、小学生の参加もない。そもそも小学生がいない。終わるとゴザの上で楽しい打ち上げ（宴会）のひとつときである。満天の星空の下、カエルの鳴き声がよく響く。（松原）

註

- 1 『鹿児島県文化財調査報告書』二十集（昭和四十八年）所収。
 - 2 『西之表市百年史』昭和四十六年、四〇九頁。
 - 3 『種子島家譜』（鮫島宗美による和訳本）昭和三十七年、熊本文学会刊行。
 - 4 『本藩人物誌』は編纂年不詳。鹿児島県立図書館の昭和四十八年発行の『鹿児島県史料集』十三に翻刻。十五世紀半ば（戦国時代）から十七世紀半ば（江戸時代初期）までの約二百年間にわたって島津家の人物の概要を記した書物で、最後に「国賊」として謀反人や政治犯などが収載されている。二五二頁に国隆のことが出てくる。
 - 5 『郡山郷土史』平成十八年。
 - 6 『加治木郷土誌』昭和四十一年。
 - 7 『本藩人物誌』（註4参照）二二三頁。この人は比志島嫡流家の寛永期の当主比志島範員（のりかず）のこと。
 - 8 原口虎雄『鹿児島島の歴史』昭和四十八年、山川出版社。一五八頁。
 - 9 原口虎雄 同右書一八二頁。
 - 10 『阿久根町郷土誌』昭和六年。一五九頁。
 - 11 『本藩人物誌』（註4参照）二二三頁。
 - 12 千代女を歌った歌謡は各地にある。管見だけでも福岡県の直方の日若踊にも星野村のはんや舞にも、球磨や椎葉の太鼓踊にもある。これらは美女の代名詞として歌われたと見ていいだろう。ただ阿久根に近い長島のいくつかのカネ踊の中では、たとえば指江では「千代女千代女と多けれど、太田の千代女がいちのめめよし」と歌われる。『長島町郷土史』（昭和四十九年）には「千代女千代女と名は多けれど、おたの千代女がいちのめめよし、それはなあ、おたの千代女がめめよし」と書き留められている。「太田」も「おた」もどこのことか不明だが、評判になっていたであろう阿久根千代女のことかもしれない。
- 13 『老嫗物語』というのは西之表村出身の西村時彦が書いて、明治二十四年に大阪の出版社から出された小冊子である。この人は『南島偉功伝』の作者西村天因として知られる人で、慶応元年に生まれ、大正十三年に没した。鉄砲伝来のポルトガル船が門倉岬に漂着した時、砂浜に漢字をかいて中国人と筆談したという西村織

部丞の末裔にあたるという。『老嫗物語』は自分の祖母から聞いた十人の婦人の烈婦節女列伝である、と序にある。そして「（各種の）諸書を参考にして筆を取りつれば少しも虚誕なく全篇すべて実事なり」とする。その中に「千代女」と題する一文がある。『老嫗物語』は鹿児島県立図書館には複製本（禁帯出）がある。西之表市立図書館にも所蔵されているようだが、カーリルで検索してもヒットしないので、非公開とされているようである。

- 14 『種子島碑文集』は下野敏見と鮫島宗美の共著によるガリ版冊子。第一集と第二集があり、昭和四十年に熊本文学会より発刊。
- 15 徳永和喜著『種子島の史跡』昭和五十八年、和田書店。二〇頁。
- 16 註14に同じ。
- 17 註1に同じ。
- 18 下野敏見『種子島民俗芸能集』（昭和三十八年）は南方新社『南日本の文化誌5種子島民俗芸能集』に所収。
- 19 註2に同じ。四一〇頁。

二 横山地区の盆行事

昔は七夕には女の人はカラオ（麻）を小さく巻き輪にして、それを梅の木にかけ機織りや裁縫が上達するように祈った。また、仏壇や墓には必ずエンガ（ホウセンカ）の花を供えた。

各家々では表縁側の外隅に笹竹四本で簡単な棚を作り三方向をソテツの葉などで囲んで壁とし、棚を付けてバシヨウの幹を刻んだもの・洗い米・粟などを混ぜたミズノコを供えた。この棚のことを「ミズダナ」と言った。ここに無縁仏を招き拝んだ。

精霊迎えは十四日の未明、洗い米・酒・線香・ローソクなどを持って提灯に灯りを付け、素足で墓に行き、松明の迎え火を焚き、墓に供え物をして家に帰り神棚や仏壇を迎えた。

精霊の送りは十五日夕方、提灯に火を灯して家にいる精霊を墓へ連れていく。迎えの時と同様に供え物をして送り火を焚き浄土へ送る。家に帰るときは提灯の火は消す。

初盆の時、別に二・三段の棚を作る。昔は料理をお膳に一人分ずつ供えてい

たが、今は二膳だけ供える。お膳に添える箸を昔は墓の花筒を作る時、一緒に作った（長さ五寸―15cm位）が今は売っている竹箸を使う。

八月十二日。墓掃除、花筒を替える。親戚が集まって竹を午前中切りに行き、花筒を作り替える。昭和五十四年頃、納骨堂になった。今のところは山だったので換地を墓地とした。横山地区三か所の集落の墓を一か所にまとめた。お盆の時は床の間に位牌はあるだけ全部神棚から降ろす。盆の花はハギ・シバ花（榊・山シバなど）。シキミは盆踊の時だけ使う。基本、神道は線香を使わずローソクだけ使う。

八月十四日。朝、三時ごろ提灯をつけてお茶（急須に入れて）と洗米（アライネという）を持って墓に行く。アライネは小さな皿に入れて持って行く。昔は墓石が多かったので大きめのさらに入れて持って行った。洗米とお茶は墓石のくぼみの所に供える。家族ほぼ全員で迎えに行く。「じいちゃん・ばあちゃんを迎えに行く」という。家に帰り位牌のところでローソクに火を灯し「ゆつくり休んでね」という。

料理の膳を昔は一人分ずつ供えていたが、今は二膳供える。ご飯・野菜や茄子の炒め物・味噌汁などで箸は竹箸（カラタケ）で花筒を作る時に作った。

十四日は朝―味噌汁・ご飯など家族と同じもの。十時―お茶・お菓子。昼―家族と同じもの。三時―果物（スイカ・サツマイモなど）、夜―家族と同じもの。夜だけはローソクをつける。

十五日。朝から昼までは同じもの。三時―ミズブキ、これは、もち米を粉にしてダンゴを作る。ダンゴの形は舟に乗っていくので楢円形の舟のような形にする。この団子を柏の葉に包んで蒸す。このダンゴは墓には供えない。墓には夕方、送りに行く（連れていく）。この時「連れていくから」と言って都合の良い人が、五時過ぎにお茶を急須に入れて持ち送っていく。

初盆の場合は提灯を親戚からもらうが、一つだけ墓に持って行き、墓には飾らず家の中の座敷に吊り下げる。初盆の供え物はほかの先祖の供え物とは一緒にせず、床の間に別に二・三段の初盆用の棚を作り、そこに供え物などを置く。花もたくさん供えるが赤い花は供えない。初盆に来てくれた人たちにはお茶・つまみなどを出す。神棚からおろした位牌の周りには囲いはしない。初盆の時も囲いはしない。初盆の送りは他の仏様と同様にする。

（牧島）

三 横山盆踊の音楽

横山の盆踊の伝承過程については本節の一「横山盆踊の概要」で述べたのでくり返さないが、もとは周辺六地区の合同で踊られていた。旧七月七日に本源寺住職による法要が営まれ、そのあと盆踊が踊られた。途絶えたのは大正中期と想定される。中断の間も歌だけは老人たちが、毎年この日に供養として歌い続けたという。そのことが昭和三十九年の復活を可能にした。現在でも歌唱はとても安定している。

復活後のおもなる変化としては、全員が歌いながら踊っていたのが、歌い手が踊り子とは別になったこと、笛が消えたこと、踊りに制限がなく見物人もいっしょに踊っていたが、復活後は保存会を作って伝承をはかっていること、歌詞がいくつか省略されている（上演時間が短くなっている）ことなどがあげられる。衣装なども当然違っているはずである。ここでは音楽に関して現在の横山盆踊の特徴を見ていく。横山盆踊は次の六曲からなる。採り物も記しておく。

最初にソロによつて初句が歌われ、そのあと再度歌い手全員で歌う。時間はソロの部分を含めている。

①種とりて（デハ）	閉扇	0分45秒
②めでためでた	扇	1分25秒
③阿久根千代女	榊枝	6分45秒
④春の夜	手踊	4分10秒
⑤福神丸	手踊	2分5秒
⑥せんとみやまの（ヒキハ）扇	扇	1分

各曲について述べる前に楽器編成と、全体に共通する踊方について見ておこう。横笛は現在ではまったく使用していない。復活時に何人かで、中断前まで踊に参加していた柵之峯（はじめのみね）に住んでいた爺さんに横笛を習いに行つたが、口頭で最初のメロディーを「ヒーヒヨ、ヒーヒヨ」と口ずさむだけで、吹いてみせるということではなかった。つまりこの爺さんも笛を確実に伝承していたわけではなかったようだ。笛の持ち方や音の出し方などではなく、結局、出だしのメロディーの断片を耳で聞いただけ。笛そのものは地元の竹（どこに

でもあるニガタケ)で地元民が作ったものが二本あったので、太鼓に合わせて、入場と退場の時に適当に吹いただけだという。昭和五十九年に鹿児島市吉野公園で開催された芸能祭に出た頃まではそれを吹いていたが、その後吹き手がいなくなった。その竹製の笛も残っていない。現在は六孔で、裏にも孔がひとつあるプラスチック製横笛が道具箱の中に二本あるが、実際に使用したことはない。地元の方々はいく。吹くつもりで入手したもの、一度も吹くことがないままということらしい。市販のいわゆる六孔篠笛と思われる。いつ頃入手したのかも不明である。笛は入退場で吹くだけで、入場し終わると踊り子の輪の中に混じったという。

最近の楽器編成は大大鼓二・小鼓一・カネ一が標準のようである。ひとつの大大鼓には持ち手と打ち手がいる。つまりひとつの大大鼓は二人一組となる。年によって人数が揃わないこともあり、その場合は大大鼓一(二人)になる。大大鼓なしでは盆踊にならないので、最低でも一組(二人)はそろえる必要がある。大大鼓(締太鼓)は地元ではただ太鼓(タイコ)という。皮の直径は三十七センチほど。皮を上向きにして腰の前に持ち、打ち手が対面し、ほぼ直立姿勢で両手のバチで打つ。平成二十八年は一組、平成二十九年は二組だった。

小鼓は地元ではツツミという。現在は一人。能楽で使用する小鼓と同系で、左肩に載せて(しっかりと載せるわけではないが)左手で支え、右手指で打つ。楽器は市販のものである。以上の二つは能楽の太鼓(たいこ)と小鼓(こつづみ)の組み合わせといえよう。大鼓(おおつづみ)が欠けている。

カネは現在使っているのは、写真2の右側のテノヒラに入るほどの(直径十センチほど)のスリガネ(縁のある皿形)である。復活時に入手したものをそのまま使用している。紐を付けて左手で吊り下げ、右手のバチ(鉄製の棒)にて、現在はカネの底を外側から叩いているが、平成十年の上演ではカネの内側の縁を叩いている。

写真2の左は大正年間まで使っていたというカネ(昔のカネ)で、ただの鉄製の薄い円盤である。何かの廃品を利用して作ったらしい。紐を通す穴が見えている。種子島ではカネといえたいこれと同様で、大踊(太鼓踊)など多くの芸能で全島的に使用されている。カネのバチは今は写真のような鉄棒だが、昔はシカの角を使った(シカは種子島にいる)。シカ角は本来は写真2の左の昔のカネに適合するもので、右の今のカネは分厚く、シカ角では音が十分



写真1 小鼓・大大鼓・笛(未使用)・カネ



写真2 左は昔のカネ、右は現在のカネ

でなく、すぐに壊れた。それで鉄製棒(写真2)に変わったのである。シカ角で作ったバチは今はないが、シカの角は残っている。

以上、ガクは大大鼓・小鼓・カネの組み合わせで編成される。大大鼓一組の場合はガクの総勢は四人、大大鼓二組の場合は総勢六人となる。これが輪の中で二列になって向き合う。端にて七夕竿を持ったチヨウがガクを向いて立つ。大大鼓が二組の場合、持ち手と打ち手は位置を交互にする。つまりチヨウから見ると手前の大大鼓の持ち手が左の場合、次は持ち手が右になる。令和元年の上演ではチヨウから見ると左列は太鼓持ち手・太鼓打ち手・小鼓、右列は太鼓打ち手・太鼓持ち手・カネという並びだった。平成十年の上演映像では、チヨウから見て左列は太鼓打ち手・カネ・太鼓持ち手、右列は太鼓持ち手・小鼓・太鼓打ち手、となっている。楽器の並び方については決まりがあったはずだが、踊りの中断の間に伝承が曖昧になったのである。現在は並び方の順番はその都度、楽器担当者の判断によっているようだ。歌は前述したように踊り輪の外に立つ別の数人が担当している。

令和元年と平成十年のガクの並び方を図示しておこう。矢印は向きを示す。ガクが広場中心に出て内輪と外輪がほぼ並び終わる頃を見計らって最初の歌が

始まる。内輪と外輪は円周上をまだ歩いている。以下では歌唱の安定している平成二十八年の上演をサンプルとして各曲を見ていくが、三曲目「阿久根千代女」のみは歌唱に省略があるので令和元年を採譜した。

令和元年（2019）のガクの並び方
太鼓持ち手・太鼓打ち手・小鼓（↓）
七夕竿（→）
太鼓打ち手・太鼓持ち手・カネ（↑）

平成10年（1998）のガクの並び方
太鼓打ち手・カネ・太鼓持ち手（↓）
七夕竿（→）
太鼓持ち手・小鼓・太鼓打ち手（↑）



写真3 平成30年（2018）7月16日

1 種とりて（デハ）

入場のことをデハという。チョウ（七夕竿）を先頭として後ろに二列のガク、その両脇の最右に内輪（ウチワ）、最左に外輪（ソトワ）の四列が並び、単純な二拍子のガクの奏打にて前進する。歌い手はだいたい四人で、輪の外にてマイクの前に立ったままである。ガクはチョウ（七夕竿）に従って中央に進み、両翼の二列はすぐに左右に分かれる。右列は右へ進んで左まわりに内輪を描き、左列は左に進んで右まわりに外輪を描く。

ガクを中心に二重の輪ができたところをみはからって、ガクに合わせて「種とりて」の歌が始まる（楽譜18）。内輪と外輪はゆっくりと円周上を歩いている。次のような歌詞が歌われる。まず五七七七七が歌われ、「しげれ」がくり返され、「治まるみ代こそ めでたけれ」の七五が加わった形。旋律は最低音の

ハ音と最高音のハ音の一オクターブの中にて、へ音とト音を中心に動く。二音は最低音のハ音に下行する時に経過的に出るだけである。きわめて謡曲に近い歌い方である。拍節は明瞭。ガクは全員ユニゾンにて小節の頭で打たれる。（五）「わが思い草」の最後「さ」と最後の（八）「めでたけれ」の最後の「れ」では連打となる。旋律は似たような短いフレーズが繰り返される。歌い出し（一）は高いハ音のみによるa、（二）は中間のへ音に跳躍下行してそのままのb、（三）も高いハ音から跳躍下行したb、（四）はbを模倣しながら最低音ハ音まで下行するc、（五）はcとは逆に最低音から中間音（最終音）へ音まで戻るd、となっている。南種子町西之上西目の第一曲「かねとりて」（楽譜12）と同系旋律である。歌の終わりに合わせてガクが連打され、全員前進を止め、その場にしゃがみこむ。チョウはガクを向いている。

横山の「種とりて」（楽譜18）

- （一）種とりて a
- （二）嬉しうれなわ b
- （三）武蔵野の b
- （四）狭くやあらむ c
- （五）吾が思い草 d
- （六）しげれしげれしげれ
- （七）治まるみ代こそ
- （八）めでたけれ

2 めでためでた

全員しゃがみこんだまま少し間をおく。チョウ（右手に七夕竿）のみが立ち上がり、ガクを向いたまま「チョウ」と大声で云い、七夕竿を持ったまま小走りてガクのまわりを右方向（反時計）に走り出す。三回まわってもとの位置でガク（しゃがんでいる）を向き、右手の七夕竿を地面につけて立て、直立のまま「ヤガテー」と叫ぶ。ガクはしゃがんだまま奏打を始め、ソロによる「めでたの」が歌われる。踊りもしゃがんだままである。

ソロが終わると全員がたちあがり、（一）に合わせて踊が始まる（楽譜19）。チョウは直立したままである。以上の曲と曲との間の所作はこのあとすべて同

じである。

この曲は開いた扇を持って踊る。七七または七五を一節として四節でできている。庭ほめの歌である。西之での「これの寺に」に相当する。旋律は高域から低域へ下降するaを基本としてこれが三度繰り返されるが、低域から中域へ上行するbが対置されて変化がつけられている。長調系である。

横山の「めでためめた」(楽譜19)

- (ソロ) めでためめたの (中座のまま) a'
- (全員) (一) めでためめたの おん殿屋敷 a
- (二) おぐら九つ ごもん八つ b
- (三) 船は千艘の おんカネ船よ a''
- (四) カネをおろすわ 品川に b'

3 阿久根千代女

横山盆踊の代名詞ともいうべき「阿久根千代女」の物語が歌われる。現在は四つの節が同じ旋律で歌われる。四節すべてで六分以上を要する。楽譜20に第一節を採譜した。最初に全員が中座したままの姿勢で、ソロで冒頭が歌われる(採譜せず)。終わると全員立ち上がり、もう一度冒頭から合唱で歌い出される(ソロと同じ旋律)、踊が始まる。歌詞は七五を一句とする三句からなり、第三句目の後半「寒かるろ」が繰り返えされて第四句をなし、第五句では第三句がそのままくり返される。

横山の「阿久根千代女」(楽譜20)

- (ソロ) 阿久根千代女は夜船漕ぐサア (中座のまま) a
- (合唱) (一) 阿久根千代女はヨ 夜船漕ぐハイヤ a
- (二) 足もだるんどヨ 手もだるんどハイヤ a'
- (三) まして夜風もサ 寒かるろサア b
- 奏楽
- (四) 寒かるろサ 寒かるろハイヤ b'
- (五) まして夜風も寒かるろ b

(二)の「だるんど」は「だれるだろう(疲れるだろう)」を意味するが、鹿兒島では「たるっと」、種子島では「だるんどう」という。(三)の「寒かるろ」は「寒いだろう」の意味で、種子島では「さむかんどう」という。ただ種子島では「ど」が「ろ」に変化する傾向があるので、「だるんろろ」「さむかんろろ」ともいう。西之表中心部では比較的「ど」が保持されている。こうした種子島独特の言い方が使われているということは、この歌詞が種子島で作られたことを意味するといっていだろう。

ト音を中心として上はホ音から下はニ音まで、音域としてはほぼ一オクターブの中にあり、歌いやすい。長調風旋律である。

4 春の夜

実際の歌唱では地元作成の歌詞プリントの通りに歌っているわけではないが、歌唱のまま楽譜21に採譜した。歌唱時間は4分10秒ほど。語形から見ると、冒頭で五が歌われたあと七五が連続し(五)まで、(六)から七七の連続とつかない。途中で踊子が手を叩く部分は楽譜中に☆で示した。

細かすぎるかもしれないが、旋律句に符号を付け、歌詞全体を九つに区切ってみた。最初に音頭取りがソロで冒頭句の「春の夜の」を歌い(この部分は採譜せず)、続いて歌い手全員の合唱でもう一度歌い直される。ガクはユニゾンにて二拍子の頭で必ず打たれる。歌唱の間にガクの短い連打が挿入され、これが楽句の区切りになっていると見ていいだろう。

横山の「春の夜」(楽譜21)

- (ソロ) 春の夜の (連打)
- (合唱) 春の夜の
- (一) 夢おどろかす くだかけの (連打) x
- そのきぎみの ものおもい (連打) x'
- (二) またおうことわ a
- いつかわの b
- ふかし心はかぐち草 (連打) β
- (三) 根引きせんと a

宵かわす

(四) 身を捨て草で 捨てられて (連打)

流れしこの身わ

淀川の

何を頼りに浮き草の (連打)

(五) 波に揺られて

うたかたのハンヤ

きみな情けなや目覚ましや (連打)

(六) それわ若草

身はうらみ草 (連打)

(七) なにぞそなたに

逢いたいはなし (連打)

(八) 秋の別れの

せんなかれと (連打)

(九) よしなき恋を

人にせかれて

面白や (連打)

b

β'

a

b

β

a

b

β''

c

d

a

b'

c

d

a

c

b

a + b + β の形が (二) から (五) まで続く。ここまでが曲全体の三分の二である。(六) 以後は c d という別の記号を与えたが、a と b も散らばる感じである。

全体としては a は六回出てくるが、毎回変わらない。b も六回出てきてほとんど変わらない。つまり a と b が旋律全体の基本楽句になっている。以上はやや細かすぎるので、大きく捉えて次のように見ると全体の構造がよくわかる。

- (一) X
- (二) M
- (三) M'
- (四) M''M'''
- (五) M
- (六) n
- (七) m

(八) n

(九) m'

冒頭にふさわしい X が歌われたあと大きな M が四回くり返され、(六) 以下は新しい小さな n と、M を小さくした m とが交代している。長調系の旋律である。

5 福神丸

楽譜 22 に採譜した。七五調を基本とする左掲のような歌詞が歌われる。冒頭をソロ (採譜せず) で歌ったあと、全員で合唱で始めから歌い直される。

横山の「福神丸」(楽譜 22)

(ソロ) 今年やめでたいの (連打)

(合唱) (一) 今年やめでたいの 福神丸に

(二) こがねの台に 松植えて (連打)

(三) 一の枝にわ ぜ二がなる

(四) 二のや枝にわ カネがなる

(五) すえの緑に 鶴据えて

(六) 何とさえずる たちより聞けば (連打)

(七) 今年やよい年 宝な年よ (連打)

(八) 道の小草に こめがなる

(九) 思いのままに 満腹え (連打)

x

x'

a

a

x''

b

b

x'''

x''''

(一) を x とし、(二) (五) (八) (九) はこの変形と見ると、出だしと最後に x、(五) を中心として前半の終わりは a、後半の始めは b を出し、対称的な構造になっている。長調系の旋律である。

6 せんと深山の (ヒキハ)

前曲が終わると、そのまましゃがみこまずにまわれ右をし、チョウが先頭に移動し、ガクも入場と同じ形になる。踊子も両側について全四列となり、奏楽に合わせて楽譜 23 が始まる。初めにソロの歌い出しはなく、歌に合わせて退場する。冒頭の「種とりて」と同じ旋律である。旋律は a b 二つの要素でできて

おり、それぞれにへ音の連続(傍線)が付随する。aは八音の保続とへ音への跳躍下降、bは八音から、下の八音への下降である。

横山の「せんと深山の」(楽譜23)

- | | | |
|-----|--------------|------|
| (一) | せんと深山の深山の | a |
| (二) | 奥の入りには | b |
| (三) | ちようと出たよしはか | |
| (四) | ふじはかま着てみれば | a |
| (五) | たて袖 | a' |
| (六) | ながばおり | b' |
| (七) | 裾にや | b'' |
| (八) | うれしおがの子によしわら | a'' |
| (九) | きみおいた | b |
| (十) | 面白や | a''' |

真ん中付近の「たて袖」まではbは一度しか出ないが、「ながばおり」以後はbが中心である。全体としては上の八音、中ほどのへ音、下の八音の三つの音が中心となっている。第一曲「種とりて」と同系旋律である。(松原)

四 横山盆踊の道具

盆踊は満徳寺跡の横山神社境内で毎年七夕の夜に踊られる。踊り手(子)は浴衣姿で腰に刀を差し、カムキという白い面様の物で顔を覆い目だけを出す。踊り始めの合図は七夕竿を持つ「弔(チヨウ)」と呼ばれる人が庭を清めるために、踊子が輪になっているところを廻る。踊子はシキビの枝を持って踊る。盆踊は女性は踊らないとされる。これは、女性が踊ると阿久根千代女が嫉妬するといわれているからである。女役は男性が女装して踊る。

衣装は写真1が男性用一式、写真2が女性用一式で、横山盆踊には次のような役割の人々がいる。

太鼓二人(太鼓打ちと太鼓持ち)、鼓一人、鉦二人、笛一人、弔(七夕竿)一人、男の踊子、女の踊子、歌い手、旗持ち。

・太鼓

太鼓は太鼓持ちと太鼓打ちの二人一組。太鼓持ちは打ち手が動くのでそれに合わせて動かなければリズムが狂ってしまうので、常に打ち手の正面に位置する事が大切である。現在、後継者を育てるために太鼓を二つ使って、節まわしを覚え太鼓をゆっくり叩くようにと指導に取り組んでいる。

太鼓の胴部分は黒漆塗り、直径34cm。皮の材料は不明(写真3)。バチは檜の木で短い方が直径3cm、長さ31cm、長い方が直径2.5cm、長さ37cm。太鼓持ちの服装は顔に白いカムキを被り、白の長着・黒帯の上から白い

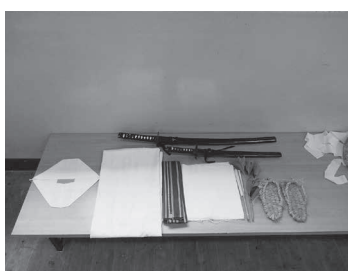


写真1 男物揃

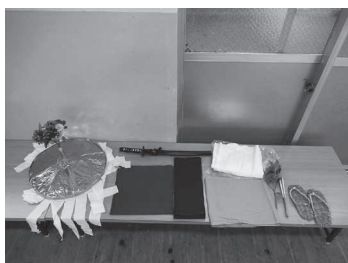


写真2 女物一揃

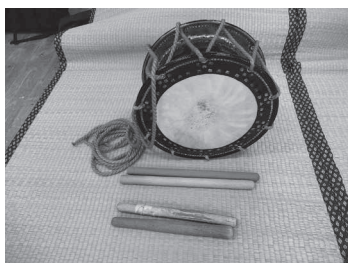


写真3 太鼓とバチ

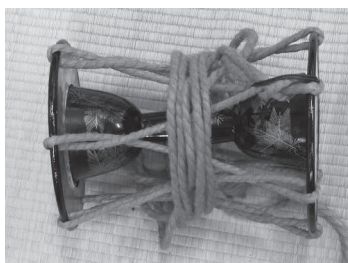


写真5 鼓



写真6-1 鉦①と鹿のツノの鉦叩き



写真6-2 鉦①を叩いているところ

鉦叩きの一つは鹿のツノで長さ34cm。もう一つは叩く部分直径1cm、長さ2.2cmで持ち手は直径0.5cm、全体の長さ19.5cm。鉦叩きの服装は白いカムキを被り、白い長着、伊達帯の上から白い帯を締め

鉦と鉦叩き
鉦と鉦叩きはそれぞれ二種類ある。
鉦①は現在使用している新しい鉦(タライガネ)で直径12.5cm、高さ4cm(写真6-1・鉦①と鹿のツノの鉦叩き、6-2・鉦①を叩いているところ)。鉦②は古い鉦で直径12.3cm、厚さ0.5cmで裏側に1cm四方のヒモ通し孔がある(写真7-1・鉦②と鉦叩き、7-2・鉦②を鉦叩きで叩いているところ)。

・鉦と鉦叩き

鼓一人
直径20cm、横幅25cm。中芯部の直径4cm。胴は黒漆塗りで金の時絵を施してある。鼓は市販品を購入するため革は国産の馬革か、国産の仔牛の革かを選択できる。どちらも仕込みから仕上げまで職人が一枚一枚丁寧に手縫いにより作り上げている。紐は並み本紅である(写真5)。



写真4 太鼓を持っている様子

る。腰左前に短刀を挿す。白足袋に藁草履を履く(写真8 鉦叩きの格好)。

・笛一人

笛は「デハ」「イリハ」の時、楽の列に並び笛を吹きその後は踊り子になる。笛は竹笛(篠笛)でニガタケで作ってある。これは古田の獅子舞いで使っているのと同じもの。今は、プラスチックの笛(横笛)が二本ある。孔は表に六つ、裏側に二つ。右手の小指は使わない(小指の孔はない)。

・甲

「チョウ」と呼ぶ。約5mのカラタケに色紙をシベのように垂らした七夕竿(写真9 七夕竿)を持つ。甲が持つ七夕竿(精霊の依り代か?)を中心に踊る。甲は踊りの時は中心に立っているが、踊りが終わると中心の楽の周りを反時計回りに三回まわって「ヤガテー」と叫ぶ。これを合図に次の踊りが始まる。

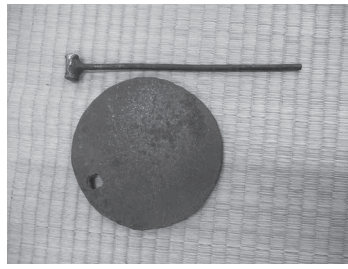


写真7-1 鉦②古い鉦と鉦叩き



写真8 鉦を持つ鉦叩きの衣装



写真7-2 古い鉦を鉦叩きで叩いているところ

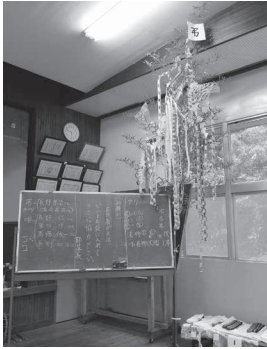


写真9 「チョウ」と呼ぶ人が持つ七夕竿

歌が終わると全員しゃがむ(腰を下ろす)、甲が立ち上がり「チョウ」と言っ

てナカの周囲を三度小走りに走り回る。甲が「ヤガテー」と叫ぶと次の歌が始まる。以下、各歌が終わるごとに同様の動きをする(写真10 七夕竿を持って走り回るチョウ)。この役を古老たちは「踊り庭を清める役」と言っている。チョウの服装は白い長めの上衣に白い短めのズボンを着て、白い鉢巻を後ろで結び長く垂らす。白足袋に藁草履を履く(写真11 チョウの衣装)。

七夕竿のてっぺんに付けてある四角の紙に書いてある「甲」という文字は五年前(二〇一九年調査)ごろからつけ始めた。それまではつけてなかったという。

・旗持ち二人

幟旗を持つ。幟は二本あり、一本には「種子島家紋(三鱗紋) 奉納 横山神社 横山盆踊保存会」、もう一本には「種子島家紋(三鱗紋) 鹿児島県指定無形民俗文化財 西之表市 横山 盆踊り」と藍染布に白抜き文字で書いてある。

・歌い手四人

歌い手の服装は男の踊り手と同じであるが、カムキは被らない(写真12 歌い手)。歌い手の年齢は当時(二〇一九年)五十九歳から八十三歳位であった。昔は、踊りが踊りながら歌っていた。昭和三十八年に復活した頃、歌と踊りは別であった。音頭とりが歌いだしを歌う。全体で歌うときに、声が途切れない



写真10 七夕竿を持って走り回るチョウ



写真11 チョウの衣装



写真13-3 男性の格好をした踊り手



写真13-1 左-太鼓持ち まん
中-男性の格好をした踊り手
右-女性の格好をした踊り手
(前姿)



写真13-4 女性の格好をした踊り手



写真13-2 太鼓持ち(左)
男性の格好(まん中)女性
の格好(右)後姿



写真14 刀(長・短)



写真15 扇子(センス)



写真16 シブキ(シキビ)



写真⑩ 歌い手

ように音頭とりが歌う。特に何人と決まっていな
い。

・踊り手

次のように、男女それぞれ写真のような格好を
して踊る。写真13-1・2左側は太鼓持ち、真ん
中は男性用衣装の踊り手、右側は女性用衣装の踊
り手(写真13-1前姿、13-2後姿、13-3男性
の格好をした踊り手、13-4女性の格好をした踊
り手)で、踊り手は白い布(写真13-5)をしめ
縄様に左縄に縋って帯の上から締めている。

・男役(男の踊り手)

カムキ、白長着、帯(伊達締め)、ヒモ(白木綿)
で左縄によって帯の上に
締める。刀(長・短の二振り)(写真14長刀と短刀)、扇子(手踊り用、白で絵

・女役

も何も描いてない。写真15センス)、シブキ(写
真16シブキ)、白足袋、藁草履。顔にカムキを被り、
白い長着に伊達締め、その上から白い布の左縄を締
める。腰に短刀と長刀の二振りを差す。前にシブキ
とセンスを差す。白足袋に藁草履を履く。

花笠、紫の布、黒帯、青色の布(ヒモという。

帯の上に左縄によつて締める)、白長着、短刀、
扇子、シブキ、足袋、藁草履。白い長着に黒帯を

締め、黒帯の上に青布の左縄を締める。腰に短刀一振りを挿し、シブキ・セン
スを前に差す。白足袋に藁草履。頭には紫色の布(紫の帯という)を被り、そ
の上から花笠を被る。その様子は上の写真13-4である。昔は女役の人頭巾
で覆面をしていた。これは、帯のような長い布で覆面の形を作りながら布を巻
いた。

花笠も昔は無かったので石堂集落の人に作ってもらい、それをまねて作っ
た。着物も自分の着物(芭蕉布や麻で織った浴衣)で踊っていたが、二十年位
前(一九九〇から二〇〇〇年頃)に集落で白い衣装を作った。踊りは立って踊
り、体をしなやかにくねって踊ることはしない。踊るためには歌い手四人、鼓
一人、鉦一人、太鼓一人、踊り子二十五人位はいたほうが良い。集落に不幸が
あつたら盆踊は行わない。



写真13-5 左縄用・白布

・芭蕉布の着物

以前、盆踊の衣装は個人持ちであったため、自分の持っている浴衣などを着て踊っていた。その時の着物が、この芭蕉布である（写真17-1）。この着物の持ち主は八元喜興志さん（八十八歳で死去された）で、「八元」という名前が別布に書かれ、左襟裏先に縫い付けてある（写真17-2）。この芭蕉布の着物で盆踊を踊った平成五年の写真が残されている。現在盆踊に参加している八元喜三氏の父である。

寸法は身丈121cm、袖丈53cm、袖幅29・5cm、肩幅（後身頃）28cm、前幅21cm、襟幅5・5cm。



写真17-1 芭蕉布の着物

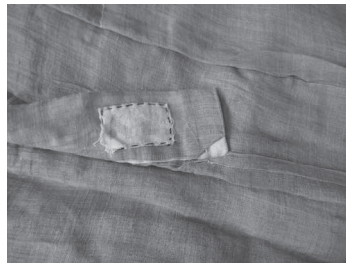


写真17-2 芭蕉布の着物

・花笠

頭上には円形に銀紙を貼りその上部に造花を付け、白い布を短冊に切り笠の周りに貼り付け、前が見えやすいように顔の前だけは白い布を貼り付けてない（写真13-1・2・4を参考）。

・カムキ

清浄な祖霊に人の息がかからないようにするため、また、踊子自身が精霊であり、静かな中にも祖霊への畏敬をこめた意味を含んでいる（写真18カムキ）。以前は（万博で踊ったとき）覆面型であった。その時の写真が残されている。

・藁草履

今はまだ作れる人がいるので、余分にストックを作っている。藁草履は雨の日に履くとすぐダメになる。天気の良い日に履いても二年から三年で擦り切れ、壊れて使用できなくなる。使った後は（写真19-1藁草履を干してある様子）のように陰干しして大切にしている。本来は鼻緒を白い布で巻いてない藁草履（写真19-2本来の藁草履）を使うが、足りなくて葬儀屋から買ったものがあり、この藁草履は鼻緒を白い布が巻いてある（写真19-3購入した藁草履）。

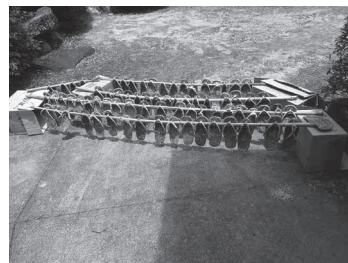


写真19-1 干してある藁草履



写真19-2 本来の藁草履



写真19-3 購入した藁草履



写真18 カムキ

・七夕

七月七日、昔は女の人はカラオを小さく巻いて輪にして、それを梅の木の枝にかけ機織りや裁縫が上達するように祈った。また、墓や仏壇には必ずエンガ（ホウセンカ）の花を供えた。（牧島）

五 横山盆踊の踊り方 ― 担い手の人々の視点から 保存会

横山は西之表市上西校区の字の一つである。上西校区には他に池之久保、戸之峯、大花里、花里崎、大崎の字がある。令和三年度の「統計 にしのおもて」によると、令和三年九月末時点で戸数は六十五世帯、百二十三人（男性五十八人、女性六十五人）である。年齢別人口では、横山の住民への聞き取りによると、五十代後半から八十代が多く、二十代や三十代は男女合わせても一桁しかないとのことである。西之表市全体の令和三年の推計人口が六千九百九十五世帯、一万四千五百八人であることを考えると、横山は西之表市の中で小規模の集落であることが伺える（「統計にしのおもて（令和三年度版）」より）。

名称については、昭和四十三年三月二十九日に鹿児島県無形民俗文化財に登録された際に「横山盆踊」と名付けられ、それに対応して「横山盆踊保存会」という名で保存会が設立する。その後も市のイベントに出演した際に、横山の人々にとっては気がつけば当日のパンフレット等に「横山（の）盆踊り」と書かれていたという。一方で横山の人々は「盆踊り」、「阿久根千代女の踊り」といった呼び方をしており、文化財名で呼ぶことはない。「横山」を付けるのはあくまで外からのまなざしであり、横山の人々があえて自身の集落名を口にすることはなかったことの表れであろう。また現在では六月灯の日に合わせておこなわれているので、子供たちやそれを経験した青年たちにとっては六月灯でおこなわれる踊りという認識になっている。本章では担い手の人々の呼び方に従い、以後は盆踊りと表記する。

盆踊りの保存会会員は体が動かず隠居した古老を除き、基本的には横山集落の男性全員が対象であり、現在の保存会員数は（引退した人を除き）三十二人（二〇一九年は三十三人）である。保存会会長は平成二十八年より公民館長が兼務している。保存会会員の中には横山集落の公民館役員も兼任している人がいる。ただし公民館と保存会の組織は別であり、予算も別々に組んで活動している。踊り手や歌い手の年齢は六十代を中心となっており、本来踊り手の中心であった二十代から四十代は、そもそも横山集落内での人数が少ないことも相まって、それぞれ二〜三人しかおらず、踊りに関わっている人で一番若い人は三十代前半である（現在に至るまでの継承状況）にて詳細を後述）。また

これまでイベントの際に女兒や女性が踊ることもあったが、「女性が参加すると阿久根千代女が嫉妬する」と言って基本的には保存会会員は男性のみであり、男性のみが踊りに参加している。

練習状況

二〇二〇年からは新型コロナウイルス感染症の影響により休止状態のため、二〇一九年までの練習の状況を記す。練習は盆踊りがおこなわれる日の前の週から始まる。基本的には月・水・金曜日の三日間で午後七時（半）から九時ごろまで練習する。場所は盆踊り当日と同様に横山公民館前（横山神社横）で可能な限り屋外でおこなう。練習では当日の衣装は着ずに、基本的には通し稽古をし、その中でうまく踊れない曲があれば、その曲を出来るようになるまで集中的に練習する。初心者が参加している場合には、個別練習をおこなうなどの対応もとる。多くの場合、初心者や経験の浅い人は、太鼓を持つ役か横山盆踊りの名が入った幟を持つ係になる。五〜六年前に復活当初から踊ってきた横山孝氏と長野忍氏が踊り手から引退したことにより、現役の踊り手としては手本役である師匠にあたる立ち位置の人がいなくなり、現在では踊りの模範になる人がいない。そのため、現状では踊りの細かな所作の練習までは行き届いておらず、一番基礎的かつ重要である、太鼓と歌と踊りのタイミングが揃うことを目指して練習がおこなわれている。いくつか曲がある中で、例えば「阿久根千代女」は比較的テンポも良く踊りやすいが、ゆったりと手踊りで踊る「春の夜」や「福神丸」はより練習が必要だという。

当日のスケジュール

現在は新暦の七月の第二日曜日に設定されている。盆踊りの日は新年度に集落の各戸に年間スケジュールが配布されるため、集落の人々へ周知されている。前日は横山集落の人が総出で横山神社の境内を清掃し、六月灯の灯籠を設置する。灯籠は上西小学校の児童とNPO法人きぼうの館のメンバーによって描かれた色とりどりの灯籠が並び、当日の夜になると明かりが灯される。

当日は午前中に横山神社の夏季大祭がおこなわれる。その大祭には集落の役員のみが集まり、他の集落の人々は夜にかけて各々で神社へ参拝に行く。盆踊りの踊り手たちは午後六時前に各々で神社への参拝を済ませ、公民館での着替

えに向かう。公民館では女性たちが着付けを手伝う。数年前に婦人会がなくなったために、現在は男性役員の妻を中心に、婦人会にいた女性たちが参加している。

午後七時ごろからは阿久根千代女を題材とした紙芝居「横山盆の舞語り」が二十分ほどおこなわれる。紙芝居が盆踊りの日におこない始めたのは二〇一六年からであり、横山出身の馬場信一氏によって新たに始められたものである。紙芝居の構成は馬場信一氏によるもので、内容は比志島国隆が種子島へ流罪で種子島に流され、阿久根千代女が坊ノ津から種子島に渡り、二人で命を落とすまでの物語が描かれている。これに横山集落の小学生から高齢者までの有志が参加してナレーションや台詞を担当する。集落の人々に盆踊りの意味を周知し、盆踊りの伝承を促すことが目的となっている。当日は神社の境内で紙芝居風にした画像をプロジェクターに映し、参加者に見せている。

紙芝居が終わり、午後七時半頃から盆踊りが始まる。もともとは三〇〜四〇分かかる踊りであるが、踊りのスピードが年々速くなり、また歌詞も省略していることから、現在は二十分ほどで終わる（踊り方の詳細は後述）。

午後八時頃からは公民館で直会（なおらい）がおこなわれる。直会の参加者は基本的には保存会会員（踊り手など）で、招待客として市長、上西小学校校長・教頭、わらび苑（老人ホーム）、研究者である。直会での食事は婦人会があつた時には婦人会があつてしたが、今は着付け同様に、男性役員の妻を中心とした元婦人会メンバーが提供している。

なお、横山集落内で七月に不幸があつた場合は踊り自体が中止となる。保存会会員が親族の不幸により喪がかかる場合は、基本的には四十九日が明けていれば（もしくは一年経過していれば）踊りに参加できる。

役割

役割は、①太鼓、②鼓（ツヅミ）、③鉦、④甲（チョウ）、⑤踊り、⑥歌の六つに分かれる。以下の役割の説明は二〇二一年三月から二〇二二年九月にかけて長野忍氏（昭和十四年生）、八元喜三氏（昭和十七年生）、横山孝氏（昭和十四年生）を中心に教示を受けたことや二〇一九年の盆踊りを撮影した映像をもとに記述する。なお以前は笛の役割もあり、それについては第三章第二節三「横山盆踊の音楽」を参照されたい。またそれぞれの道具や役の衣装の詳細は

第三章第二節四を参照されたい。なお太鼓・鉦・甲の名称に関しては保存会作成の役割分担表（衣装の区別）資料に基づいて記述する。

太鼓は、直径三〇cmほどの締め太鼓であり、これを太鼓持ちの役割の人がしゃがんで持ち、その正面に打つ人が位置し、二人一組でおこなう。太鼓は盆踊りの中心となる役割であり、もともとは太鼓の音に合わせて歌や踊りが演じられた。二〇一九年時点では太鼓は二組出しており、その一人は八元喜三氏である、もう一人は後継者育成のために三十代の若手に二組目として参加させているという。そのため、この二組は二〇一九年では点対称になるよう配置し、太鼓を打つ人同士が互いに見えやすくなるよう工夫されている。太鼓役は踊りを経験した後に選ばれることが多いが、とりわけ八元氏のように踊り手から、途中で親から太鼓役を譲り受ける場合がこれまででは多かったという。太鼓持ちの人はただ太鼓を打つ人に向けて持てばよいのではなく、打つ人が打ちやすい角度に太鼓を持つ角度を調整したり打つ人との距離を調整するなどその都度の状況に合わせて対応が求められる。特に入場と退場である入端と出端では移動しながら太鼓を打つため、とりわけ細かな調整が求められる。比較的経験の浅い人が担う役ではあるが重要であるという。装束は太鼓を持つ人・打つ人共に白いう着物に黒の角帯と白の練り帯で締め、カムキを付ける。足は白足袋に草履を履く。それに加え、太鼓を打つ人は背中に大振りの刀をさす。

鉦と鼓は一人ずつおこなわれる。『鹿児島県指定文化財申請書』（発行年不明）によると、鉦は二人いたようである。鉦は当たり鉦を使用しており、撞木で凸部分を叩く。鼓はいわゆる能楽で使用するような小鼓を手で打って奏する。基本的にはいずれも太鼓の打つリズムに合わせて叩く。衣装は太鼓同様に白いう着物でカムキを付ける。二〇一九年は鉦と鼓は向き合うようにして、太鼓の隣に位置している。

甲（チョウ）は笹持ちであり、この笹は七夕竿を言われ三mほどの笹に様々な色紙を輪っかにしてつなげた装飾や花の形になった色紙を付ける。太鼓、鉦、鼓が横並びになっている先頭に立つ。それぞれの歌が始まる前に「チョウ」と一度叫び、反時計回りに三回、楽（太鼓、鉦、鼓）の周りを回るのが特徴的である。叫ぶ以外は楽の前に七夕竿をもって立つのみであり、この間に踊り全体を眺め、よく観察する役割もある。この甲の役がある芸能は鹿児島県内でも珍しく、その意味において盆踊りの特徴づける役割とも言える。衣装は白の法被

に白いステテコを履き、白鉢巻きをする。

弔の役は長年、長野家が代々担当してきた。八元氏によると、長野宗也氏が長男宗男氏に引き継ぎ、その後さらに宗治氏に引き継がれた。しかし、八元氏の父が太鼓打ちを引退する際に太鼓を引き継ぐ人がおらず、すでに弔の役になつていた宗治氏が途中から太鼓の役に代わつておこなうようになった。平成五年ごろからは横山の公民館長が担当している。公民館長は一年交代で集落の中で輪番制で担当している。そのため弔は、盆踊りの中で一番担当する人が変わりやすいと言える。

踊りは男踊りと女踊りの役に分かれる。踊りは二重の輪踊りであり、男踊りは楽を中心に内側の円(ウチワ)で踊り、身長が高いなど体格が大きい人が選ばれる。一方で女踊りは男踊りの外側(ソトワ)で比較的身長の高い人が選ばれる。二〇一九年は男踊りが十人であつたのに対し、女踊りは十三人であつた。それぞれの輪では踊りの熟練者と経験の浅い人を交互に配置し、両隣の人の踊りを見よう見まねで踊れるような工夫がなされている。保存会に新たに入る人は基本的にこれまでは踊りから参加する流れがあつたが、近年は人手不足により新会員でも踊り以外の役から経験する人もいる。衣装は男踊りが太鼓・鉦同様に白い着物に黒の帯と白のねり帯を締め、カムキを被る。また脇には大小二振りの刀とシキミ(横山ではシキビと言ふ)を差し、背中には白地の扇子を背中にさす。足は白足袋に草履を履く。なおカムキは復活当時はなく、さらしを巻いており、大変暑く息苦しかったという。都城のイベントに出演する際にカムキに変わり、今に至る。女踊りは紫の頭巾の上から花笠を被り、白い浴衣に黒の帯に水色のねり帯を締め、小刀一振をさす。足は白足袋に草履を履き、扇子とシキミを背中にさす。復活当初はこのような衣装が揃えられず、横山集落の女性の古老たちの着物を借りて踊つたという。

歌は現在四人でおこなつている。復活当時から四〜五人いたそうだが、人数は特に決まつておらず、役割の中で一番後継者の育成が難しいと言われている。そもそも歌自体は踊り手も歌うものであり、歌い手だけが歌つていたのではない。歌い手の一人が音頭取りとなり、音頭取りが一節歌うと、それに続いて他の歌い手も斉唱する。現在の音頭取りを務めるのは長野侃(すなお)氏(昭和十一年生)である。他三人は園田守氏(昭和二十三年生)、馬場信一氏(昭和三十三年生)、長野和治氏(昭和三十五年生)であり、青壮年層はいない。

三〜四年前に長年音頭取りをおこなつてきた長野実美氏(昭和八年生)が引退している。長野実美氏はマイクがない時代から歌つており、持ち前の高い声でマイクが無くても遠くまで通る声で、これを良い声と考えられていた。現在はマイクを使って歌つており、このスタイルがいつから始まつたのかは不明である。当日は保存会で作成した歌詞カードを持ち、横一列に並んで歌っている。衣装は歌い手と同じであり、ただしカムキは被らない。

踊り方

ここでは横山孝氏、八元喜三氏による教示のもと、踊り方のポイントを説明する。なおここでは盆踊り全体の流れに沿つた踊り方の逐一の説明はせず、盆踊り全体の流れは、第三章第二節三「横山盆踊の音楽」での説明と、付属の映像を参照されたい。ここでの踊り方のポイントとは、映像を一通り見ただけでは分からないような、踊り手自身の身体感覚による要点であり、イメージな視点である。そこには現在の青壮年層の踊り手には共有されていないような踊り方もあり、踊り手と言つても一括りにはできないような経験・認識の差があることは留意しなければならない。それを踏まえた上で、今回は横山氏や八元氏が復活当初に当時の師匠から教わつてきた踊り方の記録という側面を重視し、また今後の横山集落内での踊りの継承に何らかの形で役立てられるように記述する。

本稿の記述のもとになつているのは、二〇二二年九月八日に鉄砲館にて横山孝氏、八元喜三氏、馬場信一氏に、二〇一八年におこなわれた「西之表市市制施行六十周年記念 郷土芸能フェスティバル」に盆踊りが出演した際の映像を再生して見てもらい、そこから踊り方や歌い方のポイントについて筆者が教示を受けた内容である。また筆者自身は本調査に二〇二二年より参加しているため、実際に盆踊りを見たことがない。それを考慮した上で横山氏らの教示を出来る限り丁寧に拾い、記述することを試みた。読まれる際はこれらの点に留意されたい。なお、所作の記述に関しては、三氏から教示を受けた内容(「こうする」「こうやってする」などと、指示語を述べながら実際に所作で示されたこと)を文章として分かりやすいように筆者の解釈も含んだ形での記述になっていることは了承いただきたい。三氏の言葉を実際に記述する場合には鍵括弧を使用し、直接引用する。

まずは現在の歌い手たちが当日に持っている歌詞カードに記載された歌詞をそのまま紹介する。

① 出端

種とりて 嬉し植縄 武蔵野の
しよもくやらむ 吾が 思い草
茂れ 茂れ 茂れ 治まる御代こそ
めでたけれ

② めでためでた

めでた めでたの 御殿屋敷
小倉 九つ 御門 八つ
舟は 千艘よ 御金舟よ
金を 下ろすは 品川に

③ 阿久根千代女

阿久根千代女は ヨー夜舟 漕ぐ ハイヤー
足も だるんどヨー テー手もだるんど ハイヤー
まして 夜風も サー 寒かるとど ハイヨーホー
寒かるとど サー 寒かるとど ハイヤー
まして 夜風も サー 寒かるとど ハイヨーホー
阿久根千代女は チー稚児心 ハイヤー
玉ずさに また ウー唄かえて ハイヤー
花の恋の女に ヤーやると見た ハイヨーホー
やると見た ヤーやると見た ハイヤー
花の恋の女に やると見た ハイヨーホー
花の恋の女の おしゃれごと ハイヤー
うつつ名のたつ ター玉草を ハイヤー
水に浮き草 サー笹の露 ハイヨーホー

笹の露 笹の露 ハイヤー
水に浮草 サー笹の露 ハイヨーホー

坊の止ば瀬に フー舟乗りて ハイヤー
荒らし待ちたる コー心して ハイヤー
これも浮き世の モー物語 ハイヨーホー
物語 モー物語 ハイヤー
これも浮き世の モー物語 ハイヨーホー

④ 春の夜

春の夜のー 春の夜の 夢おどろかす
くだかけの その君ぎみの もの思い
また逢(お)うことは 五(い)つ川の
深き心は かぐち草

根引きに せむと よい交わす
身は捨て草で 捨てられて

流れし此の身は 淀川の
何を頼りに 浮草の

波に揺られて 唄語ろう
あはんや 君が 情けなや 目覚ましや

それは若草 身は 恨み草
何ぞそなたに 逢いたい話

秋の別れも せんかなれど
由なき恋を 人にせかれて 面白や

⑤ 福神丸

今年ヤー目出度のー 今年ヤー目出度のー
福神丸に 黄金の台に松植えて

一の枝にはー 銭がなる

二のヤー枝にはー 金がなる

末の緑に 鶴据えて

何とさえずる 立ち寄り聞けば

今年ヤー 良い年 宝の年よ

道の小草に 米がなる 思いのままに 満腹へ

⑥引端

せんと深山の 深山の 奥の入りには ちようと出た

よしわか藤袴着て 見れば たて袖 長羽織

裾にや嬉し小鹿の子に よしながきみ置いた 面白や

歌

歌詞カード通りに記載したが、③阿久根千代女、④春の夜、⑤福神丸の歌詞に空行があるものの、これは空行が一番の歌詞、二番の歌詞というような区切りの意味ではなく、いずれの歌も一気に最後まで歌い上げる感覚があるという。特に③阿久根千代女では「ヨ」「サー」「チ」「ウー」などカタカナでのばす音が書かれているが、これは次に来る単語の一字目のみが先に独立して引きのばすように歌うことが表れている部分だと思われる。それ以外でも基本的な歌い方として一語一音のシラブルではなく、一語に何音も当てはめるメリスティックな歌い方である。また「ハイヤー」は囃子にあたる部分であるが、ここは歌い手が全員で歌い、他の歌の部分との差異はない。「ハイヨーホー」に限っては、太鼓の役が掛け声のように囃す部分である。

歌は高音が続きメリスティックな歌い方であるため、息がなかなか続かず、気が付くとスピードが速くなってしまう傾向にある。そのため横山氏や八元氏曰く、今は所々で太鼓の一定のリズムよりも先に歌が早く始まること（太鼓より「前にうたいだしとる」こと）があり太鼓が歌に合わず形になっているが、理想は太鼓に歌が合わすのが望ましいという。そのためには、「ぐっと一息ついて」歌い出す必要があるという。例えば③阿久根千代女では上記の歌詞

の一行を一節だとすると、一節の最後に太鼓がドンドンドンと三回打ち、歌い手はそれを聞いて「一息いれ」、歌い出すと落ち着いて歌え、またそれに「踊りもはやか（はやく）」ならず、太鼓や踊りがゆつくりと合わせやすいという。それほど歌は上手に歌うのが難しいのであろう。現在は複数人で歌っているため、出来るだけそれぞれの息継ぎのタイミングをずらし、歌が途切れないように工夫している。

入り端（イリハ）

歌詞カードでは「出端」と書かれているが、踊り手たちは「入り端」と呼んでいる。ここでは楽（ガク）が入場し、それに続くように踊り手たちが男踊りと女踊りで左右反対方向から入場し、歌が終わるまでゆつくりと歩きながら円形をつくっていく。この際に気を付けている点は踊りやすいように両隣の人の間隔を「一方に寄らんようにまわりながら間隔とる」ことである。またウチワの男踊りとソトワの女踊りの円も一定になるよう調整している。歩く際は一定の歩幅で歩くようにし、極端に大きな歩幅で歩くようなことはしない。

踊り

いずれの曲の場合も基本的な動きとして、腕をあげる場合は目線の高さままで、もしくは「肩より上にあげる」ことが望ましいとされている。気を抜くと腕の位置は下がりやすいので気を付けなければならない。その際に、直線的に勢いで素早く腕をあげたり、体の前で小さくまとまった動きをするのではなく、一つ一つの所作の「もつていきかた」が大きくゆつくりと見せるように動かす。これは②めでためでたで扇を持つたり、③阿久根千代女でシキミを持つて踊る際も同様である。これらの所作を踊り手が太鼓や歌を聞きながら揃えていく。例えば「手をあげんばいかん（手をあげなければいけない）」ときもおろすひとがいるような「全然おどりがおとらん（合っていない）」状態は避けなければならない。太鼓を打つリズムと歌と踊りの三つのタイミングが合うことが求められる。

特に一つ一つの所作は太鼓の音に合わせて切り替えておこなっていく。例えば、③阿久根千代女の「ハイヨーホー」の前の太鼓のドンドンドンという三回打つリズム（特に三回目のドン）に合わせて、踊り手はシキミを「きる」とい

う。このニュアンスとしては、右手で持っているシキミを目の高さまであげていたところから、自身の右下へとすつと下ろすのだという。「ハイヤー」の歌詞を歌う部分から「きる」のが早くても遅くても良くなく、またなんとなく下ろすのではなくメリハリをつけることも含まれているようである。

特に横山氏や八元氏が大事な点として挙げているのは、④春の夜と⑤福神丸の手踊りの曲での腕や手のあげ方である。手踊りの場合は細かい部分の違いが目立ちやすいという。基本的な動作は上述した通りであるが、具体的には④春の夜でよく出てくる所作として、腕を下からぐるっと前後に一回まわす時は、自身の体の前で小さく回すのではなく、腕が背中よりも後ろにいくように肘を伸ばして大きく円を描くように「ゆっくり大きくまわす」。また腕をあげるときは「手はまっすぐあげなさい」と言われてきたという。肘を伸ばし、「手（指先）はきれいに伸ばしてそろえ」、「自分の真ん前に手のひら」がくるように腕は肩幅より広げずに自分の正面に腕を伸ばし（Y字のようになつたりせず）、手のひらが正面に向くようにあげていく。それに関して昔は手のひらを自分の内側に向けて肩の上ほどの高さまで上げて一度おろしてから、今おこなわれている腕をあげる所作をおこなっており、これが一連の所作であるという。この腕をあげる所作はその前に一度手を「上からもつてきて」からおこなうのがポイントということである。

また手をあげるだけではなく、両手を横に「流す」所作も多く出てくるが、これは自分の胸より下の位置で手を「流す」のではなく、一度胸の高さまで手を引き上げて、肩ほどの位置から「上でもつていく」ように手を流す。このような特徴的な所作は特定の歌詞と結びつけて覚えており、その歌詞を歌うタイミングに合うように所作をおこなう。例えば④春の夜の「根引きに せむとよい交わす」という一節の中で『よいー』でこうして（手を引き上げて）準備してからこうして流すもんじゃないって、準備せずに「すぐに流して」はいけないという。「よい」を歌い手が歌うのに合わせて手を一定の高さに到達してから「流して」いくということである。

このようにすべての曲を通して基本動作を習得していくことによつて、「自分の踊り」から「阿久根千代女の歌の踊り」にしていくのだという。

出端（デハ）

歌詞カードでは「引き端」と書かれているが、実際に踊り手たちは「出端（デハ）」と呼んでいる。これは退場の意味であり、退場する際は、踊り手は歩幅を大きくして歌が終わる前に完全に退場してはいけない。最後に退場するのは太鼓であるが、踊り手もそれに合わせるように歩幅を調整し、歌が終わるのと同時に退場するように歩く。

現在に至るまでの継承状況

上記のように横山氏や八元氏が言及している踊り方は、昭和三十八年に盆踊りが復活した際の師匠であった、中村清市さんの踊り方が基礎になっている。なぜ昭和三十八年のタイミングで復活したのかは定かではないというが、横山ではこの時に踊れる人がすでにおらず、平田集落にいた中村清市氏に師匠として踊り方を乞い、横山まで来てもらい横山の青年たちは踊りを復活させるために教わったという（復活前のことは第三章第二節「横山盆踊の概要」を参照されたい）。当時、横山の青年団長だったのが八元喜三氏であり、会計を山元勝實氏、踊りには横山孝氏、長野忍氏などがいた。当時の青年たちはそれぞれ役割分担をし、盆踊りを練習できる環境をつくり、旧公民館で練習した。八元氏は青年団長として、中村清市氏を平田―横山間の送り迎えをしていたという。当時の練習の熱量は高く、八元氏曰く、一〜三カ月の間、毎晩練習した。その際は青年層だけではなく、集落中の他の年齢層の人も練習し、中には五十〜六十代の人もいた。当時、横山に住んでいた大半の人は、農業か乳牛関係の仕事に従事しており、横山の中で仕事ができ、自営業で比較的時間の拘束が少なく、青年団の人数も多かった。その社会状況が踊りの復活へと推し進めたと言つても過言ではないだろう。

青年団たちは中村清市氏を「セイノおじ」と呼んでいた。中村氏は踊りが別格に上手で、横山の人々は中村氏から踊り方を手取り足取り教えてもらったという。また中村氏が人々の真ん中に立ち、その周りを人々が囲んで中村氏の踊り方を見て覚えたという。その練習以外でも、歌は農作業をしながら歌ったり、酒を飲みながらちやぶ台を叩きながら練習した。歌に関しては、横山の年寄りが旧七月七日の七夕の時に盆踊りが踊られなくなった時期も歌だけは神社の境内で太鼓を打ちながら歌っており、歌える人が残っていた。練習は第一回の鉄砲祭り（当時は祇園祭）に出演することに向けておこなわれており、単純に集

落内の行事の復活だけではなく、人前で披露できるレベルまで踊れるように練習がなされていたのだろう。横山氏や八元氏曰く、「セイノおじ」らの教え方は厳しかったという。踊りが太鼓や歌と合っていなかったり、踊り手の中でも合っていなかったりすると厳しく指摘されたという。笛の師匠は伊之峯の長野熊市氏であったが、ほとんど教えてもらえず仕舞いであった。復活当初は衣装を揃えられず、自前の浴衣を着て踊っていたという。女踊りの役のはきは横山の年配女性のゆかたを借りて踊った。

西之表市教育委員会が発行した『鹿児島県指定文化財申請書（種子島大踊、横山盆踊）』（発行年不明、昭和四十三年頃か）によると（以下の漢字表記は申請書のままである）、横山盆踊保存会長は長野重則氏（当時五十一歳）、師匠が中村清市氏（六十九歳）、長野実利氏（七十歳）、長野甚之助氏（七十四歳）となっている。師匠は実際にはその他に二、三人いたという。太鼓打ちは八元喜与志氏（五十八歳、八元喜三氏の父）、太鼓持ちが山元勝美氏（三十歳）、鼓が徳本邦広氏（三十六歳）、鐘は長野正治氏（三十三歳）他一名、笹（弔）が長野宗雄氏（三十四歳）、笛が長野友則氏（二十四歳）、男の踊り手が中村清市氏ほか九名、女の踊り手が長野トミ子ほか十三名である。ただし笛は実際にもう一人おり、踊り手に中村清市氏が記載されているが実際には当日に中村氏は踊っていなかったという。年齢層が古老または青年層という構成になっていることが分かる。

現在は集落内も少子高齢化社会になっており、また復活当初から踊ってきた人も今では現役の踊り手はいなくなつた。横山孝氏はすでに五、六年前に踊り手を辞めたが、練習には常に顔を出している。長野忍氏も同時期に引退し、これも継承においては大きな出来事であった。しかしかつての中村清市氏のように現役の踊り手の中に師匠がいなくて、これまでの踊り方は引き継がれなくなつてきている。ただし現在も師匠をできそうな人は横山氏など四、五人いるとのことである。保存会の中で一部の人は、人数不足を解消するために横山出身の出郷者に踊り手になるよう声をかけたり、女性を踊り手として入れたりしても良いのではないかと考える人もいるという。また一方では横山集落だけではなく、同じ西校区内の他の集落からも踊り手を募つても良いのではないかという声もあるという。ただしその場合、文化財指定名に「横山」の集落名がついているのが、いくら同じ校区とは言え、横山以外の集落の人を誘いにく

くしているようである。昭和三十八年の復活当初から他集落にも呼び掛けていれば別だが、いまさら人数合わせが目的で呼びにくいのが実情のようである。

復活当初から踊つてきた横山氏や八元氏は継承に危機感を持つている。比較的若い世代である「今の人は、踊りをすませばよか」という感覚で「心から郷土芸能だから無形文化財だからしっかり踊らんばいけん」という感覚があまりないのではないかとという。実際に筆者が横山集落内に住む若い人に踊りについて聞いた際も、特に盆踊りの伝承に関しては、自分事としてはまだ考えられないという。また続けて踊り自体もそれほど激しい踊りではなくゆったりとした踊りであるために高齢者でもまだできるのではないかと思つていと話していた。そのような状況から、以前に横山集落の人々を集め「昭和58年頃」と記載された八ミリテープをデジタル化した映像の鑑賞会をおこなつたこともある（テープの出所は不明）。その映像は現在、馬場信一氏が管理している。その馬場氏はこういった背景もあり、紙芝居をおこない多くの人に踊りの意味を理解してもらい、より親近感をもつてもらおうと試みている。ただし、筆者が横山集落内で踊りに参加している六十、七十代の男性の何人かに話を聞いたところ、踊り方も崩れてきて、いい加減な感じになってきているので積極的に参加していかない（できない）という正直な声や、積極的に参加していない人など様々な考えを持った人が集まっているのである程度強制力を持つて続けないと、このような伝統芸能は続かないだろうという声もあり、決して保存会全員が継承に関して同じ方向を向いているわけではなく、このような様々な声があることは留意しなければならないだろう（註）。

これに追い打ちをかけているのが新型コロナウイルス感染症による盆踊りの中止である。二〇二三年一月時点では、すでに盆踊りが三年連続中止になっている。二〇二二年に関しては四月の班長会議（横山集落は六班に分かれており、それぞれに班長が決まっている）で、三年連続で中止になる恐れが話題に上がり、稲刈り後の時期にせめて練習だけでもすべきではないかという声が上がった。しかしその後、西之表市で新型コロナウイルス感染症の陽性反応が確認された人々が急増したため、六月の班長会議で中止が決まった。当日は神社の夏季大祭のみがおこなわれたが、一部の人々からは踊りもおこなつても良かったのではないかと中止になったことへの葛藤を吐露する声も聞こえた。特に二〇二二年はメディアを通して全国的に祭りや民俗芸能が再開もしくは一部再

開されたことが次々に報道され、それを横山の人々も目にし、葛藤を生んだことが伺える。また三年中止になったことで八元氏は「だからやー、こんどは二三日の練習ではとてもやなかけど踊れんど」と、再び踊れるようになるまでこれまでのように三日間の練習では難しく、それ以上に練習しなければならぬのではないかと危惧している。

コロナのパンデミック以前より若者（三十代）が全員参加しているわけでもない。話を聞く限りでは横山の場合、三十〜四十代は踊りに参加できる男性は五人ほどいるようである。その中では踊りに参加している人の方が少ないのが現状である。二十代に関しては二人ほどいるようだが参加していない。その背景にはそれは集落外で仕事をしており仕事の予定がつかない個人的な事情もあるようだが、聞き取り調査から浮かび上がったのは、青年団組織加入への負担、踊りの練習での師匠の不在、男性のみの参加など、西之表市全体の社会状況や盆踊りの保存会組織の在り方が関わってくるものであった。

青年団に関しては、横山集落だけではなく、西之表市全体で青年層の人口が少なくなり、各集落ごとに青年団を維持するのが難しくなっている。そこで西之表市は市全体で青年団連合会をつくり、そこから各集落に向いて活動する形を作った。しかし結局は連合会だけではなく、各集落の青壮年団も細々と活動を続けざるを得ない状況で、青年層の人はかえって二つの団体に所属することになり負担が増えた。一九六〇年代の青年団の人数に比べると圧倒的に青年の人数が減り、青年の一人当たりの負担が増えているということだろう。盆踊りに限定せず、集落、校区、さらに市全体まで踏まえると、盆踊りへの参加率の低さは盆踊りだけに原因があるのではなく、すでに集落内外での青年の活動は多く、盆踊りに集中して参加できないのが現状だと思われる。

また盆踊りに限定して考えた際には、指導体制も一つの要因として考えられる。それが師匠の不在である。盆踊りに参加したことのある三十代の人は、今は絶対的な師匠がいないため、練習の際に先輩たちから様々な指摘を受けるといふ。その指摘の内容が人によって異なっており、どの指摘を聞けば良いのか分からず困惑することもある。このような状況は横山の盆踊りに限らず全国的によく聞く話だが、この指導体制が若い人への踊りの参加を躊躇させているのであれば、看過することは出来ないだろう。特に横山の場合は八元氏曰く、師匠になれる人は四〜五人いるとのことなので、検討の余地はあるだろう。

それに関連して、今の青年層には、男性のみが参加する、いわば「横山の『男性の』盆踊り」という状況にもやや違和感があるようである。全国的に女性の活躍がすでに叫ばれている時代背景もあり、盆踊り以外で西之表市全体を見ると、若い女性のUターン者も多く、地域に貢献するような活動をおこなっている人もいるという。そういった状況で、盆踊りに参加する人が少ないと言いつつ、男性に限定されていたり、踊りの後の直会も男性だけが「飲ん方（のんかた）」している（飲んでいる）のは今の時代にあっていないと、やや疑問に思う若者もおり、これが踊りに積極的に参加を躊躇させているようである。横山では個人的に女性の参加も考えている人もいるようだが、この状況は横山の盆踊りに限らず、全国的に民俗芸能の継承が課題とする社会（の組織）の状況である。ここでは現状を記すのみであるが、横山の人々がどのように対応するか、今後も追って調査を継続することが求められるだろう。（荒木）

註

今回のような文化財調査の場合、地元教育委員会や調査員が担い手の人々に話を聞く場合に、長年その芸能に携わり継承に積極的な人を話者として意図的に選別話を聞くことが多い。それは当然のことでもある一方で、それ以外の人々の声を聞かないまま調査が終わり、報告書に記述することが多い。しかし実際に集落で一つの踊りを継承する場合には調査では聞くことのない声を持つ人々も含めた総体として継承をおこなっていくわけなので、今回のように継承に積極的では無かったり、積極的ではないが続ける事に意味を見出そうとしている人々の声は可能な限り調査でも掘り上げ記述していくことが、踊りの継承に対してより誠実に向き合い記述することにつながる。と考える。

第三節 種子島のその他の盆踊

一 種子島のその他の盆踊

種子島は縷々述べてきたように、皆法華(かいほつけ)といわれる全島法華宗の島であった。『南種子町郷土誌』(昭和六十二年)に「盆踊は各集落で、それぞれの寺に奉納する踊りを持っていた。南種子全域におかれていた八寺のうち、三石以上の寺が中心となって切紙が出され、それによって各集落が交互に踊りを奉納することになっていった」とある。種子島の寺院については第二章「調査地域の概要」で概観した。明治になるまで、種子島のほぼ全域にて盆踊がおこなわれていたと想像してよいであろう。

切紙(キリガミ)というのは古くは重要な通達事項を、切り取った紙片に書いて渡したもののだが、それと同様の、寺が檀徒に出す盆踊奉納の依頼文書のことで、南種子町西之では現在も出している(檀徒の代表役員が西之地区公民館長に出す)。盆踊は寺から地元への要請という形でおこなわれてきたのである。現在は単なる封筒に入った事務的な依頼文書だが、江戸期は盆踊を踊ることを承認された(許された)証拠として大事に扱われたはずだが、そうした伝承はもうない。

西之と横山の盆踊については第一節と第二節で述べたので、ここでは種子島のそれ以外の地区について概観する。いずれも現在は断絶し、伝承者はいない。これまでに出版された報告書類や、地元の方々の話などに基づいて記す。

特に本報告書でも特論の執筆を担当している民俗学者故下野敏見は、種子島の高等学校教諭として赴任して以来本格的な種子島の民俗調査に従事し、昭和三十年代から四十年代にかけて多くの明治生まれの伝承者と接触し、緻密な報告を出し続けた。同時に、在職した中種子町高校と種子島高校にて郷土研究クラブを作り、高校生たちとともに聞き取り調査を実施し、高校生たちは自分の出身地区の古老たちから数々の伝承を聞き取っている。高校生にとつては地元を知るチャンスとなり、聞き取った話は重要な証言となっている。また地元在住者を中心とした歴史民俗の研究サークルも作り、広く島外者にも呼びかけて種子島研究の輪を広げた。転勤によって種子島を離れて以後もそれは地元を引き継がれ、重要な聞き取り資料が報告された。

そのほかの報告も含め、ここで参照する刊行物を刊行年順に、会報などは第

一号の刊行年順に以下に掲げる。今後の研究のために左掲一覧が参考になれば幸いである。

参考文献一覧

報告書類

①『郷土研究』(昭和十年)

大正十五年三月、県立第一鹿兒島中学校(通称旧制一中)の種子島分校が西之表に設置され、昭和四年に旧制種子島中学校として独立した。この時期に奉職した教員たちによって昭和十年『郷土研究』と題するガリ版刷り冊子が刊行された。歴史・宗教・地理・方言・植物などわたって調査研究が報告されている。このうちの「種子島の文学と民謡」の中に盆踊が取りあげられ、住吉・立山・坂井・上中の歌詞の一部も収録されている。この時期の歌詞の採録はほかになく、資料として貴重だが、採集地などの記載がないのが惜しまれる。消滅するとは思わなかったであろう。このあと、それぞれの地区の中で触れる。

②『ちくら』(昭和二十七年～昭和三十一年)

江口清厚発行。昭和二十七年四月の第一号から昭和三十一年九月の第十二号まで発行。発行者は江口清厚となっているが、本名は江口清淳のようである。教員を経て実家の安城(西之表市)の商店を手伝いながら民俗の報告の場として『ちくら』を発行した。昭和四十五年十二月「種子島を語る会」より一冊本として復刻発刊されている。「ちくら」という名称は南種子町平山の海岸の「千座(ちくら)の岩屋」から取ったもの。

③『種子島民俗』(昭和三十四年～昭和四十三年)

中種子高等学校地歴研究部会発行。下野敏見が開始。第一号は昭和三十四年三月発行。昭和四十三年七月の第十八号が最終号と思われる。昭和三十八年二月の第十五号より発行者は種子島科学同好会となっている。膨大な数の民俗聞き取りが掲載されている。高校生によるひとことレポートも多く含まれる。

④下野敏見『種子島民俗芸能集』(昭和三十八年)

昭和三十八年、種子島博物館発行(実際は著者の私家版)。平成二十二年、その後の報告を加えて南方新社より『南日本の民俗文化誌五種子島民俗芸能集』として発行されている。本節では南方新社版を使用する。

⑤『種子島研究』(昭和三十八年～昭和六十二年)

種子島高等学校郷土研究部発行。下野敏見が開始。第一号は昭和三十八年十一月発行。昭和六十二年三月の第二十四号が最終号と思われる。これにも多くの民俗の報告が掲載されている。

⑥『南島民俗』（昭和四十三年～昭和五十七年）

南島民俗研究会発行。下野敏見主宰で開始。昭和四十三年四月の第一号から昭和五十七年三月の第四十三号までを確認。島内外の研究者や地元関係者による貴重なレポートが満載されている。

⑦『種子島を語る』（昭和四十四年～昭和五十二年）

種子島を語る会発行。第一号は昭和四十四年発行。第二号は昭和五十二年一月に発行されているが、以後の発行については未確認。

郷土史・郷土誌類

⑧『西之表市百年史』昭和四十六年

⑨『中種子町郷土誌』昭和四十六年

⑩『南種子町郷土誌』昭和六十二年

江戸時代の文書類

⑪『種子島家譜』

種子島家の記録。昭和三十七年に鮫島宗美による和訳本（謄写版冊子）が熊毛文学会より刊行された。関連する文書（たとえば通達文とか書簡など）は省略されている。平成五年度から十三年度にかけて、鹿児島県歴史資料センター黎明館より『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ』の四・八・九として刊行されている。これには関連文書も掲載されている。

⑫『種子島家年中行事』

文化五年羽生道潔編。河内和夫による翻刻本が昭和三十九年に出ている。

⑬『御家年中行事属類雑記』

天保七年羽生道潔編。昭和二十六年、鹿児島県農地部農地課より翻刻（謄写版冊子）が出ている。

⑭『懐中島記』

元禄二年以上妻隆直編。役人の島内便覧のような小冊子。次の二種の本で見ることができ、本節では⑭を使用しつつ⑯も参照した。

⑯西之表市立図書館の郷土資料五として書写本のコピーを和綴した冊子。
⑰増村宏による翻刻。『種子島民俗』十四号（昭和三十七年）所収。

第二章で述べたが、明治二年の廃仏によってすべての寺院が撤去され、盆行事も全面禁止となった。明治九年に信教の自由が通達されるが、この七年間の空白は盆踊に大きな影響を与えたと見なければならぬ。西之表市横山（ひとつの集落）と南種子町西之（かつての西之村の諸集落）の盆踊も、仏教行事排斥という荒波をくぐり抜けたものである。伝承の仕方、踊や歌そのものも大きな変化を蒙っている可能性がある。記録や数少ない伝承をたぐって各地の盆踊をさぐってみたい。

（一）『種子島家譜』に見る盆踊

『種子島家譜』に書かれた祭礼に関する記事として以下の六件がある。内容を要約して示す。

①延享二年七月二十一日、川迎祭礼踊場にて集団トラブルがあり、関係者が罰せられる。

②寛延二年六月二十一日、下西之表村吏、物頭等の其の祭礼楽を監することを辞めることを請う。之を許す。

③天明八年七月十六日、西町祭礼踊（毎年之に倣え）、十七日、東町祭礼踊（毎年之に倣え）。

④文政十年七月、今年、両市街の祭礼を止め、清孝院殿の喪なるを以てなり。

⑤文政十二年七月十六日・十七日、両市街の祭礼楽、止む。喪中。

⑥明治二年七月六日、この月、藩庁は盂蘭盆会を廃止して神式にて祖先を祀ることを命ず。

以上は②を除いてすべて七月の記事であり、盆踊という言葉こそないが盆踊についてであることは明らかである。②は下西之表の川迎（かわむかえ）などを含む下西のことで、①と同じ地区の役人から祭礼の監視役をすることの辞退願いが出され、許可されたという内容である。物頭（ものがしら）がどういう役かわからないが、下級役人であろう。祭礼は一ヶ月に迫った祭礼、つまり盆踊である。①に四年前にトラブルがあったことが記されている。祭礼の監視の役が再び巡ってきたのだろうか、騒動を防げなければ責任を問われる。トラブル

ル処理に難儀したことがしのばれる。⑥は第二章（調査地域の概要）でも取りあげた盆行事禁止の記事である。結局、記事はすべて盆踊（盆祭り）関係である。

①に出る川迎は島主に法華宗改宗を進言した日典の出身地であり、日典廟の所在地である。下野敏見『種子島民俗芸能集』には「川迎は日典上人ゆかりの地。日典廟前にて旧七月二十一日に盆踊。庭には施餓鬼棚あり。日典廟の次は本源寺、次に栖林（せいりん）神社にて。カムキ（白布）をかぶる」とあり、『西之表市百年史』にも「川迎では古い盆踊を伝承していたが、日典の命日にちなむ旧七月二十一日、日典廟の前、本源寺の庭、栖林寺境内で踊るものだった。川迎や横山の盆踊はカムキ（冠目）という布製白面をかぶり、精霊の依代である笹竹を中心にして輪形になって踊った」とある。栖林寺とあるのは本源寺隣の栖林神社の誤りである。日典上人の法要は川迎の日典廟（妙泉寺が管理）と本源寺でおこなわれていたので、盆踊がこれらの寺でも踊られたのは当然のことである。

日典廟には踊場があつて、さまざまな踊も上演されたことがうかがえる。そこで多分喧嘩騒ぎがあつたのであろう。喧嘩は祭礼につきものである。『種子島家年中行事』に「西町と東町が踊る日に横目や町奉行や警固足軽が出る」という記述があることはこのあと述べるが、故があつたのである。

③の西町（にしまち）と東町（ひがしまち）は赤尾木の城下町（商工人その他の町）で、現在の中心街に当たる。名前は現在も引き継がれている。この盆礼踊催行は毎年これに倣えというわけだから、盆踊は毎年おこなわれていたのである。④⑤は当主家族等に不幸があつた場合、音曲禁止が通達されたことを物語る。服喪は西町・東町のこと、種子島全域に及んだかどうか。

以上断片的な記事ながら、江戸時代を通じて少なくとも赤尾木城下や旧西之表村川迎で盆踊がおこなわれていたことを確認することができる。そして⑥の盆行事の全面的禁止という事態を迎えたのである。

かくて藩内では盆行事が禁止され、種子島でも盆踊を含む盆行事はしばらくは壊滅状態だったであろう。盆行事や盆踊を復活しないとよくないことがおきるといふ議論は各地でおきたはずだが、実際はどうだったのだろうか。明治九年に信教の自由が布達されてからであろう、いくつかの地区で盆踊の復活があつたようだ。その名残が戦後にかろうじて記録されたわけだが、かつてのよ

うな盛大な祭礼踊という形に戻ることはなかった。替わって願成就祭にシフトしたと見ていいだろう。

（二）赤尾木城下の西町と東町の盆踊

現在の西之表市街地は種子島氏の府城（赤尾木城）を中心とする城下町に当たる。通称で中西と呼ばれる場合もある。明治二十二年以前、この赤尾木城と西之表港を中心とする中西と、その南北の丘（上西と下西）が旧西之表村の範囲であった。

江戸時代、城下で盆行事（祭礼）がおこなわれたことは先の『種子島家譜』の記事③④⑤でわかるが、『種子島家年中行事』にも誌されている。この本は種子島家臣羽生道潔によつて編纂された文化五年頃の記録である。編者による説明書きも挿入されている。

これによると旧暦七月朔日より準備としての諸儀礼が始まった。この日、西町・東町に盆踊の主取（ぬしとり）を仰せ渡す行事があつたようだ。「朔日、両町江祭礼踊之儀被仰渡証文之事」という四ヶ条からなる書類が町奉行から西町・東町に渡された。冒頭に「御祭礼両町踊狂ひ之事」、次に「踊主取之事」とあり、以下は警固についての達しである。「踊狂ひ」という表現が面白い。踊が相当に盛りあがつたことを物語る。「主取（ぬしとり）」は踊全体（あるいは盆祭礼全体）の総責任者のことであろう。この言葉は今では琉球舞踊の中でよく使われるが、九州各地の民俗芸能の中でも時々聞くことができる。

八日大会寺（だいえいじ）にて種子島家先祖の施餓鬼会と水棚設置、十三日慈遠寺にて同じく施餓鬼会と水棚設置、同日本源寺にて水棚設置、十四日本源寺にて施餓鬼会などの行事が連日あり、十六日本源寺にて再び施餓鬼会があり、そのあと西町人が参上して踊奉納があつた。本源寺が終わると二番目御館、三番目墓所、四番目慈遠寺、五番目大会寺、と次々に巡つて踊った。十七日（この日は施餓鬼会はなかったようだ）は東町人の踊が同じように実施された。十六日・十七日とも横目・町奉行・兵具奉行が付き添い、足軽が警固にあつた。踊子には御物方より褒美があり、三ヶ寺からは昔は焼酎やスイカの差し入れがあつたが、最近茶やタバコが出る、ともある。

編者の羽生道潔によると、「元禄十二年には十八代久時が家族とともに下島（通常は寛府に居住）、上記十六日と十七日の踊を御館にて上覧した。とこ

るが久時の姉のたつての懇望があつて十九日にも上演し、この時は三ヶ寺の住職ならびに近辺の隠居老体の面々も見物を許可され、末席より見た。天明の頃迄は御広間へ諸士の妻女たちも大勢が集まつて見物した。これは甚だ不敬のことではあるが、何も咎めがないのは、元禄の久時公以来の配慮の余風だったのであろう。しかし近来は御広間から見物することは諸士も許されていないとあつて、盆踊が種子島家当主とその家族や家臣にとつても大きな楽しみとなつていくことがわかる。

その盆踊がいかなる踊であつたかの記述がないのが残念だが、ひとつだけ重要な羽生道潔の書き入れがある。チョウについてである。西町・東町の町人の踊にもチョウ（横山盆踊を参照）が出ていたのである。自分の考えだが…、と前置きして羽生道潔は次のように書いている。

『種子島家年中行事』より

祭礼踊に蝶（チョウ）という者あり。西町は大黒の姿、東町は恵比寿の姿、その仕方は踊ではなく、踊ひとつひとつの間に踊の内輪を三廻り走り廻る迄なり。その謂われは両町とも知る人がいない。考ふるに、祝いの時に用いる銚子提げに蝶の雛形を結び付る（銚子には男蝶、提には女蝶なり）。蝶という虫は天候不順を嫌い、穏やかな日に多くが山中から飛び出し、花のみに一心に飛びついて遊んでいる。その欲のない姿を表現して銚子提に付けるのだという。この祭礼踊でも多人数が蝶のようにそれぞれの欲をださず心をひとつにして踊り歌つて尊霊を慰めるためであらう。また古老の説では、西町踊の蝶が大黒姿をしているのは、昔正月元日、西町人を御館へ召し、大黒の舞を舞わせたことの名残であると。東町踊の蝶が恵比寿姿なのは、正月二日に御館に恵比寿の舞を舞わせた名残である。とはいえこんなことは両町の古い書き付けにも書かれておらず、古老の説（大黒姿とエビス姿であること）ももつともであらう。

確かにチョウという役目の者が出ていたのである。踊るわけではないというのも横山と同じである。蝶の字を宛て、蝶々に付会して解釈しているのは、チョウの意味が忘れ去られているのである。チョウは西町では大黒の姿、東町は恵比寿の姿をしていたという。それは以前、正月二日の年賀に御館に西町と東町がそれぞれ大黒舞と恵比寿舞を舞つて行ったことの名残だとする。羽生道

潔がこれを編集した頃は、正月二日の年賀の舞は絶えていたのである。横山盆踊のところでも述べたが、チョウが演じているのは踊のリード役であり、新発意（しんぼち）と呼ばれた半僧の芸人なのだが、これがチョウと呼ばれたのは、彼ら（大黒姿と恵比寿姿）が蝶に似ていたからなのかもしれない。

要するに横山と同じようなチョウが出たのであり、西町と東町の盆踊は横山盆踊と似たようなものだった可能性がある。またその昔は、正月に両町の町人が大黒舞や恵比寿舞を仕立てて御館に祝賀に訪れていたこともこれではつきりわかる。

下野敏見『種子島民俗芸能集』に「西町に「世々のたけ」という盆踊があつたというが、それは南種子の西之に伝承されている「世々のたけなが」であると思われる」とある。西之砂坂の盆踊歌として記録されている。大梓としては横山・西町・東町・南種子町西之ではおおよそ似たような盆踊がおこなわれていたと考えてよい。阿久根千代女の歌は横山独自のレパートリーだったとしても、横山は赤尾木の本源寺まで来て踊っていたというから、赤尾木城下の土族たちにも十分知られていたであらう。

（三）赤尾木城下以外の盆踊

赤尾木城下以外の島内各地の盆踊を見る前に、特定できない場所の盆踊の報告があるので、それについて述べる。前掲の参考文献①『郷土研究』（昭和十年）の中に「旧盆十五六日頃、寺の広庭（今日では民家の庭でも行われる）に於て行われ、多くは輪踊である。それは田舎になる程盛んである」とある。寺の庭や民家の庭にて輪踊が踊られていたことがわかる。横山盆踊と似たような踊であつたことが想像されるが、「民家の庭でも踊った」というのは初盆の家を廻つて踊るといふ慣行があつたことを思わせる。

『民俗芸術』第一巻第八号（昭和三年八月）に上妻宗昌という人が「種子島の盆踊」と題して短文を寄せている。四百字足らず短い文だが、その中に「島の盆踊は旧の七月十六日を上り日として朔日の日から女ばかりで踊られる」と記されている。集落名の記載がなく、執筆者は自分の故郷に在住する付近のことを書いたと思うが、どこ出身かもわからない。横山盆踊も以前は女が参加していたという地元の証言があるから婦人の参加はありうる。重要なのは「女だけで旧七月朔日から十六日まで踊られていた」というのは、これが報告者の

誤認でなければ、七月一日から毎日女ばかりで踊ったという現在の我々の知りうる盆踊とは違う側面があったことになる。

この記述を小寺融吉が「盆踊の研究」(昭和十六年『民俗舞踊研究』所収)の中で取りあげ「此の女と云ふのは娘を主とし、既婚の女が指揮にあたるのである」とする。全国の同様の事例と比較検討する必要がある。

(四) 西之表市西之表(下西)川迎(かわむかえ)

種子島に法華宗をもたらしした日典は川迎(かわむかえ)の人である。種子島当主に法華宗改宗を勧めながら、実現しないまま寛正四年に亡くなった。その出身地に廟が建てられ、天保七年の『御家年中行事属類雑記』には一斛五斗六升二合五勺が支給されたと記されている。

前掲『種子島家譜』の記事①②はこの盆踊(盆祭礼)のことである。下級役人が出て警備にあたるほど盛大だったことがわかるが、『西之表市百年史』(四四五頁)に「川迎では古い盆踊を伝承していたが、日典の命日にちなむ旧七月二十一日に、日典廟の前、本源寺の庭、栖林寺境内で踊るものであった」と記されるのみで、川迎祭礼踊場がどこにあったのかも、盆踊が盛大におこなわれたことも地元の伝承としては消えている。前掲参考文献④『種子島民俗芸能集』に「昭和二十五年ごろ踊ったきりやっていない」とある。『種子島民俗』十四号に「西之表市川迎盆おどり歌」と題して歌詞が報告(報告者は遠藤清三)されているので左に掲載する。

最初の「種子取りて」は横山と同じ。「ちはやぶる」は南種子町西之上西目と同じ、最後の「結び」は南種子町西之中西目の最後の曲「南さがりの」と同じである。

前唄

種子取りて嬉し憂なは 武蔵野の狭くやあらん我が想い草

繁れ繁れよおさまる御世こそ目出たけれ

(一) ちはやぶる神の御前(みまえ)の鈴の音万

才楽(まんざいらく)には命を保つ相老(あいおい)の松風

(二) 春の夜暮れに春のもよ見ればもりしも春の模様で梅と桜が咲き出(い)れて黄金(こがね)花と色どりに咲いた花も空にしられぬ降る雪はえて

面白や来(く)る夜ももる夜もえい来(く)る来る都育ちのおとなの姫
よ育ちよければ仕出しもよいが花の振袖かけんとや

(三) 都橋を渡りて行けば亦も近江の瀬田の橋かけよ情(なさけ)の一ツ橋、
人の心はうきはしそりはしなれど定めその夜(よ)はもどる橋

君にふられて雪にふられて傘さしの橋積もりて恋の大和橋内の瀬女郎
が渡る橋

(四) さざ波やしがの浜松ふりにきてたがよりそめるねの日ぞや

末広がりの繁昌や枝も青りて千代(ちよ)の春

(五) 鶴は千年亀万年よ 祝いこめたる隅々に

宝山(たからがやま)のみつめぎり

のこぎりくずの数(かず)よりも浜の真砂(まさご)や砂の数(かず)
語りつくせば夜はほのぼのと鐘が鳴るぞや寺寺に

結び

南下りの堀川に白さぎおりてほろろうつ

ほろろはうたいで鶴の子がぜにかねふんであいを舞う

まことやこれぞ目出たけれ

(五) 西之表市住吉能野(よきの)

大字住吉(旧住吉村)は北から能野・住吉・深川の三地区からなる。住吉の浜之町にある本成寺(ほんじょうじ)に旧住吉村全体から男たちが集まって踊り、そのあと各集落へ戻って集落の寺の庭で踊ったという話と歌詞が『種子島民俗芸能集』に、能野の伝承者からの聞き取りとして報告されている。それによると太鼓打ち一人、笛二人、小鼓二〜三人。踊子は全員刀を差し、顔はカムキを被り、眼だけ出し、白足袋、センスを一本ずつ。最後にヒキハで退場した。横山盆踊とほぼ同じと想像されるが、チョウが出ていたかどうかは不明。左記の歌詞が書き留められている。

春の夕暮

春の夕暮れに 花の模様を見れば 梅と桜が先に出て

こがね花色どりに 咲いた花も空にしられん

ひきは

しふくがんねん あんらくの いけのおにわの ツルカメは
ほうらいざんに あいおいの 松は
尾の上の高砂や 千代に八千代に さざれ石のにわおい
こけのむすまで

(六) 西之表市住吉の盆踊歌

大字住吉(旧住吉村)は前述のように北から能野・住吉・深川の三地区となり、前述『種子島郷土芸能集』によると、三集落から本成寺に集まって盆踊を踊り、終わって各集落へ戻って踊った。住吉は現在は里之町(さとのちよう)・中之町(なかのちよう)・浜之町・片之山の四地区からなり、本成寺は現在は浜之町にあるが、江戸時代から同じ場所かどうかは未確認。

参考文献①『郷土研究』(昭和十年)に住吉付近の盆踊歌として以下が記録されている。住吉のどの地区で採録したかは不明だが、前述『種子島民俗芸能集』では旧住吉村全体から男たちが集まっていっしょに踊ったとあるので、能野・住吉・深川ともに同じ盆踊を伝承していたと思われる。しかし前掲能野の「春の夕暮れ」は下記にてでてくるが、「しふくがんねん」が見えないのは、下記以外に「ひきは」と称する退場の歌があったということであろう。

- ① 初めなる空を見たる曙の、常聞く鳥も若々と、若水はやけくるわいな、めぐり来る来る年の朝。
- ② 千歳経ふ松緑葉の上に、鶴が歌えば亀が舞う。祝い座敷に西から曇る。黄色まじりの霧が降る。
- ③ 和歌の浦波世はさかり松、しなの煙ぞかかやかに。色よけふりの色暗し。さても見事な磯の松、松に降る雪みな黄金。
- ④ 君が代は、治まる国ぞ四つの海。石打つ波も長閑にて、千歳を過ぎる雛鶴が、直ぐなる松に巣をくんで、恵みも深き玉川や。ヒヤウハイヤ。
- ⑤ 春の眺めの久しきを、君を待つ世はずんとよいきの姫小松。
君は末代我は万年。しやんと見事な花の色、花の盛りは末は御繁昌。
- ⑥ 春の夕暮れに、花模様を見れば、折しも春の模様で、梅と桜が咲き出でて、黄金花と彩りて、咲いた花も空に知られん、降る雪はえて面白や。
降る夜も降る夜もエー来る来る。都育ちのおとなの姫よ、

育ちよければだし(服装の意味)もよい。イヨ、花の振袖かけんとや。
⑦ これのお庭に松竹植えて、松は栄えて黄金なる。竹は茂りて黄金なる、黄金なる、なる銭もなる。

⑧ 様が寝姿、窓から見れば、金の屏風のその中に、錦一重にあや枕。
ものによくよく譬ふれば、花で申せば初桜、月で申さば十三夜。

今度長崎お下りなれば、わしも長崎連れ下さやんせ。連れて下るはいと易けれど、わしも似合いの妻子があれば、今度下りて妻子をさりて、明けて三月春上りして。

(七) 西之表市安城立山(たちやま)

西之表市の南東に大字安城(旧安城村)が位置する。西は山が深く、猿や鹿が多く出た。鹿は今でもいる。安城は上之町(かみのちよう)・下之町(しもちよう)・大野・立山の四集落からなる。種子島全域に分布する大踊(太鼓踊)のひとつに安城踊があり、その発祥地は上之町とも大野ともされる。立山は最南にあり、山を越えると中種子町増田である。

『種子島民俗』十四号によると、立山はもとは後組・前組・下組の三区に分かれていた。清和天皇を祀る清和神社があり、平家を追ってやってきた源氏が住み着いたところという伝承がある。芦野・御牧(昔、殿様の牧場だったという)・立山・野木・植松の五地区からなり、立山小学校の校区だが、現在小学生はいない。参考文献④『種子島民俗芸能集』によると、昔はここにも「七月踊」といって盆踊があった。立山の寺で踊ったものだが、詳細不明。参考文献①『郷土研究』には以下のような歌詞が記載されている。

土佐から船が三艘ほど参る 先なは銭よ 後なは金よ
中なは土佐の早稲(わせ)米よ わさ米ならば斗搔を渡せ
斗搔が無からば竿渡せ 斗搔の上に姫等据えて
若衆が中をば出てしのべ

(八) 中種子町増田向井町(むかいちよう)

向井町の清浄寺(しょうじょうじ)にて昭和三十年頃まで伝統的な盆踊がおこなわれていた。清浄寺は大字増田(旧増田村)をカパーする寺院。増田は古

く四集落（古房・郡原・中之町・向井町）からなり、明治以後、周辺に県内県外から入植者があつていくつかの新しい集落が作られた。戦時中は北西方の台地上から人家を移動させて飛行場が作られ、戦後は再び人家が戻つて小集落のひとつが形成されている。前述立山に近い海岸には沖繩漁民の移住した大塩屋、その南に塩焚ぎの小塩屋があり、小塩屋の塩焚ぎ従事者は西方台地上に広大なマキ（森林原野）をもつていた。塩焚ぎ燃料と運搬用牛馬飼育のためである。

『懐中島記』は清浄寺の創建年代は不明とするが、地元では文明年間に十一代島主時氏が建てたとする。種子島家の法華宗寺院本源寺の創建が文明元年なので、おそらくその直後に建てられたものであろう。もと道路を挟んだ向こう側（西側）にあつたのを昭和二十年に現在地に移した。境内には大小七基の石塔があり、古きを物語っている。本来は別のところ（たぶん隣の公民館敷地内）にあつたのをここに移動した。今は清浄寺と公民館が並んで立ち、すぐ前に広い二車線道路が通っている。整備されたことあたりの位置関係が以前とは変わっている。

高重義好「種子島の法華習俗・増田村」（昭和四十六年の『南島民俗』二十二号）に古い盆行事の様子が次のように記されている。

「七月一日から十二日の夜まで檀家が五、六人ずつ組を作り、毎夜交代で、寺で題目を行なう。むかしは檀家が全部、老若男女を問わず集まり、本堂に入りきれず、境内からお題目を唱えるものであった。一戸から薪二本ぐらいと茶の葉や茶じょうけを持つて行った。カボチャやササゲなど初物を持つて行くのが自慢であった。お茶じょうけを先ずご宝前に供え、お題目が終わつてから下げ、少しづつ掌のひらに分けてもらつてお茶を飲んだ」

これと同じような習俗は種子島各地にあつたようだが、右は書き留められた貴重な事例である。南種子町平山広田ではこれを「茶屋参り」といい、現在の広田住民は十二日の一週間前、つまり七夕の日からやつたと伝える。右の増田向井町では朔日からやつている。毎晩集まつて唱題をしてお茶を飲みながらお茶じょうけを食べるのが楽しみになつていたことがわかる。するとここで踊も出たことは十分ありうる。婦人の中でも娘達が、正式の盆踊ではない、たとえば手踊りなどを歌いながら踊つたことは想像していいのではないか。本節（三）にあげた「朔日から踊をした」という『民俗芸術』の上妻宗昌の報告を裏付け

るのではないか。

今でも八月十五日には石塔前に石塔棚（施餓鬼棚）を設置し、マキなどをそなえて精霊送りの法要をしている。翌十六日午後、寺にて「送り水祭」という精霊送りがあり、本堂の縁に設けられた施餓鬼棚にて供養をし、以前はそのあと盆踊となつた。

また高重報告によると、青年が多いときは二十名ぐらいで「小踊（こおどり）」をする。五つほどの型があり、全部踊ると二十分ぐらいかかる。本来はカムキだが略式に白タオルで頬被りをし、太鼓二名をはさんで二列縦隊で出、太鼓を中にして円陣で踊る。センスを持つて踊るのと手踊がある。歌いながら踊る。秋佐野に住む岩屋八蔵翁が歌つてくれたという歌詞も採録されている。

その岩屋八蔵が『種子島民俗』十五号（昭和三十八年）に「小踊歌」として歌詞を報告しているので、転載する。下記以外にもう一曲を加えて踊ることもあるようだが、それは記載されていない。なお『種子島民俗』二号（昭和三十四年）にも岩屋邦子が「増田向井町の盆踊」と題して、岩屋八蔵報告と同じ歌詞を報告している。

小踊があるなら大踊（おおおどり）があつていいはずだが、それについて手がかりとなる記載はない。大踊は現在は大鼓踊のことで、盆ではなく秋の願成就祭に踊られる。江戸時代は盆踊の中で、大踊として大鼓踊（現在の大踊）も、下記のような小踊も踊られたという可能性もあるのではないか。問題提起としておきたい。

増田の盆踊歌（岩屋八蔵の報告による）

- (一) ①さまがねすがら窓から見れば、金の屏風のその内に
- ②にしきひとえにあや枕、ものによくよくたとゆれば
- ③はなを申さば初桜、月を申さば十三夜
- (二) ①あわれなるかよ石童丸は 父を尋ねてこうやにのぼる
- ②母はふもののかまやが茶屋に あづけおいたよあらいたわしよ
- ③すぐにそれより高野にのぼり、はなのおんかごおん手に持ちて
- ④九万九千のその寺々を 尋ねまわれどゆきかたしれぬ
- (三) ①二度とゆくまいよいせんだいかわに
- ②高き山から切りこむ切りこをむう

③けさのあらしにかわくちおもうえて

(四) ①こんど長崎おくだりなれば われも長崎つれくだらぬせ

②つれてくだるはいとやすけれど わしもにやいのつまこがあれば

③こんどくだりて妻子をさりて あけて三月春のぼりして

(九) 中種子町野間竹屋野

竹屋野は大字野間(旧野間村)の南東に位置する。寺院の支坊があつたかも知れないが、確認することはできない。集落の起源は地元の伝承によると鎌倉期にまで遡るといふ。三つか四つほどに分かれて同族の祭りがおこなわれている。中には古びた石塔を持ち鳥居の建つものもあつて(鳥居は昔からあつたわけではない)、まるで集落の祖霊社のようなだが集落神ではない。おそらく種子島氏が西之表に定着したあと、土族が一族を連れて移住してきて開拓したのでろうと想像される。土族集落と自称し、他からもそう呼ばれるのはそのことに起因するのであろう。開明的雰囲気の高い集落である。

盆踊は私の聞き取りによると、戦前は野間市街地の日輪寺と田島の浄光寺に行つて踊つたといふ。日輪寺は現在は畠田(竹屋野の北西)にあるが、明治までは野間の北東のはずれ、増田郡原に近い中山にあつた。創建については悲劇的な話が伝わっている。種子島家六代時充は、継嗣に定めていた又太郎という一族の者を、実子が誕生したために謀殺したのである。殺害実行者は遺骸を中山に葬り、褒美として野間村を貰つた。ところがこれが祟つた。そこで中山の農民は日輪大明神を建てて供養した。祭祀者は僧形だったのであろう。やがて林高山日輪寺と呼ばれるようになり、江戸時代は地方の寺院としては破格の十斛を支給されたことが『懐中島記』に見える。十斛も与えられたのは種子島家のかつての謀殺に対する贖罪の意味があるのだろうか。野間全体を檀徒圏とする大きな寺院だつた。中山には日輪寺という字名が残っている。

廃仏毀釈で撤去され、野間の下馬(げば、中心街旭町の北の入口だつたところ)に再建(再建時期不明)されたが、阿世知国良『熊毛郡宗教史資料』によると大正九年に畠田に移動して現在に至っている。

竹屋野から中山までは一里以上の距離があつて遠いけれども、江戸時代はそこにあつた日輪寺まで行つて盆踊をしたのである。あるいは近くの野間上方(うへほう)にあつたらしい支院(『懐中島記』には記載がない)にて踊つたの

かもしれない。明治になると一時、日輪寺そのものがなくなるので、下馬(のちに畠田)に再建されるまでは田島(旧田島村)の浄光寺(これは中山よりは近い)に行つて踊つたこともあるらしい。

下野敏見『種子島民俗芸能集』には妙正寺(野間神社の西)で踊るとある。『中種子町郷土誌』によると、妙正寺は昭和二年に日蓮宗寺院(法華宗ではない)として創建された。種子島は江戸時代は皆法華(全島法華宗)だつたことは前述したが、日蓮宗は、同じ日蓮を祖師としながらも伝統的な種子島の法華宗とは別流といふ。野間神社の西そばにあるが、ちなみに北そばには西光寺といふ浄土真宗の寺もある。竹屋野が妙正寺に踊に行つたのは、妙正寺から依頼されたからであらう。戦後しばらくの頃までのことらしい。

下野敏見『種子島民俗芸能集』に地元の伝承者からの次のような聞き取りが載っている。七月十六日昼から妙正寺の庭で踊つた。五曲の歌詞も収録されているので転載する。

「道具は小太鼓二、カネ一、笛一。男ばかりでカムキを被る。小太鼓と鉦の三人を中にして円形になつて踊る。踊り手の中に「先おんどう」といふのがいて、これは年配の上手な人。「先おんどう」のあとに「大将」がいて、これは若い上手な人。大将が歌いそなたら、あとおんどう(年配の上手)が助ける。スケ大将ともいふ。つまりおんどうは「先おんどう」「あとおんどう(すけ大将)」がいて、出て行くときはデハ(出端)で笛と太鼓をならしながら。出ると輪をなす。今年カムキの代わりにユーチエ(湯手、手拭い)を頭からかぶつて口で結んだ。昔を記憶する老人の話によると(戦後しばらくのこと)、盆踊のあとに婦人たちが「ジャントセー」といふのを踊つた。これは阿高磯より習つてきた踊らしい」

最後に婦人たちの踊があつたとするが、盆踊のあとにいろいろな踊の出る祭礼になつていたことを物語る。竹屋野には今でも「うから」「八兵衛」といふ踊があり、大踊として「雷踊」といふのもあつた。西之表市川迎でたいへん盛りあがつた盆の祭礼があつたことを前述したが、それと同じようなことが、こ

野間竹屋野の盆踊歌

(一) 若草(手踊)

それは若草、みはうらみ草、何ぞそなたに、あいたてばなし。
あきもあかれもせん仲なれど、よせなき恋を、

(一) せかにせかせて、まかせのころに、せめてあわずとおもいがなし。
たてまつる(センス踊)

たてまつる、なにし、なにわの東ぼり、きいて鬼門のかどやしき、
かわらやしきとは、あぶらやの、ひとり娘に、おそめとて、
にはちの春の花ざかり、うちのこがねの、ひさまつよ、
よめにとろよと、べにかね。

(二) あれをみやれ(手踊)

あれをみやれよ、天神の梅よ、
枝はせきたて、葉はぬしままに、花の姿はわかぬ浦、
わかぬ浦には名所がござる、かごでおおとる、これ名所。

(三) ころしもよい(センス踊)

ころしもよいの(今年もやよい)末つかた、
きみがゆくえをたずねんと、あこぎの浜より舟に乗り、
こぎいでみれば、松の葉よ、松の葉いろは、ときは山、
いつもかわらぬ、ときば色、
浜でおたく夕煙、消えてあとなくはかなさや。

(四) たつたがわ(手踊)

たつたがわから、朝水くめば、稚児の若い衆が、袖ひきまわす、
女郎衆がそでひきまわすまで、もう離さない、
若衆さま、水がたばれてかたられん、早くいてきて語りましょう。

(引端) 屋久のおたけのすずこだけ、これのお庭に咲いたなら、
すずこはこがね、こざさまじりの、こがね花。

竹屋野の盆踊は戦後もしばらくは踊られたようだが、現在は完全に途絶し、
その頃の様子を知る人もいない。ただ盆踊とそっくりの姿(着物に覆面)で踊
る「神楽(かぐら)」という踊が、霧島神社の秋祭に奉納されている。本土の
神楽ではない(種子島には本土系の神楽は確認されていない)。

島内の霧島神社は明治の廃仏毀釈のあとに建てられたもので、南種子町島間
では神葬祭を奉祀するために勧請されたと伝えられる。竹屋野の霧島神社創建

のいきさつははっきりしないが、海岸近くにあった石を御神体として祀ってい
るといふ。現在は竹屋野集落の鎮守神になっており、秋の大祭では十時頃から
の祭典終了後、男だけでまず「神楽」を踊り、そのあと衣装を替え、子供や婦
人も混じって「うから」「八兵衛」というひょうきんな踊を踊っている。

神楽をすまさないうちは他の踊はいつさい踊ってはならないとされる。昔か
ら女は不参加。以前は四十五歳以上の男だけ三十〜四十人で踊った。なぜ
四十五歳以上なのかは不明だが、人間が多かつたので制限したのではないかと
年配者はいふ。たしかに昭和四十年頃まで集落には人が多かつた。竹屋野の男
はだれでも練習なしに踊ることができ、ヒトツバの葉を手を持って踊の輪に加
わる人もいた。秋祭直前に集落内に不幸が出た場合は神楽は中止された。これ
は今でも同じ。たまにそういうことがあるといふ。

旧十一月十九日が祭礼日だが、今は新暦十一月の第二日曜日になっている。公
民館内の壁に貼られている神楽の歌詞を以下に掲げる。伝承者によると冒頭の
「千早振る」がもっとも重要で、あとは付け足しのようなものだといふ。

竹屋野の霧島神社の神楽の歌詞

千早振る千早振る アーヒーヨー

神の御前のヨー 鈴の音

神楽乙女のヨー さんさつの声

万才楽(ばんざいがく)には命を保つ

相生(あいおい)の松風 アーヒーヨー

(一) それは若草 身は恨草(うらみぐさ) アーヒーヨー
何ぞそなたに逢立話(あいたてばなし)

飽きもあかれもせぬ仲なれどアーヒーヨー

よせなき声を急(せ)かに急(せ)かれてヒーヨー

末(ま)かせの頃に せめて逢ずとも思い悲しアーヒーヨー

(二) 奉るよ 名にし浪花(なにわ)の東堀

聞いて鬼門の門屋敷瓦橋とは

油屋の一人娘にお染とて

二八の春の花盛り

家の子飼(こがい)の久松によ

嫁にとろよと紅鉄(べにかね)よアーヒーヨー

(三) あれを見やれよ 天理の梅よアーヒーヨー
枝は急(せ)き立て 葉は主儘(ぬしまま)にヒーヨー

花の盛りは和歌の浦ヒーヨー

和歌の浦には名所がござるヒーヨー

荷籠(かご)で詩(しお)とるこれ名所アーヒーヨー

屋久の御嶽の鈴黄金(すずこがね)

これの御庭に咲いたらば

鈴黄(すずこ)は知らぬ

小笹(こささ)まじりの黄金花(こがねばな)

下野敏見『種子島民俗芸能集』に、右の「千早振る」は野間神社(大字野間つまり旧野間村の鎮守神)の九月祭(願成就祭)の最初にも歌われたという。野間神社願成就祭には各集落からそれぞれの踊が出された。集合した男たち(あるいはどこかの集落)が大踊(太鼓踊)を踊る前に踊ったものと思われる。「千早振る」はいわば露払い的な(儀式的な)踊として各集落の願成就祭でも踊られていたのではないか。竹屋野の南東方向の大字油久(ゆく)の女洲(おなす)にも神楽があり、「千早振る」は竹屋野から伝わったものだという。

(十) 中種子町油久女洲の神楽

大字油久(旧油久村)は美座・向町(むこうちょう)・東の町・西の町・女洲・広ヶ野・西之山の七地区からなる。広ヶ野と西之山は明治以後にできた集落。明治十五年までは田島と阿高磯も含まれていた。油久神社(本隆寺跡)の願成就祭には各地区から踊が出た。女洲からは神楽やその他の踊を出したが、集落に不幸があれば神楽は踊らない。女洲は戸数は十六戸で、隠居も入れれば二十戸。神楽は昭和三十年過ぎに竹屋野から習ったもの。踊は簡単で、デハのあと三番を踊る。現在も願成就祭に踊っている。

踊子は布製面をかぶるが、これは息が漏れないようにするためという。使用楽器は小太鼓(イレコ)といい、集落長の家に保管)のみ。カネと太鼓は使わな

い。イレコは踊りに加わるのではなく、踊りの外から背広姿の担当者が叩く。イレコは油久から借りたこともある。歌はハナヒキ(歌い出す人)に合わせて全員で歌う。所作やフリに特に名称はない。『種子島民俗』十三号にデハの歌詞が掲載されているので転載する。二番以下は現地での聞き取り。

一番(デハ) 初め椎のシバをもつて踊り、そのあと扇子に持ちかえる。

ちはやぶる ちはやぶる 神の前のすずの音

かぐらをとめのさんさつの声 ばんざいらくには命もたもつ

あいおいの松風

二番(下ノ関) 船はゆくゆく下ノ関ゆけば、かぜもおしよいあなぜの風よ

三番 あーなぜころげは須磨よりなよ、須磨や明石の名所をながめ

四番 さんさおせさせ かんじにぬけて いかりよおろしゃれ

ともづなとらりよ

退場 秋は夜ながし(以下不明)

(十一) 中種子町坂井

旧坂井村の北の端に浄光寺がある(住所は大字田島)。浄光寺は旧坂井村全体の寺院で、『懐中島記』には創建不明、文明年中に日良法印(西之表市川迎の日典寺創建者)が隠居した寺とあり、律宗時代は正法寺と呼ばれたらしい。場所は現在の坂井神社。坂井神社の案内板には、文明九年にこの地の領主に頼んで境内地に豊受神社を建てたという。明治の廃仏で浄光寺は撤去され、のちに現在地(田島)に再建され、撤去のあとに残った豊受神社が坂井神社となった。

種子島十一代時氏をして皆法華に改宗させた日良上人(『懐中島記』は法印とする)が隠居所としたほどの寺だから、盛大な盆踊が催されたと想像しているが、その痕跡は現在にはまったく残っておらず、参考文献①『郷土研究』に、盆踊歌としてわずかに次のような歌詞が収録されているだけである。服装や楽器などもまったくわからないが、以下の歌詞を見る限り、竹屋野の神楽歌の冒頭と同じである。

千年振る千年振るアーヒーヨー

神の前のヨー鈴の音 神楽乙女のヨーささつの声
万歳どこみが命をたもる 相生の松蔭

これを坂井のどの集落が踊ったかはわからないが、旧坂井村の全集落から集まった男たち全員によって、盆踊が踊られる前に踊られたのかもしれない。

(十二) 中種子町坂井熊野神社の神楽

坂井の東海岸は江戸時代より知られる景勝の地である。東側の御嶽山に古くからの拝所があり、そこに享徳元年（十五世紀半ば）、十代島主幡時が紀州から熊野神社を勧請した。熊野権現とも呼ばれ、御嶽山は権現山とも呼ばれる。種子島全域を氏子とする神社として大いに信仰が厚かった。四月三日の例祭には全島からの参詣者で賑わった。長い参道は満潮時には潮がギリギリにまであふれ、天の橋立と見まごうような美しい光景だったが、昭和三十年代からの干拓によって風景は失われた。今は耕作する人のない原野状態が目につく。

熊野神社の秋の大祭は現在も十一月二十三日におこなわれ、全島および県内の有名神社神主も参列する。この日程は新嘗祭に合わせたものである。十一時からの拜殿での祭典が終わると、一段下の広場にて最初に神楽と称する寺踊が奉納される。踊るのは神社の地元熊野集落の男たち十数名である。竹屋野の神楽と同様だが、ここでは覆面はしない。踊子は黒か紺系の着物を着て右手に櫛のシバを持つ。大太鼓役は大踊と同様のカラフルな襦袢を着て、左手に持ち右手で叩く。小太鼓と力ネは踊子と同じ着物。この楽を中にして、輪を描いて全員が歌いつつ踊る。現在歌われる歌詞は以下で、各地の大踊の中の寺踊とか庭踊と呼ばれる踊と同系である。

中種子町坂井熊野神社の神楽歌

この宮に 参りてみれば おもしろや
八つ九つの ちごが手をかく ちごが手をかく
手をかくにもそろえて 墨のよかろうものをそろえて
筆の白金のじく 白金のじやく

この寺に参りてみれば おもしろや

八つ九つの ちごが手をかく ちごが手をかく
手をかくにも そろえて 墨のよかろうものを そろえて
筆の白金のじく 白金（しろかね）のじやく

(十三) 南種子町上中の信光寺の盆踊

上中（かみなか、旧中之村の北半）の上野（現在の役場付近）に律宗極楽寺（創建年不明）があった。『南種子町郷土誌』によると、全島法華宗になると下中（旧中之村の南半）の山神（花峰小学校付近）に移転して本善寺と改称した。しかし赤尾木の大会寺の僧喜道（当時の島主時氏の叔父）は法華宗改宗に反対して中之村の河内に極楽寺を建てた。没後これが法華宗信光院と改称され、上中の上野に移転したという。その河内極楽寺の跡に山神の本善寺が移動してきたということらしい。上野の信光院はその後現在地（今は市街地）に移転し、戦後になって信光寺と呼ばれている。河内の極楽寺（のちに本善寺が移動してきた）の場所は廃仏後、河内神社となっている。

つまり信光寺のもとの名は信光院、そのもとの場所は河内神社。河内神社の大祭は喜道の命日の九月十一日。この祭には信光寺から住職が出向いて、境内にある喜道（日悦上人）の墓前にて読経する。以前は拜殿にても読経したというが、現在は平山善福寺の住職が来て墓石前で読経している。このあと願成就奉納踊が現在もおこなわれている。

信光寺（もと信光院）にては最近まで盆踊が踊られた。今述べた願成就踊の最初に、以前は盆踊の中の「寺踊」が踊られたという。地元作成の歌詞プリント（昭和五十二年作成）があるので、掲載する。現在は踊られない。

信光寺盆踊の歌詞プリント

一 サヨイ（扇踊）
サヨイ ヨーイ ヨーイ ヨイヤ このいかに
せんちよう二丁目の糸屋が娘 姉は二十三、妹はたち
姉の二十三のぼみはないが 妹欲しゆさに伊勢願たてて
伊勢にや七たび 熊野にや三度 愛宕様には月々参る。
二 寺踊1（扇なし、手踊）
さても見事なお寺のけいよ これのお庭に若松植えて

松の緑に雪降りて 枝にはかねがなりやこだれた
寺踊2 (扇なし、手踊)

これのお寺に参りて見れば面白や さても見事なお寺のおすし
四方に出でしいず見れば 心は波の田子の浦
立つ波の ご世は永かれ世はよけれ

三 なお姫 (扇踊)

二世 (ふたせ) かねたるなお姫は 袖の露草ふみわけて
逢坂山へたずねわけ入りたましいが

いにしえは錦のしとね綾の絹 (きん)

小袖金絹 (かなきん) 身にまとい 障子にたいまに戸に水晶
隙間の風もいとしが 今は木の葉 (きのは) のつづりさす

泣き明かすこそ道理なれ

四 くずの葉 (扇なし・手踊)

たずね出て見よいずみまで 篠田が森のくずの葉を
昼は篠田に住まうとも 夜は来て添え子のそばに

あまり話が子の思いに わしもだんだん目をかきようよ

五の1 頃は弥生 (扇踊)

頃は弥生の末つ方 君行方をたずねんと

あこんの浜にぞ舟にのる 漕ぎ出でて見れば南蓮寺 (なんれんじ)

松の葉色や常盤山 (ときわやま) 何時も絶えなき塩浜や

釜で塩たくようふう煙 消えて跡なきはかなさよ

沖になみおるさくら島 こしじんだての雲の帯

腰にさいたる小夜衣 (さよごろも)

五の2 あらいたわし (「頃は弥生」と同曲)

あらいたわしの梅若は 想い切れとは曲もなや

唐天竺にはよも行かじ 東は蝦夷へ松前の

西は九州薩摩潟 南は紀の路 (じ) 須磨の浦

北は秋田や佐渡ヶ島 虎伏す野辺の奥までも

尋ね巡らりよ 会はりようと あら恋しの梅若は

ああ梅若とは呼びこがれ ともない鳥 (からす) が飛びつれて

迷いゆく道よ うとうとと

六 大黒殿

大黒殿とナー 宝くらべの白ねずみ

ヤーチンチン ツイ ツイツ まけ ツイツ

イヤ袋のうちでもゴーソゴソ

打出 (うちで) の小槌 (こづつ) に鈴の音

シャンコエーシャンコ シャンコ シャンコエー

六つ無病息災に

七つ何事無いように

八つで家敷をしんじよに カラリンとふまえた

九ツこぐらを建ててエイエイエイとおし建てた

九ツこぐらを建ててエイエイエイとおし建てた

あの柱 (はした) もおし建てた

七 五反畑の真ん中もとに細い小女郎が青菜を摘むが
あの娘 (か) はよい娘 (こ) じゃきれいな生まれ

前掲参考文献①『郷土研究』には上中付近の盆踊歌として次のような歌詞が
収録されている。上中付近とあるだけだが、どこかひとつの集落ではなく、信
光寺の檀徒たちが集まって踊ったのであろう。

『郷土研究』 収載の歌詞

◎茶屋の娘

さあよいよいやこでいかに せん町二丁目の糸屋が娘

姉は二十三妹は二十 (はたち)

姉の二十三望みはないが 妹欲しさに誓願立てて

伊勢にや七度熊野にや三度 愛宕様には月々参る

◎佐渡島

ヒーヤー私しや佐渡島萬太夫が娘 アーヒーヤー

米のなる木をまだ知らぬ 米のなる木を知らんちゅうは嘘よ

八畳だたみの裏を見れ

◎頃は弥生

頃は弥生の来つ方 君の行方を尋ねんど あんこの濱にぞ船に乗る

漕ぎ出で見ればなんでん寺 松の葉色や常盤色 沖に並みおる桜島
こんぢんだての雲の帯 腰にさしたる綾衣 何時も絶えなき鹽濱や
釜に火を焚く夕煙 消えて跡なき儂さよ

◎葛の葉（信太の狐）

尋ね出て見よ和泉まで 信太が森の葛の葉を
晝は信太に棲ふとも 夜は来て添ふ子のそばに
母は狐の身じゃ程に 餘りわが子の思ひさに
わしもだんだん目をかくる

◎打たせかねたる

打たせかねたるなお姫は 袖の露草ふみ分けて
逢坂山に入り給ひしが 古は錦の単衣綾の絹
障子に玳瑁（たいまい）戸に水昌
隙間の風も厭ひしが 今は木の葉で綴りさす
うむしの声に声を比べ 泣き明かすこそ道理なれ

(十四) 南種子町島間

大字島間はかつての島間村で、上方（うえほう）・小平山（こひらやま）・仲之町（なかのちょう）・田尾の四集落と島間浦からなっていた。現在の島間港が整備される前、海岸沿いにあった小漁村を島間浦といった。集落が消えて住民は分散したあとも、少なくなった漁業関係者だけで浦祭（恵比寿祭）をしている。

大きく整備された島間港から東方向に少し登ったところに本妙寺がある。『懐中島記』には寺領十斛とあるから、かなり大きな寺だった。同書によると上方の上妻城近くにあった律宗時代の大光寺が前身である。法華宗改宗の時に本妙寺に改称された。明治の廃仏によって寺跡に豊受神社が作られ、しばらくして本妙寺は仲之町と田尾の人々の尽力によって現在地（田尾）に再建されて現在に至っている。豊受神社は上方神社とも呼ばれる。その向かって左に並んで立つのが霧島神社である。これは神式の葬祭をするために、廃仏後に建てられた神社であるとの伝承があることを、現在の田尾在住の神主が語ってくれた。

西に突き出た島間崎の突端に旧島間村の鎮守社島間岬神社（島間岬八幡神社とも）がある。西之表市の郷土史家平山武章「種子島宗教史考」（『大隅』十七

号（昭和四十九年、大隅史談会発行）によれば、本妙寺住職日昌の残した「御石体由来記」という書き付けがあり、これに日昌自身が文政八年に国分八幡宮を勧請して建てたと書かれているという。祭神はヒコホデミと応神天皇。また『甕藩名勝考』（白尾國柱著、寛政七年）には「熊毛、馭謨郡の内、莖永神社、住吉神社、真所神社、島間神社、風本神社の以上五社、創建の年月日、由緒など詳ならず」とあるから、文政八年に創建とされる以前から何らかの拝所があつて神社とも呼ばれていた可能性がある。何もないとともに島間岬神社を建てたとも思えない。何かしら由緒のある場所だったのである。

『南種子町郷土誌』は「この岬は古代の官人が益救神社を遙拝したと伝えている地である」とする。多敷嶋が国だった時代、多敷嶋は屋久島も含めていたので、当然行き来する港として島間は重要だったはずである。その時の名残がこうした伝承として残っているのかもしれない。平山武章は前掲書にて「琉球への航海の時に必ず参るのが島間岬神社と現和の風本神社だった」という伝承を載せている。

島間では以上三つの寺社の祭、つまり島間岬神社の願成就祭、豊受神社（上方神社とも。本妙寺跡に建立）の願成就祭、本妙寺の盆踊、に四つの集落からさまざまな芸能が奉納されてきた。ここ十数年の間に人口減少によって急速に細っている。

本妙寺の盆法要の最終日、八月十六日は精霊送りをする。本堂の入口階段右側に大きな精霊棚が設置される。お昼過ぎから法要が始まり、読経が終わって唱題の頃、参列者は列を作って持参の花を精霊棚に置いて水を注いで拝む。終わると係の男子二人が柵ごと持って海に流しに行く。海まで人に会っても話してはいけないとされている。このあと境内では仲之町と田尾がそれぞれ踊を踊る。現在は両地区とも盆踊ではなく「ヤートセー」を踊っている。田尾（西田尾と東田尾合わせて）は六十七戸ほど、仲之町は百戸ほどである。

江戸時代は前述の全四地区から盆踊が出たはずだが、明治以後は本妙寺の地元田尾と仲之町が主になって盆踊を踊った。田尾の盆踊には大踊（オオドリ）と中踊（ナカドリ）・ニオドリ（ニサーオドリ）があった。種子島で大踊という、願成就祭に奉納される太鼓踊のことだが、ここでは盆踊も大踊という。

大踊は西之本国寺盆踊と似たような踊だったようだ。最後は五十年ぐらい前のことでもう復活できないが、高齢の経験者の話によると、ガク（大太鼓一・

カネー・イレコニを中にし、その廻りを輪になって踊った。笛はなく、デハやヒキハもなかったという。踊子は三十人ほどいて、ユカタを着て、手踊とセンスを持つ踊があった。踊子は覆面をしたので、メン踊ともよばれたという。歌詞は三番ぐらいまであったようだが、書き付けは残っていない。

中踊はニサー踊（ニ才踊）ともいう。大踊と比較して中規模なのでナカオドリという解釈されている。コニサー（小二才）とオオニサー（大二才）の二つがあり、連続してやった。これは十年ぐらい前まではしばしばやっていた。ユカタを着て、皆で歌いながら踊る。それぞれ七人ぐらい。文字通り青年の踊だった。令和四年八月、伝承者の一人野首久教氏を中心に久しぶりに踊った。

小二才（コニサー）

出場

山奥四五軒目に茶屋メがござる 皆あがれ

本踊

一里ある島に粟とキビヨ植えて 淡路もどる夜の君はまた

頼む頼むホンノカヤー

送れくれ送れシラスまで送れ

シラス乗りいだせば御風（みかぜ） また悪さ悪さホンノカヤー

引場

年は十六ささげのお豆じょう 誰にちぎらせよ初豆を

大二才（オオニサー）

出場

恋の手習い敷島原（しきしまわろ） よアラヨイヤサーノサ

本踊

昼は信濃に住もうとも 夜は来て添え小の傍（そば）に

赤子（あか）は狐の子じゃほどに 尋ね来てみよ泉まで

引場

馬毛に小屋うついたづら阿呆じゃよ 馬毛は浮島離れ島

小二才の本踊はもともと琉歌形（八八八六）歌詞だったものが、大和語風に

解釈されて歌われたものである。琉球や奄美から伝来し、いくぶん変化した芸能はこれ以外にも種子島各地に見られる。東海岸にいくつかある「ちくてん」は代表的なものだが、島間から西之にかけての西海岸の集落にはそれらが点々と伝承され、願成就で奉納されている。

前掲参考文献⑤『種子島研究』九号（昭和四十二）に、「島間の盆踊は大踊、中踊がある。大踊は現在はないが、カネや大太鼓、イデコ（小太鼓）を持つ。中踊は現在もあり。大太鼓、イデコを持つ。全員浴衣、二十代、三十代の青年団の人が多く」とレポートされているから、昭和四十二年当時は上記の小二才と大二才が中踊として踊られていたことを確認することができる。

（十五）南種子町平山広田

かつての盆踊の場所であった善福寺は現在は広田集落の西端の丘にある。明治の廃仏までは仲之町の平山神社の位置にあった。本尊だけをしばらく隠し、広田集落背後の小高い山に再建し、昭和四十七年に今の場所（同じ広田集落内）に移した。草創年代不明の律宗時代の寺である。『懐中島記』に初地は広田にあったとある。おそらく法華宗改宗を機に仲之町（平山神社の位置）に移ったのであろう。広田から中之町へ、そして廃仏後、再び広田へと四百年ぶりに戻ってきたことになる。

『懐中島記』のいう善福寺の初地とは広田のどこだろうか。地元にはわずかな伝承が残っている。広田遺跡ミュージアムの語り部をつとめる地元の向井良隆氏の話によると「石塔山の辺りに大昔に寺があったようだ。石塔の道路を挟んだ向こう側あたり。地藏堂という名前もある。石塔山の下の舗装道路は昔の山を切り通して作っている。地藏堂があったという畑の上に向井家の畑もあり、そのあたりは昔からユズガソノといった。数珠ヶ園ではないか。突き出たところはテラガウトという。地藏堂の横に山田さんという人が住んでいた。地藏堂の住職ではなく、墓守もしくは世話役だったか」という。石塔山のそばに寺があったとすれば、石塔山が寺とは無関係にあったわけではないこと、石塔山の一角に祀られる坊主墓と呼ばれる数基の墓石の存在を説明できることなど、符合することがいくつも出てくる。

前掲参考文献③『種子島民俗』二号（昭和三十四年）に広田の向井長助（当時六十七歳）によるレポートと、明治末期頃まで踊られたという広田と西之町

の歌詞が掲載されている。向井長助は右の向井良隆氏の祖父である。長助翁は下記で「平山では明治の末期頃まで盆踊を踊った」と書いているが、向井良隆氏（昭和二十三年生）は「幼児の頃（昭和三十年以前）に踊ったことをかすかに覚えていた」と話す。どこでどういう風に踊ったのかの記憶はないが、おそらくこれは広田集落で踊られたのであろう。場所は裏山の善福寺境内（現在地に移転する前は裏山にあった）だったと思うが、七日から十二日まで、道路脇にて毎晩催されたチャヤマイリの場で簡略化して踊られた可能性もあるという。チャヤマイリは集落民にとって大きな楽しみだった。毎晩住職が来てゴザの上に座ってお経をあげ、そのあとは集落民の談笑の場となった。長助翁が「明治末頃まで」とするのは、平山地区として正式に踊ったのがその頃までという意味かもしれない。以下、『種子島民俗』二号から向井長助翁の報告を、不要部分を略して転記する。

広田の盆踊について（向井長助による昭和三十四年の報告）

平山では明治の末期頃まで踊った。島間は最近まで、西之は昨年も踊ったという。着物はカタビラにユカタを重ねて角帯を締めた。冠目（カンモク、覆面のこと）を被る。冠目は日本手拭に紙で裏張りをして糸にて縫いたるもの。笛一本・イレコ（小太鼓）二つ、カネ二つ、スゲの笠にリボンを付けたるもの四つ、扇各自一本。踊手多数、大将（責任者）、助（去年の大将で補佐役）、小役（助と同じ補佐役）、音頭取り（十四・五才）、イレコ打ち、カネ打ち四人（十二・十三才から十四・十五才まで）四人。大将は責任者、助は去年大将をした者になる。小役は助と同じ補佐役（おとし大将をした者になる）。小役をすれば二サー（二才は十五才から三十才まで）の踊に対する義務を終え、責任はなくなる。笛吹きは得手な者。

支度が済むと寄せ調子といって笛に合わせてイレコ・カネで合奏。賑やかな曲。人数が揃うと曲を出ハ（デハ）に変え、大将を先頭に助・小役・と順々に厳かに出て行く。そして円形に廻る。出そろったら四人のイレコ・カネ打ちは真ん中に出る。音頭取りは大将の内側に居る。その時、イレコ打ちが太鼓・カネに合わせて「アーヒーヨー」と掛け声をする。だいたいにおいて種子島の踊りは始まる時と終わった時「アーヒーヨー」と掛け声をかける仕組みになっている。掛け声がかかったら、音頭取りが最初の歌の初めの一節を歌う。即ち、こ

の歌を歌えということにも解せられる。そしてら大将が歌を始める。助・小役・次々に合唱して踊る。その踊がすんだら「アーヒーヨー」と又音頭取りがいい、次の一節を歌う。次々にこのようにする。

踊には扇踊と手踊りがある。全部終わったら、笛・太鼓・カネの合奏でひいてしまう。この曲は至極簡単なもの。これを「ひきは」という。以下は歌詞。

(一) 初めの踊

せーじゅうを あなじの まのうちに 花の都ときこえしは
名所 さまほど 多けれど 君に心を ひかされて 嵐ほのかぜ
なかむれば 月に入口 出る舟よ

(二) 灘にこそ

灘にこそ灘にこそ はりまなだ はりまなだにこそ 瀬がござる
つしまどの すけくが瀬戸で いかりよ下げても 汐だたり
こいと いうたとも 行かれるものか 灘は四十五里 波の上

(三) たてまつ

たてまつるようところは 淀の東堀
きいて鬼門はかど屋敷 瓦やばしとや
油屋の一人娘のおそめとて にはちが春の花盛り
内の子がいの久松に よめに 取るとのでしかねを

(四) 一重二重（ひとえふたえ）

一重二重みよよえ このえ 十できんぎんぎましましよか
おはらしじゅうはら 恋の里めさんか つゆにうけてとうで
とふくからきらめく星のかずかず あかつきの明星よ
西にちどり東につとり ちどりちどりという時は おしぎを
とりからたらさおいて からちどめくかに 手打ちかけてめーじょーよ

(五) 南下り（みなみさかり）

南下りの堀川みれば 白さぎおりてホロド打つ
ホロド打たりよーか あのつかめを 銭かねおいて舞いを舞う
そのき

(六) そのき

そのきのぎのものをもい 又もおもこたいつかわの深き心はかわし草

ねびぎにせんといいかわす 身は捨草に捨てられて

流れし其身は淀川の何をたよりに浮草の波にゆらゆらおたかたの

(七) 大阪の城

さても見事な大阪の城よ 白や白かべやつむねづくり

しゅぬりえ玄関・かなづくり 門は切石桐戸の御門前の堀川舟つなぐ

(八) さらは

さらはこれからくろいて見ましょ 国を申さば下野の国

源氏平家の御たたかいに 平家方の沖ある舟よ的に扇をさしさしければ

あれをいそかに射落すならば

てきよ味方も見ようなされ那須の与市は御前の務

(九) 屋久のゴエンボーシ

屋久のゴエンボーシヤよ 血か他人かいとこどしかよ そもにちよる

(十六) 南種子町平山西之町

前述の向井長助翁が参考文献③『種子島民俗』の二号に、広田の歌詞に続いて西之町の歌詞を出している。盆踊の実際についての伝承を西之町で伝える人はいない。戦前に断絶したと思われる。

西之町盆踊歌の歌詞

(一) 寺踊

イ めでたやお寺に参りて見れば

からえのびようぶによりんをすえて御経遊ばす有難や

ロ めでたやお寺の泉水みれば 水かと思えば水かねじよるよ

こがねの御しゆぎが 湧いて出る

ハ めでたやお寺のみうやま見れば 七けんみまやに七匹たて

こがねのくつわが七むすび

(二) 二九の十八

二九の十八よばれきて 四六二十四で子ができた

五六三十で家去れた ぜひにいでならいでもしよが

元の十八にして戻せ

(三) 今年よい年

ことしやよい年ほにほが咲いて わせにや八石、中手にや九石

まして奥手にや十二石

ますもとかきもふり捨て俵ひきよせ みではかる

(四) 小豆島(シヨロジマ)

われはしよるじまの万田勇の娘 米のなる木はまだしらん

米のなる木をしらんなら教う 八じよたたみのうらを見れ

思うちやたまらん 只おきやならん いっそあの子が死ねばよか

(五) あらいたわし

あらいたわしや梅若を思い切れとはきよくがない

からてんじくにはえもゆかぬ 東はエゾへ松前の西は九州薩摩方

南は紀の路須磨の浦 北は秋田や佐渡島 とらずの野辺の奥迄も

尋ねめぐらりよう あわりようか あわれ恋路の梅若は

こよ梅若と呼びこがれ ともないからすも とびつれて

まよい行く身のウトウトと えんな切髪女とは

しらん旅路のさよ千鳥

(六) きのうきよう

きのうきようまでひと昔 浮物語と奈良の里

この世を早くさるざわに 後に残りし親の身は

さかさまなれとたみき山 しげか山沾迷いづる

返れとなけれかえらのは かたきは鹿の巻筆に

せめてえこら浮世がし

(七) 御門立

御門の立ちよやら見事 をきどのわきのゆるしがき

こがねのつたがまいかえる 御庭のかげを見て見れば

四方の隅に松うえて 森のかかりはやら見事 当侍を見てやれば

そやとえびらと 千矢こそ掛なさるこそやら見事

み台所を見てやれば すぐめやつばめが巢をくんで

十二のかいごをふみそろえ 末繁昌こそ宝なり

(八) 父をはなれて

父をはなれてか かかさまを尋ねでて見よ

泉までしのたの森のくづの葉を ひるはしのだにすまうとも

夜は来てそえ子のそばに あわれやすなのむねの内
思えばゆめの浮世かな

(九) 西や東や

西や東や二人の仲をくらを立てたよ 泉酒 泉の酒のわく見れば
いかなる御上の娘でも わしにましたる人は
ないようもなるろーたのもしや

(十) ありの港

ありの港の小松やら小松さんかよ こ宝なり 松をうえたよ
島々に ようもうえたよ 姫小松 枝も栄える葉もしげる
末は鶴かめ五葉の松

(十一) わしが女房

わしが女房をほめるじゃないが 立てばひき曰 すわれれば茶曰
あゆむ姿はなべのふたのさんはずれ 今日去ろう明日去ろうと
思い居る中に夜にもよにもとちよーたらめーが出きた
わが子なればこそ さよーたらめーもむぞか
えんは子にあるまいよ 去りやならん

(松原)

二 種子島のその他の盆行事

ここでは種子島の地域のうち、上中上野、平山広田、島間田尾(本妙寺)の
盆行事について記す。

上中上野

八月七日から十六日までが盆。墓掃除は十三日、雨の場合でも必ずこの日に
する。八月七日は花を供える。家の中の盆の棚は昭和三十年頃までは神棚から
位牌を床の間に移し、バショウの葉を敷きその上に置いた。供え物なども芭蕉
の葉の上に置いた。現在は位牌は神棚に置いたままで、そこへ供える。五十年
ほど前までは縁側の外に行き場のない霊のために盆棚を作っていたが、今は
作っていない。盆棚には米・ホウセンカ・バショウの幹を刻んだものを混ぜて
置き、水を掛けた。

先祖は七日に信光寺で迎える。七日から十二日まで夕方、初盆の人はこの期
間毎日、初盆でない門徒はこの期間に数回、寺に参る。初盆の家の人は提灯に
名前を書いて寺に供える。寺に供えた提灯はそのまま置く。十二日は門徒のほ
ぼ全部が寺にて先祖を迎える。

十三日、先祖は家に帰ってくるので朝はご飯・お茶・水・酒・果物など、昼
も朝と同じようなものを供える。夜はいったん全部下げて水・酒などは取り替
える。十四日の朝は、ご飯と煮しめ・お茶・お菓子などを供える。十時頃に煮
豆(金時豆)。昼は新米で丸餅を搗いて神棚に三個、台所に二個供える。

十五日は十四日とほぼ同じものを供えるが、朝食の後に必ずマキを供える。
そしてこの日は墓にマキを持って行く。昔はマキは墓の数だけ持って行き墓の
頭上に供えた。マキは持ち帰る。墓参りのあと家に帰り団子を作る。米粉で平
べったいダンゴと細長いダンゴを位牌の数だけ供え、神棚にも供える。ダンチ
クの葉で笹舟を作る。霊は供え物を全部この笹舟に乗せて持って帰るとい
うので、笹舟の数が多いほど「たくさんお土産をもらえて良かったね」と言う。笹
舟は神棚の供え物がある空いたところにバラバラに散らして供える。先祖(精
霊様)は、十五日に寺(信光寺)に集まるとされる。

十六日、寺にて送る。門徒は寺に行き住職と一緒に経を唱える。寺には無縁
仏の場所があるので、そこに寺が供え物をする。

初盆でもらった提灯は七日から家の中に飾り、寺にも七日から提灯を届け
る。先祖は寺で迎えて送る。寺で経を唱え、家には初盆経をあげに住職が来る。
日程は前もって知らせがある。盆踊りは昭和五十年代まではあったようだ。

平山広田

盆は十三日から始まる。墓地や墓までの道の清掃は十日から十二日までにす
ませる。善福寺という寺があり、もともと平山の中之町の平山神社にあった。
檀家は現在は平山全体及び荃永の一部。明治初期の廃仏毀釈によって神社とな
り、本尊(仏像)は破壊を逃れるため一時、東へ八百メートルほどの八方山
(はつぽうさん)の麓の畑に隠されたという。その後、広田集落の裏山のイバ
ヤマと言われる高台へ移され、昭和四十七年に現在地に移された。善福寺がイ
バヤマにあった頃(昭和四十七年以前)は、その境内には大きなイヌマキがあ
り、七月十三日には竹竿に結びつけられた長さ約二メートル、幅五十センチほ

どの白旗が立てられた。この日から寺で坊さんが朝・夕、経を唱え始めた。高台にだったので集落内によく読経が聞こえていたという。白旗は八月十三日におろすまで立てられたまま。この間、檀家が寺に参ることはなかった。

七夕から十二日の晩まで「チャヤマイリ(茶屋参り)」という行事があった。公民館から道路を挟んだ向かい側の道路脇に腰の高さほどの石があり、そこで行った。この石は上が窪んでいる。前に石塔山にあるオコウソの前に作る棚と同様の高い棚を作り、そこで毎晩お茶を沸かし供える行事だった。ここで住職は七日から十二日まで三十分ぐらい読経。茶屋参りの準備として、枯れた竹を束にして各戸から集め、夜になると石塔の前でこれを燃やしお茶を沸かす。お茶を沸かすのは檀家の三・四人で、毎晩当番を決めた。各自は湯呑み茶碗を持って参加。お茶うけとしてササゲを少し甘めに煮たものを皆に配った。子どもたちも参加した。茶屋参りは仏事で、住職の読経を聞きながら皆で精霊を迎えるという盆行事である。茶屋参りは十二日の晩が最後で、盆行事の中の大きな楽しみであった。昭和四十年代前半まで行われた。

現在の盆行事では、十三日は午前中に墓に行き花などを取り替える。仏壇から位牌などを下し、仏具や茶碗・皿などお盆に使う道具などを洗う。提灯は初盆であるなしに関わらず家の中にさげる。墓には提灯は持っていない。檀家が多いので住職は十日頃から各戸を回る。ごちそうなどの供え物は一日に六回くらい取り替える。ごちそうや供え物は台の上や畳の上にお膳に乗せて供える。夕方、ササゲで作ったオヤシ(モヤシのこと)・揚げ豆腐・キンチクダケの煮物・ブト(トコロテン)の四品は供える。他は何を供えてもよい。夜九時ごろお茶を供える。お供えの膳は各家によって違うが、だいたい二膳から四膳。十四日、朝早く墓参りに行く。供える膳の料理は家族の人と同じもので良い。また、起きてすぐササゲ餅を搗ぎ、お茶をあげる。十時のお茶にも必ずササゲ餅を供える。三時にはお茶を供える。

十五日はダンゴとマキを作り供える。昼はもち米の粉でダンゴ二種類を作る。一つは平べったく丸めて真ん中に少し窪みをつけるもので舟を模したものである。もう一つは親指位の大きさのダンゴ二個で、これは舟の櫂とされる。これらは一組で祖霊が三途の川を渡るときに必要とされ一つの膳に一組ずつ供える。このダンゴは墓には供えない。マキは舟・櫂などの道具や杖・食料になると伝えられている。マキは、十五日夕方、墓に供えその後、石塔祭りに持つ

て行く。墓に供えたマキは持ち帰る。墓にはお札(トウバ)も持って行くがお札は墓に置いたままにする。石塔祭りに持って行ったマキはオコウソの棚と自分たちの小石塔の前の棚にさげ、祭りが終わったら各自一本ずつもらい、その場で食べるか食べながら帰る。オコウソ棚のところの下げてあるマキは経を唱えてあるので持ち帰る。

島間田尾の本妙寺の盆行事

精霊の供養として、参列者一同住職の唱題に、うちわ太鼓を叩きつつ唱和する。本妙寺では八月七日から十二日までの毎晩、夜七時から七時三十分まで唱えている。十三日から十五日は各家庭を回って仏壇を拝む棚経をあげる。盆の卒塔婆は十二日晩に寺から持ち帰り、十三日朝、墓に持っていく墓に置く。十三日から家で提灯を灯す。十三日墓掃除をする。

十六日の朝、縁側の外に精霊棚を作る。作り方は、笹のついたコサンダケ四本と戸板で作る。コサンダケに五色の色紙で作り、流すときに持って行く。

午後三時ごろから寺の中で精霊送りの法要がある。精霊棚に向かって経を唱える。十六時に送りの行事。精霊棚の戸板の上の供え物などをダンボールに入れ、係の二人が車で磯に流しに行く。流してすぐ精霊がついて来ないように、持って行った鎌で海の流すところを後ろ向きになり、後方を鎌で切りそのまま帰る。後ろを振り向いてはいけない。寺に帰って直会をする。

盆踊りは精霊送りの後に踊られる。本妙寺の檀家(門徒)は田尾・中之町・小平山の一部・牛野の一部で盆踊りは毎年、田尾と中之町が「ヤートセー」を踊っている。昔は「オーニサー・コニサー」を踊った。小平山と牛野は檀家が少ないので盆踊りはない。(牧島)

第四章 関連する芸能

前近代の種子島にて芸能を育てた大きな器は盆行事と願成就祭（秋祭り）であった。本章ではまず、種子島の願成就祭が県内および九州各地の秋祭とどのように関係するのか、そして種子島の願成就祭ではどのような踊が踊られたのか、その具体的な諸相について概観し、そのあと県本土や周辺離島の関連芸能について俯瞰する。

第一節 種子島の願成就祭と願成就踊

（一）秋祭りとホゼと願成就祭

願成就は言葉の意味からいえば、願掛けがなくなったことを指し、願成就祭（ガンジョウジュサイ）はその感謝の祭りである。季節もケースもさまざまありうるが、種子島ではもっぱら神社の秋の収穫感謝祭（秋祭り）をいう。旧暦九月、各地で少しずつ日程をずらして催行されたことが伝えられるが、現在は新暦十月におこなうところが多く、早いところは新暦九月、遅いところは新暦十一月に催行される。

神社には必ず土俵があつた。土俵はもちろん相撲を取るためだが、相撲以外にもこれを舞台としてさまざまな踊が上演され、人々はお重を持って朝から集まり、おおいに楽しみとした。近年は社殿にて祭典（神事）のみはおこなわれるものの、相撲はとくに消滅し、踊はかるうじて一つか二つが出るところが多く、いくつかあるぐらいである。

年配者の中にはこれを「がんじょうじ」といったことを記憶する人もいるが、神主に「何の祭りか」と聞くと秋季大祭とか例祭との返事が返ってくる。つまり最近の神主の中には、ガンジョウジという言葉を知らない人もいる。

昭和四十年代より、以前からの神主家の跡継ぎがいなくなるケースが増えた。神社の宗教学人化が進められたことよって、神主不在は認められないので、地元から神主を輩出できない場合は大きな神社の神主に兼務してもらうこととなる。一人の神主が掛け持ちで担当することになり、そうなると神社所在地の昔からの慣習に暗くなる。まさに雇われ神主である。神主家によって多少と

も独自のやり方が残っていた祭式（神事）は急速に画一化（平準化）の道をたどっている。

江戸時代は神社の祭式ではあつても大きく寺院が関わり、儀式も仏教的な部分があつた。願成就という言葉は仏教的な響きがある。明治になって仏教から切り離されたとはいえ、戦後しばらくまではガンジョウジという言葉は生きていたが、今述べた事態が進行するとやがてガンジョウジは死語となるのではないか。意識的に伝承する必要がある。

さて、秋祭りは全国各地でも盛大におこなわれるが、それが願成就と呼ばれるのは種子島だけではない。全国の事情についてはよくわからないが、九州内にはいくつか見られる。郷土誌や、私の見学事例から拾ってみよう。断らない限り日程は新暦である。

①福岡県宮若市若宮（平成十八年現地取材）

九月二十五日、宮永の天満宮境内に舞台を設営。夕方より男児や少女の踊を奉納（伝統芸能ではない）。終了後「願成就の踊を希望する者はどうぞ」という呼びかけがあり、希望者が申し出る。すると舞台上の踊り子（男女児）はその人のために踊を三回する。これを万年願踊という。そのあとは地元青年による歌舞伎が昔は三日間興行された。

②大分県『院内町誌』（昭和五十八年）

広瀬（宇佐近く）の願成就では九月十一日に神職を招いて神事をして直会、そのあと盆踊や浪花節などをした。戸主のみが集まっていたが、現在は各戸から二名が出席。大門（耶馬溪近く）は九月十五日に全戸が龍岩寺に集まる。願立ての時に決めた行事をする。住職の読経終了後直会があつた。

③佐賀県武雄市高瀬（こうぜ）の松尾神社（平成十八年現地取材）

九月二十三日は願成就祭。神事のあと境内にて浮立（フリユウ）を中心にして三番叟・扇踊・銭太鼓・魚釣り・傘踊・綾踊・猿踊などが次々と演じられた。浮立は太鼓踊の一種で、福岡県や熊本県ではだいたい風流と書き、佐賀県と長崎県では浮立と書く。

④『新水俣市史（民俗・人物編）』（平成九年）

日当野（ひあての）の住吉神社は旧久木野村の氏神。春の願掛けに対し、秋は願成就という。この社は室町時代の嘉吉三年に勧請。旧九月十九日が祭日

だったが、昭和十七年より新曆十月月二十一日が祭日となる。大口、出水、芦北、天草、水俣方面から力士が集まって相撲が行なわれた。

①にて男女児が個人に替わって踊を代行するというのは、背景に願人坊の影が見える。願人坊がもたらした願成就奉納踊がこういう形で引き継がれているのである。②では神職による神事のあと踊を奉納する。盆踊も踊られていることは、願成就祭に祖霊慰撫の性格が付随していると見ていいのではないか。寺にて僧侶が読経するのは、寺院にても願成就祭がおこなわれていたことを物語っている。③は踊の競演ともいえるべきだがかなりな祭礼である。④は古い神社での願成就相撲である。鹿児島ではホゼ相撲といい、ホゼには多くの地区で相撲大会が催され、種子島でもホゼ相撲とはいわないが、相撲は盛んにおこなわれた。各地から力自慢が村境を越え、④は県境まで越えて集まっている。右にはあげなかつたが、願成就祭には祭神が御神幸をするところもある。御神幸には様々な芸能が奉仕し、浮立や風流が供奉する地区も少なくない。これらの祭礼をクンチ（オクンチ）と呼ぶところも多い。クンチは九日や十九日に催行されたことによる呼び方である。

こうした秋祭りを鹿児島ではホゼという。ホゼについて小野重朗『鹿児島島の民俗暦』（平成四年、海鳥社）は次のように説明する。

「ホゼは古くからの大きな神社の秋祭り。豊祭とか方祭（方限の祭り）と説明されるが、実は放生会の音の訛ったもの。八幡系の神社の旧八月十五日の放生会が秋の収穫祭化したものと思われる。期日は旧九月の九日（クンチ）・十九日（中クンチ）・二十九日（乙九日（オトクンチ））など、特に中クンチが多いが、旧十月もある。収穫祭としての要素が強く、氏子の家々では他村の親類知人を呼んでご馳走したり、通りがかりの人までもソバなどを供応したりする」

種子島ではホゼという言葉はまず聞いたことがないが、右の説明によって種子島の願成就祭はホゼの類いであることがわかる。願立て（祈願）はいつなのかと聞いてもはっきりした答えは返ってこない。春の祈年祭と答える人もいるが、地方の中小の神社の祈年祭は明治以後に始まったもの。祈年祭に対応するのは新嘗祭であろう。祈年祭も新嘗祭も明治国家が定め、全国の神社を通じて弘めたものである。

願成就祭を放生会のバリエーションとしての収穫祭の一種、つまり一般的な豊穰感謝祭と見ると、願立てが不明瞭なものも理解できる。また種子島にホゼという言葉がないのは、放生会と結びつきの強かつた八幡神社系が少ないのも原因のひとつかもしれない。

八幡神社は①西之表市街地（赤尾木）の八坂神社（江戸時代は慈遠寺）隣の春日岡に招来された八幡神社（南北朝期）、②西之表市中西の石清水八幡宮、③西之表市下西の城（じょう）の弓矢八幡神社、④西之表市上西戸之峯の弓矢八幡神社、⑤住吉片之山八幡神社（馬毛島葉山）、⑥島間岬八幡神社、⑦南種子町下中真所八幡神社があり、いずれももとは地元の様ではない。そのほか現和武部（ぶぶ）の向田八幡は明治初期にできた。現和近政（ちかまさ）の正八幡は長田家の神社、南種子町西之中西目の八幡神社は廃仏後にできた。これらを除いて考えると、①～④は西之表の土族の居住する赤尾木城下付近に設置された小社、⑤は十五世紀頃に馬毛島に移転している。⑦真所八幡神社は『三国名勝図会』には「祭など廃絶」とあり、結局八幡神社文化は種子島には定着しなかつたようだ。ついでにいえば、あれほど県内に分布する諏訪神社（武の神様）はさらに少なく、管見では西之表市安城に見えるのみである。八幡神社と諏訪神社が少ないことは種子島の文化を考える上で何がしかのヒントを与えるかもしれない。

まとめると、種子島の願成就祭は県内のホゼ（収穫感謝祭）の一種であり、ホゼが九州全域にて芸能祭のような様相を呈しているのと同様、種子島でも同じ側面をもっていたのである。

（二）江戸時代の願成就祭の記録

種子島は願成就祭が盛んだったとはいえ、種子島家関連の記録にはその言葉が出てこない。天保七年に種子島家の諸行事を記録した『御家年中行事属類雑記』に「諸神社祭礼大概の事」として、島内九ヶ所の神社の祭礼についてごく簡単に記されている。順にあげると馬頭観音（種子島家お館附属の厩舎に安置）、伊勢神宮、浦田大明神宮、御崎貴志賀美神社、住吉大明神、熊野権現宮、宝満神社、真所八幡宮、嶋尾大明神である。願成就祭と見なしうる祭礼について触れているのは以下の四社である。

①伊勢神宮 上西之表村

毎年五月十日、九月十日、両度の祭礼満徳寺僧參宮して祈祷あり。

上西之表村というのは西之表村のうちの北半（上西方面）を便宜的に云つたもの。伊勢神宮は西之表市街地から少し北へ行った上西の大花里（オオゲリ）の山手にある。日南の鶴戸神宮の御神鏡を勧請して寛永十八年に創建されたという。この頃、鶴戸神宮の信仰が広がっていたこと、種子島と九州東海岸を繋ぐ通交ルートがあったことを想像させることなど、注目すべきである。伊勢神社は種子島の総鎮守とされる。五月十日と九月十日（いずれも旧曆）に横山の満徳寺僧による祈祷がおこなわれた。五月は田植の成就祈願および夏期に向かつての災厄除け祈願、九月は収穫感謝（願成就）である。

②宝満神社 荃永村

九月九日祭礼、神社の前、池の辺にて古例の踊あり。

この記述のあとお田植祭のことが述べられているが、九月九日についてはたつたこれだけの説明である。池は宝満の池である。古例の踊があったというから、古くから秋祭り（願成就祭）がおこなわれ、踊が奉納されていたのである。祭礼日は今も旧九月九日だが、近年は新曆十月の日曜日におこなわれている。

③真所八幡宮 中之村 五・八・九月十五日祭礼

中之村老功の者代々申伝への云う。往古には右御神領の地にて神馬の流鏝馬あり。今世五月十五日真所町中麦の初穂を奉納し、之にて酒を造り巻を調へ神前に供し祭礼あり。昔真所弓場にては晴雨を問わずの興行あり。自然風雨はげしき事もあるときは古例の式なりとて耆貳人とても弓場へ出張して一矢を放たずとも弦違して其式を遂行、是古へ流鏝馬ありししるしの残り也と。又九月十五日には村人半分づつ毎歳祭神の踊りありと。

西之の東隣、下中（江戸時代は中之村）の真所八幡神社は創建不明の古社である。応永三十三年の銘のある鰐口やお田植祭で知られる。右の五月十五日は

そのお田植祭であろう。この日、村中が麦の初穂を出し、これで酒とマキを作ったとある。五月にアクマキを作る風習は全島的に今も細りながらではあるが続いている。雨風が激しいときは一人か二人が弓場へ云つて弓を射る仕事をしたのは昔の流鏝馬の名残だとする。流鏝馬はすでに遠い過去の出来事だったのである。八月十五日は仲秋の十五夜である。九月十五日には村を二分して踊が奉納されたことが誌されており、これが願成就祭に当たる。

『種子島家譜』天保五年十月二十九日に「中之村を割つて二村となす」とあり、同年十二月十日に「中之村を割つて上中之村をおき、百姓二十七人をもつて下中之村に属し、十人をもつて上中之村に属し、境を定むること…」とある。上中之村（通称上中（かみなか））と下中之村（通称下中（しもなか））がこの時分かれたのである。③が書かれたのは天保七年だから、すでに中之村は二つに分かれている。中之村を二分するというのは、真所のある地元下中之村はもちろん、上中之村（台地上から西海岸にかけて）からも踊が奉納されたことを意味する。

今は真所八幡神社の願成就祭はおこなわれていないが、南種子町の選択文化財調査報告書『種子島宝満神社のお田植祭』（平成二十六年）の「昭和期のお田植祭」（下野敏見執筆）に、願成就祭について次のような重要な記述がある。「真所八幡の御田は七反余あり。その代あけは廻り当番。①真所、②里・山神、③夏田・郡原の三組の年交代。この三組は、旧九月十五日の願成就祭りには合計して大踊二つ、中踊を一つ必ず出さねばならなかった。この三つの大踊・中踊のうち、最初に奉納するのを一番庭といい、一番庭の組が先に述べた神田の代あけをせねばならない」

この記述は中之村が二分されて以後近年まで続いた下中之村の願成就祭について、戦前のことをよく知っている年配者から聞き取ったものである。お田植祭は「稲がよく育つて五穀豊穡となる」ことを祈る祈願祭でもあったということである。これから類推するに、前述伊勢神社の五月の祭も田植祭と見ていいだろう。

④守護潮風除災 嶋尾大明神 九月十九日歳祭 西之村

祭礼の節は本因寺満山祈祷、村役目皆役參勤、村中老若參宮し、国土安穩と云う古例の踊り、社殿の前にて催し、この時、神前に供したる白酒の余りを踊

人并、参宮の人々にも神主より振舞い拝領させ賑敷取はやすとなり。

門倉岬神社は江戸時代は嶋尾大明神と呼ばれた。本因寺は本国寺の前身である。嶋尾という名前は島全体を視野に入れて、潮風から守護し災厄を除く神社であることを示している。大明神という名称自体が仏教的色合いを持つている。本因寺満山、すなわち西之村にあった末寺や支院・支坊すべての僧が集まった。田代に金剛寺、小田に龍泉寺があったことは『懐中島記』に記されているが、それ以外にも小坊があったかもしれない。全員で防風除災の祈祷（法要）をした。村の役人、老若男女も参列した。そして踊の奉納。「国土安穩という古例の踊り」とは今にいう大踊で、最初にこれが奉納されたことも記されている。踊り子にも参拝者にも、神饌の白酒が神主から振るまわれた。県内の秋祭（ホゼ）ではだいたいどこでも甘酒が造られたというから、右の白酒にも甘味があつたであろう。「賑敷」は「にぎにぎしく」と読むか。「賑敷とりはやす」は「たいへん賑やかに騒ぐ」という感じだろう。祭りは現在よりもはるかに賑やかで、一日を費やした行楽だつたことが見えるようだ。

以上『御家年中行事属類雑記』に記された九社の神社祭のうち秋の祭礼（願成就祭）に触れた四社について述べたが、本書の最後に「右の外麓内并田舎諸国に至り神社の古跡多し雖然其の由緒さだかならず洩之」とある。赤尾木城下やそれ以外の田舎にはこの他にたくさんさんの謂われのわからない社があつて祭りをしていて、あまりにたくさんあるので略すとある。島内全域でおこなわれていたこうした秋祭りを願成就祭と呼んでいないということは、ガンジョウジが完全に民間による通称だつたことを意味すると見ていいだろう。

(三) 西之の願成就祭

明治の廃仏後、江戸時代の旧村ごとに廃寺跡等を利用して中心となる神社が建てられ、村社としての社格が与えられた。近代の願成就祭はここで開催された。伝統的には城下（赤尾木）を除いて全島は十八ヶ村だったが、明治になって地租改正によるトラブルなどを通じて旧村から分離する村もあり、結局二十一ヶ村となった。明治二十二年の町村制によって北種子村・中種子村・南種子村が成立すると、それらは大字となった。つまり二十一ヶ村または二十一

大字ごとに願成就祭がおこなわれたと大きくは考えていいが、細かくいえば小学校区をひとつのまとまりとする地区も生まれ、諸行事も旧村（大字）から抜けて独自に開催する場合もあつた。

また願成就祭はそうした旧村（大字）の中心神社に全集落が集まつておこなわれるだけでなく、必ずというわけではないが、あとで述べるように各集落ごとでも別日程でおこなわれた。どちらでも大踊を中心に、各種の伝統的芸能や子供達の遊戯、婦人会による新しい踊などが披露され、相撲も大いににぎわつた。力自慢は他集落にも出かけて相撲を取つた。

旧村（大字）単位を原則とする願成就祭が盛大におこなわれたのは戦後十数年までのことで、高度経済成長が始まるとともに衰微していく。ただし神社では祭典（神事）だけは関係者によつて継続されている。そういう中で西之表市現和（げんな）や南種子町の各旧村（大字）は近年に至るまで伝統的な願成就祭を維持してきた。しかしいづれの地区も、伝統的な踊が奉納されるかどうかはあらかじめ確定できない状況になっている。過疎と少子化のために踊り子の人数を確保できないのである。

ここでは島内でもつともよく戦前のやり方を保持し、盆踊をも伝承する西之地区（旧西之村）の願成就祭を見てみよう。西之の惣鎮守は嶋尾大明神と呼ばれた岬神社である。江戸時代には旧暦九月十九日に催行された。現在は新暦十月中旬の日曜日におこなわれている。

岬神社は門倉岬の先端の海を見下ろす丘の上であり、周囲の緑と青い海が鮮やかに対比する。遠く宇宙センターが見える。茫洋たる南に向かうと右手に屋久島を間近に遠望する。蘇鉄の林がここが南国であることを物語る。下野敏見『タネガシマ風物誌』（昭和四十四年）に「今でも祭の前夜は必ず西の風が吹いて屋久島から神様が来るといふ」伝承があつたことが記されている。古く多嶺嶋時代の屋久島との強い繋がりを物語るかのような伝承である。

願成就祭前日の夜は神社にて前夜祭（通夜）がある。西之地区の集落長などが集まつて神事があり、夜中十二時頃まで社殿にて過ごす。当日早朝、係はシュエートリ（朝の潮汲み）をする。浜に生えているハマヒサカキという植物の葉っぱで寄せる波をすくつて潮を汲む（小石を拾う）のである。シャニンはこのところ同じ人が勤めている。またシャニンは願成就祭の日だけでなく、岬神社の毎月一回のシュエートリもする。

当日朝、各集落は奉納踊の準備をする。踊り子は地元にてシクミ（仕組み）というリハーサルのようなことをする。衣装は着ないが稽古ではない。見物人はほとんどいない。終わると一旦帰宅し、大きな道具は岬神社にトラックで運ぶ。集落役員は岬神社の午前の祭典に出席するので別行動である。

岬神社では午前十時から神主のもとで祭典（神事）が始まり、祭典終了の十時半頃に合わせて、結構な広さのある社殿前境内の周辺に人々が集まってくる。お年寄りはこちらが何よりの楽しみでもある。秋の海風が緑の境内を吹き抜ける。

大踊を踊らない地区は中踊か小踊を出すことになっている。幼稚園児や小学生や婦人会も、地区を横断してグループを作って踊ることもある。そういう方々が集落ごとにだいたい決められた場所に陣取って待つ。大踊の踊り子は、周囲の海風にあおられる低い叢林の中で衣装に着替えるなどの準備をする。

社殿の神事が十時半頃に終了すると、しばらくして西之地区公民館長の挨拶があり、今回の大踊出演が紹介される。太陽も中天に近い十一時頃、大踊奉納の大太鼓の最初の一打が打たれる。

西之の各地区（集落）には大踊は四年に一度順番がまわってくるというローテーションがあったが、今は二年に一度まわってくる形にかわっている。ローテーションの変化についてはあとで述べるが、毎年二組（二集落）の大踊が出ることになっている。一組が不幸などによつて出場できない時のための措置である。つまり必ずひとつの大踊は踊らなければならない。集落内に不幸が出た場合、直ちに集落として踊を取りやめるわけではない。当該家の親族は喪に服するので出場しないわけだが、仮に不幸が二戸の家で重なったりすると喪に服する人が多くなり、人数不足で大踊を組み立てられなくなる。そういうことはめったにないが、たまに起きる。それで二集落を予定するのである。平山では一番手をエイギンといい、二番手をエイギン前という。西之ではこういうことはいわれないが、二組を準備するのは同じである。

大踊は四曲か五曲を組とするが、全部を踊るわけではなく、その年の地区の事情による。そして西之の場合は最初にならず「国土安穩」という曲を踊る。これは西之ではどの地区にもある独特の踊で、西之以外では「寺踊」とか「この寺」というのを最初に踊る。

「国土安穩」の次に「北之町」「締めれば鳴る」などが踊られ、二組出演の場

合は続いて披露され、同名の踊の場合もある。どうしても見物者の比較の目にさらされるので、競争意識が生まれる。この競争意識が大踊を継続させてきた要因でもあるが、一方競争を意識した厳しい稽古がなされると若手の踊への参加が敬遠され、大踊から離れる人を生み出す一因にもなっている。

大踊が終わると各自の場所にて昼食をとりながら、各集落からヤートセーや子供達の棒踊などいろいろ出る。十三時頃にはすべてが終了し、人々は退散、門倉岬神社はもとの潮騒だけの静寂に戻る。

前述したように、大踊を奉納しない集落は中踊・小踊を踊る。踊る場合は大踊であれその他の踊であれ、まず地元にて朝、稽古した場所にて略装でシクミをする。これは必ずしなければならないと決まっているので、単なるリハーサルではない。そして岬神社で踊り、地元に戻つて練習をしたところで「ニワクズシ」として再度踊る。これは略式でいい。そのあと公民館にて直会（宴会）となる。図示すると、

地元でシクミ↓岬神社奉納↓地元でニワクズシ
という順序である。ただし大踊の場合は、岬神社奉納のあと本国寺に行つて踊る。

地元でシクミ↓岬神社奉納↓本国寺奉納↓地元でニワクズシ
となる。大踊が岬神社に二組出た場合、本国寺での奉納順番は逆になる。最初に踊るのを前庭、二番目に踊るのをあと庭という。

前述したローテーションについて、現在直面している事情を説明しておく。西之は盆踊と同様、戦後は地区を東と西に分け、それぞれを四組に分け（合計八組）、二組の大踊を出してきた。今年東から二組出ると、来年は西から二組出る。四年に一回まわってくる。このやり方が長く続いたが、伝統文化離れや踊り子減少があつて、平成になってから東と西をそれぞれ二組に分けるようになった。すると二年に一回まわってくる。四年目ごとの出演に比べ、二年に一回であれば練習は楽になる。

近年（この数年）の西之では、西之全体で芸能や行事を保存伝承することを目的とした西郷会（さいきょうかい）というのを作つて伝承に取り組んでいる。とはいえ大踊は保存会として合同ですぐに踊れるわけではない。集落によって若干違うので、どの集落のものを踊るかが問題になる。しかしそれにこだわっていると踊が細るだけなので、それぞれのグループ（四組）で話し合いをして

どの集落の踊を踊るかを決めている。踊には師匠（実際に踊の指導をするのが本来だったが、現在は必ずしもそうではない）という役を設けることになっている。催行の決め手は師匠がいるかどうかである。師匠がどの集落にもいないという事態も起きつつある。今は映像があるので見よう見まねで踊ることができ、伝承の仕方は明らかに変化している。

現在の東西をそれぞれ二組（合計四組）に分ける形もいつまで続くかわからない。東で一組、西で一組という事態もやがて来るし、東西併せて一組、つまり西之全体でワンチームを作って毎年踊るということになる日も遠くないかもしれない。

西之全体では「安城踊り」「しんご踊り」「さんご踊り」という三つの踊りがあり（あとで説明）、多少の違いがあり、その違いは残していこうという点では一致しているが、これもどうなるかわからない。

さて岬神社願成就祭は西之地区全体でおこなわれる祭礼だが、願成就祭は本来は各集落でもおこなわれた。つまり岬神社（西之全体）の願成就祭と集落のそれと二つの願成就祭がなされた。近年は集落のそれをやらない場合もある。集落ごとの願成就祭の具体的な記録はないが、現在も岬神社と地元と二回の願成就祭をやっている平野の例は次のようなものである。他集落も原則としてこれと同様で、岬神社の前かあとにする（平野はあとにする）。

平野集落の願成就祭でも前夜に通夜がおこなわれる。今は公民館にてだが、以前はシャニン（社人）の家でしていた。集落の役員（班長、館長、副館長、文化部長など）十人ほどが集まる。岬神社のシャニンとは別の人がシャニンを担当。シャニンはだいたい順番で担当する。通夜といっても夜中十二時頃まで公民館にて飲み方をするだけである。シャニンになるとシユエトリをする。

平野集落の神社（平野神社）は本国寺の隣にある。社殿内に置いてある箱に巻物が入っているが、ポロポロになっっていて、触ると崩れるので誰も見ていない。昔はその箱をシャニンの家に運び（中は見ない）、お供えをし拝礼をしてからお通夜をした。今は公民館に神社から持つてくるが、中はやはり開けない。

翌当日は神社で祭典（神事）をし、そのあと集落内の踊が出る。岬神社の大踊を担当した年は大踊をする。そうでない年は、岬神社には中踊・小踊を出し、地元願成就祭でも中踊・小踊をする。社殿で神事がおこなわれている間に、集落の人々はご馳走を持って、ゴザの上に座って集まっている。その前にシクミ

（練習場所にて）は済ませている。祭典の終了に合わせて踊を奉納し、そのあとすぐに練習場所（公民館）に行つて略式で踊り（ニワクズシ）、境内に戻つての宴会となる。つまりここでも（集落の願成就祭でも）どの踊であれ「シクミ一本番ーニワクズシ」という順番は守られている。どの集落も同じである。岬神社では大踊の最初に「国土安穩」を踊り、地元の願成就でも大踊をする場合は「国土安穩」を踊るが、これは省略する集落もあるようだ。

（四）下野敏見著『種子島民俗芸能集』

種子島の芸能は下野敏見（昭和四年生、令和四年三月没、本稿でも一節を担当）の初期の精力的な調査によって全貌が明らかになっている。昭和二十九年四月、県立高校教師として種子島の中種子高校（初任地）に赴任し、しばらくして民俗調査を開始。昭和二十九年といえど敗戦から九年目、戦争の傷跡が各所に残りつつも、戦前とほとんど変わらぬ農村風景の中で全島が農業復興に向けた活力がみなぎっていた。青年も多かった。幕末から明治初期生まれの方々が多くいた時代である。

地元に住み、ほとんど島を出ることなく（出るのはいせいで西之表市街地）、営々と農業にいそしんできた彼らは、島外の民俗習慣をまったくといってほど知らない。電気は一部の地区では戦前から発電されていたが、二十四時間送電は中種子町は昭和三十四年より、『中種子町郷土誌』昭和四十六年）、南種子町は昭和三十年代後半から、『南種子町郷土誌』昭和六十二年）である。家庭にラジオもテレビもなく、新聞や本から得た知識がなく、その分、自分たちの習俗を種子島にしかない特別の習慣と思いがちだが、無理はない。「ちいなびき」など面白い（ヘンな）ことをするものだなあ、と彼ら自身も思っていたのだ。民俗調査にとつてはそういう知識（けがれない知識！）と民俗実修の現場こそが重要である。それが下野の目の前にあった。集落を訪れると出会った老人は悉く話者であつただろうし、祭礼も民俗行事も活き活きと継続していた。調査しきれない。そういう事態に遭遇したのだろうと想像すると、うらやましくもある。

一方、下野は中種子高校の生徒会クラブ活動として地歴研究部を立ち上げた。赴任して五年目の昭和三十四年三月、その会報『種子島民俗』第一号が出ている。当時の中種子高校には農業科があり、大学進学者のほとんどいなかった

た当時、地元に残つて地域を背負うことになる人材が中種子だけでなく南種子からも数多く入学していた。その生徒たちによる四十八件のミニレポート（ひとことレポート）が掲載されている。号を重ねるにつれて同僚教員の投稿もなされ、昭和三十七年の十四号には鹿児島大学教授五味克夫氏（中世史）の寄稿もある。当初は下野氏自身がガリ版を切った。その作業量と活力には驚くべきものがある。

昭和三十七年、下野は種子島高校（西之表市）に転勤すると、同様のコンセプトにて郷土研究部を起し、会報第一号『種子島研究』を昭和三十八年十一月に出した。その一方、島内外の種子島に関心を寄せる歴史民俗研究の方々と糾合して南島民俗研究会を立ちあげ、昭和四十三年三月『南島民俗』第一号を出した。これらのことごとくを下野は牽引し、何らかの寄稿をしている。

そして昭和三十八年十月、タイプ孔版印刷によって『種子島民俗芸能集』が種子島博物館より発行された。平成二十二年に鹿児島市の南方新社より『南島の民俗文化誌五種子島民俗芸能集』として別論考を加えて復刻出版されている。この「はじめに」に、種子島博物館発行とはあるものの、実際は西之表在住の医師井元正流氏より資金を借入して発刊したことが書かれている。この書物が種子島だけでなく、鹿児島県全体の芸能研究に果たした功績ははかりしれない。

昭和四十年代にはいると種子島は急速な近代化をとげていく。道という道が舗装され始め、新道路の敷設や直線化が実施され、港湾の整備が始まった。こうして激しい変貌をとげた結果、それ以前の風景は一市二町の中心市街地からは完全に消えた。同時に人口流出も始まる。『種子島民俗芸能集』が刊行されたから令和四年で五十九年が経過した。そこに記録された芸能の数々を現在のムラの人々はほとんど知らない。

ここでは『種子島民俗芸能集』（南方新社版）に基づいて、島内の願成就祭奉納芸能を概観する。同書には南から北への順番で地区ごとに芸能表が掲載されている。この書物は入手しにくいわけではないので、詳細は直接当書を確認されたい。

（五）大踊のレパトリーと種類

大踊はいくつかの短い小歌踊を集めた組踊である。カネ（小円盤）と小太鼓

（胸に抱く）を中にして外側を大太鼓（腹に抱く）が取り囲むというのが基本形である。小太鼓はイレコという。人数はカネ・小太鼓ともに十人ほど、外側は二十人前後というのが標準である。カネと小太鼓は黒っぽい着物にヒラヒラの付いた華麗な花笠を被り、婦人用帯をケサ掛けするところもある。大太鼓は上はカラフルな襦袢、股引に脚絆。大太鼓のトップを大将といい、大将の「ヒーヨー」という掛け声と一打で踊が始まる。カネと小太鼓はそれぞれ一列、大太鼓はその両側に分かれて全四列で入場して輪を作る。輪踊のあと隊形を変えてリズムカルなクズシを踊る。クズシの歌詞はたいいてい戦国後半期の戦さに取材する小歌である。以上がおおよその大踊の内容で、全島ほぼ共通である。違うものもあるが、それはあとで説明する。

『種子島民俗芸能集』を見ると、大踊を伝える地区はほぼすべて複数曲を持つており、大踊は組踊であることが原則だった。中種子町増田古房（ふるぼう）は一曲（正月べいじょう）だが、古房は増田のルーツのような集落だから数曲あったはずで、他の曲は失われたのであろう。だいたい三曲から四曲というのが普通だが、西之表市現和（げんな）の武部（ぶぶ）は八曲も持っていた。現在はそのうちの何曲かを伝承している。同じ西之表市住吉の能野（よきの）も八曲あったが、戦前に途絶えた。中種子町牧川（まきごう）も七曲あったが、これも途絶えている。これらの各曲をレパトリーと呼ぶことにする。大踊があつたことだけは伝えるものの、レパトリーはまったくわからない集落も西之表市にいくつか見られる。全島のレパトリーは全部で三十七を数える。

レパトリーを数曲集めて組にして何々踊と呼ぶ。これを種類と呼ぶことにする。以下に述べる「安城踊」とか「しんご踊」などという言い方をさす。種類という言葉は適当ではないかもしれないが、ほかに見当たらないのでこう呼ぶ。全部で左記の六種類がある。種類の名称を伝えていない地区は不明としたが、類推できるものは類推して六種類のいずれかに含めた。地区数も示す。地区数は集落数とほぼ同じだが、二つの集落が合同して踊っている場合もあるので地区とした。

大踊の種類

一 安城踊

二 しんご踊

四十六地区

十地区

- 三 さんご踊 七地区
- 四 げんだら (源太郎) 踊 十五地区
- 五 雷 (かみなり) 踊 一地区
- 六 強張 (ごうちょう) 踊 三地区
- 七 不明 七地区

不明七地区のうち六地区はレパトリリー名(個別の曲名)のみを伝えている。たとえば前述の増田古房は「正月べいじょう」があった(今は断絶)とするだけで委細は不明。納官(のうかん)の原之里(はらのさと)は「桐のまないた」と「佐渡と越後」の二曲を伝えるが種類名は不明である。

ひとつの集落で二種類を踊っていた地区が六地区ある。西之表市安納は安城踊とげんだら踊、中種子町坂井の本村(ほんむら)はしんご踊とげんだら踊、南種子町下中(しもなか)の真所(まどころ)は安城踊と強張踊を踊ったと伝えていいる。

右の地区数の総計は八十九だが、二重にカウントしているもので、それを差し引くと実際の地区数は八十二である。つまり種子島全体で八十二の地区が何らかの大踊を伝え、それ以外は大踊を持たず中踊・小踊のみを持っていることになる。ただし西之表市現和の下之町(しもものちよう)には『種子島民俗芸能集』によると大踊はないが、上之町(かみのちよう)の大踊(げんだら踊)に参加していたようである。そういう地区もたくさんあったはずである。

ところで右とは別に、赤尾木城下在住の土族によって種子島家の祝賀行事に催行される武士踊(さむらい踊)というのがあった(後述)。『種子島民俗芸能集』では「その他の大踊(土踊系統大踊)」を踊る地区として西之表市一地区、中種子町九地区の計十地区があげられている。「土踊系統大踊」という書き方は今述べた武士踊を連想させるが、結論からいうと、これらの十地区の踊は今述べた六種類のいずれかに属する。

著者はなぜ「その他の大踊(土踊系統大踊)」として分別したのかというと、右に述べた六種類との大太鼓の叩き方の違いにこだわったからである。大太鼓には両バチ(腹に抱いた太鼓を両手のバチで叩く)と片バチ(太鼓を左手に持ち右手のバチで叩く)の二タイプがある。両バチを掛打(かけうち)太鼓ともいい、これが一般的だが、片バチは衣装も羽織袴に陣笠という武士の出で立ち

で踊り、集落も土族集落(と言われている)である、したがってこれは武士踊である、としたわけである。しかしレパトリリーに独自の曲はなく、同じ曲(レパトリリー)でも両バチを使うところと、片バチを使うところがある。

また土族集落という表現もかなり曖昧である。土族はもと(江戸時代以前に遡るケースもあるであろう)種子島家の家臣だが、赤尾木城下以外の種子島各地に土地をもらって現地に定住し、みづから開墾にあたった人たちの末孫である。中には現地で農民から十分に取り立てられた人もいた。土族だけで集落が成り立っていたわけではなく、自営農民や小作農民や使用人もいた。そういう人なしには開墾も耕作もできなかったはずである。とはいえず土族が多く住む集落の踊は、自分たちの踊を他集落から区別しようとする意識が働き、両バチ(掛打太鼓)ではなく、片バチなどの踊を取り入れたか、創案したのだと思われる。だから大枠としては大踊の一種であり、赤尾木土族の踊る武士踊(さむらい踊)はこれとは明らかに違う踊である。

まとめると六種類の大踊は基本的に農村集落の踊であり、武士踊は完全に赤尾木城下居住家臣団による踊で、種子島家の祝賀行事や藩主の慶賀のために開催されたことが『種子島家譜』に出ている。これについては最後に述べる。

右にあげた六種類の大踊のレパトリリーを掲げておこう。それぞれレパトリリーが決まっているのであればわかりやすいが、そうではない。げんだら踊・雷踊はレパトリリーが固定しているが、安城踊・しんご踊・さんご踊・強張踊は交差している。種類別の内容をこのあと簡単に見ていくが、げんだら踊と雷踊を除く四種類に含まれるレパトリリーは全部で三十七曲ある。その一覧を掲げる(五十音順)。

大踊のレパトリリー(げんだら踊と雷踊を除く)

- ①大原山 ②近江の国 ③沖の渡中 ④小田原 ⑤思いかぶり ⑥思い定め
- ⑦⑦思いたちた ⑧おらとそなた ⑨祇園祭り ⑩君が代の里 ⑪北之町
- ⑫桐のまないた ⑬げんごばあ ⑭こえびら ⑮国土安穩 ⑯御門のせび ⑰
- 今生の稚児(我は池水) ⑱佐多の岬 ⑲佐渡と越後 ⑳様に逢うとて ㉑締
- むれば鳴る(越えをして・越路して) ㉒正月べいじよう ㉓しんご ㉔千歳
- 古松(吉原がよい) ㉕月日かけ ㉖寺踊(朝日さす・この寺・この城・これ
- のお庭・これのお城・これの御門・めでたお寺、などを含む)

- ②7とたか千代女 ②8西東 ②9浜ちがよい ③0東山 ③1比翼連理 ③2松様
 ③3岬山 ③4婿が来る ③5武蔵野 ③6もらす桶 ③7我は備前の

大踊の最初に踊るのは庭ほめ踊である。名称は「この城」「この寺」「これのお庭」などさまざまだが、寺踊としてまとめた。「この城」の城は社(やしろ)からきたものであろう。西之表市宮原の強張踊の冒頭では歌い出しの文句を取った「朝日さす」が踊られるが、これも庭ほめなので寺踊とした。庭ほめ踊は最初に踊るのが原則だが、途中で踊る地区や、複数回踊った地区もあったようだ。

「今生の稚児」「締むれば鳴る」「千歳古松」は同じ曲である可能性がある。何節かあるうちの歌詞のどれを冒頭節に持つてくるかでタイトルが違っているということであるらしいが、ここでは別曲として扱った。

「しんご踊」は「しんご」という踊を含むためにそう呼ばれたと思われる。中種子町野間上方(うえほう)は「しんご踊」で「しんご」というレパートリーを持つているが、「げんだら踊」の中の「近江の国」も含んでいる。つまり上方はいくつかの大踊からイトコ取りをして「しんご踊」として組み立てたと思われる。

「さんご踊」は種類名として出てくるのみで、「さんご」という曲(レパートリー)はどこにも見当たらない。完全に失われたのだろう。

(六) 大踊の種類別各論

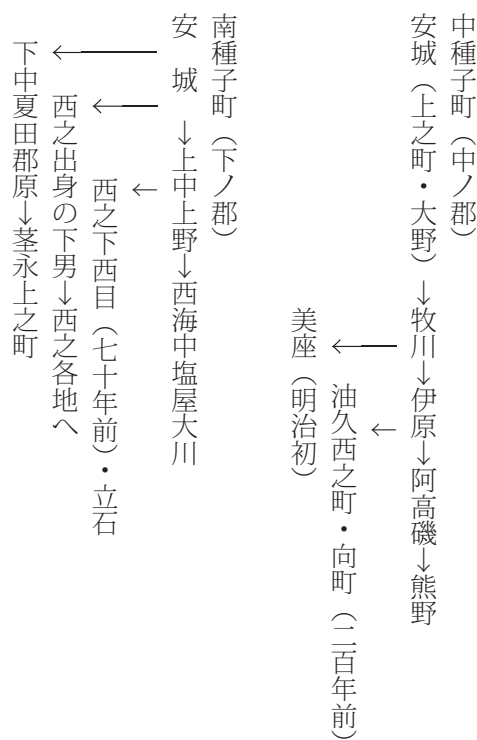
次に六種類の大踊のそれぞれについて簡単に見ることにする。

安城踊 安城踊は大踊を伝える全八十二地区の半分以上の四十六地区がその名を持つ。由来について『西之表市百年史』は「大阪の船が台風にあい、安城海岸に避難していた。その時、大野部落の人たちに掛打太鼓を伝授したのが始まりで、これが広まったのは、中種子や南種子の人が安城本村の土族の家に下男として働きに行き、習い覚えたからである」としている。

これは安城踊のルーツのいかほどを伝えるのだろうか。レパートリーはいくつあるが、内訳は「北之町」三十地区、「締むれば鳴る」二十八地区、「月日かけ」二十三地区、「佐渡と越後」十五地区となっており、この四曲が安城踊

の基本レパートリーだったと思われる。

『種子島民俗芸能集』の各所に、どこから伝わったかについての伝承が簡単に記入されている。それを見ると確かに安城から伝わったとする集落がいくつもある。中種子町と南種子町でよく聞かれる主な伝承ルートを拾ってみると、だいたい次のような図が浮かんでくる。



中種子では西海岸に臨む牧川(まきごう)が重要な伝承経田地になっている。牧川では二つの家が開拓の祖として神社に祀られ、背後に広大な農地を持つ。東海岸の安城へは東側の山を越えると案外と近い。人事の交流はあっただろう。独立心は強く、地租改正をめぐって納官村から分離した村である。中種子各地からの雇われ人も多数いただろう。ここから同じ西海岸の南、伊原(いばろ)と阿高磯(両者は隣どうし)に伝わった。江戸時代の物資の運搬は海路がよく利用され、牧川と伊原・阿高磯を結ぶ海岸の距離は遠くない。

南種子町(下ノ郡)は西之表の赤尾木在住の土族の給地が多いところだった。多くの農民はこれを小作し、余剰人員は雇われ人となって赤尾木城下や上之郡(旧西之表村)各地の農村に出かけた。こういう場合、一人が出稼ぎに出ると、その親類縁者や出身集落の者に広がるものである。そういう人たちが安城にて覚えて西之に帰郷したのである。

こう見てくると安城という地区の成り立ちを見る必要が出てくるのだが、こういう問題意識での調査研究はほとんどなされていない。「安城(あんじょう)」という呼称の起源もヴェールに包まれたままである。

伝承のルートはこのように少しだけ垣間見ることができ、伝えられた時期がはっきりしない。明治初期の廃仏と同時に神社祭礼が奨励され、旧村ごとに願成就祭への各地区の踊奉納が積極的に勧められ、この時大踊も、その時までに伝承していなかった地区へ一挙にひろまったのではないかと推測をすることができ、それで安城踊の分布のすべてを説明できるわけではない。

安城にもたらされた大踊のルーツは、『西之表市百年史』がいうように大坂方面だとして、大坂のどこなのか、いつ頃の話なのか、大踊に関心をもつ郷土史家は長年気にかけているが、よくわからない。

安城のうちの大野の大踊は「このしろ」「これのお庭」「北之町」「締むれば鳴る」の四種類、上之町(かみのちよう)はこれに「佐渡と越後」「月日かけ」の二つが加わる。『西之表市百年史』は「月日かけ」は戦陣を模し、矢旗も加わり、種子島大踊の中では異色。つまりこの踊は上方直輸入ではなく、薩摩系であることは服装だけでなく、歌詞からもわかる」と指摘しているが、これは賛同しがたい。薩摩で作られたと思われる部分は「月日かけ」のクズシの部分であり、次掲のように戦国時代後半期の島津の九州各地での戦さを歌っている。同様のクズシは他の大踊にも付いている。「月日かけ」の本踊の部分はやはり中央から流入した歌謡と見なければならぬ。西之表市住吉の能野(よきの)の「月日かけ」とクズシの歌詞をあげておく。

能野の「月日かけ」の歌詞

月日かけてかわらじと契りし仲なれど、
くやしきまさはなあれば　こぞの暦でみすてらるは。
うつるいやすきとのほ　うらみにそよ　かざならぬ身のうらみそよ。
袖の振り合わせさえ、多生の縁ときくに　いわんや枕をならべて
打ちとけおいて、思いしことを今語らじてまたもようとはふじよでそよ

同右のクズシの歌詞

豊後が勢は日向いる　日向の佐土原とどこおる

それが薩摩に漏れきこえ　薩摩の館にお上げやる
十万余騎ほどおやげやる。

それでだんこうめしつれて　いききのぼせをおかけやる

松原陣につかれける。　松原陣のこきおいに

うすき八丁召しとおす。

なぬき川までつかれける

耳川までうたれける。

豊後殿のお上に。髪もハラリと切りすてて

豊後が腹を召すならば　かけたる軍をひこうよ

やらやら見事やら見事　ひいてものよーけには

右のクズシは天正六年、南下する豊後の大友宗麟軍と、北上する島津軍の耳川(宮崎県木城町)での激突を歌ったもので、これは南九州の郷土史ファンなら誰でも知っている戦いで、軍談風にさまざまに語られたものである。島津軍の凱旋を祝う踊の中で歌われたと想像される。

しんご踊・さんご踊　このペアになったような不思議な名称の由来はよくわからない。『種子島民俗芸能集』に「昔、しんご・さんごという二人の兄弟があり、それぞれ踊を教えて歩いた」とか、「しんご・さんご・安城という三兄弟がいた」というような伝承が記されているが、これは起源伝承独特の説明であって事実とは見なされない。「しんご」「さんご」というのは歌詞から取ったタイトルであり、二つともレパートリーのうちの一曲だったと見ていい。つまり「しんご」という曲を中に持っているので踊全体を「しんご踊」、「さんご」を持っているので「さんご踊」と称して、自分の地区の大踊の特徴としたと思われる。

しんご踊と称するのは十地区ある。①現和近政(ちかまさ)、②現和浅川(あさごう)*、③納官平鍋(ひらなべ)、④野間中山(ななかやま)、⑤野間上方(うえほう)、⑥坂井本村(ほんむら)、⑦島間田尾、⑧上中河内(かわち)、⑨西之上西目、⑩西之下西目*。このうちレパートリーとして「しんご」を持っているのは八地区。*の二地区は「しんご」を持っていたはずだが、失っている。寺踊は各地で踊られる。「佐渡と越後」四地区、「浜ち通い」三地区があり、「北

之町」も二集落ある。つまりレパトリーには特徴がなく、やはり「しんご」を踊ったので「しんご踊」と呼ばれたのである。

一方「さんご踊」は七地区ある。①国上中目、②島間上方(うえほう)、③平山中之町(なかのちよう)、④荃永中之町(なかのちよう)、⑤荃永下之町(しものちよう)、⑥下中山神・里、⑦西之本村(ほんむら)。しかし「さんご」という曲(レパトリー)はない。「さんご…」という歌詞で始まる踊があったものの、忘却されたことだろう。寺踊が共通し、二地区に共通するレパトリーは「思いかぶり」「思いたちた」「こえびら」「とたか千代女」「佐渡と越後」「恋路して」「比翼連理」「我は池水」など。ただし「とたか千代女」は⑥下中山神・里では寺踊「これのお庭」の中の一節になっている。

げんだら踊(源太郎踊) げんだらは源太郎の訛った言い方である。沖繩のチョンダラーはもと京太郎だというから、転訛の仕方は同じである。げんだら踊を伝えるのは①上西戸ノ峯(はじのみね)他、②伊関の伊関、③伊関沖ヶ浜田、④安納本村、⑤現和上之町(かみのちよう)、⑥現和浅川(あさごう)、⑦安城下之町(しものちよう)、⑧住吉の住吉、⑨住吉の深川(ふかごう)、⑩納官坂元、⑪野間畠田、⑫野間の町山崎、⑬油久(ゆく)向町(むこうちよう)、⑭坂井本村、⑮坂井塩屋の十五地区である。ちなみにげんだら踊とは別に、④は安城踊の中の一曲(北之町)、⑥はしんご踊のうちの二曲、⑭はしんご踊のうちの五曲をも踊っている。

げんだら踊のレパトリーは次の七曲で固定している。①長者殿、②山口下り(あれこそ)、③音に聞く、④土佐から船(十七八の)、⑤近江の国、⑥めでし(心づくし)、⑦上は山(うぐいす)。タイトルはいずれも歌い出しから取った。それぞれ複数の小歌から成り、④⑥⑦はどれを頭の節にもってくるかでタイトルに変化がある。②「山口下り」は「あれこそこれの山口下りのげんだらよ…」と歌われるので「あれこそ」とか「山口踊」とも呼ばれ、全体の名称「げんだら」もこれから取られている。そしてげんだら踊の七曲のレパトリーのうち⑤の「近江の国」だけは野間上方のさんご踊でも歌われるが、他の地区ではげんだら踊と共通するレパトリーは見当たらない。

げんだら踊の特徴は、踊の形態は安城踊・しんご踊・さんご踊と基本的には同じだが、レパトリーが固定していること、必ず「長者殿」で出場すること、

カネと小太鼓を中に大太鼓が取り囲み、さらのその外を婦人の輪が取り囲むという三重円になっていること、クズシがないこと、大踊ではなく中踊とされる集落もあること、などである。ただ三重円の外側が婦人であるというのは、増田中之町の大踊(安城踊)でも見られる。とはいえ大踊はだいたいに男子のみの踊であり、増田中之町は例外的だったのかもしれないが、今のところわからない。

げんだら踊を中踊として伝承する地区は右以外に九地区あり、すべて南種子町である。西之表市と中種子町では大踊として、南種子町では中踊りとして位置づけられているわけである。残された映像や伝承から想像すると大きな違いは、大踊としては大太鼓を腹に抱えて両側の皮を両手のバチで叩き、中踊としては大太鼓を左手に持つて振り回しながら右手のバチで叩くことにありそうだが、平山西之町では大踊と同様に大太鼓は腹に抱えている。

『種子島民俗芸能集』は、げんだら踊は西之表市住吉をルートとして島内各地に伝わったとする。住吉にて大踊として成立したが、南種子町ではすでに大踊が定着していたので、中踊としてやや簡略化して踊られたと思われる。

雷踊 かみなり踊という。これは中種子町野間竹屋野(たけやの)にのみ伝承される踊である。十一の小曲で構成される。『種子島民俗芸能集』によれば、元元元年(江戸中期)生まれの人物が鹿児島に遊学して作詞したという伝承があるというから、十八世紀の後半頃できたと思われる。ただし作詞といってもすべて創作ではなく、鹿児島各地で見られる奴踊の歌詞も含まれるところから、当時鹿児島で歌われていたものを寄せ集めて作ったようだ。入場のあと、カネと小太鼓(イレコ)を中にして大太鼓が囲み、その外を侍烏帽子を被つて白っぽい鎧を羽織つた踊子(丸に十の字の胸当て)が取り巻くという三重輪で踊る。勇壮さが特徴と地元はいうが、どこかユーモラスなところもあるようだ。

強張踊 「ごうちよう踊」は耳になじみの薄い言葉である。昭和四十八年の『国分郷土誌』に「慶長年間、太守島津義久が国分富隈に移住するにあたって、家臣たちが義久を慰めるために屋形建設の道具(心棒など)を持って踊った。これを義久が「ごうちよう(強張)なこと」と喜んだところから強張踊と呼ばれるようになった」とある。その内容は武士踊(このあと説明)である。この

エピソードの真偽は別として、いろいろな物をもって鬼や大げさな甲冑武者に仮装した人物が大仰な振りをして武士踊や農民の太鼓踊に加わったのはありうることである。指宿市中川に現在も伝承される「ごちよう踊」は内容は農民の太鼓踊だが、鬼人が加わっているの（昔はもつといろいろな仮装が加わったのではないか）そう呼ばれたのであろう。

屋久島の原（はろう）にも「ごちよう踊」があったことが財部十助「下屋久村農村調査」（昭和六年）に載っているが、原にて現在踊られているのは、一度断絶したあと前記指宿市中川から導入した踊である。そのほか屋久島では宮本常一の昭和十五年の調査による『屋久島民俗誌』によると、小瀬田や平内でもおこなわれていた。指宿市中川と屋久島で「ごちよう踊」と呼ばれるのは「ごちよう踊」の転訛である。

種子島では西之表市の赤尾木城下のすぐ北の花里崎（けりざき）と宮原（みやばる）、南種子町下中真所で踊られたことが『種子島民俗芸能集』に記されている。花里崎と真所は踊られたとされるだけで伝承者はいないが、宮原の歌詞の書き付けを起こしたものが『種子島民俗芸能集』に掲載されている。これによると安城踊・しんご踊・さんご踊のレパートリーと共通する曲を数曲でひとつの庭とし、初庭・中庭・末庭の三つの庭にて、それぞれにクズシが付くという形である。大太鼓・カネ・イレコを中にし、外側を鎧武者や陣羽織姿が取り囲んだようだ。花里崎と宮原は土族が多く住み、彼らが踊ったので土族踊とされるが、次に述べる武士踊（さむらいおどり）とは別である。彼らは赤尾木城下に居住の嫡流土族とは別で、おそらく分家筋にあたる人々で、次掲の本来の武士踊には参加できなかった。しかし一般農民とは違うことを顕示してわざわざ農民の大踊とは違う踊（武士踊と農民の太鼓踊をミックスさせたような踊）を仕組んだのであろう。

真所については『種子島民俗芸能集』に「昔、羽生家の祖先が西之表に下男に行き覚えてきて集落民で踊ったことがある」とある。安城踊（五曲）とは別に強張踊も踊ったということであろう。明治になってからのことかもしれない。それにしても彼らの芸能を伝承する力の大きさに圧倒される。

武士踊 以上六種類の大踊を見てきたが、最後に関連する芸能として赤尾木士族の踊った土踊（さむらいおどり）について簡単に触れておく。藩内の各郷

在住の士族たちが、それぞれの郷の中心である麓の仮屋（役所）や大きな社寺に集まって武士踊が踊られた。新暦七月二十三日の夏祭に六十〜八十人ほどが集合し、陣羽織装束にて踊られる加世田土踊がその名残を今に伝えるほぼ唯一のものである。断片的には甕島手打や樋脇町塔之原でもおこなわれている。踊りといっても謡曲に似た歌に合わせて行進することが主体である。甕府では藩主の初入国などの祝賀行事として、城下土族を二組に分け、各二千人ずつとも言われる大規模なイベントが催されたが、費用がかかるため江戸後期には中断したもようである。赤尾木城下の武士踊もこの系列につながる踊である。

『種子島家譜』での初出記事は私の見落としがなければ、①宝永七年八月一日「久時の致仕、伊時の襲家を賀して土踊す」である。十八代当主久時が藩家老を辞し、嫡男伊時（このあと久基と改名）の当主就任祝賀であった。以下②元文元年十二月八日には二百四十二人という人数も書かれている。③延享二年四月十一日、④宝暦十年九月二十六日（二百九十四人）、⑤天明八年十二月十一日、⑥文政四年十二月一日はトラブルのために催行しなかったという記事、⑦安政二年一月十五日、という具合に江戸時代中期から後半にかけて武士踊があったことを確認することができる。

『種子島民俗芸能集』に、明治になって種子島家二十八代当主時望（西之表在住）の誕生祝いに旧士族たちが集まって踊ったことがあったらしく、それを記憶する人物からの聞き取りが掲載されている。その話をたどると明治三十五年頃、三十人ほどで踊ったようだ。土族は納曾・小牧・松島の三組に分かれて居住していたという。彼らが集まって一組となつて踊ったのであろう。その様子も簡単に記されているが、前述加世田土踊とよく似ている。

『種子島民俗芸能集』には『郷土研究』（昭和十年）に掲載の歌詞（十六首の小歌謡）が転載されている。鹿児島城下にておこなわれた土踊を赤尾木城下に取り入れたのである。右の『種子島家譜』記事に初出の宝永七年の前、すなわち元禄以前に種子島赤尾木城下に持ち込まれたと見ていいだろう。

右の⑥の記事は面白いので内容を紹介しておこう。文政四年の極月初日（十二月一日）には城下をあげて当主に対する挨拶があったらしい。『鹿児島民俗芸能集』によると城下三町（野首・納曾・松島）に住む赤尾木士族は三組土族と呼ばれたという。彼ら（若い士族）は身分の違う町人の歌舞伎などと同じ場所演ずるのは承服できないとして、上役の説得を拒否して踊らなかつた

いうのである。

④は二十一当主久芳の嫡子誕生を賀する土踊の催行の記事だが、踊子の位置について不満が出た。翌宝暦十一年八月五日の記事に、「旧来小頭（こがしら）は内に在り、平士（ひらざむらい）は外に在り、然るに三人、内外の別あるを難じ」組頭に対して文句を言ったようだ。内と外の輪があつたことを推測できるが、三人は小頭の身分だったのに平士の位置（外輪）にまわされたのである。人数調整のためにありうるのだが、抗議した。これを「不敬あり」として三人を処罰し、五十五日間の「逼塞」の罰を与えたという。一年近くしてから処罰が決まったのだからのんびりしたものだが、議論百出したのかもしれない。踊子の位置によって土族内でも身分の違いが強く意識されるのだから、農民の踊を土族が踊るといふことも、その逆もまづなかつたのである。

(七) 中踊と小踊

『種子島民俗芸能集』に、以上に述べた大踊以外の、昭和三十八年当時に確認された曲名（レパートリー）一覧が掲載されている。すべてを数えると八十四ある。願成就祭への奉納ではない踊（盆踊・お田植舞など）も含んだ数である。数曲で一曲としたものもある。

そこで少し乱暴だが、同じような曲は一曲とする。「やーとせー」ではどこもだいたい同じ曲調と踊をもつが、地区ごとに歌詞が違う。といつても同じような口説歌である。これをひとからげに一曲とする。ナギナタ踊も敵討ちの物語を歌った口説歌で、地区によつて内容が違うが、踊はだいたい同じなので一曲とする。そういう風にしてカウントしなすと、およそ六十曲ほどになる。断絶したものも少なくない。これらは中踊と小踊に分けられたようだが、現在は区別がつかないので、以下いっしょに扱う。

歌詞や録音や録画が残っているのはその中のごく一部である。したがつて全体を見通すことはできないが、中踊・小踊全体を通していくつか注目すべき点を取りあげてみよう。

①大踊としても中踊としても踊られるものがある。典型はげんだら踊で、前述したように西之表市と中種子町では大踊、南種子町では中踊として踊られる。芸能はだいたい他所のものを取り入れることで伝播していくものだが、取り入れる時にいくらかの変更がなされる場合もあつた。その好例がこれである。

う。大踊とするか中踊とするかで、踊に多少のアレンジがなされるのである。南種子町各集落はすでに大踊があつたので、少し編曲して中踊として踊つたと思われる。

②「げんごばあ」も大踊・中踊の両方がある。タイトルのもとには「げんごばあ、どこへ行く、薩摩の山と行く…」という歌詞の冒頭である。原典は西鶴の『好色五人女』（貞享三年）に登場する娘おまんと薩摩の源五兵衛の恋愛を描いた物語で、いささかえげつない表現もある。近松門左衛門によつて『薩摩歌』という浄瑠璃に脚色されて宝永年間にヒットし、それが俗謡となつて各地で歌われた。中種子町野間上方ではこの歌詞が大踊の中で歌われる。

南種子町荃永上里（かみざと）や平山西之町では中踊として、ジイとバアや道化が出てきて意味不明のセリフでやりとりをし、いろいろな面（ヒョットコなど）をつけた踊り子が加わつて踊りはやすというもの。その中で「げんごばあ」の歌詞が歌われる。この狂言風のやりとりはどこからどういう発想で持ち込まれたのだろう。芸能史を考える上ではこちらの方が重要である。というのは踊り子に混じつてシンブチというものが登場するからである。

シンブチが何であるかについては地元では完全に忘れられているが、新発意（しんぼち）である。シンボチは僧形の芸能伝播者とされる。横山盆踊にでるチヨウはもと新発意ではないかということも横山盆踊のところで述べた。シンボチは南種子町下中真所にもある。南種子町発行の国記録選択無形文化財調査報告書『種子島宝満神社のお田植祭』の下野敏見執筆「昭和期のお田植祭」に、真所八幡神社を囲む七つの峯のひとつに新発意森があつたとする。シンボチが管轄する森、あるいはシンボチに利用権が与えられていた森だったのでないか。シンボチが確かにいたことを物語る。忘れられた種子島芸能史の断面をわずかに垣間見せてくれる言葉である。

③全島に広く分布するもの、曲によつてある地域に偏在しているものがある。後者は西之表市の東西海岸集落にあるもの、中種子町各地に散在しているもの、南種子町の西海岸にあるものなどに分けられる。全島に分布するものはおよそ江戸時代から思つていいだろう。西之表市の東西海岸部と南種子町西海岸部には本土や屋久島および奄美大島との交流によつてもたらされたものはいくつも見られる。

④江戸時代からのもの、明治以降の新しいものとが混在している。簡単には

区別できないが、棒踊なども含め明治以後に伝わったものは少なくない。

⑤琉球系の芸能がある。南方の明るく陽気な感じが好まれたのであろう。代表的なのは「ちくてん」である。西之表市国上湊、南種子町平山広田、同町荳永上里にある。広田では、琉球の漁業者が季節に必ず種子島近海にやってきて漁をし、取れた魚を広田やその他に上陸して売り歩いたという。沖縄では力ネにならなかつたからという。その漁船が、ある時破損して広田の浜にて修理をすることになった。それを広田の人々が手伝ったので、そのお札に教えてくれた踊だという。江戸時代の前半期頃の話という。

「よんしー踊」は西之表市現和庄司浦に伝承される典型的な琉球系芸能である。タイトルはヨンシーという囃子詞から来ているが、沖縄では「国頭（クンジャン）サバクイ」と呼ばれる木遣りを模した狂言風芸能である。サバクイは「捌くり（さばくり）」の沖縄風変形で、種子島でも「さばくる」は普通に使われる言葉である。与勝半島の七月エイサーの中で余興芸能としても上演される。庄司浦は古くから東海岸の交易港として知られた場所で、沖縄との交流は確かにあつたところである。現在も現和武部の風本神社の願成就祭で踊られている。

「ちくてん」も「よんしー踊」もいくつかの小歌踊が組になった踊だが、大和風歌謡と琉球系とが混じっている。琉球系歌謡の特徴は詞形が八八八六になつてゐることである。「ひやるがやつさ」「あわゆれ」「琉球人踊」などがあるし、タイトルだけでは判断できないものもある。

「のぼり口説」または「くだり口説」は琉球と鹿児島との間の船旅を七五調連続で叙景風に歌うもので、ルートは宮崎県沿岸部から鹿児島県の大隅薩摩沿岸部に点々と分布するよいこの節である。よいこの節は日南市飴肥では泰平踊と呼ばれる盆踊歌としてリファインされて歌われている。大和と琉球の間にて、ダイナミックに歌謡が往来したことを物語るものとしても注目されている。「のぼり口説」は鹿児島県本土の芸能の中にも取り込まれている。明治になつて全国に流行した「琉球節」も「のぼり口説」をルートとして、歌謡曲としてアレンジされたものである。

島間仲之町の「かじようがね」は上方（うえほう）神社にて踊られた映像を見ると、ガクの編成がほかの中踊・小踊とはまったく違い、ジウタイ（地謡）形式である。婦人十人ほどが華麗な着物に色布で頬被り（顔は出す）をし、笠

を持つて一列に並ぶ。その脇にゴザを敷き、女子の歌い手と大太鼓と小鼓が座る。小鼓は謡曲に登場するあの小鼓である（小太鼓でないことに注意）。してみると大太鼓も謡曲の太鼓（太鼓を寝せて皮を両手のバチで上から叩く）のもりかもしれない。なお最後に西之表市庄司浦のヨンシー踊で歌われるのと同じ歌詞の一部が歌われる。いつ頃この優雅な踊が沖縄から伝えられたのかまったく不明だが、沖縄の古典舞踊では現在では小鼓はほとんど使われていない。『劇聖玉城朝薫 組踊上演二百五十年記念誌』（沖縄芸能協会編、沖縄タイムス刊、昭和四十四年）に「玉城朝薫は二十才で元服、その年の十二月に国王から小鼓一丁を拝領」という記事があるものの、現行の沖縄の宮廷舞踊にはない。脱落したと思うしかないが、八重山の舞踊には残っている。つまり首里になく、遠く離れた八重山と種子島に残っているわけである。

⑥棒踊は県本土各地にくまなくいつていいほど分布する踊で、明治以後は奄美にも伝わっている。芸能としてほとんど同一であることは、伝播してきてまだ日が浅いということである。ただ種子島のもは太鼓の伴奏が付き、鬼面が出現する。

⑦全島でもっともポピュラーな踊は前述棒踊と「ヤーとせー」である。「ヤーとせー」は七七七七を一節として、これを同じ旋律でくり返すもので、大分県から宮崎県では現在も盆踊の中でおおいに歌われ、中でも「団七口説（段七口説）」は盆踊から離れて春や秋の祭でも踊られている。姉妹が親の仇団七を討つ物語で、長い物語歌（口説歌）に合わせて踊るのが基本である。姉妹二人と仇一人の三人に仮装し、三人一組で斬り合いを舞踊化して踊るケースもある。種子島では周囲を手踊の美装の婦人が取り囲み、二重三重の輪になつて踊る優雅なやさしい輪踊である。たいして稽古する必要もなく、老若男女の全員参加型の踊として親しまれてきた。歌詞も何種類もある。種子島では「ヤーとせー」は盆踊の正式種目ではなく余興の踊である。

⑧なぎなた踊も仇討ちをテーマにした踊で、ここでも団七口説やおつや口説きなどが歌われる。仇役と仇を討つ役の二列で登場し、歌に合わせて斬り合うという筋だである。特に難しい踊ではないので、全島に分布する。

⑨弁慶踊は人気のあつた演目で、全島各地にあつた。牛若役と弁慶役が二列で出て、口上があつて斬り合う。屋久島のナギナタ踊はこれと同系である。

⑩西之表市住吉深川の面踊はカネと小太鼓が中に入り、そのまわりを大太鼓

が囲み、さらに外側を面（踊子）が囲む。カネ・小太鼓・大太鼓は大踊の衣装と同じなので、一見大踊と似たスタイルである。深川にはげんだら踊という大踊があるので、面踊は中踊として取り入れたのであろう。面は前述南種子のコミカルな「げんごばあ」と似ている。面は以前は泥で型を作り、その上から紙を貼った。踊の輪の外に道化役の猿面も出る。昭和四十六年県指定民俗文化財。

①西之表市古田の獅子舞は大正三年に大分県津久見市から椎茸栽培に来ていた人によってもたらされたという。二人立の獅子一頭、天狗一人、小猿（獅子と天狗にそれぞれ一人ずつ付く）の演技を、太鼓と笛で囃す。総勢二十人ほど。大正三年という新しい伝来だが、芸能はむしろいつの時代も新しいものが伝来するともいえる。最近では葦永宝満神社のお田植祭の余興として岡山県総社市の神楽が地元民によつて踊られているし、島内各地の子供たちは沖繩のエイサーを踊ることもある。それが郷土芸能として定着するかどうかは、その地域の事情によつて決まる。伝統的な踊が自分たちの感性に合わなくなったと思つた時、新しい芸能に替わっていくのであろう。

②願成就祭だけではなく八朔（旧暦八月一日）にも芸能が奉納された例をあげておこう。八朔に芸能を奉納する例は三島村にあるが、種子島は島間浦（今は浦という集落があるわけではない）の八朔浦祭りに各種の踊が出た。神社は宮松原の恵比寿神社。『種子島民俗芸能集』には「討ち入り」「神の祭り」「有馬山かごづくし」「ちごのひる寝」「たつた川」「宝お船」「升の下り（ますのさがり）」が載っている。島間はかつては漁業と海運の活動が盛んで、その周辺に広がる農村にも海に関わる人も住んでいた。多くの人々が浦祭りに参加し、地区ごとに踊を仕組んで奉納した。八朔は島間浦の願成就のようなものである。右の曲目とは別に同書は別グループとして「かじょうがね」「おかげ参り」「四国山・じゃみはげいこ」「恋仲は」などを踊ったとする。これらは恵比寿神社の八朔だけでなく、上方（うえほう）神社の願成就祭にも奉納されたものである。

③中踊・小踊の伴奏の楽器編成は以上のレパートリーに応じて多様だが、大枠で共通する形と注目すべき点について触れておこう。踊り子が列を作って入場する場合、大太鼓・小太鼓・カネがトップまたは最後に位置する。輪を描いて踊る。楽器はだいたい一名ずつで大踊と同じ衣装（上はカラフルな襦袢、股引に脚絆、白鉢巻）。これをガクとかガク拍子という。大太鼓を腹に抱えるの

は大踊だけで、中踊と小踊では腹に抱えることはない。左手に持つて右手のバチで叩く。大踊の大太鼓を使う場合もあるが、これでは重いので普通は少し小型になる。小太鼓とカネはあつたりなかつたりする。歌は踊子の中の音頭取り（大将といったりする）がいてリードするが、踊子全員がそのあとに付いて合唱する。ガクが掛け声をかけつつ、歌の途中でハヤシを入れつつ踊全体をリードする。歌は踊子が歌いつつ踊るのが原則だが、今は脇でマイクを持って歌う場合も少なくない。伝承継続にあたっては「歌う人がいない」という話をよく聞くので、歌の伝承は踊に比べて難しさがある。

④種子島にない民俗行事で重要なものに打植祭と神楽がある。打植祭は本土の旧二月の春祭りにて境内を田に見立てて模擬田植えをするものだが、これが種子島には見当たらない。かつてあつたが消失したという気配もない。伝来しなかつたと思われるが、何故なのかは種子島の民俗を考える上で重要である。もうひとつ本土にてあれほど盛んにおこなわれた神楽もない。あつたのがことごとく消失したという可能性もあるが、よくわからない。本土の神楽は原則として社家（士族）の伝承するものであつた。だから赤尾木では士族による神楽があつたかもしれないが、農民に関わらせなかつたために明治維新を機に消えたとも考えられる。種子島の神楽というのは秋祭りにいくつかの神社にて、社殿での祭典の直後に境内で奉納される踊のことだが、内容は西之の盆踊と同様のスタイルである。廃仏後、盆行事も盆踊も禁止された時、盆踊を神社への奉納踊に切り替えたものと想像される。覆面をしているところもある。

（松原）

第二節 周辺地域の関連芸能

種子島の盆踊も願成就踊も県内や周辺離島を含めた大きな文化圏の中に位置づけられるべきである。その上で全国との比較も可能になり、種子島の芸能の意義がより明確になる。下野敏見の「県本土の太鼓踊は種子島の大踊が伝播したもの」との見解は南九州の芸能の成立を考える時大きな示唆を与えるものだが、追跡や検証がなされないまま研究は進んでいない。本稿もその任に耐えるものではないが、全体を俯瞰することによって今後の研究にいくらかでも資することを望みつつ、以下、南九州を地区別にも太鼓踊系と盆踊系の芸能について概観する。種子島盆踊との関係については第五章にて改めて触れる。

(一) 南九州の太鼓踊系芸能(太鼓踊・武士踊・強張踊)

鹿児島県だけでなく、旧島津藩領域や熊本県南部と宮崎県南部も含めた南九州を俯瞰する。南九州の太鼓踊は胸前または腹に太鼓を抱え、大きな矢旗を背負い、激しくステップしながら隊形変化をくり返す豪快な踊というのが普通のイメージだが、実際はかなりのバリエーションがある。背中の矢旗が異様に発達したものの、矢旗を背負わないもの、太鼓を小脇に抱えたり左手に持ったりするもの、太鼓を叩くというより軽く触れるもの、皮の太鼓の替わりにバラを模擬太鼓とするもの、太鼓が異常なほどに大きいもの、隊形変化をするもの、隊形変化はせず円形のままのもの、踊の前後に鬼面その他が出現するもの、輪の中に女装や異装の小太鼓・カネが登場するもの、模擬刀を差すもの、派手な笠を被るものなど、さまざまなタイプがある。どれを強調するかで多くの変形が生まれている。歌はどこも消失傾向にあるが、記録されたものを見る限り、各地で似たような歌(類歌)が歌われ、中世末期に遡れると思えるような小歌も、はつきりと近世の流行歌謡と見られるものもある。

こういふさまざまな太鼓踊系の分類の試みは下野敏見の諸著作や、所崎平氏の「県内の太鼓踊の分類」『鹿児島民俗』一二二号などで試みられているが、ひとつの基準で分類すると別系統と思われるものが同系になるなどして成功していない。それだけ多様である。この多様性はいつたいどこから生じたのかを考へることも、南九州の太鼓踊系を見る場合の重要な視点である。

ひとつ云えることは、似たような踊が固まって分布していることである。た

とえば鹿児島湾奥の始良地方には、小太鼓が登場せず、矢旗を背負った大太鼓が陣笠を被ったカネ数人を囲み、全体をホタフリが先導するという太鼓踊がある。現在は加治木や蒲生にて踊られているが、国分や溝辺方面、そして鹿児島市付近まであったようだ。しかし南薩や北薩や球磨や日向、そして種子島には一見してわかる別系統の太鼓踊がある。こうした現象を説明するためには、ひとつの太鼓踊がある行政的な領域を単位として広がったとみるべきかもしれない。つまり普及に当たって、それぞれを管轄する役所による奨励(ほとんどの命令のようなものだろう)があったと思わざるをえないのである。

本土の太鼓踊は基本的に農村の青年男子が踊り、在踊とか百姓踊ともいわれた。とはいえ農民なら誰でも踊れるわけではなく、多くの場合は門(かど)ごとにカネ・小太鼓(これらを役者という場合あり)の担当が決まっていたらしい。役を踊ることは一種のステータスでもあり、担当の家(たとえば一番ガネは乙名家が担当するなど)が世襲のようにして定まっていたところもあった。

一方、士族は武士踊を踊った。江戸期の資料には土踊(土躍)という文字が見える。「さむらいおどり」と読んだようだ。鹿児島城下をはじめ、各郷にて麓を中心に郷内の士族が集合し、美装の陣羽織に身を包み、勢揃いしてデモンストレーション風の行軍をするという感じの踊だったと思われる。加世田の竹田神社夏祭に毎年奉納される加世田土踊を想像すればいいであろう。子供が踊る稚児踊と青年以上が踊る二才踊(現在は十五才未満も混じっている)からなる。謡曲風の歌詞が歌われる。

加世田以外には現在は甕島の里および手打と樋脇町塔之原の三ヶ所どころうじておこなわれているにすぎないが、藩内の郷ではどこでも踊っていたことが郷土誌などの記載でわかっている。鹿児島城下では上方限と下方限にわかれ、それぞれ二千人ほどの集団が行進して鹿児島城御楼門前広場にて演舞したというから、相当に大規模なイベントだったことが知れる。西之表の赤尾木の士族が踊った武士踊はこれをモデルとしたものである。

農村には麓に居住する士族の二男・三男も分家となつて住んでいた。少々の土地を与えられ、開墾するなどして自活を余儀なくされた彼らは実態は農民であり、全員が郷内の士族による武士踊に参加することを許されたわけではなく、といって彼らは農民の太鼓踊に加わるわけにもいかず、鎮守社の秋祭に踊を奉納しようにも踊がない。そこで彼らはバラや箕を張り合わせて模擬の太鼓

を作り、叩けば「バタツ、バタツ」と音を立てるいささかユーモラスな太鼓踊を作りあげた。バラデコ（バラ太鼓）などと呼ばれるのがそれである。箕をひとつだけ腹に抱くものもある。のちにはバラの代わりに実際に皮を張った太鼓を製作して使う場合もあった。これらが場所によっては武士踊と呼ばれることがあるのは今述べた事情のためである。これが地元にて武士踊と呼ばれたとしても、士族の踊る文字通り本来の武士踊と混同してはならない。

こうして江戸時代、農民は太鼓踊、士族は武士踊、土族の農村にすむ二男家・三男家はバラ太鼓踊（農民の太鼓踊の変形）などを踊った。一括してこれらを太鼓踊系と呼ぶことができる。これら太鼓踊系の原型は一般的にいわれているように念仏踊と考えていいだろうが、もとはどのような姿（云態）だったのか。いつ頃から太鼓踊・武士踊に分化し成長したのか。それともみずから発展してそうなったのではなく、できあがった形が他所から導入されて普及したのか。本県の芸能史研究はこれらに解答を与えていない。

ところで強張踊と呼ばれる太鼓踊系が何ヶ所かにあったが、ほとんどは明治期に断絶したと思われる。『三国名勝図会』（天保十四年）に次のような記載がある。

当邑（曾於郡清水村）の伝記に云、文禄四年、貫明公鹿兒島より国分富之隈に御移城の時、修築ありしに、近郷の諸士是に役す。慶長元年、諸邑の士衆、其修築成就して、公の御移徒ありしを賀し奉り、公の前庭に於て舞躍を興行す。時に諸邑の士衆、美麗の装束にて舞躍をなせしに、独り清水の士衆のみは、甲冑を帯し、大棒を持ち、豪壯の物を負ひ、鐘・太鼓を鳴らし、軍中の形勢を以て舞躍をなす。公大きに歓悦し給いて、強張なる事哉と御賞美ありしかば、是より年々此舞躍を興行し、強張舞躍と名けて清覧に供えけり。其後当邑、及び国分・曾於郡・敷根・日当山の五ヶ郷、此強張舞躍を同じく興行すといへり。今に公の御年回忌には、当邑の士衆、官府に乞て、許を承け、此舞躍を興行せり。此説によれば、土俗に称する強張舞躍は清水邑より始めしにや。

清水（きよみず）村は今の国分小学校付近から北東方向の山間部に至る地域である。昭和二十九年に国分町と合併した。江戸時代は清水郷だった。文禄四年といえは文禄の役が始まって三年目である。その頃、豊臣政権は島津家十六

代当主義久を大隅国に移封し、弟の義弘に薩摩国を与えるという島津家分断政策を断行した。あらがうべくもなく、義久は不意ながら国分富隈に移り住むことになった。朝鮮にあつて苦戦を強いられている弟義弘に援軍を送るうにも財政は苦しい。そういう中で富隈（旧隼人町住吉）移住に際し、居館の修築祝をかねて清水郷の家臣たちが集まり、身近にあるもの（臼や杵や樽など）を担ぎ出し、カネ・太鼓に合わせて豪快な踊をしてみた。これを義久が「強張（ごうちょう）なり」とほめた。今の方言でいえば「ボツケなもんじや」というところであろう。義久没後は周辺の郷でも「強張踊」として踊られるようになったという。

ただしこれは単に力自慢として、あるいはボツケさ（大胆さ）を競ってアドリブでそのようなことをした、とのみ思つてはならない。結論からいえば除災祈願を目的とする大念仏の伝統が根底にあった。大念仏については説明をばぶくが、簡単にいうと念仏（この場合の念仏はほとんど呪文のようなもの）を唱える人々を中心にさまざまの芸能（踊だけではなく作り物も加わった）の参加する大集団によるデモンストレーションとひとまず思えばいい。鬼人や道化や仮装の人々による異形異類も加わった。つまり除災を祈願する祭礼は大念仏として催行された。右の場合はお家にふりかかる災難（島津家存亡の危機）を、武士踊に仮託して力持ちの風を演じて振り払おうとした。大念仏が念頭にあったから「強張な」ことをしたのである。強張さは農民の太鼓踊でも、鬼の出現などとして表現された。その名残は現在の太鼓踊の中にもいくつかは指摘することができる。

江戸の講釈師伊東凌舎なる人物が、藩主斉興に従つて天保六年から七年にかけて鹿兒島を訪れた。その時の旅行記「鹿兒島ぶり」（『日本庶民生活史料集成九』所収）に「去方へ被呼候處、軍談最中に畳をあげ、是をかつぎ踊出し候。亦は竹籠をかぶり踊候。是は誠に酒興なれども、風義別格に候」とある。

講釈師は今でいう講談師である。軍談を語つてこの人はたいへん人気があつたのであろう。島津斉興の帰国に従侍して鹿兒島へ来た。鹿兒島は僻遠でもあつたために全国の中でもっともヴェールに包まれた国だったようだ。伊東凌舎には見る物聞く物すべてが珍しかった。右のエピソードは、あるところ（おそらく武家の家に招かれたのであろう）で講談をしたところ、興奮した聞き手の一人（あるいは複数だろうか）は座つていた畳を剥いで担ぎあげ、そこら辺

にあった竹籠をかついで踊り出したという。嘶しがクラマックスにさしかかると侍たちは感情移入して勇氣凜々、そういう行動に出たのである。富隈城修築の折の強張な踊とそっくりではないか。

度肝を抜かれたのは語っている伊東凌舎のほうだっただろう。天保のこの頃にも、ボツケな（強張な）気分を表現するのに、身近なものを担いだり竹籠を被って踊るといふ強張踊の伝統が士族の間に受け継がれていたのである。

強張踊という名前の太鼓踊は現在、指宿市中川で正月元旦におこなわれているが、これは農民の太鼓踊である。農民の異形異類の出る大念仏風の踊だったはずだが、今の踊はその強張さが消え、登場する鬼にわずかにその名残をとどめている。

種子島の赤尾木近くでも、江戸時代には強張踊がおこなわれていた。これを踊ったのは赤尾木城下の北側の集落に住む庶流の士族（みずから耕作に従事するもと士族）だった。彼らは自分たちが士族出身であるということだけをプライドにしつつ、農民と同じく田や畑を耕し、あえて士族の武士踊を模倣し、農民の踊る大踊と折衷したような強張踊を作り出したようだ。これを武士踊と云ってしまうと本来の武士踊との区別がつかなくなってしまうので、要注意である。

（二）八月踊と十五夜踊

全国の盆踊はヤグラの上に音頭取りと太鼓や三味線が載り、これを老若男女が囲んで輪を作って踊るといふイメージである。九州北部や大分県から宮崎県最南の串間市まで、九州東岸部にはこのような形の盆踊が濃密に分布している。そこで歌われるのは盆踊口説と呼ばれる七七調または七五調連続の詞章による、仇討ちや心中を歌う長大な物語である。音頭取りがこれを交代で歌い、踊り子は掛け声をかけつつ延々と踊り続ける。伴奏楽器としては太鼓だけのところも三味線その他がはいるところもある。同じ歌が長く続くと退屈なので、時々違った曲節も挿入されたり、寸劇のようなこともなされたりした。流行の小歌踊も取り入れられた。踊にも女踊や男踊（奴踊というところもある）があり、さまざまな日常生活の形態が当て振り風に取り入れられもした。踊り子たちは笠を被ったり異様な衣装に身を包んだり、あるいは仮装をして登場した。

これを殿様が観覧する場合、歌も踊も衣装も専門家に頼んでリファインし、

優雅な踊となった。北九州の直方の日若踊や日南の飢肥の泰平踊はそのようにして今の形になった。だが江戸時代の旧薩摩藩領には、大隅半島の肝属川流域を除いてその形の踊は残っていない。普及しなかったのか、踊られていたのに消滅したのか、現在の南九州の芸能研究はまだ明らかにしていない。

肝属川流域では旧八月の水神祭にて右とほぼ同じ形の踊が踊られ、水神踊とか八月踊と呼ばれている。現在も何ヶ所かでは簡略化されながら開催されている。見落としてならないのは八月踊の直前に、フラクとかカネ踊といわれる儀礼的な踊があることだ。つまり八月踊はその余興として踊られている。この地域のカネ踊は農民の太鼓踊の前身のようなものである（次の章で触れる）。

肝付町本町（ほんまち）の八月踊は現地では、江戸時代寛文十一年高山用水工事完成の新溝記念碑が建立されたとき奉納されたとする。『鹿児島県文化財調査報告書』八号（昭和三十六年）所収の重久十郎の報告によると、旧八月十八日に、戦前は上町・中町・下組・八坂の四組に分れてそれぞれで水神祭をし、フラク（カネ踊）が奉納されていた。戦後は合同で行なうようになった。標準編成はカネ二人・太鼓一人。歌は「五尺いよこの」などがある。この日は七夕の短冊風の五色の紙片をつなぎ合わせて旗にし、水神をはじめ家々の井戸や水道端にも立てた。そのあと本町公民館庭にてヤグラを組み、三味線・太鼓（能楽の太鼓風）・胡弓を伴奏として八月踊が踊られた。曲目としては①五尺、②ひとつとの、③おくめ口説、④思案橋、⑤万次郎口説、⑥おはら万女、⑦平佐口説、⑧船頭衆、などがあつた。小野重朗著『鹿児島県の民俗』には「女は古くからの踊衣装（麻や木綿の裾模様入りのもの）に頭巾で顔を包み、男は紋付羽織に編笠、娘たちは派手な晴れ着を着て、幾重にも輪を作って踊る」とある。現在は二年に一度、新暦九月後半の土曜か日曜におこなわれ、暗くなつてから約二時間ほど踊られている。

志布志市有明町蓬原（ふつはら）中野の水神祭は近年は新暦九月十七日におこなわれ、八月踊は幕末頃に導入されたと伝えられるが、それ以前にあったものが断絶し、再度導入されたとも考えられるものの、そのあたりはよくわからない。踊は①五尺、②恒吉口説、③南瓜市（かぼちやいち）、④唐人口説、⑤思案橋、⑥八百屋お七、⑦酒のんで、⑧船頭衆、⑨淀の川瀬、⑩数え歌、⑪祇園渡り、⑫段物（中心蔵）、⑬迫の長吉、⑭段物（山崎）、⑮田舎みやげ、など多くの曲を伝承していたが、ここ数年は途絶えている。三味線・太鼓（能楽の

太鼓風）・拍子木の伴奏が付く。婦人はユカタ、男はユカタに菅笠を被る。八月踊の前にフラクが行なわれるが、本来のフラク（カネ踊）ではなく、右の八月踊のうち①②⑤を踊った。現在は水神祭と八月踊は別日程だが、水神祭の日には色紙を貼り繋いで旗にしたチロリを水神に供えている。チロリを供えることは他のいくつかの集落でもまだ見ることが出来る。

肝属川河口は南東の山地によって太平洋のうねりから遮られる好位置であり、潮が満ちると相当奥まで遡行できた。河口に位置する波見浦は九州東岸を経て瀬戸内海や上方とを結ぶ交易の大きな拠点であった。上流の鹿屋との間を結んで物資や人事が交流したことを想定しないほうが無理というもの。とはいえ三味線や胡弓や拍子木などのお囃子による近世調の歌や踊を受け入れるためには、受け入れ側に経済的社会的なある程度の成熟が必要であろうから、高山郷の野町（江戸時代、郷内で商店を出すことが許可された地区）であった肝付町高山本町のような比較的豊かさをもつ地区にまず定着し、そこから次第に周辺がこれを模倣する形で広まったのであろう。前述の高山本町の八月踊の背景にはそうした事情があった。

肝属川河口および沿岸の利用が緒についた中世後半期（戦国時代）、まず入ってきたのは中世風の色合いを残す種子島盆踊と似たような歌と踊だったのでないか。肝付町高山本町の現在の八月踊は元禄以前、寛文十一年の用水路完成を機にはいつてきたとされるが、前述のレパトリーのすべてがその時にいっぺんに流入したわけではない。京大阪にて盆踊歌謡として七七や七五の連続する口説形式が歌われ、大ヒットするのは元禄の終わり頃なので、これが肝属川流域にもたらされたのは元禄のあとであろう。つまり同時に入ってきたのではなく、少しずつ入ってくる。今述べた口説形式の流入は元禄以後のはずである。という風に細かく見ると、寛文十一年以前にも何らかの踊が入っていた可能性はある。種子島風の盆踊もそのひとつだったのではないか。今のところこれを証拠だてるものはないが、可能性として述べておく。

京大阪にてヒットした盆踊口説が流入したあとも、波状的に入ってくる歌や踊は三味線や胡弓の伴奏を持ち、いかにもオシャレしていて、人々には魅力的に映っただろう。踊も優美さがあって楽しい。覆面も笠もファッショナブルになった。こうして古い中世風（種子島風）盆踊は、流行の波を受け入れながら近世調のレパトリーに入れ替わっていったと見ていいだろう。

文化文政期は近世文化の熟爛期で、歌舞音曲がそれまで以上に全国に流通する時代である。浄瑠璃や歌舞伎が口説や小歌調にアレンジされるのは江戸中期から見られるようだが、これがますます盛んになる。幕末になると芸子たちの担うお座敷歌がムラの祭礼などにも取り入れられるようになった。こうして長い藩政時代を通じて流行が積み重ねられていったと思われる。そして明治を迎え、さらに新しい流行が押し寄せる。

このように肝属川流域には多くの近世調の歌謡や踊が流入し、水神祭の余興（八月踊）として取り入れられたが、それ以外の南九州各地ではどうだったのだろうか。歌や踊の受け入れ窓口となる場所はいくつもあった。北薩西岸へは天草方面から中央の文化が押し寄せた。密貿易で知られる南薩の坊津は古くから物資と人事の交流の場だったし、鹿児島城下はもちろん、山川も市来湊も阿久根も志布志もしかりであっただろう。川内川もまた肝属川と同じく、物資と文化の流入の場であった。

川内川河口の久見崎の「想夫恋（そうふれん）」と呼ばれる盆踊は、戦後復活してからは新暦八月十六日に踊っている。婦人だけの踊で、お高祖頭巾で顔を覆い、男物の紋付き羽織を着、腰の後ろに脇差しをさした男装で踊る。踊は単純で、合掌したり、遠くを手招きするような手振りには朝鮮の役に出征する兵士を見送っているのだという。三味線と太鼓（能楽太鼓風）が付く。起源は文禄慶長の役まで遡るといえるが、現在の歌は完全に近世調である。古い盆踊が捨てられて入れ替わったのだろう。蛇足だが「想夫恋」という呼称は雅楽の曲名である。久見崎で踊られる現行曲は、今述べたように江戸時代の後半期を遡らないと思われるが、婦人が男性を慕う気持ちを表すとされる雅楽「想夫憐」を知っていた風流人（文化人）が付けたのであろう。

水神祭は肝属川流域では旧暦八月（地区によって日程はさまざま）におこなわれたが、全国的には水神祭は旧暦八月の十五夜とその前後に集中する。その余興として各地で十五夜踊が踊られた。旧坊津町の泊や鳥越では現在も娘や婦人によって踊られている。鳥越は輪踊で、踊には少しゴツゴツした古風な感じがある。現在は三味線も太鼓もつかないが、もとは付いた。近世調歌謡が歌われている。

旧暦八月十五夜前後に祭礼が催され、踊が出たことをはつきりと伝承する事例は宮崎県の中部以南に多い。『佐土原町史』に寛政二年八月、佐土原藩役所

に十数ヶ村から十五夜水神踊を願い出た記事が出ている。内容は白太鼓踊・小白太鼓踊・手たたき踊(手を打ち合わせる踊か)・座踊など。ちなみに座踊は舞台を作って踊るので贅沢だとの理由で禁止になっている。盛大な祭礼がおこなわれたことがわかる。

串間市市木の藤浦では小野重朗著『南日本の民俗神』によると「旧八月十五夜には若宮神社の境内で柱松をする。今はほとんどやらないが、白太鼓踊もこの晩にまず神社で踊るものだった」という。宮崎県の鉾脈社から出た『ふるさとまつり歳時記』には、この十五夜行事に児童が盛装をして「松の下笹踊り」を踊ったとある。柱松は鹿児島では旧七月の盆行事としておこなわれ、旧大根占町城元瀬戸山ではかつておこなわれ、三島村硫黄島では今でもなされている。笹踊りは今は児童が踊るようだが、前述の坊津の娘たちによる十五夜踊に似ている。

『鹿児島市史I』は『倭文麻環』(文化九年)から「八十年前(文化九年頃から八十年前)のこと。城下の少年十五夜踊は八月十五夜の日、白金鼓(カネのこと)を鳴して舞曲をなし、先鬼という者を前導とし、一郷中にて舞曲を興行す。是松齡公(義弘)の御状中に見えたる衆中踊の遺俗なるべし。しかれども、其一郷中の戯娯にて公の事にはあらざりしとぞ」という記載を引用している。各郷中の踊として先鬼の先導する十五夜踊があったことがわかる。

この文に続き「加治屋町郷の兵児共が十五夜踊を仕立てて南泉院で踊るといつて通りがかった時、横目兩人がきて、許可のない小踊をこの寺でおこなうのは不審だとがめた。この時、福島玄佐という茶湯坊主が先鬼だったが、この日は弁慶の服装であった。そこで一番目立つので、言葉をかけてとがめたところ、玄佐は何を咎めるかと背の七つ道具を振りまわして横目の面に突き当たった。その後、田毛御屋敷(田毛は武のこと)から、今日は珍しい十五夜踊を催した由、あすは信証院様御内覧ある旨通知があった。そこで翌十六日、踊をおこなったところ、御酒、饅頭などをたくさん下さった。これはこの以後私の踊はしてはならぬという御内意であったから、これ以後、上下二才中の十五夜踊はひとしと取りやめになった」という話が記されている。これ以後踊してはならぬというのは、士族の子弟として平民がするような踊は禁止という意味であるろうか。ついでながら茶坊主が先鬼をしていたというのは、踊をリードする役が新発意(坊主)だったことを伝える。ともかく鹿児島城下でも青年たち(こ

の場合には士族の子弟)がカネ太鼓を叩いて踊ることがあったことがわかる。旧暦八月は旧暦七月と同様の祭礼月だったようだ。

(三) 三島村

三島村には竹島一集落、硫黄島一集落、黒島二集落(大里と片泊)の四集落がある。全集落に盆踊も太鼓踊もある(あった)。竹島と硫黄島は、盆では手踊のみを踊り、太鼓踊は八朔(現在は新暦九月一日)に踊られる。黒島では大里は太鼓踊は途絶えているが、片泊では現在も盆踊として帰省者を参加させることのできるうじて太鼓踊を続けている。どこも人口減少が激しく、縮小か中断を余儀なくされている。まず盆踊から概観する。

盆踊 竹島の盆踊では男たち数人が列になって歌い手の歌に合わせて手踊をする。寺跡で踊ったあと新盆の家を踊ってまわる。太鼓もカネも付かない。本土風歌詞が三曲歌われる。

硫黄島の盆行事は柱松行事を中心とし、盆踊は浜にてかつては男女で、今は男だけが数列横隊になって手踊をする。踊り子の中の一人が太鼓を左手にもって振りまわしながら踊る。このあと初盆の家を踊ってまわる。本土系の小歌と奄美琉球系の歌詞とが混在している。昔は婦人だけの竹棒を持って踊る「コキリコ」と呼ばれる串い踊(これが家まわりをしたかどうかは不明)もあったようだが、断絶したままで伝承者はいない。竹島と硫黄島の太鼓踊についてはあとで触れる。

黒島大里の盆ではまず黒尾神社にて男だけで弓矢踊・ナギナタ踊を踊る。二列が向き合って動き、脇の歌い手(ジュウテ)が歌い、踊り子の先頭は女衣装に覆面を被って左手にカネを持ち、踊子の後ろ(法被に短パン)は左手に小太鼓を持ち、両者叩きながら列の間を飛びまわる。弓矢踊の歌詞は戦国末期の島津家の武勇を歌うもの、ナギナタ踊は恋の小歌踊である。弓矢踊の前にセリフ調の口上がある。やや狂言風のこの形は種子島・屋久島のナギナタ踊といく分似ているが、こちらのほうが古風である。

このあと初盆の家をまわって串い踊(手踊)をする。ここでは太鼓を伴奏に、踊子全員頬被りし、二列になる(庭が狭いので一列になる場合もある)。現在は「しんじつ」「お七」「鈴虫」を踊っている。歌詞は本土系の断片。頬被りは

種子島盆踊の覆面に通じていよう。以上の男子の踊とは別に婦人の踊も数曲（「あらいたわし」「なんぼ」「かわかみ」「まつばんだ」「君が代」など）あったが、完全に絶えた。それらは手踊・笠踊・扇踊だった。庄屋の家で踊ったことを記憶する村人はいる。初盆の家を踊ってまわつたらしい。

黒島のもうひとつの集落片泊では、片泊小学校にて夏祭として帰省客もまじえて盛大に盆行事をする。かつての場所は「堂の前」（現役場出張所）だった。現在はまず何ヶ所かで男数人がババナラシ（笠を持って踊る）をしてから校庭での太鼓踊となり、終わると婦人の笠踊（円形）。そのあと男四人は庄屋の家に行つて弔い踊をし、校庭に戻つて初盆の遺影を抱いた家族の前に、男子八人で弔い踊をして終了。かつては太鼓踊のあと仮面（ボール紙で作成）を被った男による短い踊があり、そのあと弔い踊となつたという。紙製仮面は大里の頬被り、種子島盆踊の覆面と同質と見ていいだろう。

熊本県五家荘の久連子の盆では、男子のみによる白太鼓踊が踊られるほかに、婦人のみの踊があった。大里と片泊の婦人の踊はそれと通底していよう。三島村四集落の中で、婦人のみの踊は、硫黄島と黒島大里ではかつてあったことを伝えるが、黒島片泊は最近もやっている。県本土の南薩の十五夜行事の中で婦人の踊があつたり、全国各地にちらほらと旧暦七月七日に七夕踊といつて娘たちの踊があつたことも繋がっているであろう。全国に散見される小町踊とも通じていよう。

八朔の太鼓踊とメン 八朔は全国各地でおこなわれる行事だが、三島村ではこの時（現在は新暦九月一日）、竹島と硫黄島にて太鼓踊が踊られる。竹島は聖（ひじり）神社、硫黄島は熊野神社前。聖神社という名称には注目したい。遊行の半僧、または漂泊の芸能民の存在が見え隠れするからである。竹島は人口減少のために中断したまま。硫黄島は継続中。どちらも本土系。特徴はメンが登場することである。竹島はタカメン、硫黄島はメンドンといい、太鼓踊のさなかに登場し、葉のついた木枝で見物人を襲う（叩いてまわる）。

黒島の大里の太鼓踊は今も断絶しているが、以前は盆と八朔に踊った。片泊では太鼓踊は前述したように盆のみで踊られる。大里の現在の八朔には盆と同じ弓矢踊とナギナタ踊と、八朔だけの相撲踊とメン踊が出る。メンは竹島や硫黄島と違い、各自が恐ろしい形相を工夫して作ったもので、踊にも決まった形

はない。竹島と硫黄島はメンは人々を襲うが、大里では歌を歌いながら踊る。古い歌詞ではなく、踊もアドリブ風の踊ともつかない踊だから、もとは踊るわけではなく、やはり人々を襲うために出現したのではないか。太鼓踊が断絶したあと、メンだけがメン踊として独立したのかもしれない。

要するに八朔に太鼓踊が踊られ、メンが出る。八朔とは何なのかという問題になる。盆行事の締めくくりだったのではないかという印象がある。メンの出現と盆行事の締めくくりとがどう関係しているのか、今後の追究課題である。

疱瘡踊 三島四集落を通じて、婦人による大規模な芸能である疱瘡踊が踊られていたことを付記しておこう。硫黄島と黒島では新暦九月、婦人のみによる疱瘡踊がおこなわれる（黒島は断絶）。本土のホゼ（秋祭）に相当する時期である。竹島では正月に開催されていたが人口減少のために中断中。疱瘡踊は南薩では正月か二月のお伊勢講に付随しておこなわれているので、竹島の冬期間催はそれとつながるものであろう。

（四）屋久島

屋久島の盆踊にはひとくりにできない多様なものがあり、種子島を見る上で重要である。江戸時代初期に屋久島は島津藩の直轄地に組み込まれるまで種子島の行政下にあつた。十五世紀後半、種子島が皆法華となるに及んで屋久島も法華宗の島となり、口永良部島を合わせた三島（さんとう）の寺院は密接なネットワークを結んだ。そういう中から戦国末期、安房（あんぼう）の本仏寺より日章（のちに泊如竹と名乗る）が登場し、京都本能寺で学んだあと儒学（朱子学）へ転じ、のち鹿兒島に戻つて島津家に仕え、琉球王家の顧問も勤めた。晩年は本仏寺へ戻り、平木の出荷など産業育成にもあたつた。

この人の命日の旧五月二十五日、安房の如竹神社の如竹祭にて現在も盆踊が奉納されている。雨の場合は本仏寺堂内にて踊る。昔は安房地区の盆踊としても踊つた。というより盆行事として踊るのが本来だつたと思われる。衣装は全員ユカタに袴と袴、白足袋（草履なし）、以前は裸足だつたらしい）、腰に刀一本を差す。覆面は被らない。近年は歌い手一人を中にして、踊り十人ほどは扇子を持ち、太鼓（直径三十センチほどの鋳留の小太鼓）とカネ（鹿兒島の太鼓踊と同様の縁のあるタライ型）が加わつて輪を作る。太鼓もカネも近年は一

人ずつ（複数も可）、左手にもって右手のバチで叩く。

歌詞は小歌十曲が伝わっており、これを現在も順番に歌う。謡曲のように歌うのに合わせ、右廻りにゆっくり動く。腕や手をなめらかに動かすのではなく、無骨に動かす。歌詞の中には「佐渡と越後」「我は備前の」「山雀（やまがら）」「七里お浜」「あわれ我が身」など種子島の大踊や本土の太鼓踊と同じものがある。如竹踊は屋久島でもっとも重要な芸能で、平成十八年に県指定になっている。

種子島の願成就祭が芸能を育んだ器であったように、屋久島では盆踊がその役割を果たした。各地区で複数の小さな踊が組になって踊られた。伝承を失った地区も少なくないが、判明している地区と踊の内容を簡単に示す。右の如竹踊を除く。

屋久島の如竹踊以外の盆踊

- (一) 宮之浦 道行・なぎなた踊・鎌踊・扇子踊・笠踊・四つ竹踊・銭重踊
- (二) 楠川 先廻し・四つ竹・松島・扇子踊・手踊・笹踊・伊勢音頭
- (三) 楠川（たぶかわ） 手踊・扇子踊・四つ竹・棒踊
- (四) 小瀬田 四つ竹踊・棒踊
- (五) 麦生（むぎお） なぎなた踊（ヒイヤアヨイ・シー）・マツハ・信実・金ちゃん・かれよし
- (六) 平内（ひらうち） 手踊・棒踊
- (七) 尾之間 なぎなた踊（ヒイヤアヨイ）・手踊（七福神）
- (八) 湯泊 笠踊・手踊

これらの現行盆踊から特徴となるものをあげると、

- ①盆踊として何でも取り入れたという印象がある。
- ②輪踊だけではなく、何列かの縦隊または横隊の踊も混じっている。
- ③何ヶ所かを踊ってまわる。
- ④全体として踊のフリがキビキビしている。宮崎県南部の盆踊や肝属川流域の八月踊の中に出てくるコミカルで活発な奴踊系に似ている。種子島のように柔らかく女性的な感じではない。
- ⑤平内の手踊、尾之間の手踊（七福神）、湯泊の手踊など、江戸後期流行と

思われる短い歌謡が旺盛に取り入れられている。楠川の「四つ竹」では「忠臣蔵」、麦生の「信実」では歌舞伎役者の市川団十郎が歌われている。肝属川流域八月踊で歌われる歌詞との関連も少なくない。平内の手踊には「サッコラ」という囃子詞が登場するが、これは甕島の盆踊（サッコラ踊）と通じていよう。

⑥本土系歌詞とともに琉球系もある。麦生の「かれよし」、湯泊の「笠踊」など。小瀬田の「棒踊」は本土のそれではなく、「上り口説」に合わせて子供の男女が竹棒を打ち合わせる。

⑦麦生と尾之間のなぎなた踊の「ヒイヤアヨイ」は囃子だが、歌詞は意味不明になっている。麦生のもうひとつ「シー」は弁慶と牛若丸の五条の橋の上での斬り合いである。どちらも踊るといふより狂言風の所作をする。種子島の弁慶踊と原形を同じくするかもしれない。盆踊の一環として演じられる狂言は口之島・中之島・悪石島にもあり、偶然に屋久島にあるわけではないと見るべきであろう。遠く加計呂麻島の諸鈍シバヤや与論十五夜踊とも通じていよう。

⑧楽器として如竹踊以外はカネが出てこず、小太鼓だけの伴奏ないしは無伴奏で歌われる。三味線もでてこない。

⑨踊り子は男子の年齢による分担が各地に見られるが、現在はくずれている。麦生では女子の踊る「伊予踊」というのもあったという。

以上、今に残る盆踊の歌詞や映像の記録などから特徴を述べたが、明治初期の盆行事禁止によつて全島からはいったん盆踊は消えたはずである。これが少しずつ復活するも、仏教的なもの排除したと思われる。麦生ではそのあと明治四十五年から大正四年まで盆踊中止（理由はよくわからず）、大正五年に男子のみで復活したと伝えられる。北西に位置する大きな集落である一湊（いっそう）や西海岸の永田や栗生（くりお）の盆踊がどこにも報告されていないのは、私の調査不足と見落としがあるかもしれないが、明治以後に復活されなかったであろう。

太鼓踊は原（はらう）にゴチヨウ踊があったことが昭和六年の財部十助「下屋久村農村調査」（旧屋久町教育委員会所蔵）に出ている。宮本常一『屋久島民俗誌』（昭和十五年一月二十八日～二月十三日の調査記録で、昭和四十九年に未だ社より刊行）には「小瀬田には子供の盆踊のほかにごちよう踊りが盆や氏神祭にあった。カネ、太鼓、踊り子、歌があわねばならないので、その練習が必要だが、そのよい師匠がいなくて四十年前に止んだという」「原、平内で

は棒踊、ごちよう踊も踊られた。ごちよう踊は手子踊ともいい、平内では棒踊は氏神祭りの時にも踊り、お田踊ともいった」とある。「手子踊」というのはテコ踊（太鼓踊）のことである。ゴチョウ踊は強張踊のことで、本土や種子島のものと同じ言い方だが、原では断絶後、指宿市中川のものを取り入れて「五調踊」という名称で再興している。

(五) 十島村

屋久島と奄美大島の間の七島（トカラ列島）を十島村（としまむら、通称ジツトウソン）と呼ぶのは、戦前は前述三島村も含めて文字通り拾島（小宝島は宝島に含める）だったからだが、戦後、口之島以南が米軍統治下に置かれたために三島村が分離し、十島村はそのままの村名を継承したことによる。孤絶した離島というイメージとは裏腹に、江戸時代は各島の代表者は郡司という地位を与えられ、七島衆として島津藩から重んじられた。『藩法集八鹿兒島藩上』一九七〇号文書にそのことが記されている。つまり相当な財力と文化をもち、大和と奄美沖繩をしきりに往来して海上の道の案内人となり、双方の文化が、各島には現代の我々が想像する以上に流入していた。実際、祝賀の座では祝歌の最初として謡曲の一端が歌われていた。たとえば中之島・平島・宝島では「高砂」、平島では「鶴亀」、臥蛇島では「老松」などである。こうした七島の人々にとつては、現代はむしろ生きにくい時代であろう。

臥蛇島は昭和四十五年に無人となった。諏訪之瀬島には他所からの入植者が多く、特に奄美からの移住者によって奄美の八月踊の一部が踊られることがあろうだが、伝統的な芸能はなく、北から口之島・中之島・平島・悪石島・宝島（小宝島を含む）の五島には芸能としては盆踊以外には、今述べた謡曲風の祝歌（船祝歌を含む）があるだけで、盆踊はさびれつつあるが、きわめて豊かな内容をもっている（もっていた）。

いずれの島も七月になると稽古を始め（単なる稽古ではなく盆踊実修の一環と見なされる）、旧暦七月十三日あたりから数日間踊った。現在は新暦だが、日にちごとに場所、曲目、踊り手、隊形を変え、祖霊供養と悪魔祓いの両面をもちつつ、盆行事全体にわたって外部の者にはその構造がきわめて複雑な印象を与える。また悪石島の盆の最終日（十六日午後）にはボゼという恐ろしい草装の仮面が出る。ユネスコ無形文化遺産になっているが、中之島と平島でも出

現し、口之島と小宝島では下野敏見著『カミとシャーマンと芸能』によると「恐ろしいものをボジェ」と表現するという。ボゼはもと七島全体に出現したと見ていいだろうし、その形態もさまざまだったのではないか。襲撃神なのかどうか、意匠においてかなりの違いを見せる硫黄島のメンドンや竹島のタカメンとどう繋がるのかなど、謎のままである。

このように七島の盆行事や盆踊催行の仕組みには外からは捉えることの難しさ、民俗文化としての奥行きがあつて興味が尽きないが、ここでは盆踊の芸能に絞つて特徴をあげてみよう。

各島の盆踊をまとめると、大きく小歌踊・仮装風の踊・狂言に分けられる。小歌踊は種子島とも共通するような中世風小歌謡に合わせて手踊ないし扇子を持つて踊るものや、もちろん近世調もあり、本土の太鼓踊や、種子島の大踊のクズシで歌われるのと似たような戦国後期の戦さにちなむ歌詞もある。仮装風踊は完全に何かに仮装するわけではないが、物を持つたり被つたりして、やや仮装して物真似風な仕草を取り入れて踊る。

狂言は文字通り一人か二人による寸劇で、口之島では『十島村誌』に「越後の国」「木崎原」「和田義盛」「佐野ノ源兵衛」「悪人」「ヤーヤーこれにハントツ」の七曲が伝承されていることが記されている。狂言は中之島と悪石島にもあつた。「越後の国」は狂言「佐渡狐」であろう。「木崎原」はえびの市木崎原（きさきばる）のことで、島津軍と伊東軍が激突し、以後伊東氏は衰退をたどることになる戦いの場である。鹿兒島では薩摩琵琶の曲目「木崎原合戦」で歌われる（語られる）。これをもとにして劇風の仕草をするものである。「和田義盛」はもと狂言「朝比奈」で、これは与論島の十五夜踊一番組の一曲でもある。「悪人」は原典は狂言「悪太郎」と思われるがよくわからない。「ヤーヤーこれにハントツ」はタイトルが忘れられて冒頭の文句だけが残ったものである。県本土では民間が伝承する能も狂言も見当たらないが、口之島にあるということも県本土でもおこなわれたことを物語っている。いわゆる能狂言の狂言は滑稽な劇だが、右の口之島・中之島・悪石島の狂言は必ずしも滑稽劇ではない。ということとは能狂言の狂言にも、本来は深刻な劇が混じっていたことを物語るのではないか。

純然たる芝居（地元民による）もおこなわれていたもようだ。村田熙の報告「悪石島の盆踊とボゼ」（『鹿兒島県文化財調査報告』第二十二集には悪石島で

おこなわれた芝居の台本三本（忠臣蔵七段目・同十段目・志賀ノ段七）も収録されている。「志賀ノ段七」はもとは人形浄瑠璃芝居として作られた「碁太平記白石噺」で、父親を殺された姉妹が武芸をみがいて仇を討つという物語り。長大な盆踊口説に歌い込まれて西日本に大流行した。中でも仇討ち場面が取り出されて劇風な踊としてアレンジされ、これも各地で好まれた。種子島ではナギナタ踊としても踊られている。右は芝居の台本として紹介されているが、劇の台本としては短いので、種子島と同様にナギナタ踊として上演されたものの台本ではないかと思われる。

盆踊の踊子は十島村はどこも男子のみだが、平島や悪石島では婦人も踊った形跡がある。二列で踊る場合や輪を描いて踊る場合もある。楽器は伴奏として小太鼓とカネはどこでも使われたはずだが、現在は中之島と悪石島に見えるだけで口之島・平島・宝島には登場しない。

口之島の盆の最終日の「ケイゲン踊」というのは『十島村誌』（平成七年）によると十六世紀中頃渡島してきて殺された垂水出身の慶元という修験僧の霊を慰撫するために踊るといふ。このことは中世末期、遊行の僧が七島を訪れ、こうした種類の人々が芸能をもたらしたことが考えられる。そもそも七島の人々はしきりに大和・琉球を往来していたので、彼ら自身が行く先々の流行を取り入れて帰島する機会は少なくなかったであろう。

太鼓踊に相当する踊は明瞭な形では十島村全体に見当たらないものの、中之島の盆踊の「垣まわり」の中で大太鼓とカネが登場するのは、鹿児島の大鼓踊の原型を思わせる。大きさと形は本土の大鼓踊で使われるものとほぼ同じで、太鼓を肩から左脇に吊り下げ、右手のバチで叩いている。種子島の大踊の大太鼓の叩き方でいえば「片バー」である。

種子島と関連あるものとしては、今述べた中之島の盆踊（垣まわり）で歌われる「うれしうえなの武蔵野の…」は西之表市横山の盆踊にもある。

十島村の豊かな盆行事と盆踊は七島の中で独自に複雑に増殖したというより、本土や種子島などでもおこなわれていたものが基本となつて、次から次へと流入してきたものが積み重ねられたと考えるべきであろう。そういう視点から本土や種子島を含めた盆行事全体を見直す必要がある。

（六）甕島

薩摩半島の西に浮かぶ甕列島は島としては上甕島・中甕島・下甕島の三島からなり、現在はすべて架橋で繋がっている。平成十六年、薩摩川内市と合併するまでは薩摩郡に属し、北から里村（上甕島北半）・上甕村（上甕島南半と中甕島）・鹿島村（下甕島北端）・下甕村（下甕島南大半）に分かれ、全体でひとつの文化圏をなしている。合併後はそれぞれが薩摩川内市の町（ちょう）になっている。

『離島生活の研究』所収の小野重朗の報告に「大正期までは神社や寺の境内での盆踊が盛んだった。手打（てうち）や中甕、里の麓部落では武者踊をし、在や浜の部落はサッコラとかヤンハなどの男子の手踊りをした」とある。武者踊というのは武士踊のことである。各種の踊が盆踊として踊られ、盆行事は甕列島では芸能の器となつていたことがわかるが、身分制の強い江戸時代に武者踊と農民の踊は同じ場所では踊られなかったと思われるが、具体的にはどういう風になされたのだろうか。

里町の里・上甕町の中甕・下甕町の手打には役所が設置され、それを中心に士族の居住地区があり、彼らによって右の武者踊（武士踊）が踊られていた。中甕は『上甕村郷土誌』によると大正八年に絶えている。里と手打では現在は大幅に簡略化された形で地区文化祭などで披露されている。農民の大鼓踊は下甕町手打本町（ほんまち）にあったが断絶した。盆踊としては現在は「サッコラ踊」とか「ヤンハ踊」という名の踊が各地で踊られている。

里町には農民の「サッコラ踊」がある。『里村郷土誌』によると、初盆の家を踊つてまわり、雨乞にも踊られた。タイトルはハヤシ詞から取っている。江戸時代の隣村（上甕村江石）の心中事件を歌った物語で、七七七七を連ねる「甚内口説」と呼ばれる口説歌（それほど長いわけではない）が歌われ、太鼓のみの伴奏で、男たちが輪になつて踊る。歌い手は輪とは別におり、踊り子はハヤシをかける。現在の踊を見るととてもキビキビしている。前掲『里村郷土誌』に「刃物で切ったような」動きをするとあるように、これが特徴なのである。肝属川流域の八月踊や宮崎県南部の盆踊の中に奴または奴踊と呼ばれるゴツゴツとした感じの動きをする男子踊り子が登場することがある。これと通底するであろう。

最初に入場の短い歌が歌われてから甚内口説となり、「サッコラ」と「オヤサ」の二つのハヤシが交互にかけられる。口説の途中で曲調がガラリと替わる

部分がある。そして口説が終わると、口説の内容とは無関係でユーモラスな歌二つが歌われる。二つ目は七五調になる。そして最後のハヤシ詞は「サツコラ」ではなく「サンカツ、サンカツ、サンカツ」となっている。いったい「サンカツ」はどこから来たハヤシ詞なのか。

元禄期に笠屋三勝と芦屋半七という二人の人物の心中事件が発生した。これに取材した「艶姿女舞衣(はさすがたおんなまいぎぬ)」という外題の人形浄瑠璃がヒットし、歌舞伎にもなった。これを素材にして盆踊口説が作られ、各地で人気があり、北九州でも歌われた。その一方では歌祭文(遊行の芸人である祭文語りがこれを歌って門付けして歩いた)としても流布した。むしろ後者の曲調に載せて「甚内口説」を替歌として歌い、元歌は失われたということであるうか。ハヤシ詞はそこから来ている。

上甕町では桑之浦に笠踊、瀬上(せがみ)に「ヤンハ踊」があったことが伝えられるが、内容はまったく伝わっていない。『上甕村郷土誌』に「瀬上に十二・十三歳の女子が踊る盆踊があったが、絶えてしまった」とある。旧暦七月七日の七夕に踊られたとすれば、少女の踊として本土の何ヶ所かにあった七夕踊と通底するであろう。三島村にも女子の盆踊があったことはすでに見た。

鹿島町蘭牟田(いむた)には「オニハ」と呼ばれる盆踊があった。『鹿島村郷土誌』に①出端(楽のみ)、②琉球節、③竹の柱節、④入端節、の四曲があり、いずれもデハとイリハに挟まれて二曲を踊る。三味線と太鼓の伴奏が付く。②琉球節は旋律・歌詞ともに完全に「上り口説」である。しかし三味線の手は沖繩古典の「上り口説」とは違っている。節(旋律)と歌詞だけを取り入れ、三味線の手は地元で付されたということであろう。蘭牟田は甕列島で最大の漁村であった。本土出身の漁業者が江戸時代から多く寄留していたところである。三味線を弾く芸子たちもいたであろう。③竹の柱節は七五七七五五のあと「オニハ」のハヤシ詞が入り、これがタイトルになっている。右以外に「伊勢音頭」と「早手はんや節」も踊られることがあったという。「早手はんや節」の録音を聞くと、普通に知られるハンヤ節とは異なり、急調でヤッサ節に似た感じがする。ハンヤ節もヤッサ節もオハラ節も同じという説を『日本民謡大観(九州篇南部)』の中で町田嘉章が唱えているが、それももうなげける。

下甕村では主要五集落(長浜・青瀬・瀬々野浦・片野浦・手打)にて、一見して同類と思われる踊がある。「ヤンハ」というハヤシ詞を持つところは「ヤ

ンハ踊」というが、そうではないところも内容はほぼ同じである。

長浜ではデハ踊という。①この本能寺、②ことしや豊年、③教え歌(忠臣蔵)。太鼓・カネ・三味線・拍子木の伴奏。青瀬はヤンハ踊という。①デハ(楽のみ)、②中踊、③イリハ。太鼓・三味線・拍子木の伴奏。瀬々野浦は「シユラドロー」という。太鼓の伴奏によつて六曲が歌われる。一曲目が「修羅道」で始まり、それがタイトルになった。修羅道をゆくのは「平家物語」に出てくる平教経のことで、人形浄瑠璃「義経千本桜」を歌った歌詞がこまで流布してきたのである。片野浦は手踊という。①デハ(楽のみ)、②中踊、③イリハ(教え歌)。太鼓と拍子木の伴奏。手打(てうち)はヤンハ踊という。①デハ(楽のみ)、②中踊、③入踊。三味線・太鼓・拍子木の伴奏で、男子四人一組で数組で踊る。太鼓は踊子の一人が持つ。中踊では短い小歌六曲が歌われる。一曲目冒頭は「おはんちようえもん」で始まる。浄瑠璃「桂川連理柵(かつらがわれんりのしがらみ)」の主人公「お半長右衛門」を歌った歌詞が流入したものである。五曲目は「俵藤太」を歌い、六曲目「いたこ出島」は幕末に大流行した「潮来節」から取られている。

以上見たように、甕島全体にわたつてとてもよく似た踊を持っている。デハで入場し、いくつか踊つて退場するという形がまず共通している。歌詞に人形浄瑠璃や歌舞伎芝居から取られた小歌がいくつも見られる。これは甕島に特有の状況なのではなく、同様の歌と踊が本土にてもおこなわれていたことを示すものと捉えるべきである。里村の「サツコラ踊」でも述べたが、どの踊もキビキビしているのは本土の奴踊系に通じる。

ヤンハというハヤシ詞をもつ場合は「ヤンハ踊」と地元で呼ばれるが、同じような踊なのにヤンハというハヤシ詞を持たない場合がある。瀬々野浦と片野浦は西海岸の隣り合った集落で、片野浦はこの踊をおそらく瀬々野浦から習っている。「しゅらどーのー」という冒頭句が同じだからである。片野浦はそれ以前に盆踊がなかったというわけではなく、おそらくあったのだが、中断などによつてうまく伝承されなかったのだろう。そこで瀬々野浦に習いに行った。江戸時代は芸能は他村の者にはむやみに教えないものだったというから、瀬々野浦は「ヤンハ」というハヤシ詞を教えなかったのではないか。

全体として江戸時代の後半から明治にかけて全国的にはやった歌詞が多数取り込まれている。里の口説は地元成立だが、曲調は流入のものを使っている。

本土の流行の波が何度も押し寄せ、歌謡と踊が入れ替わりながら甕島の盆踊文化を作り出していった。その一端を、今に残された歌と踊から類推することができる。

(七) 長島

長島は東(あずま)町と長島町に分かれていたが、平成十八年に合併し現在の長島町となった。藩政期は長島郷(全島)として、旧東町役場の位置に仮屋が置かれていた。

長島はお八日踊(おようかおどり)といって新暦八月八日(もと旧暦七月八日)に全島各地で寺社にて踊が奉納されてきた。『長島町郷土史』に「永禄八年野田城主島津忠兼が城川内の堂崎城主天草越前正を攻め滅ぼし、島津領としたが、甥の出水領主島津義虎に同年旧七月八日、出水城で謀殺された。その後長島全土に悪疫が流行したので、島民はこれを忠兼のたたりとしてその霊を慰めるために、若宮神社に忠兼の御霊を祀り、毎年旧七月八日に大祭をして踊を奉納することになった」とあり、『東町郷土史』にもこれとまったく同じ記載がある。一度お八日踊を中断したところ、疫病が流行したので再開したという伝承は、昭和五十八年頃、実際に現地の人々から聞くことができた。お八日踊というほかに「ご八日踊」とか七月踊、盆踊とも呼ぶ人もいる。盆踊と呼ぶのは、もともと盆期間中に祖霊供養ないしは御霊鎮めとして踊られていたことを思わせる。

現在は鷹巣(たかのす)、平尾、城川内(じょうかわち)、山門野(やまどの)の四つのブロックに分かれて所定の神社にて祭典のあと、所属の集落がそれぞれ踊を出し、そのあと各地区を踊ってまわる。地区ごとの説明をする紙幅がないので、主なる芸能を紹介する。

なんとといっても長島で重要なのは太鼓踊系のカネ踊と種子島踊(種子島、または種子島楽とも)である。カネ踊はたいたい①ウス太鼓、②コス太鼓、③パンズー、④山田楽、からなり、一度に全部が上演されることはなく、集落によってどれかが省略される。ウス太鼓は臼太鼓、コス太鼓は小臼太鼓であろうが、同じ太鼓を使う。パンズーの意味は不明(擬音からきているかもしれない)。カネと太鼓で構成され、太鼓は背中にも背負わない。全員笠を被る。二列縦隊で出て輪を作ったり縦列になったりする。それぞれ全員が歌いながら踊る。

カネも太鼓もともに十人程度ずつ。山田楽には笛が付く場合もある。旧暦六月(今は新暦七月)の祇園祭にても虫踊として、略式の衣装で踊る。

『長島町郷土史』にカネ踊の歌詞(地区不明だが旧長島町のいずれか)が記録されているが、その中に「千代女千代女と名は多けれど、おたの千代女が一のめめよし、それはなあ、おたの千代女がめめよし」という歌詞があり、種子島横山盆踊で歌われる千代女を思わせるが、関連はよくわからない。

種子島踊は県内の太鼓踊の中ではきわめて独特である。基本構成は太鼓・カネ・小太鼓で、外輪にシバを持つだけの踊り子も登場する。全体は入場すると二重輪を作って歌いながら踊る。長島・阿久根・高尾野・野田・出水を見た限りでは、特徴はミヤズと呼ばれる大太鼓が複数登場し、これを左脇に抱え右手のバチで飛び跳ねながら打つこと、先頭にミハチ(繞鉢と書き、銅製の小皿形を両手に持って打ち合わせるシンバル)が深い頭巾を被って独特の衣装で登場することである。似たような衣装を身につけたりリーダー役は、遠く福岡県八女市の東部の黒木町大淵の日向神社(「ひゅうがみしや」または「ひゅうがじんしや」という)の風流、星野村の風流はんや舞、矢部村の八女津媛(やめつひめ)神社浮立にも登場する。結論からいえば、ミハチを担当する人物は新発意だったのではないか。

種子島踊という呼び方は下野敏見説では種子島の大踊がもたらされたからだという。『東町郷土史』はひとつの説として「享保頃、出水地頭として約三十年間出水にいて五万石溝の構築をした種子島領主、種子島弾正伊時の徳望を記念するためにこの踊を作った」という話を紹介しているが、種子島の大踊とどうつながるのかについての言及はない。種子島弾正伊時というのは十九代種子島家当主久基のことだが、享保年間に出水地頭を務めたことについては確認できていない。種子島踊では確かに種子島大踊で歌われる「堺北之町」が歌われているが、種子島伝来説にはさらなる検証が必要である。

種子島踊は種子島とか種子島楽(山田楽というところもある)ともいわれ、宮崎県のえびの市・小林市、本県の出水市から阿久根市にかけて、さらに大口・菱刈・宮之城・鶴田・祁答院・川内といった北薩全域にも認められ、始良町大山でも踊られていた。これらはほぼ同じ踊だったであろうが、いずれも断絶しているのが検証のしようがない。

以上のカネ踊と種子島踊は太鼓踊系だが、これ以外には盆には棒踊・狂言踊

(鳥刺踊など)・手踊・馬踊・行列踊・奴踊が上演されたという。棒踊以外には三味線・太鼓の伴奏が付いた。狂言踊はいわゆる中世の狂言ではなく、近世後期の歌舞伎芝居風である。神楽も上演されたという記述は東町教育委員会編による『長島の歴史と物語』に記されているが、内容はよくわからない。

また同書には長島第一の神社だった山門野の諏訪神社には旧七月二十八日に太鼓踊や棒踊が奉納されたとある。旧七月二十八日は鹿児島城下の諏訪祭礼日であり、各地の諏訪神社で同日に祭礼がおこなわれたことの一端を示している。現在は新暦八月八日のお八日踊に統一されている。

いずれの芸能もそれぞれの集落がどこからか原型を習ってきて、工夫を凝らして組んだものである。踊を組み立てることができない集落は、出水や阿久根から半ばプロの一座を呼んで踊を出すケースも近年はある。

昔は諸浦島・伊唐島からも鷹巣のお八日踊に踊を出したという。獅子島では主たる三集落(御所浦・片側・幣串)にてそれぞれお八日踊の前後の日程で、盆踊として棒踊や狂言などをした。

(松原)

第五章 考察

第一節 種子島盆踊の成立と展開

種子島の盆踊はいつ頃どのようにして発生し、どのような過程を経て現在の形に至ったのか、南九州の諸芸能の中でどのように位置づけられるのか、などについて概括的に考えてみたい。とはいえ種子島盆踊の明治直前の形すらよくわかっていない。そういう制約を承知の上で、まずは周辺の芸能と比較しつつ推論してみることにする。県内全域の幕末または明治以降の芸能のおよその状況については前章までに概要を述べた。これらとて江戸時代のどのあたりまで遡れるのか、確定は難しいところだが、本章では思い切って中世の踊念仏について概観し、南九州の芸能と種子島の盆踊とをそれとの関連の中に置くことによつて、種子島盆踊成立の背景を想定してみたい。

踊念仏または念仏踊という言葉は日本の芸能史を説明する中で普通に使われるが、厳密な区別はなく、ほぼ似たようなものと考えておく。どちらかといえば前者は念仏に比重を置き、後者は踊に比重を置いて使われているようだが、ここで念仏踊で統一する。

(一) 中世南九州の念仏踊

中世の南九州の芸能の状況について一般論的なことを述べることから始めたい。周知のように鎌倉時代の後半から南北朝を経て十五世紀にかけて、融通念仏の普及と一遍智真(一二三九〜一二八九)や一向俊聖(一遍と同世代)によつて始められた念仏踊の爆発的流行があった。

一遍上人は弘安二年(一二七九)秋に信濃にて念仏踊を始めたこととされる。『国史大辞典』によると、文永十一年から念仏を勧めつつ霊山を訪ね歩き、建治二年(一二七六)か三年には大隅正八幡宮に参籠して啓示を受け、同胞とともに再び行脚の旅に出て弘安二年の秋に信濃に至つて初めて念仏踊実修となるのだが、それまでのあしかけ三年ほどにも及ぶ間に踊念仏はおこなわれなかったのだろうか。『一遍聖絵』に書かれた信濃での初めての念仏踊(註1)を仮に正式のそれとすれば、予備的な形のそれがなされたのではないか。大隅正八幡

宮参籠のあと、同所あるいは周辺にて念仏踊の前身のようなものは試みられなかったのだろうか。いずれにしても鹿児島は念仏踊との縁は浅からぬものがあるろう。

島津氏三代当主久経は一遍の門派となり、弘安七年(久経の死去の年)に鹿児島に浄光明寺を再建(創建年代は不明)して時衆の三州での拠点とした(註2)。以後島津氏は時衆の大旦那となり、川添昭二(註3)によると応永期(十五世紀初)以後、遊行上人(時衆の最高指導者)の廻国は島津氏によつて厚く外護された。

遊行上人の島津国への廻国がどういうものであったかを示す事例がある。時代は下るが、圭室文雄「江戸時代の遊行上人」(註4)によると、本能寺の変の年(天正十年)十二月より、遊行上人とその一行三〜四百人が島津領内に留まりたいという要望が時衆側から寄せられ、島津氏十六代当主義久はこれを受け入れ、宮崎城主上井覚兼に指示して都於郡(西都市)の広大寺(のちの光台寺で、当時は川原田道場)と光照寺に滞留させた。その期間は二・三年にも及んだという。費用は基本的に島津家側が負担する。この間、彼らは鹿児島城下を含む南九州各地を行脚するが、馬や輿を出すなど移動の費用も島津家が負担し、一行は各地で盛大な接待を受けた。

『上井覚兼日記』(註5)天正十二年八月二十二日には、「柏原有閑殿に頼んで、(都於郡に滞在中)遊行上人に「無沙汰しています」と伝え、同時に米四十俵を差し入れた。鹿児島城下浄光明寺の世話役の浄光明寺西嶽に対しては、京樽(京都の酒)一樽を差し入れた。どちらもたいへん喜んだとのこと」とある。宮崎城近くの都於郡に滞在中の遊行上人に対してだけでなく、遠く鹿児島城下の時衆寺院浄光明寺にも京樽を送っている。そして二十三日には、都於郡の光照寺と川原田道場(広大寺、のちに光台寺)を藤沢の時衆本山清浄光寺の末寺とすることが正式に決まったことが記されている。時衆本山の藤沢側としても島津家の保護が表面的でないことを確信しての措置であろう。このあと時衆側はしばしば島津家のために益の施餓鬼などを行っている。

このように見てくると、南九州全域にわたつて時衆が弘通し、念仏踊が普及しないはずがないと思えてくる。事実普及したであろう。ただしこの場合の念仏踊は、島津家が保護したことからも想像されるように、かつて『天狗草紙』や『野守鏡』が批判したような狂騒的で体制破壊的なエネルギーの噴出という

形ではなかったであろう。カネや小太鼓の奏樂と、これに合わせて和讃を唱和し、幾分ハメをはずることがあったとしても、十分コントロールされていたと思われる。でなければ島津家が保護することはないであろう。

一遍とその同行者たちが指導した念仏踊は、遊行の先方で日時と場所を決めてイベントとして実施され、参加の人々に賦算（札くぼり）をした（註6）。旧郡山町に賦合（つもりあい）という地名があるのはその名残であろう。念仏踊を弘めることが目的であるから、彼らは参加した人々に自分のムラに戻って実修することの功德を教えたであろう。時衆の行脚には相当数の信者が追従しており（前述したように西都滞在では二百人から三百人という）、彼らはムラに向いて念仏踊のカネや太鼓の奏打・詠唱（歌い方）・踊り方を具体的に指導したのではないか。それが新発意（シンボチ）などと呼ばれる踊のリーダー役として芸能の中に残る場合もあったのではないか。庇護者（島津家）の要望を付度して、除災祈願だけでなく戦死者の供養や、戦勝祈念や戦勝感謝なども率先してしたのではないか。おそらく当時は多くの兵士が農村からかり出されたはずである。念仏を唱え、和讃を歌い、少々の踊をする行為はこうして盆行事、ないしは災厄除けの祈祷として南九州の村々に定着していったのではないか。

（二）佐多の念仏

念仏（ネブチまたはネンブチと発音）と呼ばれる盆行事が大隅半島南端の旧佐多町（現在は南大隅町に含まれる）の数集落にあった。念仏とはいっても内容は和讃で、地元にはその詞章を書き留めたメモが残っていた。終戦後もしばらくは実修していた。明治初期の廃仏毀釈によって変化は受けたはずだが、僻遠の地ということもあって廃止にまでは至らなかったのか、いったん廃止になったあと復活したのか、など何も伝承がない。このあと述べる詞章以外にも、廃仏の影響で捨てられたり、長い間唱えないうために忘れられたりした和讃もあったと思われる。

郡（こおり）の岩下では二十人ぐらいの男たち（普段着）が旧七月十四日の夕方、いったん部落長の家に集まってから集団で各戸をまわり、カネ（カネだけだったのか、太鼓はなかったのかどうか、うかつにも確認をしていない）を叩きながら和讃を唱えた。途中の橋のたもとやいわれのある場所でも止まって

唱えた。これを「サンをひく」といった。サンは何種類もあり、訪問先では希望するサンがあればそれをやった。どのサンも「キミヨウチヨウライ何々サン」で始まり「シヨクシンジヨウブツナミアミダ」で終わる。短いサンは数分、長いサンは三十分近くもかかった。サンをひくと同時に各戸では水祭りというのをした。各戸の戸口の横の庭の一角にハナタテ（施餓鬼棚のこと）が設置され、上に花と線香が立てられ、お膳には米と水が供えられていた。サンをひく間に、一人がハナタテのまわりに水祭りの文句をブツブツ言いながら水を振りかけた。隣の集落やさらに先の集落からも来てくれと頼まれることがあり、自集落をすませた日の翌十五日の夕方から夜通しでやり、十六日の明け方までかかることもあった。サンを唱えながら施餓鬼棚に水を振りまくという行為は、盆祭りが底流にて水とつながっているがゆえであろう。

以上は昭和六十一年と六十二年に郡地区にて私が聞いた内容だが、それ以前に右とは別の地区について米原正晃氏も報告している（註7）。また平成五年には旧甲陵高校の女子生徒が伊座敷の瀬戸山の例を「大隅半島部の盆行事―伝承事例をもとに―」と題して報告している（註8）。

サン（和讃）は『岩波仏教辞典』によると「仏・菩薩をほめたたえる定型の詩文。音律に合わせて賦詠されたもの。梵音によるものを梵讃、漢音によるものを漢讃という。これにならってわが国では七五調の和文による和讃が広く流行した」とある。近代になって仏教系幼稚園ではわかりやすい現代語で園歌が作られたが、あれも和讃の一種である。

佐多にて伝承されたサンの詞章を見ると、「地獄巡り」「悪いことをすると地獄落ち」「死者を供養せよ」「おごる金満長者は没落する」など、勸善懲惡と地獄の恐怖が描かれ、仏教の教えに従って身を慎むことが歌われている。

素朴な節をつけて念仏を唱えることを詠唱念仏というが、十分とか十五分といった長い時間続ける場合、ナミアミダブツの各語を引き延ばして歌う（母音唱法）。あまり長く引き延ばすと、「アー」とか「ウー」などの母音ばかりが聞こえて何を歌っているのかわからなくなる。対馬の盆踊を見学したとき、しきりに「ナーモーダー」と聞こえてきたことを覚えていた。

念仏は精霊供養として唱えられるが、精霊がどういう人で何歳でどういう死にかたをしたかによって和讃を変えた。典型的ではあるが、ただ念仏を唱えるより変化があつて面白い。やがて念仏を押しつけて和讃を唱えることが中心と

なり、念仏は合間に入れる形になる。また和讃は生きている人間も聞いている。その内容は生者への教訓（教導）ともなり、メロディーは聴いている人の情緒を動かす。こうして和讃は音楽的豊かさを持つようになり、内容も仏教的（お経的）から世俗的へと変化していくのである。そしてついに念仏を消失させる。

佐多の念仏グループが実際に体を動かしたかどうかは伝承がないが、訪問した家によつては三十分も唱えたというから、カネの奏打に合わせて合の手を入れることもあっただろうし、リズムに合わせて多少は体を動かすこともあっただろう。つまり素朴な念仏踊の形だったと思つていい。

佐多だけにポツンとあつたのではなく、同じような念仏行事がかつては南九州各地にあつたと考えていいだろう。ほとんどは記録されないまま忘れ去られてしまつたが、大隅半島の先端部に吹き寄せられるように終戦後まで残つていたのである。念仏が歌謡に変化し、頬被りをした男たちが踊ることなく（何もフリをせず）、列を作つて立つたまま無伴奏で歌う盆踊が十島村の口之島に残つている。中之島の盆踊にも、カネと太鼓の伴奏で輪を作つた状態で歌う部分がある。これらは佐多の念仏と通じていると見ていい。

(三) 種子島の念仏の可能性

佐多の念仏と似たようなことが種子島でもおこなわれていたと考えていいのではない。問題はいつ頃、種子島に流入したのかである。

第二章でも述べたように、戦国期以降の種子島は皆法華といわれる全島法華宗の島であつた。法華宗への改宗は十一代時氏の文正応仁年間とされる。それまでは西大寺派律宗（真言律宗ともいい、鎌倉時代中期に叡尊によつてそれまでの律宗が西大寺を本山として再編された）の島であつた。松尾剛次（註9）によると、南九州には鎌倉後半期、真言律宗の五つの大きな寺院があつた。創建とされる年代を括弧に入れて示すと、川内の泰平寺（和銅元年）、隼人の正国寺（康治元年には存在）、志布志の宝満寺（神龜年間）、宮崎の宝泉寺（場所と創建年不明）、西之表の慈遠寺（大同四年）である。

慈遠寺は種子島最古の寺院で、奈良興福寺末として創建された（註10）。その慈遠寺は、西大寺派律宗（真言律宗）といつ頃、どのようにして結びついたのであろうか。

『国史大辞典』によると大宝二年前後に多櫛嶋（種子島国）が設置された。

その時に島庁とともに国分寺も作られた可能性があるが、どちらも遺構は何も見つかっていない。『続日本紀』和銅二年六月二十八日に「太宰府の役人の事力の数を減らした。ただし薩摩・多櫛両国の国司と国師の僧らは半減の扱いから除く」とある。事力（じりき）は税を負担する使用人（農民）のこと。要するに役人の給与減額である。ただし薩摩国・多櫛国の国司と国師には適用しないとする。国司が行政の長官であるのに対し、国師は宗教上の長官のことで、国師には何人かの部下（僧侶）が仕えていた。明らかに僧侶が存在していたわけだが、彼らは給料をこれ以上減額する余地がないほど安給料だったといふことだろう。島庁や国分寺は遺構も伝承も残らないほどの小規模だったのかもしれない。多櫛嶋設置から約百年後、本格寺院としてようやく慈遠寺が創建されたのである。

天保勝宝五年に鑑真和尚によつて日本に伝えられた律宗は唐招提寺を本拠とし、戒律の実践と授戒（受戒）機関として朝廷から保護された。天平宝字五年には太宰府の筑紫観世音寺に戒壇院が設置された。種子島の仏教研究を進めた高重義好は、「これは九州の僧になる者がわざわざ都（奈良）へ出向かずとも、観世音寺で受戒ができることを意味した。種子島僧も受戒のために太宰府へ上つた。天長元年の多櫛嶋庁廃止のあと、種子島仏教は筑紫観世音寺に上ることが唯一の新知識獲得の道であつたと見られる。ここに律宗の流入する可能性がある」とする（註11）。

しかし律宗の授戒（受戒）システムはまもなく形骸化して批判にさらされる。戒律を実践しつつ新しい授戒方法を真言宗と結びつきながら生み出したのが西大寺の叡尊らによる真言律宗である。筑紫観世音寺の授戒方式もこの影響を受け、種子島から来た慈遠寺僧侶もそれになつた。そして慈遠寺は南九州の真言律宗のネットワークに組み込まれていったと考えられる。

松尾剛次執筆の『叡尊・忍性』（註12）によると、栄尊の仏教史上の仕事は、西大寺派律宗（真言律宗）に念仏僧を引き込み、中でも注目しておくべきは葬送儀礼や念仏を勧めたことであるという。さらに栄尊と後継者忍性は、石塔を建て、港湾建設の技術者を抱えることで、鎌倉幕府に重んじられて全国的な大宗教勢力となつた。鎌倉新仏教が続々と勃興し流行する中で、古代宗教に真言宗をアレンジした旧勢力の雄となつていたのである。西之表の西大寺派律宗（真言律宗）寺院慈遠寺の果たした役割はこうした背景の中で検討される必要

がある。つまり祈祷によって種子島の民衆をひきつけたのは法華宗僧侶が初めてではなく、法華宗以前の真言律宗時代から始まっていたと見るべきである。かくて念仏は鎌倉後期、真言律宗によって種子島にも流入し、もともとあったと思われる素朴な夏期の祖霊供養と結びついた。そこへ佐多でおこなわれていた念仏や和讃を唱和する時衆文化が流入し、新しい形が加わったと考えていいだろう。

こうした真言律宗や時衆のいわば表の念仏供養(念仏祈祷)の普及だけでなく、民間からも念仏や念仏芸の流入もあつたはずである。五来重(註13)は、大念仏(踊念仏)は村々のお盆の精霊供養にもおこなわれ、日本の津々浦々に普及するが、これを勧めて歩いた遊行勧進聖のなかに放下と暮露があつたとする。

『種子島家譜』の六代時充の項に、暦応康永年間(南北朝期)に平戸から放下師(放下の芸を持つ人物)が来島していることが記されている。放下は念仏歌を歌いながら曲芸のようなこともしたらしい。赤尾木城下にてそれが評判になつている時、ふたたび平戸から商船が入港、上陸した乗組員が城下にてその放下師と遭遇すると、乗組員は非常に丁寧な挨拶をした。これを不思議に思った時の種子島当主時充が船長を呼んで事情を聞くと、その放下師はもと肥前松浦党の一族(武士)で、ゆえあつて人を殺したために国外追放となり、放下師となつて諸国を歩いているとのこと。つまり船員にとつてはもと知り合ひの武士身分の人物だったのである。そこで時充はこれを召し抱え、次期種子島家当主候補を暗殺させるために手厚く用いた…、という話が綴られている。

ここで大事なのは、平戸からしばしば商船が入港していることである。つまり遠方から多くの島外者が来島し、交易が盛んにおこなわれていたことの一端が示されている。その中に漂泊の遊芸民も混じつていた。種子島氏の歴史が具体的に綴られ始めるのもこの頃(南北朝期)からである。

種子島氏による種子島支配が確立し、池田浦が主港として西之表(東海岸が玄関口だった時代があることを示唆するネーミングである)と呼ばれるようになり、島内何ヶ所かに塩釜も設置され、そうしたことによる経済力を背景に種子島氏は足利幕府の要請に応じて九州北部に出兵、島津氏に与力しつつ臣従し、九州各地を転戦するのである。島外との交流が活発になるにつれて、種子島氏が北の薩摩大隅日向と、南のトカラや奄美を経て琉球との交易を財源としたことは想像に難くない。そのことが約百年後、真言律宗から法華宗への改宗

の背景となつたと思われる。真言律宗はひとつの役目を終え、政治的・経済的勢力と結びついた法華宗が導入されたと見るべきであろう。すでに村々に普及していた念仏を題目に変えるのだから、人々には大きな宗教変革に見えたことだろう。

まとめると、佐多の念仏と同様の盆の供養の行事が種子島にても鎌倉後期から南北朝にかけておこなわれ、やがて法華宗は念仏を駆逐しつつ、その験力を引き継ぐことによつて島民の心情をつかみなおしたということだろう。

問題はこうして種子島に定着したであろう佐多と同様の念仏行事から、いかにして現行盆踊の初期の姿が成立したかである。種子島の中で自律的に生まれた(自然発生的に発展した)という可能性もなくはないが、むしろ九州北部や畿内方面からカネと太鼓を中にしてそのままを踊り子が囲む形が流入したのではないか。佐多の念仏と同様の行事をしていたであろう種子島には、その流入を受け入れて優美な種子島盆踊とするだけの受け皿が十分に醸成されていたと見るべきであろう。

佐多の念仏と同系と思われる盆踊がトカラの島々に見られることは前述したが、さらに注目すべきはトカラの島々の盆踊には物真似風や狂言風の演目が混じつていることである。これらはおそらく種子島にもあつたはずである。種子島で便宜的に座敷舞という名称で呼ばれる狂言風の芸能は、実は盆行事の祭礼の中で盆踊の合間にも演じられたかもしれないことを強く思わせることを指摘しておこう。

(四) 肝属川流域のフラク(カネ踊)とその展開

佐多の念仏と同じようなことは、バリエーションがあつたとしても南九州各地でもおこなわれていたであろうが、現状ではその痕跡を見つけることは難しい。ただ佐多のすぐ北方に位置する肝属川流域では、水神祭にて少し発展した形のフラク(法楽)がおこなわれたことが確かな伝承として残っている。盆や水神祭の行事では、おそらく地区に在住の小堂の下級僧侶たち(彼らは小社や小祠堂の祈祷も兼ねただろう)が住民を従え、カネや太鼓を叩きつつサンを唱えて歩いたと思われる。

長い江戸時代を通じて、サンの中には小歌歌謡も取り入れていたであろうが、明治初期の神仏分離と廃仏毀釈によつて様子を一变させた。「サンをひき

水祭りをする」ことは盆行事としておこなうことがはばかられ、変質しながら（仏教色や呪術色を取り払いつつ）もっぱら水神祭での実修へとシフトしたと考えられる。もともと水神祭でも祈祷はおこなわれていたであろうから、シフトはそれほど難しくはなかったであろう。ひとつの集落の中に何ヶ所も水神が祀られていたが、明治以降は合祀が進んだ。多くは屋根型の小石祠だが、自然石もあり、いわれのわからない石塔もあった。廃仏以後は神官がこれに携わることになり、日程は旧八月というだけで（なぜ旧八月かという問題は別に考えるとして）、集落によって日にちを違えた。神官の数は坊主に比べてはるかに少ない。日程をずらさないと神官はまわりきれない、という事情があったであろう。

現在に残るフラク（法楽）の例を具体的に見てみよう。公民館にて小神事をし（近年は神官が激減しているために、神官による神事の消えたところも少なくない）、そのあと男たち数人が集落の内や外の水神その他をまわってカネと小太鼓を打ち、和讃のかわりに小歌を歌いつつ簡単に踊った。まわってきくと頼む家もあったようだ。これがフラク（法楽）と呼ばれたことはよく記憶されている。フラクはカネ踊とも呼ばれたが、呪術的（呪文的）要素が薄くなった分、奏打が中心となり、カネが中心だったことによる。

私が昭和五十七年頃肝属川流域を訪ね歩いたときは、カネと小太鼓がゆっくり奏打され、これを伴奏に小歌を歌いつつ簡単なフリをする集落がいくつもあった。写真1と2は昭和五十七年旧八月十四日の大崎町中持留のカネ踊の様子である。すでに神主による祭典はなかった。夕方まず公民館に集合して一回踊ってから三ヶ所の水神をまわって踊り、終わるのは十八時頃。そのあと新築の家など頼まれたところを踊ってまわる。薄暮になると、途中の歩くところは提灯1個が先導する。公民館では部落の人々（男たち）が飲みながら待っている。暗くなつて踊り子たちが戻ってきて打ち納めをし、打ち上げとなる。これを「ご酒あげ」という。写真1は橋のたもとから水神に奉納しているところ、写真2は頼まれた家の木戸口で踊っている。

楽器編成はこの時はカネ四人（カミガネ二人、シモガネ二人）、太鼓二人（カミデコとシモデコ）の男だけの六人だった。太鼓が加わるとがぜん変化が加わり、楽器どうしの掛け合いも生まれ、奏打は単調な伴奏から合奏としての面白さが追求される。①ドーデングア一番、②ドーデングア二番、③九つべ、④テ

トテン、⑤センガシタ、⑥ウタンジヨ一番（シオヤ）、⑦ウタンジヨ二番（ソガドン）、⑧キクア一番、⑨キクア二番、の九つの小部分からできている。⑥と⑦では歌いつつ奏打し、他はカネと太鼓の合奏である。⑥と⑦はもと和讃だっただろうが、念仏歌の要素は消えている。



写真1 大崎町中持留のフラク（昭和57年9月15日）



写真2 同上

カネと太鼓による合奏の面白さがより一層追求され、まさにカネ踊と呼ばれるにふさわしいのが鹿屋市王子のカネ踊である（写真3）。宝暦三年、王子に和田新田井堰が作られ、大きな水神（石塔）が立てられた。現在は下流域の圃場整備によって撤去された水神碑数基も集められている。ここで盛大な水神祭がおこなわれ、各地からいろいろな芸能が出た。この時に王子カネ踊も踊られたと伝えられるが、もともにながしかの素朴なフラクがあり、新田井堰完成を機に工夫が加えられて（あるいは外からの移入によって）現行の形ができあがったようだ。

基本編成は青年によるカネ五人、太鼓二人、テベシ（鏡鉞）二人、笛一人。テベシというのは鏡鉞（ニョウハツ）のことで仏教行事で使う小型シンバル。

笛は奏樂の合間に吹かれるが、現在は消失。水神に向かって太鼓二人が横に並び、その後ろにカネ五人が横隊で並ぶ。太鼓の両サイドにテベシが向き合って位置する。曲目は①ヒツグアイ、②ソランヤサ、③ドングワン、④三味線樂、⑤チヨチヨベ、⑥トツカンビヨ、⑦ハヤガク、⑧デカタ、⑨カラストビ、⑩ヒツグワイ、の十曲からなる。⑧までは奏打のみで、踊らない。④の三味線樂は三味線が加わるわけではなく、他地区の三味線のはいった踊の調子を模倣したことによる。

⑧のあと、⑨カラストビ（カラスメ）は水神碑前が狭いので、少し広いところに移動して演ずる。樂器を中にして外側を手踊の踊り子（老壮年）が取り囲み、活発に跳躍しつつ「沖のカラスがナー、顔がわからずにカアーカアーとカア：」などと歌いながら踊る（写真3）。昔はこれと同様の「臼摺り」「袖引き」「ドンジ固め」があり、全部で四種類の手踊があった。「カラストビ（カラスメとも）」は歌詞に「カラス」とあることと、修験者が祈祷の際に演ずるカラス飛びを思わせたからであろう。「臼摺り」以下三曲もそれぞれの動作のマネである。中のガクも外輪の踊り子も笠ではなく鉢巻をしているが、鉢巻は笠の名残とも見られる。終わると⑩ヒツグワイにて退場する。

この王子カネ踊は、前述の大崎町中停留のカネと太鼓が列または輪になって叩きつつわずかに踊る形から、カネと太鼓の奏打によるガクとしてのリズムと響きの面白さが追究され、一方、踊り子がこれを取り囲んで快活な動きを存分に発揮する念仏踊風の踊を取り込んだ形へと展開した姿といえよう。

中世に念仏踊が大流行したのは踊が熱狂したからだだが、⑨はかすかながらそれとの脈絡を思わせる。「臼摺り」「袖引き」「ドンジ固め」も「カラストビ」と似たような踊だっただろう。踊のフリが物真似的な要素から導き出されたことが想像される。踊るほうも見るほうも面白かったに違いない。

周囲の踊り子が男だけでなく、老若男女や子供も加わり、内側のカネと太鼓に三味線や胡弓も参加してガクが伴奏としての役割に徹し、かつ流行の歌謡が積極的に取り入れられ、踊にも優雅さが加わり、衣装が美しくなって肝属川流域に広く分布する八月踊（一般的な盆踊スタイル）へと成長・転換したと想定することができる。その八月踊では、踊り子の中にしばしばヤッコと呼ばれるキビキビした踊をする男たちがおり、彼らの踊はヤッコ踊と呼ばれたという伝承を各地で聞くことができるが、それは王子カネ踊のカラストビと同様の活発

な踊の名残であろう。

また、カラストビの外側の踊り子が太鼓を持ったり抱えたりすると、そのまま九州の太鼓踊と同じ形になる。その例をあげておこう。写真4は佐多町伊座敷の上之園（あげのその）の太鼓踊（地元ではズツカカンという）である。



写真3 鹿屋市王子のカネ踊のカラストビ（2022年9月23日）



写真4 旧佐多町上之園の太鼓踊（於稲牟礼神社）
鹿児島県教育庁の「かごしま地域伝統芸能ミュージアム」サイトより

戦後中断していたが、昭和三十年頃に復活して以後ほぼ毎年踊っている。本来は旧六月十五日に伊座敷の鎮守稲牟礼神社の祇園祭にて踊るものだったという。祇園祭に踊るのは降雨制水の祈願だったことを意味している。ちなみに、祇園祭にて太鼓踊が踊られるのは北薩西部や長島にも見られる。島津領内の北と南の両端に同じような太鼓踊系の祇園祭奉納があるのは示唆的ではあるが、今はこれ以上触れない。

写真では中央に七本の幟旗（七人が一本ずつを支えている）が立っているが、これは上之園集落に七つの門があることを表現している。各門からカネと太鼓が一人ずつ出て合計十四人で踊るのが原則だったというが、近年は踊り子不足のために人数はそろわない。カネを中にして外側を太鼓が囲む。太鼓は背中

何も背負わない。全員花笠をかぶり、白衣装である。現在は①ウツコン、②ムツベ（六べ）、③センガシラ、④フタツベ（二つべ）、⑤ヒツオドリ（引きオドリ）、⑥ケンケンボロ、⑦ヨツベ（四つべ）、⑧ヨコゼキ、⑨ミツガキ（道楽）九曲を踊っている。かつてはこれ以外に「琉球入り」「タロイチベ」という歌があった。現在は④にて「ヒヨクヤマ」というのを歌っている。「ひよく山ひよく山島のおの子が来て問はば、サバイはうせて秋と答ゆる」という。「サバイ」という言葉から、これが虫除き歌であったことがわかる。幟旗は踊の輪の脇に立つが、歌を歌う時には写真のように旗が輪の中央に入る。歌の部分が重要だったことを物語っており、上之園では念仏をしたという伝承は途絶えているが、かつて念仏行事にて、カネと旗を中心に和讃を唱えた形を彷彿とさせる。頭の笠は覆面をしていたことの名残であろう。

もうひとつ、太鼓踊の初期の姿を思わせる姿を紹介しよう。枕崎市では西鹿籠と東鹿籠にそれぞれ似たような太鼓踊があり、現在は新暦十月二十八日に南方神社（もと諏訪神社）、二十九日に天御中主神社（もと妙見神社）に奉納している。写真は枕崎市西鹿籠（山下）の太鼓踊で、東鹿籠もこれとそっくり同じである。カネと小太鼓各一人は女装し笠を被っている。これを大太鼓が取り囲み、大太鼓役の頭の後ろにはカラフルな布が垂れさがり、前は白い布で覆われている。覆面の変化であることは明らかである（写真5）。

踊の構成は南方神社奉納と天御中主神社奉納で若干違うが、南方神社では①ヒラオドリ、②打入り、③ムカエンババ、④ヒザツキ、⑤ヨズベ（歌）、⑥長イリコ、⑦マクリ、⑧スタカタン、⑨スイベ打ち入り、⑩ヒトツベモドシ（歌）、⑪スエハツノコズシ、⑫ヒキ（歌）からなる。歌う部分が少なく、奏楽部分が多くなり、さまざまに工夫されていることがわかる。歌う部分は少ないとはいえ、歌詞は何種類も残っている。すべて近世小歌調で、奉納場所によって違



写真5 枕崎市西鹿籠太鼓踊（2015年8月28日 於南方神社）

えていた。踊全体を内側のカネがリードし、小太鼓（イレコ）はその予備であるという。南薩にいくつもある太鼓踊の中でも、太鼓の着物がユカタである、覆面をしている、太鼓の背中に矢旗を背負わない、歌詞が多く残っている、などの点から、太鼓踊の初期のタイプと見なしうる形である。

以上、底流に①佐多の念仏があり、肝属川流域にて流行歌謡が加わった②フラクとなり、カネと太鼓の合奏が発展しかつ周囲に手踊が加わった形の③カネ踊へ発展し、中のカネと太鼓に三味線などが加わって歌謡の伴奏に徹し、まわりを多数の手踊の踊り子とり囲む形の④肝属川流域の八月踊となり、③の周囲の踊り子が太鼓を抱える⑤枕崎の太鼓踊へと変化した、と考えることができる。③は④か⑤いずれにも展開するプラットフォームのようなものであろう。

ここで問題となるのは①↓②↓③↓④、あるいは①↓②↓③↓⑤という変化が自律的に（地元にて自然に発展する形で）そうなったのかどうかである。むしろその都度々々において、外部からの刺激によって変化が促されたのではなか。①が中世の素朴な踊念仏の弘通によって定着したであろうことは述べた。②はカネと太鼓を伴奏に和讃の中に小歌謡を混ぜて歌う形が他所で生まれ、ここへ伝播した。③はカネと太鼓の派手な合奏スタイルが最新のファッションとして流行してきた。そして④も⑤も他所からモデルになるものが流入することによって、そうなったと考えていいだろう。つまり南九州にて①から②③を経て④または⑤への変化は、中央の芸能の流行を強く受けつつ、それらを取り入れて成立・定着したと考えられる。

（五）種子島近代の盆踊の継承

南九州から種子島を含む薩南諸島にも、根底に佐多の念仏と同様の呪術的な唱題がおこなわれているところに、今述べた②や③が大波のように押し寄せ、種子島にては現在に伝承される盆踊の形にリファインされたと考えていいだろう。同じように島外から太鼓踊系が流入した。前者は盆踊、後者は願成就祭奉納の大踊として棲み分けながら長い江戸時代をくぐり抜けて明治を迎えたのである。種子島大踊が薩摩北西部にもたらされて南九州の太鼓踊のルーツになったという下野敏見の説は今後の検討課題である。

現在の種子島では西之表市の横山と南種子町の西之にて盆踊がおこなわれている。縷々述べてきたように、明治以前の種子島では全島の盆踊がおこなわ

れていたことは確実である。明治初期の廃仏毀釈によっていったんは壊滅するも、数年後に何ヶ所かにて復活したらしいことは本文中に述べたように、それらの地区の伝承によつてうかがい知ることが出来る。いくつかは大戦前後まで踊られ、具体的な歌詞も記録されている。現在は西之表市大字上西の横山と、南種子町大字西之にて伝承が続き、本報告書の対象となつている。

両者は基本的に同系同類の盆踊だが、横山の場合はおそらく殿様の御前でも踊つたことによるリファイン化がなされるとともに、伝承を保持する力（殿様の御前であるから、ことさらに伝承通りに、間違えずに歌わねばならないという意識）と、現状に合わせて変化する力とが同時に働いてこんにちに至つていると見てよい。殿様の前で踊つたのは城下に近いこともあるが、歌詞のひとつとして歌われる「阿久根千代女」が貞女として称揚されたことにもよる。そしてそのことは廃仏毀釈による断絶の危機をくぐり抜け、大正初期まで継続された大きな要因でもあつた。殿様観覧の盆踊という自負が伝承者たちにあつたことが、大正期以後の踊の中断期間中にも歌のみは継続して歌われ、それが戦後の復活につながつた。郷土芸能は多くの場合、歌から先に伝承が衰微していくことを思えば、横山の場合は幸運であつたといえよう。

一方、西之にはそうした力が働くことはなく、いわば地元民の自由意志で伝承が続いている。その要因が何であるかはさまざまな方面から検討される必要があるが、基本的に藩政期から西之村として一体感のある連帯意識と、本因寺（支院が少なくとも二つあつた）の強い求心力があつた。廃仏を経て信教の自由がもたらされたあと、帰仏しない住民も多くいたわけだが、盆踊には神仏にとらわれず集落行事として参加し、現在も続いている。複数の集落が同時に、または交替で踊ることによる競争意識も伝承する力のひとつとして働いていたであろう。殿様の御前で踊ることがない分、集落ごとに踊や歌について小さな、または大きな工夫（変化）が模索され、それが盆踊を継続させてきたといえよう。文化財として指定されるや否やに関わらず、今後も継続のための現実的妥協（変化）は続くであろう。

盆踊を今後とも継続させていくかどうかは、まさに地元の方々の意志にかかつている。伝統文化の継承は面倒だ、関わりたくない、何の利得にもならない、という全国どこでも言われる考えは種子島でもまったく同じだ。かつては集落の間にあつた競争意識も薄れてきている。

こうした問題を克服して新しい伝統文化継承の理念を生み出し、地元住民の方々（踊に直接関わるか否かに関わらず）がそれをいかに共有するかに、伝統芸能の継承如何がかかつている。現在はようやく、行政がそれを手助けするようになり、少々の費用も援助する時代になつている。ひとつの集落の行事を市町村全体の伝統文化として位置づけることが必要な時代になつている。八つもの地区から毎年二組の盆踊を出してきた西之のしきたりが、盆踊継承のために今後どのように変化していくのか。今後、西之にて盆踊はどのような形で継承されていくのか。いわば実験的ケースとして全国の注目するところでもある。（松原）

註

- 1 大橋俊雄『踊り念仏』昭和四十九年、大蔵出版。
- 2 『鹿児島県史料旧記雑録前編一』の三五二号文書（浄光明寺大概由緒書抄写）。
- 3 川添昭二『中世九州の政治と文化』昭和五十六年、文献出版。二〇六頁。
- 4 圭室文雄「江戸時代の遊行上人」『日本仏教史論集第十巻 一遍上人と時宗』（昭和五十九年、吉川弘文館）所収。
- 5 岩波書店『大日本古記録 上井覚兼日記』上・中・下を参照した。
- 6 『法然と浄土信仰』昭和五十九年、読売新聞社。九九頁。
- 7 『鹿児島民俗』六十八号と七十一号（昭和五十三年）。
- 8 鹿児島県立甲陵高校の『テーマ学習のあしあと』第五集（平成五年）に収録されているもので、高校生ながらすぐれたレポートである。指導教員は川野和昭先生。
- 9 松尾剛次「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開―新発見の中世西大寺末寺帳に触れつつ―」『山形大学大学院社会システム研究科紀要』第十号（平成二十五年）所収。
- 10 徳永和喜『種子島の史跡』昭和五十八年、和田書店。
- 11 高重義好「種子島仏教について」『南島民俗』四号（昭和四十三年）所収。
- 12 松尾剛次『日本の名僧十 叡尊・忍性』平成十六年、吉川弘文館。二六頁。
- 13 五来重『日本人の仏教史』平成元年、角川書店。二六〇頁。

第二節 歌謡からみた種子島盆踊の特色

一 各地区盆踊歌謡の比較と類歌

本節では、種子島盆踊の歌謡について、類歌に目を配りながら検討し、種子島盆踊の特色を考察する。

種子島全体の盆踊歌謡は、下野敏見氏、松原武実氏などの努力にもかかわらず、現行地を中心とする数地区以外は、十分な資料収集がなされないまま傳承が途絶えてしまった。残された詞章は、松原氏により本報告書第三章に掲げられているが、他の文献に異文が載せられている場合もある。ここでは、資料間の異同を確認しながら、島内外の歌謡資料の類歌を調べ、盆踊歌の傾向を把握したい。

盆踊が盛んだった時期（第二次大戦以前）に、全島的な盆踊歌の収集はなされなかった。島内での分布の特徴をとらえるのは難しい。現在知りうる限りでは、南種子町西之本国寺の盆踊に多くの踊歌が残されている。この地域が島内盆踊の中心地であったというわけではないが、西之地区の中でも、公民館組織によって異なるある詞章が伝えられており、相互の比較が可能であることと、他の地区の、多いとはいえない資料を比較する際に、実質的な基準になりうることにより、西之地区の盆踊歌から分析を進める。

なお、参考文献とその略称については、節末（二〇八頁以下）の一覧を参照されたい。

（一）西之本国寺の盆踊歌

西之本国寺の盆踊歌は、「つんたん拍子」「たけなが」「きのぎの」という三種の歌謡グループにわかれ、それぞれに六〜十一種の歌謡が含まれている。これだけ多くの歌謡が傳承されてきたのは、西之地区の中で、盆踊を繼承するための制度が確立していたためと考えられる（第三章第一節参照）。

踊歌の詞章としては、以下の資料がある。「」内は本項での略称（以下同）。

- ・第三章第一節、松原氏による現行詞章〔松原〕
- ・「下野5」一五六〜一六五、一六九頁〔下野〕
- ・村田熙 一九九六b〔村田〕

- ・平野地区歌本 一九八四年〔平野〕
- ・田代地区歌本 ワープロ版〔田代A〕
- ・田代地区歌本 手書きとそのワープロ版〔田代B〕

これらの異同に加え、島内の別地区に類似歌謡があれば並べて掲げ（主として本書第三章掲載詞章により、小異は（）内に示した）、さらに島外に見出した関連歌謡があれば、それについて記す。

なお、踊り手が踊り場（庭）にはいることを入端、踊り場から出ることを出端というのは、民俗芸能の風流踊一般に使われる用語で、「下野」でもこの用語が多く用いられている。しかし、各地区の歌本を見ると、入端・出端以外の言葉が記されることもあるので、下野氏により島外の風流踊から持ち込まれた概念のようにも思われる。紛らわしいので、本項では、入場歌、退場歌とする。

（a）つんたん拍子
①「さても見事な」
表一

平野〔松原〕	〔平野〕	本村〔下野〕	〔田代A〕	〔田代B〕	島間盆踊 小二才踊①
さても見事な おつずの馬よ 下わしんじく からしまの ふとん、アリア セイコリヤセイ	さても見事な おつずの馬よ 下わしんじく からしまの ふとん	さても見事な おつずの馬よ 下わしんじく からしまの ふとん	ハアー（ヒヤア ーン、ヒィー ヤアーン） さても見事な お鈴が馬よ 下わしんじく からしまのふ とん（アラソ イ、コライソイ）	さてもみごと なお鈴が馬よ 下わしんじく からしまのふ とん	
ふとんばじよ して、こしよ しゆをのせて 様は上るか わしや今くだ る、アリアセイ コリヤセイ	ふとんばじよ して、こしよ 主をのせて 様は上るか 私は今下る	ふとんばじよ して、こしよ 主をのせて 様は上るか 私は今下る	ふとんばりよ して、小姓衆 をのせて 様はあくだるう かあ わしや今のぼる アラソイ、コ ライソイ	ふとんばりよ して、小姓衆 をのせて 様はくだるか わしや今のぼ る	
文をやらねど、 ことづけしよ えど、	ふみをやらね どことづけ しよえど		文をやどねど ことづきよし よねど	文をやどねど ことづけよし よねど	

筆にことかく 硯すみやもた ん、アリアセイ コリヤセイ	ふでにことかく すずりすみや もたん	筆にことかく すずりすみや もたぬ(ヒイー ヤー・ズン)	筆にことかく すずりすみや もたぬ	山奥四五軒目 に茶屋メがご ざる(下野)ち やいあげがござ る」皆あがれ
行けば山の中、 四五軒目の茶 屋に、	行けば山の中 四五軒目の茶 屋に	行けば山の中 四五軒目の 茶屋に	行けば山の中 四五軒目の 茶屋に	
寄りてたもれよ、 必ずたのむ	寄りてたもれよ 必ずたのむ	寄りてたもれよ、 必ずたのむ。	寄りてたもれよ、 必ずたのむ。	

入場歌として用いられ、馬方踊といった趣きの歌だが、民謡ではなく、元禄期(一六八八〜一七〇三)の上方歌謡を典拠としている。

◇「おつら馬」(『若みとり』巻四「二上り」一三、早大図書館本)

さても見事のおつらむまよ うへにやせん(甞)しき からしまのふと
ん ふとんはりして こせうしゆ(小姓衆)をのせて そなたくだりか
おりやいまのぼる ふみをやるにもことづけしよにも こゝははこね
(箱根)のやま中なれば ふでにやことかく すずりすみはもたず もし
もみなくちおとまりならば ふだのつぢから四五けんめのちや屋て むま
もそくさい その身もふじ(無事)て やかてのぼるといふてたもれ 系
いこのさんさ

『若みとり』は、宝永三年(一七〇六)の序がある、京都版の歌謡書で、『松の葉』(元禄一六年(一七〇三)刊)、『落葉集』(宝永元年(一七〇四)刊)にもれた歌と、その後の新作を取めたとされる。これら上方の歌謡書については、本節第二項(一)にまとめて述べる。なお、最後の一句だけ、南種子町島間の盆踊の中に、独立した歌として取り入れられている。

②「おやつ参り」

表1-2

おやつ参りの、道づればなし、 聞けばこの頃、えのもとえんに、 うどんあの子が、嫁入りすると、 いうが誠か、ふびんなことよ、 手裁箱ぬるえのうごき、 とうちやしちやごちや、ごちらいければ、 かがみ立てまで、かいととのえて、	本村「松原」	おやつ参りの道づればなし。 きけばそのころ、えのもとえんに、 うどんあの子が嫁入りよする。 いうが誠か、ふびんなことよ。 てばこばりばこ、ぬるえの動き、 とうちやしちやごちや、こちら行けれど、 かがみ立てまで、買いととのえて	本村「下野」
--	--------	--	--------

ひらやしゆうとの、ふとんやよきや、 かやや枕や、しめてくりよして、 となりきんじん ジロベエがおてうちがいのお手枕、じつそ うじやえ	となやありじん しらべの、お手うち枕じつ、そうじやいなあ。
--	----------------------------------

この歌には、島内外に類歌を見出だせなかつたが、トカラ列島の鹿児島県十島村平島盆踊小踊の「エイエイごしゆうの 昼は親子まいでの道づれ話 うそか誠かへんじなことよ 踊りあの子が二十四門」(『十島村誌』一〇六一頁、下野敏見・一九九四は小異)は、類似の語調といえるかもしれない。ただし、平島の歌にこの続きはない。

③「これのお庭」

表1-3

平野「松原」	「平野」	本村「下野」	「田代A」	「田代B」	上中信光寺 ⑤「松原」
これのお寺に 参りてみれば おもしろや	此のお寺に 参りてみれば アーおもしろや	これのお寺に、 参りてみれば、 おもしろや。	この寺に 参りて見れば アーおもしろや あー(あーひい ーやあー)	これの寺に 参りて見れば おもしろや	これのお寺に 参りて見れば 面白や
さても見事な お寺のおすし 四方に見えし いず見れば	さてもみことな お寺のおつし 四方に見えし 伊豆見れば	さても見事な お寺のおつし。 しおふりいでし いずみれば、	さても見事な お寺のおすし 四方に見えし 伊豆見れば あー	さてもみことな お寺のおすし 四方に見えし 伊豆見れば アー	さても見事な お寺のおすし 四方に出でし いず見れば 心は波の「下 野」何の」
心わ波の 田子の浦 立つ波のごよ わながけれ よわよけれ	心は 波の 田子の浦アー 立つ波の御夜 は永けれ 夜は良けれ	心はなみの 田子の浦。 立つ波のごよ はよけれど 世はよけれ。	こころは波の 田子の浦アー 立つ波の夜は 長けれえー 夜はよおけえー れあーいーあーし	心は波の 田子の浦アー 立つ波の夜は 長けれえー 夜はヨオーよ けれ	立つ波のご世 は永かれ「下 野」長けれ」 世はよけれ

この歌は、風流踊にしばしばみられる寺誉めの歌に属するが、田子の浦を歌い込んだ類歌は見出だせなかつた。田子の浦は、南種子町上中上野の盆踊歌⑬「おもいよある」にも歌われている。

④「阿波の徳島」

表1-4

平野〔松原〕

〔平野〕

阿波の徳島十郎兵衛娘 アーヒーヤー 親に会うちゆうて巡礼姿 父によ母よと尋ね行く 日に行きくれて野に寝たり 人の軒端で夜を明かす どこの宿でも泊めてはくれぬ 幾夜幾日尋ねても 親のおりさきや知れもせず さてや悲しや嘆き沈む アーヒーヤー	阿波の徳島十郎兵衛娘 親に会うちゆうて巡礼姿 父によ母よと尋ね行く 日に行き暮れて 人の軒端で夜を明す 何処の宿でも泊めてはくれぬ 幾夜幾日尋ねても 親のおり先 知れもせぬ さてや悲しや泣き沈む 母のお弓に一寸会いて さてや我子やなつかしや 抱つ抱れつ親子のなげき これ程親に慕う子を 母といわずに別れの悲さよ
--	--

この歌は、順礼お鶴の口説として広く行われている。浄瑠璃の「傾城阿波の鳴門」をもとに、兵庫口説熊野節「阿波の十郎兵衛」(『兵庫口説』二〇二頁)など刊行された歌本も多く、島根県飯石郡頓原村「阿波の鳴門」(『音頭口説集成』第一卷一九四頁)、鹿児島県開聞町上仙田田中の手拍子踊「阿波の徳島」(『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編二二五頁)など伝承例も多いが、平野の踊歌は簡略化されており、明確な類歌は見出だせなかつた。

⑤ 「二九の十八」

表1-5

平野〔松原〕	〔平野〕	平山西之町②〔松原〕
二九の十八で 呼ばれきて アーヒーヤー 四六二十四で子ができて 五六三十で いでさると アーヒーヤー	二九十八よばれきて 四六二十四で子ができて 五六三十いでさると	二九の十八よばれきて 四六二十四で子ができた 五六三十で家去れた
ぜひにいでならいねもしようが もとの十八してもどせ アーヒーヤー	ぜひにいでならいでもしよが もとの十八してもどせ	ぜひにいでならいでもしよが 元の十八にして戻せ

類歌未見。

⑥ 「墨と硯」

表1-6

〔平野〕 墨と硯は 二思ひ 我れは此の世に すてられて	本村〔下野〕 すみとすずりは、 ふた思ひ、 我はこのよに 捨てられた。 せめては胸の 苦しきよ。 おはつおさきに 二人づれ、 徳兵衛が身の 悲しさよ。	田代〔松原〕 墨と硯わ ふたおもい アーヒーヤー 我わこの世に 捨てられとう アーヒーヤー せめてわ胸の 苦しきよ アーヒーヤー	〔田代A〕 すみとすずりは ふたおもい アーヒーヤー 我は、此の世に 捨てられとう アーヒーヤー せめては 胸の 苦しきよ アーヒーヤー	〔田代B〕 すみとすずりは ふたおもい 我れは此の世に すてられとう せめては胸の 苦しきよ
私(ワタシ)が原の 道(ミチ)の下	徳兵衛が身 のあじきなよ	徳兵衛が身 の悲しさよ アーヒーヤー お初おさきの 二人連れ アーヒーヤー わたしが原の 道のしも アーヒーヤー	徳兵衛があー身の 悲しさよ アーヒーヤー お初お咲の 二人連れ アーヒーヤー わたしが原の 道のしも アーヒーヤー	徳兵衛が身 の悲しさよ お初お咲の 二人づれ 私が原の 道の下も

お初徳兵衛の心中は、近松門作の浄瑠璃「曾根崎心中」が有名だが、「此の世の名残。夜も名残。死に行く身を譬ふれば。あだしが原の道の霜。一足つゝに消えて行く。夢の夢こそあはれなれ。」で始まる近松の道行文と、右の踊歌は異なる。近松の心中物は、浄瑠璃としてのみではなく、しばしば踊り口説にも取り入れられて流布したが、「曾根崎心中」は口説としてはあまり見かけない。この歌の原拠は、次の上方歌かと思われる(傍線部が一致)。

◇「おはつ」二上り(安永三年版『新大成糸のしらべ』一三三三丁、東京芸大本)
こひ中なかは。すみとすずりのふた思ひ。ふでのいのちげこよひがかぎり。
われはこの世にすてられて。なつのむめだのはかないことは。せめていち
にちふうふといふて。あかしくらしてねたよはもなし。あすはわが身のよ
しあしを。のせてうたふか。つらにくの十八を、それ。わしは十九のや
くのとし。おもひあふたる。ゑんはつたなき身はあさがほのうちしほれ。
こゝそうき世のわかれのつじよ。はよふござれと手をとりて。見るにかな
しやせきくるなみだ。じつとおさへてこれのふやいの。おもひきらしやれ
もふなかしやんな。(中略)たへなばたへよふたりゆくみち

後半部は異なっているのですが、この歌をもとに、近松の原文（傍線部）も取り入れて、適宜改修したか、もう一つ別の歌を介しているのか、明確ではない。

⑦ 「美濃ととおみの」

表1-7

平野〔松原〕	美濃ととおみの 寝物語のおわさ アーヒーヤー ももよ寝ばなし 恋ばなし やはまくつまろに 身はぬれかかる ちろじろをさる ほそ雪	〔平野〕	美濃と遠江のを 寝物語りのオーお わさ 百夜おねばなし 恋ばなし やはまくつまろに 身はぬれかかる ちろじろを降 ほそ雪	本村〔下野〕	みのとみの、 寝物語のうわさよ。 おもよこばなし、 こいばなし。 早くつまどに 身はふりかかる。 ちろちろふる 細雪の、	〔田代B〕	美濃と遠近の 寝物語りのオーう わさ 百夜ねはアーなし 恋ばなしイー やはまくつまろに 身はぬれかかる ちろくアー 降る細雪	上中上野⑫ 〔下野〕	みのとつみの 寝物語のうわさ、 おもよね ばなし、 よふくすまどに にわぬれかかる。 ちろちろふる ほそ雪に、
--------	--	------	--	--------	---	-------	--	---------------	--

島外の類歌は未詳。

⑧ 「うたせかねたる」

表1-8

田代〔松原〕	うたせかねた るなお姫よ アーヒーヤー	〔田代A〕	うたせえーか あねえたるお ーおなお姫よ （あーひーやあー）	〔田代B〕	うたせーかね たるーなお姫 よー	上中信光寺⑥ 〔松原〕	二世かねたる なお姫は	上中上野⑥ 〔下野〕	ふたせかねた る直姫は	『郷土研究』 上中付近⑥ 〔松原〕	打たせかねた るなお姫は
そでの露草	そでえーの露草	そでーの露草	袖の露草	袖の露草	袖の露草	袖の露草	袖の露草	袖の露草	袖の露草	袖の露草	

振り分けて アーヒーヤー 大阪山に たづねわけい りたまいしが いにしえは にしきのひとね アーヒーヤー あやのきん こそでかなきん 身にまとい しようじに たいまい 戸にすいしよ アーヒーヤー すきまの風も いとおしが 今は木の葉の つづりさす	振り分けて （あーひーやあー） 大阪山にたづ ねわけいりた まいしがあー いにしえは にしきのひとね （あーひーやあー） あやのきん こそでかなきん 身にまとい しようじに たいまい 戸にすいしよ （あーひーやあー） すきまの風も いとおいし いはあー 今は木の葉の つづりさあー すー	ふりわけて 大阪山に たづねわけい りたまいしが いにしえは にしきのひとね あやのきん こそでかなきん 身にまとい しようじに たいまい 戸にすいしよ すきまのオー 風もいとイ ーしが 今は木の葉の つづりさすー ウ	ふみわけて 逢坂山へ たづねわけ入 りたまいしが いにしえは 錦のしとね 綾の絹 小袖金絹 身にまとい 障子に たいまに 戸に水晶 隙間の風もい と伊しが 今は木の葉の つづりさす	ふみ分けて おー坂山へ 尋ねわけ入り 給いしが、 いにしえは、 錦のしとね、 綾の金。 こそでかな絹 身にまとい、 しようじに たいまに、 とにすいしよ う。	ふみ分けて 逢坂山に 入り給ひしが 古は 錦の単衣 綾の絹 障子に 玳瑁 戸に水晶 隙間の風も厭 ひしが 今は木の葉で 綴りさす
---	---	--	---	---	--

この歌は、近松門左衛門の比較的若い時期（元禄六年（一六九三）以前）の浄瑠璃『せみ丸』が原拠にあると思われる。近松の『せみ丸』は、逢坂山を舞台にした謡曲「蟬丸」によりながら、宮中の恋話をちりばめた作品。蟬丸の思入人として直姫が登場し、逢坂山の蟬丸のもとを尋ねて行くという筋立ては、盆踊歌に合致するものの、その道行文は近松の浄瑠璃詞章中にない。

ところが、三段目で蟬丸が逢坂山で不遇をかこつ場面に、盆踊歌に近い詞句がみられる（『近松全集』第二巻）。

竹本義太夫『せみ丸』（近松作）	江戸半太夫段物集「蟬丸さどりの段」
口おしやいにしへは。一夜とまりし宿迄も。 にしきのしとね。あやのどこ。	あらくちおしやいにしへは 一夜どまり のやどまでも。 たいまいをかざりつ、 かきにきんくわをたててならべ。
かきにきんくわをかけ 戸にはすいしやうをらねつ、。	

らんよよくしやの玉ぎぬの
すきまの風もいとひしに
かく。あさましきこけむしろ。しくともし
かし。世の中よ。
思ふ人としかたしかば。玉のうてなもをろ
かしき。(略) なげきしたはせ給ふにぞ

鸞輿飾車のたまぎぬの。
すき間のかげもいとひしに。
かくあさましき竹ばしら。しくともしかじ
わらむしろ
おもふ人どちかたりなば。たまのうてなも
何ならむ。(略) なげきしたはせ給ひけり

下段に掲げたのは、古浄瑠璃太夫の江戸半太夫の段物集に掲載された「聖代時津風(替り名蟬丸紅葉傘)」の「同(蟬丸)さとの段」の詞章(『日本歌謡集成11』による)。段物集の一部が載るのみで、全段の正本は残らないが、近松の『せみ丸』の改作と思われる。半太夫節の詞章には、近松作の義太夫正本になくて、種子島の盆踊歌にある、「玳瑁」という、やや珍しい語句がある。一方で、「にしきのしとね」など、半太夫節が欠く句もあり、いずれも直接の典拠とはいいがたいが、歌謡書などに「蟬丸」の歌は見つけられなかった。「蟬丸」は人気の謡曲だが、直姫は近松が創作した役名であり、上記の詞章も謡曲にはないので、未見の歌謡は推測しうるものの、近松作『せみ丸』を原拠とした踊歌ということは確実だろう。

江戸半太夫は元禄から享保初年に活動した古浄瑠璃太夫。江戸の古浄瑠璃太夫は、操り座(人形芝居)を興行し、六段に分けられた長編作品を語って、正本を刊行するのが基本だったが、半太夫はあまり操り座に出勤せず、座敷で短い節事を語るのを得意としたらしい。六段の正本はわずかしが残らず、節事を集めた段物集がいくつか現存している。また、歌舞伎の舞台で、役者の所作の地を勤めることもあった。半太夫節は現在に伝わらないが、門弟の十寸見河東の河東節が伝承されている。一方、半太夫の節事は上方でも好まれ、地歌として伝承された曲もある(「たけなが」④参照)。ただし、右の蟬丸「さとの段」が上方に伝えられたかどうかはわからない。

なお、江戸の古浄瑠璃太夫、土佐少掾にも『蟬磨呂』の正本が残る。初演年次は不明で、近松作『せみ丸』との先後に確証はない。横山正氏は「浄瑠璃『蟬磨呂』と『蟬丸』」(『語文研究』八号、一九五九年二月)で、土佐少掾の先行を推定しつつ、近松先行の余地も残している。筆者は近松が先行すると考えている。先後はともかく、土佐少掾『蟬磨呂』で蟬丸と恋仲となるのは「いろはのまへ」で、直姫は登場せず、盆踊歌と類似の詞章もない。

⑨ 「われからぬらす」
表1-9

本村〔松原〕	われからぬらすたもとからぬれかかる ぬらせぬらしやれぬれかかる こいしき人わ松島の おしえて申すわはばかりぞ はばかりわ お許しよアーヒヤー みよおさまりて ゆうらんの おりをえたるわ身のほまれ いそいで教え たてまつる アーヒヤー さらばめでたき 君がよむ まつに祝いて 鶴がさきの 千代こめたる たけのうら アーヒヤー	本村〔下野〕	我からぬらす、 たもとからぬらせ。ぬらしやれ。ぬれかかる。 こいしき人は松島の、 教え申すは、はばかりぞ。 はばかりは、お許しを、 み代おさまりて、ゆうらんの 教え申すは、身のほまれ、 急いで教え奉る。 さらばめできた君が代の、 松に祝いて、鶴ヶ崎、 千代こめたる竹の笛。
--------	---	--------	--

類歌は未詳。

⑩ 「春は花見に」
表1-10

本村〔松原〕	春わア花見に アーヒヤー	本村〔下野〕	春花見に いでるいでましよ。 どっこい、 さかりの花じやいなあ。 しぎよくも女郎は、 ろうわ	〔田代A〕	春うはあ花見に いでるいでましよ どおこおえー 盛りのはなじやや えー(あーひーやあー) 珠玉もじよおーは	〔田代B〕	春は花見に いでるいでましよ どおこへ 盛りの花じやえー しゅ玉もじよおろ は	上中上野⑩ 〔下野〕	春は花見にいでる。 いでましよ、 どっこい、 盛りの花にえー。 しぎよく、もじよ ろうは
しめつゆるめつ しおらしや アーヒヤー	しめつゆるめつ、 おもしろや。	こづまにかのこを つけては、しお らしや。 家むこうの野辺に、 花つむ女郎は、さ よろうがさて	こづまにかの子 をつけては おらしやアー でえむこう野辺の に 花摘むじよ うーはアーサテ	かの子 をつけては おらしやアー でむこう野辺 に 花摘むじよ うはサテ	しめつゆるめつ しおらしや アーヒヤー	しめつゆるめつ しおらしや。	しめつゆるめつ しおらしや。	しめつゆるめつ、 しおらしいや。	

この踊歌全体の類歌は見出だせなかつたが、末句の「向えの野辺に」という詞句は、鹿児島県内の踊歌にしばしば類似の句がみられる。さつま町(旧宮之

城町) 舟木西のマゲ踊(バラ踊)に「向えの原に塩くむ女郎が…、向えの野辺に泣く鈴虫は…」(『鹿兒島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編八八頁)、鹿兒島市小山田の太鼓踊に「むかえの浜にしおくむ女郎が…」(『鹿兒島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編一九〇頁) などがあるほか、三島村硫黄島太鼓踊に「向いの野辺に花つむ姫は…」(『三島村誌』一一九八・一二八六頁)、同村竹島八朔踊(太郎御前)に「向えの野辺に花つむ女郎は…、向えの野辺に鳴く鈴虫は…」(『三島村誌』一二六三頁)、十島村平島盆踊に「向かえの山に立ちたるツツジよ…、向かえの野路に鳴く鈴虫よ…」(『十島村誌』一〇五五頁) の類想歌があるのが注意される。

⑩「かごで妻もち」

表1-11

平野 〔松原〕	〔平野〕	本村 〔松原〕	本村 〔下野〕	田代 〔松原〕	〔田代A〕	〔田代B〕
かごで妻もち つな ヨイヨイ	かごで妻もち ち 加世田で育ち	かごで妻もち ち 小鳥や 小鳥やかわね	かごで妻もち ち 加世田で育ち	(1)かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち
かごで妻もち つな ヨイヨイ	かごで妻もち ち 加世田で育ち	かごで妻もち ち 小鳥や 小鳥やかわね	かごで妻もち ち 加世田で育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち
かごで妻もち つな ヨイヨイ	かごで妻もち ち 加世田で育ち	かごで妻もち ち 小鳥や 小鳥やかわね	かごで妻もち ち 加世田で育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち	かごで妻もち つな ヨイヨイサー かせだであ育ち

薩摩藩内の民謡かと思われるが、類歌は未詳。西之のみの伝承。

(b) たけなが

「つんたん拍子」の名称は囃子のリズム感によるとされるが、本項「たけなが」と次項「きのぎの」は、中心となる踊歌の曲名を、複数の踊歌を束ねるゲループの名称としている。

①「かねとりて」(横山・川迎「たねとりて」)

表1-12

上西目〔松原〕	砂坂〔下野〕	横山①〔松原〕	川迎①〔松原〕	川迎①〔下野〕
かねとりて うれしうれなわ むさしのオオオ しんますやまの わがおもいぐさアア しげれ おさまるみよこそ	たねとりて うれしうれなわ むさしの、 せんまつ山の、 わが思いぐさ。 しげれ おさまるみよこそ めでたけれ。	種とりて 嬉しうれなわ 武蔵野の 狭くやあらむ 吾が思い草 しげれ おさまるみ代こそ めでたけれ	種子取りて 嬉し憂なは 武蔵野の 狭くやあらん 我が思い草 おさまる御世こそ 目出たけれ	種子取りて うれしうれなわ 武蔵野の 狭くやあらん 我が思い草 しげれしげれよ。 おさまる御世こそ めでたけれ。

この歌は、西之「たけなが」と西之表市横山・川迎で、入場歌として用いられている(横山の諸本異同は後述)。

単なる祝儀歌のようだが、明確な典故がある。

◇『隆達小歌』(実践女子大本)(岩波大系本『隆達唱歌』8)

たねとりて うへしうへなは むさしのも せはくやあらん わかおもひくさ

「隆達小歌」以降の歌謡書にはみられない。第二句は難解だが、大系本の頭注は「ていねいに植えておけば」として、『伊勢物語』の和歌「植系し植系ば秋なきときや咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや」を引く。

なお、鹿兒島県十島村中之島の盆踊にも伝えられている(後述)。

◇垣まわり(『十島村誌』一〇四九頁、「下野3」三二二頁)

うれしうえなの武蔵野の せまくもあらぬ わが思い草 茂れ茂れ茂れ
治まる御代こそ めでたけれ

②「むつましや」

表1-13

砂坂〔下野〕
睡ましや、またはえ、いとしまに、にしだせめの、かねて、夜ことに、かわるものとは、たがよいに。そめて、黒髪のもつれてとけるよ、たのもしや。たのはきのの、まわすのすすき、よそになびくな、きょうくるもよう。

西之の他地区の詞章は得られなかった。島内外の類歌も見出だしていない。

③「あきのたの」

<p>上西目〔松原〕</p> <p>（ワ）あきのたのたのオオオオ ヒーヨー <small>（全書）</small>あきのたの かりほのいろを みるからにイイイ ヒーヨー いちぶにこめが ななたわら させても さてもめでたいごよなれど どうから鶴が むつつれてエエ またむつつれて 十二つれ そがのつれいと こござすウウウ</p>	<p>砂坂〔下野〕</p> <p>あきの田の 刈穂の色を見るからに、 一步に米が七たわら、 させても さてもめでたいごよなれど。 唐からツルが六つつれて、 また六つつれて、十二つれ、 そがの松へと、こころさず。</p>
--	--

類歌は未詳。「とうから鶴が」以下は、福岡県芦屋町の大漁歌「正月二日」に「正月二日の初夢に 白き鼠が三つ連れて アラまた三つ連れて六つ連れて また六つ連れて九つで こちのお家に金運ぶ」（『日本民謡大観』九州篇（北部）八八頁）の類句がある。

④「よよのたけなが」

<p>上西目〔松原〕</p> <p>（ワ）よーよーオオオオのー <small>（全書）</small>よよのたけながかわ えらもとよいに してよしまらら えのもとこしよいに いつのいふれしのの まくらとまくら えんとえんとの よりもとよいに なじゆみかさねし あまたのせき ヒーヨー しのぶながれのもとよいに なれど よいにふられし かりもとよいに はだとはだとの よりもとよいに よいこの よいこの このこのよい このこの こまくらもちて いくよかさねしな わがえのもとよい</p>	<p>砂坂〔下野〕</p> <p>よよのたけながわ、ひろもとよいに、 してよし、まだえのもとよいに。 いつのいふれしのまくら、とまくら、 えんとえんとのよりもとよいに。 なじゆで、かさねし、あまたのせきお、 しのぶなわての、もとよいに。んなれど、 よいにふられしかりもとよいに、 はらとはらとの、よりもとよいに。 よいこの、よいこの、 このこの、とまくら、もちて 幾夜かさねし、なしながわ、えのもとよいに。</p>
---	---

この歌謡グループの中心となる歌だが、意味を取りにくい。直接の典拠とは
 いえないが、次のような類想歌がある。

◇「かみすき」（『琴線唱歌の糸』巻五6、東京芸大本）

みだれしかみをすきかへし。いとし男のためにとて。思はぬ人にせいもん
 の。ばちもあたらはしやみせん。引手になひけくろかみの。わしはおま

へのまへかみの。ながきちぎりとすじたて、心つくしのつくもがみ。二
 せも三せもかけてむすんで おくれのかみに。かたきあぶらをつけてす
 け。つねにしんくのく。心もそるにちやせんがみ うつれはかわるか
 みのいろ。はねもとゆいの。ひんしやんと。（中略）

ひつこきがみのつと（鬘）なくと。せみおりをりのあわせつと。おもひあ
 ふたるたけながの。またの世までもかけもとい。かわらぬいろの（『歌曲時
 習考』ことども）ながかもじ。つるのかがい千代万代と。いゝたてがみの
 ふともとい。むすぶの神のゑんしだい（『歌曲時習考』かけもとゆひのすゑかけて）
 右の歌は、『歌曲時習考』などでは「かみすき曾我」と題されている。地歌
 の中でも半太夫物に属しており、もとは古浄瑠璃の江戸半太夫の語り物だつた
 らしい。江戸半太夫は、「つんたん拍子」の⑧「うたせかねたる」に関して少
 し述べたように、主として江戸で活動したとみられるが、その曲節は上方でも
 好まれ、『松の葉』『落葉集』以下の歌謡書に収められ、地歌の中で伝承されて
 きた。「かみすき」も、菊棚月清家に伝えられているという（久保田敏子・
 二〇〇九）。

半太夫の「かみすき曾我」は、正本や段物集にはなく、上方歌謡書に載せら
 れているのみで、浄瑠璃として作られたのか、歌舞伎の所作の地（伴奏音楽）
 として作られたのかもはっきりしないが、曾我十郎の髪を遊女大磯の虎が梳く
 くだりて用いられたもので、江戸の浄瑠璃・歌舞伎の髪梳物というジャンルの
 初期の作品の一つと位置づけられる。

髪梳にちなんで、さまざまな髪型や関連用語を歌い込んでいる中に、元結の
 名前が含まれ、「たけなが」（丈長）という言葉もあわせて使われている。

次のような歌もある。

◇「化粧部屋」（『伊勢音頭二見真砂』（新編）（『日本歌謡集成7』による）

あひ見ての、後の心に較ぶれば、合はせ鏡の顔と顔、我が姿見の影ならで、
 心も知らず黒髪、乱れて今朝の鏡台に、移らふものは世の中の、人
 の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水に、はたちかつらも水臭き、どうり流
 れの身ぢやものと、よそに歌はれ言ひたて、櫛の歯にまでかけらるゝ、
 平元結の言訳も、かゆい所へ簪の、届かぬ人につながれて、帽子おさへの
 針の先、つくぐどうか笄の、ひざりもつるのはしたなき、誰が口紅の中
 ごとに、よれつもつれつ元結の、廻り気出来てふつりと、中をはさみの

関すゑて、忍びがへしのきははずみに、抜穴も無きうちかたの、髻の耳へ入相の、鉄漿つけ筆の便りさへ、ぶじとばかり文遣ひ、忍ぶ人目のすぎ油、解けてぬる夜の仲絶えて、ひとり丸寝油壺、我が小枕も髪わげも、短夜ながら丈長に（後略）

右は「川崎音頭」とも呼ばれた伊勢遊里の踊歌の一つで、広く知られていた。前半は、長唄「枕獅子」「鏡獅子」にも取り入れられている。

「かみすき」「化粧部屋」から、ただちに種子島の「よよのたけなが」の歌は導かれないが、「もとゆい」と「たけなが」が縁語であることは確認され、「よよのたけなが」の「もとゆい」は「元結」とみて間違いないだろう。こうした座敷歌の中に、「元結尽くし」のような曲があつて、それを取り入れたのだからと思うが、該当曲を見出だしていない。

⑤「ちばやふる」

表1-16

砂坂〔下野〕	川迎②〔松原・下野〕	竹屋野 神楽①〔松原・下野〕	女洲①〔松原〕	坂井付近〔下野〕
ちばやふる、ちばやふる、 神のお前の、 鈴の音、 カグラをとりて、 さんさつのこえ。	ちばやふる 神の御前の 鈴の音	千早振る千早振る アーヒーヨー 神の御前のヨー 鈴の音 神楽乙女のヨー さんさつ〔下野〕 つさつ〕の声	ちばやふるちは やぶる 神の前の すずの音 かぐらをどめの さんさつの声	千早振る千早振る アーヒーヨー、 神の前のヨー、 鈴の音、 神楽乙女のヨー、 さんさつの声。
万才の国は（万才 楽には）いのちを たもつ、	万才楽には命を保 つ	万才楽〔松原〕 ばんざいがく、下野〕ま んざいごうく〕には 命を保つ	ばんざいらくに は命もたまつ	万歳どこみが命を たもる、
あいおいの松か げ。	相老の松風	相生の松風 アーヒーヨー	あいおいの松風	相生の松蔭。

中種子町竹屋野の霧島神社で、「神楽」と称して、現在十一月に踊られているものが、芸態としては盆踊であることを、第三章第三節で松原氏が指摘している。踊歌の後半は、謡曲「高砂」の「千秋楽は民を撫で、万歳楽には命を延ぶ、相生の松風、颯々の声ぞ楽しむ、颯々の声ぞ楽しむ」を原拠として、祝言系歌謡などに広く取り入れられている。

⑥「したには」

表1-17

砂坂〔下野〕	したにわもくの 小桜や、川には さぎをこきま せて、わけての、 いのいと桜。 いくてあまたの われゆて、 せめてひと夜か わぶねに、えい おすすめしを。 のんのくまがえの、 たけき心は、と らの尾の千里を 通う、恋の道。 しのぶにつわり けさぎくら、き みはなさけのい とぎくら。
--------	---

島内では他に類歌がないが、次の歌の一節を取っている。

◇「さくらづくし」〔松の葉〕巻二長歌11、東京芸大本）

あかでのみ はなにこゝろをつくすみの おもひあまりにてををりてか
ぞふるはなのしなくに（中略）

したにはむく（無垢）のひざくらや かば（樺）にあさぎをこきませて
わけよきぬひ（縫）のいとぎくら ひくてあまたのみなりとも せめてひ
とよのたはふれに 糸ひをすゝむるくまがへの たけきこゝろはとらのを
の せんりもかよふこひのみち しのぶにつらきありあけぎくら きみの
なさけのうすざくら（中略） はなのしらつゆはる（春）ことに うちはら
ふにもちよ（千代）はへぬべし

この歌は佐山検校の作曲とされ（『歌系図』）、『吟曲古今大全』『新增／大成糸のしらべ』『歌曲時習考』などに載せられ、現在まで地歌として伝承されている。「下には無垢の」の一節は、江戸歌舞伎の下座唄としても用いられる。

⑦「南さがりの」（たけなが・きのぎの）

表1-18

砂坂 「たけなが」 〔下野〕	砂坂 「きのぎの」 〔下野〕	中西目 「きのぎの」 〔松原〕	小田（中西目） 「きのぎの」 〔村田〕	平山広田⑤ 〔松原下野〕	川迎⑧ 〔松原・下野〕	竹屋野大踊 「雷踊」 〔下野〕
南下りの堀 川に、 白さぎおい て、 ほろのうつ。 ほろのは、 うたずに、	南下りの堀 川に、 白さぎおい て、 おののうつ。 おのは、 うたずに、	南さがりの 堀川に しらさぎほ りて、 ほろのうつ ほろわうた ずに	南くだりの ほり川に 白さぎおい て、 ほろのうつ、 ほろのはう たずに、	南下りの堀 川みれば 白さぎおり て、 ホロド打つ りよーか	南下りの堀 川に 白さぎおり て、 ほろのうつ ほろろはう たいで〔下野〕	南さがりの、 堀川に、 白さぎおり て、 ほろのうつ。 ほろろはう たずに、

ツルの子が げにかね まいて 舞を舞う。 まことに これが、め でたけれ。	ツルの子が、 銭かねまい て おのうつ。 おのうた ずにつる の子が、舞 を舞う。	鶴の子わ げにかねま いて あいをまつ まことにこ れがめでた しや	つるの子が げにかねま えて、 あいをまつ、 まことにこ れがめで たけれ。	あつかめを 銭かねおい て 舞いを舞う	鶴の子が げにかねふ んで あいを舞う まことや これぞ目出 たけれ	舞をまつ。 それぞれ さこそめで たけれ。
---	--	--	--	------------------------------	--	--------------------------------

島内では、退場歌としての使用例が多いが、鹿児島県内や他県で、「南さがりの堀川に」という歌は見出だせなかつた。「ほろろ」は、雉などの羽ばたく音や鳴く声という言葉で、和歌でも風流踊歌でもよく用いられる。

なお、竹屋野では、大踊の「雷踊」で、「天下泰平、治まる御代は」に次ぐ、第二句として歌われている(「下野5」一七二頁)。「雷踊」は竹屋野のみの伝承されるが、「関のお方(小万)」「きそん十七」など、各地の風流踊で多く歌われる小歌を含んでおり、比較的古い成立の曲かと思われる。「南さがり」の歌も崩れずに記録されており、大踊が盆踊に先行するように思われる。

(c) きのぎの

①「今年やよい年」

表1-19

砂坂〔下野〕	中西目〔松原〕	小田(中西目)〔村田〕	平山西之町③ 〔松原・下野〕
ことしやよい年、 穂に穂が咲いて、 わせにや八石、 なかくて九石、 ましておくてにや、 よねじゅは三石、 ますはしろがね、 とかきはこがね、 ますもとかきも、 しやりとおいて、 殿のお倉米、 箕ではかる。	アリヤーセイ コリヤーセイ 今年やよい年 穂に穂が咲いて わせにや八石 なかくてにやくこく アリヤーセイ コリヤーセイ ましておくてにや やれ十二石 ますわしろがね とかきわこがね アリヤーセイ コリヤーセイ ますのとかきを しやりとおいて とのおくらこの みでひてはかるも	今年しやよい年、 穂に穂が咲いて、 早生にや八石、 中生にや九石、 まして晩生にや、 やれ十二石、 ますはしろがね、 とかきはこがね、 ますのとかきを、 しやりとおいて、 殿のお倉米を、 みでひてはかる。	ことしやよい年 ほにほが咲いて わせにや八石、 中手にや九石 まして奥手にや 十二石 ますもとかきも ふり捨て 俵ひきよせ みではかる

この歌は類歌がかなり多い。『落葉集』巻五「元禄十六年未之年祇園町踊之唱歌」3「さゝら男踊」に「やららめてたや やんらたのしや ことし世の中ほにほが咲いて わせやおくてと 御神楽を」(東京芸大本)とある。風流踊では、近畿地方に、滋賀県草津市渋川の花踊のお寺踊り(「本田12」四九一頁)をはじめ、三重県松阪市阿坂(「本田12」五二二頁)、同西野鼓踊(「本田12」五三八頁)など多数。鹿児島県内でも知覧町上別府ウデコオドイに類句(「下野6」三四一頁)がある他、三島村硫黄島九月踊の疱瘡踊に「今年や良い年穂に穂がないた 升は白金 斗掻は黄金」(『三島村誌』一二九三頁)、黒島片泊の疱瘡踊に「こちしやまんしやくほにほが咲いて、俵もちよせよいみではかる、ますは白かねとかきはこがね」(『三島村誌』一三六八頁)、また片泊の太鼓踊にも「今年や万作穂に穂が咲いて、あらが七石なかくてが五石：殿の御倉に納めおく」(『三島村誌』一三五〇頁)など、三島村・十島村に例が多い。

②「我と思えよ」

表1-20

砂坂〔下野〕	小田(中西目)〔村田〕
われと思えよ、恋の道、 見染めてあうほに、 たとえあわずとなじみつつ、 忍べしのぶの通う道は、 待つはつらいや、気の毒や。 想いながらも、あいたや見たや、 便りを求めてやるふみは、 必ず今度のかえれじやれど。 類歌は未詳。	われを思う夜は恋の道、 そめて会ひほうに 小たとして会わねどなじみつつ、 忍ぶしのぶの通う道は まつはつらいあゝ気の毒や、 思う夜ながらも 会いたや見たや、

③「ことしの年は」

表1-21

砂坂〔下野〕	小田(中西目)〔村田〕
ことしのとしは、みるくの年、 しろがねのべて、たすきかけて、 こがねのますに、さんさようてはかる、 しなのエー。	今年の年はみるくの年よう、 しろがねのべて、たすきにかけて、 こがねのおますに、さんさよー、おてではかる。

類歌が多い歌。長崎県大村市黒丸踊入羽「今年よりしてみろくとし」(小異あり)〔本田13〕四四一頁)、鹿児島県長島町指江鉦踊にも「今年の年はヨネはかる」(下野敏見一九八〇、九〇頁)。トカラ列島では、十島村口之島盆踊に「今年の年わミロクな年よ、しろがねのべて たすきにかけて 黄金のますでソラよねはかる」(『十島村誌』一〇四四頁)、十島村平島盆踊に「今年の年わミロクな年よ、しろがねのべてタスキにかけて 黄金のますでよねはかる」(『十島村誌』一〇五五頁)、十島村中之島盆踊トシの大踊に「今年の年は弥勤な年よ、カラで三尺、穂に出て五尺、道の小草にヨネがなる」(『下野3』三一六頁)の類句がある。三島村黒島大里太鼓踊「高橋殿」にも「白金ののべてたすきに掛けて 黄金の升で米はかる」の句がある(『三島村誌』一三二二頁)。

④ 「ぎのぎのに」

表1-22

砂坂〔下野〕	中西目〔松原〕	小田(中西目)〔村田〕
ぎのぎの、あけの六ツごろ、いましやらしやらり。もしやわかれの、そのふみ。なじまぬむかし、なじじやもの。いくようか、朝あめせいなさ、あけの、せめうらり、こがる。めわこえ、いくるむ。せめて一夜は、してのみよがなあ。しなあが、たとえあわずと、ふみさやにぞば、ふみは見もせぬ。ふみは見もせぬ。わせじやものよう。花は折りたし、こずえは高し、心づくしの、心づくしのみるつらよ、通うは嵐のみすがらで。	ぎのぎのに秋のむつごと今はしやらしやらにもしや別れの袖の文なじまぬ昔なあじやもの幾夜重ね情けのおせよう裏にこがるる身は恋ほどもせめてひと夜はしてもみよがかしなたとえあわずと文さえみれば文は見せぬわしじやもの花は折りたしこずえは高し心づくしの心づくしの見るつらよ、通う嵐の夜もすがら	きぬのきの秋のむつみごといまはしやらしやらえー、もしや別れのそでの文、なじまの昔なあー、じやものゆく夜かさねてえい、情のおうせよう、うらにこがるる、恋、ええころもをせめて一夜会わしても見ようかなしなあ、たとえあわずと文さえみれば、文はみもせぬ、わしじやもの、花はおりたし、こずえはたかし心づくしのみるつらさよ、通うあらしの夜もすがら。

次の歌が典拠と思われる。

◇ 「きぬく」(『琴線和歌の糸』巻四2、芸大本)

きぬくくにあけのむつこといまさら。うきはわかれのそてのうみ。なじまぬむかしましじやもの。いくよすかはせしなさけのすゑは。うらみこ

がる、身はこひころも。せめてひと夜はきても見よかしな アイテ たとへあわずとふみさへみれば。ふみはいもせのくはししやもの アイテ はなはおりたしこずえはたかし。こゝろづくしのく。身はいかに。かよふあらしのよもすから

この歌は、元禄享保期に舞台を勤めた歌舞伎役者杉山勘左衛門の作詞、宝永享保期の歌舞伎三味線方柴崎勘六の作曲とされ(『歌系図』など)、もとは歌舞伎の所作で用いられたものか。『琴線和歌の糸』以下の歌謡書に収録され、地歌として、現在も名古屋で伝承されているという。一八世紀半ば頃の『色里名取川』『艶歌選』にも載せられており、広く遊里・座敷などで歌われたらしい。

⑤ 「ひがしや町山」

表1-23

砂坂〔下野〕	小田(中西目)〔村田〕
東はまちやま、西は女郎まち、なかは天下の、さんさう寺町。しなのエー。	東町山、西しやじよの町よ、中は天下のさんさよ、お寺町、しなのえー。

末句「しなのエー」は、③「今年の年は」末句と共通するので、本来はこの歌のだったのかもしれない。⑤の部分の類歌は未詳。

⑥ 「今年やめでたし」

表1-24

砂坂〔下野〕	小田(中西目)〔村田〕
ことしやめでたの、まんぞしのごはん、波にそろうた、波にそろうた、穂の葉いろは山をこえて、いとこのうれしさ。殿のお倉米、みではかる。しまだみね、たわらくくりて、しめの声しめたてたエー。これのお庭に、はえたてたエー。	今年やめでたしのまんぞうしのごはんじょうひよなみにそろたよ、なみにそろうたえーいねのはいろ、やまをこえて、いとこのうれしあう、殿のおくらごめよ、みではかるよ、島田峯、俵くくりてしめのこえ、しめたてたえー、これのお庭にしめたてたえー。

類歌は未詳。

⑦ 「南さがりの」

「たけなが」⑦に既出。

(二) 南種子町 上中・島間・平山広田・平山西之町

西之に引き続き、南種子町その他の地区の踊歌についてみてゆきたい。現行地はないが、南種子町の中心部である上中地区をはじめ、島間、平山広田、平山西之町で踊歌が収集されている。掲載書は次のとおり。

- ・第三章第三節、松原氏による現行詞章〔松原〕
- ・「下野5」上中上野…二七二～二七五頁、平山広田・平山西之町…二六六～二六九頁、島間田尾…二七一～二七二頁〔下野〕
- ・『郷土研究』旧制種子島中学校編、昭和一〇年（一九三五）。第三章第三節の引用による。〔郷土研究〕

(a) 上中地区（信光寺）

南種子町の中心部に位置し、かつては上野の信光寺で盛んに盆踊が踊られていた。比較的多くの踊歌が残されており、諸本に異同もみられる。

①「サヨイ」（扇踊）

表1-25

サヨイ ヨーイ ヨーイ ヨイヤ このいかに せんちよう二丁目の糸屋が娘 下野「糸屋の娘」 姉は二十三、妹ははたち 姉の二十三のぼみ 下野「のぞみ、郷土研究『望み』」はないが 妹欲しゆさに伊勢願 郷土研究『望み』たてて 伊勢にや七たび 熊野にや三度 愛宕様には月々参る。	信光寺〔松原〕
--	---------

「本町二丁目の糸屋の娘」は、さまざまな歌謡・浄瑠璃に取り入れられ、流布した歌。『落葉集』巻四67「糸屋娘踊」（国文研本）に「本町式丁めを…とふりとふはないが、糸や娘は廿一はたち…姉にのぞみはすこしもないか 妹見るめはしんとろく〜とんと おやを見るめはさるまなこへ…」。千葉県館山市洲崎のみろく踊に「本町二丁目の糸屋の娘 姉が二十一 妹が二十 姉に少しも望みはないが 妹ほしさに七願かけて 伊勢へ七度 熊野へ八度 愛宕様へは月まあり」（「本町11」六八四頁）など多数。鹿児島県三島村硫黄島九月踊の祭文幣に「本町二丁目の糸屋が娘 年は十六器量もよし…」（『三島村誌』一二九六頁）がある。

②「いついろ」

表1-26

上中上野〔下野〕	一ついろの深さでは、二でにこにこ笑い顔。三で盃さしたのち、四つよそめで見ておいた。五ついもせんはなじゃもの。六つ昔がおもわれた。七つ涙がこぼれゆく。八つやよいの花折りて、九つこの子がここに住む。十でトトさまとめられた。
----------	---

類歌は未詳。

③「米のなる木」

表1-27

上中上野「せど島節」〔下野〕	上中付近「佐渡島」〔郷土研究〕	平山西之町「小豆島」④〔松原・下野〕
我は、せど島まいだゆうが娘。 米のなる木をまだ知らぬ。 米のなる木を知らんちゅうは、うそよ。 八畳たみみの裏を見れ。 八じようたたみみの裏さえ見れば、米のなる木にちがいなし。	ヒヤー私しや佐渡島萬太夫が娘 アーヒヤー 米のなる木をまだ知らぬ 米のなる木を知らんちゅうは、嘘よ 八畳たみみの裏を見れ	われはしよるじまの万田勇の娘 米のなる木はまだしらん 米のなる木をしらんなら教う〔下野〕「教み」 八じよ〔下野〕「八畳」 たみみのうらを見れ 思うちやたららん 只おきやならん いつそあの子が死ねばよか

「米のなる木」以下は、岡山県のよく知られた民謡を取り入れたもの。岡山県内でも種々あるようだが、岡山市南区旧福田村の道中歌に「私や備前の岡山育ち、米のなる木をまだ知らぬ、米のなる木を知らねば見しよう、八畳たみみの裏御覽じ（下略）」や本庄村（現和気町）の田植唄などがある（『日本民謡大観』中国篇二九一・三三九頁）。類歌は各地にあり、宮崎県西都市銀鏡の木おろし唄に「ヤー身どまヨ ヤー小豆島の万太夫がヨエ娘 米のなる木をヨーイヤーまだ知らぬ 知らずば教よう 八畳たみみのヨー イヤー裏を見よ ヨヤールみようかいな」（『日本民謡大観』九州篇（南部）一七九頁）に近い。神奈川県足柄下郡の盆踊歌に「わたしや備前の岡山そだち、米のなる木はまだ知らぬ。米のなる木はわらではないか。（下略）」（『日本歌謡集成12』三九頁）、福井県敦賀郡の子守歌に「わしは備前の岡山育ち、米の生る木をまだ知らぬ。米のなる木を知らいで困る。」（『日本歌謡集成12』三二二頁）など各地に分布する。

④寺踊1 (「さても見事な」)

表1-28

信光寺〔松原〕	上中上野〔下野〕
さても見事なお寺のけいよ これのお庭に若松植えて 松の緑に霞降りて 枝にはかねがなりやこだれた	さても見事なお寺のけいよ。 これのお庭に若松植えて、 枝には金がなり、いやこだれた。

いわゆる寺誉め、館誉めの歌。類句は各地に多い。

⑤寺踊2 (「これのお庭」) 西之「つんたん拍子」③「これのお庭」参照。

⑥「なお姫」 西之⑨「うたせかねたる」参照。

⑦「くずの葉」

表1-29

信光寺 「くずの葉」 〔松原〕	上中上野 「くずの葉」 〔下野〕	上中付近 「葛の葉信太の狐」 〔郷土研究〕	島間 大「二才」② 〔松原〕	田尾盆踊中踊 大「二才踊」② 〔下野〕	平山西之町⑧ 「父をはなれて」 〔松原・下野〕
たすね出て見よ いずみまで、 篠田が森のく ずの葉を 昼は篠田に住 まうとも 夜は来て添え 子のそはに	尋ね出て見よ、 いずみまで、 篠田が森のく ずの葉よ。 昼は篠田に住 まうとも、 夜は来てそえ 子のそはに。	尋ね出て見よ和 泉まで 信太が森の葛の 葉を 昼は信太に棲ふ とも 夜は来て添ふ 子のそはに。	昼は信濃に住 まうとも 夜は来て添え 子の傍に	昼はしのだに 住まうとも、 夜は来てそえ このそはに。	父をはなれて か下野かなじ かかさまを 尋ねでて見よ 泉まで しのたの森の くづの葉を ひるはしのだ にすまうとも 夜は来てそえ 子のそはに
あまり話が子 の思いさに わしもだんだん 目をかきまよう	カカガキツネの 子じやほどに、 あまでわが子 の思いさに、 わしもだんだん 目をかきまよう。	母は狐の身じや 程に 余りわが子の思 ひさに わしもだんだん 目をかくる	赤子は狐の子 じやほどに 尋ね来てみよ 泉まで	カカはキツネの 子じやほどに、 尋ねて来て見よ 泉まで	あわれやすな のむねの内 思えはゆめの 浮世かな

古浄瑠璃「しのだ妻」(伊藤出羽掾・山本角太夫)や義太夫「芦屋道満大内鑑」
でよく知られる信太妻(葛の葉)の歌。風流踊にも関連する歌は少なくない。
『山家鳥虫歌』89「尋ねてござれ恋しくば、わしは信太の森に住む」(岩波文庫)

五六頁)、『巷謡編』(高知県)仁淀川郷窪山村山歌「恋しくは尋ねござれよ、
信田が杜の葛の葉」(『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廼一曲 琉歌百控』三一五頁)
など。鹿児島県内では、国分市下井のドケ踊に「童子が母」があるが、本文は
異なる(『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』大隅編七〇頁)。

⑧「頃は弥生」

表1-30

信光寺〔松原〕	上中付近〔郷土研究〕	竹屋野⑤〔松原・下野〕	増田塩釜神社神楽
頃は弥生の末つ方 君行方をたすねんと あこんの浜〔下野〕「あこ うの浜」にぞ舟にのる 漕ぎ出でて見れば 南蓮寺 松の葉色や常盤山	頃は弥生の来つ方 君の行方を尋ねんと あんこの浜にぞ船に乗 る 漕ぎ出で見れば なんでん寺 松の葉色や常盤色 沖に並みおる桜島 こんぢんだての雲の帯 腰にさしたる綾衣	ころしもよいの(今年 もやよい)末つかた、 きみがゆくえをたすね んと、 あこぎの浜より舟に乗 り、 こぎいでみれば、 松の葉よ、 松の葉いろは、ときは山	頃は弥生の中の頃、 君が行方を尋ねんと、 赤尾木の浜より舟に乗 り、 漕ぎ出で見れば 何千里、 松の葉色はときばやま
何時も絶えなき塩浜や 釜で塩たくようふう煙 消えて跡なきはかなさよ 沖になみおるさくら島 こしじんだての雲の帯 腰にさいたる小夜衣	何時も絶えなき塩浜や 釜に火を焚く夕煙 消えて跡なき儂さよ	いつもかわらぬときば色 浜でしおたく夕煙、 消えてあとなくはかな さや。	いつもたえせぬ塩釜よ、 浜に塩たく塩けむり立つ まことが塩釜よ

地区により、後半の順序が入れ替わっている。増田塩釜神社の詞章は、「下
野5」二〇九頁に掲載。類歌は未詳。「あこん(あこう・あんこ)の浜」が赤
尾木なら、種子島で作られた歌だろうか。

⑨「春は花見に」 西之「つんたん拍子」⑩「春は花見に」を参照。

⑩「あらいたわし」

表1-31

信光寺〔松原〕	上中上野〔下野〕	平山西之町⑤〔松原〕
あらいたわしの梅若は 想い切れとは曲もなや	あらいたわしの梅若は、 思い切れとは、きよくもなや。	あらいたわしや梅若を 思い切れとはきよくがない

唐天竺にはよも行かじ 東は蝦夷へ松前の 西は九州薩摩湯 南は紀の路須磨の浦 北は秋田や佐渡ヶ島 虎伏す 野辺の奥までも 尋ね巡らりよ会はりようと あら恋しの梅若は ああ梅若とは呼びこがれ ともない鳥が飛びつれて 迷いゆく道よ うとうとと	唐天竺へは、えも行かぬ。 東はえぞえ、まつまえの 西は九州さつまたがた、 南はきのじ須磨浦、 北は秋田の佐渡が島 とらふす のべの奥までも、 尋ねめぐらりよ、あわりようと あらこいしの梅若は。 ああ、梅若とは呼びこがれ、 ともないカラスが、とびつれて 迷い行くみちよ、うとうとと。	からてんじくにはえもゆかぬ 東はエゾへ松前の 西は九州薩摩方 南は紀の路須磨の浦 北は秋田や佐渡島 とらふす 野辺の奥迄も 尋ねめぐらりよ、あわりようと あわれ恋路の梅若は こよ梅若と呼びこがれ ともないからすもとびつれて まよい行く身のウトウトと えんな切髪女とは しらん旅路のさよ千鳥
---	---	---

梅若といえは、謡曲「隅田川」が思い起こされるが、シテは梅若の母で、梅若は亡霊としてわずかに登場するのみ。天和三年（一六八三）刊『浄土和讃図絵』に載る「梅若丸和さん」は、古浄瑠璃の隅田川物の設定をそのまま和讃にしたような内容で、この踊歌とは別文。踊り口説にも梅若の歌はあまり見かけない。むしろ次のような歌が類想といえようか。

◇花王河（三重県松阪市松ヶ崎の精霊踊、現地歌本・「本田12」五五〇頁）

花王河一人もちたるが。親に知らさず国を出る。母は悲しやこいしたい。
大和山城尋ねたあれど。花王河にはゑいあわぬ。南の方はエ伊勢の国。熊野浦の船の底まで尋ねたあれど。花王河にはゑいあわぬ。花王河かわいや尋ねあを。東をさしては加賀わかさ。たづねますれどゑいあわぬ。北をさしては美濃尾張。尋ねみれどもまだあわぬ。西をさしては筑紫瀧。九州残らず船のそこまでたづねたあれど。花王河にはまだあわぬ。諸国ほうばうたずねたが。いゝま聞いけば播磨の寺に工居るやとの。いさゝらたづねて連れもどる。

⑪「大黒殿」

表1-32

信光寺〔松原〕	上野〔下野〕
大黒殿とナー 宝くらべの白ねずみ ヤチンチン ツイ ツイツ まけ ツイツ イヤ袋のうちでもゴーンゴーン	大黒殿となあ、宝くらべの白ねずみ。 ヤチンチン、ツイツイ、あけツイツ。 いや、ふくらぶのうちでも、ていせいせいぞう。

打出の小槌に鈴の音 シャンコエーシャンコ シャンコ シャンコエー 六つ無病息災に 七つ何事無いように 八つで家敷をしんじよに カラリンとふまえた 九つこぐらを建ててエイエイエイとおし建てた あは柱もおし建てた	六つ無病そくさいに、 七つ何事無いように、 八つでやしきをちりんとふまえた。 九つこぐらをたてて、えいえい、えいとおし たてて、 あのはした（柱）もあしたてた。
---	---

島内ではこの地区の他に伝承がない。典拠となつたのは次の歌。
◇「福神出端 嵐三右衛門」（『落葉集』巻三一、東大黒木文庫本）
そももめでたいいいわい申よ ゑびす三ぶ殿と大黒天が どつかとふんだ俵に（中略）

大黒殿はいなよいく たからくらべのしろねずみ ちゝいすいついっだ
きついつ 袋の内はごそごそ 打出の小つちにすゞのおと しやんこく
くくやくく 六つ無病そくさいに 七つ何事無いよふに 八つやしきをし
んちにぐわりりとひろめた 九つこぐらをたつるくくく 地形をゑいや
くくゑいくくくともつきたつる なには入江の三つの浦風
エビスと大黒の二福神を歌つたもので、大坂の歌舞伎役者嵐三右衛門（おそらく二代目）が福神の一方を演じた所作の踊歌。上演作品名・時期は不明だが、元禄一七年（一七〇四）刊行の『落葉集』に載せられているので、元禄年間の上演とみられる（『松の落葉』巻三にも掲載されている）。種子島では、『落葉集』の踊歌からエビスの部分を除き、後半の大黒の歌を用いている。

⑫「みのとーみの」 西之「つんたん拍子」⑦「美濃とおみの」を参照。

⑬「おもいよある」

表1-33

おもいよあるたまかずら、風にちれちれ、ささの葉を、 しねぎりかけて、かみよかみ、あわせてたべと、ここのえに、 あとを見捨てて、思いがお。 こよいの波に、浮き沈む、おやのりんぎよの、よわくるま。 あとにうかべる、はしりつく、よいかんばろや、たごの海、見わたせばふじの山。	上野〔下野〕
--	--------

類歌は未詳。末句は「由比蒲原」だろう。

⑭ 「五反畑」(退場歌)

表1-34

信光寺〔松原〕
五反畑の真ん中もとに細い小女郎が「下野」が「なし」青菜を摘むが あの娘はよい娘じやきれいな生まれ 類歌は未詳。

(b) 島間

第三章第三節に記されるとおり、島間の盆踊には、小二才(コニサー)踊と大二才(オオニサー)踊があった。「下野」には「田尾盆踊」の中踊として掲載されており、松原氏収集の詞章と小異がある。

表1-35

小二才(コニサー)〔松原〕	コニサー踊〔下野〕
<p>① 出場 山奥四五軒目に茶屋メがござる 皆あがれ</p> <p>② 本踊 一里ある島に粟とキビヨ植えて、淡路もどる夜の君はまた、頼む頼むホソノカヤ</p> <p>③ 送れくれ送れシラスまで送れ、シラス乗りいだせば御風また、悪さ悪さホソノカヤ</p> <p>④ 引場 年は十六ささげのお豆じょう、誰にちぎらせよ初豆を</p>	<p>(出端) 山おく、四、五軒目に、ちやいあげがござる。皆あがれ。 (本調子) ① 一里ある島に、粟とキビを植えて、あわじ戻るよのキビのまた、ワルサワルサ、ホソノカヤヤ</p> <p>② 送れ送れ、しらすまで送れ。しらし戻るよ。みかげまた、タノムタノム、ホソノカヤヤ。 (引端) 年は十六、ささげのおまめ女、誰にちぎらしよ、初まめを。</p>
大二才(オオニサー)〔松原〕	オオニサー(大二才)踊〔下野〕
<p>① 出場 恋の手習い敷島原よアヲイヤサーノサ</p> <p>② 本踊 昼は信濃に住もうとも 夜は来て添え小の傍に 赤子は狐の子じやほとに 尋ね来てみよ泉まで</p> <p>③ 引場 馬毛に小屋うついたづら阿呆じやよ 馬毛は浮島離れ島</p>	<p>(出端) 恋の手習い、しきしまわろよ。アラよいやさのぞ。 (本調子) ① 昼はしのだに住まうとも、夜は来てそえ、このそばに。 ② カ力はキツネの子じやほとに、尋ねて来て見よ、泉まで。</p>

小二才踊の「山奥四五軒目」は、西之「つんたん拍子」①「さても見事な」の末句にあたる。大二才踊の「昼は信濃に」は、上中⑦「くずの葉」に既出。

(c) 平山広田

〔松原〕と〔下野〕の掲載歌に出入りはなく、異同もわずかなので、全曲の掲載は省き、類歌を見出したもののみ摘記する。

① 初めの踊「せーじゆうを あなじの」類歌未詳

② 「灘にこそ」

表1-36

平山広田〔松原・下野〕
<p>灘にこそ灘にこそ はりまなだ はりまなだにこそ 瀬がござる つしまどの すけくが瀬戸で いかりよ下けても 汐だたり こいと いうたとも「下野」とて」 行かれるものか灘は四十五里 波の上</p>

前半の類歌は見出だしていないが、「来いと言うた」とては、『山家鳥虫歌』長門315に「来いと云たとて行かれる道か 道は四十余里夜は一夜」(「岩波文庫」二〇一頁)など、多数の類歌がある。「岩波文庫」の注に詳しい。

③ 「たてまつ」 竹屋野の盆踊歌に類歌がある(後述)。

④ 「一重二重」

表1-37

平山広田〔松原・下野〕	『松の葉』巻二「長歌」47「かぞへ歌」
<p>一重二重みよよえ このえ 十できんぎんぎましよか おはらし じゆうはら 恋の里めさんか つゆにうけて どうで とぶくから「下野」とうから」 きらめく星のかずかず あかつきの明星よ 西にちどり東につとり ちどりちどりという時は おしぎを とりからたらさおいて からちどめくかに 手打ちかけて めーじよーよ なせもどるよと いはいば 小腰にだきついて 幾手打たりよか 幾手打つ にくて打たりよか 手がそいた</p>	<p>(前略) ひとへふたへや三へ八へ 九つこひにきましよか をはらしつはらやせの さと しばめさぬかつゆふみわけて とをでとつから ちらめくほしのかずくへ あかつきのめうじやうが にしへちろり ひが しへちろりくくくとするときは、 あふきおつとりかたなきいて たちのつかにてをうちかけて いのよなせもどるよと いふてはたもとにとりついた いとしけりよこそしとてうて にくかうたりよか手がそれて</p>

下段に示したのは、典拠となった『松の葉』の「かぞへ歌」後半(東京芸大

本)。同歌は野川検校の作とされ、後年の歌謡書、寛延三年（一七五〇）刊『糸のしらべ』から『歌曲時習考』へと継承され、現在も地歌として伝承されている。なお、元歌は当然一から十までの数え歌形式になっているが（右の引用では省略）、盆踊歌は九つ以下だけを取り入れている。そのうちの「暁の明星：取りついた」は、狂言小舞として広く知られており、引用も多い。

- ⑤ 「南さがり」 西之「たけなが」⑦ 「きのぎの」⑥ に既出
- ⑥ 「そのき」 横山「春の夜の」の後半に同じ（後述）
- ⑦ 「大阪の城」 類歌未詳

⑧ 「さらは」
典拠となつたとみられる兵庫口説の詞章を下段に掲げる（兵庫口説二六～二七頁）。

表1-38

平山広田〔松原・下野〕	兵庫口説「八しまのてがら 那須の与市」
さらはこれからくろいて「下野」ごといて「見ましよ 国を申さば下野の国 源氏平家の御たたかいに 平家方の沖ある舟よ 的に扇をさしさしければ あれをいそかに「下野」ひそかに」 射落すなら ば ときよ味方も見ようなされ 那須の与市は御前の務	その名ふれたる 下野の国那須の与市が誉れの次第（中略） 四国讃岐の八島の磯で 源氏平家の御戦いに 平家方より沖なる船に 的に扇を立てたる時に 九郎判官この由御覧じ 那須の与市を御前に召され 与市御前に相詰ければ（下略）

那須の与市（与一）の扇の歌は、各地の風流踊に取り入れられているが、詞章が異なるものも多い。与市の生国下野の国について、冒頭で歌うものは、兵庫口説の歌本に依拠していると考えられる（それぞれの土地に伝わったのは別の媒体かもしれない）。平山広田の踊歌も、兵庫口説の前半を適宜抜き出したとみてよいだろう。この曲を看板にしている岡山県笠岡市白石島の盆踊もこの系統。また、種子島島内では、西之表市池田の願成就祭で「ヤートセー」として踊られる「那須の与一」（「下野5」二二〇頁、三二六頁）が、兵庫口説のほぼ全文にあたる。

⑨ 「屋久のゴエンボーシ」 類歌未詳

(d) 平山西之町

平山広田と同様に、「松原」と「下野」の掲載歌は同じで、異同も小異にとどまる。掲出済みの歌も多いので、類歌を見出だしたものののみ摘記する。

① 寺踊

表1-39

平山西之町〔松原・下野〕	めでたやお寺に参りて見れば からえのびようぶによりんをすえて御経遊ばす有難や めでたやお寺の泉水みれば 水かと思えば水かねじよるよ ごがねの「下野」ごがねに「御しゆぎが 湧いて出る めでたやお寺のみうやま見れば 七けんみまやに七匹たて ごがねのくつわが七むすび
風流踊に多くみられる寺誉め・館誉めの歌。三重県松阪市阿坂の鼓踊「お寺踊」に「御寺に参りて、御門のかかりを見物すれば、御門は唐木、唐絵を彫らす、扉の装束金子づくし、絵庇門皆唐木」（本田12「五二二頁」）など。	

- ② 「二九の十八」 西之「つんたん拍子」⑤ に既出
- ③ 「今年よい年」 西之「きのぎの」① に既出
- ④ 「小豆島」 上中（信光寺）③ 「米のなる木」に既出
- ⑤ 「あらいたわし」 上中（信光寺）⑩ に既出
- ⑥ 「きのうきよう」

表1-40

平山西之町〔松原・下野〕	きのうきようまでひと昔 浮物語と奈良の里 この世を早くさるざわに 後に残りし親の身は さかさまなれとたみき山 しげか山迄迷いつる 返れとなけれかえらのは かたきは鹿の巻筆に せめてえこら浮世がし
--------------	---

短い歌だが、典拠がある。

◇ 「十三かね（鐘）」（『琴線和歌の糸』巻四32、芸大本）

きのふはけふの一むかし うきものかたりとならささと この世をはやくさるさわの。みづのあはとやきへはて、ゆく。あとにのこりしそのおやの。身はさかさまなりしたむげやま。もみぢふみわけさほしかの。かいろとなけどかへらぬは。しでの山ちにまよひごの。かたきはしかのまぎふで

に^ヨ せめてゑかうをうけよかし (後略)

いわゆる南都十三鐘伝説(奈良の十三歳の子供が殺生禁断の鹿を殺し、石子詰の刑になった)によつた歌で、『歌系図』は近松門左衛門作とするが、『落葉集』『松の落葉』には収められず、芝居歌という確証はない。地歌で現在も伝承される他、兵庫口説熊野節「南都十三鐘」もほぼ同文(『兵庫口説』一二五頁)で、広く行われた。平山西之町の歌は元歌の冒頭部だけを取つたもので、この後、十三鐘伝説の本題に入る。

平山地区の祝儀歌「西目だし」にも十三鐘伝説の歌が取り入れられるが(「下野5」二四五頁)、地歌・兵庫口説とは別文。鹿児島県川辺町山田下之口の太鼓踊の「十三鐘」は、「西目だし」とほぼ同文(『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編二二九頁)。

⑦「御門立」「下野」「御門のたち」

表1-41

平山西之町〔松原・下野〕

御門の立ちよやら見事 をきどのわきのゆるしがき こがねのつたがまいかえる
御庭のかげを見て見れば 四方の隅に松うえて 森のかかりはやら見事
当侍を見てやれば そやとえびらと 千矢こそ掛なさるこそやら見事
み台所を見てやれば すぐめやつばめが菓をくんで 十二のかいごをふみそろえ
末繁昌こそ宝なり

館督めの歌。風流踊歌に類句が多い。一例として、広島県庄原市本村町「こきりこ踊」(古限講踊)の「御門懸り」を次に抜萃して掲げる(囃子詞など省略)。

○こなたの御庭へ年々参ル 千代久しくのおにわかや 皆踊り子もそろりと直れ 扱笠のはをゆり直スく 扱古切りかふを打ならスく

○こなたへまいり御門懸ヲ詠ハ 白金延て柱ニ立て 古金の扉を御立有 まんずハ見事やら見事 (中略)

○差次ニ御にわ懸リヲながむれば 四方下りニ中高ニ 丸ナ御庭と打見へて まんすハ見事やら見事

○差次ニとうさふらいをなかむれば 七疋立共打見へて 七疋の中ニ立たる うくるの駒 庭ニひん出し 西のよ桜ニつなぎとめ つな引度らに花のよちるらん 花のよちるらん (下略) (『芸備風流踊り歌集』二二頁)

また後半については、広島県熊野町の「神楽踊り」の「み熊野寺踊」に(「前略」)○乾の角の唐松の○一の小枝に二羽の鶴○国静にと巢を懸て○十二の玉子を産揃○これが餌飼をするときに○浮世は弥勒世は盛る(『芸備風流踊り歌集』一二〇頁)、岐阜県揖斐川町諸家神の踊り「鎌倉紅梅」に「鎌倉之紅梅唐梅元カラ黄金ガ薦ガ巻キ候 ウラニハ黄金之梅ガ成ル、西ヘサシタル一ツノ小枝ニ 早ブサ小鷹ガ巢ヲ掛ケタ、十二ノ卵ヲ産ヤ揃ヘテ 十二ノカイゴヲ飼イ育テ、五ツモトコ、ニ置ヤ目晒テ 七ツモト連テ後ヲ詠ムリヤ 後ノ詠之コイシサニ」(『揖斐川町の太鼓踊り調査報告書』三九一頁)などの類句がある。揖斐川町の例から、「玉子(卵)」は「かいご」と読むと確認される。

⑧「父をはなれて」 上中信光寺の「くずの葉」に既出

⑨「西や東や」

松原「泉酒 泉の酒のわく見れば」 下野「泉坂。酒の泉のわく見れば」
松原「ないようもなるろーたのもしや」 下野「ないようもあるわーたのもしや」という異同がある。類歌は未詳。

⑩「あおり港」 類歌未詳

⑪「わしが女房」

表1-42

平山西之町〔松原・下野〕

わしが女房をほめるじゃないが 立てばひき白 すわれば茶白
あゆむ姿はなべのふたのさんはずれ 今日去ろう明日去ろうと
思い居る中に夜にもよにもとちよーたらめーが 出きた
わが子なればこそ さよーたらめーもむぞか えんは子にあるまいよ 去りやならん
一見すると民謡のようだが、典拠がある。

◇キルリルリ(『弦曲粹弁当』二編27、『続日本歌謡集成4』二五一頁による)
よそのかゝ見て、こちのかゝ見れば、立テばたてうすすわればひきうす、
あるき姿はなべふたのさんはづれ、けふさろあすさろとおもふうち、
とゝによう似た子ができた、ゑんにつるゝと思ふなよ長太郎よ、かゝは
かゝじやが子がかわいい、しよんがいな、しよがいナ所じやござりや申さん、

其さき申さばたいれう、キルリルリくくくく、きるにきらぬわがおもひ、しよんがいナ。

『弦曲粹弁当』二編は天明三年（二七八三）刊。上方の流行歌を集めたもの。右は座敷の座興歌などだろうか。

以上、平山西之町の踊歌は、西之本国寺と上中信光寺の踊歌との関連が強いといえよう。

(三) 西之表市横山

現行の横山盆踊の歌謡については、以下の資料がある。

- ・第三章第二節、松原氏による現行詞章〔松原〕
- ・『横山物語』（第三章第二節参照）所収詞章〔横山物語〕
- ・「下野5」一七七〜二七九頁〔下野〕
- ・村田熙 一九九六a〔村田〕
- ・横山地区保存会歌本

これらのうち、年代的には昭和三年（一九四八）収集、同三五年成稿の『横山物語』が最も古い記録となる。各資料、本文異同はあまり多くない。松原氏による現行詞章と『横山物語』を対比させ、適宜異同を示すこととする。

① 「種取りて」

西之「たけなが」①「かねとりて」で各地区の異同と典拠を示したが、横山地区内の諸本異同は省いたので、ここに示す。

表1-43

〔松原〕	校異
種とりて 嬉しうれなわ 武蔵野の 狭くやあらむ 吾が思ひ草 しげれしげれしげれ 治まるみ代こそ めでたけれ	〔横山物語・村田〕「嬉し植縄」 〔横山物語・下野〕「しよもくやら」〔村田〕「しよもくらやん」 〔横山物語〕「吾が思ひ」 〔横山物語・下野・村田〕「茂れ茂れ」

② 「めでためでた」

表1-44

〔松原〕	〔横山物語〕	校異
フジめでためでたの 全喜めでためでたのおん殿屋敷 おぐら九つ ごもん八つ 船は千艘の おんカネ船よ カネをおろすわ 品川に	目出度く 目出度くの御殿屋敷 小倉九ツ御門八ツ、 舟は千隻御金舟 金をおろすは品川に。	〔下野〕「目出度く」なし 末尾「よ」〔下野〕なし、〔村田〕あり

館誉めの歌。類似の歌は多いが、末句「金をおろすは品川に」を含む歌は未見。

③ 「梅が枝」

④ 「鯉の小池」

表1-45

〔横山物語〕	校異
梅枝や、匂ひに影る吾が心。富士のうらばにゑおく露。 その名たまかづらかけしばし。	〔下野〕「えておく露」

③④の二曲は現在踊られていないので、第三章第二節には載せられていない。類歌は未詳。

⑤ 「阿久根千代女」

表1-46

〔松原〕	〔横山物語〕	校異
フジ 阿久根千代女は夜船漕ぐサア 谷唄 阿久根千代女はヨ夜船漕ぐハイヤ 足もたるんどヨ 手もたるんどハイヤ まして夜風もサ 寒かるろサア 寒かるろサ 寒かるろハイヤ まして夜風も寒かるろ	阿久根千代女は夜舟漕ぐ 足もたるんど 手もたるんど まして夜風も寒かんど。 阿久根千代はちこひ心 玉章又歌かへて 花の恋の女にやろと見た。 花の恋の女のおしやれこと うつゝ名の立つ玉章を 水に浮草笹の露 坊のとはせに舟乗りて 荒し待ちたる心して これも浮世の物語。	〔村田〕「寒かるど」 〔下野・村田〕「玉章に」 〔村田〕「やるとみた」 ※〔下野〕は「阿久根千代女はちこひやろと見た」を繰り返す。

「阿久根千代女」は横山盆踊を代表する歌。島内外に類歌は見出だしていない。この歌の中には、比志島国隆事件（第三章第二節に松原氏が詳説）が直接歌われていないことを、最初に確認しておきたい。

「千代女」は遊女の源氏名「中将」の訛だとする説がある。松原氏によれば『阿久根町郷土誌』が最初のようなだが、女性の名に「女」をつけて呼ぶ慣習は広くあり、とくに鹿児島では、各地の踊歌にも残る「千亀女」をはじめとして例が多い。「中将」とみるのは、うがち過ぎだと思ふ。

そして、「千代女」を歌った歌は少なくない。種子島内でも、大踊に「とたか千代女」がある。南種子町葦永の例は次のとおり。

◇「とたか千代女」〔下野5〕一二六頁

①とたか千代女と、ねたる夜は、あんじ忘れて、かじとらん、ふねのろびよ
うしを、はたと忘れた。

②ふねは出てゆく、出て走る。フネのとまりは、港さだめん。

（くずし）しまぼろ矢七は、きさくよし。はなの千代女に、いとま出す。

それがいとまか、おなさけか。ごくわんかたびらに、かんおび。それを千代女に参らしよう。ひいてもどるよきみは、夜明けがたのよーくぐも。

南種子町中之下（下中里）の「さんご踊」の中にも、同系統の歌が含まれている。

◇「さんご踊」〔下野5〕一七〇頁

（前略）

③（二）とたか千代女とわたる夜は、あんじ忘れて、かごとらん。船のろびよ
うし、はたと忘れた（中略）

（くずし）島原矢七はきさきよし。花の千代女にいとま出す。…それを千代女に参らしようよ。そのとき千代女がはなむけた。もといは、つかの花

ほうぞう（下略）

船と関わる恋の歌である点、「阿久根千代女」に通ずるところがある。

また、宮崎県美郷町（旧南郷村）神門の白太鼓踊「ちよじよう踊り」には、
一、花の千代じよう忍ぶには 御門鳴らさず戸ならさず よそにや知らさ
じ語らじを

二、ちよじよう忍んでいて見れば 東枕に窓の下 まどはきり窓戸はいか
ど うらにかけまど縁ものよ（下略）〔本田13〕三八八頁

とある他、宮崎県五ヶ瀬町鞍岡の白太鼓踊「いちごーもて」の中に「我が千代女 十九よの」の一節があるなど、千亀女ほどではないが、「千代女」の名も南九州の歌謡に時折みることができると断定はできないが、横山の「阿久根千代女」は、千代女と船に関わる元歌があつて、そこに比志島一件を思わせるような詞章を付け加えたのではないだろうか。全体の語調が不揃いな点からも、その印象がぬぐえない。

⑥「春の夜」

横山の「春の夜」は、その前半が南種子町平山広田⑥、後半が中種子町竹屋野②と共通する。竹屋野では、かつて盆踊として踊っていた頃の詞章と、現在「神楽」と称して踊っている踊歌の詞章に少異があるので、あわせて掲げる。

表1-47

横山〔松原〕	〔横山物語〕	横山校異 〔下野・村田〕	平山広田⑥ 〔下野・松原〕	
ソロ春の夜の 含唱 春の夜の 夢おどろかす くだかけの そのきぎみの ものおもい またおうちわ いつかわの ふかし心はかぐち草 根引きせんと 宵かわす 身わ捨て草で 捨てられて 流れしこの身わ 淀川の 何を頼りに浮き草の 波に揺られて うたかたのハンヤ きみな情けなや 目覚ましや	春の夜の 夢おどろかす 鶏の そのきみぐの 物思ひ また逢ふことは 五ツ川の 深き心はかぐち草 根引にせんと よいかわす 身は捨草で 捨てられた 流れし此の身は 淀川の なにをたよりに浮き草の 波に揺られて うた語合あはんや 君がなさけや なさけなや 物思ひ	〔下野・村田〕 「きみぎみの」 〔下野・村田〕 「深き心」 〔下野〕「捨て られた」 〔村田〕「捨て られて」	そのきのぎの ものをい、 またもおもてた、 いつかわの、 深き心はかわし草、 ねびきにせんと よいかわす。 身は捨草に 捨てられて、 流れし其の身は 淀川の、 何をたよりに浮き草の、 波にゆらゆら おたかたの。	

横山〔松原〕	〔横山物語〕	横山校異 〔下野・村田〕	竹屋野②盆踊 〔松原・下野〕	竹屋野②神楽 〔松原〕
それわ若草 身はうらみ草 なにぞそなたに 逢いたいはなし 秋の別れの せんなかれと よしなき恋を 人にせかれて面白や	それは若草 身は恨草 なにぞそなたに 会ひ度い話 あきもあかれも せん仲なれど よしなき恋も 人にせかれて面白や	〔下野〕「せん 仲なれど」 〔村田〕「あき も面白や」 〔下野〕「恋を」 なし	それは若草、 みはうらみ草、 何ぞそなたに、 あいたてはなし。 あきもあかれも せん仲なれど、 よしなき恋を、 よせなき恋を、 せかにせかせて、 まかせのころに、 せめてあわずと おもいがなし。	それは若草 身は恨草 アヒーヨー 何ぞそなたに 逢いたてはなし。 飽きもあかれも せんなれどアヒーヨー よせなき恋を よせなき恋を 急かに急かれてアヒー よせませの頃に せめて逢ずとも 思い悲しアヒーヨー

この歌には、次の典故がある。もともと一続きの歌であることがわかる。
◇「淀川所作」 山下亀之丞・沢村長十郎・岩井左源太(『松の落葉』巻六、
広島大本)

はるの夜のゆめおとろかす くだかけ(鶏)の そのきぬくの物思ひ
又あふ事もいつかわと 深き心にかこち草 ね引にせんといひかはす 身
は捨草のすてられて なかれし此身はよと川の 何をたよりにうきくさの
波にゆるるうたかたの あわぬは君がなさけなや ねたましや それは
わかくさ 身をうらみくさ なんのそなたにあ(飽)いたてはなし あき
もあかれもせぬ中なれと うけ出すかねのつるにはなれて つたなき我身
せめてあはれとおもへかし おくりかへし さみしやねやの 今はまくら
にか(香)ばかりのこるうきおもひ なをうらめしきかねのこゑ(下略)

この歌は、三名の役者の動向から、宝永二年(一七〇五)京都亀屋座(座本
大和屋甚兵衛)二の替「けいせい蓮の糸」で用いられた曲と考証される。宝永
元年三月刊『落葉集』には収められず、宝永七年刊『松の落葉』に収録されて
いることもそれを裏付ける。狂言本は残らないため詳細はわからないが、評判
記の記述などから、近松門左衛門作の浄瑠璃「淀鯉出世滝徳」(淀屋辰五郎關
所事件の当て込み)を歌舞伎に取り入れたと考えられている。
歌舞伎の評判もよかつたらしいが、この歌も人気があり、「淀川」の曲名で、
『琴線和歌の糸』『歌曲時習考』などの歌謡書に収められ、現在まで地歌で後半
部分が伝承されている。

⑦「福神丸」
表1-48

〔松原〕	〔横山物語〕	校異
ソロ今年やめでたいの 福神丸に 今年やめでたいの 福神丸に こがねの台に 松植えて 一の枝にわ ぜ二がなる 二のや枝にわ カネがなる すえの緑に 鶴据えて 何とさえする たちより聞けば 今年やよい年 宝な年よ 道の小草に こめがなる 思いのままに 満腹え	今年しや目出度いの福神丸に 黄金の台に松植えて 一の枝には錢がなる 二の八枝に金がなる すえのみどりに鶴すえて なにと囀る立ちより聞けば 今年しやよい年宝の年よ 道の小草に米がなる 思ひのまゝに満腹へ。	〔下野〕「八枝に」、〔村田〕 「八枝には」 〔村田〕「ないときえする」 〔下野・村田〕「宝の年よ」

豊漁・豊年を歌った祝言系の踊歌。前半、後半それぞれ類歌が多い。
◇鹿兒島県十島村中之島の盆踊(トンチの大踊)(『十島村誌』一〇四八頁)

- ①島の明神丸に かれよしを乗せて 思うた港に そよそよとササ
 - ②うれしゆめでたの 若松様よ 枝も栄えて 葉も茂るササ
 - ③ことしやよい年 穂に穂がなりて 道の小草に よねがなるササ
 - ④十七八わ 園山のツツジ 寝いよとすれば ヨイヤ起こすササ
- ◇佐賀県西松浦郡の「いもだね」(『日本歌謡集成12』六五七頁)
(前略) 盃のく台のまはりに松植えて、一の枝には金がなる。二とも栄え
しその枝に、白銀黄金のよねがなる。三と栄えしその枝に亀が囀して鶴が
舞ふ。なんと舞ふぞとたちより見れば、御家御繁昌と舞ひ遊ぶ。
「何と囀るか立ち寄り聞けば」という詩句も、風流踊歌に多用される。種子
島に近い十島村・三島村の例をあげておく。
◇十島村恵石島の正月の「マツバンダ」(『十島村誌』一〇三二頁)
殿の御門にうづらがふける 何とふけるか立ち寄り聞けば ごよわながか
れよわかかれ
◇三島村硫黄島九月踊の疱瘡踊(『三島村誌』一二九三頁)
殿の御門に鶉がふける：今年や良い年穂に穂がないた
◇三島村片泊太鼓踊「ごとうひゃ」(現地歌本、『三島村誌』一三五六頁)
松の小枝に鶉をすえて 何とふけるかたちよりきけば ことしや満作 穂
に穂が咲いて
「道の小草」も頻出する。『延享五年小歌しやうが集』一五八「今年世が良て

穂に穂が咲て、道の小草に銭がなる」(『統日本歌謡集成3』二五一頁)、熊本
 県高森町峰の宿の盆踊に「今年や豊年穂に穂がさいて 道の小草も米がなる」
 (『本田13』四三〇頁)など。

⑧ 「富士の嶽」
 表1-49

<p>〔下野・村田〕 富士の嶽から裾野を見れば、 下には吉原名所がござる。 美女な小女郎が、琴しやみせんで、 ひかせ歌わせ語らせ舞わせ、 みそめ心のおもしろや。</p>	<p>〔横山物語〕 富士のたけから裾野を見れば 下には吉原名所がござる 美女な小女郎がこと、しやみせん、で ひかせ歌はせ 語らせ舞わせ みため心のおもしろや。</p>
---	--

第三章第二節には掲載されていない。類歌は未詳。

⑨ 「五ツの水」
 表1-50

<p>〔横山物語〕 五ツの水は濁らじと 川せいとは 朧月 見るかたもなし吾が思ひさ。 たかわあらしで一すじに 寝ても覚めても愛しさに あまりてもりて面白や 墨と硯は恋仲なれど 人が水さしや薄くなる。</p>	<p>校異 〔下野・村田〕は「吾が思ひ、さだ かわあらし」と区切る。</p>
--	--

第三章第二節には掲載されていない。次に典拠となる歌を掲げる。

◇ 「傾城善の綱」大和屋甚兵衛・芳沢あやめ(『落葉集』巻二23、東大黒木

文庫本)

筒井筒くの水はにこらねど かはせし人はおぼろ月 いるかたもなき
 わが思ひ たゞかはらじと一すじに ねてもさめてもいとしさの あまり
 てもれてにくふなる 墨とすゞりはこいなかなれど 人が水さしやうすく
 なる しんきへ しんきく 水さしや人がくが水さしやうすくなる
 しんきへ(後略)

この歌は、元禄一三年(一七〇〇)正月京都早雲座(座本大和屋甚兵衛)二
 の替「傾城善の綱」で用いられたもの。狂言本が残るものの、零本のため詳し
 い筋立てはわからない。右に省略した後半部分は怨霊事になっている。「お

つゝ」(井筒)の曲名で、『琴線唱歌の糸』『歌曲時習考』などの歌謡書に載り、
 地歌として伝承された。また、享保六年(一七二二)刊『色里迦陵頻』17にも
 載せられ(江戸半太夫節とされる)、遊里歌としても行われたことがわかる。

⑩ 「やよいたつみ」
 表1-51

<p>〔横山物語〕 弥生巽は花見のことよ 姉も妹も管の笠 摘みとり帰りのおもしろや。</p>	<p>〔横山物語〕 弥生巽は花見のことよ 姉も妹も管の笠 摘みとり帰りのおもしろや。</p>
--	--

第三章第二節には掲載なし。〔下野〕〔村田〕に異同なし。類歌は未詳。

⑪ 「さてそのつぎ」
 表1-52

<p>〔横山物語〕 さてそのつぎにしまだいに 松と竹とを植えませて 千代を囀つる子鶴が 右端のかたに巢を組んで 谷の流れに亀遊ぶ。</p>	<p>校異 〔村田〕「松と竹とも」</p>
---	------------------------------------

第三章第二節には掲載されていない。短い歌だが、典拠がある。

◇ 「いく春」(『大ぬき』『新曲歌之唱歌』)(元禄一二年版『糸竹大全』、芸

大図書館本)

▲いくはるの ながめはいつしかはらねども わけてのどかにてるひかげ
 ちぎり竹のよゝこめて 君と二ばの松もろともに えだもさかゆるわか
 みどり あをぐにあかぬときを得て さればあやしのしづのね さまく
 のつくり花 色をつくしてさゝげけり(中略)

扱其のつぎの嶋だいに 松と竹とをうへませて ちよをさへづるひなづる
 が みぎわのかたにすをくいて 谷のながれに亀あそぶ しづのをだまき
 くりかへし しづのおだまきくりかへし よるこいしくよるこいさまよ
 人のなさはよるにこそあれ

朝妻検校の作とされ、「いく春」の曲名で、寛延四年(一七五二)刊『糸の
 しらべ』以下『歌曲時習考』などにも載る。「谷の流れに亀遊ぶ」の句などは
 祝儀歌にしばしば用いられ、鹿児島県さつま町(旧宮之城町)の土踊にも例が
 ある(『下野8』九四頁)。

⑫ 「君の召したる」

表1-53

〔横山物語〕	校異
君の召たるかきつくりの御舟は舟にせき舟 屋形をはいて屋形の内にも 錦の縁にあやのことに出したる絵図には恵美須や大黒打出の小槌舞ひ舞ふところやら目出度いや。	〔下野〕「からきつくりの」〔村田〕「からきつくり」〔下野・村田〕「舟はせき舟」、〔村田〕「やかたとはいいて」

第三章第二節には載せられていない。類歌は未詳。

⑬ 「せんと深山の」

表1-54

〔松原・村田〕	〔横山物語〕	校異
せんと深山の深山の奥の入りにはちようと出たよしはかふじはかま着てみればたて袖 ながばおり裾にやうれしおがの子によしわらきみおいた面白や	せんとみやまのせんとみやまのおくの入りにはちようとでた よしわがふじはかま きて見ればなが立袖 長羽織すそにやうれしおがのこにすみそいた面白や	〔下野・村田〕「せんとみやまの」を繰り返す。 〔下野〕「おのがこに」、〔村田〕「おのがこによしなが」 〔下野〕「すみそいた」、〔村田〕「きみおいた」

諸本、句の区切り方がまちまちだが、表には示しにくいので、文字の異同のみ示した。

類歌は未詳だが、十島村平島盆踊小踊に「藤袴着てみれば」(『十島村誌』一〇六〇頁)の類句がある。

(四) 西之表市 川迎・能野・住吉・安城立山

川迎でかつては盆踊が盛んだったことは、第三章第三節に述べられており、「下野5」とあわせて、ある程度の数の盆踊歌が収集されている。川迎・能野・住吉は距離的に近く、共通する歌も多い。詞章は次の二種。本文異同は少ない。
・第三章第三節、松原氏による現行詞章〔松原〕
・「下野5」二七五～二七六、二八〇～二八一頁〔下野〕

(a) 川迎

- ① 「種子取りて」 西之「たけなが」①「かねとりて」参照 横山でも歌われる
- ② 「ちはやふる」 西之「たけなが」⑤「ちばやふる」参照

③ 「春の夜暮れに」

表1-55

川迎〔松原・下野〕	能野①〔松原・下野〕	住吉⑥〔松原・下野〕
春の夜暮れに春のよ見ればもりしも春の模様〔下野〕「も」で梅と桜が咲き出れて〔下野〕「出でて」黄金花と色どりて咲いた花も空にしられぬ降る雪はえて面白や来る夜ももる夜もえい来る来る	春の夕暮れに花の模様を見れば梅と桜が先に出てこがね花色どりて咲いた花も空にしられぬ降る雪は、えておもしろや。〔松原アシ〕	春の夕暮れに、花模様を見れば、折しも春の模様で、梅と桜が咲き出でて、黄金花と彩りて、咲いた花も空に知られぬ、降る雪はえて面白や。降る夜も降る夜もエー来る来る。

川迎周辺地域で行われていたことがわかる。島外の類歌は未詳。

④ 「都育ちの」

表1-56

川迎〔松原・下野〕	住吉⑥後半〔松原・下野〕
都育ちのおとなの姫よ育ちよければ仕出しもよいが花の振袖かけんとや	都育ちのおとなの姫よ、育ちよければしだしもよい。イヨ、花の振袖かけんとや。

住吉では、③「春の夕暮れに」の後半部に組み込まれている。島外の類歌は未詳。

⑤ 「都橋を」

表1-57

川迎〔松原・下野〕
都橋を渡りて行けば、亦も近江の瀬田の橋かけよ、情の一ツ橋、人の心はうきはし、そりはしなれど、定めその夜はもどる橋君にふられて雪にふられて、傘さしの橋、積もりて恋の大和橋、内の瀬女郎が渡る橋

伝承地は川迎を知るのみだが、典拠がある。

◇「都はし(橋)つくし踊」(『松の落葉』巻四2、広島大本)

みやこ大はしわたりてゆかは おもひそめたよこいた(小板)のはしに
またもあふみのせたのはしひとつはしの人のこゝろは かりはしうきはし
そりはし(反橋)なれば あたにその夜はもどりはし つれなや君にふら
れてさくく ふられてくく ゆきにふられてかさゞぎのはし ちよつと替
せしことばのはしを なんのわすりよそく それがうれしゆてきよみつ
の とんとろくくとゞろくくとゞろくとゞろとんどろ とどろ木のは
し つもりてこひの大和はし くちぬ四条のはしはしち

この歌は、先行する宝永元年刊『落葉集』にはなく、宝永七年刊『松の落葉』
で加えられたもの。その後の歌謡書にも見当たらない。

⑥「さざ波や」

⑦「鶴は千年」

表1-58

川迎〔松原・下野〕
さざ波や しがの浜松ふりにきて たがよりそめるねの日ぞや 末広がり <small>の繁昌</small> や 枝も青りて「下野」青みて「千代の春」
鶴は千年 <small>亀万年</small> よ「下野」カメは万年よ「祝いこめたる隅々に 宝山 <small>の</small> のみつめぎりのこぎりくずの数 <small>より</small> も 浜の真砂 <small>や</small> 砂の数 語りつくせば夜はほのぼのと 鐘が鳴るぞや寺寺に

ともに祝言系の歌だが、類歌は見出だしていない。

⑧「南さがりの」西之「たけなが」⑦参照

(b) 能野

〔松原〕と〔下野〕に異同はない。詞章は第三章第三節を参照されたい。

①「春の夕暮」川迎③参照

②「しふくがんねん」

祝言系歌謡に類句は多いが、直接の典拠は未詳。

(c) 住吉

〔松原〕と〔下野〕に異同はない。類歌を見出だしたもののみ詞章を掲げる。

他は第三章第三節を参照されたい。

①「初めなる空を」類歌未詳

②「千歳経ふ松緑」類歌未詳

③「和歌の浦波」類歌未詳

④「君が代は、治まる国ぞ」

表1-59

君が代は、治まる国ぞ四つの海。石打つ波も長閑にて、 千歳を過ぎる雛鶴が、直ぐなる松に巢をくんで、恵みも深き玉川や。ヒヤウハイヤ。	住吉〔松原・下野〕
---	-----------

一般的な祝言歌謡のようだが、典拠となる歌が二種ある。

◇「さざれいし」(『若みとり』巻一3、早大図書館本)

さざれいし いはほととなりて ふた葉のまつもおいそいで ちよのはじめ
は ちよのはじめはおもしろや きみがよのひさしきくにや よつのうみ
きしうつなみもしづかにて ちとせをよぼふをひなつるか すくなるゑた
にすをくいて めぐみもふかきたま河の ながれのすへのわれらさへ
こゝろうきゝのかめあまた よろづよまでもいくちよを げにおさまれる
しるしとて きみにひかるゝまつかえに たちよるかげはいつもたゞ お
いてもくちぬときわきの たれかいひけんみづくきの ひさしきみよより
いわいそめ たかき屋にのほりて見ればけぶりたつ たみのかまともにぎ
はひて ならべるかどのめでたさよ

◇「ねのび」(『琴線と歌の糸』巻二3、東京芸大本)

ちよかねし(『歌曲時習考』ちよをかさねし)ときはのまつは。なをもみよをば
あをくなり。きみがよの おさまるくにやよつのうみ。きしうつなみもの
どかにて。ちとせをすぐるひなつるの。すむなる(『歌曲時習考』すぐるゑた
だにすをくひて。めぐみもふかきたまがはの。なかれにすめるわれらまで。
こゝろうきゝのかめあまた。よろづよまでもいくちよと。げにおさまれる
ときつかせ(『歌曲時習考』国かなと)。きみにひかるゝまつかえに。たちよる
かげのいつまでも。おいてもくちぬときはぎの。たれかいひけんみづくがき

の。ひさしきよゝをいわひそめ(『歌曲時習考』いはひこめ)。たかきやにのほりてみればけふりたつ。たみのかまじもにぎはひて。おさまるみよの(『歌曲時習考』かどの)めてたさよ

⑤「春の眺めの久しきを」 類歌未詳
 ⑥「春の夕暮れに」 川迎③参照
 ⑦「これのお庭に松竹植えて」 類歌未詳

⑧「様が寝姿」

表1-60

住吉(松原・下野)	増田(向井町)①(松原・下野)
様が寝姿、窓から見れば、金の屏風のその中に、錦一重にあや枕。ものによくよく譬ふれば、花で申せば初桜、月で申さば十三夜。	さまがねすがら窓から見れば、金の屏風のその内にしきひとえにあや枕(下野「アラ枕」、ものによくよくたとゆれば、はなを申さば初桜、月を申さば十三夜)

各地に類歌の多い歌。『山家鳥虫歌』山城国風19に「様の寝姿今朝こそ見られ、五月野に咲く百合の花」(『岩波文庫』二六頁)、『延享五年小歌しやうが集』一三二に「殿の寝姿今朝こそ見られ、五月野に咲く百合の花」(『続日本歌謡集成』三二五〇頁)、名古屋版『今様くどき』(宝永七年カ)に「君の寝姿今朝こそ見たれ、花ならば初桜、月ならば十三夜、盛りまばしき闇の中、五月野に咲く百合の花」(『日本歌謡集成7』七二頁)、岡山県笠岡市真鍋島の祝唄に「様の寝姿今朝こそ見たれ、金の屏風のその中で、綾や錦の小布団で、枕桐の木差し枕、物によくよくたとえれば、月なれば十三夜、花にたとえて初桜、盛りの花に実を持ちて、五月野に咲く百合の花」(『日本民謡大観』中国篇)、長崎県野母の盆踊(畦津のモッセ)に「様の寝姿窓から見れば、夏のアラ野(朝夕)にユイホ咲く百合の花」(『本田13』四二二頁)、長唄「吉原雀」(明和五年)等。

⑨「今度長崎」

表1-61

住吉(松原・下野)	増田(向井町)④(松原・下野)
今度長崎お下りなれば、わしも長崎連れ下さやんせ。連れて下るはいと易けれど、わしも似合いの妻子があれば、今度下りて妻子をさりて、明けて三月春上りして。	こんど長崎おくだりなれば、われも長崎つれくだらぬせ。つれてくだるはいとやすけれど、わしもにやいのつまががあれば、こんどくだりて妻子をさりて、あけて三月春のぼりして

島外の類歌は未詳。

(d) 安城立山

表1-62

安城立山(松原・下野)
土佐から船が三艘ほど参る 先なは銭よ、後なは金よ、中なは土佐の早稲(松原「わせ」、下野「わき」)米よ わさ米ならば斗掻を渡せ、斗掻が無からば竿渡せ 斗掻の上に姫等据えて、若衆が中をば出てしのべ

この歌は、各地の風流踊に類歌が多数みられる。種子島内では、同じ安城立山の大踊「正月べいじょう」(下野5「一三八頁」、町山崎の大踊「げんだら」(下野5「一四一頁」、住吉の大踊「源太郎」(下野5「一四八頁」)などに取り入れられている。

他地域では、「聖霊踊歌(山城国木津町鹿背山)」7(『日本歌謡集成6』八六頁)、京都府美山村鶴ヶ岡の奉納踊(『本田13』一三三頁)、丹後笹ばやしの舞鶴市布敷の笹踊・同市小倉の舞子「宮入り」(『丹後の笹ばやし調査報告書』九二・一〇〇頁)、兵庫県稲塚の風流神踊の道歌(『兵庫県民俗芸能誌』三三二頁)、伊賀国島ヶ原雨乞踊の「海洋踊」(『続日本歌謡集成4』九四頁)、徳島県つるぎ町一宇の太鼓踊「おりやれ踊」(『徳島県民俗芸能誌』三八〇頁)等。鹿児島県内では、南さつま市大浦町永田町の太鼓踊(下野6「一三六頁」、さつま町戸子田のアケスメロ(下野8「四七頁」、さつま町鶴田の太鼓踊(下野8「七三頁」、さつま町宮之城太鼓踊(下野8「九九頁」、さつま町宮之城舟木西のマゲ踊(『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編八九頁)など。また、三島村硫黄島太鼓踊(『三島村誌』一一九九・一二八六頁)、十島村口

之島盆踊（『十島村誌』一〇四頁）の例がある。

「土佐から」を、「都から」「長崎から」などと地名を変えた歌は、さらに多い。次に舞鶴市と硫黄島の例をあげる。

◇京都府舞鶴市布敷の笹踊「宮入り」（『丹後の笹ばやし調査報告書』九二頁）

○ヤー土佐から舟が三艘廻アる ヤー土佐から舟が三艘廻アる
先なが銭よ 中なが金エよ 後なが土佐の早生米ウウンよ

○ヤー後なが土佐の早生米ならアば ヤー後なが土佐の早生米ならアば
白金延べてたすきにかけエて 黄金の枘米はかるウウン。（後略）

◇鹿児島県三島村硫黄島太鼓踊（『三島村誌』一二八頁）

土佐から船が二艘も上る 先なは銭よ 中なはかねよ 後なは土佐の早稲米よ 早稲米ならば 水ともはかれ 斗掻きが無くば竿わたせ 斗掻きの上に姫じよのおじやる 若い衆はないか 出てしのべ

(五) 中種子町 竹屋野・女洲

竹屋野では、かつて盆踊を踊っていたが途絶した。その頃の盆踊歌が記録されている。現在では、霧島神社の秋祭に、「神楽」と称して、かつての盆踊（と同じと思われるもの）を最初に踊ることになっている。以前の盆踊歌と現在の「神楽」の歌には出入りがある。詳細は第三章第三節の松原氏の報告を参照されたい。詞章は二種あるが、両者に異同はない。

・第三章第三節、松原氏による現行詞章〔松原〕

・「下野5」一六五～一六六頁〔下野〕

(a) 竹屋野

①「千早振る」西之「たけなが」⑤「ちばやふる」参照

現在の「神楽」では必ず最初に踊ることになっているが、盆踊歌としては記録されていない。

②「それは若草」横山⑥「春の夜」の後半参照

③「たてまつる」

表1-63

竹屋野 盆踊〔松原・下野〕	竹屋野 神楽〔松原〕	平山広田③〔松原・下野〕
たてまつる、 なにし、なにわの東ぼり、 きいて鬼門のかどやしき、 かわらやしきとは、あぶらやの、 ひとり娘に、おそめとて、 にはちの春の花ざかり、 うちのこがねの、ひさまつよ、 よめにとろよと、べにかね。	奉るよ 名にし浪花の東堀 聞いて鬼門の門屋敷 瓦橋とは、油屋の 一人娘にお染とて 二八の春の花盛り 家の子飼の久松によ 嫁にとろよと紅鉄よアーヒーヨ	たてまつるよう ところは、淀の東堀 きいて鬼門はかど屋敷 瓦やばしと油屋の 一人娘のおそめとて にはちが春の花盛り 内の子がいの久松に よめに取るのでしかねを

お染久松の心中を歌った歌は、浄瑠璃・歌舞伎・風流踊・歌謡など、人口に膾炙した。冒頭の「聞いて鬼門のかど屋敷、瓦橋とや油屋の」はほぼ共通するが、以下は多種のバリエーションがある。種子島の踊歌は、『新大成系のしらべ』から『歌曲時習考』に載る「おそめ」の系統に近い。この歌は地歌として現在も伝承されている。兵庫口説熊野節の「おそめ久松 染模様」（『兵庫口説』二三四頁）も類似が多い。

◇「おそめ」（安永三年版『新大成系のしらべ』一三七丁、東京芸大本）

たてまつる。よをなにしなにはのひがしぼり。さいきいてきもんのかどやしき。かわらばしとやあぶらやの。よいよいさよひとりむすめにおそめとて。二八のはるの。さいよほそまゆに。うちのこがひの久松と。よを、しのびくくのねあぶらに。さいおやたちゆめにもしらしぼり。一もん中の山がやへ。よめにとろよとべにかねを。つけてゑんぐみきはまれば（下略）

④「あれをみやれよ」

表1-64

竹屋野 盆踊〔松原・下野〕	竹屋野 神楽〔松原〕
あれをみやれよ、天神の梅よ、 枝はせきたて、葉はぬしままに、 花の姿はわかぬ浦、 わかぬ浦には名所がござる、 かごでおおとる、これ名所。	あれを見やれよ、天理の梅よアーヒーヨ 枝は急ぎ立て、葉は主儘にヒーヨ 花の盛りは和歌の浦ヒーヨ 和歌の浦には名所がござるヒーヨ 荷籠で詩とるこれ名所アーヒーヨ

類歌は未詳。

⑤「ころしもよい」上中（信光寺）⑧「頃は弥生」参照

⑥「たつたがわから」神楽になし、類歌未詳

⑦ 「屋久のおたけの」

表1-65

竹屋野 盆踊〔松原・下野〕	竹屋野 神楽〔松原〕
屋久のおたけのまずこだけ、 これのお庭に咲いたなら、 すずこはこがね、こざさまじりの、こがね花。	屋久の御嶽の鈴黄金 これの御庭に咲いたらば 鈴黄は知らぬ 小笹まじりの黄金花

類歌は未詳。

(b) 女洲

女洲でも盆踊は行われていないが、「神楽」と称して、秋の願成就祭に盆踊系の曲を踊っている旨、第三章第三節に松原氏の報告がある。他に記録はなく、松原氏が記録した四首の歌の類歌も見出だせなかつた。

- ① 「ちはやぶる」 西之「たけなが」⑤ 「ちばやふる」参照
- ② 「船はゆくゆく」
- ③ 「あーなぜころぜは」
- ④ 「さんさおせおせ」
- ⑤ 「秋は夜ながし」

(六) 中種子町 坂井・増田

(a) 坂井熊野神社

熊野神社の秋の祭礼に「神楽」として踊られる。第三章第三節に掲出。

表1-66

坂井熊野神社 神楽(寺踊)〔松原〕
この宮に 参りてみれば おもしろや 八つ九つの ちこが手をかく ちこが手をかく 手をかくにもそろえて 墨のよかろうものをそろえて 筆の白金のじく 白金のじやく この寺に参りてみれば おもしろや 八つ九つの ちこが手をかく ちこが手をかく 手をかくにもそろえて 墨のよかろうものを そろえて 筆の白金のじく 白金のじやく

この歌は、同じ坂井本村の大踊「しんど踊」寺踊(「下野5」一六〇頁)としても歌われている。また、西之表市下之中(下中里)「さんご踊」(「下野5」一六九頁)、中種子町納官平鍋「しんど踊」(中種子町立歴史民俗資料館『大踊

り・小踊り・神楽・棒踊り・民謡集』三四頁)でも、「この寺に〜白金の軸」がほぼそのまま歌われている。

三島村硫黄島の太鼓踊には、「これのお寺に参りては：四十二人の稚児たちの卓打ち並べやや見事」(『三島村誌』一一九九・一二八六頁)とあり、類想の歌は、静岡県浜北市寺野の大念仏歌まくら「この寺へ参り参りて奥見れば、奥で稚児がお茶をひき候、ふるさとのずその清水を汲み上げて、稚児のひく茶を立てて飲まばや」(「本田12」一三五頁)や、佐賀県武雄市高瀬・中野の荒踊に「山寺に参りてみれば稚児達のしよくに手をかけ 筆をたよりに(と)、筆をたよりに(と)」(「本田13」四七二・四七七頁)、広島県安芸高田市本郷「大踊り」の「山寺南条」に「あの山寺紫竹をこらうじ、皆若い衆の筆の軸 あの山寺若衆をこらうじ、机にすがりて歌を書く」(『芸備風流踊り歌集』八七頁)など、少なくない。

(b) 坂井付近

「下野5」に坂井付近の歌詞として、「千早振る」の歌が載せられている(二八一頁)。西之「たけなが」⑤「ちばやふる」を参照。

(c) 増田

増田地区の盆踊には二種の記録がある。
・第三章第三節、増田の盆踊、松原氏による現行詞章〔松原〕
・「下野5」増田向井町の盆踊、二七六〜二七七頁〔下野〕
〔下野〕はカタカナ書きだが、「松原」とほとんど異同はない。

① 「さまがねすがら」 住吉⑧ 「様が寝姿」参照

② 「あわれなるかな」

表1-67

増田〔松原・下野〕
あわれなるかよ石童丸は 父を尋ねてこらやにのぼる 母はふもとのかまやが茶屋に「下野テヤ」 あずけおいたよあらいたわしよ すぐにそれより高野にのぼり、はなのおんかごおん手に持ちて 九万九千のその寺々「下野」寺々を 尋ねまわれどゆきかたしれぬ

茹菅道心・石童丸の歌も各地に残っている。右の歌は、兵庫口説はやりおんど「いしどう丸」の冒頭とほぼ同文。

◇「いしどう丸」(『兵庫口説』八四頁)

昔語りを聞くささいとど 哀れなるかや石童丸は 父の行方を尋ねんために 母を麓の玉屋が茶屋に 預けそれよりお山へ登り 稚な心のいと優しくも 九万九千軒の御寺々を 尋ね巡れど行方知れず(後略)

鹿児島県内でも、出水市前田のカマ踊(『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編四頁)、三島村黒島片泊の太鼓踊(四)ウニアゲ(ウエアゲ)「石童丸」(『三島村誌』一三五九頁)などの例がある。

◇「石童丸」(鹿児島県三島村黒島片泊の太鼓踊、『三島村誌』一三五九頁)

よおい よおい よー さてそののちは あわれなるかよ石童丸は 父をたずねてお山にのぼる 母は麓の玉屋が茶屋に 預けおきたは殊勝なことよ すぐにその身はお山にのぼる 九万九千軒のおん寺寺を たずねまわれど行き方知れず

③「二度とゆくまら」

表1-68

二度とゆくまいよい(下野「い」ナシ) せんだいかわに 高き山から切りこむ切りこをむう けさのあらしにかわくちおおうえて(下野「ウケテ」)	増田(松原・下野)
--	-----------

類歌は未詳。

④「こんど長崎」 住吉⑨「今度長崎」参照

二 種子島盆踊歌の特色

前項で種子島各地区の盆踊歌謡について、類歌を中心に整理してみた。特徴的なのは、上方歌謡を典拠とする踊歌が多いことだろう。本項では、上方歌謡および歌謡書について簡単に整理した上で、上方歌謡書と関わりのある盆踊歌と、そうでないものを一覧し、種子島盆踊歌の特色を考えたい。

(一) 上方の歌謡書

平安時代以来の歌謡のジャンルとして、「小歌」がある。平安期には、五節の舞の大歌(男性歌謡)に唱和した女官およびその歌をさしたとされる(浅野健二・一九六一)。室町時代中期以降、広い階層に流行した短詩型歌謡(七五七七五七七五などの詩型をとる)が、一般にいう小歌(中世小歌)で、『閑吟集』『宗安小歌集』、『隆達小歌』(隆達節唱歌)、狂言小歌などに残っている。これらは扇拍子または一節切などの伴奏で歌われ、絃楽器は伴わなかった。室町後期から、短詩型小歌を複数句並べて組歌にすることが、風流踊で行われるようになり(小歌踊)、主として西日本各地に伝播した。

一方、琉球から伝来した三線が改良され、三味線として普及する中で、室町末期から江戸初期に「三味線組歌」が成立した。作曲者は、石村検校・虎沢検校・柳川検校などが知られ、その後も検校・勾当など、目の不自由な人たちの職能団体である当道組織の中で、京都・大坂を中心に伝承された。一七世紀半ばに、長歌・端歌というジャンルが生まれ、さらに一七世紀末から一八世紀半ばには、歌舞伎の舞台音楽として歌われた曲(芝居物・芝居歌)や、江戸半太夫・宮古路繁太夫などの浄瑠璃太夫の節事も取り入れられ、大きく範囲を広げた。

京都・大坂では、こうした歌謡に特別な名称がなく、単に「歌」「歌曲」などと呼ばれていたが、一九世紀初期から、土地(上方)の歌という意味で「地歌」と総称されるようになり、江戸の長唄、端唄、小唄と区別された。また、江戸長唄が主として歌舞伎所作事の伴奏音楽として展開したのに対し、地歌は遊里や茶屋の座敷、個人宅などの室内音楽として伝承された。三味線組歌を除き、箏が伴奏されることが多い。上方では、芸術的歌謡である地歌の他にも、遊里や茶屋の遊興歌、芝居歌、俗謡など多様な歌謡が生み出された。

これらの上方歌謡は、一七世紀半ばから京都・大坂の書肆により板本として刊行され、普及した。初期のものとしては、寛文四年(一六四四)刊『糸竹初心集』、貞享二年(一六八五)頃刊行の『大ぬき』(貞享四年初版『糸竹大全』に収められる)などが知られているが、収録曲数は少ない。

一八世紀初期には、元禄一六年(一七〇三)刊『松の葉』、元禄一七年(宝永元年)刊『落葉集』、宝永七年(二七一〇)刊『松の落葉』、宝永三年の序文がある『若みとり』が刊行された。『松の葉』『落葉集』『松の落葉』の三部作は、のちの地歌の曲の他、座敷浄瑠璃、歌舞伎の所作音楽の歌、遊里の座敷歌、祇

園町大踊（盆踊）の歌など、多様な歌謡を収めている。

一八世紀後期以降には、地歌の伝承曲のみを集めた大部な歌謡書が刊行されるようになった。寛延四年（一七五二）刊『琴線と歌の糸』、同年刊『糸のしらべ』がその出発点となり、享和元年（二八〇一）刊『新增／大成糸のしらべ』、文化二年（二八〇五）初版『歌曲時習考』などと続いた。複数回の再版や増補版刊行がなされたものもある。なかでも『歌曲時習考』は初版で四七〇曲を収め、文政元年（二八一八）、嘉永元年（二八四八）に増補され、琴の組歌を除いて五八〇曲余を収録するに至った。明治期以降にも再版されて、最も流布した本といえる。文政版『歌曲時習考』のうち、現在の地歌に伝承されている曲は、約二四〇曲とされている（久保田敏子・二〇〇九）。

(二) 上方歌謡と関わりのある種子島盆踊歌

前節で、上方の歌謡書の中に類歌を指摘した曲目を、改めて表にまとめてみる。歌謡書の出版や、歌舞伎での上演が早いものから順に掲げた。

表2-1

	曲名	典拠
1	「種とりてうれしうれなわ」(横山①)、川迎①、上西目・砂坂たけなが①	江戸時代初期「隆達小歌」。他の歌謡書になし。鹿児島県十島村中之島の盆踊に類歌。
2	「さてその次に島台に」(横山①)	貞享二年頃『大ぬさ』新曲歌之唱歌「いく春」。寛延四年『糸のしらべ』以下継続。鹿児島県さつま町宮之城十踊に類歌。
3	「下にはもくの小板や」(砂坂たけなが⑥)	元禄一六年『松の葉』巻二二「さくらづくし」。寛延四年『糸のしらべ』以下継続。
4	「一重二重みよよえ」(平山広田④)	元禄一六年『松の葉』巻二四「かぞへ歌」後半。寛延四年『糸のしらべ』以下継続。
5	「五ツの水は濁らじと」(横山⑨)	宝永元年『落葉集』巻二二「傾城善の綱」。元禄一三年正月京都早雲座二の替「傾城善の綱」所演。寛延四年『琴線と歌の糸』巻五三〇「ぬつ」と、以下継続。「色里加陵頻」17にも載る。
6	「大黒殿と宝くらへへの白ねすみ」(上中①)	宝永元年『落葉集』巻三一・宝永七年『松の落葉』巻三一「福神出端」。二代目嵐三右衛門所演。他の歌謡書になし。
7	「春の夜の夢おどろかずくだかけの」(横山⑥)・平山広田⑥・竹屋野②	宝永七年『松の落葉』巻六四「淀川所作。宝永二年京都亀屋座二の替「けいせい連の糸」所演。『琴線と歌の糸』巻五三三「淀川」以下継続。

8 「君が代は治まる国ぞ四つ(住吉④)」

9 「さても見事なおつずの馬よ」(平野・本村・田代つんたん拍子①)

10 「都橋を渡りて行けば」(川迎⑤)

11 「せんちよう二目目の糸屋が娘」(上中①)

12 「きのうきょうまでひと昔」(平山西之町⑥)

13 「きのぎのの明けの六ツころ」(砂坂・中西目・小田きのぎの④)

14 「墨と硯はふた思ひ」(平野・本村・田代つんたん拍子⑥)

15 「奉るなにし浪花の東唄」(竹屋野③、平山広田③)

16 「わしが女房をほめるじやないが」(金山西之町①)

17 「うたせかねたるなお姫よ」(田代つんたん拍子⑧、上中⑥)

18 「よよのたけなが」(上西目・砂坂たけなが④)

江戸初期の隆達小歌のみに類歌がある1「種とりて」が圧倒的に早い。鹿児島県十島村の中之島にも伝わっている。少し別に考える必要があると思われる(後述)。「大ぬさ」に載る2「いく春」も早期の曲だが、幕末までの歌謡書に継続して載せられている。

続く『松の葉』『落葉集』『松の落葉』の三部作と『若みとり』は、元禄末から宝永年間の刊行なので、その所収曲の成立年代は、一七世紀後半から一八世紀初頭と知られ、とくに歌舞伎での上演年がわかる曲は、初出が明確となる。とはいえ、後続歌謡書に掲載される曲も多いなかで、『落葉集』『松の落葉』の6「福神出端」、『若みとり』の9「おつずら馬」、『松の落葉』の10「都はしつくし踊」は、後続書にみられないが、種子島盆踊への上方歌謡の摂取時期が、

この時期に限定されるわけではない。寛延四年（一七五二）刊『琴線和歌の糸』、同年刊『糸のしらべ』、安永三年（一七七四）刊『新大成糸のしらべ』を初出とする曲も少なくないからで、撰取年代には幅があったと考えられる。

上方歌謡と種子島との関係については、第三項で検討したい。

(三) 島外の風流踊に類歌のみられる種子島盆踊歌

種子島島外の風流踊歌の中に類歌のみられる盆踊歌謡を、前項同様に表にまとめてみる。表2-1に既出のものは省いた。

表2-2

	曲名	類歌
1	「今年やよい年」(砂坂・中西目きのぎの①、平山西之町③)	鹿児島県三島村硫黄島九月踊の痘瘡踊、黒島片泊痘瘡踊、片泊太鼓踊、南九州市知覧町上別府ウデコオドイ、滋賀県草津市渋川の花踊、三重県松阪市阿坂・西野鼓踊
2	「今年の年はみるくの年」(砂坂・小田きのぎの③)	鹿児島県十島村口之島盆踊、平島盆踊、中之島盆踊、三島村黒島大里太鼓踊「高橋殿」、鹿児島県長島町指江鉦踊、長崎県黒丸踊入羽。
3	「今年やめでたいの福神丸」(横山⑦)	前半・鹿児島県十島村中之島盆踊出端「島の明神丸」、後半・十島村悪石島の正月のマツバンド、三島村硫黄島九月踊の痘瘡踊、三島村片泊太鼓踊「ごとうひゃ」「延享五年小歌しやうが集」など類歌多数。
4	「土佐から船が三艘ほど参る」(安城立山①)	種子島大踊、西之表市安城立山「正月べいじょう」、町山崎大踊「げんたら」、住吉大踊「源太郎」、鹿児島県南さつま市大浦町永田町の太鼓踊、さつま町戸子田のアケスメロ、三島村硫黄島太鼓踊、十島村口之島盆踊など県内の類歌多数。その他、「聖霊踊歌」(山城国木津町鹿背山)、「京都府舞鶴市布敷・小倉の笹はやし」、兵庫県稲塚風流神踊など県外も多数。
5	「この寺に参りて見ればおもしろや」(坂井熊野神社①)	種子島大踊、坂井本村「しんご踊」、寺踊、下中里「さんご踊」、納官平鍋「しんご踊」、鹿児島県三島村硫黄島太鼓踊、佐賀県武雄市高瀬・中野荒踊、広島県安芸高田市本郷大踊の「山寺南条」、静岡県浜松市寺野大念仏歌まくらなどに類句。
6	「御門の立ちよやら見事をきどのわきのゆるしがき」(平山西之町⑦)	広島県庄原市本村町こきりこ踊の「御門懸り」、同県熊野町神楽踊りの「み熊野寺踊」などに類句。
7	「千早振る千早振る神のお前の鈴の音」(砂坂⑤、竹屋野①、女洲①、坂井付近、川迎②)	謡曲「高砂」にもとづく祝言歌謡。類歌多数。

8 「我はせど島まい大夫が娘」(米のなる木)(上中③、平山西之町④)

岡山県の民謡。岡山市南区旧福田村道中歌、同県本庄村(現和気町)田植唄など。宮崎県西都市銀鏡の木おろし唄、神奈川足柄下郡の盆踊歌、福井県敦賀郡の子守歌にも類句。

9 「様が寝姿窓から見れば」(住吉⑧、増田①)

『山家鳥虫歌』、「延享五年小歌しやうが集」、名古屋版『今様くどき』(玉永七年?)、岡山県笠岡市真鍋島の祝唄、長崎県野母の盆踊歌など。

10 「尋ね出てみよ和泉まで」(上中⑦、島間②、平山西之町⑤)

『山家取鳥虫歌』、「巷謡編」など。

11 「おやつ参りの道つれ話」(本村つんたん拍子②)

鹿児島県十島村平島盆踊小踊に類句。

12 「春は花見に」(本村・田代つんたん拍子⑩、上中⑨)

鹿児島県三島村硫黄島太鼓踊、竹島八朔踊、十島村平島盆踊、さつま町宮之城舟木西マゲ踊、鹿児島市小山田の太鼓踊などに類句。

13 「あわれなるかよ石童丸は」(増田②)

兵庫口説はやりおんど、鹿児島県出水市前田カマ踊、三島村黒島片泊太鼓踊。

14 「さらはこれからくろいてみましょ」(平山広田⑧)

兵庫口説「八しまのてがら 那須の与市」、西之表市池田浦のヤートセー「那須与一」、岡山県笠岡市白石島盆踊。

15 「阿波の徳島十郎兵衛娘」(平野つんたん拍子④)

兵庫口説熊野節「阿波の十郎兵衛」に類句、島根県飯石郡頓原村「阿波の鳴門(順礼くどき)」、鹿児島県開聞町上仙田田中の手拍子踊に「阿波の徳島」など。

種子島の盆踊歌で、本書で収集しえたのは、竹屋野などの「神楽」も含めたうえで、類歌を一つにまとめると、約九〇曲となった(区切り方が確定できないものもあり、総数は曖昧なところがある)。その中で、上方歌謡と関係のあるものが一八曲ほど見出させたのに対し、風流踊歌と関係するものが二〇曲程度(表2-2の一五曲に加えて、表2-1のうち四曲)というのは、意外なほど少ないといえるだろう。類句としたのは、部分的な詩句の類似に留まるので、確実な類歌は十数曲ということになる。

この二〇曲は、恣意的に選んだわけではない。日本各地の風流踊歌の収集は進んでおらず、その詞章を一覧で見られるものもなく、もとより索引もない。一九九〇年代に文化庁の指導により各都道府県が作成した「民俗芸能緊急調査報告書」、各地の風流踊を幅広く紹介した『本田安次著作集/日本の伝統芸能』第一〇〜一三巻、歌謡書の翻刻『日本歌謡集成』『続日本歌謡集成』、各地の民謡を記録した『日本民謡大観』などをベースとして、とくに西日本で風流踊が多数分布する地域については、その報告書や研究書など、可能な範囲で一覧し

て類歌を探した結果である（節末の参考文献参照）。もちろん、見落としてもあり、相互に詩型が崩れて類歌と気づかないものもあると思うが、数百曲の風流踊歌の中で、驚くほど一致率は低かった。

残念なことに、鹿児島県内の各種歌謡を十分把握できていないが、主要な太鼓踊歌との類似は少ないといえる。その中で、とくに目立つのは三島村、十島村（トカラ列島）の各島の盆踊や太鼓踊などとの一致が多いことだろう。一方、種子島の隣に位置する屋久島については、『屋久町誌』『屋久町郷土誌』『上屋久町郷土誌』『上屋久町の民俗』などにより、楠川・平内・麦生の盆踊、如竹踊、棒踊などの詞章を見ても、類歌を見出だすことができない。

また、種子島盆踊の内容的特徴として、盆踊歌であるのに、豊年の祝言系歌謡が多いこともあげられる。明確に分類するのは難しいが、表2-2のうち、1-7あたりまで、半分近くを祝言系が占めている。これは、(四)にあげる、類歌未詳の歌にも共通する。各地の盆踊に多い踊り口説の類は、13-15の三曲に留まり、しかも一部分しか歌われず、むしろ秋の豊年祭（願成就祭）のヤートセーに多く取り入れられている。

(四) 類歌のみられない種子島盆踊歌

前述のように、九〇件あまりの盆踊歌の中で、六〇件ほどは、島外に類歌が見出だせなかった。試みに分類して次に掲げる。掲出にあたっては、主として第三章の松原氏の本文により、適宜漢字を宛て（誤読の虞もあるが読みやすさを優先）、読点を施した。囃子言葉などを省き、異本の本文を用いたものもある。

(a) 祝言系

表2-3

1	これのお寺に参りてみれば面白や、さても見事なお寺のおずし、四方に見えし見れば、心は波の田子の浦、立つ波の御世は長けれ世はよけれ	西之つんたん拍子 ③ 上中⑤
2	さても見事なお寺の景よ、これのお庭に若松植えて、松の緑に雪降りて、枝にはかねがなりやこたれた	上中④
3	さても見事な大阪の城よ、白や白壁八棟作り、朱塗りえ玄関かなづくり、門は切石桐戸の御門、前の堀川舟つなぐ	平山広田⑦
4	めでためだのおん殿屋敷、お倉九つ御門八つ、船は千艘のおんカネ船よ、カネをおろすわ品川に	横山②

君の召したる、唐木作りの御舟は、舟はせき舟、やかたをはいて、やかたの内にも錦のへりに綾のとこ、とこに出したる絵図には、恵美須や大黒打ちの小槌、舞ひ舞ふところ、やら目出度いや

鯉の小池、浮いたる舟は、銀の白金、櫓こげや、おしこめとどの浦

今年やめでたの、まんぞしのごはん、波に揃った、波に揃った、穂の葉いろは山をこえて、いとこのうれしき、殿のお倉米、箕ではかる。しまだみね、俵くくりて、しめの声しめたてたエー。これのお庭に、はえたてたエー

秋の田のかりほの色を見るからに、いちぶに米が七俵、さてもさても、さてもめでたい御世なれど、とうから鶴が六つつれて、また六つつれて十二つれ、そがのつれいとこぎす

あおり港の小松やら、小松さんかよこ宝なり、松を植えたよ島々に、よしも植えたよ姫小松、枝も栄える葉もしげる、末は鶴かめ五葉の松

さざ波やしがの浜松ふりにきて、たがよりそめる子の日ぞや、末広がり繁言や、枝も青りて千代の春

鶴は千年亀万年よ、祝いこめたる隅々に、宝が山のみつめぎり、のこぎりくずの数よりも、浜の真砂や砂の数、語りつくせば夜はほのぼのと、鐘が鳴るぞや寺に

しふくがねん、安楽の池のお庭の鶴亀は、蓬莱山に相生の、松は尾の上の高砂や、千代に八千代にさざれ石のにおい苔のむすまで

千歳経ふ松緑葉の上に、鶴が歌えば亀が舞う、祝い座敷に西から曇る、黄色まじりの霧が降る

和歌の浦波世はさかり松、しなの煙ぞかかやかに、色よけふりの色暗し、さても見事な磯の松、松に降る雪みな黄金

春の眺めの久しきを、君を待つ世はずんとよいきの姫小松、君は末代我は万年、しやんと見事な花の色、花の盛りは末は御繁言

これのお庭に松竹植えて、松は栄えて黄金なる、竹は茂りて黄金なる、黄金なるなる銭もなる

屋久のおたけのすずこだけ、これのお庭に咲いたなら、すずこはこがね、こがさまじりの、こがね花

このうち、1-4あたりまでは、寺誉め、館誉めとして、各地で行われる風流踊にも類型がみられるものである。類歌、類句ありとして分類すべきものもあつたかもしれないが、頻繁に用いられる語句があつても、一つの歌としての類歌は特定できなかつた。4は館誉めでありつつ船誉めともなっており、5・6は船誉めといえよう。ただし、幕府や各藩の御船歌には類歌がない。

18	南下りの堀川に白鷺おいて、ほろろうつ。ほろろはうたずに鶴の子が、ぜにかねまいて舞を舞う、まことにこれがめでたけれ	西之たけなが⑦・きのぎの⑦・平山広田⑤・川迎⑧・竹屋野「雷踊」
17	こがさまじりの、こがね花	竹屋野⑦
16	屋久のおたけのすずこだけ、これのお庭に咲いたなら、すずこはこがね、こがさまじりの、こがね花	住吉⑦
15	春の眺めの久しきを、君を待つ世はずんとよいきの姫小松、君は末代我は万年、しやんと見事な花の色、花の盛りは末は御繁言	住吉⑤
14	和歌の浦波世はさかり松、しなの煙ぞかかやかに、色よけふりの色暗し、さても見事な磯の松、松に降る雪みな黄金	住吉③
13	千歳経ふ松緑葉の上に、鶴が歌えば亀が舞う、祝い座敷に西から曇る、黄色まじりの霧が降る	住吉②
12	しふくがねん、安楽の池のお庭の鶴亀は、蓬莱山に相生の、松は尾の上の高砂や、千代に八千代にさざれ石のにおい苔のむすまで	能野②
11	鶴は千年亀万年よ、祝いこめたる隅々に、宝が山のみつめぎり、のこぎりくずの数よりも、浜の真砂や砂の数、語りつくせば夜はほのぼのと、鐘が鳴るぞや寺に	川迎⑦
10	さざ波やしがの浜松ふりにきて、たがよりそめる子の日ぞや、末広がり繁言や、枝も青りて千代の春	川迎⑥
9	あおり港の小松やら、小松さんかよこ宝なり、松を植えたよ島々に、よしも植えたよ姫小松、枝も栄える葉もしげる、末は鶴かめ五葉の松	平山西之町⑩
8	秋の田のかりほの色を見るからに、いちぶに米が七俵、さてもさても、さてもめでたい御世なれど、とうから鶴が六つつれて、また六つつれて十二つれ、そがのつれいとこぎす	西之たけなが③
7	今年やめでたの、まんぞしのごはん、波に揃った、波に揃った、穂の葉いろは山をこえて、いとこのうれしき、殿のお倉米、箕ではかる。しまだみね、俵くくりて、しめの声しめたてたエー。これのお庭に、はえたてたエー	西之きのぎの⑥
6	鯉の小池、浮いたる舟は、銀の白金、櫓こげや、おしこめとどの浦	横山④
5	君の召したる、唐木作りの御舟は、舟はせき舟、やかたをはいて、やかたの内にも錦のへりに綾のとこ、とこに出したる絵図には、恵美須や大黒打ちの小槌、舞ひ舞ふところ、やら目出度いや	横山⑩

7・8は豊年の歌、9以降は、鶴亀や松などの祝言句を散りばめた歌となっている。西之表市川迎、能野、住吉、横山に多数みられる。
18は退場歌として、島内の多く地区で用いられるが、竹屋野の大踊の歌に含まれる点に注意したい。

(b) 四季・名所

表2-4

19	梅枝や、匂ひに影る吾が心、藤の裏葉にえおく露、その名玉鬘かけしばし	横山③
20	初めなる空を見たる曙の、常聞く鳥も若々と、若水はやけくるわいな、めぐり来る来る年の朝	住吉①
21	春の夕暮れに花模様を見れば、折しも春の模様で、梅と桜が咲き出でて、黄金花と彩りて、咲いた花も空に知られん、降る雪はえて面白や、降る夜も降る夜もエー来る来る	川迎③、能野①、住吉⑥
22	富士の嶽から裾野を見れば、下には吉原名所がござる、美女な小女郎が、琴三味線で、弾かせ歌わせ語らせ舞わせ、見染め心の面白や	横山⑧
23	あれを見やれよ天神の梅よ、枝はせきたて、葉はぬしままに、花の姿はわか	竹屋野④
24	あーなぜころげは須磨よりなよ、須磨や明石の名所をながめ	女洲③
25	せーじゆうをあなじのまのうちに、花の都ときこえしは、名所さまほど多けれど、君に心をひかされて、嵐ほのかげなむれば、月に人口、出る舟よ	平山広田①
26	東はまちやま、西は女郎ま、なかは天下の、さんさう寺町。しなのエー	西之きのぎの⑤

19〜21は四季や叙景の歌、22〜26は名所を歌い込んでい。なお、19は『源氏物語』の巻名尽くしになっている。

(c) 船に関わる歌

表2-5

27	灘にこそ灘にこそ播磨灘、播磨灘にこそ瀬がござる、つしまどの、すけくが瀬戸で碇よ下けても汐だたり、来いと言うたとも行かれるものか、灘は四十五里波の上	平山広田②
28	送れくれ送れシラスまで送れ、シラス乗りいだしば、御風また悪き悪きホンノカヤ	島間小一才③
29	船はゆくゆく下ノ関ゆけば、風も押しよいあなせの風よ	女洲②
30	さんさおせおせ、かんじにぬけて碇よおろしやれ、とま綱とつりよ	女洲④

祝言系の中にも船に関わるものがあつたが、ここにまとめたものは、とくに祝言性はみられない。周辺の離島に類歌もみられない。

(d) 物語的な歌

表2-6

31	阿久根千代女は夜舟漕ぐ、足もだるんど手もだるんど、まして夜風も寒かんど。阿久根千代はご心、玉章又歌かへて、花の恋の女にやると見た。花の恋の女のおしやれごと、うつ、名の立つ玉章を、水に浮草笹の露。坊のとほせに舟乗りて、荒し待ちたる心して、これも浮世の物語	横山⑤
32	あらいたわしの梅若は、想い切れとは曲もなや、唐天竺にはよも行かじ、東は蝦夷へ松前の、西は九州薩摩島、南は紀の路須磨の浦、北は秋田や佐渡ヶ島、虎伏す野辺の奥までも、尋ね巡らりよ会はりようと、あら恋しの梅若は、ともない鳥が飛びつれて、迷いゆく道よつとつと	上中⑩、平山西之町⑤
33	美濃とおみの寝物語のおわさ、ももよ寝ばなし恋はなし、やほまくつまろに身濡れかかる、ちろじろをふるほそ雪、月にもゆこえ闇にもゆこえ、闇にほつほつ、九十やくよいのやく物語り、おせいともまいとも、よおい物語り	西之つんたん拍子⑦、上中⑫
34	おもいよある玉鬘、風に散れ散れ笹の葉を、しねぎりかけて、かみよかみ、会わせてたべと、こここのえに、あとを見捨てて思い顔、今宵の波に浮き沈む、おやのりんぎよのよわ車、あとに浮かべる走りつく、由比浦原や田子の海、見わたせば富士の山	上中⑬
35	頃は弥生の末つ方、君行方を尋ねんと、あこん(糸尾木?)の浜にぞ舟に乗る、漕ぎ出でて見れば南蓮寺、松の葉色や常盤山、何時も絶えなき塩浜や、釜で塩たくようふう煙、消えて跡なきはかなきよ、沖になみおるさくら島、こしじんだての雲の帯、腰にさいたる小夜衣	上中⑧、竹屋野⑤、増田塩釜神社
36	我から濡らす袂から、濡らせ濡らしやれ濡れかかる、恋しき人はまつ島の、教えて申すは憚りぞ、憚りはお許しよ、御代治まりてゆうらんの、折を得たるは身の誉れ、急いで教え奉る、さらばめでたき君がよむ、松に祝いて、鶴がさきの、千代こめたるたけのうら	西之つんたん拍子⑨

物語的といえるかどうかはわからないが、何か典故がありそうな歌を集めてみた。31「阿久根千代女」が直接比志島事件によつた歌とはいえないと前述したが、現在はそのように伝承されている。32の梅若の歌が、謡曲「隅田川」とは別系とみられることも前述したが、何らかの和讃、口説、音頭などの典故があつたことは推測される。

(e) 色気のある盆踊歌

表2-7

51	一つ色の深きでは、二でにこにこ笑い顔、三で盃きしたのち、四つよそめで見えておいた、五つよもせんはなじやもの、六つ昔がおもわれた、七つ涙がこぼれゆく、八つやよいの花折りて、九つこの子がここに住む、十でトトさまとめられた	上中②
50	恋の手習い敷島原よ	島間大二才①
49	年は十六さきげのお豆じよつ、誰にちぎらせよ初豆を	島間小二才④
48	やよいたつみは花見のことよ、姉も妹も昔の笠、摘み取り帰りのおもしろや	横山⑩
47	都育ちのおとなの姫よ、育ちよければ仕出しもよいが、花の振袖かけんとや	川迎④、住吉⑥
46	五反畑の真ん中もとに、細い小女郎が青菜を摘むが、あの娘はよい娘じやきれいな生まれ	上中⑭
45	かごで妻持つな、かごで飼わねど持つな、小鳥や飼わねどかご恋し	西之つんたん拍子⑩
44	二九の十八で呼ばれきて、四六二四で子ができて、五六三十でいできると、ぜひにいでならいねもしようが、もとの十八して戻せ	西之つんたん拍子⑤、平山西之町②
43	西や東や二人の仲をくらを立てたよ、泉酒、泉の酒のわく見ればいかなる御上の娘でも、わしにましたる人はない、ようもなるろーたのものしや	平山西之町⑨
42	せんと深山の深山の、奥の入りには、ちようこでたよしわが藤袴きて見れば、なが立袖長羽織、裾にや嬉しおがの子によしわら、きみおいた面白や	横山⑬
41	童田川から朝水汲めば、稚児の若い衆が袖ひきまわす、女郎衆が袖ひきまわすまで、もう離さない、若衆さま、水がたばれて語られん、早くいできて語りましょう	竹屋野⑥
40	春は花見に、いれるいれましょごえ、さかりの花じゃえ、しぎよくもじようろうわ、小棧にかのこをつけてや、しおらしや、いえむこむこ、野辺に花摘む女郎がさて、しめてつゆるめつしおらしや	西之つんたん拍子⑩、上中⑨
39	おやつ参りの道つれ話、うどんあの子が、嫁入りすると、いうが誠かふびんなことよ、手裁箱ぬるえのうごき、とうちやしちやごちや、ごちらいければ、鏡立てまで、買い整えて、ひらやしゅうとの、蒲団や夜着や、かや枕や、しめてくりよして、となりきんじん、ジロベエがおてうちがいのお手枕、じつそうじやえ	西之つんたん拍子②
38	われと想えよ恋の道、見染めて会うほどに、たとえ会わずと馴染みつ、忍べ忍ぶの通う道は、待つはつらいや気の毒や、想いながらも、会いたや見たや、便りを求めてやる文は、必ず今度のかえれじやれど	西之きのぎの②
37	睦まじや、またはえ、いとしさに、にしだせめの、かねて、夜ごに、かわるものとは、たがよいに。そめて、黒髪のもつれてとけるよたのものしや。たのはきのの、まわすのすすき、よそになびくな、きょうくるもよう。	西之たけなが②

明確な分類基準は立てがたいが、色気のある歌、艶っぽい歌をまとめてみた。

恋の歌というほどの叙情性はないように思う。やや長めのものから、短詩型のものへと、地区を考慮しつつ並べたが、明確な意図はない。何らかの典拠がありそうなものもあるが、見出だせなかった。最後の51は数え歌。数え歌としては、他に表2-1の4「一二重二重みよよえ」がある。

(f) 民謡調の盆踊歌

表2-10

52	一里ある島に粟とキビヨ植えて、淡路もどる夜の君はまた頼む頼む	島間小二才②
53	馬毛に小屋うついたづら阿呆じゃよ、馬毛は浮島離れ島	島間大才③
54	屋久のゴンボーシヤよ、血か他人かいとどししかよ、そもにちよる	平山広田⑨
55	二度と行くまいよいせんだいかわに、高き山から切りこむ切りこをむつ、今朝の風にかわくちおううえて	増田③
56	秋は夜ながし(以下不明)	女洲⑤

民謡調、ないし地元感のある歌。52の「淡路」は「会わで」かとも思う。55の「せんだいかわ」が「川内川」かどうかもわからない。

以上、類歌を中心に種子島盆踊歌を分類してみた。上方歌(地歌)と関連のある歌が多く、一般的な風流踊歌に類歌が少ない、祝言系の曲が多いなど、ややバランスの悪い印象がある種子島の盆踊歌謡の伝承状況に、どのような背景があるのか、次項で検討したい。

三 町躍としての種子島盆踊

第五章第一節で、松原氏は、現在に至る種子島の盆踊の前段階として、一遍上人以降の時衆の徒による、南九州における念仏踊の普及が種子島にも及んだこと、これとは別に、放下や暮露など遊行の勧進聖による念仏芸の流入があったことを推定している。また、五来重氏は『日本庶民生活史料集成』第一七巻で、念仏芸能として種子島の大踊を取り上げ、盆踊を含めて、「中世末から近世初期に流行した大念仏風流」が伝えられたものと推測している。

本項では、こうした先行研究の見解とは別に、町人らによる町躍という視点で、種子島盆踊の成立を検討してみたい。

(一) 風流踊と盆踊

「盆踊」について、たとえば『日本国語大辞典』をみると「盂蘭盆の時期に、男女が歌や音頭に合わせて踊る。本来は迎える精霊の慰霊と魂送りとを兼ねあわせたものといわれる」とされている。一方、『国史大辞典』では「旧暦七月十三―十五日を中心とする盂蘭盆会に踊る集団舞踊」として、歴史的展開についての記述が続く(三隅治雄氏執筆)。概念的な国語辞典の見方と、歴史と現況をふまえた『国史大辞典』の見方は、少し異なっている。

一般に盆踊というと、音頭取りの周囲を老若男女が円陣で取り巻いて、音頭に合わせて手踊をするという印象を持たれている。東日本では短詩型小歌を脈絡なく次々と歌い、西日本では長編の踊り口説を歌うことが多い。このような盆踊は、民俗芸能の分類として「風流踊」というジャンルに属する。

こうした盆踊の成立を知るために、以下、風流踊の展開を略記する。

風流踊は、円陣手踊の盆踊以外にもさまざまな形式があつて、全国に広く分布している。「風流」(ふりゆう・ふうりゆう)は、本来優雅なこと、優美な趣きなどをさす一般語であり、美術工芸などの芸術分野では、意匠を凝らした装飾などについて用いられる。芸能の分野でも、延年・猿楽などで趣向を凝らした演出をさす場合がある一方で、とくに芸能の一ジャンルの名称としても用いられてきた。

芸能ジャンルとしての風流の淵源は、平安時代以降に広がった御霊信仰にあるとされる。疫病・天変地異・農作物の不作などの原因を、非業に死んだものの祟りと考え、その霊をなだめ祀り、送り出そうとするのが御霊信仰で、その際、御霊を依り憑かせるために、傘鉾などのシンボリックな飾り物をつくり、楽器・歌謡・踊などで囃し立てるようになった。中世以降、飾り物も音楽・舞踊も、次第に御霊信仰から離れて華美を求めるようになり、趣向を凝らし、日常性を逸脱しようとする、その精神性から「風流」と呼ばれ、芸能のジャンル名として定着したと考えられている。

音楽・舞踊を主体とした風流芸能は、室町時代半ばまで、囃子詞とササラ・鼓・鉦などの楽器による、単純な所作の繰返しで、「ハヤシモノ」と呼ばれた(拍物・拍子物・囃子物などと表記)。

文献史料上では、平安時代末期の久寿元年(一一五四)三月に行われた「やすらい花」がきわめて古いが(『百鍊抄』『帝王編年記』『梁塵秘抄口伝集』卷

一四)、現在の京都市紫野のやすらい花の芸態とは異なると考えられている。中世の祇園会などで行われた鷺舞は、貞治四年(一三六五)から記録が残り、『看聞日記』永享八年・一〇年(一四三六・三八)の記事は、山口県山口口に伝承されている鷺の舞の芸態を想起させる。

盂蘭盆の時期に風流が行われた記録としては、応永年間(一三九四―一四二八)の京都のものが早い(山路興造・二〇〇九)。初期の記録では、「念仏拍物如例」「念仏申拍之」「山村念仏拍物有風流」(『看聞日記』応永二六年(一四一九)七月一四・一五日)など、念仏詠唱と風流の拍物が結びついていたとみられるが、奈良興福寺門跡の日記『経覚私要鈔』文明四年(一四七二)七月一七日には、次のような趣向をこらした風流の記事があり、次第に盂蘭盆の供養から離れていったことがわかる。

入夜自古市風流来^{云々}、西松垣ヲ隔テ見物之、先ハウ振兩人在之、面^二面ヲ

宛、次笠アリ、トウロヲカツキ、大芥ヲトリ為之、児舞之 藤千代也、

次唐人罷出祝言申之、舟ヲ押出テ宝珠ヲ進上之、次火ヲ仕立、シン車火等

在之、次舞唐人舞也、兩入舞之、次延年在之、(下略)

なお、「盆踊」という言葉は、『大乘院寺社雜事記』文明一六年(一四八四)

七月一七日程に「盆踊事 自六日奈良中止之」、春日権神主師淳の『明応六年

記』明応六年(一四九七)七月一五日程に「南都中近年盆ノヲドリ。異類異形

一興(略)毎年盆ノ躍ハ。昼新薬師寺ニテ躍リ 夜不空院ノ辻ニテ躍之処」な

どの例があつて、「盆踊」という熟語があつたかどうかは明確でないが、盆の

風流踊が定着していたことは推察される。

応仁の乱が終わると、風流踊は次第に大がかりとなり、天文年間(一五三〇

年代)以降、京都を中心に盛んに行われた。この頃、盆に行われた風流踊は、

幕府の武家衆、公家衆、町衆などが張行(興行)し、相互に踊り掛ける(踊り

を掛けられたら、掛け返す)例が多くなる。『言継卿記』永禄二年(一五五九)

七月の記録には、二〇〇人、三〇〇人という踊り手の人数が記され、同書元龜

二年(一五七一)七月二五日には、「今日上京中ノ躍武家へ参之由有之間、已

刻参武家、南之楯へ御成、御傍に候見物之、先一条室町以下雪躑躅等也、次西

陣、^{廿一}田栽、座頭^上等、^{第一之}次立売薦僧^{尺八}、以下^{第二之}次絹屋町小川鐘鑄以

下入破^{三番}、^{道明寺}、^{西王母}等也、各結構金銀、金欄、段子、唐織、織物、紅梅、

綺羅を尽す、先代未聞也」と、一条室町、西陣以下の町衆が、武家(將軍)の

館に豪華な踊を掛けたことが記されている。

このような京洛の風流踊の中で、最大の規模とみなされているのは、徳川家康が將軍に任ぜられた翌年の慶長九年（一六〇四）、豊臣秀吉の七回忌に催された豊国大明神臨時祭で、太田牛一『豊国大明神臨時御祭礼記録』には、豪華な傘鉾を中心に、趣向を凝らした仮装の者を伴う中踊（樂器）と、それを取り囲む一〇〇名の踊り子（側踊）から成る踊組が五組編成され、警固の棒振りが計五〇〇人、床几持ちが計五〇〇人だったと記される。

室町時代後期の風流踊の歌謡は、小歌組歌形式の踊歌が多かったと推測されている。ほとんどの史料は踊の番組を記す程度で、歌謡までは示していないが、室町幕府の奉公人による日記『御状引付』（内閣文庫蔵）の天文七年記事余白に、「盆のお□□」（破損箇所は「とり」と推定される）として小歌組歌がメモされており、森末義彰（一九三三）が、盆の風流踊に用いられたものと紹介して以来、年代がほぼ確定できる風流踊歌として注目されてきた。近年、佐々木聖佳（一九九八）により詳細な調査と翻刻がなされた。

また、『言継卿記』永禄十一年七月十一日条に「飛鳥井中将をとりの歌三色五首つゝ可作興之由被申被来、真木島来十五六日に可躍用云々、はねおとり、恋のゝゝゝ、すきのゝゝゝ三色遣之」という記事から、山科言継のような公家が、盆の風流踊歌（小歌組歌とみられる）の制作に携わることがあったことが知られる。

民俗芸能として組歌形式の踊歌をもつ風流踊は、近畿一円に濃密に分布し、さらに東は岐阜県・静岡県山間部あたりまで、西は兵庫県山間部（但馬）から中国地方、また淡路を経て徳島県から四国各地、海を渡って大分県南部の佐伯市・臼杵市周辺へと、広く伝播している。これらは、秋の祭礼に踊られることが多いが、兵庫県養父市大杉のざんざこ踊、徳島県徳島市宅宮神社の神踊など、現在盆に踊られている例もある。

五来重（一九八八）は、こうした風流踊全般を踊念仏（念仏踊）に由来するものとみる。しかし、疫神送りのための拍物風流を生み出した御霊信仰は、仏教とは別の信仰であり、拍物の形成過程で踊念仏と交わることはあったが、室町後期に拡大した風流踊は、公家・武家・町衆などによって担われており、盆に踊られる場合でも、見た目の華やかさを追求した娯楽の芸能として、独自の発達を遂げたと位置づけるべきだろう。

（二）町躍の成立

豊国大明神臨時祭の後、京都では大がかりな風流踊の記録はみられなくなる。その原因として、勢力を争っていた戦国大名たちが領国へ戻り、その経営に力を注ぐようになった、徳川幕府の統制が強まった、町衆が浪費を戒めるようになった、世間の関心が風流踊からかぶき踊（お国やその人気にあやかった遊女たちによる）に移った等々が考えられるが、明確ではない。

かわって、近世初期風俗画などの絵画資料には、京都の町の辻で、盆灯籠を下げて踊る町人たちや、茶屋・広場などの庭で踊る町人たちの、一〇名から三〇名程度の手踊の陣が描かれるようになる。小鼓や締め太鼓の他に、一節切や三味線が描かれた絵画もあり、戦国期までの風流踊とはつきり一線を画すことになる。祇園町の茶屋では、盆の時期に祇園町大踊が催されるようになり、京都・大坂の歌舞伎でも、盆狂言の大切に「都風流大踊」が付され、明和（一七六四〜七二）頃まで受け継がれた（土田衛・一九九六）。

盆の時期に、町人による小規模な輪踊が行われるようになったのがいつからかは明確でないが、江戸時代初期を大きく遡ることはないように思われる。そこで歌われた歌謡を明示する資料もないが、少なくとも当初は、前時代以来の小歌を用いたと推測される。ただし、樂器構成が変わるので、音楽的には異なるところがあつただろう。

現在まで日本各地に伝えられる輪踊形式の盆踊は、このような京洛の輪踊がもとになったと考えられる。つまり、おそらく室町時代に遡るものではなく、踊念仏がそれぞれの土地で変化を遂げたものでもないのとらえたい。

今日、江戸時代以来の形式を残す盆踊が伝承されているのは、県庁や市役所所在地などの政治・経済の中心地から、やや隔たった土地であることが多い。しかし、江戸時代に、京都周辺から町躍が伝わっていったのは、まず各地域の中心部の城下町であつたとみられる。各藩の藩政記録の中から、城下町での町人たちの盆踊（町躍）の記録を見出だす試みは、ほとんど行われていない。村落部になると、記録が残っていても江戸時代後期のものであることが多い。資料的に各藩内の盆踊の展開を知ることが多い。

城下町の町躍に起源を持つ盆踊としてよく知られているのは、岐阜県郡上市の郡上踊だろう。郡上藩主遠藤慶隆が、寛永年間に領民の融和をはかって奨励したのに始まると、土地では伝えている（『郡上八幡町史』）。もちろん、資料

にもとづく説ではなく、宝暦四〜八年（一七五四〜五八）に起こった郡上一揆に、郡上踊の起源を求める説もある（大石慎三郎・一九八四）。現在伝承されている踊も、江戸時代後期のものと思われるが、観光化されているとはいえず、城下町の町躍の雰囲気は伝えている。

徳島県の阿波踊も、江戸時代には城下の町躍として行われていた。三好昭一郎（一九九八）は、慶安三年（一六五〇）編纂の『春日祭祀』に、各町の踊の芸題として「歌舞伎踊」「鐘鑄」「雑賀踊」などがあること（原資料は示されていない）、明暦三年（二六五七）の御触書で、「毎年七月の盆踊りは十四日から十六日まで三日間」とされたことなどを記している。

越中風の盆が踊られる富山県八尾町は、もと浄土真宗聞名寺の門前町で、寛永一三年（一六三六）に町立てされ、九齋市が開かれる交易の場として栄えたところだった。

これらは、資料的な裏付けを欠くものの、経済的余裕のある城下町や市場町で、江戸時代前期までに町躍が賑わうようになり、その後周辺の村落や他地域にも波及していった事例と考えるのが妥当だろう。

こうした伝播経路を、かなり明確にたどりうる例として、長崎県対馬市の盆踊をあげることができる。朝鮮半島に近い離島である対馬では、江戸時代末まで、一〇〇ヶ所ほどある集落の、八〜九割で盆踊が行われていた（二〇一〇年代後半には六〜八地区に減少）。その原型となったのは、対馬藩主宗氏の居館があり、交易の港町でもあった厳原（城下）で、宗氏の先祖霊を祀るために行われた、盆の行事だったとみられる。宗氏のもとでは、盆の時期、藩士や宗教者である法者らが、宗氏先祖を祀る寺や城内で、御卵塔風流（行列風流の一種）を行う一方、六十人衆と呼ばれる特権商人の子弟らが城内に参上して、扇子踊・手踊・長刀踊などを踊り、「六十人踊」「町躍」と呼ばれていた。記録上、正保三年（一六四六）頃まで遡りうるが、ともに明治期以降廃絶した。

対馬の村落部での盆踊を確認できる記録は、享保八年（一七二三）まで下り、城下との先後を明示する資料はない。しかし、城下の盆行事では、藩士と商人という異なる階層が、別個に二種類の風流芸能を担っていたのに対し、村落では、百姓（土族を除く住民）の若者組織が、年齢によって二組に分かれて二種の芸能を担い、城下の盆行事の模倣とみられる演目を伝えていることから、城下から村落へ波及した事例とみなすことができる。

対馬の盆踊が手本とした内地の芸能も、御卵塔風流と六十人踊でまったく異なる。藩士らの御卵塔風流は、筑後（福岡県）や肥前（佐賀・長崎県）で行われている風流・浮立うきだてと呼ばれる、太鼓を打つことを主体とする風流芸能、および行列風流に類するもので、当初からほぼ固定していたとみられる。一方、商人子弟の六十人踊は、元禄期（一六八八〜一七〇三）の踊歌から江戸時代後期の踊り口説まで、京都・大坂や博多・長崎など、都市部で流行している風流系の踊を、次々に取り入れていったと推定される。村落に入るとそれらは民俗化するが、本来は都会志向のものであったといえる（『対馬の盆踊』）。

離島である対馬は、文化の受け入れ窓口が限られており、江戸時代前期まで、内地（都市）の風流系芸能を取り入れて城下の踊が成立し、その後には村落へ波及したモデルとして取り扱うことができる。

（三）種子島盆踊の形成

前項まで、京都を中心にして室町時代後期から江戸時代前期の風流踊の変遷を概観し、地方での伝播経路を推測した。ここでは再び種子島盆踊に戻って、歌謡の特色からその形成過程を考えてみたい。

（a）文献史料

種子島盆踊の江戸時代の記録については、第三章第三節で松原氏が詳しく説明している。ここでは、赤尾木城下の祭礼踊に関する史料を、改めて原文のまま掲げる。

◇資料1 『種子島家譜』（『鹿児島県資料 旧記雑録拾遺』「家わけ四」「家わけ八」「家わけ九」）

①延享二年（一七四五）七月（巻一五）

○八日、大会寺施餓鬼、十三日、慈遠寺施餓鬼、十四日・十六日、本源寺施餓鬼、十六日・十七日、両町祭礼楽、如例毎歲

○二十一日、於川迎祭礼踊場、鮫嶋半助（他二名）、与鮫嶋甚次郎（他二名）
諍論、双方多与党、令組頭・横目会彼輩于本源寺札之、罪之有差、禁錮一箇年（三名）、六箇月（五名）、（以下、五箇月・四箇月・四十日・三十日・

廿日・一七日、人名略）、其余至親族禁錮者多矣、

②寛延二年（一七四九）六月（巻一五）

○二十一日、下西之表村吏請罷物頭等監其祭礼楽、許之、

③天明八年（一七八八）七月（卷一九）

○八日、以旧章祭先祖乃諸臣忠死之靈於大会寺毎歲、倣之

○十三日、以先躡祭先祖及忠死者之靈於慈遠寺毎歲、倣之

○十四日、以旧章祭先祖於本源寺祖師堂毎歲、倣之

○十六日、以旧躡祭先祖及忠死者之靈于本源寺方丈毎歲、倣之

○同日、以旧祭先祖於持仏堂毎歲、倣之

○同日、西町祭礼踊毎歲、倣之

○十七日、東町祭礼踊毎歲、倣之

④文政一〇年（一八二七）七月（卷四三）

○今歲兩市街祭礼樂止、以清孝院殿喪也、

⑤文政一二年（一八二九）七月（卷四五）

○十六日・十七日、兩市街祭礼樂止、以畢喪未踰月也、

⑥明治二年（一八六九）七月（卷八五）

○是月、官下令廢于蘭盆会始以神之礼祭祖先、

◇資料2 羽生六郎左衛門道潔著『種子島家年中行事』

七月中之事（中略）

朔日 一 盆御祭礼中三ヶ寺江之御名代勤仰渡之事

▲八日 大会寺江御名代 何某殿

▲十三日 慈遠寺江御名代 何某殿

▲十四日 本源寺江御名代 何某殿

▲十六日 本源寺江御名代 何某殿

右之通御証文二而御用人より三ヶ寺江申渡有之

▲御譜云 盆祭礼三ヶ寺御名代 貴族勤之云々

私云 御譜の表 如此たりしが近年は惣して御役人より御名代有之

朔日

一 兩町江祭礼踊之儀被仰渡御証文之事

▲御祭礼兩町踊狂ひ之事

▲踊主取之事

右式ヶ条町奉行より可申渡旨御証文下ル

私云 享保の頃迄ハ踊主取人柄御見合を以 被仰渡たると見得たり 今

者 町奉行申渡なり 相違の訳不詳

▲御祭礼兩町踊之節 横目町奉行兵具奉行勤之事

▲御祭礼踊方警固足輕之儀 兵具奉行江申渡之事

右式ヶ条御用人より可申渡旨御証文下ル

▲御譜云 古来ハ兩町踊之節 町奉行兵具奉行足輕召列警固たりしが 延

享三丙年より相改 自今以後ハ用人老人可相加也云々

▲譜略二云 兩町踊ならしの節 御用人兵具奉行足輕下知する事 今に同じ

上西之表下西之表祭礼踊の節 御用人兵具奉行勤有之来候処 寛延二己年より下西之表依願御用人勤引取二相成りたりと云々

私云 古来は上郡村々祭礼踊之節 兵具奉行兩人勤有之たる事 御旧記二

見たり 近來ハ勤無之 一つの頃より御引取二相成りたるや 其訳不詳

私云 右の如く踊方「引警固稠」「御念入られたりしは 延享

三丙年より改りしとぞ 是延享二己年 下西之表村踊の節 騒動有之

夫よりしての事也とぞ

朔日

一來ル十四日御持仏堂にて盆御回向勤御役人代勤御証文之事

右当番之御番頭より代勤有之候様 今日御証文二而被仰渡也

（中略）

七日

一 上西之表祭礼踊之事

附 兵具奉行老人内横目老人警固として差越 乗馬西之表より出ル 警固足輕

は各より手当二テ勤有之

私云 寛延の頃迄ハ御用人よりも差越たる事 御旧記二見得たり 御引

取の事知らず

八日之事

一 於大会寺御先祖様御祭礼餓鬼之事（略）

十三日之事

一 於慈遠寺御施餓鬼之事（略）

十三日

一 本源寺江御水棚附方之事 朝（略）

十三日
一 御先祖様御廟所^江 御卒都婆上^ル 御花立仕替^之事 (略)

十三日
一 御館の御庭^江 高燈炉上る事 (略)

十四日之事
一 諸御役目勤之面々盆先祖祭^ニ 付出勤御免之事 (略)

十四日
一 御館御持堂にて盆回御恵向之事 昼午刻 (略)

十四日
一 本源寺^ニ 御先祖様御祭^并 御施餓鬼之事 (略)

十五日
一 本源寺客殿御水棚祭之事 (略)

十六日之事
一 本源寺にて御施餓鬼之事 (略)

十六日
一 御祭礼西町人踊之事

附 ▲ 壹番^ニ 本源寺^庭 ▲ 貳番^ニ 御館^ニ 御広間の庭に
▲ 四番^ニ 慈遠寺^庭 ▲ 五番^ニ 大合寺迄にて終^ル ▲ 三番^ニ 御墓

▲ 横目老人
▲ 町奉行老人

▲ 兵具奉行
▲ 警固足軽 兵具奉行手当なり

右之如く役々相勤也 三ヶ寺にて 茶たばこ盆出^ル 古来ハ焼酎西瓜等出^シ
候得共近來取止なり

▲ 肴 干鰯拾
右三行 踊人数中江御物より給^之 此御礼踊方主取之者より 三ヶ寺よりも踊
人数中 焼酎^並 西瓜さし遣し候 盛^古酒 近世ハ踊主取^ニ 持て遣スト也

私云 祭礼踊^ニ 蝶といふ者あり 西町ハ大黒の姿 東町ハ恵比須の姿 其仕形踊にてハなく踊一
つぐの間に踊の内輪を三廻り走廻る迄なり 其謂兩町共^ニ 知る者な

し 考るに 祝ひの時用^ル 銚子提に蝶の雛形を結び付^ル 提^ニハ女蝶なり 其
謂 彼の蝶といふ虫ハ全体衆類曉^ニ 「殊に雨風霜雪の天氣騒敷を

「」にきらひ 穩風快晴の天氣を惹らび 衆類を誘ひて 山中より
飛出 飲食の好む心もなく 一向花にのミ親ミ馴れし類と共に 飛付
飛めぐり遊び戯る 其欲なき体「」を親^ニて 銚子提に蝶の雛形を結
付る也とぞ 然ば此祭礼踊に蝶といふ者を取仕置 踊半を走せ廻らす
る事も此意にて 多人数の踊欲意「」ありてハ踊とならず 御祭礼
の趣意にも叶わず 彼の蝶の如く欲意なく夥敷多人教心を一つにして
踊謡 尊靈を慰め率る意ならんか

又古老の説云 西町踊の蝶大黒の姿ハ古へ正月元日 西町人御館へ召れ
大黒の舞を舞せられたり 其古風の浅りなりと 東町踊の蝶恵比須の
姿ハ古へ正月二日 東町人御館へ召れ 恵比須の舞を舞せられたりと
其古風を残したる故実なりと 乍然 兩町の旧記^ニケ様の子細一向見
えず され共 古老の説も尤理に近しと覺て然なり

十七日之事
一 御祭礼東町人踊之事

附 踊方勤役々^并 警固足軽等之勤 西町踊二同し 御物より焼酎肴踊人数中^江
被下事 西町踊^ニ同し

▲ 御譜略云 元禄十二年六月廿四日 十八代 久時公 何れも様御同心御
下島あり 同七月十六日十七日 兩町祭礼踊 於御館上覽し給ふ 又

翌々十九日兩町踊再び御懇望ありて上覽し給ふ 是は御姉様御待受の御
心入あらせ給ひての事とぞ 此時三ヶ寺住職^并 衆徒其外近所等の隠居老
体の面々 役所より見物可仕旨 上命ありとなり 依^而各難有御席末よ
り見物す^{云々}

私云 古へハ御役所とて別段にハなく 御広間^江 御役人衆出勤ありしと
也 其後 御役所御造営ありてより 兩町踊の節ハ 御物奉行御用人を

御役所へ御誘引にて御見物あり 又去^ル天明の頃迄は御広間内へ諸士妻
女共這入 群集して見物したり 甚以不敬至極也と 乍然 御咎目もな
かりし也 此御譜の趣を以考れば 元禄の頃 久時公諸士御慈愛の尊命
の御余風なりたらんか され共 近來ハ御広間より諸士迎も見物する事
御禁制^ニ成たり

(下略)

(b) 祭礼踊の確立

本報告書の作成にあたって、西之表市の博物館である鉄砲館で文献の調査をしたが、(a)の二資料以外に、町方の盆踊に関する藩政記録は残されていないようである。

資料1・2の内容については、第三章第三節に詳説されているので参照されたいが、(二)で述べた町躍という観点から、この記録の意味するところを考えてみたい。

資料2から検討する。文化五年(一八〇八)頃羽生道潔によってまとめられた『種子島家年中行事』は、日記や編年資料ではないが、種子島家に伝えられていた記録類を踏まえて執筆されたとみられ、個人的見解は「私云」と明記されているので、かなり信頼しうるだろう。

七月の項には、種子島藩の盂蘭盆に関する記事が並ぶ。一三日から一五日まで、連日種子島家の先祖供養が行われているのは、鹿児島本土の薩摩藩やその他の諸藩にも共通する(施餓鬼といっているのは、本来は正しくないだろう)。これとはまったく関わりなく、赤尾木城下の町人たちにより、七日に上西之表、一六日に西町、一七日に東町の祭礼踊が行われている。一三日から一五日までの公的な盂蘭盆期間から、日付をずらして踊を催すのは、戦国期の京都の盆の風流踊でも同じだった。

種子島藩と直接関わりのない町人の踊が、この記録に詳しく書き留められたのは、祭礼場の警固のため、藩から足軽などが派遣されたためである。羽生道潔は旧記を閲して、担当の役人に変遷があったことを記している。そこに記される延享、寛延という年号は、道潔が「御譜云」「譜略云」と出典を示すとおり、資料1『種子島家譜』の①②の記事に該当しており、正確性が確認できる。ただし、彼が見たのは、現存する『種子島家譜』(寛政一〇年(一七九八)に編纂開始、文化七年(一八二二)に一段落して、以後明治期まで継続)ではなく、編纂の際に参照された原資料だったのかもしれない(『種子島家譜』以前に、延宝五年(一六七七)成『種子島譜』、明和六年(一七六九)成『種子島正統系図』もある)。

そう考えるのは、一七日の東町の踊記事の中で、元禄一二年(一六九九)の第一八代当主久時の上覧について詳しく記されているのだが、現存『種子島家譜』にはその記録がないからである。元禄一二年の上覧記事は、種子島盆踊の

もつとも早い記録となるので、原資料を見ることができないのは残念である。とはいえ、道潔が記録に忠実であることは、延享・寛延の記事の一致からも確認できるので、元禄一二年の久時上覧記事も信頼してよいだろう。

元禄期(一六八八〜一七〇三)に藩主久時やその姉、また天明期(一七八一〜一八八)までは藩士妻女らも町躍の見物を楽しんだことを回顧し、文化期(一八〇四〜一七)に藩士の見物が禁じられているのを残念そうに記している道潔の書きぶりは、武士階級の人々にとっても、町躍見物が楽しい体験であることを示しており、町躍の規模の大きさを推察することもできる。藩主による町人らの踊・町躍の上覧は、前述の対馬藩でもみられたことで、他に、大村藩(長崎県)の寿古踊(『大村の寿古踊』)、飢肥藩(宮崎県日南市)の泰平踊(『日南市史』)など、九州の例も少なくない。

赤尾木城下の町躍の記録は、この元禄一二年を遡ることはできない。道潔がそれ以前の上覧記録を示さなかったのは、記録が失われただけなのか、藩主が盆の時期に在島することがなかったからか、在島しても町躍上覧の例がなかったからか、あるいは町躍そのものがなかったからか、いずれであろうか。

右には引用を省いたが、『種子島家年中行事』には、大会寺・慈恩寺・本源寺での施餓鬼の際に、「御参詣」「御出府之節は御代参」などの注記がみられる。少なくとも文化頃には、藩主が盆の時期に在島し、先祖供養をすることがあったように読み取れる。天明期まで御広間に大勢詰めかけて踊見物をしたのが「不敬至極」だというのも、藩主の御前であるからこそと思われる。一方で、同書七月一日条「御名代勤仰渡之事」は、各寺への代参役を定めており、在島しない年も多かったとみられる。元禄期まで遡ると、『種子島家譜』は記事が少ないため、藩主の動向はいっそう不明瞭である。

しかし、前項までに触れてきた、上方歌謡の撰取という特徴を考えあわせると、赤尾木城下での町躍上覧の始まりは、元禄一二年を大きく遡ることはなく、この年が特筆すべき記録だったと推定することができるのではないだろうか。

種子島盆踊歌の特色は、後の地歌につながる上方歌謡を多く取り入れている点にあり、その歌謡は、元禄一六年(一七〇三)刊『松の葉』以降に載せられるものであることは、述べ来たたとおりである。ただし、元禄期の赤尾木城下祭礼踊歌の実態は明らかでないが、現在まで伝えられた九〇曲程度の盆踊歌の中で、元禄期成立の上方歌謡が少なくないことは(第二項(二)参照)、当時

から上方歌謡の摂取があつたことを示唆するだろう。

また、記録上、町人らの踊は、「祭祀踊」であつて、「盆踊」とは記されていないことが注意される。羽生道潔個人の見解ではなく、『種子島家譜』にも「西町祭祀踊」「東町祭祀踊」「両市街祭祀楽」と記されている。為政者側には、町躍は町人の先祖供養のためのものではなく、娯楽的な祭祀と受けとめられていたことになる。もっとも、盂蘭盆の行事全般をさして盆祭りと呼ぶ例も広くみられる。民俗的には、仏教法会としての盂蘭盆会だけでなく、日本古来の先祖供養の魂祭り(祀り)の風習が含まれているからだろう。しかし、赤尾木城下の祭祀踊は、それを担った町人らの意識としても、先祖供養とは別の祭祀ととらえられていたように思われる。踊歌に、盆行事とは無関係な、娯楽的な上方歌謡を積極的に取り入れ続けたからである。盂蘭盆に際し、藩主の先祖を供養し、現当主の上覧に供するという名目のもとに、大規模な祭祀踊が認められていたと考えてよいだろう。藩主も藩士も、盆の先祖供養の余興として、娯楽的な祭祀踊が見たかつたのだろう。

種子島盆踊歌のもう一つの特徴は、その三分の一近くが、祝言系や豊年の歌で占められていることだった。赤尾木城下の踊が、祭祀の踊であれば、他の地域の風流踊にみられるように、冒頭に祝言系の歌を置くのは自然な構成といえる。『種子島家年中行事』の十六日西町の記事によれば、城下の祭祀踊は、本源寺、御館、御墓、慈遠寺、大会寺をまわつて踊を奉納しており、場所によつて踊る歌を変えたとすれば、祝言系歌謡が多くなるのも理解される。あるいは、年によつて歌を変えたのかもしれない。第二項で、赤尾木城下に近い、川迎・能野・住吉・横山に祝言系歌謡が多いことを指摘したが、城下の踊歌が多く残つた結果とみることができよう。

以上、歌謡資料の特徴と『種子島家譜』『種子島家年中行事』の記事によつてみると、赤尾木城下の町躍は、上方歌謡を取り入れて、元禄期に規模の大きな祭祀として成立したと考えて矛盾はないように思われる。仮に対馬のモデルを当てはめるとすれば、村落への伝播はその後のことになるだろう。

(c) 元禄期以前の盆踊の可能性

一方で、元禄期は町躍の拡大期であり、以前から小規模な城下の町躍や村落の盆踊が行われていたと考えることもできる。証すべき資料がないので、想像

の域を出ないものの、それを思わせる歌謡上の特徴がないわけではない。

先述のように、種子島盆踊歌は、島外の各種風流踊歌に類歌を見出だすのが難しいなかで、トカラ列島の十島村や三島村と類似する歌が少なくないのが特徴の一つである。種子島にもっとも近い屋久島には類歌がほとんどみられないことから、薩南諸島全般に同じような踊歌が広がっていたと考えることはできないだろう。

種子島とトカラの踊歌が共通する顕著な例は、隆達小歌の「たねとりてうへしうへなは むさしのも せはくやあらん わかおもひくさ」が、種子島の西之、横山、川迎で歌われ、十島村中之島でも歌われることだろう。中之島の詞章は、「うれしうえなの武蔵野の、せまくもあらぬわが思ひ草、茂れ茂れ茂れ、治まる御代こそめでたけれ」(『十島村誌』一〇四九頁)で、残念ながら冒頭の「たねとりて」を欠くが、第二句からは元歌の詩句を保持している。そして、隆達小歌にはない「しげれしげれしげれ」以下が、種子島の西之・横山にも中之島にもみられることから、種子島と中之島に、隆達小歌が別個に伝わったとは考えにくい。

鹿児島本土に、両者に影響を与えた起点(仲介点)を見出だせないで、種子島の盆踊とトカラの盆踊には、何らかの直接的な関係があつたと考えるべきだろう(両島の関係については第五章第一節参照)。トカラの盆踊がいつ頃成立したのか明らかでなく、いずれが先行するかは判断しがたい。トカラの踊歌の方が詩型が整っている印象はあるが、記録の態度の違いもあるので、即断はできない。

種子島の盆踊歌謡と島内の大踊歌謡に共通するものがあることも注意される。西之表市安城立山盆踊歌「土佐から船が三艘ほど参る」は、種子島の大踊「げんだら」「正月べいじょう」と共通している。この「土佐から船が」の歌は、三島村硫黄島、十島村口之島をはじめ、各地の風流踊に類歌が多数みられ、近世初期から歌われたものだろう。また、西之、平山広田、川迎の退場歌「南さがりの」が、竹屋野の大踊「雷踊」の一節に含まれている例もある。

トカラの盆踊や島内の大踊と共通する歌謡を用いた盆踊が、元禄期以前から種子島で行われていて、それをもとに、元禄期の城下の商人らが、経済力の拡大などを背景として、上方歌謡を取り入れ、盛大な町躍を行うようになった、という見方は成り立ち得ると考える。

しかし、元禄期に上方歌謡を主体として町躍を創始する際に、島内大踊やトカラの踊歌などを加え、幅広いレパートリーを揃えたという、逆の見方も可能だろう。大踊やトカラと共通する踊歌は、後からの追加とみることもできる。文献史料を欠くなかで、いずれか推断することはできないように思われる。

(d) 念仏・和讃との関係

先にふれたように、第五章第一節で、松原氏は南大隅町佐多の念仏行事と、十島村口之島・中之島の盆踊に共通する点があることを指摘し、種子島でも鎌倉後期から南北朝期に、真言律宗のもとで盆の念仏供養が行われたと推測している(種子島が琉球との交易にあたってトカラや奄美を経由したことも述べられている)。また、五来重(一九七二)は、種子島の大踊を、袋中上人を頂点とする浄土宗名越派の善光寺聖による大念仏風流が伝えられて残ったものと推定している。真言律宗や浄土宗の影響により、中世の種子島に念仏詠唱の流入があったかどうか、筆者には判断し難い。仮に中世種子島の盆行事で念仏詠唱から和讃への展開があったとしても、そのことと、近世初期歌謡である隆達小歌が、種子島にもトカラにも取り入れられていることは、直接結びつくものではないように思われる。

盆行事として和讃を唱え、それに合わせて太鼓を打って踊るところは少なくない。五来重氏が『日本庶民生活史料集成』第一七巻に収録した多くの和讃をみると、その展開がよくわかる。念仏詠唱に始まり、教訓的な和讃に留まる伝承地も多い一方で、和讃とは名ばかりの娯楽的な歌謡をあわせて伝えている土地も少なくない。上中地区⑩「あらいたわしの梅若や」で引用した、三重県松阪市松ヶ崎の「花王河」もやや芸能化した和讃であり、愛知県設楽町田峯の盆踊では、和讃を伴うはね踊と、かなり俗っぽい近世後期小歌の手踊とが併存している例を知る(『三州田峯盆踊』)。

種子島の盆踊歌に、寺誉めの歌は少なくないが、祝言性の強いものであり、和讃調の歌謡はみられない。それを明治初期の廃仏毀釈の影響とみる見解もあるかもしれないが、神仏分離は全国的に行われたにも関わらず、右のように、現在まで念仏詠唱と娯楽的な和讃・小歌が併存している盆踊もある。種子島の廃仏毀釈が嚴重を極めたのかもしれないが、そのために盆踊がいったん中絶したとして、その後に再度盆踊として復活しながら、基盤にある念仏・和讃を全

島で一掃してしまっただろうか。

『種子島家譜』明治二年(一八六九)七月の「官下令廢于蘭盆會始以神之礼祭祖先」という記事は、仏式の盂蘭盆會廢止を命ずるものだが、踊を禁ずるものではない。赤尾木城下祭礼踊の藩主上覧は、廢藩とともに途絶えただろうが、それは支配層の交替によるものである。明治初期から行われたであろう神式の先祖祭に、奉納踊(ないし余興)として従来の盆踊を踊っても、とくに違和感はないように思われる。村落の盆踊は下火にはなっただろうが、踊そのものが中絶したわけではなく、根本的な変容もなかったのではないだろうか。つまり、もともと城下の祭礼踊、村落の盆踊に、念仏や和讃の要素はなかったのではないかと考えられる。

藩政記録と伝承歌謡という現存資料にもとづく限りでは、元禄期の赤尾木城下の町人らが、都市の流行文化への憧れを精神的背景に、上方歌謡を取り入れて、娯楽としての町躍を確立し、その後も上方歌謡を追加して充実をはかったこと、城下の町躍を手本に、島内の町場(西之表市川迎や南種子町上中など)を中継地として、村落にも伝えられたことを想定するのが妥当だと結論したい。元禄期にはじめて盆踊が成立したかどうかは、現段階では確言できない。

(四) 種子島盆踊の芸能

(a) 上方歌謡の摂取形態

これまで、種子島盆踊の上方歌謡の摂取について述べてきた。現在、そのことを確認するには、盆踊に伝承される歌の詞章と、現存する上方の歌謡書の詞章とを比較する以外に方法がない。では、江戸時代には、具体的にどのような形で歌謡が摂取されたのだろうか。

結論からいうと、江戸時代も歌謡書、つまり本を通じて、上方歌謡が取り入れられることが多かったのではないかと考えている。それは、もともなった上方歌謡の性格による推定である。

これまで、上方歌謡として一括して述べてきたが、歌謡書に記される上方歌謡には、大別して二つのジャンルがある。その一つは、座敷で聞く純粋な音楽として、江戸時代初期の三味線組歌に始まり、長歌、端歌などと展開し、江戸後期に地歌と呼ばれるようになった上方の三味線音楽であり、当道組織の盲人音楽家によって伝承されたものである(以下は単に地歌とする)。地歌系の詞

章を記した歌謡書が、『大ぬさ』、『松の葉』、『若みどり』、そして『琴線和歌の糸』から『歌曲時習考』に至る一群である。一方、『松の葉』の一部と『落葉集』、『松の落葉』には、江戸から入って上方の座敷で流行した浄瑠璃や、歌舞伎や遊里の踊歌として歌われた歌謡も載せられており、地歌系とは性格を異にしている。元禄・享保期には歌舞伎の所作歌（芝居歌）や巷間の流行歌から、地歌に取り入れられたものもあつたが、その後の地歌は座敷歌として作曲されたものを主体としている。

『落葉集』、『松の落葉』の踊歌は、リズムミカルで賑やかなものが多いが、地歌は座敷で聞くものなので、メロディー重視で、しつとり、しんみりしたものが多い。なお、上方舞として地歌に舞が伴うようになるのは、江戸時代末期からとされる。

種子島の町人たちは、京都や大坂に出て、遊里や茶屋の座敷で地歌を聞くことがあつただろうし、中には地歌を習い覚えた数寄者がいたかもしれない。また、九州でも地歌は伝承されていたので（九州系の祖とされる宮原検校は久留米藩に扶持された）、上方まで出向かずとも、博多などで聞く機会があつたかもしれない。

ただし、種子島町人たちが町躍に取り入れたのは、結局のところ、地歌の詞章だけだつたと推定される。そもそも地歌には踊が伴わず、旋律も踊の伴奏音楽としては不適當だつたのではないだろうか。祭礼踊が現存の盆踊と同じ楽器構成だとすれば、大踊にならつて、締め太鼓と鉦を主体としたものだつただろう。江戸時代には三味線が入つたようだが、地歌そのままの旋律やリズム・テンポを当てはめることは難しかったと思われ。極端に考えれば、高い船に積まれて来た上方歌謡書を買ひ求め、詞章を取り入れることで、上方文化にふれたと感じられたのかもしれない。

ところで、先に対馬の盆踊の伝播経路について触れたが、ここでその歌謡と芸態について追記しておきたい。対馬の盆踊も、『松の葉』や『落葉集』から上方歌謡を撰取している。しかし、その主体は『落葉集』、すなわち非地歌系の、拍子本位の踊歌だつた。参考までに、対馬市峰町木坂・佐賀・狩尾などで歌われていた「馬踊」を、典拠となつた『落葉集』の巻四44「竹馬踊」（国文学研究資料館本）によって示す。

五十三次にかくれない男 よゝをこめたる竹馬を さてく見事にかざり

たて 手綱かいくりしつしどをく とざんどつこいせと とつこいせ朝のでがけにやこむろぶし でがけにやあさのくでがけにやこむろぶし 一こゑ二ふし三蔵やい ふたりつくくつれだち さあくいくべいくくつわとずがりんくがらくりんがらがく はいどうくはいくはいくはいどうしく あつはれ御馬は上手とじやうずか のつたかのつたぞ それくそらたへ

対馬でこうした踊歌を導入したのは、御用商人らだつた。彼らが京大坂に上つて（あるいは博多や丸山などで）、歌舞伎や遊里の踊歌を実見したかどうかはわからない。歌謡書だけを見て、この歌を選んで振付をすれば、自然とリズムミカルな踊がでるだろう。ただ、対馬で伝えられた踊を見てみると、ある程度元禄期の踊の雰囲気は伝えているのではないかという印象を抱く。

同じような踊歌が高知県でも記録されている。幕末維新期に土佐の庄屋だつた吉村春峰が編纂した『土佐国群書類従』という資料集があり、巻十二に「元禄十五年壬午歳土陽高知御祭礼歌并二装束目録」が収められている。踊そのものは伝承されていないが、同書に載せられた踊歌には、『落葉集』に載せられた歌もある一方で、『落葉集』にはないものの、対馬の盆踊と共通する歌もある。鹿児島県十島村悪石島の盆踊にも、『落葉集』の「福助買初踊」が取り入れられている（同歌は対馬盆踊でも踊られている）。こうしてみると、元禄期頃には上記の「竹馬踊」のような踊歌が広く流行しており、『落葉集』に載せられたのはその一部に過ぎないと考えるのが妥当だろう。とすると、対馬や高知の踊は、歌謡書の詞章のみを取り入れたのではなく、踊として伝えられた可能性が高くなる。

種子島では、上中⑩「大黒殿」が「福神出端」（嵐三右衛門所演）に拠っているのを除くと、（現在知りうる範囲では）躍動感のある踊歌はあまりみられず、座敷歌である地歌系の歌謡を好んで取り入れている。盆踊のリズムに似合つた歌を求めたのではなく、色気を含んだ地歌詞章に漂う上方的情趣を選んだともいえるか。

なお、厳密に考えると、種子島久時が城下の町躍を上覧した元禄一二年（二六九九）には、まだ『松の葉』さえ刊行されていないので、歌謡書を介して上方歌謡を取り入れるのは難しかったかもしれない（『大ぬさ』は刊行済み）。しかし、上記「福神出端」の他に、地歌にも取り入れられた元禄期の歌舞伎関

係歌が四曲ほど見出だされる(第二項(二))。同時期に、祇園町では盆の大踊が行われていた。歌謡書に掲載されたのは後年であつても、元禄頃に作曲されたとされる地歌も少なくない(『歌系図』などによる)。元禄期に、芝居・遊里・茶屋の座敷などで、多くの歌謡に接することは容易だった。この頃には、実際の芝居や座敷での体験にもつき、口伝えや写本などによって上方歌謡を伝えたのかもしれない。

(b) 芸態、とくにカムキについて

歌謡書のみによる伝来かどうかの議論は措いても、地歌に踊が伴わないのは確かなので、種子島盆踊の踊としての芸態が、何に由来しているのかを考える必要があるだろう。しかし、これは難しい。

種子島盆踊の芸態について、現行の西之各地区、横山地区、および映像が残る上中上野地区を見比べても、大きな相違は見受けられない。締め太鼓を主体とした楽器が中踊となり(楽器構成は地区により異なる)、その周囲で踊り手が円陣を組み、扇子踊、手踊をだいた交互に踊っている。踊り口説などによる西日本の一般的な輪踊の盆踊が、大部分手踊のみであるのに対して、扇子踊のある点が、種子島盆踊の特色の一つとなる(九州の離島には扇子踊が多くみられる)。手踊については、一般的な盆踊が、右手右足、左手左足を交互に振り出す「ナンバ」の動きを基本とするのに対して、一步踏み出しながら両手を前に突き出したり、引いたりするような振りが目立つのが、特色といえようか。

こうした動作の比較は難しいが、十島村の口之島、中之島、悪石島、三島村の黒島、屋久島の如竹踊、楠川・平内の盆踊などを一見すると、悪石島の盆踊に少し共通点があるようにも思われる。歌のテンポや手踊部分での手の振り出し方などに類似性を感じるのだが、悪石島は扇子踊が主体であり、また曲に合わせた小道具を持つ点で、種子島とは異なっている。その他の島々の盆踊には、あまり種子島との共通性がみられない。中之島では、扇子踊が円陣である他は、曲によって衣装を替えたり小道具を持つたりして、横一列に並んで踊る。口之島では団扇をもつ。黒島大里の盆踊には「真実」「お七」「鈴虫」の手踊があるが、テンポの早い近世後期調の踊。片泊では男性は太鼓踊のみで、女性の手踊があるものの、種子島との比較は難しい。硫黄島の盆踊は見る機会を得なかった。屋久島の如竹踊は袴姿で扇を持ち、動きが異なる。楠川・平内は手踊だが、

テンポが早く躍動感のある踊で、種子島とは基本的に異なっている。意外なことに、対馬盆踊の手踊と種子島の盆踊が似ているように思うところがあるが、印象の域を出ない。

種子島盆踊の振りに他との共通点が少ないのは、そのテンポの緩やかさが関わっているのかもしれない。それは上方歌謡を取り入れたことによるのではなく、楽(太鼓)が大踊の流用であるため、大型の太鼓を打ちながら踊る大踊のゆったりとしたテンポが、盆踊においてもベースとなったことによるのではないかと考えている。大踊と盆踊の動作の比較は重要な課題と考えるが、現段階では分析できておらず、今後を期したい。

踊の動作以外の、種子島盆踊の芸態的な特色としては、笹竹、チョウ、カムキ(メン)があげられるかと思う。

笹竹とチョウは、横山で楽器とともに踊の輪の中心に立つ。笹竹を中心にして踊る風流踊は、各地にみられる。京都北部の舞鶴市・宮津市・京丹後市・与謝野町などに多数分布している笹ばやしでは、その名称どおりに笹竹を持つ。輪踊ではないので、笹竹持ちが踊り手の横か前に立つが、その役を少年のシンボチが勤めている。兵庫県三田市駒宇佐八幡の百石踊でも、僧形の親法が笹竹を持って全体の指揮をとる。長崎県平戸市生月町館浦の須古踊では、アビヤ子と呼ばれる少年が笹竹をかついで、五、六名の踊の輪に入る。対馬の盆踊では、師匠かそれに準ずるチュウリョウ(中老)が、「エヅリ」などと呼ばれる笹竹を持つ。エヅリには先祖の霊が乗るともいわれ、踊が終わると海に投げ入れる集落もある。このような笹竹の機能は、風流踊でしばしばみられる傘鉾の代替と考えることもできるだろう。

横山のチョウが、かつて赤尾木城下の町躍にも登場していたことは、前引の『種子島家年中行事』に記されている。松原氏は、チョウについて、「踊のリード役であり、新発意と呼ばれた半僧の芸人」としている(第三章第三節)。風流踊のシンボチについては、つとに五来重氏が注目し、「今日の念仏踊はもちらん、太鼓踊や花笠踊にシンボウ、または新発意あるいは願念坊、道心坊という道化役のコンダクターが出るのは、まさしく踊念仏の伝播者であった半僧半俗の勸進聖の姿であった」(五来重・一九八八)と述べ、風流踊が踊念仏に由来するという自説の根拠の一つとして重視している。しかし、シンボチ役が登場する風流踊は、杖挙に暇がないほどあつて、そのすべてを「半僧半俗の勸進

聖」に結びつけるべきかどうか、検討の余地もあるだろう。

このように、笹竹とチヨウは、種子島盆踊の特色ではあるが、類例も多く、ルーツをたどる手がかりとはならないようである。

三点目の特色のカムキは、西之でも横山でも、踊り手がつける顔の覆面のようなものゝさす。「下野5」などで、カムキ、カンモクなどと紹介されてから、この言葉が定着しているが、いつから用いられていたのかは明らかでない。地区によって少し名称が異なっており、「下野5」では、西之砂坂はカンモク（カムキ、またはカミキともいう）、竹屋野はカムキ、平山広田はカンモク、島間（田尾）はカムキ、上中上野はカムキ（冠）、川迎はカムキ（白布面）、横山はカムキ、能野はカムキとされ、その他には記載がない。

種子島各地のカムキは、布一枚で顔を覆う、単なる覆面とは違い、布を折りたたんで縫って止める、特殊な形をしている。下野氏は上記の説明に続けて、「このようなカムキを被って踊る盆踊は日本でも種子島だけです」と述べているが、たしかにこの形のものは他に類がない。

しかし、風流踊で顔を覆う例は少なからずあげることができる。有名なのは秋田県羽後町の西馬音内の盆踊で、彦三頭巾という黒い頭巾を頭から被って、目だけ出して踊る（全員ではない）。大工の被る頭巾に「彦惣頭巾」があったというが、西馬音内盆踊との関係は不明のようである。九州では、熊本県八代市の植柳の盆踊で、女性が黒い頭巾で頭をおおう。鹿児島県でも、鹿屋市串良町下小原の八月踊、肝付町池之園・本城の八月踊、さつま町校野の疱瘡踊で、御高祖頭巾で顔を隠して踊ることが、「下野6」「下野8」に報告されている。また、さつま町鶴田には、大正初年まで「カモクオドイ（カモツオドイ）」があったことも記録されているが（「下野8」八二頁）、陣笠は被るが冠目は被らないので、名前の由来はわからないとされている。

顔を覆わないまでも、盆踊に頬被りをして踊る人がいることは多く、また風流踊で、編笠、花笠などを被って、顔がほとんど見えなくなっている例もしばしばみられる。

江戸時代初期の遊楽図などの絵画資料に描かれた輪踊でも、思い思いの衣装で踊る人々の中に、頬被りをしたり、編笠を被ったりしている人が加わっている例は数多い。なかでも、踊り手が揃いの衣装に揃いの「目ばかり頭巾」を被っている様子が描かれた、一七世紀後半の制作の「群舞図」（図1）は興味深い。



図1 「群舞図」（『風俗画』出光美術館蔵品図録）



図2 「歌舞伎遊楽図屏風」（文化庁蔵）

「かぶき草子」とも称される、京都大学図書館蔵『国女歌舞妓絵詞』では、名古屋山三と国とされる登場人物二人が覆面をして描かれる（この図が実際のかぶき踊の舞台を反映しているのかどうかは、疑問もある）。同系統の歌舞伎図とみられる大和文華館蔵「阿国歌舞妓草紙」や出光美術館蔵「阿国歌舞伎図屏風」（慶長期制作）では、男役のみ覆面をして描かれている。この三点は、名古屋山三が幽霊であるという設定にもとづき、能面のやつしとして、覆面をしているのだろう。京大本でお国までが覆面をしているのはおかしいのだが。

そうした演出上の覆面は理解できるが、一七世紀制作とされる「歌舞伎遊楽図屏風」（図2）は、ストーリーのない遊女のかぶき踊を描いたと思われるに

も関わらず、橋掛かりから舞台上に居並ぶ遊女たち全員が覆面をしていて驚かされる。容色を売りにする遊女のかぶき踊で、顔を隠してしまつては意味がないように思われるが、途中で一度にはずすなどの工夫があつたのだろうか。

ともかく、踊という芸能で、顔を覆うのは珍しいことではない。日常から切り離されるためともいい、とくに盆踊の場合は先祖の霊の姿ともいう。

わからないのは、種子島でその覆面をカムキ・カンモクと称する理由である。「下野5」は、カンモクに冠目という漢字を宛て、「カムキは冠のこと」と説明している(三〇〇頁)。しかし、『大漢和辞典』や『日本国語大辞典』を引いても「冠目」という熟語はないので、カンモクという現地の発音に合わせて、下野氏が漢字を宛てたのだろうか。一般に冠とは頭上にかぶるもので、覆面をさすものではない。

カムキはカブキの訛音ともいわれる。周知のように、カブキは、芸能としての名称以前に、カブクという動詞で、「傾く」の意味で用いられていた。慶長頃の記録には次のような説明がある。

・『日葡辞書』(邦訳)

カブキ：逸脱した行為をする、すなわちある事柄について、自分に許された以上に勝手気ままにふるまう

カブイタヒトまたはカブキモノ：ひどく常軌を逸した人、または、自分に許された程度以上の勝手気ままをする人

・『当代記』慶長二年(一六〇六)六月

此比、京町人北野賀茂^江出行之砌は、かぶき^{此云}衆出合たはふれ、為之悩さる

『日本方言大辞典』によると、カブキは「稲が実つて穂が垂れる」の意で、カムクの語形も含めて、兵庫、島根、高知、山口の例があげられている。また、『古語大辞典』によると、「かぶ」は頭を意味する古語で、(一)稲の穂が垂れる、(二)常軌を逸する、放逸にふるまう、(三)伊達^{だて}な姿をする、人の目に立つ異風な、あるいははでな扮装をする、と説明されている。

盆踊の類歌を探しながら、風流歌謡の中でカムキ、カムクの例を拾ってみた。整理しないまま掲げてみる(該当箇所のみ抜き書き、囃子詞などは省略、適宜漢字仮名を宛てた)。

◇『延享五年小歌しやうが集』(『続日本歌謡集成3』二六四頁)

・手近里じやと皆云やれども 猿と歌舞伎は山家なれ

◇京都府宮津市由良脇の太鼓踊(『丹後の笹ばやし調査報告書』八一頁)

「神楽踊り」

・これの御若君御嗜みく、笛に上手と打見へて 羯鼓笛に神楽笛 狸々の乱れをば しばしが踊て御待ち合うく

かふき山かけ巢をかけたく、 国々の鷹が巢をかけたく

◇京都府与謝野町石田の笹ばやし(『丹後の笹ばやし調査報告書』一一三頁) 京丹後市明田も類似

「歌舞伎踊」

〔中でシンポチはやし申そう、太鼓の頭そろりそつと頼み申そう〕

・岐阜ノ御山ハ鑑力鞍カ(返し) 諸国諸大名ガ乗リタガル コリヤく

・淀ノ川瀬ノ水車(返し) 何ヲ待ツヤラ来ル来ルト コリヤく 歌舞伎踊ハ面白ヤ

・久シ歌舞伎ハ日モ暮ル、 居座ヤ戻ロヤ宿々エ 歌舞伎踊ハ是迄ヨ

◇奈良県五條市の篠原踊(『本田13』七五頁)

「京鹿の子踊」

・是は京鹿の子 見目も鹿子の付けようも(略)

・是は京若衆 髪のみげよも

・是は京女郎衆 髪のみげよも

・是は京歌舞伎 音頭の取りよも

・是は京小袖 御紋の付けようも

◇岐阜県揖斐川町白樫踊(『揖斐川町太鼓踊り調査報告書』三二四頁)

「白樫神社ノ歌」

氏神様へと踊り来て 広き立毛を見受ければ

早稲が千上いがれます 中稲が千上かぶきます 晩稲が千上穂先さす(下略)

◇広島県北広島町本地の花笠踊(『本田13』一四二頁)

「かむき」

・こいの助わよう 見たよりかむきしやヨ 腰に柳樽廿四五さげて 永の女郎町シヨタクと

・さのかかむきすりや又身がやせほそる 足もたよく手もたよくよさ

した刀を杖につく

◇広島県北広島町保余原の太鼓踊（『本田13』一五〇頁）

「かむぎ」

（詞章中にカムキの語はない）

◇広島県加計町津浪の太鼓踊（『本田13』一七三頁）

「かのさま」

・かみに上りておくに様たのむ 笛や太鼓や手鼓習うて かむぎしよかや身を楽に

◇徳島県石井町曾我氏神社の神踊（『本田13』三〇一頁、『徳島県民俗芸能誌』

二八二頁）

「名古屋」

・さてもかぶいたりや肥後様は 黒塗団扇で音頭とる

◇徳島県徳島市国府町中村の神踊（『徳島県民俗芸能誌』一三三五頁）

「かむぎ踊り」

・嬉し芽出度の若松やく、枝も栄える葉も茂る、かむぎ踊は面白や

◇徳島県阿南市福井町の神踊（『徳島県民俗芸能誌』四九二頁）

「嘉ぶき踊」

・向か糸の山のかぶきの松に 雪や降り積めばしんじとたおむ あれを見て

しなへよ こゝな姫

以上の他、静岡県葵区平野の盆踊には「かぶき」というジャンルがあり、曲名として、「かぶき」が多数ある他、「くるりかぶき」「ひざたゝきかぶき」などの曲名もある。何を意味するのか、本田安次氏（『本田12』一五三頁）も『平野・有東木の盆踊り』も、まったく説明していないのが不思議である。平野に近い有東木の盆踊にこの名称はみられない。

これらのカブキ、カムキが意味するところはいろいろで、芸能としてのかぶき踊をさすと思われるものもあるが、枝が垂れる、傾くの意もある。多いのは派手な身なりをするという、カブキの本来の意味だろうか。

鹿児島県内でも、一例だけ、文献史料にカムキ踊の語を見出だした。

◇「桜島池田氏蔵年代記」元禄七年（一六九四）七月二六日（『鹿児島県史

料 旧記雑録追録1』二四二〇）

一元禄七年七月廿六日、太守様立花隆庵老御同船ニテ桜島へ御渡海、左

候而士踊太鼓カムキ踊被仰付候、

桜島には農民の太鼓踊があり、毎年七月二八日の鹿児島諏訪神社祭礼には、桜島から市中に踊りに来ていたが、元禄七年に太守（島津久光）が見たのは、桜島郷麓の嫡流士族による武士踊であろうと、松原氏にご教示いただいた。ただし、士踊として現在に伝えられている南さつま市加世田の士踊にカムキ踊はなく、覆面をすることもない。

慶長八年（一六〇三）、お国のかぶき踊が京中の人々の注目を集めると、さまざまな芸能者、とくに遊女たちがそれに追随した。お国のかぶき踊は、カブキ者が茶屋遊びするさまを演ずることに主眼があったが、遊女のかぶき踊は、大勢の遊女が登場し、舞台上で輪踊をするもので、演劇的要素はなかったと考えられている。しかし、平和な時代の訪れとともに、遊女のかぶき踊は大流行し、すぐに地方に波及した。肥後の加藤清正も京都から団助というかぶき踊の一座を招いたことが、『徳川実紀』慶長十一年（一六〇六）八月条に記されている。地方の人々にとって、お国のかぶき踊を知るすべはなく、カブキといえば遊女の踊と認識されており、また遊女そのものをカブキと呼んだ例もある。

鹿児島でも、慶長一八（一六一三）年にかぶき踊の興行があったことが、『伊地知周防守重康 慶長十八年日記』（『鹿児島県史料 旧記雑録後編4』巻六九、四七五頁）に記録されている。これは遊女のかぶき踊だろう。

・八月朔日^二（略）晚より御祈念御座候、談議所被成候、拙者内々ハかぶき見物^三罷候、あねしやうハ助右衛門殿之様^二御座候、

・二日^二御番渡申候而帰宅申候、利兵衛殿御出被成候、それより与九郎殿・将監殿・大蔵殿・左京亮殿・刑部殿同心申候而、村三郎右衛門殿へ罷申候而、それよりかぶき見物^三罷申、の村助^二郎殿も御座候（後略）

島津久光が桜島でカムキ踊を見た元禄七年は、遊女のかぶき踊が流行した慶長期から一世紀近くたっている。なお、元禄八年には、市中谷山で歌舞伎の興行が行われているが（『三州治世要覽付年代記』）、この時期の歌舞伎は、遊女の踊りではなく、現在につながる歌舞伎の地方一座だろう。元禄頃には、瀬戸内海沿岸を巡業する地方専門の歌舞伎一座があった。九州では、大分浜の市でたびたび興行されている。

桜島のカムキ踊が、このようなかぶき踊・歌舞伎興行と結びつくものかどうかはわからない。桜島のカムキ踊と種子島のカムキとが関わるのかどうかも、

まったくわからない。そもそも、種子島でいつからカムキが用いられていたのか、資料によって知ることはできない。

不明な点ばかりだが、種子島のカムキの呼称について、根拠のない推測を示し、城下の祭礼踊と結びつけることで、この項目を終わりにしたい。

いろいろな用例からみて、種子島のカムキの意味として考えられるのは、派手な身なり、異装をすることではないかと思う。現在のように浴衣や白無地の衣装にカムキをつけても、派手とか伊達とかいう印象はないが、江戸時代、赤尾木城下で祭礼踊が盛んだった頃は、それなりに贅沢な衣装を用いたのではないだろうか。十島村中之島では、曲によって衣装を着替えており、そういう凝った演出を、種子島の町人がしたとしてもおかしくない。その頃からカムキがあったとすれば、前掲の「群舞図」や「歌舞伎遊楽図屏風」にみられるような、伊達な印象を与えられたかもしれない。踊り手の町人たちは、日常の顔を隠して、上方仕込みの伊達な歌で祭礼踊を見せたかったのではないか。非日常的な芸能性を象徴するものとして覆面があり、それをカムキと呼んだと考えると、ある程度納得されるように思う。

(C) 結語

種子島の盆踊は、素朴な農村の盆行事ではなく、藩主の膝元赤尾木城下の町人たちが、元禄期（一六八八〜一七〇三）頃から、上方文化を積極的に取り入れて、精一杯派手な踊を披露したものと考えると、現在把握される種子島盆踊の特徴を説明することができる。その特徴とは、舞踊を伴わない上方座敷歌を撰取していること、祝言性の強い歌謡が多く、和讃など念仏的な要素がみられないこと、カムキをつけることなど、縷々述べてきたとおりである。

周知のとおり、元禄期、およびそれに先立つ天和・貞享期（一六八一〜一七八七）は、上方の町人文化が一気に花開いた時期であり、文学では、井原西鶴・松尾芭蕉、舞台芸能では、浄瑠璃の近松門左衛門・竹本義太夫、歌舞伎の坂田藤十郎・芳沢あやめ・嵐三右衛門などが活躍した。遊里では文人たちの交流が活発になり、文学・絵画・歌謡などの創作の場ともなった。種子島の町人たちも、この時期の上方の文化興隆にふれて刺激を受け、最先端の歌謡を種子島に持ち込んで、新たな祭礼踊を生み出したとすると、『種子島家年中行事』の元禄一二年の上覧記事が偶然のものと思われなくなる。

城下の祭礼踊確立以前に、島内の大踊や十島村・三島村の盆踊などと共通する歌謡を用いた盆踊が、小規模でも行われていた可能性は否定できないが、その推定を支える資料は見出せない。少なくとも、現行の西之・横山をはじめ、資料が残る各集落の盆踊は、城下の祭礼踊の影響を受けたものであり、島内の町場を中継地として、多くの集落へと伝わったものと考えられる。

寺院の盂蘭盆会は僧侶による供養で完結していた。それは赤尾木城下でも村落でも同じであり、祭礼踊・盆踊は集落民による娯楽的な余興であった。西之で実施集落に本国寺檀家総代会からキリガミが出るのは、踊ってもよいという許可証だったのが、依頼状として受けとめられるようになったのかと思う。あるいは、城下の祭礼踊で、七月一日に御証文が下されたのを模倣したのかもしれない。

第五章第一節の松原氏の推定とは大きく異なる結論となるが、一つの視点として理解されたい。（和田）

《参考文献》

※利用の便を考え、本文中での参考文献の表示方法を二種にわけた。

◇資料翻刻（ジャンル順）※本文中には『』内の書名を表示。

- ・『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺』「家わけ四」、鹿児島県歴史資料センター黎明館、一九九四年一月
- ・『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺』「家わけ八」、鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇〇〇年一月
- ・『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺』「家わけ九」、鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇〇二年三月
- ・『鹿児島県史料 旧記雑録追録1』、鹿児島県維新史料編さん所、一九七一年三月
- ・『鹿児島県史料 旧記雑録後編4』、鹿児島県維新史料編さん所、一九八四年二月
- ・『三州治世要覽付年代記』、『鹿児島県史料集』第二五集、鹿児島県史料刊行会、一九八四年一〇月
- ・『種子島家年中行事』、河内和夫写、熊毛文学会発行、一九六四年二月
- ・『看聞日記』一・五・六（図書寮叢刊）、宮内庁書陵部、明治書院、二〇二〇・二〇二〇・二〇二二年三月・四月・四月
- ・『経算私要鈔』第九（史料纂集）、八木書店、二〇一三年五月

- ・『大乘院寺社雜事記』第八卷、辻善之助、角川書店、一九六四年二月
- ・『明応六年記』、『続群書類従』第二輯下、続群書類従完成会、一九七三年八月
- ・『言繼卿記』第三、国書刊行会、一九一四年二月
- ・『当代記』、国書刊行会刊行書『史籍雜纂』第二、一九一一年一月
- ・『豊国大明神臨時御祭礼記録』、『日本庶民文化史料集成』第二卷 田楽・猿楽、芸能史研究会編、三二書房、一九七四年二月
- ・『日本歌謡集成』卷六近世篇、高野辰之、東京堂、一九四二年一月
- ・『日本歌謡集成』卷七近世篇、高野辰之、東京堂、一九四二年三月
- ・『日本歌謡集成』卷八近世篇、高野辰之、東京堂、一九四二年八月
- ・『日本歌謡集成』卷九近世篇、高野辰之、東京堂、一九四二年九月
- ・『日本歌謡集成』卷十近世篇、高野辰之、東京堂、一九四二年十一月
- ・『日本歌謡集成』卷一一近世篇、高野辰之、東京堂、一九四二年二月
- ・『日本歌謡集成』卷一二近世篇、高野辰之、東京堂、一九四三年一月
- ・『続日本歌謡集成』卷三近世篇上、浅野建二、東京堂、一九六一年九月
- ・『続日本歌謡集成』卷四近世篇下、浅野建二、東京堂、一九六三年八月
- ・『日本歌謡研究資料集成』卷九、平野健次他、勉誠社、一九八〇年一〇月
- ・『日本古典文学大系』『中世近世歌謡集』新聞進一他、岩波書店、一九五九年一月
- ・『新日本古典文学大系』56『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』小林芳規他、岩波書店、一九九三年六月
- ・『新日本古典文学大系』62『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廼一曲 琉歌百控』、友久武文他、岩波書店、一九九七年二月
- ・岩波文庫『松の葉』、藤田徳太郎、岩波書店、一九三二年二月
- ・岩波文庫『松の落葉』、藤田徳太郎、岩波書店、一九三一年一月
- ・岩波文庫『山歌鳥虫歌』、浅野建二、岩波書店、一九八四年一月
- ・『日本庶民文化史料集成』第四卷「狂言」、芸能史研究会、三二書房、一九七五年六月
- ・『日本庶民文化史料集成』第五卷「歌謡」、芸能史研究会、三二書房、一九七三年二月
- ・『日本庶民生活史料集成』第一七卷「民間芸能」、五来重、三二書房、一九七二年一月
- ・『兵庫口説』村上省吾、弓立社、一九九九年二月
- ・『首領口説集成』第一卷、成田守、大東文化大学東洋研究所、一九九六年三月
- ・『首領口説集成』第二卷、成田守、大東文化大学東洋研究所、一九九六年九月
- ・『日本民謡大観』中国篇（復刻版）、日本放送協会、一九九三年七月
- ・『日本民謡大観』九州篇北部（復刻版）、日本放送協会、一九九四年六月
- ・『日本民謡大観』九州篇南部（復刻版）、日本放送協会、一九九四年六月

- ・『近松全集』第二卷、近松全集刊行会、岩波書店、一九八七年三月
- ・『土佐浄瑠璃正本集』第一卷、鳥居フミ子、角川書店、一九七二年三月
- ・『日葡辞書』(邦訳) 土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店、一九八〇年五月
- ・『風俗画』(出光美術館蔵品図録)、出光美術館編、平凡社、一九八七年二月
- ・東京国立博物館「本館(日本ギャラリー) 桜めぐり」WEB版
(https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1776)
- ◇調査報告書・地方自治体史(都道府県コード順) ※本文中には『』内の書名を表示。
 - ・『揖斐川町太鼓踊り調査報告書』、揖斐川町教育委員会、二〇一八年三月
 - ・『郡上八幡町史』下巻、太田成和編、一九六一年一月
 - ・『歴史でみる郡上おどり』、郡上おどり史編纂委員会、一九九三年二月
 - ・『平野・有東木の盆踊り』、平野盆踊り保存会・有東木盆踊り保存会編、一九八一年三月
 - ・『三州田峯盆踊り』(附・特殊の民謡と盆踊り)、竹下角治郎・熊谷好恵、豊橋文化協会、一九五二年八月
 - ・『三重県の民謡』、三重県教育委員会、一九九〇年三月
 - ・『三重県の民俗芸能』、三重県教育委員会、一九九四年三月
 - ・『伊賀のかんこ踊り総合調査報告書』、伊賀市伝統文化活性化事業実行委員会、二〇一三年三月
 - ・『京都の民俗芸能』、京都府教育委員会編、大文字書林、一九七五年六月
 - ・『久多の花笠踊り調査報告書』、芸能史研究会編、久多花笠踊り保存会発行、一九七四年三月
 - ・『丹後の花踊り』調査報告書、京都府教育委員会、一九七六年三月
 - ・『丹後の笹ばやし調査報告書』、京都府教育委員会、一九七七年三月
 - ・『兵庫県民俗芸能誌』、喜多慶治、錦正社、一九七七年九月
 - ・『鳥取県の民俗芸能』、鳥取県教育委員会、一九九三年三月
 - ・『島根県の民俗芸能』、島根県教育委員会、一九八九年三月
 - ・『岡山県の民俗芸能』、岡山県教育委員会、一九九六年三月
 - ・『広島県文化財調査報告書』第六集、広島県文化財協会、一九六六年三月
 - ・『広島県文化財調査報告書』第二集、広島県文化財協会、一九七八年三月
 - ・『芸備風流踊り歌集』、広島女子大学国語国文学研究室編、溪水社、一九八一年三月
 - ・『山口県の民俗芸能』、山口県教育委員会、二〇〇〇年八月
 - ・『徳島県民俗芸能誌』、檜瑛司・皆川学、錦正社、二〇〇三年一月
 - ・『徳島県神踊り歌集』、檜瑛司・皆川学、徳島県民俗芸能文化保存会、二〇〇四年三月
 - ・『讃岐の雨乞い踊り』調査報告書、香川県教育委員会、一九七九年三月
 - ・『愛媛県の民俗芸能』(無形文化財調査報告書)、愛媛県教育委員会、一九八三年三月

- ・『愛媛県の民俗芸能』（愛媛県民俗芸能緊急調査報告書）、愛媛県教育委員会、一九九九年三月
- ・『高知県の民俗芸能』、高知県教育委員会、二〇〇二年三月
- ・『福岡県民俗芸能』、平井武夫、文献出版、一九八一年一月
- ・『福岡県民俗芸能』、福岡県教育委員会、一九九二年三月
- ・『佐賀県の民俗芸能』、佐賀県教育委員会、一九九九年三月
- ・『長崎県の民俗芸能』、長崎県教育委員会、一九八八年三月
- ・『大村の寿古踊』（大村市文化財調査報告書）第六集、大村市教育委員会、一九八四年三月
- ・『対馬 美津島の盆踊』、美津島町教育委員会、一九八四年三月
- ・『対馬 厳原の盆踊』、厳原町教育委員会、一九九九年三月
- ・『対馬の盆踊』、対馬市教育委員会、二〇一八年三月
- ・『くまもとの民俗芸能』、熊本県教育委員会、一九九一年三月
- ・『大分県の民俗芸能（一）』（大分県文化財調査報告書）第一四輯、大分県教育委員会、一九六七年二月
- ・『大分県史』民俗篇、大分県総務部総務課編、大分県、一九八六年三月
- ・『大分県の民俗芸能』（大分県文化財調査報告書）第八六輯、大分県教育委員会、一九九一年三月
- ・『宮崎県の民俗芸能』、宮崎県教育委員会、一九九四年三月
- ・『日南市史』、日南市史編さん委員会、一九七八年一月
- ・『鹿児島県文化財報告書』第九集、鹿児島県教育委員会、一九六二年三月、
- ・『鹿児島県文化財報告書』第一〇集、鹿児島県教育委員会、一九六三年三月、
- ・『鹿児島県文化財報告書』第二四集、鹿児島県教育委員会、一九七七年三月、
- ・『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』薩摩編（鹿児島短期大学南日本文化研究所「南日本文化研究所叢書」一一）、松原武実、一九八六年三月
- ・『鹿児島県地区別民俗芸能要覧』大隅編（鹿児島短期大学南日本文化研究所「南日本文化研究所叢書」一二）、松原武実、一九八七年三月
- ・『鹿児島県の民俗芸能』、鹿児島県教育委員会、一九九二年三月、
- ・『三島村誌』、三島村誌編集委員会、一九九〇年五月
- ・『十島村誌』、十島村誌編集委員会、一九九五年三月
- ・『上屋久町郷土誌』、上屋久町教育委員会、一九八四年三月
- ・『上屋久町の民俗』、上屋久町民俗資料調査報告書2、上屋久町教育委員会、一九九二年三月
- ・『屋久町誌』、屋久町誌編纂委員会、一九六四年三月
- ・『屋久町郷土誌』全三巻、屋久町教育委員会、一九九三〜二〇〇三年三月
- ◇論文・研究書（五十音順）※本文中には著者名・発行年を表示。
 - ・浅野建二、一九六一、「平安時代の犬歌小歌」、『日本歌謡の研究』、東京堂、一九六一年
 - ・岩橋小弥太、一九五一、「風流」、『日本芸能史』、芸苑社、一九五一年二月、一一〇〜一三五頁
 - ・植木行宣、二〇一〇、『風流踊とその展開』、岩田書院、二〇一〇年五月
 - ・大石慎三郎、一九八四、「郡上踊りと郡上一揆」、『凶書』四二二号、岩波書店、一九八四年九月
 - ・大森恵子、一九九二、『念仏芸能と御霊信仰』、名著出版、一九九二年六月
 - ・小野重朗、一九九三、『祭りと芸能』、「南日本の民俗文化」四、第一書房、一九九三年九月
 - ・久保田敏子、二〇〇九、『文政元年版『歌曲時習考』所載の現行曲研究―詞章翻刻と現行の異同検証―』、「日本伝統音楽資料集成」第七巻、京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター、二〇〇九年三月
 - ・五来重、一九八八、『踊り念仏』、平凡社選書、一九八八年三月
 - ・佐々木聖佳、一九八九、『国会図書館蔵『おどりの図』』、『芸能史研究』一〇六号、一九八九年七月、四九〜六二頁
 - ・佐々木聖佳、一九九八、『御状引付』書留盆踊歌考、『歌謡 雅と俗の世界』、和泉書院、一九八八年九月、二四五〜二六三頁
 - ・下野敏見、一九八〇、『南九州の民俗芸能』、未來社、一九八〇年九月
 - ・下野敏見、一九九四、『トカラ列島民俗誌』第一巻、一九九四年三月
 - ・染矢多喜男、一九六六、『大分県の民俗芸能（三）』、『大分県地方史』第四一号、一九六六年三月、四七〜七八頁
 - ・染矢多喜男、一九六六、『大分県の民俗芸能（四）』、『大分県地方史』第四二号、一九六六年九月、二八〜四七頁
 - ・土田衛、一九九六、『都風流大踊』考、『考証元祿歌舞伎―様式と展開―』、八木書店、一九九六年六月、六〇〜七三頁
 - ・平野健次・久保田敏子、一九七三、「寛延以降地歌唄本総合索引」、『吉川英史先生還暦記念論文集／日本音楽とその周辺』、音楽之友社、一九七三年三月、五六九〜八〇九頁
 - ・平野健次、一九八七、『三味線と箏の組歌―箏曲地歌研究Ⅰ―』、白水社、一九八七年六月

- ・松原武美、一九九三、『南九州歌謡の研究』、第一書房、一九九三年九月
- ・三好昭一郎、一九九八、『徳島藩民俗芸能史の研究―城下町の盆踊を中心として―』、『臨谷館史聚』第二集、一九九八年四月
- ・三好昭一郎、一九九九、『近世盆踊史考』、『臨谷館史聚』第四集、一九九九年九月
- ・村田熙、一九九六a、『横山盆踊』、村田熙選集四『南九州・薩南諸島の芸能』、一九九六年九月、一九〇～二〇四頁
- ・村田熙、一九九六b、『西之本国寺盆踊』、村田熙選集四『南九州・薩南諸島の芸能』、一九九六年九月、二〇五～二四頁
- ・森末義彰、一九三二、『盆踊の研究』、『宗教研究』新一〇卷一号、一九三二年一月、一七二～一九六頁
- ・山路興造、一九七一、『全国風流踊り歌一覽』、『民俗芸能』通巻四四号、一九七一年四月、四九～九二頁
- ・山路興造、一九七一、『初期かぶき踊り歌の構成 付大分県臼杵市東神野の風流踊歌謡』、『芸能史研究』三二号、一九七一年五月、三六～五六頁
- ・山路興造、一九八五、『風流踊』、『日本芸能史』第四卷、芸能史研究会編、法政大学出版社、一九八五年三月、四九～七六頁
- ・山路興造、二〇〇九、『京都の盆踊りと民俗行事』、『京都 芸能と民俗の文化史』、思文閣出版、二〇〇九年一月、二九六～三四六頁
- ※頻出する以下の著作集は、冒頭の略称を本文中に表示。
 - ・本田安次著作集『日本の伝統芸能』（錦正社刊）
 - 「本田10」、第一〇巻風流Ⅰ、一九九六年九月
 - 「本田11」、第一一卷風流Ⅱ、一九九六年二月
 - 「本田12」、第一二巻風流Ⅲ、一九九七年四月
 - 「本田13」、第一三巻風流Ⅳ、一九九七年七月
- ・下野敏見著作集『南日本の民俗文化誌』（南方新社刊）
 - 「下野3」、3『トカラ列島』、二〇〇九年二月
 - 「下野4」、4『屋久島の民俗文化』、二〇一一年三月
 - 「下野5」、5『種子島民俗芸能集』、二〇一〇年八月
 - 「下野6」、6『南日本の民俗芸能誌』全県編、二〇一六年二月
 - 「下野7」、7『南日本の民俗芸能誌』北薩東部編、二〇一四年六月
 - 「下野8」、8『南日本の民俗芸能誌』北薩西部編、二〇一三年四月

特論

昭和期を主とする種子島盆踊りと島内外の盆踊りについて —比較民俗学の視座より—

下野 敏見

一 種子島の仏教と盆行事

(一) 国分寺仏教時代

盆踊りは盆行事の一環として踊られる芸能であり、盆行事は仏教行事の一環でもある。

種子島に仏教が流入したのは古く、『日本書紀』の元明天皇の和銅二(七〇九)年六月、(中略)「ただ薩摩、多祢両国師及び国師僧等は減例に在らず」と記され、当時すでに種子島に仏教が流入していたことがわかる。

これより七年前の記事には、「大宝二(七〇二)年八月、薩摩、多祢、化に隔り、命に逆う。ここにおいて兵を発して征討し、遂に戸をはかり、吏をおく」とあるので、多祢国が設置されたのは、七〇二年だと考えられる。

国府には堂を建て、仏教ならびに経巻を安置して礼拝することになっていたので、多祢国においても当然、国府設置と共に礼拝がなされたであろう。

公的には以上の通りの仏教流入が認められるが、私的にはそれより二十五年ばかり早かったことも考えられる。その理由は、「天武天皇六(六七七)年二月、この月、多祢島人等を飛鳥寺の西の槻の下に饗す」という書紀の記事から、大和との文化交流が推測されるからである。

多祢国は、天長元(八二四)年十月まで続き、その後は大隅国に合併することになる。七〇二年から数えると、一二年間、多祢国が存在したことになり、この間が国分寺仏教時代ともいえるべき時期である。しかし、この間、ずっと国師僧等がいたかは不明である。

というのは、「大隅、薩摩、対馬、吉岐、多祢の島、講師を停止す(七五五年)」とあるからであり、なお仏舎(国府寺)ないし国分寺の仏教が、国師僧がいて熱心に礼拝したのは、八世紀前半だけではなかったかと思われるのである。

多祢国分寺(島分寺)の所在地は、国上説、西之表説、中田説、島間説などあるが、いずれも確証できる資料を欠き、推定の域を出ない。

(二) 律宗時代

国分寺仏教に次いで、古代から中世初期の多祢仏教であった律宗が、いつどうして種子島に入ったか詳細は不明である。

律宗であった西之表の古刹慈遠寺は、大同四(八〇九)年創建と伝えられ、南都興福寺の末寺である。当時は多祢国が存在していた。

高重義好氏によると、「七六一年に日本に律宗を伝えた鑑真和尚が大宰府の筑紫観世音寺に戒壇を建立してから、僧は得度のみでなく、受戒を受けてはじめて僧の資格を具えることとなった。このため種子島僧は今度は受戒のために大宰府へ上った。ここに律宗の流入する可能性がある」と述べておられる。

つまり国分寺仏教の衰退期に、鑑真和尚の律宗が筑紫に入り、僧の資格を得るための受戒が行われたので、種子島僧も筑紫に上ったというわけである。

種子島家文書によると、「上里の善林寺(廃寺)は、大同二(八〇七)年、創建」とある。これが事実とすれば慈遠寺より二年早いので、種子島最古の律寺となる。上里村は、茎永平野の北部の丘状の村で、種子島最大の三百町歩の大水田地域を見はるかしている。すなわち、種子島最大の穀倉地帯を押さえているわけである。中世以来、豪族最上氏を中心に士族で固める村であった。

ここに、古代、北邑の西之表の慈遠寺より二年早く、善林寺が建ったというのもあながち否定はできない。

右の種子島家文書によると、律寺はほかに満徳寺(横山)、遠妙寺(茎永)、本善寺(下中)をあげ、そのほかに古くからの寺として、妙昌寺(納官)、本隆寺(油久)、隆興寺(現和)をあげている。

さらに口碑による律寺として、大光寺(島間上方)。正法寺(坂井)、極楽寺(上中の河内)などがある。西之の平野にある本国寺はまだ登場していないのである。

以上の種子島律宗時代において、盆踊りがあつた気配はなく、口碑伝承や文書等にも見られず、又、舞踊伝承としても見られない。

(三) 法華宗時代

1 日典上人

律宗から法華宗へ、種子島史上特筆すべき仏教宗派改めが行われたのは、

一四六〇年代のことである。

同じ頃、それより十年ばかり前、第十代島主幡時公は、紀州熊野権現を信仰し、毎年詣でるほどの熱心さであった。ついには、熊野権現を坂井村に勧請し、今日に至っている。

しかも幡時公は、増田犬城の岩窟で天建の術なるものを行なおうとして、着地に失敗して死亡した。宗教改めの前、すでに律宗は島主の心にさえなかったのである。

改革を断行した時の島主は、幡時公が日向細島滞在の折に設けた子、三郎二郎（のちの時氏公）であった。

したがって、時氏公は他郷からの入島々主であり、律宗による旧勢力を排し、新興勢力を確立する好機になったといえよう。

種子島宗教改めの出発点は日典であったが、その遂行に欠かせない人物として、島主時氏を指摘できるのである。ほかに、日典の親友で日典の死後、京都から種子島にやってきた日良上人やその後、京都本能寺からやってきた日増上人を加えなければならない。日増上人は屋久島布教に特に貢献した。

日典上人は、応年八（一四〇一）年、西之表市下西の川迎蔵野に生まれ、慈遠寺に入り、中年に至って律宗修業のため奈良に修学したが、その帰途、法華宗の日隆上人の説法に出会い、いたく感動して、日隆上人のいる尼崎本興寺に入り、およそ十年間勉強した。この間、勸学院の采頭職につくという秀才ぶりであった。しかし、思うところがあつて、まもなく帰島した。そして、「死身弘法」すなわち身を死して法を弘めることを決意し、実践することになる。

こうして、律宗を排し、法華宗をひろめようとする日典は、寛正四（一四六四）年、四月二十一日に入寂。石子詰めによつて青年たちに殺されたという説や覚悟の上の餓死説などもあるが、いずれにしても身を犠牲にして、三島（種子島氏領有の種子島、屋久島、口之永良部島）の改宗をなしたとげたのである。

以来、明治元年から二年にわたる神祭神葬令および廃仏毀釈が行われるまで、四百年の間、法華宗が三島唯一の信仰とされたのである。

その間に、法華宗は人心に、行事等に深く広くしみ込み、今日、種子島の文化を語る時、法華宗を無視しては何事も語れないのである。

2 名僧輩出

また、この間、種子島出身で京都本能寺や尼崎本興寺の貫主となった名僧を八人も輩出した。それは、十五世日逕上人（天文十六年、下中に生まると伝ゆ）。二十三世日達上人（納官坂元の生まれ。本能寺貫主。慶安元年、三代將軍家光公より、寺領二十五石ならびに諸役御免の朱印状を賜う。万治三（一六六〇）年、六十歳で入寂。

二十六世日深上人（慶安十五（一六六二）年、平山生まれ。延宝五（一六七七）年六十一歳で入寂。（高重義好、「種子島仏教について」（「南島民俗」4号）より）

ほか五人の上人が次々と登場するのである。

八人の中に、二人の南種子生まれの名僧がいたことに注目したい。

西之表市住吉深川集落の下、海岸近くを通る県道脇には、「大石」と称する高さ約六mの巨大な石が二つ、接着して左右に並んでいて、向って左の大石には、文字が刻まれ、その前には祠堂型の石祠がおかれている。そして、まわりには、蘇鉄や蒲葵を植えてある。さらに、その前面には丸石を積んで四角い庭を設けてある。庭の右側には高さ二m近い自然石を立ててある。

これらは、深川集落の管理する一種の聖地である。

ここに、参拝する人は、集落民のほかにはめつたにいないが、道路脇のしかも眺望のよい浜辺にあるので、注目させられる。そして、この大石に刻まれた文字も注目させられる。それは達筆の文字で、

慶安五千辰春時正月

南無妙法蓮華経

沙門日達拜

とある。慶安五年は一六五二年で、碑文にはその年の春正月、沙門日達拜とあるが、沙門は僧のこと。それにつづく日達が問題である。

日達上人は先ほど記したように、坂元生まれの種子島僧（小僧）であったが、よほどすぐれた人物であつたらしく、都に登り、日蓮宗本能寺派の本山である本能寺の貫主になった人物。そして先述の如く、幕府の三代將軍家光公から寺領や諸役御免の朱印状をもらったほどの人物であった。深川の碑文の書体は、日達の直筆のままであろう。

日達上人は、万治三（一六六〇）年に、六十歳で亡くなっている。当時の年齢の数え方からすると、一六〇一年の生まれと思われる。したがって、日

達上人が来たのは、春正月だから数え年五十二歳のはずである。

京都からはじめて帰京し、恐らく本源寺の正月の温座祈禱にも参加し、全国一番上位の僧の帰島参加ということで、種子島主要寺の僧達をはじめ西之表中の門徒達が参列する中で、礼拝が行われたであろう。もちろん、島主も参加し、いつもの宝刀も供えられての一大祈禱であっただろう。

この時、法華宗本山の本能寺の貫主であった日達上人は、京の本山からの土産として、めったに入手あるいは拝むことのできない日蓮上人や日隆上人の御曼陀羅を土産として持参したことが考えられる。それがあとで、島主菩提寺の鹿児島島の正健寺や現在の西之表の日典寺などの現存御曼陀羅につながるものはなかるうか。もっとも本源寺所蔵の御曼陀羅等は、昭和の本源寺消滅の折、売り拂れたものと思う。惜しいことであった。しかし、もし鹿児島島の正健寺にひきとられたとすれば幸運だ。

筆者が若い頃、馬場源徳氏からもらった旅行時の携帯用小型御曼陀羅は、日隆上人直筆の貴重なものであったが、鉄砲館をへて今は日典寺、あるいは日典寺をへて鹿児島島の正健寺に納まつているはずである。

日達上人は、故郷種子島に久々に帰り、しかも京都本能寺の貫主としてその錦を飾り、それ以前から巨石として拝まれていた大石に、法華宗御題目「南無妙法蓮華經」の文字を刻み、信仰の巨石として蘇らせたのである。

この折、日達は必ずや生まれ在所の坂元に帰り、祖先の墓詣りもしたのであろう。文化七（一八一〇）年、種子島家譜に、「島中寺院多きの故を以って、民財を費すこと少なからず、故にこれを官に請いて、寺二十七宇（いえ）をこわす」とある。

3 排仏毀釈

慶応二（一八六六）年には、「諸村の寺院をこわす。現和村の台運院坊、中之坊、大聖寺…」とあり、全島で二十四宇を破壊した。理由は経済上にあった。明示元年七月、神祭神葬令がくだり、同年十一月には、各地の寺をこわした。明治二年七月には、「是の月、官令を下して盂蘭盆会を廃し、始めて神の礼を以って祖先を祭らしむ」とある。こうして、排仏毀釈が明治二年から三年にかけて進行し、種子島でも、徹底的に寺院が破壊された。

歴史を誇る慈遠寺や本源寺もすべて跡形もないまで破壊されつくした。今日、慈遠寺の跡をとどめるものは唯一つ、八坂神社境内にある手水鉢に刻まれ

た「慈遠寺」の文字だけである。

しかし、不幸中の幸いというか、すぐれた建造物が日典寺境内に一棟ある。それは、日典の霊を祭る御廟で、日典寺の北隣の少し高い地にある。廟の外廻りは、家囲いをして風雨を防いでいるが、二十年ほど前に見た時は、三〇年ほど前の、あの美しかった極彩色の模様がところどころはげおちていた。今どうなっているだろうか。

さて、話は前にもどり、明治十一年十月、尼崎本興寺住職の日経等が来島し、日蓮宗再興を説いた。

明治十二、三年頃から次々と法華宗寺院が再建された。そして昭和四十六年までに、西之表六寺（本源寺、日典寺、隆興寺、妙泰寺、本成寺、本立寺）、中種子四寺（日輪寺、妙昌寺、清浄寺、定田寺）、南種子四寺（信光寺（上中）、善福寺（平山）、本妙寺（島間）、本国寺（西之））が建立され、このほかに無人寺も数カ所設けられた。

茎永は宝満神社の信仰がつよく、全戸宝満神社氏子であったせいか、この時は寺は設けられず、のち遠妙寺が設けられた。

4 法華宗と石塔建立

住吉深川の巨石を代表として、種子島法華宗は、石塔を各地に建てるのが得意であった。

海岸通りの県道を南下すると、各地に石塔が見られる。それも大小各種あって、いずれも、「南無妙法蓮華經」の御題目が刻まれ、年月及び僧の名が記され、その時に参加した門徒の人数も記され、中には集落の男女人数から牛馬数まで記したものもある。詳しくは、下野・鮫島共著『種子島碑文集』（上・下二巻、西之表市立図書館）を御覧いただきたい。

全多の碑の中から特に注目すべきものを、二、三左に示す。

例①荒崎の石塔

浜津脇から野間へ向うと、すぐ荒崎にさしかかる。荒崎は左は高い崖がつづき、右は岩石がごろごろする海岸であるが、水平線には、屋久島や口永良部島が見え、眺望絶景の地である。

人々は崖の下の岩石がころがる海辺の細道を通らねばならなかった。ところが、夜ともなればメンコウ（お化け）が出、崖の上からはアバラマク（砂を播く）地であったので、恐るおそる通るのであった。

そこで、むかし、日良上人が人々を集めて、「南無妙法蓮華經」と唱え、一心に祈り、悪霊退散を祈った。そのとき、石塔に「南無妙法蓮華經」と刻み、建てたのであったが、その後、嵐で倒れ、こわれてしまったという。そこで、山口県人の安田某と坂下岩二郎という人ならびに牧瀬という坊さんがいっしょになって、石塔と再建したと碑文にある。

例②下馬三文字の石塔

中種子町野間の町の入口辺を下馬三文字という。下馬とは、昔、島主がそこにさしかかると、必ず馬を降りて、東北方向に向けて礼をせねばならなかったからだという。どこに礼をするかというと、中山入口の森にあった法華宗の日輪寺に挨拶するという説と、増田古房にある御山（律宗時代以来の聖地）を拝んだという二つの説がある。

下馬三文字に立つ碑は、今、近くに移築再建された妙正寺の庭にある。その碑文は、「南無妙法蓮華經、玄竜拜、千力余兵衛、三百万遍、安永二」と刻字されている。野間の妙正寺の僧、玄竜の念佛三百万遍の奉唱のもとに、「千力余兵衛」といわれる力持ちの男がこの大石を運び出したのである。時は安永二（一七七二）年の春、正月のことであった、と碑文に記されている。

種子島では、このように石塔を建て、「南無妙法蓮華經」と刻む風習がさかんで、その跡が各地に見られる。西之平野本國寺の庭の石塔もその一環である。盆踊りとは別に、石塔の前で踊る石塔踊りが平野などで始まったのも、これまでの石塔建立の盛況と切りはなしては考えられない。

次項で、種子島石塔祭りの状況を、西之と同じく種子島南部の大字平山小字広田に焦点をあてて述べてみよう。

例③平山広田の石塔祭り

種子島各地の石塔祭りの圧巻は広田である。広田の石塔は、かつて地蔵堂があった所の道向いであって、僧侶墓の隣りに位置している。

石塔は、道上三mほどの所にあつて、道路と反対側の崖側に、山石や古墓石片やあるいは墓、石の頂部のどれか一つをおいて、各々の祖先集合の印にしている。その印をもとに、盆になると小棚と称する水棚（面積一尺余四方、高さ一〜二尺）を小竹で作し、そこに一族が集つて、バケツの水を小さい柄杓で汲み、棚の上の粽や盆花の上に注ぎ、そして小石塔を拜むのである。

その一族ごとの組は、九組あつて、一つの小さい石塔ごとに異なる姓二つ又は

三つの者達が集合して拜む。この人達はもと小棚ごとに同族であつたのだろう。例えば、崖に向かつて一番右の組は、向井姓、西田姓、長田姓の者達が拜む。各小石塔というのは、山川石の黄色い墓石塔片で、主に頂部の部分を拜んでいる。この頂部は、小五輪塔の頂部であつて、中世のものと思われる。それは、石塔山にあつたもので、中世僧侶の墓石片であろう。それに対し、近世僧侶墓は、先述のように石塔山の隣りに十基余り現存している。

石塔山の親族ごとの小棚祭りがすんだあと、そのちよつとした広庭に、広田中の人々が集まつて水祭りをして送る霊は、有縁無縁の総霊、つまり集落全体の祖霊や浮遊霊ではなからうか。各人は、石塔山に来る前に墓参りをして祖霊送りはしてきた筈である。それなのに、又石塔山で送霊するというのはどう考えたらよいだろうか。

西之表市内東岸（伊関、安納、現和など）の石塔祭りでは、集落中の男女人数から牛馬数までも石塔に墨書して、水祭りをし、祈祷する。明らかに生者（生き霊）の祭りなのである。

つまり、昔の伝統が今も続いているのである。

それは仏教以前にも遡る日本人の古い祖霊祭りを示唆しているのではなからうか、と思うのである。

話は前後するが、小棚を拜む前、広田中の人びと（戸主）は石塔山に集り、大棚に持参の粽をつるし、そして、オセンマー（御洗米）といって、生米を数粒供え、バケツの水を柄杓で汲んで生米に掛けるのである。

その時、広田の善福寺の師匠（和尚）は脇に座つて読経する。檀家の代表四、五名も座つている。水かけは大人も子供も全員行う。すなわち水祭りである。

水祭りは、各家庭では水棚で行う。しかし、水棚と石塔山の水祭りの違つのは、水棚はその家に縁のない霊、浮遊霊を祭るのに対して、石塔山では祖霊と考えられてきたことに対し、これはやはり、祖霊も非祖霊も合わせた総霊の供養送霊祭であると考えたほうがよい。

それは仏教伝来以前のつまり多櫛国成立以前、七〇九年以前の古い慣習をひく貴重な行事ではなからうか、と考えるのである。

広田のこのような石塔祭りは今では珍しいけれども、古くは島内各地で同じような祭りをしてきたことが、各地の寺の庭にある石塔群の祭りなどを併せ考えると、そのように言えるのである。

それは又、盆の各戸精霊祭りの以前には、広田のような共同祖霊祭りが同族ごとに行われ、さらに遡ると、一つの集落での共同祖霊祭りが行われていたことの証であろう。

ここにおいて、広田の石塔祭りは、日本の古い時代の祖霊祭の趣を残す貴重な民俗行事であるといえるようだ。

又、話は前後するが、旧の六月から七月へ移る三十日の明けの朔日の日より、以前は公民館の前の道脇に、チャイマワリ（茶屋回り）の小さなワラの家を造り、そこに和尚さんが毎晩来て、お経を上げた。あの世から来る仏さん達（先祖達）の足が痛いので、お経を上げて慰めるのだという。

町は集落のことだが、広田の大町は、東の小町、西の小町に分けてあった。その広田大町から頭人（かしら役）が三人出て、大豆、エンドウ、小豆など煮てお茶塩気（おかず）をつくと、町人達は丸くなってイナマキ（稲巻、ごご）の上に坐り、お茶を飲んだり、小豆を食べたりした。一カ月間、そのようにした。チャイ廻りを簡単にはチャイ上げといったが、頭人は皆集って、豆腐を作った油揚げにして寺へ持って行き、師匠さんに上げた。種子島では和尚さんを師匠さんという。

和尚さんは昔（明治頃まで）は、妻はいなくて独身であったが、大正に入って屋久島からやってきた僧（屋久島も種子島と同じ法華宗である）は、妻がいて、子供が五人もいた。なお、善福寺は平山の中央（今の平山神社）の所にあつたが、寺の山が高いので老人が登りにくいといって、現在地の広田に移したのだという。

なお、チャイマワリの小屋は小さいワラ家で、雨の日も風の日も和尚さん一人座れば満はいの小屋であった。和尚さんはそこでお経を上げたが、ごちそうはなかった。人々はその小屋の外に丸く輪をつくってかがんでいた。

そこは今の長田商店の前で、広い庭になっていた。それで踊るけいこなどは、そこでした。子供達は「チャイマエ、アッピー（遊びに）イコヤ」というものだった。次項で話を元に戻そう。

5 本善寺由来

『南種子町郷土誌』によると、「本善寺はもともと極楽寺で、上中の上野にあり、西之表にある大会寺末寺であった。法華に改宗の折、寺号を本善寺と改め下中に移築させた。

場所は、下中の仮屋より西（西）の方、一町にあった。筆者はその本善寺を訪ねたことがある。下中小・中学校の上の山中で少し西の山神集落はに近い所にあつた。無人の堂があつたが、その少し西方に本善寺跡と刻まれた石もあつた。その無人寺は西之の本国寺が管理しているということであつた。

6 本国寺由来

本国寺は、戦後新たに出来た寺であるが、前身は西之本村にあつた本因寺だと郷土誌はいう。

本国寺の山門にある石塔は、本村神社地にあつた本因寺ゆかりの石塔で、同寺には、本因寺銘入りの鐘も伝わっているという。

① 本国寺石塔群

本国寺境内の本堂に向かって左側の庭の脇には土を盛り上げて高くした所に石塔群がある。壁ぎわに並ぶ六個の低い自然石と三個の低い石柱は、各家の先祖を祀っている。

左から四番目は中村家、五番目は森下家、徳〇家、次は八板家、六番目は西村一家、七番目は日高家、八番目は河北家となつているようだ。

その前面には僧侶墓が並ぶ。左から角柱石塔が二基並び、次には黄色く高い山川石の角柱の石塔が品よく建っている。

この石塔は、もとは西之本村の不動明王の下にあつたと言ひ、西村家の菩提寺の庭にあつたものを本国寺へ運んだのだという。

高さ一・八mで、裏側には、「建立功德主本住院日観」とあり、側面には延享丁卯掄（一七四七）とあつて、花立四本には花を活け、てあつた。その右にある笠、塔が欠けた石塔では文字は見えない。この石塔は総檀家の霊と有縁無縁の霊を合視してあるという。

② 石塔踊り

右の延享の石塔の前では、盆になると、「石塔踊り」を踊つたという。平野の日高仲八氏（当時八十二歳）が一九五九年に歌ひ、話したところによると、まず、歌は、盆の十五日に、

へサーサ沖の門中に（七）、茶屋町たてて（七）、のぼりくだりの（七）、船を待つ（五）。

ヤーコラサー、ヤーコラサー、デーチョーシー、ヤーコラサー。
へサーサ、長い刀は（七）、ケンカの元よ（七）、脇に直して（七）、山脇差し

(五)。

へサーサ、長い刀は(七)、差しよがござる(七)。うしろさがりに(七)、前あがり(五)。

七五調のこの踊りは、昔から伝わる踊りで、オセな人達が踊った。この踊りは平野だけにあつて他にはない。石塔に花を上げて拜んでから踊る。楽器は大鼓一人で胸がけ。全員扇子を閉じて持ち、時々開いて踊る。顔にはカムキ(冠目)を被る。右廻りの円陣で踊る。

大鼓のあと、踊りの先頭に師匠が立ち、歌は皆で歌いながら踊る。着物は普通の一重の着物。今はこの石塔踊りは途絶えたようである。

ところで、本国寺の僧侶であつた古市永伯氏(明治十九(一八九六)年生れ)が語つたところによると、静岡あたりの日蓮宗では石塔はなく、もちろん石塔祭りもなかつたという。氏は静岡の寺につとめていた。

③本国寺盆行事

種子島の盆行事は旧暦七月一日から始まり、七月三十日に終ると昔はいわれた。精霊は七月一日に幽界を旅立ちし、寺の庭に立てられる精霊招きの大きい笹竹と、それにさげた幡を目印にやってくる、十三日に到着し、十六日に帰りの出発、そして三十日に幽界に帰りつくというのである。

十三日の朝はどの家庭も忙しい。墓掃除、御器洗い、屋敷の清掃、水棚作り、墓地から家への道掃除、その道に浜砂を振る、そして盆花はシキビ(楮)の葉とソーハギ(シヨハギ)を準備する。シキビの葉は先の世の銭になるといい、これにまつわる昔話もある。

水棚

十三日は、家ごとに、表の部屋の縁の隅の庭上に、水棚をこしらえる。

水棚は、笹竹を四本立て、縁側より少し高目の位置に棚を作り、ソテツや芭蕉の葉で囲いをして、水の子を供えて拜む。

水の子は芭蕉の茎を小さく刻んだものに洗米、シキビ、ソーハギ、アワなどをまぜたものであり、精霊のたべものだとされる。

水棚は地域により、又人によって少しずつの違いがある。

本国寺でも、その年によって若干違う。それは作り手(師匠さん)が違つたのである。例えば、二〇一〇年、八月十五日に見た本国寺の水棚は、表縁側の奥の外隅に、縦長の四角い木の枠をおいてあつた。枠は二段に分けてあり、

上段に供え物をしてあつた。

浅く四角い箱に、ナス、芭蕉、白米、ハスイモを刻んだものを入れ、その脇には木の葉を浮かべたコップをおき、花瓶をおいて花を差し、焼酎瓶、盃、菓子皿をおいてあつた。木の枠の外側二面は、ソテツの葉ツパで覆つてあつた。

そして、水棚即ち施餓鬼棚に面した縁側の隅々には、チマキ三本、黒ナス一本に四本足の竹棒をつけて手に擬したものを小台におき、又、トマト、カリフラワー、メシ、セリ、筍、焼酎、ミカンなどを入れた箱、百合の根を入れた容器などを供えてあつた。豪勢な水の子である。

法華宗の寺の水棚は、本国寺の場合は寺一軒の水棚であつて小型だが、他の寺では門徒全ての水だなどとして、どこも豪勢なものが多い。島間田尾にある本妙寺の水棚は、大棚(戸板)の上に檀家が持ち寄つた水の子をいっぱい入れた豪勢なものであつた。野間の妙正寺の水棚も大きい。

ところで、水棚に招く盆の霊はどんな霊か。すでに施餓鬼棚と記したように、それは家に招く先祖霊とは違って、行き先のない浮遊霊すなわち餓鬼である。招くべき正当な霊は先祖霊である。それは位碑のある霊であり、位碑のない霊はもう幽冥界に昇天したのであつて、人間世界とは関係はない。

ところが、遭難死したり、子孫のたえた先祖霊は盆の行き先がなく、その辺をウロチョロして災いをもたらす可能性が大きい。

そんな霊をまとめて餓鬼という。そうした餓鬼は祭り手がないのであり、帰来し災いのもとになるかもしれない。

そこで、先祖棚とは別に、表の座の戸袋のある縁側の端に、小さな、しかし竹笹や蘇鉄など、青々とした植物を用いて小棚を作り、そこで歓待し、早目に引き取ってもらい、あとの災いなきように願うのである。まるで小やくぎの取り扱いである。

本国寺の僧であつた古市永伯氏(六十三歳)が一九五九(昭和三十四)年に語つたところによると、奄美大島の古仁屋などでは、宗派を超えて水棚を作つているという。それは椎の葉で作つてあり、芋殻や米をまぜて、その水棚に上げてあるといわれた。

本国寺の御曼陀羅

一九九六年のお盆に筆者は、本国寺所蔵の御曼陀羅を四幅拝見した。まず、日隆上人の御曼陀羅で、縦124.5cm、横44.5cmの軸の中に、53cm×33.5cmの

書があった。

南無妙法蓮華經の御題目の左脇に「康正三年二月下旬日隆」の銘が入っていた。康正三年は一四五七年。すなわち日隆上人自筆の御曼陀羅ということになる。極めて貴重な御曼陀羅であり、文化財である。

この他に、縦51cm、横23・5cmの軸の中に、29cm×13・5cmの書があつて、御題目の右脇に「持国天王、鬼子母神」「聞天多宝如来」、左脇に「毘沙門天王、南無妙法厄佛」とあり、御題目の下に天照大神、日蓮大士、正八幡宮とある。そして、左脇下に、十羅処女享徳三（一四五四）年五月上旬、日隆の花押が見える。すなわち日典の師日隆上人の御曼陀羅で、これも大変な貴重品である。

これは、令和二年から数えて、今から五七〇年前のものである。この御曼陀羅は下中の本善寺にあつた後掲の仏像などといっしょにあつたものである。本善寺は、法華改宗以前は上中の上野にあつて大会寺の末寺であつた。

法華改宗の折、本善寺と改めて下中に移築した。下中仮屋より西方およそ百メートルの山神にあつた。

本国寺にはもう一つ日隆上人の御曼陀羅がある。それは、縦53cm、横23・5cmの中に御題目を記し、康正三年二月下旬、日隆とある。

さらにもう二幅あるのは、宝暦五（一七五五）年十一月二十五日付けの慈遠寺日詮署名入りのものと、享和三（一八〇三）年五月二十八日、○宝院日詮署名入りのものである。そしてもう一つ、小額のものがあつた。

本国寺所蔵御厨子群

イ、高さ77cm、横幅42・5cm、奥行き30cmの箱型のもので、両扉開き。小仏像を約六十体収納してある。いろいろな種類の仏像群である。廃仏の折、檀家から集めたものか。

他に、タンス状の棚の上段に厨子を一個ないし三個おき、二段以上には数個ずつ置いたのが四つある。厨子には、日蓮大士像、阿弥陀如来像、仏像群など並び、下段には檀家の位碑が並ぶ。

タンス状の棚は、個人の家にあつたものを、管理者がいなくなつて寺にひきとつてもらつたものか。

本堂での御祈祷（法要）

この日は、檀家は皆本堂に集り、二時より法要が行われる。僧侶は特設の仏壇の前に席を設けて座り、読経が行われ、初盆の者は次々に拝みにいく。そし

て、南無妙法蓮華經の御題目を大書した板をもらい、仏壇の前に進み、拜んで収める。檀家総出の中での盆の御祈祷は莊嚴である。

なお、この日、寺の僧侶の主筆は若い男性の方で、教職についておられるという。先生は、公立中学校の教員として、県内の中学校に勤務しておられるのだが、夏休みの盆中は生家の本国寺にもどつて、尼僧である母の手伝いをする。りっぱな僧侶として働く。平素は母様の尼僧が寺を采配しておられる。

盆の日の本国寺の御祈祷は、この二人の僧の読経のもと、静かに莊嚴に流れてゆく。

二 種子島の盆踊

種子島の民俗は、貴重な古い民俗がいくつもからみ合っているので、それらを解きほぐしてから本論に進まねばならない。盆踊りも同じである。

かつて、種子島には、法華宗時代の盆踊りが各地に伝わっていた。寺を拠点として各集落で伝承し、盆に踊られてきたのである。

ところが筆者が在島の昭和二〇～四〇年代は、戦後の直後以来のことであり、若者達は戦場で露と消え、帰還できた者は長男以外はすべて都会へ出て行き、村々はひっそりとしていた。そして年寄りが家を守っていた。

筆者は、単車に乗って土曜の午後と日曜に、村々を廻り、古寺を訪ね、盆踊りをはじめ諸民俗調査を試みた。若者が少なくなった村々では、青年教師の自分に行く先々、好意で迎えられ、民俗聞書をはじめ実態調査も意外にはかどつた。

しかし、盆踊りについては、どこでも昔はあつたようだと言いが、絶えて久しい所も多かつた。そうした中で、数カ所では手應えがあつて、いろいろ聞くことができた。そして、お盆の日の前、毎夜、稽古する所が各地にあつて、単車をはしらせた。

西之本国寺盆踊りは、近代の手踊りのようなへんなこねりやひねりがなく、単純で率直な手踊りのくり返しである。単純な動作の中に光るすぐれた挙措が見られたのである。すぐれた挙措とはちよつとした動作であり、身近なオハラ節や安久節、これらもすぐれた民衆芸能であるが、それらに見られない動作であり、古く奥ゆかしい品格を備えた伝承芸能である。

西之本国寺盆踊りは、大字西之を東西に二部し、一年交替で踊られている。東は、田代、本村、平野、崎原の各村落。西は上西目、下西目、砂坂。

東の盆踊りは、「つんたん拍子」「きのぎの」の二種目。西の盆踊りは、「たけなが」「きのぎの」の二種目であり、これらの古い小歌が踊られる。

道具は鉦二つ、大太鼓一つ、中太鼓一つ、笛二本に扇子。扇子は各踊り手が持つ。服装は浴衣にカンモク（カムキ、冠）を被る。昔（明治・大正の頃）は麻のさらしに紋付を着、そしてカンモク、草履、扇子を持つ姿であった。

太鼓持ちは花飾りのついたツンボリ笠を深く被る。下に白い長襦袢を着て赤襷をし、その上に浴衣を着て片袖をぬぐ。白の腰下に白足袋、花草履をはく。鉦叩きは花笠に浴衣、草履ばき、白足袋姿。

踊りによって、また村落によって、少しずつ違いもあるが、大体この通りである。太鼓持ちはツンボリ笠のかわりに麦ワラ帽子を被っている。

道具持ちは向き合って、踊りの円陣の中で鳴らす。

一つの踊りには、中にいくつもの踊りがあって、扇子を使う場合と使わない場合がある。

カンモクは布で作る。ユーチエ（湯手）を折って作ることもある。盆踊りは、どの踊りも必ずカンモクを被る。神楽踊りもカンモクをつける。これは、人の息がかからぬようにするためといわれている。

扇子の代わりに杉の葉（枝）を持つてもよい。椎でもよいが本当は榊がよいと言われている。踊り子は男ばかり。鉦・太鼓を中にして輪になって踊る。右回り（時計回り）が主であるが、時々逆の左回りもする。

次は西之砂坂の盆踊り「たけなが」。本国寺で踊る。道具は大太鼓一つ、鼓一つ、笛一つ。一列になつて笛太鼓を鳴らしながら出て行く。時計回りに、円形になつて踊る。笛は使わない。「たけなが」の歌詞は崩れが目立つが、現地で伝承しているままを記す。砂坂の「たけなが」である。

A 盆踊り「たけなが」

入場（出場）……種子取りて（五）、嬉しうれなわ（七）。武蔵野の（五）、千松山の（七）、わが思い草（七）。繁れ繁れよ（五）、治まる御代こそ（八）、めでたけれ（五）。

イ、（手踊り）……睦まじや（五）、またはえ（四）、愛しさに（五）、にしだせめの（五）、かねて夜毎に（七）、かわるものとは（七）、たがよいに（五）、染めて黒髪の（九）、もつれて解けるよ（八）、頼もしや（五）。たのはきのの（七）、まわすのすすき（七）。よそになびくな（七）、今日来る模様（七）。

口、（扇子踊り）……秋の田の（五）、刈穂の色を（七）見るからに（五）、一歩に米が（七）、七俵（五）。さてもさても（六）めでたい御代なれど（八）、唐から鶴が（七）、六つ連れて（五）、また六つ連れて（七）、十二連れ（五）、曾我の松へと（七）こころざす（五）。

ハ、（手踊り）……世々のたけながわ（八）、ひろもとよいに（七）、締めてよしまだ（七）、えのもとよいに（七）、いつのいふれしの（八）枕とまくら（七）、えんえんと（七）、よりもとよいに（七）、なじゆで重ねし（八）、あまたのせきお（七）、忍ぶなわたの（七）、もとよいに（五）、んまれどよいに（七）、振られし（四）、かりもとよいに（七）、腹と腹との（七）、よりもとよいに（七）、よいこのよいこの（八）、このこの（四）、とまくら持ちて（七）、幾夜重ねし（七）、なしながは（五）、えのもとよいに（七）。

ニ、（扇子踊り）……千早振る（五）、千早振る（五）、神の御前の（七）、鈴の音（四）。神楽をとりて（七）、さんさつ（七）、万才の国に（七）、いのちを保つ（七）。あいおいの松風（七）。

ホ、（手踊り）……したにはもくの（七）、小桜や（五）、川にはさぎを（七）、こきまぜて（五）、わけゆての（五）、いのいと桜（七）、いくてあまたの（七）、なれゆて（四）、せめてひと夜（七）、川舟に（五）、えいおすすめしを（八）、のんのくまがえの（五）、たけき心は（七）、虎の尾の（五）、千里を通う（七）、恋の道（五）、しのぶにつつわり（八）、けさ桜（五）、君は情の（七）、いと桜（五）。

引端（退場）……南さがりの（七）、堀川に（五）、白さぎおりて（七）、ほろの打つ（五）、ほろのは打たずに（八）、鶴の子が（五）、銭かねまいて（七）舞を舞う（五）。まことにこれが（七）、めでたけれ（五）。

B 盆踊り「きのぎの」

砂坂の「きのぎの」は、道具は大太鼓一つ、鉦一つ、コーロン（中太鼓）一つ、笛三本。踊り手は扇子を持つ。

出場（入場）

イ、（手踊り）……今年やよい年（七）、穂に穂が咲いて（七）、早稲にや八石（七）、中手九石（七）、まして奥手にや（七）、米じゅは二石（七）。マスは白金（七）、斗掻は黄金（七）。マスも斗掻も（七）、しゅらりとおい（七）、殿の御倉米（七）、箕ではかる（五）。

口、(手踊り)……われと思えよ(七)、恋の道(五)、見染めて(四)、逢うほどこに(五)、たとえ逢わずと(七)、なじみつ(五)、忍べしのぶの(七)、通う道は(五)、待つはつらいや(七)、気の毒や(五)、想いながらも(七)、逢いたや見たや(七)、便りを求めて(七)、やる文は(五)、必ず今度の(七)帰れるじゃれど(七)。

ハ、(扇子踊り)……今年の年は(七)、弥勒の年(六)、白金のべて(七)、櫻かけて(六)、黄金のマスに(七)、さんさようではかる(七)。しなのエー(五)。

二、(手踊り)……きのぎのの(五)、あけの六ツころ(七)、今しやらしやら(八)、もしや別れの(七)、その文(五)。なじまぬ昔(七)、なしじやもの(五)。いくようか(五)、朝あめせーいなさ(八)、明けのせめう(五)うらり焦るる(八)、目はこえいくるむ(八)、せめて一夜は(七)、してみよがなあ(七)、しなあが(四)、たとえ逢わずと(七)、文きやにぞば(七)、文は見もせぬ(七)。文は見わせぬ(七)。わせにやものよう(七)。花は折りたし(七)、こずえは高し(七)。心づくしの(七)、心づくしの(七)、見るつらさよ(六)。通るは嵐の(八)、みずがらで(五)。

ホ、(扇子踊り)……東は松山(八)、西は女郎街(七)、中は天下の(七)、さんさよう寺町(八)、しなのエー(四)。

へ、(手踊り)……今年やめでたの(七)、まんぞしのごはん(七)、波にそろうた(七)、波にそろうた(七)、穂の葉色は(六)、山を越えて(六)、いといと嬉しさ(八)。殿の御倉米(七)、箕で測る(五)。島田箕で(五)。俵くくりて(七)、締めの声(七)、締めたてたエー(七)、これのお庭に(七)、はえたてたエー(七)。

引端(退場)……南さがりの(七)、堀川に(五)、白さぎおりて(七)、おのの(ほろろ)打つ(五)。おののは打たずに(八)、鶴の子が(五)、銭かねまいて(七)、おのの打つ(五)。おののは打たずに(八)鶴の子が(五)舞を舞う(五)。

次は西之の本村崎原の盆踊り歌。「おやつ詣り」。本国寺で踊る。踊りは、時計回りにまわる、笛吹きは浜田敏幸氏。

C 盆踊り「おやつ詣り」

イ、出端(手踊り)……おやつ参りの(七)、道連れはなし(七)、聞けば此

の頃(七)、えのもとえんに(七)、うどん、あの娘が(七)嫁入りすると(七)、イキル誠か(七)、ふびんなことよ(七)。手箱針箱(七)、ぬるえの動き(七)、とうちやしちやごちや(七)、ごちらいけれど(七)、かがみたてまで(七)、かい整えて(七)、ひらやしゅうとの(七)、布団や夜着や(七)、蚊帳や枕や(七)、締めくくりよして(七)、隣身(七)、次良兵衛が(五)、御手討ち違いの(八)お手枕(五)、じつに、そうじゃえー(七)。

口、手踊り……これのお寺に(七)、詣りて見れば(七)、面白や(五)。さても見事な(七)、お寺のお厨子(七)。四方に出し(五)、いず見れば(五)、心は破波の(七)田子の浦(五)。立つ波の(五)、よわなが、けえれ(七)、よわよう、おけれ(七)。

ハ、扇子踊り……墨と硯は(七)ふた思い(五)、我はこの世で(七)捨てられて(五)、せめては胸の(七)苦しきよ(五)。徳兵衛がみの(七)悲しさよ(五)。お初、お先に(七)二人連れ(五)、私のはろの(七)道のしも(五)。二、手踊り……みのとみのね(六)、物語りのおわさ(八)、思うよ小唄(八)、憩い話(六)。やふく妻戸に(七)、身は濡れかかる(七)。ちろちろ、おふる(七)、細雪に(五)、つきにも行こうえ(七)、闇にも行こうえ(七)。闇にほつほつ(七)、九重や九いいで(七)、百物語り(七)。

ホ、扇子踊り……我から濡らす(七)、袂から(五)、濡らせ濡らしやれ(七)、濡れかかる(五)。

恋しき人は(七)、まつしまの(五)、教え申すは(七)、はばかりぞ(五)。はばかりは(五)お許しよ(五)。

見よ、収まりて(七)、ゆうらんの(五)、折を得たるは(七)、身のほまれ(五)。急いで教え(七)、たてまつる(五)。

さらばめでたき(七)、君が詠む(五)。松に祝いて(七)、鶴ヶ崎(五)。千代込めたる(七)、たけの浦(五)。

へ、手踊り

春は花見に、入れる入れましょ(七)、どこへ(三)。盛りの花の(七)あじやえー(五)、しぎよくも(五)女郎はこずまに(七)、彼の娘をつけて(七)、わあ、しおらしやー(五)。いえむ、こうの野辺に(八)、花摘む女郎が(七)、さて、締めつゆるめつ(七)、しおらしや(五)。

ト、引端(手踊り)

かごで、つまもち(七)、泣かせられ(五)、小鳥や小鳥や(八)、飼わねど(四)、寵恋し(五)。

中種子町野間竹屋野では、野間の町にある妙正寺で盆踊りを踊る。道具は小太鼓二つ、鉦一つ、笛一つ。男ばかりでカムキを被り、扇子を持って踊る。小太鼓二人と鉦三人を中にして、円形になって踊る。踊り手の中に、先音頭という者がいるが、これは年配の上手な人である。先音頭の後に、大将がいるが、これは若い歌上手な人。大将が歌いそなたら、後の音頭が助けていく。後の音頭も歌上手の年輩者で、これをスケ音頭ともいう。

隊形作りは、門口から左右の列になって、輪を作って出て行く。

左列の先頭に行く大将が、丁度正面に来た時、歌いはじめ、そのまま踊り始める。楽器(鉦一つ、小太鼓二つ)を中にして、輪形で踊る。

竹屋野の隣集落の女州では、扇子の代わりに柴を持って踊る。

D 竹屋野の盆踊り歌

イ、出端(入場)は、笛、太鼓の音で出て行く。

(イ) 手踊り

それは若草(七)、身は恨み草(七)、何ぞそなたに(七)、あいたて話(七)。飽きも飽かれも(七)、せん仲なれど(七)、よせなき恋を(七)。せかにせかせて(七)、まかせの頃に(七)、せめて、逢わずと(七) 思い悲し(五)。

口、奉る(扇子踊り)

奉る(五)、なにし浪波の(七) 東堀(五)。聞いて鬼門の(七) 門屋敷(五)。瓦屋敷とは(七) 油屋の(五) 一人娘に(七) お染めとて(五)、二八の春の(七) 花盛り(五)。うちの黄金の(七) 久松よ(五)。嫁に取るよと(七) 紅金(四)。

ハ、あれを見やれ(手踊り)

あれを見やれよ(七)、天神の梅よ(七)。枝はせきたて(七)、葉は主ままに(七)、花の姿は(七) 和歌の浦(五)。和歌の浦には(七)、名所がござる(七)。籠で塩取る(七)、これ名所(五)。

ニ、ころしもよい(扇子踊り)。「今年もやよい」か

ころしもよいの(七)、末つかた(五)、君が行方を(七) 尋ねんと(五)、あこぎの浜より(八) 舟に乗り(五)、漕ぎ出見れば(七)、松の葉よ(五)。松の葉色は(七) 常盤(常緑樹) 山(五)。いつも変わらぬ(七) 常盤色(五)。浜で潮炊く(七) 夕煙(五)、消えてあとなく(七) はかなさや(五)。

ホ、龍田川(手踊り)

龍田川から(七)、朝水汲めば(七)、稚魚の若い衆が(八)、袖引き回す(七)。女郎衆が袖(六) 引き回すまで(七)、もう離さない(七)。若衆さま(五) 水がたぼれて(七) 語られん(五)。早く行て来て(七) 語りましょう(五)。へ、引端(退場)……屋久のお岳の(七) 鈴子岳(五)。これのお庭に(七) 咲いたなら(五)、鈴子は黄金(七)、小笹まじりの(七) 黄金花(五)。

この盆踊りは、寺の庭で盆の十六日の昼から踊るものであるが、神社の神楽も全く同じように踊る。両者共、カムキを被って踊る。

野間では九月踊りの大踊りを野間神社の前で踊る時は、お神楽をその前に舞う。野間神社の九月踊りの御神楽の文句は、

「千早振る(五)、千早振る(五)、神の御前の(七) 鈴の音(四)、神楽乙女の(七) さつさつの声(五)、万歳楽には(八) 命を保つ(五)。相生の松風(五) (二回繰り返す)」。

ところでこの神楽は、前記砂坂の盆踊り「たけなが」では四番目に入っている。そして、扇子で踊っている。盆踊りの文句が神社でも踊られるのは、直接には封建時代の神仏混合を示すものである。

E 南種子町平山の広田の盆踊

着物は、カタビラに浴衣を重ねて角帯を締めた。日本手拭に紙で裏張りして折り、糸で縫いつけた。これをカンモクといった。

楽器は、笛一本、小太鼓二つ、鉦二つ。菅の笠にリボンをつけたもの四つ、扇は踊り手各自一本ずつ。大将、助、小役、音頭取り(十四、五歳)、小太鼓、鉦打ち四人(十二、三歳から十四、五歳まで)。

大将は責任者で、助はその助け役で、一昨年大将をした者。小役も助と同じ補佐役で、去年大将をした者。小役をすれば、これで二才(昔は十五歳から三十五歳まで)の踊りに対する義務を終え、責任がなくなる。

笛吹は上手な者。まず支度ができたら、「寄せ調子」といって、笛に合わせて小太鼓、鉦で合奏する。人数がそろい、準備ができたら、曲を変えて「出端」の曲に合わせて、大将を先に助小役、と順々におごそかに出て行く。そして輪を作る。

出そろったら、四人の小太鼓、鉦は輪の真中に出る。音頭取りは大将の内側にいる。その時、小太鼓を持つ者(入鼓打ち)が太鼓、鉦に合わせて、「アーヒー

ヨー」と掛け声をする。

すると、音頭取りが最初の歌のはじめの一節を歌う。そうしたら大将が歌を始める。助、小役と次々に合唱して踊る。その踊りがすんだらまた、音頭取りが、「アーヒーヨー」と歌い、次の一節を歌う。以下、右に同じ。

踊りには手踊りと扇子踊りがある。全部終わったら、笛、太鼓、鉦の合奏で引いて行く。これを引端という。

広田盆踊りの歌詞は次の通り。

イ、始めの踊り

せーじゅうをあなじの(七)、間の内に(五)、花の都と(七)聞こえしは(五)、名所様ほど(七)多けれど(五)、君に心を(七)引れされて(五)、嵐、惚れ風(七)。眺むれば(五)、月の入口(七)出る舟よ(五)。

ロ、灘にこそ

灘にこそ(五)、灘にこそ(五)、播磨灘(五)。播磨灘こそ(七)瀬がござる(五)。つしまどの(五)すけくが瀬戸で(七)、錨よさげても(七)、汐だたり(五)濃いと言たとて(七)、行かれるものか(七)。灘は四十五里(七)、波の上(五)。

ハ、奉る

奉るよう(六)所は淀の(七)東堀(五)。聞いて鬼門は(七)門屋敷(五)。瓦屋橋とや(七)、油屋の(五)一人娘の(七)、おそめとて(五)、にはちが春の(七)花盛り(五)。内の子飼いの(七)久松に(五)、嫁にとるとの(七)でしかねを(五)。

ニ、一重二重

一重二重(六)、みえよえ、このえ(八)、十で金銀(七)ぎましょか(四)。おはら、四十原(七)、恋の里(五)。めさんわつゆに(七)受けて飛ぶで(六)唐からきらめく(七)星の数々(七)。暁の(五)明星よ(五)、西はちどり(六)、東につとり(六)、ちどりちどりと(七)言う時は(五)、おしぎをとりから(八)たらさおいて(六)、からちどめしかに(八)、手打ちかけて(六)、めーじょーよ(五)、なぜ戻るよと(七)、言いは小腰に(七)抱きついて(五)、幾手打たりよか(七)。幾手打つにくて(八)打ちたりよか(五)。手がそいた(五)。

ホ、南さがり

南さがりの(七)堀川見れば(七)、白サギ降りて(七)、ホロド(ホロロ)

打つ(五)。ホロド打ちたりや(七)。あの鶴亀を(七)。銭かねおいて(七)、舞いを舞う(五)。

へ、そのきのぎの

そのきのぎの(七)、もの思い(五)、又も思うこた(七)、いつかわの(五)、深き心は(七)。かわし草(六)、根引きにせんと(七)言いかわす(五)。身は捨て草に(七)捨てられて(五)、流れしその身は(八)、淀川の(五)、何を便りに(七)浮草の(五)、波にゆらゆら(七)おたかたの(五)。

ト、大坂の城

さても見事な(七)、大坂の城よ(七)。白や白壁(七)八つ棟造り(七)。朱塗り玄関(七)、金造り門は(七)、切石桐戸の(七)御門前の(五)、堀川(四)舟つなぐ(五)。

チ、さらば

さらば、これから(七)口説いてみましょ(七)。国を申さば(七)下野の国(七)、源氏・平家の(七)御戦いに(六)、平家方の(五)沖にある舟よ(八)、的に扇を(七)差し、差しければ(五)、あれをひそかに(七)射落とすならば(七)、敵よ味方も(七)見ようなされ(五)。那須の与一は(七)、御前の務め(七)。

リ、屋久のゴエンボシ

屋久のゴエンボシ(七)、血か他人か(五)。いとことしかよ(七)。そも似ちよる(五)。

以上、広田の盆踊り歌を記した。これは、長老向井長助氏が伝承していたもので、それを録音で記録させていただいた。氏は、盆踊りだけではなく、種子島民謡の草切節、他数々の民謡や太鼓踊りの歌詞まで暗記しておられ、踊ることまでできた。すばらしい頭脳を持つ珍しい伝承者であった。

F 平山西之町の盆踊り歌

イ、寺踊り

①めでたや、お寺に(八)参りて見れば(七)、唐絵の屏風に(七)、によりん(?)をすえて(七)、御経遊ばす(五)、有難や(五)。

②めでたや、お寺の(八)泉水を見れば(七)、水かと思えば(八)、水がね如露よ(七)、黄金に御祝儀が(八)湧いて出る(五)。

③めでたや、お寺の(八)み厩見れば(七)、七軒厩に(八)七匹たて(六)、

黄金の轡が(八)七結び(五)。

㉓二九の十八

二九の十八(五)、呼ばれてきて(六)、四、六、二十四で(七)子ができた(五)。五、六、三十で(七)家去れた(五)。ぜひに出なれば(七)出もしようが(五)、元の十八に(七)して戻せ(五)。

㉔今年やよい年

今年やよい年(七)、穂に穂が咲いて(七)、早稲にや八石(七)、中手にや九石(七)。まして奥手にや(七)十二石(五)。榊斗掻きも(六)、振り捨て(四)、俵引き寄せ(七)、箕ではかる(五)。

㉕小豆島

我は小豆島の(七)、万田勇の娘(七)。米のなる木は(七)まだ知らん(五)。米のなる木を(七)知らんなら教ふ(七)。八畳たたみの(七)裏を見れ(五)。思うちやたまらん(七)。ただおきやならん(七)。いっそあの娘が(六)死ねばよか(五)。

㉖あらいたわし

あらいたわしや(七)梅若を、思い切れとは(七)、曲がない(五)。唐天竺には(七)、えも行かぬ(五)。東は蝦夷へ(七)松前の(五)、西は九州(七)薩摩潟(五)、南は紀の路(七)、須磨の浦(五)、北は秋田や(七)佐渡ヶ島(五)。虎尾の野辺の(七)奥までも(五)、尋ねぬらりよう(七)、逢わりようか(五)。あわれ恋路の(七)梅若は(五)、こよ梅若と(七)呼びこがれ(五)、伴ないカラスも(八)飛び連れて(五)、迷い行く身の(七)、ウトウトと(五)、えんな切り髪(七)、女とは知らん(七)、旅路のさよ千鳥(八)。

㉗昨日今日

昨日今日まで(七)、ひと昔(五)。浮物語と(八)奈良の里(五)。この世を早く(七)去るざわに(五)、後に残れし(七)親の身は(五)、逆まなれど(七)、たみき山(五)、しげか山まで(七)迷いづる(五)。返れとなけれ(七)、返らのはかたきは(九)、鹿の巻筆に(八)、せめてえこら(六)浮世がし(五)。

㉘御門のたち

御門のたちよ(七)、やら見事(五)。御木戸の脇の(七)ゆるし垣(五)。黄金の薦が(七)巻い返る(五)。御庭の蔭を(七)見て見れば(五)、四方の隅に(七)松植えて(五)、森のかかりは(七)やら見事(五)。当侍を(七)

見てやれば(五)、征矢と籠と(七)千矢こそ(五)、掛けなさるこそ(七)、やら見事(五)。御台所を(五)見てやれば(五)、雀、燕(七)が巢を組んで(五)、十二のかいごを(七)踏みそろえ(五)、末繁昌こそ(七)宝なり(五)。

㉙父を離れて

父を離れて(七)カカ様を(五)尋ね出て見よ(七)、泉まで(五)。篠田の森の(七)葛の葉を(五)。昼は篠田に(七)住もうとも(五)、夜は来て添え(七)子の側に(五)。あわれ、やすなの(七)胸の内(五)。思えば夢の(七)浮世かな(五)。

㉚西や東や

西や東や(七)二人の仲を(七)。倉を建てたよ(七)、泉酒(五)。酒の泉の(七)湧く見れば(五)、いかなる御上の(七)娘でも(五)、わしにましたる人は(九)、ないようもなるわ(七)、頼しや(五)。

㉛ありの港

ありの港の(七)小松やら(五)。小松さんかよ(七)、子宝なり(五)。松を植えたよ(七)、島々に(五)。ようも植えたよ(七)、姫小松(五)。枝も栄える(七)、葉も茂る(五)。末は鶴亀(七)五葉の松(五)。

㉜わしが女房

わしが女房を(七)ほめるじゃないが(七)、立てば掻き臼(七)、座れば茶臼(七)、歩む姿は(七)鍋蓋の(五)栓はずれ(五)。今日去ろう(五)明日去ろうと(六)、思い居る仲に(八)、夜にも夜にもと(七)、ちようたら飯が(七)出て来た(五)。我が子なればこそ(八)、ちようたら飯もむぞか(九)。縁は子にあるまいよ(九)、去りやならん(五)。

G 島間田尾の盆踊り

この盆踊りは多人数そろっての盛観であった。思い思いの紺の浴衣に黒帯、腰手拭、冠目、黒足袋、日の丸扇子という出で立ちで踊る。輪形の中に、花笠を被った鉦・小太鼓(鼓)役が二人いる。

これは、旧七月十六日の寺での「送り水迎え」の行事がすんだあと、衆人観視の中で、男性だけで踊るのである。

田尾の盆踊りは、「大踊」と「中踊」の二つがあり、中踊はさらに、「小二才踊り」と「大二才踊り」の二つに分かれている。隊形は、小寺に対し、一人の踊り師匠が太鼓を持って構えていると、それに対して踊り子達が横一列で並ぶ

場面（中踊隊形）と、入れ鼓二人を中に入れた円陣隊形の二通りがある。

人数が多いと、二重円陣になる。踊り子は全員男性で、十七歳ぐらいから四十歳まで。

次に田尾盆踊歌詞を示す。まず、盆踊の大踊り歌詞を示す。（以前は、出端の歌もあった）。

①これのお庭に（七）松竹植えて（七）、松は繁りて（七） 銭がなる（五）。 銭がなる（五）、黄金なる（五）。

②冬編み笠の（七）若衆にて（五）、かじこの火打ち（七）、ひぎにさら（五）。 笠打ち忍ぶ（七）忍び草（五）。忍ぶとすれど（七）いでしより（五）、風は嵐の（七）音がする（五）。

③からこま投げに（七）、とうじしや（五）。島田まげに（七）薩摩櫛（五）。 ④大和もろこし（七）、うち曲げて（五）、わしも習わぬ（七）旅立ちの（五）、船と船との（七）行く道も（五）、風捨てられて（七）、お所に（五）黄金はたたむ（七）、よみたたむ（五）。千里御船に（七）たたみ込む（五）。もはや大坂の（八）川までも（五）。

（引端）朝の寒さに（七）笹山行けば（七）、露に羽織の（七）裾ぬらす（五）。 羽織の露に（七）袖ぬらす（五）。

H 田尾盆踊の中踊歌詞

この踊りは、田尾盆踊りの途中挿入の踊りで、中踊りを意味する。

1、ここにさあ（小二才）踊り（中学卒〜二十歳）

（出端）山奥四、五軒目に（九）、茶い上げがござる（八）。皆上がれ（五）。

（本調子）①一里ある島に（八）、栗とキビを植えて（八）、逢わじ戻るよの（八）キビの殻（五）。ワルサワルサ（六）、ホンノカヤーヤー（六）。

②送れ送れ（六）、知らすまで送れ（八）。知らじ戻るよ（七）。御影また（五）、頼む頼む（六）、ホンノカヤーヤー（七）。

（引端）年は十六（七）、ササゲのお豆じよ（八）、誰にちぎらしよ（七）、初マメを（五）（※この引端踊りも面白い）。

2、大二才踊り（十七〜四十歳）

（出端）恋の手習い（七）、敷紙廻るよ（七）。アラよいやさのさ（七）。

（本調子）①昼は篠田に（七）住もうとも（五）、夜は来て添え（七）、子のそばに（五）。

②カ力は狐の（七）子じゃほどこに（五）、尋ねて来て見よ（八）、泉まで（五）。

以上が田尾の盆踊り歌である。一九六〇年頃、筆者は田尾盆踊りをつぶさに見学して、非常に感銘を受けた。小二才踊りは、扇子を開いて右手でかざし、横一列でコニサー即ち青年達が舞った。大人達の大円陣の踊りに対し、こじんまりとさわやかな舞いであった。もちろん、盆踊りの大踊りの壮大、優雅な舞いにはしびれた。大いな感動であった。

1 上中の上野の盆踊り

伝承者は日高伝氏（当時六十三歳）、他から聞き、上中の町にある信光寺の庭で踊るのを見た。

服装は浴衣がけに、カムキを被る。但し、カムキのかわりに手拭の頬かむり姿が多い。草履ばき。人数は何人でもよい。楽器は、小太鼓二人、鉦一人。楽器の人達の服装は、花笠、襷がけ。

踊り隊形は、はじめに円陣を作ってから、踊る。円陣を作る（出場する）時は、はじめにハナヒキが出、次に大将（歌い手）が出、あとに皆が続く。この時は、皆、小太鼓（鼓）、鉦の音で出て行く。

上野盆踊り歌詞

1、打ち入り（出端、「扇の手」(扇子踊り)）

①（サヨイ）サヨイサヨイサヨイ（九）、ヨイヤコの如何に（八）。千丁二丁目の（七）糸屋の娘（七）、姉は二十三（七）、妹は二十（七）。姉の二十三は（七）望みはないが（七）、妹欲しさに（七）伊勢願立てて（七）、伊勢にや七旅（七）、熊野にや三度（七）。愛宕様には（七）月々参る（七）。

②（一つ色）一つ色の（五）、深さでは（五）、二でにこにこ（六）笑い顔（五）。三で盃（六）差したのち（五）、四つよそ目で（六）見ておいた（五）。五ついもせんは（七）馴染なもの（六）。六つ昔が（六）思われた（五）。七つ涙が（七）こぼれゆく（五）。八つ八重の（五）花折りて（五）、九つこの子が（八）ここに住む（五）。十でトト様（七）泊られた（五）。

③（瀬戸島節）我は瀬戸島（七）まい太夫が娘（九）。米のなる木を（七）まだ知らぬ（五）。米のなる木を（七）知らんちゅうはウソよ（八）。八畳たたみの（七）裏を見やれ（六）。八畳たたみの（七）裏さえ見れば（七）、米のなる木に（七）違いなし（五）。

2、手踊

①(寺踊) これのお寺に(七七)、詣りて見れば(七七)、面白や(五)、やー、
さても見事な(七七)、お寺の御厨子(七七)、四方に出でし(六) 泉見れば(六)、
心は何の(七七) 田子の浦(五)。立つ波の(五) 御世は長けれ(七七)、世はよけ
れ(五)。

②(これのお庭) さても見事な(七七) お寺の景よ(七七)。これのお庭に(七七)、
若松植えて(七七)、枝には金がなり(九)、いやこだれた(六)。

3、扇の手

(ふたせかねたる) ふたせかねたる(七七) 直姫は(五)、袖の露草(七七) 踏み
分けて(五)、大坂山へ(七七) 尋ねわけ入り(七七) 給いしが(五)、いにしえは
(五) 錦のしとね(五)、綾の金(五)、小袖かな(五) 絹、身にまとい(七七)、
障子に大麻に(七七) 戸に水晶(五)、隙間の風も(七七) いといが(五)、今は
木の葉で(七七) 綴り差す(五)。ふう虫の音に(七七) 声を較べ(六)、泣きあか
すこそ(七七) 道理なり(五)。

4、手踊り

(葛の葉) 尋ね出て見よ(七七)、いずみまで(五)。篠田が森の(七七) 葛の葉
よ(五)。昼は篠田に(七七) 住もうとも(五)、夜は来て添え(七七)、子のそば
に(五)。カカが狐の(七七) 子じゃほどに(五)、あまでわが子の(七七) 思ひさ
に(五)、わしもだんだん(七七) 目をかきよう(五)。

5、扇の手

頃は弥生の(七七) 末つかた(五)、君の行方を(七七) 尋ねんと(五)、あこう
の浜にぞ(八) 船に乗る(五)。漕ぎ出て見れば(七七)、南連寺(五)。松の葉
色や(七七)、常盤山(五)。いつも絶えなき(七七) 塩浜や(五)。釜で塩焚く(七七)、
フー煙(五)。消えて跡なき(七七) はかなさよ(五)。沖に波おる(七七) 桜島(五)、
こしじんだての(七七) 雲の帯(五)、腰に差いたる(七七) 小夜衣(五)。

6、手踊

(春は花見に) 春は花見に(六) いでる、いでましょ(七七)。どっこい、盛りの
花に(七七) えー。しぎよくもじよろうは(七七)、こずまに(四) 彼の娘は出て
も(七七)、しおらしいや(五)、花じゃもの(五)。向江の野辺に(七七)、花摘む
女郎は(七七)、さて締めつ(五) ゆるめつ(五)、しおらしいや(六)。

7、扇の手

(あらいたわし) あらいたわしの(七七) 梅若は(五)、思い切れとは(七七)、

曲もなや(五)。唐笠三へは(八)、えも行かれぬ(六)。東はえぞへ(七七)、松
前の(五) 西は九州(七七) 薩摩がた(五)、南はきのじ(七七) 須磨の浦(五)、
北は秋田の(七七) 佐渡ヶ島(五)。虎伏す野辺の(七七) 奥までも(五)、尋ね眠
らりよ(七七)。哀らりようと(七七)、あら恋いしの(六) 梅若は(五)、ああ梅
若とは(七七) 呼びこがれ(五)、伴い鳥が(七七) 飛びつかれて(六)、迷い行く
道よ(八)、うとうとと(五)。

8、手踊

(美濃と近江の) 美濃と近江の(七七) 寝物語の(七七) うわさ(三)、おもよ
寝ばなし(七七)。夜ふかす窓に(七七)、庭ぬれかかる(七七)。チロチロと降る(七七)
細雪に(五)、月にも行こえ(七七)、闇にも行こえ(七七)、闇にホッホッ(七七)、
九十九宵の(六) 百物語り(七七)。もしえいとも(六)、やいとも(四)、惜し
い物語(八)。

9、扇の手

(思いよある) 思いよある(六) 玉鬘(五)、風に散れ散れ(七七)。笹に葉を(五)
しねぎりかけて(七七)、神よ神(五)、合わせて食べ(七七)、九重に(五)。後を
見捨てて(七七) 思いがお(五)。今宵の波に(七七) 浮き沈む(五)。親のりんぎよ
の(七七)、よわくるま(五)。あとに浮かべる(七七)、走りつく(五)。よいかん
ばろや(七七)、田子の海(五)、見渡せば(五) 富士の山(五)。

10、手踊

大黒殿となあ(七七)、宝較べの(七七) 白兎(五)。やーチンチン(五)、ツイ
ツイツ(五)、あけツイツ(五)。いや、ふくろのうちでも(十)、ごうそ
ごそう(五)。六つ無病息災に(七七)、七つ何事も(七七) ないように(五)、八
つ屋敷をちらりんと(十) 踏まえた(五)。九つ(三) 小倉を建てて(七七)、え
いはい、えいとも(七七) 押し立てて(五)、あの柱も(六) 押し立てた(五)。

11、引端の前の歌(扇を逆さに持って踊りながら引く)

(五反島) 五反島の(七七) 真中もとに(七七)、細い小女郎(七七)、青葉を摘むが、
あの娘はよい娘じゃ、きれいな生れ。

以上、上野の盆踊り歌を示した。普通は、六つだけ踊る。扇子又は団扇を持っ
て(扇の手という) 踊るのを三つ、手踊りを三つ、合計六つ踊る。

打ち入り以外は、同じものを二回ずつくり返して踊る。特に歌詞の順番は決
まっていない。「扇の手」と「手踊」を交互に踊るだけである。

J 西之表市上能野の盆踊り歌

これは、一九五九年に、上能野の山下矢太郎氏（当時、八十二歳）から筆者が聞いた同地の盆踊り歌である。

「春の夕暮に、花の模様を見れば、梅と桜が先に出て、黄金花色彩で、咲いた花も空に知られん。降る雪はえて面白やー。」

（引き端）「至福元年、安楽の池のお庭には、鶴亀は宝来山に、相生の松は尾の上の高砂や、千代に八千代にさざれ石の巖に苔のむすまで。」

上能野の盆踊歌はこの他にもまだ沢山あつたというが、矢太郎氏はこれだけしか憶えていないといわれた。この盆踊りは住吉の寺の庭で、住吉中の男達が踊って、それから各部落へもどり、各宅宅（公民館）の庭でも踊った。大字住吉は、小字住吉、能野、深川に分れている。

楽器は太鼓一つ、笛二本、小鼓二つで、踊り子は全員刀を差し、顔にはカムキを被って眼だけ出し、白足袋、扇子の姿で踊った。引端を踊ると、皆もう家へもどった。

K 増田向井町の盆踊り歌

向井町の清浄寺の庭で踊られる盆踊りの歌で、岩屋八蔵氏、岩屋佐七氏が歌ってくれた。踊りは、一重の着物にカムキを被って歌い踊る。

1 ①様が寝姿、窓から見れば、金の屏風のその内に。

②錦一重に荒枕、物はよくよく例ゆれば。

③花を申さば初桜、月を申さば十三夜。

2 ①哀れなるかよ石童丸は、欠を尋ねて高野にのぼる。

②母は籠のかま屋が茶屋に、預けおいたよ。アラいたわしよ。

③すじにそれより高野に登り、花の御籠、御手に持ちて。

④九万九千のその寺だらを、尋ね廻れど、行き方知れぬ。

3 ①二度と行くまい、川内川に。

②高き山かと切り込む、切りこうむ。

③今朝の嵐に、川口お受け得て。

4 ①今度長崎おくだりなれば、我も長崎連れくだらぬせー。

②連れてくだるは、いとやすけれど、わしも似合いの妻子があれば。

③今度くだりて、妻子を去りて、明けて三月、春登りして。

※右四つほどを盆踊りとして踊るが、他にもう一つ加えて五つ踊ることもある。

L 西之表市下西川迎の盆踊り

川迎は種子島宗教改めの日典上人ゆかりの地であり、日典寺がある。その日典上人の遺骨を葬る日典廟の前の庭で、旧暦七月二十一日の日典の命日に踊られる。庭には施餓鬼棚を作つてある。日典廟の次は本源寺跡で、ついで栖林神社の前（脇）で踊られる。

踊り子は男性であるが、女性が入る場合は、十五歳以下の者に限られる。カムキを被り、刀を脇に差し、着物は浴衣がけ、足袋、草履ばき姿。センスを持つ。帯は博多帯、脇には印籠をさげる。踊りの輪の中の楽器の人達は花笠を被る。

踊りの輪（二重円陣）の中に、長（蝶）という者がいるのが特長。長は、蝶踊りの大将ともいう。蝶はコサン竹（ほていちく）の笹のついたものに、一しきり一しきり、歌の題を書いて、踊りの時にそれを折って出場する。

コサン竹は一間半ぐらいの長さに、歌の題を五つ書いて紙を付けてある。初めに皆が出場して輪を作る。長は、鼓打ちの輪の中を七回りまわって、「長、やがって」と叫ぶと、太鼓の人が「ひーよー」と叫び、歌が歌われ、踊りが始まる。

長が、「長、やがって」と叫ぶ間は、皆はかがんでいる。一回一回、これを行う。皆が踊る時は長は中に立っている。

川迎盆踊りはすぐれた芸能であるが、昭和二十五年頃踊ったきりやっていないようである。

次は川迎盆踊り歌。

1. 打ち込み（手踊り）

種子取りて、うれしうれなわ、武蔵野の、狭くやあらん我が思い草、茂れ茂れよ、おさまる御代こそめでたけれ。

2. 千早振る（扇子踊り）千早振る神の御前の鈴の音、万歳楽には命を保つ、相生の松風。

3. 都橋を渡りて（手踊り）

都橋を渡りて行けば、又も近江の瀬田の橋かけよ。情の一つ橋、人の心は浮き橋。そりはしなけれど宝め、その夜は戻る橋。君に振られて雪は降られて、傘差しの橋。積りて恋の大和橋、内の瀬女郎が渡る橋。

4. 鶴は千年（手踊り）

鶴は千年、亀は万年よ。祝い込めたる隅々に、宝が山のみつめぎり、のこ切りくずの数よりも、浜の真砂や砂数。語りつくせば夜はほのぼのと。鐘が鳴るぞや寺々に。

5. さざ波 (扇子踊り)

さざ波や、志賀の浜松振りに来て、たが寄りそめる子の日ぞや。末廣がりの繁昌や、枝も青みて千代の春。

6. 春の夜暮れに (手踊り)

春の夜暮れに春のよ見れば、もりしも春のよよで、梅と桜が咲き出でて、黄金花と色どりに、咲いた花も空に知られぬ。降る雪はえて面白や、来る夜ももる夜も、エイ来る来る。都育ちよければ、仕出しもよいが、花の振袖かけんとや。

7. 引端 (扇子踊り) 南さがりの堀川に、白さぎ降りてホロロ打つ。はらたいで、鶴の子が銭金ふんで、あいを舞う。まことやこれぞめでたけれ。

M 西之表市住吉の盆踊り歌

次に示す盆踊歌は、旧制種子島中学校編の『種子島研究』(昭和十年刊)に載っていたものである。

○初めなる空を見たる曙も、常聞く鳥も若々と。若水はやけ来るわいな、めぐり来る来る年の朝。

○千歳経ふ松緑葉の上に、鶴が歌えばヒヤーハイヤ。亀が舞ふ。祝い座敷に西から曇る。黄色まじりの霧が降る。

○和歌の浦、波世はさがり松、しなの煙ぞかかやかに、色よけふりの色暗し、さても見事な磯の松、松に降る雪みな黄金。

○君が代は、治まる国ぞ四つつ海、石打つ波ものどかにて、千歳を過ぎる雛鶴が、直ぐなる松に巢を組んで、恵みも深き玉川や、ヒヤウハイヤ。

○春の眺めの久しきを、君を待つ世は、ずんとよいきの姫小松。君は末代我は萬年、しゃんと見事な花の色、花の盛りは末は御繁昌。

○春の夕暮に、花模様を見れば、折しも春の模様で、梅と桜が咲き出でて、黄金花と彩りて、咲いた花も空に知られぬ。降る雪はえて面白や、降る夜も降る夜もエー来る来る。都育ちのおとなの姫よ。育ちよければ仕出し(化粧の意)も良い。イヨー花の振り袖かけんとや。

○これのお庭に松竹植えて、松は栄えて黄金なる。竹は茂りて黄金なる。黄

金なるなる銭もなる。

○様が寝姿、窓から見れば、金の屏風のその中に、錦一重に綾枕。ものによく例ふれば、花で申せば初桜、月で申さば十三夜、今度長崎降りなれば、わしも長崎連れ下さやんせ。連れて下さるはいと易けれど、わしも似合いの妻子があれば、今度下りて妻子を去りて、明けて三月春上りして。

N 西之表市安城立山附近の盆踊り

土佐から船が三艘程参る。先なは銭よ、後なは金よ、中なは土佐の早稲米よ。早稲米ならば、十掻で渡せ、斗掻が無かいば、斗掻の上に姫等すえて、若衆が中をば出てしのぐ。

O 中種子町坂井附近の歌詞

千早振る、千早振る、アーヒーヨー、沖の前のヨー、鈴の音、神樂乙女のヨー、ささつの声、万歳どこみが命をたもる、相生の松風。

P 南種子町上中附近のもの(末調の部分多く、茲ではその一部分を示す。一回の盆踊に一定の歌詞の数と順序があるが、ある事情のため、調査に支障を来したのをふくむ。)

◎糸屋の娘

さあよいよい、よいやこでいかに。せん町二十回の糸屋が娘。姉は二十三、妹は二十。姉の二十三、望みはないが、妹夫欲しさに誓願立てて、伊勢にや七度熊野にや三度、愛宕様には月々参る。

◎佐渡島

ヒヤー、私や佐渡島萬太夫が娘、アーヒーヤー、米のなる木をまだ知らぬ。米のなる木を知らんちゅうは嘘よ。八畳たたみの裏を見れ。

◎頃は弥生

頃は弥生の末つ方、君の行方を尋ねんと、あんこの浜にぞ船に乗る。漕ぎ出て見れば南伝寺。松の葉色や常盤色。沖に並みおす桜島。こんぢんだての雲の帯。腰に差したる綾衣。いつも絶えなき塩浜や。釜に火を焚く夕煙。消えて跡なき儂さよ。

◎葛の葉(信太の狐)

尋ね出て見よ和泉まで、信田が森の葛の葉を。昼は信太に棲うとも、夜は来て添う子のそばに。母は狐の身じゃほどに、余りわが子の可愛いさに、わしもだんだん目をかくる。

◎なほ姫

打たせかねたるなほ姫は、袖の露草踏み分けて、逢坂山に入り給ひしが、古は錦の単衣綾の絹。障字に玳瑁戸に水昌、隙間の風も厭いくが、今は木の葉で綴り差す。う虫の声に声を較べ、泣き明かすこそ道理なれ。

Q 旧藩時代の島主種子島家の盆行事と盆踊り

旧藩時代の島主種子島家では、どのような盆行事を行い、どのような盆踊りをしていたのか。甚だ興味があり、かつ重要なことなので、ここに一文を草してみることとする。

資料は、西之表市に住み、榕城中学校の先生をしておられた河内和夫氏が、古典復刻をされた本、『羽生六左衛門道潔著種子島家年中行事』（昭和三十九年、熊毛文学会発行）によることにする。

同書によると、「七月中之行事」の中で、「七日之事、一、上西之表祭礼踊之事」とあって、「兵具奉行吉人、内横目吉人、警固として差越、乗馬西之表より出ル」とある。又、

十六日、「御祭礼、西町人踊之事」とあって、「吉番に本源寺庭、式番二御館御広間の庭にて三座踊ル、三番二御墓、四番二慈遠寺、五番二大会寺ニテ終ル」とある。

又、「横目一人、町奉行吉人、兵具奉行、警固足軽」などへは、焼酎一徳利、肴干鯛式拾など賜るが、踊り人数中へも、焼酎、西瓜などさし遣わし、古へは寺の庭中にて踊り半ばに銚子盃を持ち回り、盛り酒をしたなどある。

十七日は、御祭礼東町人踊が行われて、踊り方勤役や警固足軽等の勤めは西町に同じとある。元禄十二（一六九九）年六月二十四日、十八代久時公様御同心御下島あり、同七月十六、十七日、西町祭礼踊、御館において上覧し給うとある。

又、翌々十九日、両町踊り再び御壘望ありて上覧し給う、この時、三ヶ寺住職並びに衆徒その他近所等の隠居老体の面々も見物した、とある。天明の頃までは、御広間内へ諸士妻女まで入って、群集して見物したという。しかし、その後は、広間より見物することは不敬ということで禁制になったということだ。

この御屋敷での盆踊りの時、注目すべきものに、「蝶」という者が現れたことだ。これについては、次項の横山盆踊りを述べるさいに、言及しよう。蝶は、

注目すべき重要なことなのである。

R 西之表市上西の横山盆踊

横山盆踊は、旧来の盆踊にもう一つ「阿久根千代女」の歌、踊りが加って構成されているという特異の芸能である。県の指定文化財になっている。まず歌詞を記すと、①②③④⑤⑥⑦に分類できるが、このうち②が新しく加わったものである。新しく加わったといっても江戸時代のことである。

①（出端）種子取りて、嬉しうれなわ。武蔵野のしもくやら、わが思い草。茂れ茂れ、治まる御代こそ、目出度けれ。

（目出度、目出度）目出度、目出度の御殿屋敷。小倉九ツ御門、八ツ船は千隻、お金船。金をおろすは品川に。

（梅若）梅若や、匂ひに影るわが心。富士のうらばにえおく露。その名玉かづらかけばし。

（鯉の小池）鯉の小池、浮いたる船は、銀の白金。樽漕げや、押し込め外々の浦。

②（阿久根千代女）阿久根千代女は夜舟漕ぐ。足もだるんど、手もだるんど。まして夜風も寒かんど。

阿久根千代女は稚児心。玉章に又歌かえて、花の恋の女にやると見た。阿久根千代女は稚児心。玉章に又歌かえて、花の恋の女にやると見た。

花の恋の女のおしやれごと。うつつ名の立つ玉章を、水に浮草、笹の露。坊の飛ば瀬に、舟乗りて、嵐待ちたる心して、これも浮世の物語。

③（春の夜）春の夜の夢、おどろかす、くだかけの、そのきみぎみの物思い。又逢うことは、五ツ川の深き心はかぐち草。根引にせんとよいかわす。

身は捨草で捨てられた。流れしこの身は淀川の、何を頼りに浮草の、波に揺られて、歌語ろう。あはんや君が情なや。物思い。それは若草、身は恨み草なにぞ。そなたに逢いたい話。

飽きも飽かれもせん伸なれど、よしなき恋を人にせかれて、面白や。

④（福神丸）今年や目出度の福神丸に、黄金の台に松植えて、一の枝には銭がなる。二の八枝に金がなる。末の緑に鶴すえて、何とさえざる。

立ち寄り聞けば、今年やよい年、宝の年よ。道の小草に米がなる。思いのままに満腹へ。

（富士の嶽）富士の嶽から裾野を見れば、下には吉原名所がござる。美女な

小女郎が、琴三味線で、弾かせ歌わせ、語らせ舞わせ、見染め心の面白や。

⑤（五ツの水）五ツの水は、濁らじと、川せいとは、おぼろ月見る形もなし、吾が思ひ。さだかわ荒して一筋に、寝てもさめてもいとしさに、あまりてもりて、面白や。墨と硯は恋仲なれど、人が水差しゃ薄くなる。

（弥生たつみは）弥生たつみは、花見のことよ。姉も妹も昔の笠つみ取り、帰りの面白や。

（さてその次）さてその次に、しまだいに松と竹とを植えまぜて、千代をさへづる子鶴が、右端のかたに巢を組んで、谷の流れに亀遊ぶ。

⑥（君の召したる）君の召したる、唐木造りの御船は、船はせき船、館をはいて。

館の内にも錦のへりに、綾のとことこに、出したる絵図には、恵比須や大黒、打ち出の木槌、舞ひ舞ふ所、やら目出度いや。

⑦（引端）せんと深山の、せんと深山の、奥の入りには、ちようと出た。よし若藤、袴着て、見ればなか立袖、長羽織裾に。やや嬉し、おがのこに、裾みそいた面白や。

この歌は、①～⑦のそれぞれ独立した歌謡に、②は阿久根千代女の歌が挿入されているのが特長となっている。阿久根はもちろん鹿児島県阿久根、それと横山を結ぶ独特の歌である。

『阿久根郷土誌』によると、阿久根千代女は阿久根中将とも言い、「阿久根の産にして、国老の比志島宮内少輔国隆の妻なり。国隆は紀伊国貞の子なり。国貞は島津忠良の臣にして国老となり、諸所の地頭に補せらる。国隆、父に嗣ぎて高岡地頭となる。寛永元年国老になる。国隆、権勢を好み、同を好み、異を悪み、専ら独断をなし、暴戾にして本義多く、民之を怨む者多し。太守家久公、命じてその罪状をあげ、家老職をやめ、川辺の宝福寺に幽囚し、領地及び家財を没収す。同五年二月更に種子島に流し、吏卒を置いて、之を横山に拘守し、遂に之は死を賜う。

国隆、愛妾あり。中将と称す。千代と称するは野人の訛なりという。国隆、嘗て、阿久根に地頭たりし時、その才色を聞き納れて、妾となしたるなり。

その氏名、詳ならず。世に称して阿久根中将という。……中将は坊之津に至り、たまたま種子島庄司浦の漁夫今之蒸なる者来泊せるあり。仍て、その帰舟に便じて種子島に航す。」とある。

そして、中将は国隆に殉死したのであった。国隆五十一歳、中将三十五歳であった。里人は、横山の法華寺である万徳寺の上の方百mほどの今は畠の一面に埋葬し、そして万徳寺の庭に碑を立て、毎年旧暦七月七日には、野楽を奏して之を祭り拝んできたのである。

横山盆踊は、法華寺の万徳寺の伝承盆踊りに、比志島国隆・阿久根千代女の悲恋物語が加わり、独特の哀調を帯びた盆踊りが成立し、数ある種子島の古典的盆踊りの中でも異彩を放っている。

しかし、大戦中からしばらく踊らないでいて、歌詞も踊り方も伝承があやしくなってきたようだ。当時（一九六八年頃）、筆者は種子島高校に勤めていたが、種子島民俗芸能研究もしていた。ある日、父兄の一人がやってきて、横山盆踊りを復活したいのだが、稽古を見に来てくれないか、といわれた。

出掛けて行ってみると、カムキはなくて、男性は鞍馬天狗が被るような白頭巾を被って腰刀を差し、白足袋、草履姿。女性は花笠を被り、色模様を着物に、色帯、白足袋、草履履き姿であった。なるほど、国隆、千代女の姿らしいと思つて、踊りが終つてから聞くと、まさに悲劇の兩名を思い描いてこのようにしたのだという。そして、伝統芸能として市の文化財にもしてもらいたいで、知恵を貸してくれという。

そこで、筆者はちょうどもらつて持つていた西之の踊り子のカムキを見せ、「よその集落ではこれを被つて踊っている。このカムキは、種子島中の盆踊りで被つていたメンだ。」といつて借したところ、さっそくカムキを復元して踊つた。新しい衣裳の盆踊りが古典的な芸能へと蘇つたのである。それを見た古老達も「これがマモンだ」といつてくれた。但し、横山では今は白カムキ、白衣裳姿である。幽界の霊招きの意であろう。これは集落民の選択なのだから仕方がない。

なお、その白い白姿で踊ると幽界の祖霊達が現れ、それを供養している感じで妙に清潔な盆踊りになっているのである。県内の盆踊りの中でも、横山盆踊りはひとときわ生彩を放つのである。復活の中で、集落民が選択した最高の芸能であったわけだ。

種子島内では、あくまで伝統を守り、古風を重んずる西之平野の本国寺盆踊りと、横山盆踊は、互いに南北に位置しながら、服装、芸風、歌謡の内容などと対照的であり、しかも根元は古い芸能（それは歌詞から見て中世芸能）に根ざ

すぐれた芸群であるといえよう。

三 薩南諸島の盆踊

種子島から南へ、三島村、十島村と薩南諸島が続く。日本の古層文化は、簡単に言えば古代的文化は奄美・沖縄まで伝播して露出し、中世的文化は三島、十島村まで伝播露出している。

屋久島は中世には種子島々主が支配していたが、近世には薩摩直轄になったので、薩摩的な文化が表層にあり、中層文化は種子島的である。盆踊りも、この層序で見えていくと大方理解できる。

(一) 屋久島の盆踊り

屋久島の民俗芸能の中で、まず挙げねばならないのは、安房の如竹踊りである。

1 如竹踊り

如竹踊りは、屋久島聖人とあがめられている泊如竹が教えた踊りといわれ、格調高い芸能は今も伝承され、鹿児島県無形民俗文化財に指定されている。

如竹踊りは、もとは命日の旧暦五月二十五日のほかに、盆入りの旧暦七月十三日にも踊らねばならなかった。踊り子は全員成人男性である。袴を着、草履ばきで、扇子を持って踊る。荘重な歌声のもと、静かに勇壮に舞い踊る。歌詞、舞いともに、中世的な感じのするすぐれた芸能である。歌は次の通り。

① 人忍ぶ

アソーラ、ソラソラ、人忍ぶーは、ヤ、じゅに子が添うよー、ヤ。

雨にあられ、エエーノー、ヤ、雪に柴垣、海老じょう。掛け金、わが女房、ヤ。

いんの村、ホーエイエヘン、御精進、月はえひもの、アソーラ。

いんの村、ホーエイエヘン、御精進、月はえひもの、アソーラ。

② 山雀の

山雀のー、サーテ、籠の中でも恨みもの、ソーラ。籠、籠、エーノーサーテ、戻りたい、ソーラ、ソラソラ。

③ 七里小浜

七里小浜の砂の数々、思えども、ソーラ、縁がうすが、ノーサーテ、逢いもせぬ。アソーラ、ソラソラ。

④ 佐渡と越後

佐渡と越後は筋向い、橋を架けよー、ヤ、船橋を。いずれ、伴になあ、サーエイトコサイサイ、エイ。アーエイヤ、ソラソラ。

⑤ 哀れ、我が身が

哀れ我が身が船なれば、思つかの様、わがー内乗せて、エー。嵐やなくとも、我が宿にー、いづれ沖になあ。サーエイトコサイサイ、エイ、アーエイヤ、ソラソラ。

⑥ 様と我とは

様と我とは、撥ね釣瓶、切れて離れてまた舫おう。アソーラ、ナカナカアーニイサテ、信濃直政のよー。ひとよなしとのー、ナカアー、ナカアー、アソーラ、ソラソラ。

⑦ 思います

思います、また夜はくる。冬の朝道湿りける。アソーラ、ナカナカアーニイサーテ、信濃直政のよー、ひとよなしとのー、ナカアー、ナカアー、アソーラ、ソラソラ、シッ。

⑧ 我は備前の鍔刀

アソーラ、我は、ヤ、備前の、ヤ、鍔刀、ヤ、鍔刀。ヤ、思い合わせて、ヤ、研ぎ欲しや。研ぎ欲しや。アソーラ、ソラソラ。

⑨ しょく縁ち(比翼連理)

しょく縁ちと契りし仲を、アソーラ。ます肌やあれど、捨てられん。アソーラ、あたらずや君様、きんだんさのこに、月なき里に住ませ、アソーラ、ソラソラ。

⑩ 今朝の名残の

今朝の名残の恨みとどな。アソーラ、ます肌やあれど、擦れられん。アソーラ。あたらずや君様、きんだんさのこに、月なき里に住ませ、アソーラ、シッ、シッ。

以上、口伝えの十種類の歌は、永い間に崩れたと思われる個所がある。しかし、下手に手を入れるよりも、受けついでまま歌うのがよいと思う。

一番の歌が始まって、しばらくは鉦、太鼓は鳴らない。歌だけである。それは静かな歌であり、おごそかな謡曲である。仏教ふうと言えば、声明のメロデーであり、楽器は「いんの村」の語からあと鳴る。如竹踊りの由来の古さと貴重さがこれだけでもわかる。

一番の「山雀の」と三番の「七里小浜」は、南九州各地の武士踊りにも歌われ、又、全国的にも歌われている古い歌である。歌詞を指折り数えてみると、「山雀の」は、五・五・七・五・七・五のシラブル(音節)であり、「七里小浜」は七・七・五・七・八となっており、七・七・七・五(例えば、めでためだの若松様よ、枝も栄える、葉も繁る)のような、江戸時代の定型詞になる前の型式である。つまり、古い歌であり、中世歌謡に近い。

山雀の歌は、古くから歌われてきた『浅野藩(広島藩)御船歌集』の二百三十六番歌としても記録されているのである。

四番の「佐渡と越後は」も中世以来の歌で、南九州でも各地の武士踊りで歌われている。五番の「哀れ、我が身が」もそうである。この四・五番と、次の六・八番の歌は、シラブルがはずれも、七・五・七・五となっている。これはいわゆる七・五調であり、九番の七・七調と共に、平安時代末の「今様」の流れをくむ「室町小歌」の詞型になっているのである。

八番の「我は備前の鍔刀」は、種子島の大踊りや湧水町栗野の八幡神社の土踊り「研ぎ踊り」にも見られる。この歌は、島津義弘が朝鮮出兵の折に、家来達がこの踊りを神前で踊ってから出兵したと伝えられている。

「我は備前の鍔刀」は、室町時代後期の歌集『閑吟集』や初期の歌舞伎でも歌われた古歌である。また、この歌のシラブルも七・五・七・五調で、中世小歌であることを示している。

「研ぎ欲しや」は、鍔刀を研ぎたい願いと共に、話し相手(伽をする相手)が欲しいということでもある。そして、その鍔びついた刀を研いで、元の名刀が蘇るように、ほんとうの自分を知って欲しいという意味がこもっている。

しかし、栗野土踊りでは、文字通り、鍔びついた名刀を研いで、戦陣へ行くのだという意味に解しているようだ。如竹踊りの場合は、もちろん話し相手が欲しいという意味であろう。

九番の「しょく縁ち」は、明らかに比翼連理が訛ったものであろう。比翼とは、比翼の身のことで、一目一翼のオス・メスの鳥が仲良く飛べば、完全な一羽の鳥になって飛ぶという中国の伝説にちなむ言葉で、男女のかたい契りを表している。

七番のあとと、十番のあとには、「シツ、シツ」という不思議な言葉が入っている。保存会の方々によると、これは踊りの終了を示す声だという。七番は

中休みで、十番は終了ということになる。

ところが、不思議なことに、この「シツ、シツ」は、南九州市知覧の一五夜行事の「ソーラヨイ」の舞踏にも入っている。こちらは、子供達が、「シツ、シツ」と言いながら指で大地を差し、そして四股を踏む。

「ソーラヨイ、シツシツ」と唱えるのは、それ(大地)はよい、と言って大地に感謝している趣きがある。つまり、大地への感謝の呪言であろうか。如竹踊りでは、如竹に対する感謝の呪言であろうか。

如竹踊りの人々は、袴を着、腰に刀を差し、白足袋姿で、日の丸扇子を持って踊る。

以上、屋久島安房に伝わり、その命日の日に泊如竹の霊前で踊る(舞う)この舞踊は、盆踊りとして見ると、舞い姿、歌詞共に古風であり、室町芸能の模様を伝承し、貴重である。

これは、種子島の本国寺盆踊りの「きのぎの」や、「たけなが」などと比較すると、厳密に言えばシラブルは少し異なるものの、同じようなシラブル、単語、語のひびきが随所に認められる。したがって、本国寺盆踊りの歌謡も中世歌謡に語源を発しているようである。

如竹踊りは、如竹が生きていた頃の歌(中世歌謡)を伝えている貴重な盆踊り歌であり、民俗芸能であるわけで、すでに鹿児島県指定文化財になっている。それを対比できる種子島の本国寺盆踊りも、非常に貴重であり、わが国の中世盆踊りの様相を伝えているものだといえよう。

もう少し筆を進めて、屋久島の他の盆踊りを見て見よう。

2 宮之浦盆踊り

銭壺踊り、笠踊り、扇子踊り、四つ竹踊り、棒踊りから成るよい踊りだ。いずれも江戸時代の踊りである。一九六〇年代には完全伝承していたが、今は分らない。もともとはお田踊りの棒踊りも、盆踊りに入っていることが注目させられる。

3 楠川盆踊り

屋久島全体でもっとも特色のあるのは楠川盆踊りだ。屋久島では盆は一月おくれの新暦八月盆で行う。

楠川では、八月一日、無人寺の本蓮寺のそばの小高い所に、精霊招きの旗を立てる。ソーロン招きの旗という。民家の宗派は古来の法華宗が多い。

新暦八月七日は七夕。七夕竿を立てる。十二日は墓掃除、天井の煤拂い、浜砂を庭や墓に播いて清める。

八月十三日、家によつては縁側の庭先に水棚を作つて、ホースケジュウ（法界衆生）という身よりのない仏を招く。又、仏壇から位牌を机の上などにおろす。

お寺では大きな施餓鬼棚を作る。身寄りのない仏達の集団歓待である。いわば集落の檀家全体の水棚である。但し、法華宗の地域で行われる。これらはすべて、種子島の場合と同じである。なお、何度も記したが、種子島と屋久島は同じ法華宗である。

十三日は夕方から、寺の庭で盆踊りが始まる。楠川では、本蓮寺の庭で、男子青年達が踊る。その内容は次の通り。

① 出端（出場、ヨイヤサ）

「ヨイヤサア、ヨイヤサア、ヨイヤサツサ、ヨイヤサ」と、囃子をかけながら、進み出る。

② 四つ竹踊り

両掌に合計四つの竹片を持って、鳴らしながら出場。

(i) 十二、二階の梯子から（ソイジャ）、上にお軽さんが、のんのんのべ鏡下になん臓助や文を読む。ササ、縁の下、九太夫は（ア、ヨーシー、ヨシ）。

(ii) 白川越えの山奥で（ソイジャ）、あたやさんかと呼んでもみたが、おぼろ月夜の顔と顔。ササ、おさじやないかな（ア、ヨウシーヨシ）

(iii) 一人とぼとぼ、与市兵衛（ソイジャ）、おーい、おーいと呼びかけ、定九郎が縞のー、財布の金五十両。ササ、これさえ手に入れば（ア、ヨウシーヨシ）。

ところで四つ竹踊りの歌詞は、寛延元（一七四九）年、竹田出雲等が合作した浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」にちなむもので、江戸後期には歌舞伎でも上演されたといわれる『民俗芸能辞典』。つまり、江戸時代の芸能である。

楠川でのこの踊りは、若者達が四つ竹を鳴らしながら、忙しく踊るもので、踊り手はきついけれども、見物人は竹の音がさわやかで心地よい。

③ 鈴踊り（松島踊り）

太鼓がトントン、トンと鳴ると、踊り子は立って歌に合わせて踊りはじめる。鈴を両手に持ってゆする。

花の松島、夜更けて通れば、（ア、ヨイトヨイトヨイト）、三味や太鼓のサマよ、音ばかり。松島来て見りや、よか女がおるわい（オイトサツサ）。

（以下省略）

④ 扇子踊り（オテンダー）

日の丸扇子を持って、寺に向かつて列をなしてかがんでいる。太鼓がトン、トン、トンと鳴って歌い始める。踊り子達は立って、右手の扇子を左前へ打ちこんで開く。

(i) オテンダーの水はよー、サーサー、大和までとーやーあるよ（ソイジャ）、ンダシヤレウレシヤ。アラヨイヨイヨ（サーサ）。

(ii) 中島やー、小池よー、サーサー、千尋も立つがよー（以下、囃子略）。

(iii) 朝寝して起きて、手水鉢見ればよ、ンダシヤレ嬉しや、アラヨイヨイ。

(iv) 翁岳登つて、おちく岳見れば、ンラシヤで嬉しや、アラヨイヨイ。

これらの歌は、すべて八八八六詞型の琉歌である。本土の七七七五詞型の短歌型より一音ずつ多い琉歌である。琉歌がどうして楠川に入ったのか不思議でもあるが、江戸時代、薩摩く沖繩通いの帆船が楠川に帰港した折にでも習ったのか。

以下、⑤ 手踊り、⑥ 笛踊り、⑦ 伊勢音頭（七七七五詞型の近世小歌）となっている。

楠川盆踊り歌は、大和歌、琉歌の混合編成という興味深い歌謡群であるのは、海上交通の要地にある屋久島らしい芸能である。

ところが、楠川盆踊りはさらにもう一つ、注目すべきことがある。それは、家廻りの時、初盆の家では、縁側の外に踊り子一同並んで立ち、開いた扇子を両手で持つて拝むようにして持つ。センスの上にはシキビの花をのせてある。

太鼓打ちが「南無妙法」といって、トントンと鳴らすと、踊り子達は、「蓮華経」と唱え、扇子を両手で頭上に持ち上げて、シキビの花をいつせいに後ろへほうり投げるのである。

そして盆踊りが始まる。つまり、シキビの花を霊に供えてから踊り始めるのである。

初盆の家々で、このように踊って新しい祖霊をあの世に送り出すのである。その意義と云い、又芸能と云い、楠川盆踊りはすばらしい民俗芸能であるといえよう。

楠川盆踊り歌は、七七五詞型の近世ヤマト歌と、八八六詞型の琉歌の混成型になっていて、珍しく、かつすぐれた盆踊り歌を構成しているのである。屋久島では、安房、平内、栗生、宮之浦でも、それぞれ個性的な近世盆踊りが展開される。

(二) 硫黄島の盆踊り歌

「揃た揃たよ」「サンデコ」「嬉しゆめでた」「阿権から」「みじった」など、大和歌、琉歌とりまぜた芸能群である。

①揃た揃たよ。―「揃た揃たよ、踊り子が揃たドンセー。稲の出穂よや揃た。マンマと揃た。ヨマカサントセー。(あと、十歌詞が続く。)

②マタ、サンデコよ、ヨーがナーベラ、ヤレコレ、ことすけえの、サーマコヨ。マタモきようとブルーけえの、もーすれば、あるさまこよ。
(他、五番まで)。

③嬉しゆめでたの若松様よ、枝も栄える、葉も茂る。(あと六番まで)。

④アレー、阿権から、なおそねソーヤに、地方ヤーセ……。以下三番まで。

右の一は、七七調を主とする歌詞群。二は七七調から始まる。三は七七五調の有名な大和歌。四は、七七五のリズム。いずれもヤマト(本土)系の近世歌謡調である。但し、二は徳之島などの民謡サンデコ調の歌である。

(三) 竹島の盆踊り歌

①(初めの歌) 吉野山道、尋ねて行けばエー、顔に桜が散りかかる。ホンニナー、散りかかる(以下略)。

②東西、さらば東西、鎮まり給え、ソラヨイ、イヨサー、ヨイヨサー(以下略)。

③アーヨイヨイ、世に有難や、今度は大坂寺町筋に(以下略)。

いずれも完全な大和歌で、しかも近世風流だ。このソラヨイの囃言葉は、南九州市知覧町中福良の十五夜踊り歌のソラヨイと同じ掛け声になっていて注目させられる。

(四) 黒島斤泊のトモレ(供養)踊り

顔が見えないように、手拭いで頬被りして踊る。以前は、太鼓踊りの八人が「堂の前」で精霊の供養のために踊っていたが、今は学校の庭で、初盆の家族がゴザを敷いて座っている前で、「誰その供養踊り」といって、踊る。盆最後の八月十五日に踊る。歌詞は、

○我は鈴虫、こなさんや、ニイー、ニイー、ア、ソラ、チンチロリンと見染めし、それよりもトチュッチター、トチター、チッター(以下略)。五番まである。五番の次に、調子をかえて次を歌う。

サアサア、ササ参り、行こちゅうは、石原小石原、忍んで行こちゅうちゃ、音高し。ねつからシャンと、すーちゃ、もたんがよいわいな。(二番までである)。右の歌は、七五詞型から始まって、七五五……とつづく。そして乱調になる。

(五) 中之島の盆踊り

中之島は、トカラ列島(七島村)に属する。ここの盆踊りは、盆に、テラ(無人寺)の次はオーニワへと場所を替えて踊られる。鉦、太鼓、ジューテ(地唄)に合せて踊る。子供組の踊りを小踊り、若者組の踊りを大踊りという。小踊りにはユオ(魚)踊りがあり、大踊りには俵踊りがある。

太鼓踊りの歌詞は次の通り。

①島の明神丸に嘉例良を乗せて、思う港にそよそよと。

②嬉しゆめでたの若松様よ、枝も栄える、葉も茂る。

③今年やよい年、穂に穂がなりて、道の小草にヨネがなる。

④一七、八は園山のツツジ。寝よとすれば、ヨイヤ起す。

盆の三カ日の演目は、十三日が鉦、太鼓踊り、垣廻り、小踊り(魚踊り)、恵比須狂言、俵踊り、三太狂言。十四日は十三日とほぼ同じだが、花踊り、田の神狂言、よさか丹波大踊り、相撲踊り、八兵衛狂言などがある。十五日は、与介、モーコ(両親)踊り、十三、十四日の出し物など。楽器は鉦と太鼓。芸態は豊かであり、古風である。

十四日の盆踊りの歌詞は近世的であるけれども、芸能群は豊かであり、中世的な趣を呈する。但し、種子島西之平野本国寺の盆踊りは、もっと古風であるようだ。

しかし、十五日の盆踊りは、

(イ) 嬉し、うえなわ武蔵野の、オーノ、狭くもあらぬには、わが想い草。茂れ茂れ、治まる御代こそ楽しけれ。

(ロ) 君、千歳山、それは昔のさざれ石、巖におる亀は遭遇、とにかくに君と我が名がよもつ。

(ハ) あれば野の庭の、花にお車ひけ、ひけ。さらさら恵みや、思いや叶わばと思つ。

このあと、魚踊り、エビス狂言などが行われる。

右のイの詞型は、七、五、九、七、六、八、五、となっていて、規則的ではないが、若干、語呂が出ている。

なお、中之島の盆行事は、盆だというのに、魚をいっぱい捕ってきて刺身にし、酒を飲んで、若者達の演ずる芸居を見ながら焼酎を楽しむ。踊りにも魚踊りというのもあって、精進料理的ではない。中之島にも古くから仏教は入っていて、寺もあった。精進料理を知らないわけではない。

ということは、精進料理が一般的な本土型盆よりも、もう少し古い社会であるということだ。精進料理にとらわれない精進、すなわち仏教以前の古い姿が顔をのぞかせているといえよう。

なお、右の芸能は戦後まもなくの状況であって、平成の今は演っていないようだ。

(六) 悪石島の盆踊り歌と詞型

(イ) 長崎船か(七)、沖漕ぐ船は(七)、イヨ、櫓ではやらいで(七)、恋し風(五) 一七七七五詞型。

(ロ) 十五から二十四、五まで通えども、ドーコイ、宿がよければ名は立たぬ。——五六五七五詞型。

(ハ) 梅の木の枝に、ソラ、ウグイスが宿る。わが巢も宿る。君も宿る巢よ。恋には、ソラ、寝られんものかな。一八、八、八、七、四、八詞型。

(ニ) 細川殿のお宿が見ゆる。太刀、槍、刀、弓打つわは。一七、七、七、五詞型。

(ホ) 清岳川も雨降らば濁ゆ、や、浮世に住まば、濁れや君様。一七八、七八詞型。

(ハ) 太郎御前様は、伊達者でござる。今朝結うた髪を、パライと解いて、これ結うて給れと、十郎せ(左衛門)様。一七七八、七、九、五。

(ト) 今は吉野の花盛り、アチュウや、コチュウや、おわを重ねて、チンチンチラ。一七五八、七、四詞型。

(チ) 新造つくりて今日は吉日、船おろし。沖もみぎわも、その灘ぎわも、風はまともよ、いりふに受けて、夜明け前山川港入り。一七七五、七七七七七九詞型。

(リ) 野里、山ばた、米が満作。万々石の蔵を建て、この積みに積んだる

百万俵、……。一七七、五五七八詞型。

(ヌ) 難波お家の祝いな踊り。この正月初めに、蔵降ろし、このカナおろし。カナの財布を肩にひっかけて、オ、古カネか、オウ、カラカネか。……。一七七、八五七、七七五五詞型。

(ル) かなの手力かを、親をかお。ソラ千年もソラ万年も。正月来えーと祝うタイ(以下略)一八、五、七、七、七、五詞型。

(ヲ) (ハッパン大将) ヨイヨイヨイ、よさか丹波の馬追いなれど、このふい馬、御免で、ハッパの大将、長羽織、さア引手の衆、ソラ……。一七七五、四、五、五、五詞型。

以上、悪石島の盆踊り歌の詞型は、七七詞型や、五五詞型は見られるものの一貫してなくて、乱れている。ということは、自由な歌い方であり、定型詞成立以前の状況を示唆しているのではなからうか。定型詞にとらわれず、自由に歌っているのである。

(七) 甑島の盆踊り

甑島の芸能はほとんどが盆踊りである。上甑島では、盆踊りは、土踊り、手踊り、棒踊りから成り、下甑島では、土踊り、太鼓踊り、少年達の手踊りヤンハ、出羽踊りなどである。ヤンハは大隅の奴踊りを思わせる手踊りである。ヤンハ、出羽踊りなどは、近世もしくは近代芸能である。

(イ) 下甑島青瀬の盆踊歌「ヤンハ」

「奥山からチラチラするのは、月か星か蛍か。お月様なら拝み上げます。蛍虫ならお手に取る。ヤーンハ、トントコロン、トントン、ハ、オイオイ。」

(ロ) 下甑島長浜の盆踊り「出羽踊り」

「この本能寺に押し寄せし敵の合図は分からねど、明智光秀が反逆とは見つけたり……。」

(イ) のシラブル(音節)は、六、八、六、四、七、七、七、五。(ロ)は、七、五、七、五、八、六、五……。いずれも定形詩ではない。すぐれた芸能ではあるが、成立は近世もしくは近代であろう。

四 上井覚兼日記から

薩摩上級藩士上井覚兼の日記(中巻)、天正十三(一五八五)年七月十四日の項に、「此晩、衆中子息達踊共被成候、見物申候」とある。これはお盆の期

日の最中であり、盆踊りであろう。

この頃、覚兼は宮崎城主として同地にいた。盆踊りは、つまり日向盆踊りが盛んであったことを意味するが、その内容については何も記されていない。いっぽう、先述の種子島の羽生道潔が記した『種子島御家年中行事』の盆の十六日の、「御祭礼西町人踊之事」は、東町人踊之事と共に、古来の盆踊りであったと考えられ、それが島内寺院盆踊りとして流布し、西之本国寺盆踊りの起源をなすであろうことは、前に述べたのであるが、ここに改めて、さらにその源流は『上井覚兼日記』に見る宮崎の盆踊りの流れではないかと考えられるのである。

種子島と宮崎の縁は深い。種子島氏の中世における京、大坂への航路は日向經由であり、途中、日向沿岸の諸港に避難したりして寄港していたが、当然、芸能好きの種子島々民達は習い憶えただろう。こうして、西之平野の本国寺盆踊りが伝来した可能性は大きい。いや、この経路より他には考えられないのである。このことは、別言すると、戦国時代から江戸時代初めの頃までに、上方文化が日向經由で伝播し、その一環としてすでに日向に入っていた上方文化も、日向經由海上交通の要点としての種子島へ伝播したであろう。ここに、西之平野本国寺盆踊りのルーツを明らかにできるようである。

五 おわりに

西之本国寺盆踊りについて、そのルーツを求めて種子島と仏教との関係、芸能史、県外諸地域の盆踊りとの関係などについて、いろいろ検討してきた。また、本国寺盆踊りの特色についても検討してきた。その結果、非常に貴重な芸能であることがわかった。これらの要点を次に箇条書きにして記す。

1. 服装（特にカムキ）、楽器（太鼓、小太鼓（小鼓）、鉦）等については本文に詳記した。
2. 振り（踊りの動作は、踊り子（舞い手）達は、交互に片手を挙げて舞うような形で踊りを進め、扇子も用いて踊る場面もある。
3. 楽器の人は踊りの輪形の中にいて、静かに、しかし優雅に踊り、輪形の踊り子達の踊りに合わせて踊る。その踊りも舞いに近い。
4. 踊り子達は時計回りを基本として踊るが逆回りも行ふ。
5. 歌は、脇から歌い手（上手な長老）が歌うが、踊り子達も軽く口承しながら舞っていく。

から舞っていく。

6. 踊り子達は、集落の氏神に奉納して本国寺に詣って踊り、終ると又氏神に奉納し、公民館の庭で踊り納めて終るが、あとは慰労会をする。
7. 歌詞は、五五、七七、あるいは七七五、五七七七など、多様な詞型を見せながら、近世小歌を歌い進めていく。室町小歌に発するものもあり、古い歌詞を古いメロディーで歌い舞う。しかし、
8. 種子島の伝統的な古い盆踊りは、明治年間までは、竹屋野、上野、他、各地に残っていて踊られていたが、昭和の今日、それを歌い踊れる所は、本国寺を中心とした南種子町西之地区の方々や西之表市上西の横山の方々だけである。

横山の場合、阿久根千代女の踊りが挿入されているが、基本は伝統芸能であり、又、南種子町西之本国寺の場合、すべて伝統芸能である。つまり、完全に伝統盆踊りが継承されているのは、平野本国寺の盆踊りだけである。即ち、室町末期以来の近世小歌踊りが完全伝承されている西之本国寺盆踊りの意義は大きく、重要である。

9. なぜ、このような貴重な歌詞と舞踊が南島種子島に残ったかというところ、種子島は古来、日本本土文化の最南端基地であったこと、古く近衛家の荘園として、そして中古以来種子島氏の領地として在続してきた。そして、日向灘を経て、京坂の文化が直流し、今日に至っている。

このような歴史風土的な地に、種子島氏が長年支配し、伝統文化を継承させてき、法華宗文化を育て継承し、室町小歌の盆踊りを存続させてきた。

法華文化が一貫していたので、途中、攪乱されることもなく、続いたこと。なお、種子島盆行事に付随するものとして特に重要視せねばならないのは、本国寺の石塔踊り（今、継承者はいない）がある。

又、南種子町平山広田の石塔祭りであるが、これは今も継承されている。法華宗行事として、本国寺盆踊りの一環として見るとき、広田などの石塔祭りは、本国寺の石塔祭りとは根本的には共通しているものとして、重要視すべきであろう。最後に、西之本国寺盆踊りには、わが国中世盆踊りすなわち室町小歌の伝統を継承している。南種子町西之区に伝承されているこの盆踊りは、大変貴重であり、重要であるといえよう。

（下野）

参考文献

- 1 『日本歌謡の研究』（昭和三十六年、浅野建二著、東京堂）
- 2 『郷土研究（種子島の文學と民謡）』（昭和十年、（旧制）種子島中学校編、越智筆）
- 3 『羽生六郎左衛門道潔著、種子島家年中行事』（昭和三十九年、河内和夫写、熊毛文学会）
- 4 『中世歌謡の史的研究（室町小歌時代）』（平成七年、井出幸男著、三弥井書店）
- 5 『大日本古記録（上并覺兼日記（上・中・下））』（昭和三十年、東京大学史料編纂所、岩波書店）
- 6 『平成二、三年度、鹿児島県の民俗芸能―民俗芸能緊急調査報告書―』（鹿児島県教育委員会）
- 7 『種子島民俗・盆行事、他』（五号、（同（盆行事、他））十号、編集下野敏見（中種子高等学校地歴部）
- 8 『種子島の民俗Ⅰ・Ⅱ』（下野敏見著、法政大学出版社）
- 9 『日本民謡大観（九州篇（南部）・北海道篇）』（昭和五十五年、日本放送協会）
- 10 『（南日本の民俗文化誌5）種子島民俗芸能集』（二〇一〇年、下野敏見著、南方新社）
- 11 鮫島宗美訳『種子島家譜（第一卷〜第四卷）』（昭和三十七年、熊毛文学会）

種子島の盆行事（1） 掛け魚、石塔祭りに行く、墓参り、粽、机に位牌をおろす、床の間に先祖棚をおろす。



①七夕の掛け魚、種子島南西岸の集落では、七夕の朝、クレイオを獲って来て、軒下につるし、七夕様上げる。掛け魚という。女は麻紐をつるす(1959年旧7月7日)



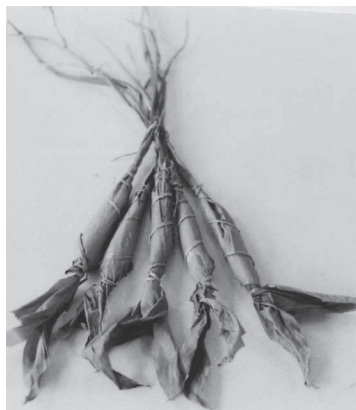
②水の子と法華宗のお札を持って、石塔祭りに行く原吉十郎氏(1967年旧7月15日午後4時頃、広田)



③旧暦8月15日夕方、墓参り。先祖様の船の百合の根と權の粽は必ず供える。他に、お札、洗米、水の子、シキビとエンガの花、ショーハギを供える(1984年、広田)



④籠に粽や洗米、線香など入れ、墓石には、花、その他を供える(1967年、広田)



⑤マキ(粽)5本を一束にするが、墓石には一本ずつ上げる(1984年、広田)



⑥床の間に位牌をおろし、膳の供え物をする(1960頃、南種子町)



⑦お盆には、仏壇の下に小机をおいて、位牌をおろして、いろいろ供え物をして拜む(1960年、上中)



⑧床の間に位牌をおき、供え物をしてある(1984年、種子島)

種子島の盆行事（2） 水棚（1）



①水棚に水をかける。砂坂の民家の水棚（1971年8月）



②水棚に水を注いだあと、拌む。①と同じ家。



③中種子町阿高磯の水棚。笹竹と芭蕉の葉で作った水棚。膳には、花瓶とローソク、茶、焼酎、煮豆。上に灯籠（1984年8月15日）



④西之表の商屋の水棚。家型で縁側におく（1961年）。当主は鹿児島市からの移住2代目。



⑤縁側の外に、笹竹、ソテツの葉などで作った水棚。水の子と盃を膳におく（1960年）



⑥縁の戸枝のそばに、笹竹と芭蕉の葉でできた水棚。ソーハギと水の子を供えてある（1960年、南種子町）



⑦本国寺盆踊りを見学した種子島学術調査団の一行。大林太良教授らのほほえむ姿。この調査は下野が調査団の一員として案内した（1984年8月17日）

種子島の盆行事（3） 水棚（2）



①本国寺の水棚（1984年）



②阿高磯の民家の水棚（1960年、中種子町）。笹竹と蘇鉄の葉でできている。



③笹竹と芭蕉の葉の水棚。戸袋のそばにある（1960年8月）



④阿高磯②と同じ供え物。水の子、飯、茶、他（1958年、中種子町）



⑤本国寺の水棚（1971年、8月）。門徒が水の子を上げて、拝みやすいように大きくした。



⑥南種子町の民家の水棚（1984年8月17日）



⑦西之の某集落の水棚（1984年8月17日）



⑧西之の某集落の水棚（1960年8月17日）

種子島広田の石塔祭り (1) 小棚の祭り (1958年8月16日)



① 昼さがり、老若男女、人びとは石塔山にやってくる。



② 石塔山にくと、それぞれの小棚をこしらえて、水の子を上げて拝む。



③ 小棚は親族ごとにあつて、棚の近くにはお札を立てる。



④ 小棚より少し上の棒にマキ束をつるす婦人。



⑤ 「もう棚ができ、お札もマキも用意したよう父ちゃん早くいらっしゃい」



⑥ 「左下には水の子も、水を入れたチョコカも用意したよ」



⑦ 「棚での水祭りはすんだよう」と声がする。見ると、札がいっぱい立っている。



⑧ 山川石製の中世の五輪塔を各親族の精霊の抛り所にし、前に小棚を設けてある。

種子島広田の石塔祭り（2）大柵の祭り（1958年8月16日）



①大柵にマキ（粽）をつるす、少め。左に坐っているのは僧侶と向井長助さん。



②粽（ちまき）が竿いっぱいづるされた。祭りのあと、僧侶家へ運ぶ。



③大柵に向って祈祷をする善福寺の僧侶。



④大柵に向って女性僧侶（尼僧）がお経をあげる。



⑤大柵に水の子を上げて拝む人々。



⑥大柵の下には、近くに石塔があるが、お札を供え、柵の上には水の子がいっぱい。



⑦石塔祭りがすんだあと、当時広田遺跡発掘に来ておられた国分直一教授が石塔祭りの意義について話をされているところ。



⑧石塔祭りがすんだあとの大柵。柵の上にも柵の下にも水の子がいっぱい。

種子島広田の石塔祭り（3）、トカラ列島の盆踊り、種子島田尾の大水棚



①広田の石塔祭りに供えた大棚のマキ。寺の師匠に上げる。



②トカラ列島中之島の魚釣り踊り（1964年、中之島）



③トカラ列島（1960年代）



④トカラ列島平島の盆踊り（1960年代）



⑤種子島竹屋野集落の盆踊り。野間の妙正寺にて（1960年頃）



⑥種子島竹屋野集落の盆踊り。野間の妙正寺にて（1960年頃）



⑦種子島南種子町島間田尾の本妙寺の施餓鬼棚と人々。



⑧左同、田尾の本妙寺の施餓鬼棚（大水棚）の祭りがすんで。

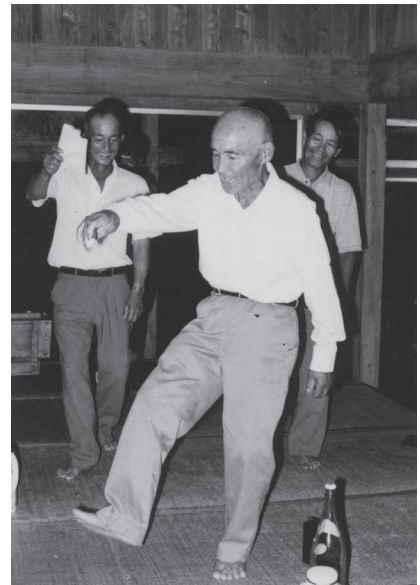
西之本国寺盆踊り (1) (1984年8月16日)



①本国寺札。



②本国寺の旗が林立している。左から2人目は、東京大学大林太良教授。



③石塔踊りの処作をしてみせる。



④いよいよ盆踊りの開始。寺堂の右側(向かって左側)から出てきて輪になって踊る。



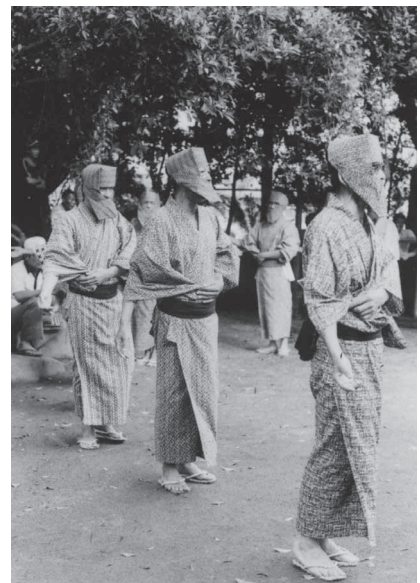
⑤鼻と口をかくし、眼だけ出た冠(カムキ)を被って踊る。左手をあげている。



⑥右手で扇子を開いて持ち、さっそうと踊っていく。



⑦今度は右手は何も持たず、草履ばきの足さばきも軽く、踊っている。



⑧黒帯と浴衣にカムキの姿は、軽やかで、異様。左手は右の袖をにぎっている。

西之本国寺盆踊り (2) (1984年8月16日)



①右手の扇子を前にかざし、足を蹴り上げて進む。左右交互に交わして進む。



②今度は右足を出し、扇子は水平に目通りに突き出す。



③そして、二、三步あるきながら踊っていく。



④今度は、扇子を前向きにかざして踊っていく。



⑤は④の踊りのつづき。



⑥そして次は扇子を水平に持ち、外向きに踊る。



⑦それから前向きに扇子をかざして踊る。①の型になって踊っていく。



⑧輪の中には、太鼓と鉦(かね)の楽拍子が花笠を被って踊っている。

西之本国寺盆踊り (3) (1984年8月16日)



①本国寺の旗、蘇鉄葉、樹木の茂る庭で、異様なカムキ姿の人達が踊っていく。



②今度は、扇子は後腰に差し、左の素手をあげて踊っていく。



③輪の中の楽拍子も忙しい。右は小太鼓、左は鉦と鼓。



④3人の楽拍子も忙しい。花笠を被り、踊りながら奏楽するのだ。



⑤今度は踊り子達は、扇子を水平に目返りに持って外向きに踊っている。



⑥太鼓打ちも一生懸命。踊り子は扇子を垂直に前にかざして、勢いよく進む。



⑦⑥の姿勢を外から見ると、このような格好で踊っていく。カムキと扇と浴衣の異様な姿だ。



⑧今度はうしろ姿。扇子は右手でにぎり、左腰には全員、手拭いを下げている。

西之本国寺盆踊り (4) (1984年8月16日)



①本国寺の裏の畠脇に、踊り子達が出番を待っている。



②さあ、始まった。本国寺の幟もあざやかに、楽拍子の太鼓、鼓、鉦の参人は、縞柄の浴衣に花笠の一人と、白衣で花笠の二人がいて、一生懸命だ。



③一踊り経って、小休止、しかし、すぐ又始まる。



④さあ、始まった。扇を右前に立て、右足を出している。



⑤日の丸扇子を右手でかざし、左足を伸ばしている。かっこいい。



⑥楽拍子3人は、いつも輪の中で踊っている。輪の人々は扇の中途を持って晴れの舞いだ。



⑦今度は、扇子を目通りに持ち、姿勢は立ちんぼで、足は小幅で前進している。

西之本国寺盆踊り (5) (1984年8月16日)



①今度は楽拍子4人だ。左から笛、小太鼓、鼓、鉦の合でにぎやか。



②これは、楽拍子3人の例。



③楽拍子3人。腰をかかめて一生懸命踊っている。



④扇子は後腰に差し、両手は出し、右手はこぶしをにぎり、左手もにぎっている。



⑤踊り子は立ったまま、両手を肩高さに上げ、直っすぐ左姿勢で右に進んでいく。



⑥扇子をかざして、右まわりに進む。カッコよい場面だ。



⑦これは手踊り。一步二歩と、右まわりに回る素朴で美しい手踊り。



⑧こんどは、姿勢を内向きにして踊っている。扇子は皆、後腰に差している。

西之本国寺盆踊り (6) (1984年8月16日)



①本国寺の禪をかけた門徒達は、僧の読経をじっと聞いている。



②庭では、先刻から盆踊りが始まっている。手拭と扇子を後腰にした踊り子は、左回りで進むと、楽拍子は中で踊る。



③カムキを被った踊り子達は、異界からやってきた祖霊達だ。年に一度、こうして寺にやってきて、子孫たちと交流する。盆踊りは祖霊歓待祭だ。



④今度は、輪の人達(祖霊)は、外を向いて、両手をひろげて、喜びを表わし、盆の日を感謝し、子孫の繁栄を喜び祈る。



⑤今度は扇子を開いて、この世の平穏と子孫の繁栄を喜び祝う。



⑥笛、小太鼓、鼓、鉦の楽人達の奏楽に合わせて、左方から踊り子達が登場する。



⑦カムキの踊り子達すなわち祖霊の化神たちは、内を向いて、喜び踊ってゆく。

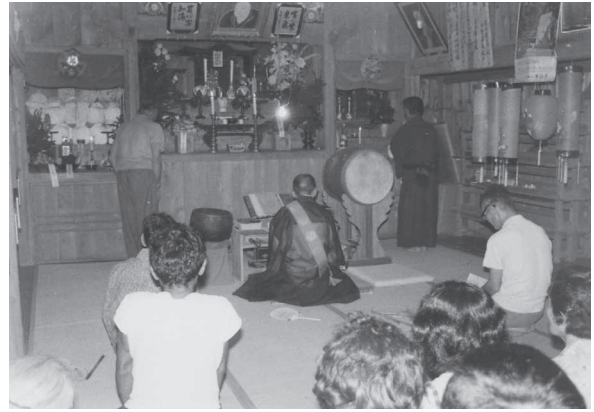


⑧踊り子の輪の中で、鉦、鼓は左側から小太鼓は右側から攻めている。(5)の②の場面と左右反対だ。

上中の信光寺の盆踊り（1972年8月21日）



①信光寺に集った檀家の人びと。寺の法要のあと、上野集落の盆踊りがある。



②盆の法要。檀家の人2人が立って、預けてある先祖棚を拝んでいる。



③上野集落の盆踊りの人の服装。カムキは眼と鼻は出し、口は必ずふさぐ。



④上野集落の踊り子全員。楽拍子は3人。白い浴衣に花笠姿。



⑤さあ、踊りが始まった。歌がうたわれ、扇子を持って舞い始めた。



⑥ちょっと休憩。今、楽拍子が調子合せをしている。左に立つのは師匠（和尚）さん。



⑦さあ始まった。楽拍子も踊り子も、さっそうと踊っている。右周りに踊っている。



⑧カムキ、浴衣、黒帯、ワラゾーリ、左腰に手拭の姿は、本国寺とほぼ同じ。

田尾の本妙寺の盆踊り (1) (1984年8月16日)



①盆の日、本妙寺に人が集まり始めた。これから法要があって、盆踊りもある。



②施餓鬼棚（大水棚）には、いろいろ花がのっている。



③本門法華経開宗の日陸上人ののぼり幡も立ち、施餓鬼棚にも白い紙シベがついている。



④施餓鬼棚には花がいっぱい積まれ、施餓鬼祭りが行われた。餓鬼がやってきて、品物をいただいたのである。



⑤中踊りの小二才踊り。子供達の笑顔もよい。何も持っていないで踊る。一列になって手踊りを踊る。左端に白い太鼓が見える。この楽拍子で踊る。踊りは歌舞伎も入ってくる。



⑥これも小二才踊り。扇子を開いて七名の青年達が一列で踊る。小二才踊りは、カムキをかぶらない。



⑦これは中踊りの大二才踊りで、円陣隊の中に、楽拍子の入れ鼓が二人見える。



⑧小二才踊り。鉢巻は腰にさげて、手踊をする。

田尾の本妙寺の盆踊り (2) (1984年8月16日)



①右手は招き手をして、右斜めに反ってサマをつける動きは、歌舞伎の処作に似ている。この頁の①～⑥は盆踊りの大踊りである。



②人数が多いときは、二重円陣になって踊る。広場を埋めつくす感じだが、樹間には幡が立つ。



③今、左手を上げ、右手は膝上におくポーズであり、次の瞬間に左手をさげ右手をかざす。本妙寺の盆踊りとは違う。



④大踊りには手拭被りが2、3名見られ、カムキ作りを忘れたのだろう。



⑤二重円陣で、全員、扇子を開いて持ち、内側向きの二重円陣だ。美しい光景だ。



⑥扇子は持たずに、手踊り。ややひざが屈む。



⑦中踊りの小二才踊り。二人の踊り子と左下の太鼓役が写っている。質素なよい踊りである。



⑧当時、島内調査をされた学術調査団の一行。大林太良先生や渡部先生や佐々木高明先生もおられる。下野が案内したので撮影する時、真ん中に立てときかなかった。

田尾の本妙寺の盆踊り (3) (1984年8月16日)



①二重円陣になって開始を待つ本妙寺大踊り。左腰には手拭をさげている。中央には、花笠を被った鼓と鉦。



②二重円陣で日の丸扇子を開き、開始を待つ人びと。花笠の二人も立つ。



③さあ、始まった。楽が鳴り、動き出すと人々は円陣のまま、日の丸扇子を右手にかざす。楽の足は動いたが、踊り子の足はまだ直立のままだ。



④次いで手踊りだ。両手を前に上げて、左回りに回りながら踊っていく。本国寺でも見せる処作だ。本妙寺の場合、こぶしをにぎる仕草がある。



⑤日の丸扇子を片手でにぎり、かざして円陣が回る踊り方は、本国寺でも随所に見られた、扇子の持ち方と手足の動きがやや違いを見せつつも、大方似た振りではある。



⑥田尾の場合、人数が多く、二重円陣で、大人数が日の丸扇子を前開きにかざすのは、迫力があって美しい。



⑦二重円陣で中を向いて扇子をかざして優雅に踊る。本国寺の盆踊りは素朴であるが、本妙寺の盆踊りはどちらかと言えば、華麗である。



⑧そして、左廻りに進んで行く。田尾のカムキは正面から見ると、下端が三角になっている。本妙寺の盆踊りの華麗さは、港町島間のためか。

田尾の本妙寺の盆踊り（4）（1984年8月16日）



①寺の本堂の仏壇。灯籠を両脇にさげ、正面に鉦をおいてある。



②楽拍子が鳴り出し、踊りが始まった。白面のカムキを被り、左回りで踊る。



③扇子を手に、踊り子全員、中心を向いて踊る。



④進行の中心は、花笠被りの楽拍子にある。チン、カカン、トントン、ドン、楽はたえず、変化しながら打ち鳴らされ、それにつれて踊りが変化していく。



⑤今、中の楽拍子の動きが早くなった。踊り子の輪は、しばらく息を止め、踊りを静止している。



⑥そして今度は、扇子を右手に持ち、左まわりに踊り子達は、静かに、そして華麗に踊りゆく。



⑦踊り子達（いや、招待された祖霊たちは）、中心を向いて子孫達の幸せを祈る。



⑧楽拍子の音が変わり、踊り子達いや先祖達は、左回りで踊っていく。本国寺では右回りが多かったが、本妙寺では左回りが多かった。

横山の盆踊り (1)



① 1964年8月。服装が面白い。男性は右片袖が模様つきで、女性は全身模様付きの着物に、頬かくしの付いた花笠を被り、白足袋等で踊る。



② 1964年8月。女性は少女も参加し、物語りの主人公の阿久根千代女をあらわした。戦後、復活の阿久根千代女の姿である。



③ 1967年11月24日。市民芸能祭に出場。榕城小学校講堂で。鉦、鼓、小太鼓、太鼓以外の者はカムキを被り、腰に脇差しをしている。



④ 女達(千代女)は濃紺の着物を着、男達は麻布の着物。楽器の人は白布を着ている(1967年)。



⑤ 横山盆踊りでは、笹竹をかついだ者が踊りごとに現れ「蝶」という。これは昔、種子島家での東町・西町での踊り奉納の時、言っていた。



⑥ 1968年。左手前に立つのは、蝶。踊る時は、「蝶」はかくして立っている。



⑦ 手前真ん中の花笠の女、その右となりの男は、腰に刀を差している。千代女と国隆を表す。



⑧ 左奥に太鼓打ちがいて、右手前には帯刀の踊り子。花笠の千代女とカムキの国隆である。

横山の盆踊り (2)



①若狭公園で踊る (1968年10月2日)



②二重円陣になり、楽器の人は花笠を被っている。真ん中に笹竹を持って立つのは、「蝶」。これから始まり(1968年10月2日)



③笹竹を持った蝶が踊り子のまわりをまわり出した。



④中の帯刀の踊り子は国隆で、外の花笠は千代女か。



⑤真ん中に笹竹を持つ蝶と、太鼓打ち二人、外側に万才をしているのは国隆と千代女。



⑥この踊りでは、千代女は何人かいて、国隆も何人かいる。丁度、対等ではないようだ。



⑦踊る千代女 (花笠・黒衣) と帯刀・カムキの人 (国隆)、白衣の楽器の人達。



⑧2列で退場する踊り子たち (黒衣)。向うに楽器の人達。

横山の盆踊り (3)



①左端に鉢巻、笹竹の蝶が立つ (1968年6月)



②蝶が回り出した。人々は低姿勢 (1968年6月)



③花笠・女姿は千代女を表し、真ん中と右端の白い腰ひも・帯刀は国隆を表す (1968年6月)



④左の千代女と右のカムキの国隆は、今、踊っている (1968年6月)



⑤広場いっぱい、みな、立って踊っている。手前の見物人も熱心に見ている (1968年10月2日、若狭公園)



⑥真ん中の楽器を囲み、二重円陣の右手前には、歌い手たちが並ぶ (1968年10月2日、若狭公園)



⑦広場は見物人がいっぱい。その前で踊り子たちは、踊り始める。今、蝶が笹竹をかついで、3回まわっている。



⑧笠かぶりは千代女。カムキ被り・帯刀は国隆を表す。中は、楽器と笹竹の人。この踊りには先祖霊がない。

まとめに代えて

種子島の芸能には正月および小正月の行事に伴う祝福芸、四月初めの南種子町宝満神社のお田植祭りにて歌われる田植歌、盆踊、秋の願成就祭に踊られる芸能（太鼓踊をはじめ中小各種の踊群）、季節や行事にとられない座敷舞、そして草切節や子守歌などの民謡がある。すでにお田植祭りや座敷舞については南種子町より国選択無形民俗文化財調査報告書として『種子島宝満神社のお田植祭』（平成二十六年）および『種子島南種子の座敷舞』（平成二十七年）が出ている。後者には小正月の祝福芸である蚕舞も含まれる。残る種子島の芸能として重要なものは盆踊と願成就祭芸能の二つである。そのうち今回は盆踊が取りあげられた。

盆踊はかつては種子島の各地でおこなわれていたが、現在はわずかに西之表市横山と南種子町西之にのみ伝承されている。調査報告書作成プロジェクトは令和五年三月の刊行を目指して、令和元年五月からスタートした。当初の目的は①伝承の現況の把握、②種子島全域のかつての分布状況、③歌詞・歌い方・楽器・踊り方など盆踊の諸側面、④いつ頃どういう経路で種子島にもたらされたのか、などについて肉薄し、可能な限り記録することであった。そのために種子島での盆踊の実地見学はもちろん、周辺離島を含む県内各地の見学、関連する県内の太鼓踊との比較など多くの構想が立てられたが、令和二年初めからの新型コロナウイルスの流行により、芸能も祭礼も諸行事もことごとく取りやめとなってしまう。中止状況は令和五年の始めまで続き、結局実地見学は令和元年のみとなった。現地での取材や伝承者への聞き取りをはじめ、島内各地での調査も制限され、結果としては十分とはいえない調査を余儀なくされた。とはいえ限られた条件の中で事情の許す限りの調査は果たすことができたと言える。関係者のご協力に感謝のほかはない。

調査委員会の組織は第一章第二節に述べられているように、本文執筆には和田修・牧島知子・下野敏見の三名と私を含む四名が当たった。和田氏が国文学の立場から歌詞について、牧島氏は道具と盆行事について、松原は種子島の芸能の概要と盆踊歌について、という具合に役割分担した。種子島の民俗研究の重鎮下野敏見氏には、これまでの長い種子島研究を踏まえた貴重な知見をまと

めていただいたが、昨年（令和四年）三月十日、九十一歳で亡くなられた。原稿は生前にいただいていたのでここに掲載することができた。長編の報告としては下野先生の絶筆となった。下野先生の種子島の民俗全般にわたる調査レポートは膨大な量に達し、大部の著作集も刊行されている。その中に種子島の盆行事や盆踊に関する聞き取り記録も多数含まれている。もはや戦前の盆踊について記憶する方はおらず、下野先生の報告が唯一の記録となっているケースも少なくない。私も自分の担当部分の執筆にあたって大きくお世話になった。ご冥福をお祈りする。また神戸大学大学院（博士課程在籍中）の荒木真歩さんには盆踊伝承の周辺について調査し、執筆していただいた。

さて種子島の盆踊は、カネ・小太鼓・笛と踊子が列を作って入場し、カネと小太鼓を中心に（笛は踊り子に加わる）輪を作って踊る形である。南種子町西之でも西之表市横山でも現在の踊子は男子（かつては青年）のみだが、横山では女子も参加したという言い伝えもあり、江戸時代の姿がどういうものだったかは、今回の調査でもはっきりした答えは得られなかった。それはともかくかつて種子島全域に分布していた盆踊と同様のものは、屋久島や十島の島々に断片的に散在するものの、県内および南九州各地には見当たらない。この状況をどう考えたらいいのだろうか。

種子島盆踊は種子島にて独自に成立したわけではなく、原型となる歌踊が他所から伝来したものであることは確実である。歌詞の類歌や一部の語句と同系が中央で編まれた歌詞集に見られるからである。いつ頃、どのような事情で伝来したかが問題となるが、私（松原）は、伝来した歌踊が盆踊として定着するために、素地として村人たちが和讃と似たような呪文を唱えて歩く文化があったのではないかと想定した。法華宗となつてからは法華の下級僧侶たちが、それ以前は真言律宗の念仏聖のような人々がいたのではないかと。大隅半島の水神祭の事例を参考にしながら論を進めたわけだが、和田氏はそういう想定に反対の考えを表明している。詳細は本文で確かめていただくとして、和田氏の主張は、種子島盆踊は西之表城下の町人が盆踊を導入し、これを周辺の村々が模倣することで島内に伝播したとする。種子島家の重臣羽生道潔が書いた文書などを検討しつつ、その時期は元禄を遡らないとする。また、カムキは盆踊の踊子のかぶる覆面のことと種子島では一般に理解されているが、和田氏は歌舞伎踊とも関連のある派手な身なり・異装の意味ではないかとの指摘もしている。

私（松原）は本報告書作成のための調査委員会の委員長としてのこの総括を書いているが、種子島の芸能がこれまでほとんど島外の研究者によって議論にのぼることがなかったことを改めて実感している。まがりなりにも本書は種子島盆踊を記録することで、その魅力も伝えたと自負するものだが、これをきっかけに島外からの見学者が増え、各地との比較や成立論が盛んになることを期待する。

その一方、地元に対しては種子島盆踊の今後の継承をせつに願うものである。継承が容易な道でないことは承知している。人口減少は大きな問題だが、それを克服して伝承を続けるためには、集落ごとの細部の大なり小なりの違いを越えてより大きな地区で伝承される必要がある。そのためにはより多くの人々が修得するための歌踊の固定化（規範化）が必要である。横山の場合は参加者をより広く募る必要があるし、西之の場合はどの集落のどの踊り方（歌い方）を標準とするかが課題である。これは難しい課題だが、過去にも断絶の危機をさまざまに工夫して継続してきた地元の方々には、この課題を乗り越える叡智がそなわっていると確信している。

明治初期、招聘された欧米の知識人によって多くの日本文化や風景の価値が発見された例を持ち出すまでもないが、種子島盆踊はより広く島内島外に知られることによって、本稿の調査と執筆にあたった我々とは違う立場から、あるいは各方面から、さまざまな魅力が発見されるに違いないのである。（松原）

本調査を実施するにあたっては、次の団体や個人の方々からご協力、ご教示をいただきました。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。

横山盆踊保存会、西之地区自治公民館、本国寺、横山神社、本妙寺、善福寺、日典寺、平野自治公民館、崎原自治公民館、本村自治公民館、野大野自治公民館、田代自治公民館、上瀬田自治公民館、官造牧自治公民館、砂坂自治公民館、野尻自治公民館、木原自治公民館、小田自治公民館、前之原自治公民館、下西目自治公民館、横山公民館、小脇隆則、浜田敏幸、羽生源志、長田忠、馬場信一、鮫島安豊、高田安美、高田安則、徳永博徳、小脇留次郎、小田一雄、白元秀男、戸石助美、大脇安則、高田忠義、日高守、山元勝美、長野忍、八元喜三、長野忠、山本勝實、横山孝、高田健一郎、日高芳弘、戸石良子、小田良広、小田京子、山下雄一、磯川次夫、長野央、長野徳三郎、押川重信、石堂末男、松原堅二、宮里照夫、坂口政廣、中島一三、向井良隆、坂口純徳、小脇尚武、濱田孝一、小脇静巳、山下和徳、佐尾徹晃、羽生裕幸、河野彰子、河野健一郎、河野三枝子、加納洋一、野首久教

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

種子島の盆踊調査報告書

発行日 令和五年三月二十九日

編集・発行 南種子町教育委員会・西之表市教育委員会

〒八九一―三七九二

鹿児島県熊毛郡南種子町中之上二七九三―一

TEL〇九九七―二六一―一一一

印刷 斯文堂株式会社